Tottori University

大学教育の現状と課題

―新たなる大学教育をめざして―

平成17年度

国立大学法人

鳥取大学

大学教育の現状と課題

―新たなる大学教育をめざして―

平成17年度

国立大学法人　鳥 取 大 学

大学教育の現状と課題

―新たなる大学教育をめざして―

平 成 17 年 度

鳥　　取　　大　　学

はじめに

本書は、鳥取大学が自らの現状を把握し課題を抽出することを目的に行った解析作業をまとめたものである。この作業は平成３年に「自己点検評価」が努力義務とされて以来、継続されているもので、今回がその 11 号となる。すべてが「鳥取大学の現状と課題」でありながら、その都度副題を付して、点検範囲を絞ってきた。今回のそれは―新たなる大学教育をめざして―とした。これは、平成 13 年度に、本学が実施した教育改革（全学共通教育と専門教育）の成果を点検したいという考えがあったからである。

本学は、「知と実践の融合」をレゾンデートルとし、三つの基本目標の第一に「社会の中核となりうる教養豊かな人材の育成」を掲げている。これは 21 世紀の知識基盤社会が高等教育に求める人材像でもある。この目標を達成するためには、不断のスタッフ・ディベロップメント（SD）が求められる。大学教育にとっては、ティーチング・スタッフ（教員）、ゼネラル・スタッフ（事務職員）、アドミニストレイティブ・スタッフ（行政職）３者の協働がきわめて重要である。ここに検証しようとするのは、まさにこの協働が実現しつつあるか、しているか、最終的に学生満足度が向上したかを明らかにすることである。

今回の調査もアンケートを主体としたことは前回同様であるが、学生の意識・実態がよりストレートに反映されるよう、前回の設問を吟味・工夫した。何より、調査対象を在学生に限らず、卒業生にまで拡大したことは、本学の現状と課題をあぶり出す好機会となった。また、近い将来予定している大学機関別認証評価にも役立つはずである。

具体的観点としては、カリキュラム改革が全学共通教育と専門教育を有機的に結びつけているか？新たに生じている問題は何か？大学全体の課題は何か？各学部にブレークダウンした場合の課題は何か？などを意識した。その結果、本学に属するスタッフなら、辛くとも読まざるを得ない内容となったことを、「はじめに」の項で述べておかねばならない。例えば、（本文 198 ページ参照）「大学で学ぶ意義の一つは、小骨がのどに刺さった状態を如何に多く作り出すかである。大学の教育は、個々の学生が卒業後に小骨を消化できたときに、はじめて完結する。」と表現した人がいる。卒業生に訊いた「後輩に、鳥大への入学を勧めることができますか？」の設問に、70％近くが肯定的であったことは、本学の狙いが成果を収めつつあるとも言えるし、小骨をもっと増やす余地があるとも言える。

過去の自己点検評価があったからこそ、今日の国立大学法人鳥取大学があると言える。今回も提示された課題に如何に取り組むか、その５Ｗ１Ｈをはっきりさせることを願って止みません。

最後に、１年半の長きに亘り、アンケート調査から本報告書の執筆編集にあたられた作業部会委員の先生方のご労苦に深甚なる謝意と敬意を表します。

平成１７年１０月

鳥取大学評価委員会委員長
副学長　中　村　宗　和

－目　　次－

はじめに

調査の概要……1

１．調査の趣旨・目的……1
２．調査対象及び調査状況・回収率……1
３．調査内容……2
４．調査結果の分析と報告書の構成……3

第Ⅰ部　全学共通教育

第１章　鳥取大学の教育機能と学生の評価……5
第１節　鳥取大学への評価の諸側面……5
Ⅰ．大学入学への動機等……5
第２節　大学への期待と大学教育……8
Ⅰ．大学への期待感……8
Ⅱ．勉学への取り組み等……9
第２章　全学共通教育に対する在学生の意識と評価……１４
第１節　カリキュラム改革後の全学共通教育……１４
Ⅰ．全学共通教育と専門教育の関係……１４
Ⅱ．個々の教育科目への評価と授業満足度……１５
１．大学入門科目「大学入門ゼミ」について……１５
２．大学入門科目「情報リテラシ」について……１６
３．主題科目について……２１
４．実践科目の英語科目について……２３
５．実践科目の初修外国語について……２８
６．英語科目の授業内容の評価と教員に対する評価……３１
７．初修外国語の授業内容の評価と教員に対する評価……３２
８．実践科目の健康スポーツ科学実技について……３５
９．専門基礎科目について……３９
第３章　一般教育に対する卒業生の意識と評価……４７
第１節　鳥取大学への評価の諸側面……４７
Ⅰ．鳥取大学と所属学部の選択動機……４７
Ⅱ．大学入学への動機等……４８
第２節　大学への期待と大学教育……４９
Ⅰ．大学への期待感……４９
Ⅱ．勉学への取り組み等……４９
第３節　カリキュラム改革後の一般教育……５１

Ⅰ．一般教育と専門教育の関係……５１
Ⅱ．個々の教育科目への評価と授業満足度……５１
１．教養科目について……５１
２．共通基礎科目の英語について……５５
３．共通基礎科目の第二外国語について……５５
４．共通基礎科目の健康スポーツ科学実技について……５５
５．専門基礎科目について……５６

第Ⅱ部　専門教育

第１章　教育地域科学部・地域学部の専門教育を中心としてみた学生の意識と評価…５７
第１節　教育地域科学部の専門教育に対する在学生の意識と評価……５７
Ⅰ．はじめに……５７
Ⅱ．教育地域科学部について……５８
１．入学動機と大学・学部選択理由……５８
２．入学した学部の評価，大学への期待と不満……５９
３．自分の学び方、授業への取り組み方、そして指導改善への希望……６２
４．将来の進路希望……７０
５．学部のイメージ……７３
Ⅲ．教員免許取得について……７５
１．教員免許の取得希望と社会的評価……７５
２．多様な進路に対する認識……７６
第２節　地域学部の専門教育に対する在学生の意識と評価 ……７７
Ⅰ．はじめに……７７
Ⅱ．地域学部について……７８
１．入学動機と大学・学部選択理由……７８
２．入学した学部の評価，大学への期待と不満……７９
３．自分の学び方、授業への取り組み方、そして指導改善への希望……８２
４．将来の進路希望……８８
５．学部のイメージ……９０
Ⅲ．教員免許取得について……９２
１．教員免許の取得希望と社会的評価……９２
２．多様な進路に対する認識……９４
第３節　教育地域科学部の専門教育に対する卒業生（本学出身の大学院生も含む）の意識と評価……９５
Ⅰ．はじめに……９５
Ⅱ．教育地域科学部について……９６
１．入学動機と大学・学部選択理由……９６
２．入学した学部の評価，大学への期待と不満……９７
３．自分の学び方、授業への取り組み方、そして指導改善への希望……９９
４．将来の進路希望……１０５

５．学部のイメージ……１０７
Ⅲ．教員免許取得について……１０９
１．教員免許の取得希望と社会的評価……１０９
第４節　教育学部の専門教育に対する卒業生（本学出身の大学院生も含む）の意識と評価……１１２
Ⅰ．はじめに……１１２
Ⅱ．教育学部について……１１２
１．卒業後の満足度……１１２
２．専門教育について……１１４
３．卒業後の大学との関わり……１１６
４．卒業学部の改組について……１１６
第２章　医学部の教育を中心としてみた学生の意識と評価……１１８
第１節　在学生の専門教育に対する意識と評価……１１８
Ⅰ．大学教育に関する調査の概要……１１８
Ⅱ．医学科・生命科学科・保健学科共通について……１１８
１．大学院への進学について……１１８
２．学生生活について……１１８
３．医学部の講義について……１１９
４．クラス担当の教員について……１２３
５．課外活動について……１２４
６．湖山キャンパスでの授業生活について……１２５
７．高等学校での履修科目について……１２７
Ⅲ．医学科について……１２７
Ⅳ．生命科学科について……１２９
１．生命科学科の教育全般について……１２９
２．生命科学科の進路について……１３２
Ⅴ．保健学科（看護学専攻・検査技術科学専攻）について……１３４
１．保健学科の教育全般について……１３４
２．保健学科学生の進路について……１３６
第２節　卒業生の専門教育に対する意識と評価……１３７
Ⅰ．大学教育に関する調査の概要……１３７
Ⅱ．医学科・生命科学科・保健学科共通について……１３７
１．学生生活の満足度について……１３７
２．医学部の講義、カリキュラム等について……１３７
３．クラス担当の顧問教官・学級教官について……１４１
４．課外活動について……１４２
５．湖山キャンパスでの学生生活について……１４３
６．高等学校で履修した理系科目について……１４４
Ⅲ．医学科について……１４５
Ⅳ．生命科学科について……１４６

Ⅴ．保健学科について……１４６
第３章　工学部の教育を中心としてみた学生の意識と評価……１４７
第１節　在学生の専門教育に対する意識と評価……１４７
Ⅰ．工学部について……１４７
１．卒業研究に着手している割合……１４７
２．所属学科との関連について……１４７
３．工学部・各学科の教育目的・目標……１５０
Ⅱ．工学部への入学について……１５１
１．入学について……１５１
Ⅲ．工学教育及び各学科のカリキュラムについて……１５２
１．工学教育プログラム……１５２
２．シラバスについて……１５５
３．所属学科のカリキュラムの内容について……１５７
Ⅳ．教育組織・教育環境・学生への支援について……１６０
１．教員構成……１６０
２．教育環境および鳥取の自然環境……１６１
３．学生への支援……１６２
４．学生の要望を取り上げるシステム……１６４
Ⅴ．大学の役割について……１６６
１．鳥取大学の役割……１６６
第２節　卒業生の専門教育に対する意識と評価……１６８
Ⅰ．工学部について……１６８
１．工学部卒業生アンケート……１６８
２．現在の職業……１６９
３．鳥取大学工学部・所属学科の理念・教育目的・教育目標……１６９
４．入学について……１７１
５．工学教育プログラム……１７２
６．所属学科の教育カリキュラム……１７５
７．所属学科の教員構成……１７７
８．教育環境……１７８
９．鳥取の自然環境……１７９
１０．学生への支援……１７９
１１．鳥取大学の役割……１８０
第４章　農学部の教育を中心としてみた学生の意識と評価……１８１
第１節　在学生の専門教育に対する意識と評価……１８１
Ⅰ．生物資源環境学科について……１８１
１．入学及び学科選択の動機と意識……１８１
２．専門教育体制についての評価と意見……１８２
３．専門教育と全学共通教育についての意識と意見……１８３
４．今後の展望について……１８５

Ⅱ．獣医学科について……１８６
１．入学及び学科選択の動機と意識……１８６
２．専門教育体制についての評価と意見……１８６
３．専門教育と全学共通教育についての意識と意見……１８７
４．今後の展望について……１８８
第２節　卒業生の専門教育に対する意識と評価 ……１９０
Ⅰ．農学部の専門教育について……１９０
１．専門教育体制についての評価と意見……１９０
２．専門教育と一般教育についての意識と意見……１９１
３．卒業論文及び実験・実習について……１９２
４．今後の展望について……１９２

第Ⅲ部　調査から現れた鳥取大学の教育課題

第１章　大学全体の課題 ……１９５
Ⅰ．鳥取大学の情報の提供……１９５
Ⅱ．福利厚生施設を中心とした施設整備……１９５
Ⅲ．全学共通教育の今後の課題……１９５
第２章　各学部の課題 ……１９７
第１節　教育地域科学・地域学部の課題……１９７
Ⅰ．教育地域科学部全体としての現状と課題……１９７
１．改組に伴う移行期の問題……１９７
２．志望動機と大学への期待……１９７
３．学び方、授業への取り組み方……１９７
４．学生支援システムの評価……１９８
５．進路希望にあった学部の対応……１９８
Ⅱ．地域学部全体としての現状と課題……１９９
１．改組に伴う移行期の問題……１９９
２．志望動機と大学への期待……１９９
３．学び方、授業への取り組み方……１９９
４．学生支援システムの評価……２００
５．進路希望にあった学部の対応……２０１
第２節　医学部の課題……２０２
Ⅰ．平成 12 年度の大学教育調査以後の医学部のカリキュラムの改革 ……２０２
Ⅱ．教養教育の改革……２０２
Ⅲ．教員の教育能力の開発と教育活動の評価……２０２
Ⅳ．医学科、生命科学科、保健学科の 3 学科コンビネーション教育……２０３
Ⅴ．新しい医学教育カリキュラム……２０３
１．医学科におけるカリキュラムの変更……２０４
２．生命科学科におけるカリキュラムの変更……２０６
３．保健学科におけるカリキュラムの変更……２０７

Ⅵ. 各学科の課題……２０８
１．医学科の課題……２０８
２．生命科学科の課題……２０８
３．保健学科の課題……２０９
Ⅶ. まとめ……２０９
第３節　工学部の課題……２１０
Ⅰ．工学部全体としての現状と課題……２１０
１．はじめに……２１０
２．志望動機と学部・学科への期待……２１０
３．工学教育及び各学科のカリキュラムについて……２１１
４．学生への支援等について……２１１
第４節　農学部の課題……２１３
Ⅰ．生物資源環境学科……２１３
１．生物資源環境学科における諸課題のポイント……２１３
２．生物資源環境学科における分属システムについて……２１４
Ⅱ．獣医学科……２１６
１．獣医学科における諸課題のポイント……２１６
２．獣医学科の６年制教育システムについて……２１６
お　わ　り　に
【資　　料】
○アンケート調査項目（学部学生用）
・全学部共通……１
・教育地域科学部及び地域学部……１３
・医学部……２３
・工学部……２９
・農学部……３５
○アンケート調査項目（卒業生用（本学出身の大学院生も含む））
・全学部共通……４３
・教育学部及び教育地域科学部……５３
・医学部……５９
・工学部……６５
・農学部……６９
○評価委員会委員名簿及び作業部会委員名簿

調査の概要

１．調査の趣旨・目的

鳥取大学では、平成５年度及び平成 13 年度に抜本的な教育改革がなされたが、それらの改革は、その都度実施された大学教育に関するアンケート調査を有力な参考資料として行われた。

本学は、教育研究理念として「知と実践の融合」をかかげ、大学の基本目標として①「社会の中核となり得る教養豊かな人材の育成」、②「地球的、人類的及び社会的課題解決への先端的研究」、③「地域社会の産業と文化等への寄与」、を明示している。さらに、教育を最重視する姿勢を打ち出し、大学教育に対する学生の意見等が反映できるよう、学長と新入生との懇談会や学生参加型ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）討論会及び授業評価アンケート等を積極的に実施してきた。

平成 13 年度の教育改革により、「一般教育」と称してきた教養的教育を「全学共通教育」と名称変更し、全学部の教員が全学共通教育を担当する全学出動体制の具現化に向けて努力してきたが、実際は旧教養部からの分属教員数を基準とした授業担当学部責任体制から脱却できないのが実状である。

学力不足やモチベーションの低い学生の増加が指摘される中、高等教育においても、それらに対応する教育改革の必要性が叫ばれ、各大学において対応策としての種々の試みがなされている。本学では、全学共通教育の科目群を大学入門科目、主題科目、実践科目、専門基礎科目という４つに区分し、どの学部の学生にも必要な教育が全学共通教育であると定義し、大学教育総合センターを中心として、運営・実施する体制がとられた。

各学部における専門教育も時代の要請に応えるべく、医学部のコア・カリキュラムの導入や工学部の日本技術者教育認定機構（ＪＡＢＥＥ）に関連した授業科目の開設等で大きく変革されてきている。

今回の大学教育に関するアンケート調査は、これまで行われてきた本学の教育の成果や改善点を検証するとともに、これからの本学の教育に対する方向性を模索し、更なる教育改革に結びつけることをねらいとしている。

その意義・目的をまとめると、以下の３点になる。

① カリキュラム改革後の全学共通教育と専門教育が、有機的に関連性を持って実施されているかを検証すること。

② カリキュラム改革後に、新たに生じている全学共通教育及び専門教育の問題点を明らかにすること。

③ 学生からの教育評価を見ることにより、カリキュラム改革の成果及び問題点を明らかにし、これからの鳥取大学の教育改革の指針を指示すること。

２．調査対象及び調査状況・回収率

① 原則として全学部を対象としたが、大学院生については今回の調査に鑑み、本学の卒業生を対象とした。

② 鳥取大学の在学生（1,559 名）と大学院生を含む卒業生（728 名）から回答を得た。

③ 調査方法は、直接配布回答式と郵送送付回答式(卒業生)で行い、調査時期は平成 16 年 11 月～12 月に実施した。

回収率は、次のとおりである。

「大学教育に関するアンケート調査」回収状況

【学部学生】

学　部　別	調査対象者数(a)	回収枚数(b)	回収率(b／a)
学部学生合計	5,150　(22)	1,559	30.40%
地域学部	204　(2)	48	23.76%
教育地域科学部	542	181	33.39%
医学部	1,182　(1)	434	36.75%
工学部	2,125　(15)	517	24.50%
農学部	1,097　(4)	379	34.68%

【卒業生】

学　部　別	調査対象者数(a)	回収枚数(b)	回収率(b／a)
卒業生合計	3,200　(398)	728	25.98%
大学院生小計	1,036　(106)	326	35.05%
教育学研究科	93　(27)	14	21.21%
医学系研究科	313　(10)	65	21.45%
工学研究科	404　(13)	178	45.52%
農学研究科・ 連合農学研究科	226　(56)	69	40.59%
卒業生(郵送分)小計	2,164　(292)	402	21.47%
教育地域学部・ 教育学部	400　(19)	80	21.00%
医学部	382　(27)	68	19.15%
工学部	782　(60)	154	21.33%
農学部	600　(186)	100	24.15%

※学部学生・大学院生の調査対象者数は、平成16年5月1日現在の在籍者数で、(　)は調査対象外の留学生数で内数。

※大学院生の対象者数は、他大学出身の院生も含まれる。

※卒業生(郵送者分)の(　)は、転居先不明等で配達不能者数で内数。

この表から明白のように、回収率は学部学生 30.4%、卒業生 26.0%となっており、平成 12 年の調査に比較すると、20%程度低くなっている。これは、前回の調査と同様に授業時間を利用しなかったことと、アンケート調査の趣旨が対象者に浸透しなかったことが主な原因と考えられ、回収率を高めるためには、このような調査の意義を認識し、全学的な取り組みとして実施していかなければならないであろう。

3．調査内容

調査表は、在学生用及び卒業生用（卒業生と本学卒業の大学院生用の２種類）を各学部毎に計 12 種類を作成した。

主な内容及び調査項目は、次のとおりである。

【在学生用】

① 全学共通設問
性別、入学年度別、学部・学科、出身校所在地等（Ｑ１～Ｑ５）
入学の動機、学生生活、勉学への取り組み方等(Ｑ６～Ｑ19)
全学共通教育について（Ｑ20～Ｑ27）
② 専門教育設問
教育地域科学部及び地域学部専門教育に関連した設問事項について（Ｑ28～Ｑ61）
医学部専門教育に関連した設問事項について（Ｑ28～Ｑ53）
工学部専門教育に関連した設問事項について（Ｑ28～Ｑ70）
農学部専門教育に関連した設問事項について（Ｑ28～Ｑ53）

【卒業生用（大学院生含む)】
① 全学共通設問
性別、入学年度別、学部・学科、出身校所在地等（Ｑ１～Ｑ５）
入学の動機、学生生活、勉学への取り組み方等(Ｑ６～Ｑ19)
一般教育について（Ｑ20～Ｑ25）
② 専門教育設問
教育学部及び教育地域科学部専門教育に関連した設問事項について（Ｑ26～Ｑ59）
医学部専門教育に関連した設問事項について（Ｑ26～Ｑ50）
工学部専門教育に関連した設問事項について（Ｑ26～Ｑ53）
農学部専門教育に関連した設問事項について（Ｑ26～Ｑ47）

４．調査結果の分析と報告書の構成

この調査は、平成16年度の自己点検評価事業として新たな教育改革の推進に資するために評価委員会から委託されて作業部会が実施したものである。その結果を分析し、平成17年度の「大学教育の現状と課題」として公表することとした。

本報告書の構成は、次の３部からなる。

まず第Ⅰ部は、「全学共通教育」について分析を行っている。ここでは、第１章及び第２章において、本学の教育機能を学生がいかに評価しているか、という点について、大学や所属学部に対する選択の理由及び期待度、或いは自らの生活や勉学への取り組み方等を検討することにより、その問題点を明らかにしている。第２章では、カリキュラム改革後の全学共通教育の授業について、在学生の評価を次の２点から分析している。Ⅰ．全学共通教育と専門教育との関係、Ⅱ．個々の教育科目への評価の分析であり、内容は、①当該科目を学ぶことの意義等、②シラバスの利用度、③当該科目の授業への満足度、④当該科目の成績評価などである。また、第３章においては、在学生の調査内容とほぼ同じ設問に対する卒業生の回答について、分析を行っている。

第Ⅱ部では、「専門教育」についての学生の意識・評価を分析した。まず、教育地域科学部・地域学部においては、学生の学部に対する評価、専門教育への満足度、授業への取り組み方、将来の進路希望、教員免許取得等について分析した。医学部においては、大学院への進学、講義に対する評価、教員との関係、学生生活や課外活動、湖山キャンパスでの授業生活、学科毎の学生の評価等について分析した。工学部においては、学部への満足度、志望の動機、工学教育カリキュラム、教育組織等について分析した。農学部においては、入学や学科の動機や意識、専門教育体制についての評価、教育全般に対する取り組み姿勢等について分析した。

最後に、第Ⅲ部では、調査から現れた鳥取大学の教育の課題についての検討・分析を行な

った。

第 Ⅰ 部

全 学 共 通 教 育

第１章　鳥取大学の教育機能と学生の評価

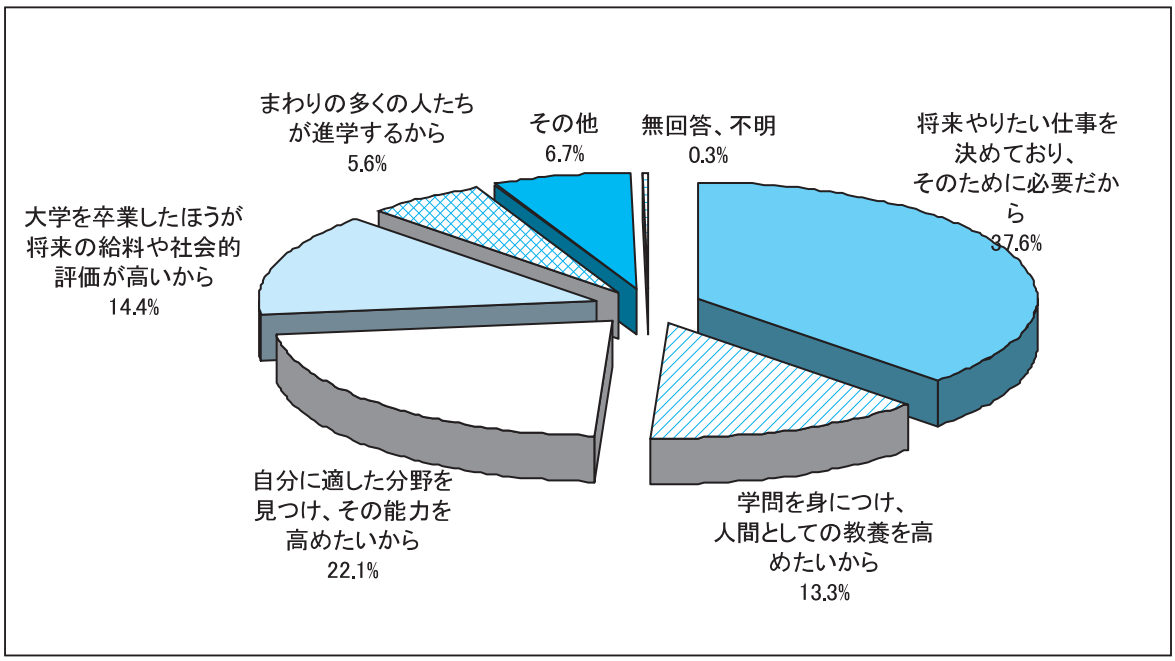
本学では、平成 13 年度から一般教育を全学共通教育に名称変更するとともに教育の区分を大学入門科目、主題科目、実践科目、専門基礎科目の４つに再編成した。

平成 16 年度は、全学共通教育がスタートして４年目にあたり、新たに施行した全学共通教育に対する評価が必要であるとの指摘を受けて、平成 12 年度に実施した調査との比較も行いながら、全学共通教育だけでなく大学教育全体に関わる問題についても検討することとした。また、自己評価報告書は一般に公開するものであるとともに、大学構成員が日々の教育・研究に活用すべきものであるという観点から、本章では、有益な資料やデータを可能なかぎり整理して示すことにする。

第１節　鳥取大学への評価の諸側面

Ⅰ．大学入学への動機等

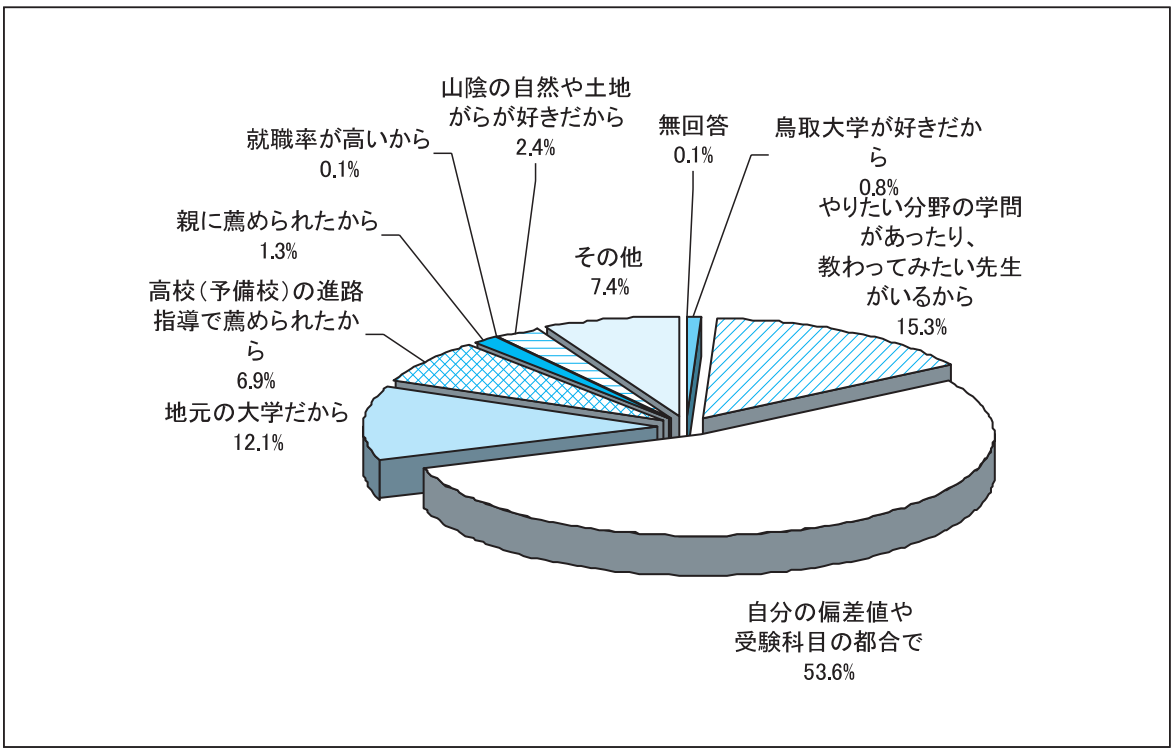
まず、学生が鳥取大学への入学に際して、どのような志望動機をもっていたのかについて見てみることにする。大学選択の理由であるが、「将来やりたい仕事を決めており、そのために必要だから」という理由が 37.6％で最も高い。次に高い比率を示すのは、「自分に適した分野を見つけ、その能力を高めたいから」で 22.1％である。これらを２つ合わせると、約 60％となり、「教養を身につける」や「社会的評価」への期待の度合いは低い。



図Ⅰ―１―１―１　大学進学を選択した最も大きな理由は何ですか。

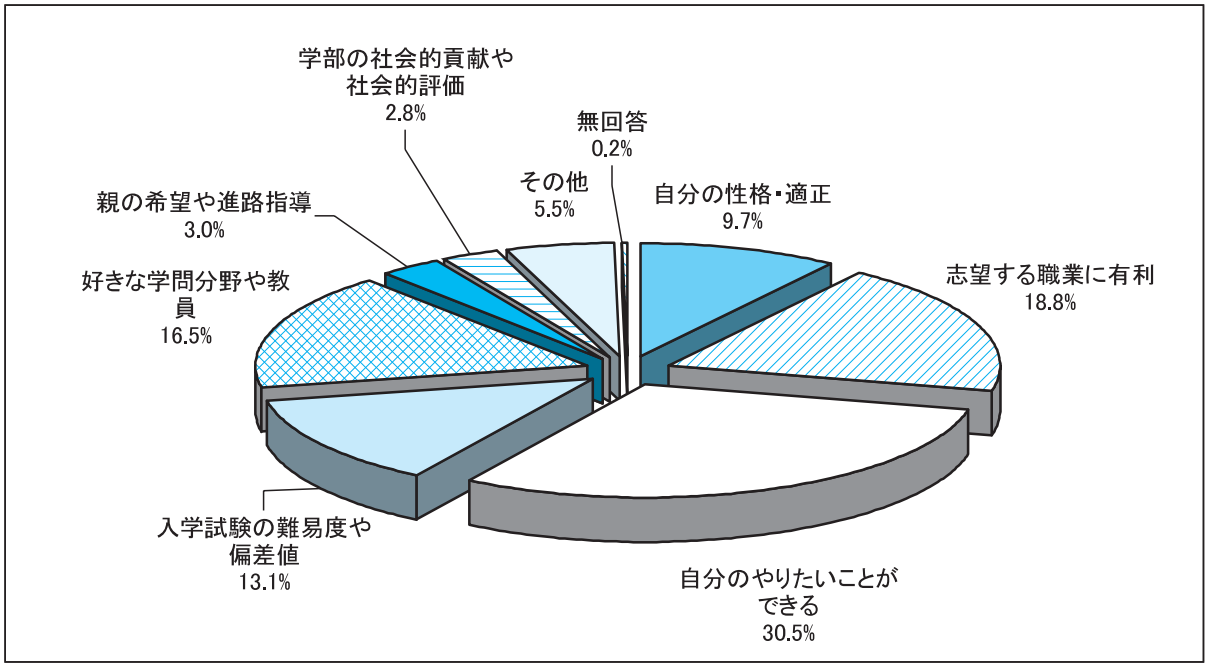
大学進学という一般的理由は、将来の自己のすがたを既に描いて（または入学後見つけて）そのために能力を高めるという、言わば「高邁な」理由が挙げられているのに対して、現実の大学選択になると「現実の理由」が優先される。Ｑ７は、鳥取大学を選択した理由について示したものである。「自分の偏差値や受験科目の都合で」が 53.6％と圧倒的に高く、「やりたい分野の学問があったり、教わってみたい先生がいる

から」という「高邁な」理由は 15.3%に減る。「地元の大学だから」という経済的な理由も 12.1%であり、偏差値や受験科目という「現実の理由」には及ばないという結果が示されている。この結果からいえることは、半数以上が偏差値等で受験大学を決めており、明確な目的をもって大学への進学してくる学生がまだまだ多くない現状にあることがわかる。



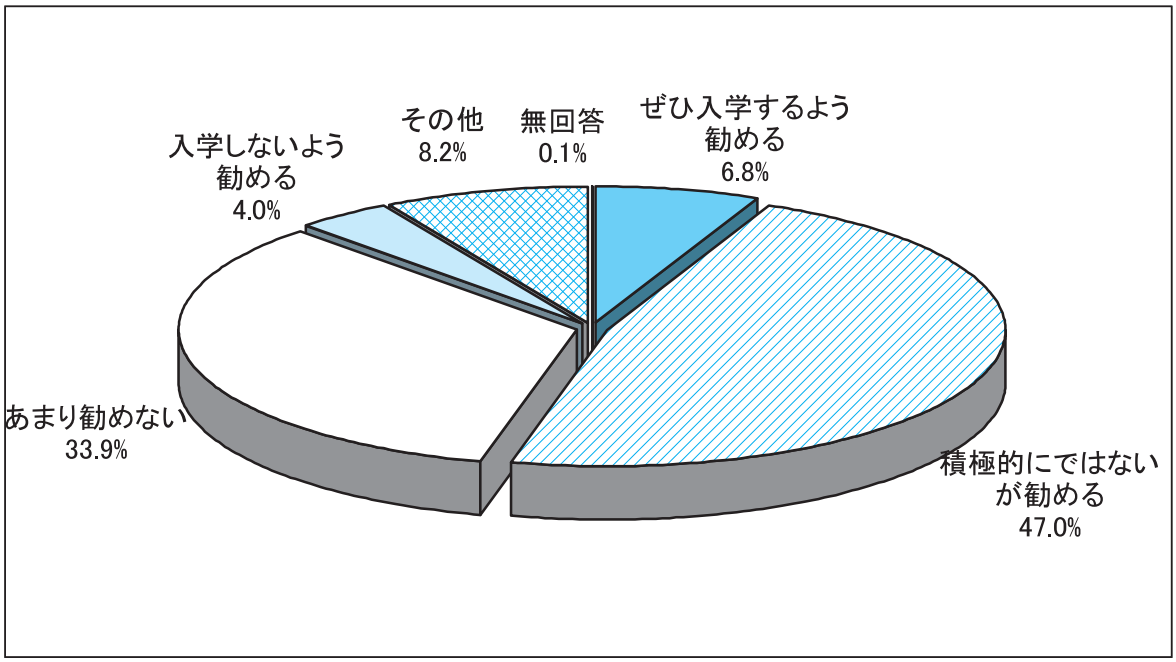
図Ⅰ―1―1―2　鳥取大学を選択した最も大きな理由はなんでしたか。

Q8は、学部を選択する際に重視したことについての結果である。「自分のやりたいことができる」と回答した学生が 30.5%と一番多く、次に「志望する職業に有利」が 18.8%、「好きな学問分野や教員」が 16.5%と続き、「入学試験の難易度や偏差値」は 13.1%と少ない。学部選択においては、大学の選択理由に比較すると明瞭な理由によって選択が実行されていると判断できる。



図Ⅰ―１―１―３　あなたが在学している学部を選ぶにあたって一番重視したのはどんなことですか。

Q10 は、「後輩に対して、鳥取大学への入学を勧めることができますか」という設問に対する回答であり、鳥取大学全体への評価と考えられる。「ぜひ入学するよう勧める」が 6.8%であり、前回の調査時の約５％を上回る数値であった。「積極的にではないが勧める」の 47.0%も前回の数値より高く、僅かではあるが大学全体への評価は高くなっている傾向にある。

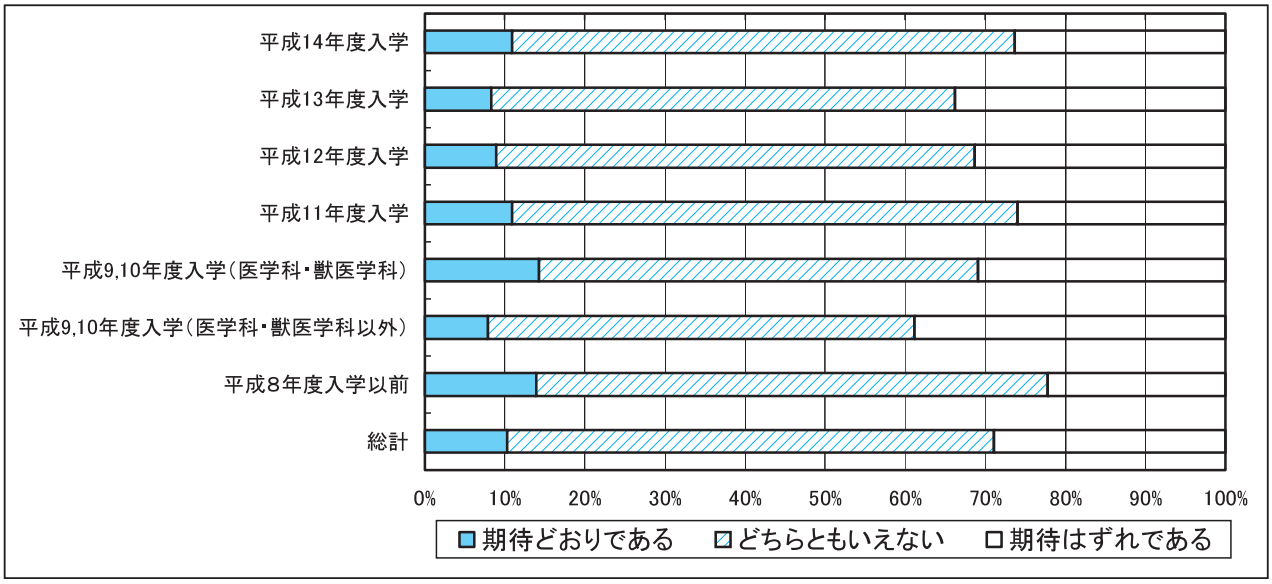


図Ⅰ―１―１―４　後輩に対して、鳥取大学への入学を勧めることができますか。

第２節　大学への期待と大学教育

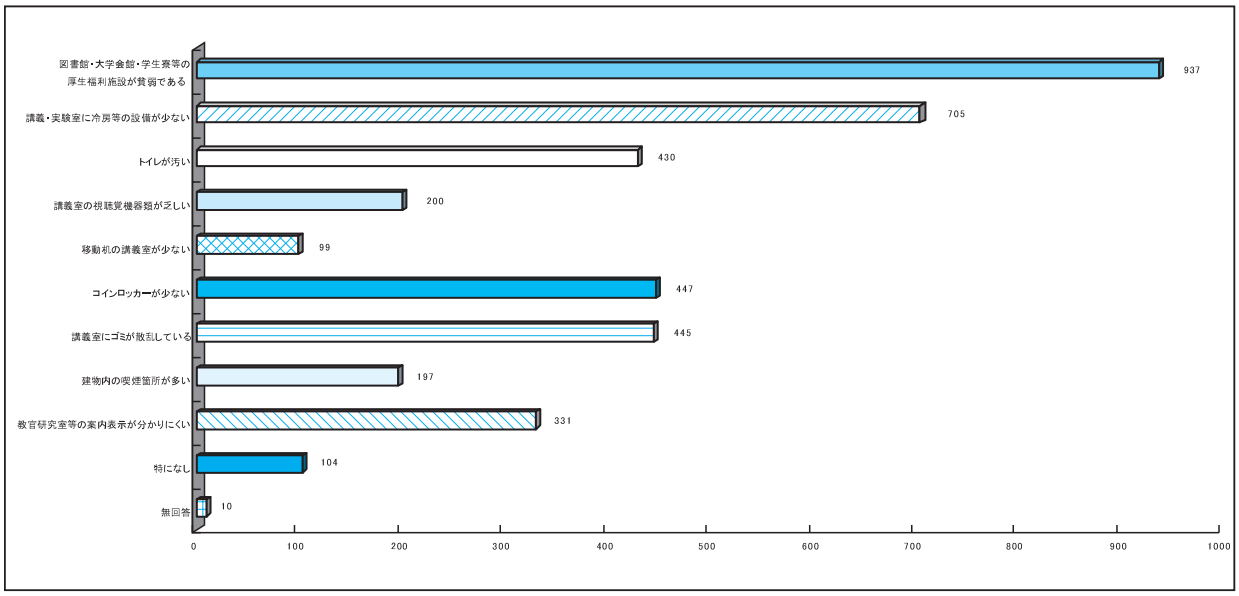
Ⅰ．大学への期待感

本学は、平成 14 年度から始まった文部科学省重点支援３事業の地域貢献特別支援事業、21 世紀ＣＯＥプログラム、特色ある大学教育支援プログラム（ＧＰ）など次々に採択され、当時の学長は３冠王と称して学内外に公表してきた。それらの評価は、学生の大学に対する評価にも反映されるはずであるが、結果としてそれらの評価は学生の認識という形で表れていない。図Ⅰ―１―２―１は、平成 14 年度に行った「大学への期待感」についての調査であるが、「期待どおりである」と回答した学生は 10％程度であり、逆に「期待はずれである」と回答した学生は 30％と３倍という数値が示された。大学ランキングにおいても本学は予想以上の高い評価を受けているが、外部評価と比較して内部評価が低いことは今後の本学の課題であろう。



図Ⅰ―１―２―１　大学への期待感（平成 14 年度学生生活実態調査報告書より）

Ｑ９は、環境・施設面についての設問に対する学生の反応であるが、最も不満を感じているのが、福利厚生施設に対してであり、約 60％の学生が「施設が貧弱である」との印象を持っていることがわかる。次に多いのが「冷房等の設備の少なさ」である。この点については、平成 16 年度に共通教育棟の講義室に冷房設備の整備が行われているので、ある程度解消されるものと考えられる。この他にも、「コインロッカーが少ない」、「講義室にゴミが散乱している」、「トイレが汚い」などの面に 30％くらいの学生が不満を抱いている現状にあることから、これらの整備も本学の早急の課題である。

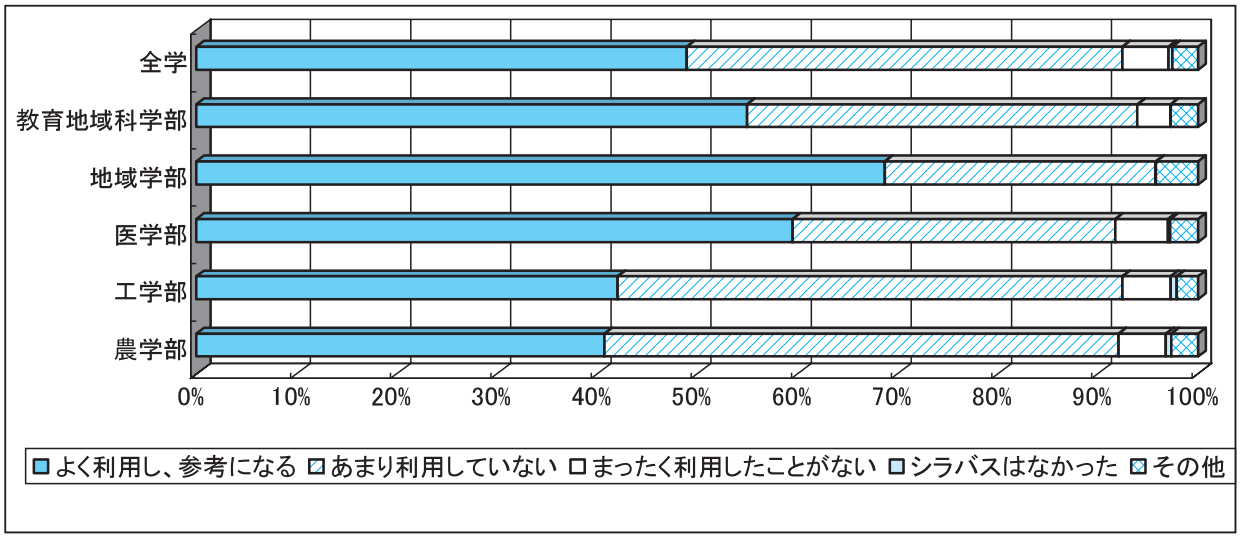


図Ⅰ―１―２―２　環境・施設面について、特に不満なことがありますか。

Ⅱ. 勉学への取り組み等

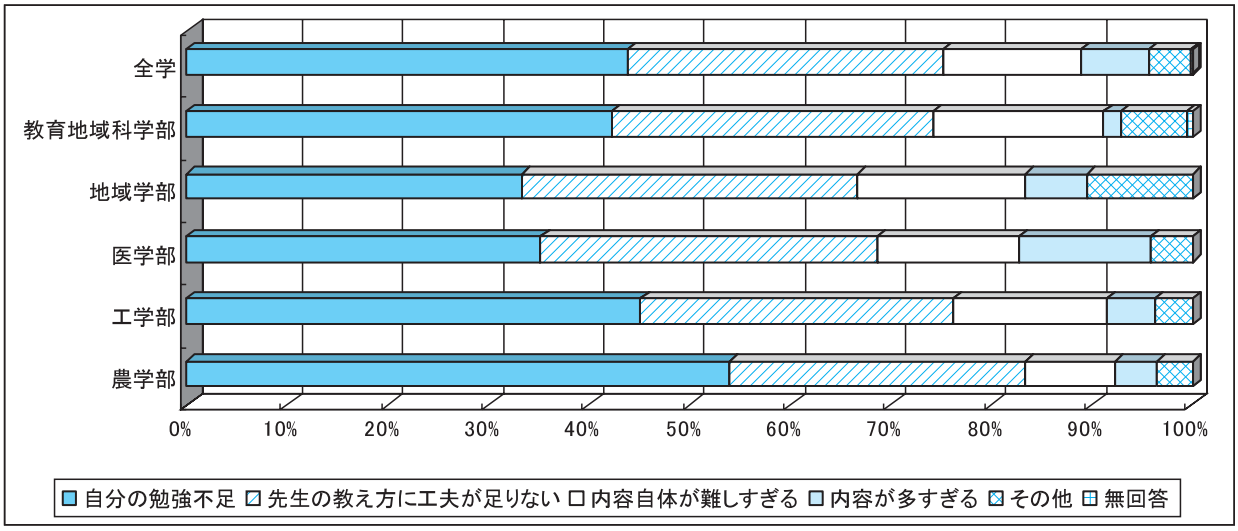
Q11 は、シラバスの利用についての設問に対する解答であるが、前回の調査時では、シラバスの重要性に対する認識が現状とかなり違っていたので、その点は考慮して検討する必要があろう。現状の大学教育におけるカリキュラムでは、シラバスは極めて重要であるとの認識から、今回の調査では、シラバスの利用度について①「よく利用し、参考にしている」、②「あまり利用していない」、③「まったく利用したことがない」、④「シラバスはなかった」、⑤「その他」という設問に対する回答を求めた。全学的には①と回答した学生が 48.9%あり、②や③と回答した学生の 48.1%と同じくらいの数値が示された。

学部別にみてみると、①と回答した学生は地域学部が 68.8%と一番高く、次いで医学部の 59.5%、教育地域科学部の 54.9%、工学部の 42.1%、農学部の 40.7%という順であった。どのような理由で学部差がでたのかは明確でないが、一番低い農学部は、③のまったく利用したことがないという回答も 10%以上あり、シラバスの内容的な問題なのか、学生の姿勢の問題なのか等についての詳細な検討の必要性を感じる。

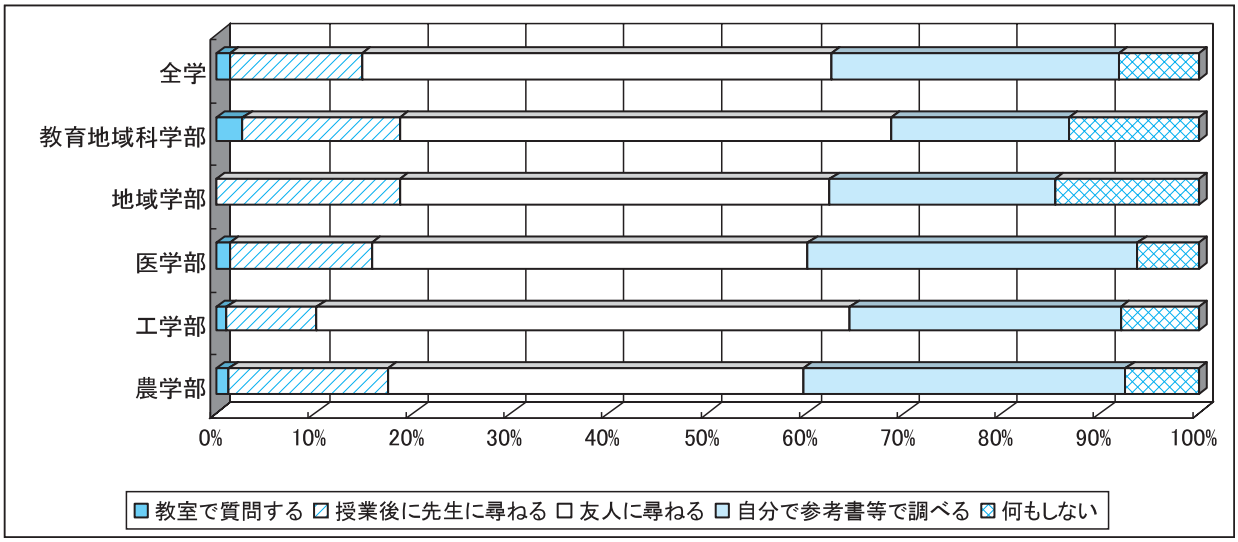


図Ⅰ―１―２―３　授業科目を選択する際にシラバスを利用していますか。

Q12及びQ13は、授業内容が理解できなかった場合に対する理由や対応への回答であるが、理由について、①の「自分の勉強不足」と回答した学生が 43.8%、②の「先生の教え方に工夫が足りない」と回答した学生が 31.5%、③と④の「内容の難しさや多さ」を指摘した学生があわせて 20.4%であった。学部別の傾向としては、①を一番多く選択したのが農学部生（54.0%）であり、一番少なかったのが地域学部生（33.0%）であった。この項目の学部別回答の傾向は、シラバスの利用度と反対であり、学部の特異性に関連した傾向とも考えられる。対応について、①の「教室で質問する」と回答した学生は極めて少なく、僅か 1.4%であり、②の「授業後に先生に尋ねる」という回答も 13.4%と少なかった。③の「友人に尋ねる」という回答が圧倒的に多く、50%近くの学生が③を選んでいる。④の「自分で参考書等で調べる」も比較的多く、30%くらいの学生が④を選択している。この結果は、本学においては学生が授業中に教員に質問をするという雰囲気が構築されていないことを示している。

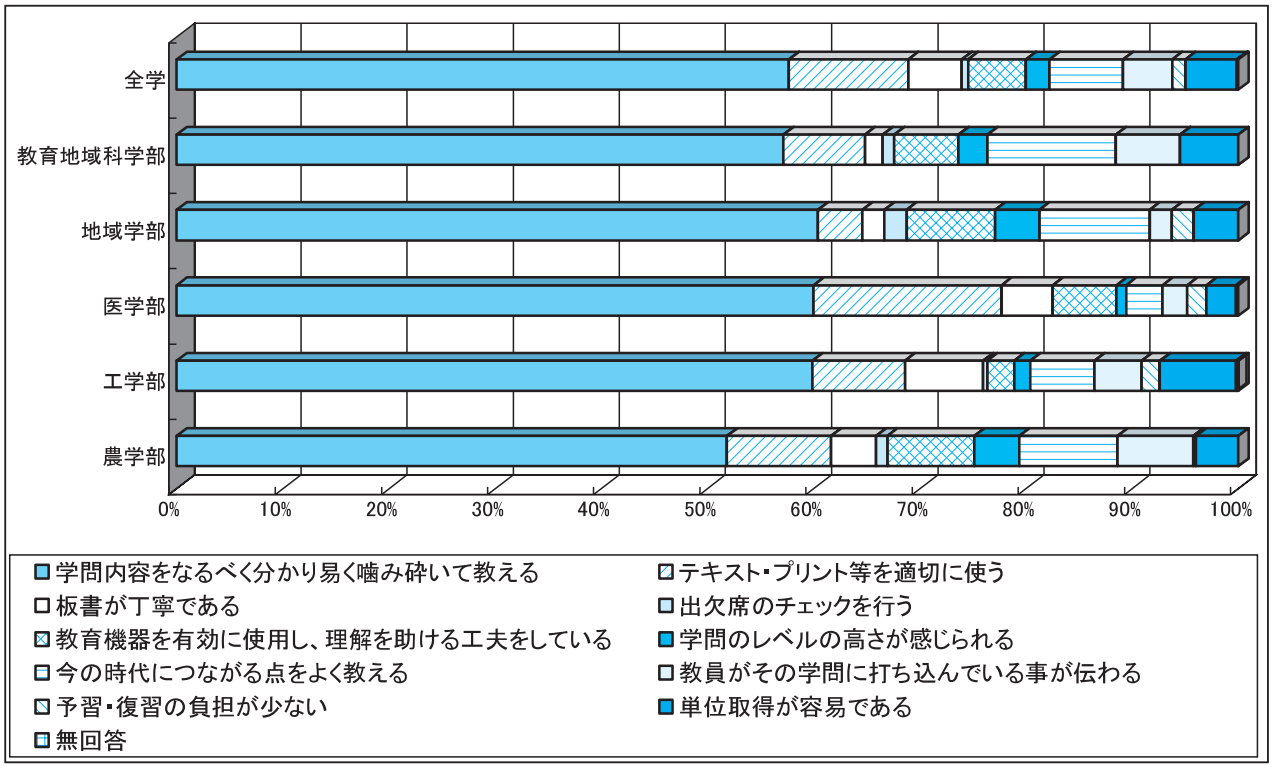


図Ⅰ―1―2―4　授業内容が理解できなかった場合、その理由は何であると思いますか。



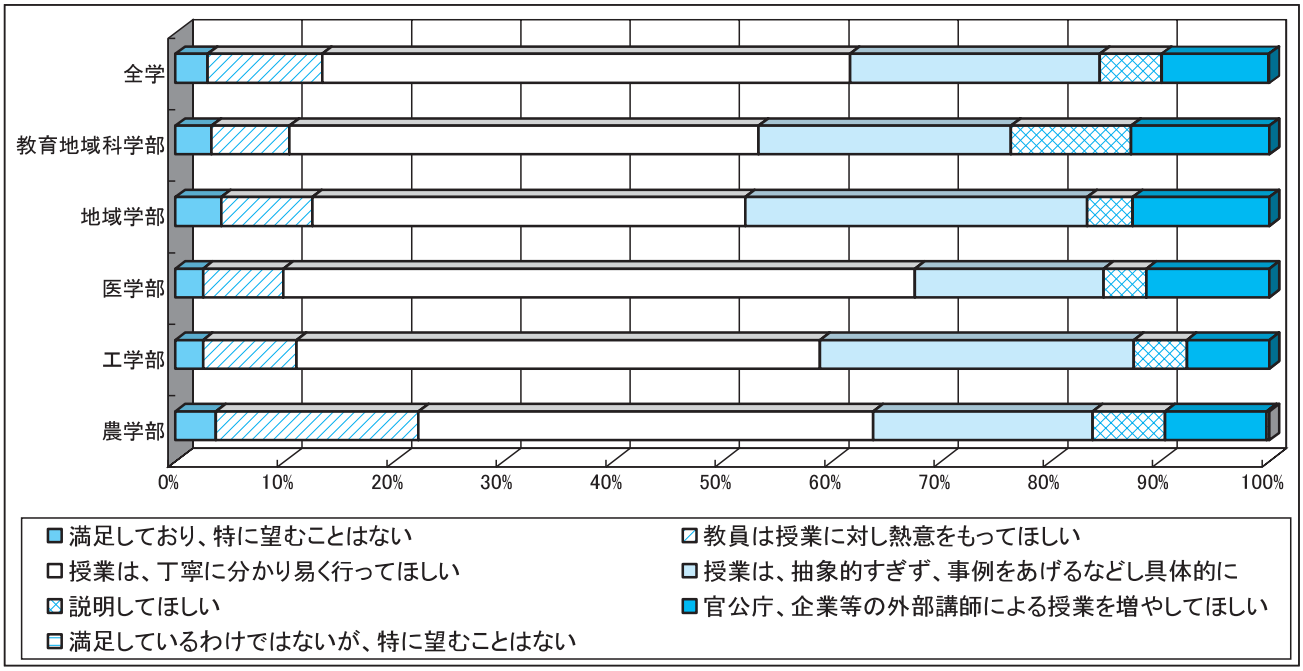
図Ⅰ―1―2―5　授業内容が理解できなかった場合、どのようにしますか。

Q14 は、学生がよいと評価する授業に関する回答であるが、①の「学問内容をなるべく分かり易く噛み砕いて教える」という点を最重要した学生が 60%近くおり、次いで、②の「テキスト・プリント等を適切に使う」、⑧の「教員がその学問に打ち込んでいる事が伝わる」という順に高い評価が得られている。



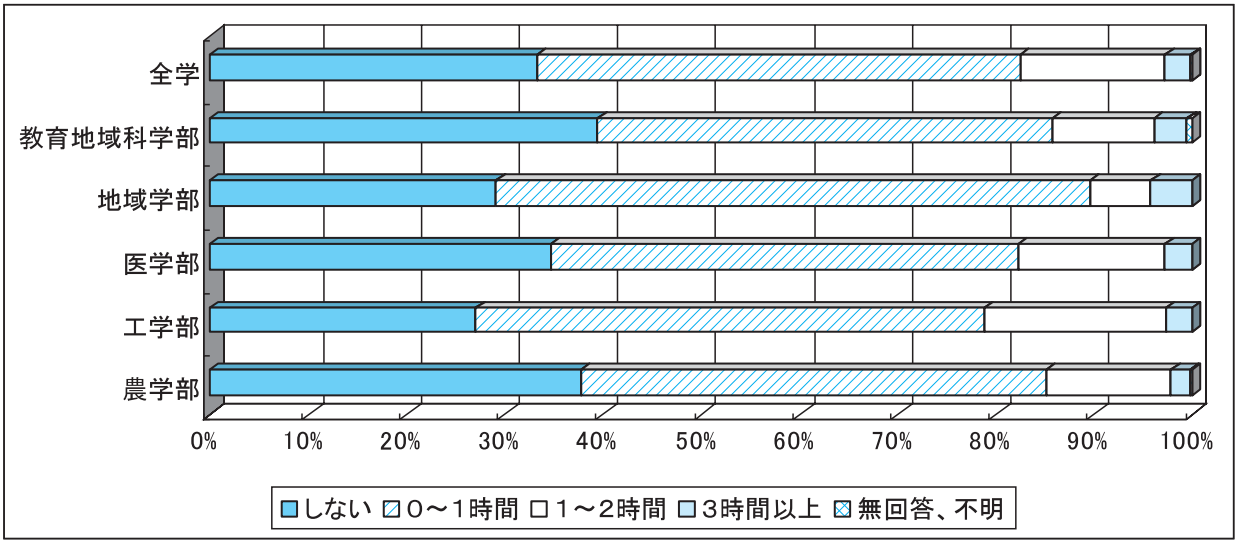
図Ⅰ―1―2―6　あなたがよいと評価するのはどんな授業ですか。（1番目）

Q17 は、授業に対して最も強く望むことは何ですかという設問に対する回答であるが、③の「授業は、丁寧に分かり易く行ってほしい」が圧倒的に多く、50%近くの学生の意見であり、次が、④の「授業は、抽象的すぎず、事例をあげるなどし、具体的に説明してほしい」でおよそ 23%、その次に、②の「教員は授業に対し熱意をもってほしい」が約 10%の学生の要望として示された。これらの意見等は、本学に限ったことではないが、しばしば指摘されているように「大学の教員の授業は難しくて分かりにくい」ということの具体例なのかもしれない。更なるファカルティ・ディベロップメント（FD）活動などによる教授方法の改善が必要であろう。



図Ⅰ―１―２―７　授業に対して最も強く望むことは何ですか。

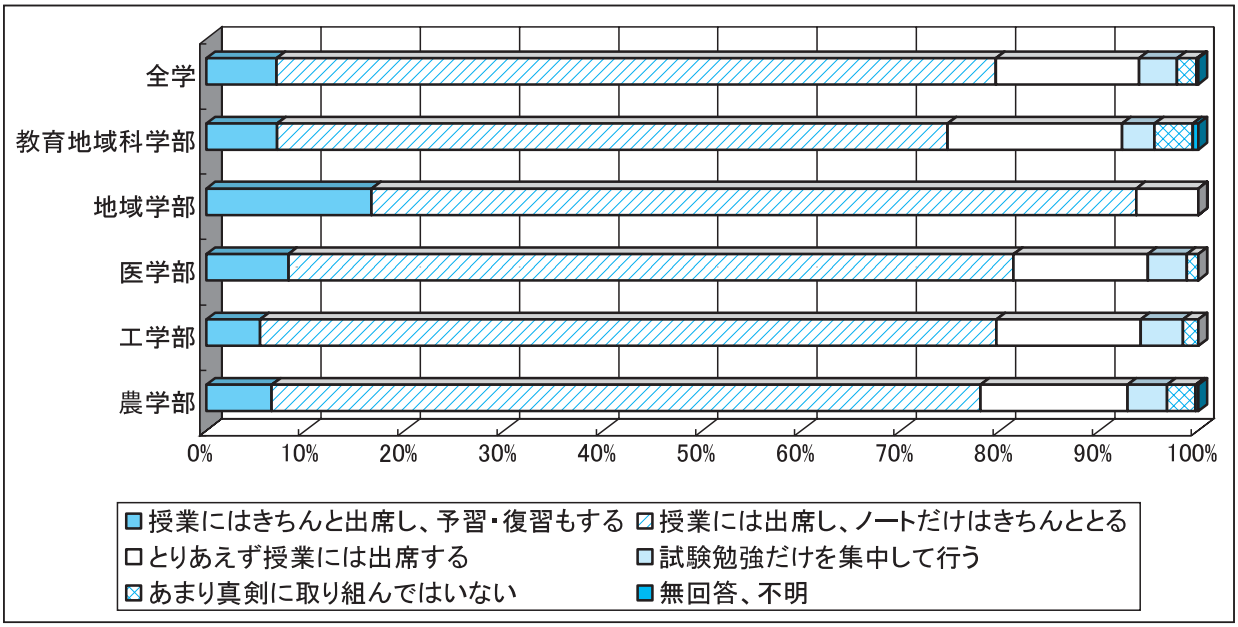
Q18は、授業の予習・復習に関する設問であるが、前回の調査との比較では、①の「まったく行わない」が40.0%から33.0%に、②の「０～１時間」が45.0%から49.0%に、③の「１～２時間」が12.0%から15.0%に、④の「３時間以上」が1.0%から3.0%へと変化している。この比較からいえば、前回調査時の学生より現在の学生の方が予習・復習をきちんと行っている傾向にあり、「今の学生は真面目である」という評価はあながち間違っていないと言える。



図Ⅰ―１―２―８　あなたは授業の予習・復習を１日何時間しますか。

Q19は、勉学態度に対する調査であるが、この設問に対しても前回との比較をしてみると、①の「授業にはきちんと出席し、予習・復習もする」が約５%から約７%に、②の「授業には出席し、ノートだけはきちんととる」が約61%から約73%に、③の「とりあ

えず授業には出席する」が約 22%から約 14%に、④の「試験勉強だけを集中して行う」が約７%から約 4%に、⑤の「あまり真剣に取り組んではいない」が約４%から約２%へと変化しており、勉学態度においても今回の調査対象の学生の方が勉学に対して前向きであることが伺える。



図Ⅰ―１―２―９　あなたの勉学態度は次のうちどれに最も近いですか。

第２章　全学共通教育対する在学生の意識と評価

本学では、平成 13 年度から「一般教育」と称していた名称を「全学共通教育」に改めるとともに、それまでの「教養科目」、「共通基礎科目」、「専門基礎科目」の３区分を「大学入門科目」、「主題科目」、「実践科目」、「専門基礎科目」の４区分に再編成し、どの学部の学生においても必要な教育が全学共通教育であると認定した。

本学の教育改革の目標は、大学審議会答申の例示した以下の４つの目標を意識したものである。

① 社会生活を送る上で身に付けておくべき基本的な知識と技能を修得させる。

② 社会的・学問的に重要な特定の主題や現代社会が直面する基本的な諸課題についての授業を行い、多面的な理解と総合的な洞察力や現代社会の諸課題を総合的し対処する能力を養成する。

③ 体系化された学問を幅広く経験することにより、専攻する学問分野の理解を助けるとともに専攻する学問分野の違いを越えて共通に必要な複合的視点や豊かな人性を涵養する。

④ 専門教育において、関連する分野に幅広い視野に立って学際的に取り組むことのできる力を培う。

次に、４つの教科編成の設定についても簡単に説明しておく。

① 大学入門科目は、後期中等教育と大学教育との連携をはかるものであり、大学入門ゼミ、情報リテラシ、教養基礎科目（補習的科目）で編成する。

② 主題科目は、主題Ａから主題Ｆまでの６つに区分し、学問の体系性にふれる機会を保障するものとして「学問の世界」を開設する。

③ 実践科目は、社会生活を送る上で身に付けておくべき基本的な知識と技能を修得させる。

④ 専門基礎科目は、専門科目や関連専門科目等の理解の基礎となる教育とする。

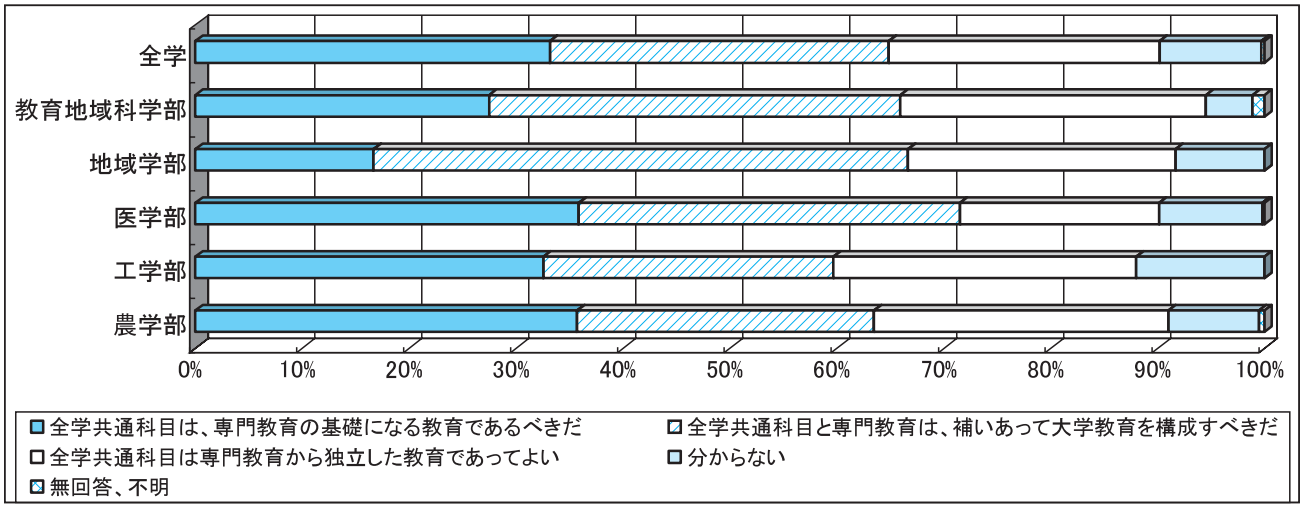
以上のような教育目標を達成すべく、新しいカリキュラム体系の下に全学共通教育が実施されてきた。

そこで、この章においては、「全学共通教育と専門教育の関連性」を中心に、現行の全学共通教育カリキュラムがめざした教育改革の成果が挙がっているのかという点や全学共通教育に対する評価について検討する。

第１節　カリキュラム改革後の全学共通教育

Ⅰ．全学共通教育と専門教育の関係

平成 12 年の調査において、標記の関係についての学生の認識は、「一般教育と専門教育は相補的関係であるべき」や「一般教育は専門教育の基礎であるべき」というものが多く、合わせて 70％近い数値を示していた。今回の調査においても同じような結果が示されており、Ｑ20 の図に示されているように、２つを合わせると 65％の学生が同様な認識であることがわかる。ただ、「全学共通教育は専門教育から独立した教育であってよい」という意見が 25％程度あり、このような認識の学生は前回より多くなっている。学部別の傾向を見てみると、地域学部の学生は「相補的な教育関係であるべき」とする意見が圧倒的に多く、50％を占めているのが特徴的であり、他の学部はほぼ似たような認識をしているといえる。



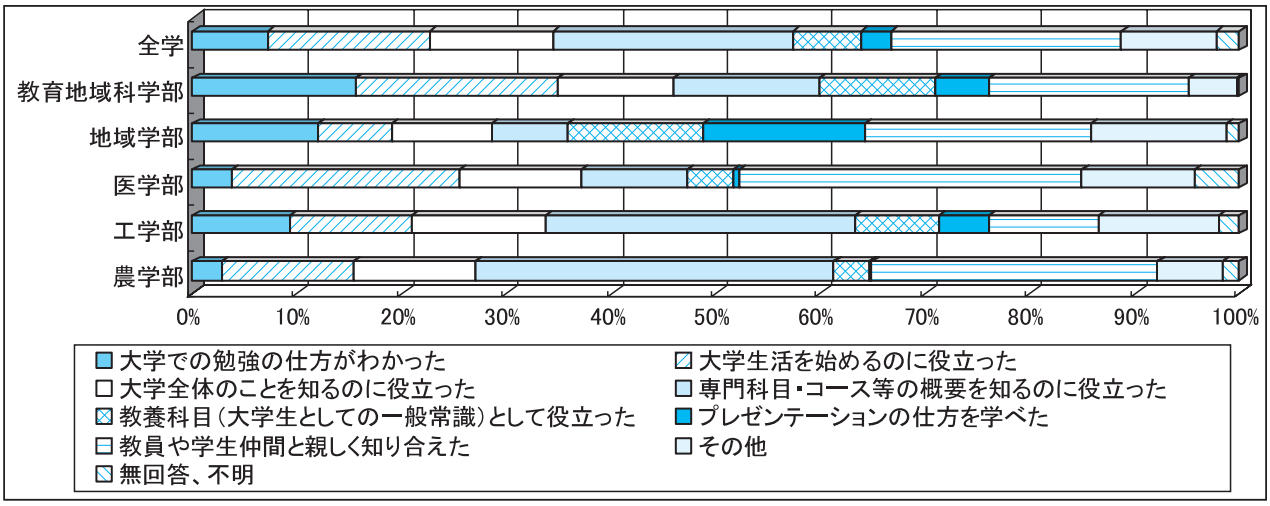
図Ⅰ―２―１―１　全学共通科目と専門教育はどのような関係にあるべきだとおもいますか。

Ⅱ．個々の教育科目への評価と授業満足度

前節では、全学共通教育と専門教育への有機的関連性に対する学生の認識について見てみたが、ここでは、全学共通教育への評価を有益性や満足度の点から検討してみたい。

１．大学入門科目「大学入門ゼミ」について

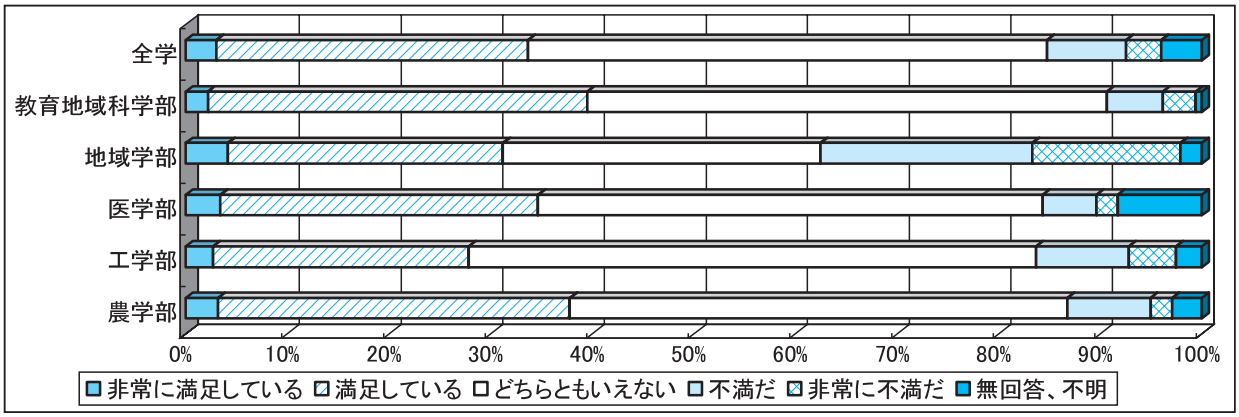
「大学入門ゼミ」は各学部・学科によって、その授業内容は相当異なっている。例えば、学科やコースの概要を知らせることを主眼とするものもあれば、教員や学生仲間との親睦を深めることを主目的とするものもあり、また、この両方の性格を持たせているものもある。そこで、この科目のどういう点が有益であったかを問うたQ21-1に対する回答から、授業内容への評価を引き出すことにする。すると、「専門科目・コース等の概要を知るのに役立った」が40.0%と最も高く、次いで「教員や学生仲間と親しく知り合えた」が38.6%と続く。これによって見れば、本来の科目の目標に適合した利点を回答している。この点から判断すれば、授業内容もプラスの評価を得ていると言えよう。



図Ⅰ―２―１―２　この科目はどういう点で有益でしたか。

次に教員に対する評価であるが、科目の形態上、複数の教員がオムニバス形式で行う場合がほとんどである。ゆえに、担当教員次第で評価も変わるので、これに関する設問は省

いた。教員の評価にも関連していると考えられるが、この科目の満足度については、「満足している」は 30.6%であり、「どちらともいえない」が 51.1%と半数を越えている。前項Ⅰで指摘したように、この科目は、もう少し工夫すべき点を残していると言えよう。



図Ⅰ―2―1―3　この科目の授業について、あなたは満足していますか。

2．大学入門科目「情報リテラシ」について

情報リテラシは、平成 10 年から 12 年までは教養科目の選択科目として開講されていた。平成 13 年から大学入門科目の必須科目「情報リテラシ」（２単位）として開講され、さらに、平成 15 年度から必携パソコンを用いて共通教育棟の講義室で行われるようになった。入学年度により大きな違いが見いだされるかどうかも興味が持たれるところである。

Q22-１は、複数回答可による「学ぶ意義」を問うものである。各項目は医学の準備教育モデル・コア・カリキュラムとよく対応していることがわかる。

【パソコンとその基本操作】到達目標

１）ハードウエアの構成を説明できる。
２）ソフトウエアの役割について説明し、操作できる。
３）データファイルの作成、複写、移動ができる。
４）キーボードとマウスの基本操作ができる。

【電子メールとインターネット】到達目標

１）インターネットシステムの概要、問題点、危険性、使用上のマナーを説明できる。
２）アカウントとパスワードを説明できる。
３）パスワードの管理ができる。
４）電子メールを送受信し、添付ファイルを扱うことができる。
５）WWWブラウザを使うことができる。
６）検索エンジンを使って必要な情報を探し出すことができる。

【アプリケーションソフトの利用】到達目標

１）ワープロソフトを使い、文書ファイルの作成や保存ができる。
２）表計算ソフトを使い、作表、計算式の埋め込みとグラフ化ができる。
３）プレゼンテーションソフトを使い、発表することができる。

アプリケーションソフトとして、多いものから「表計算」が 55.7%、「ワープロ」が 35.3%、「プレゼンテーション」が 19.7%である。ネットワーク関連では「インターネット（情報検索）」が 28.6%、「電子メール」が 25.3%の順である。

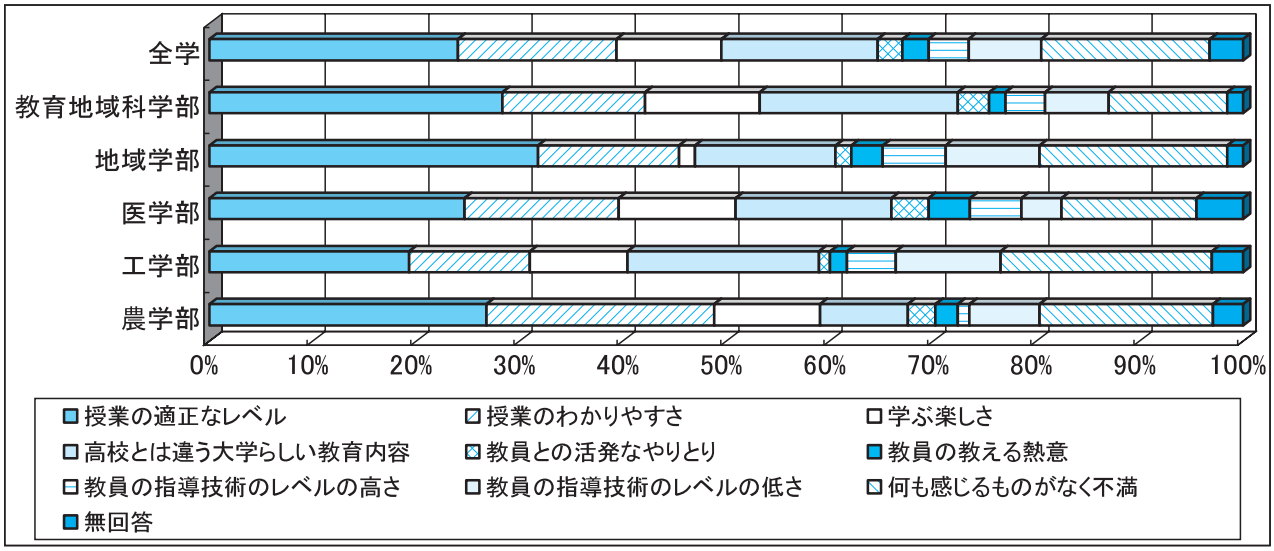
入学年度別では「プレゼンテーション」と「情報倫理」は、平成 15・16 年度が以前と

比べて増加している。「パソコンの仕組みと操作法」、「ワープロ」、「表計算」、「インターネット（情報検索）」、「ＷｉｎｄｏｗｓなどパソコンのＯＳ（オペレーティングシステム）」もほぼ一定である。また、この科目の「学ぶ意義はない」は、年々減少しており、13、14、15、16 年度入学者で 2.5%、2.3%、2.2%、1.5%である。

平成 12 年度の情報処理教育の必要性の調査では、学部生（院生）の 85.8%（78.5%）が必要と回答し、不要が 5.6%（14.6%）、わからないが 7.6%（6.4%）である。また、「情報倫理」の必要性は 3.4%である。

アプリケーションソフトとして多いのは「表計算」、「ワープロ」、「プレゼンテーション」であるが、教育地域科学部だけが、「ワープロ」「プレゼンテーション」がほぼ同じである。「情報倫理」は地域学部が多く、次いで工学部である。「学ぶ意義はない」は工学部、農学部が多いのが目立つ。男女別では、「学ぶ意義はない」だけが 1.2%と目立って女性が低い。

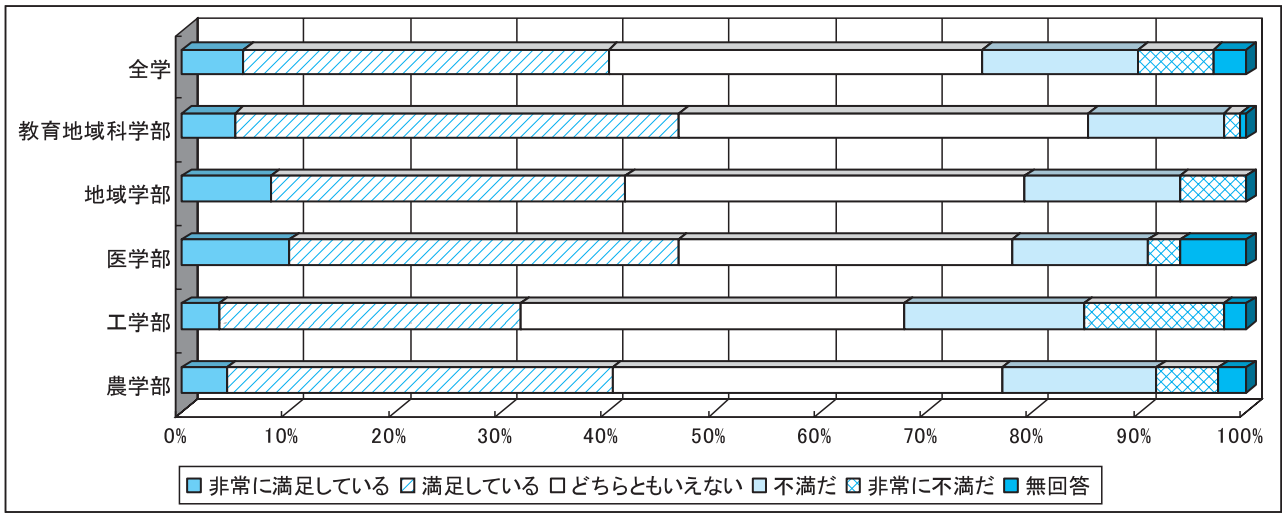
Q22-２は、授業で感じたことを問う複数回答可の設問である。入学年度別では「教員の教える熱意」は、平成 15 年度から 16 年度にかけて増加しており、「何も感じるものがなくて不満」は平成 16 年度では減少している。学部別では、「授業の適正なレベル」は工学部が 19. 3%とやや低く、「授業のわかりやすさ」は農学部が 22.0%と高いのが目立つ。「学ぶ楽しさ」は地域学部が 2.8%と極端に低い。「高校とは違う大学らしい教育内容」は教育地域科学部が 19.2%、工学部が 18.5%と高く、農学部は 8.5%と低い。「教員の指導技術のレベルの低さ」は地域学部が 9.9%、工学部が 10.2%と他の学部と比較して高い。「何も感じるものがなくて不満」は工学部が 20.4%、農学部が 17.0%、地域学部が 16.9%と高い。男女別では、「何も感じるものがなくて不満」が女性に比べて６%くらい高い数値（19.1%）が示された。



図Ⅰ―２―１―４　この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。

Q22-３は、授業の「満足度」を直接に問う設問であるが、平成 14 年度から「どちらともいえない」が大幅に減少しており、その分、「満足している」の合計は 12 年度から増加している。「不満」の合計は 12 年度からほぼ一定であり、15 年度が増大している。15 年度の結果は「どちらともいえない」の減少分が「不満」に流れたと思われる。学部別では「非常に満足」は工学部で 3.5%、農学部で 4.2%と低さが目立つ。「満足」では工学部が

28.3%の低い数値が目立ち、「非常に不満」は、他の学部より顕著に高い 13.2%という数値が示されている。この結果からみて、工学部における「情報リテラシ」については、何らかの改善のための対応策が必要であろう。

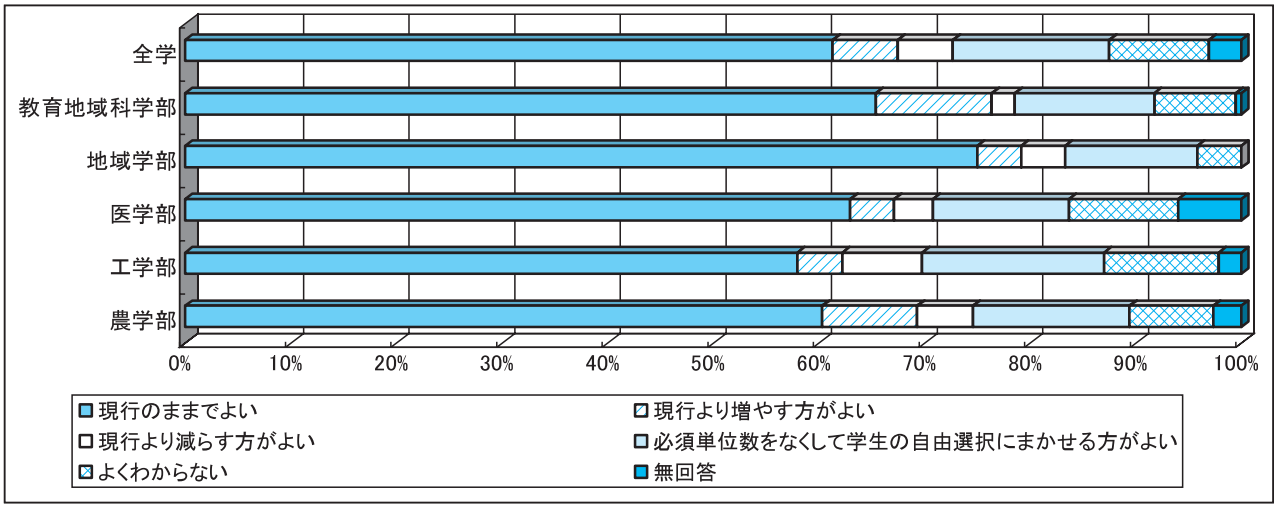


図Ⅰ―2―1―5　この科目の授業について、あなたは満足していますか。

Q22-4は、必須単位数に関する設問であるが、全学的には「現行のままでよい」が 60%以上になっており、現状肯定が圧倒的に多い。次いで、「自由選択」が 15%程度であり、他は少数意見であった。現状維持」は 13 年度から過半数を超えて、17 年度は急激に増大している。

学部別で見ると、どの学部も「現状維持」が多く、変化を求める中では「自由選択」がどの学部でも多い。単位の増減について、減少がはっきり多いのは「工学部」7.6%、増加がはっきり多いのは「地域科学部」11.0%、「農学部」9.0%である。どの学部も「単位数の増減」より「自由選択」のほうが多い。

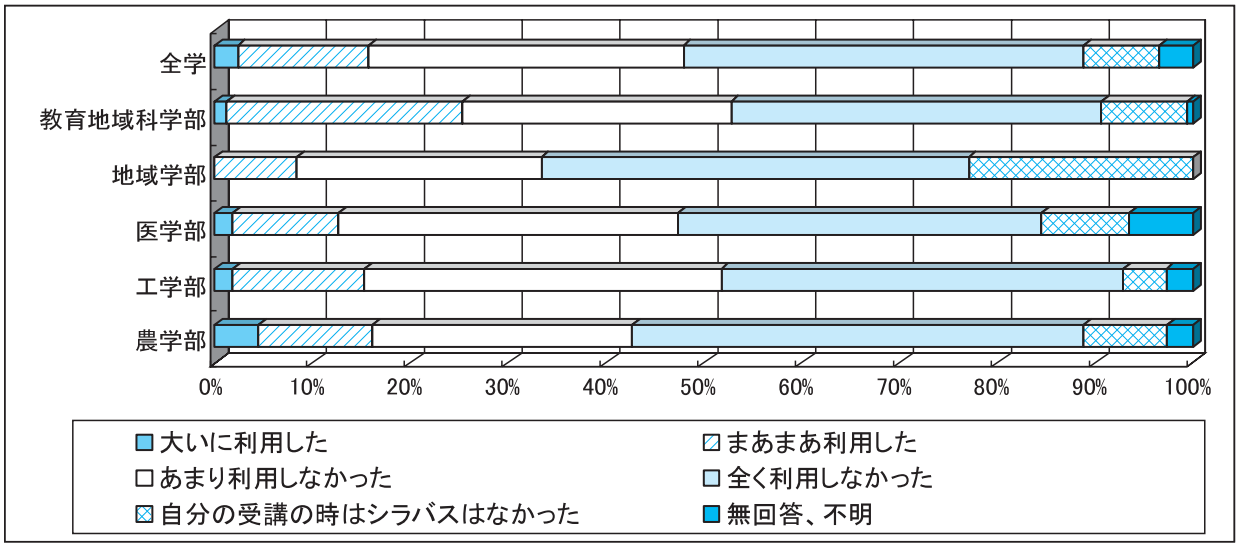
男女別では、女性は「現状維持」が多く（女 65.3%、男 57.6%）、単位の減少では少ない（女 3.2%、男 7.0%）。単位数の変更については男女とも「単位数の増減」より「自由選択」のほうが多い。



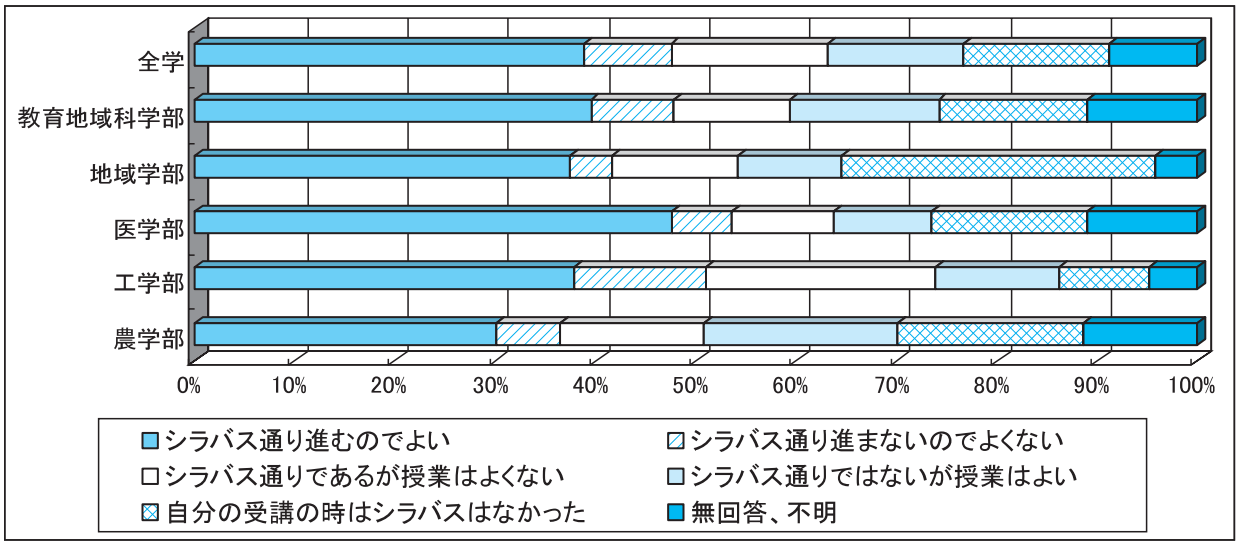
図Ⅰ―2―1―6　この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。

Q22-5とQ22-6は、学生の「シラバス活用」と教員の「シラバス忠実度」を問うた設問である。「シラバスを利用した」の合計は、15.4%であり、「シラバスを利用しない」の合計は73.4%とこの授業科目ではシラバスはあまり活用されていないことが示された。

男女別では、やや女性の方がシラバスの利用度が高く、学部別では、「大いに利用」が他学部に比して農学部の4.5%が目立った数値となっている。「まあまあ利用」では教育地域科学部24.2%がずば抜けて高い。「あまり利用せず」は医学部34.6%、工学部36.4%が他より少し高い。「シラバスがなかった」は地域学部22.4%がずば抜けて高い。シラバスの忠実度」においては、「シラバスの利用度」が20%以下であることから、実際の講義がシラバス通りに行われたかを判断するのは、適当ではないと考えられるが、「よい授業」と回答した学生は50%を越えている。今後、この結果に対する詳細な検討が必要であろう。



図Ⅰ―2―1―7　この科目のシラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。



図Ⅰ―2―1―8　実際の授業とシラバスとの関係はどうですか。

Q22-７は、「成績評価」を問う設問である。

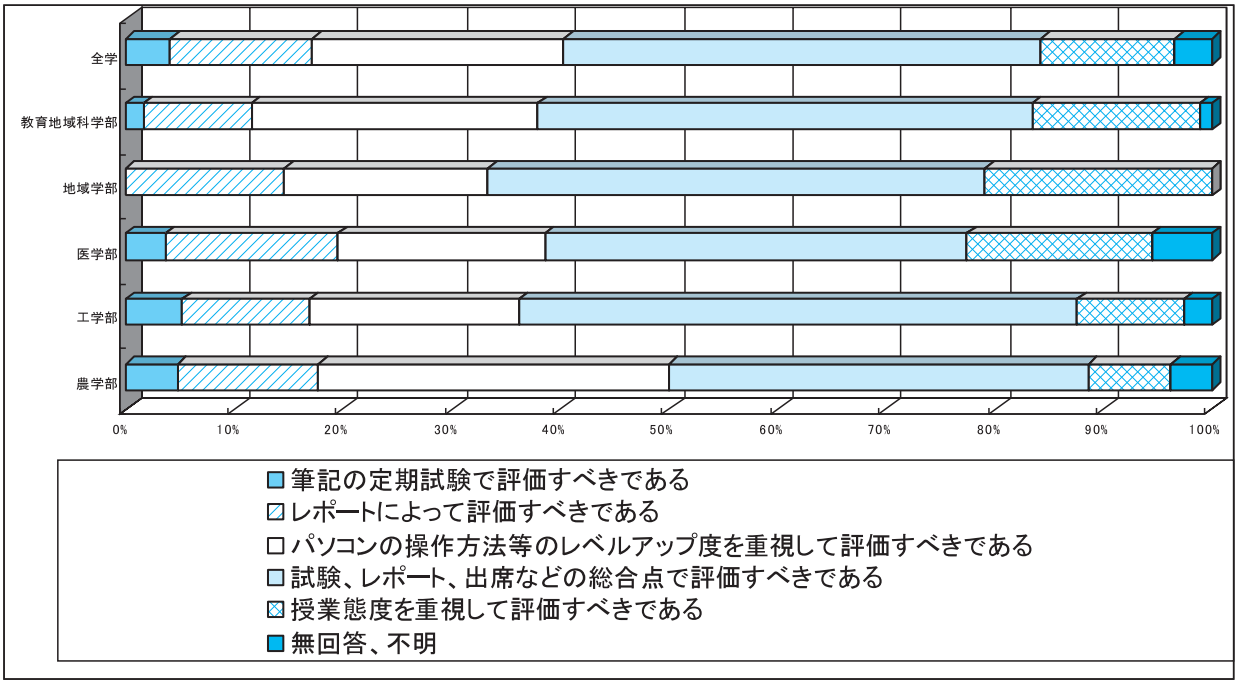
「筆記の定期試験」と「レポート」より「試験、レポートなどの総合点」のほうが高率である。「筆記の定期試験」は特に低率である。

１つの方法より多数の方法での評価を希望するのは予想通りである。例えば試験で失敗してもレポートで挽回ができる可能性があるからである。１つの方法となれば選ぶのはレポートであろう。

「態度を重視して評価」という設問は、他の項目（「筆記の定期試験」と「レポート」）に加えてということか、「態度だけ」から評価するのでは意味が異なる。この設問は曖昧さを含んでいる。

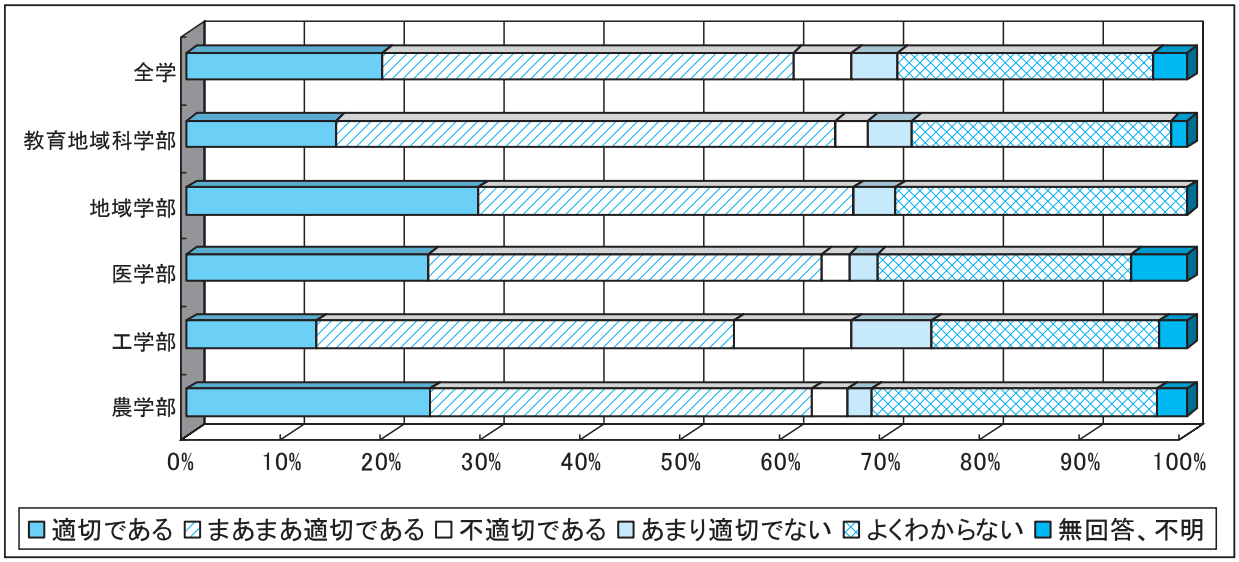
「レベルアップ度を重視して」の設問は、他の項目と組み合わせてと単独だけとでは意味が異なる。この設問も曖昧さを含んでいる。とにかく、この項目に対する回答率は高い。

男女別によると「態度を重視して評価」の項目だけに違いが見られる。（女 14.9%、男 10.0%）



図Ⅰ―２―１―９　成績の評価方法についてどう思いますか。

Q22-8 は教員の「成績のつけ方」をどのように受け止めているかを調査したものである。「適切」は 16 年度にそれまでに比べて大幅に増加している。「よく分からない」は 16 年度に減少している。60%前後の在校生が「適切」「まあまあ適切」と高く評価し、「不適切」「あまり適切でない」は全回答者の１割程度である。男女別によると男性は満足が少なく不満が多い、「適切」「まあまあ適切」の総計は男 57.6%、女 63.9%であり、「不適切」「あまり適切でない」の総計は男 14.7%に対して女 5.9%である。学部別では、「適切」の合計は工学部が少し低い、工学部の「不適切」の合計 19.7%とぬきんでて高い。

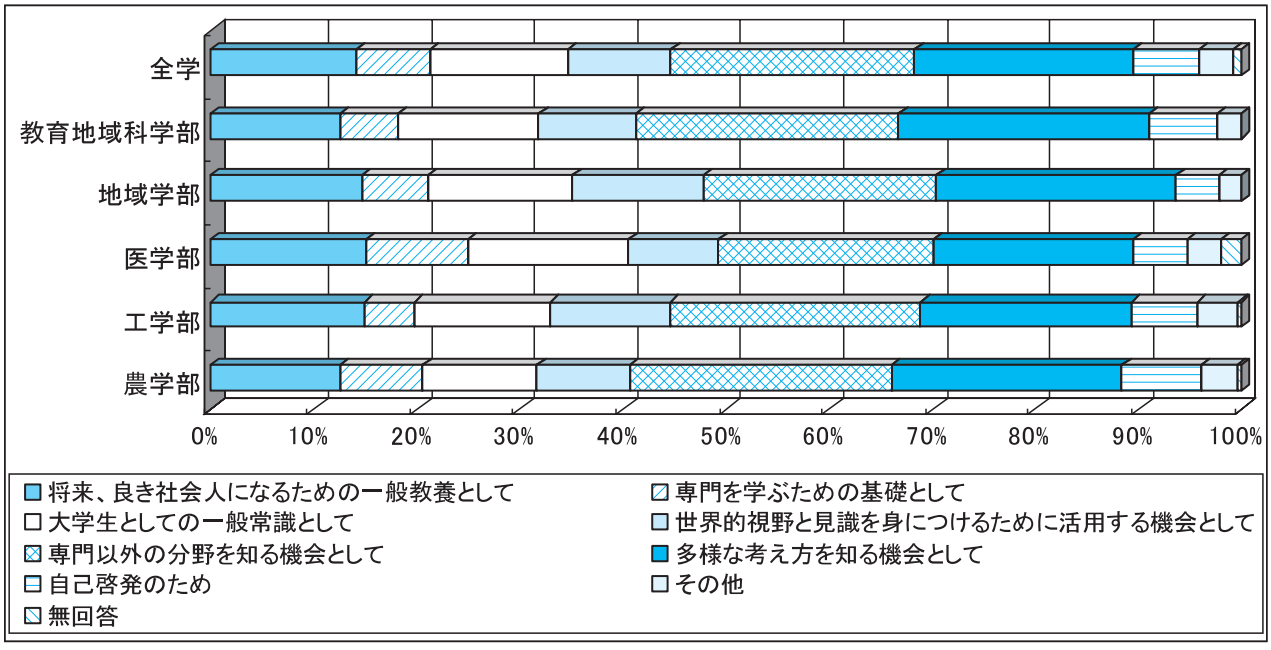


図Ⅰ―２―１―10　教員の成績のつけ方についてどう思いますか。

３．主題科目について

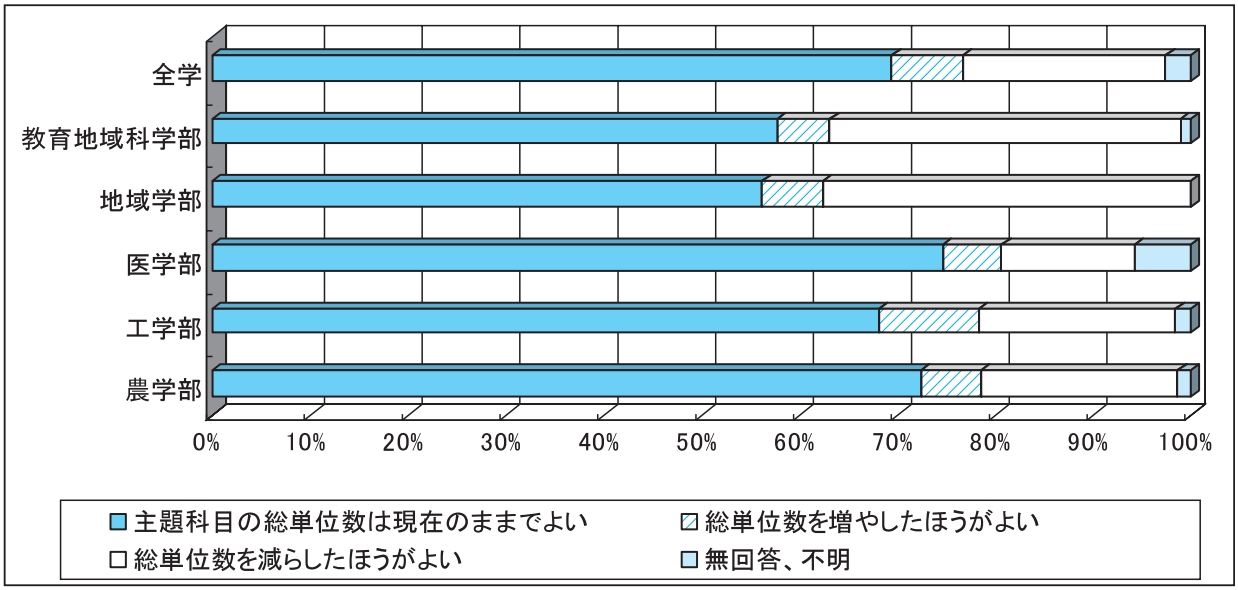
主題科目は、現在、テーマ（ないしは科目形式）ごとに、主題Ａから主題Ｆに分かれている。当科目がカヴァーする範囲・分野は相当に広く多岐にわたる。従って、主題科目を「教育科目」として一括りにすることには無理がある。しかし、個別の科目に一つ一つあたることもできないので、今回は、大まかな質問による、大まかな評価に満足せざるを得ない。

科目全体としての評価として、当「主題科目」を受講する学生がどう位置づけているかを、複数回答を許して問うた(Q23-1)。それによると、「専門以外の分野を知る機会として」と「多様な考え方を知る機会として」が、それぞれ、63.7%と 57.1%と最も多く、つぎに多い回答は「将来、良き社会人になるための一般教養として」(31.8%)、「大学生としての一般常識として」(36.0%)であった。こうしてみると、将来のこととしてより、現時点で、専門以外の多様な考え方を主題科目に求めていると言えよう。



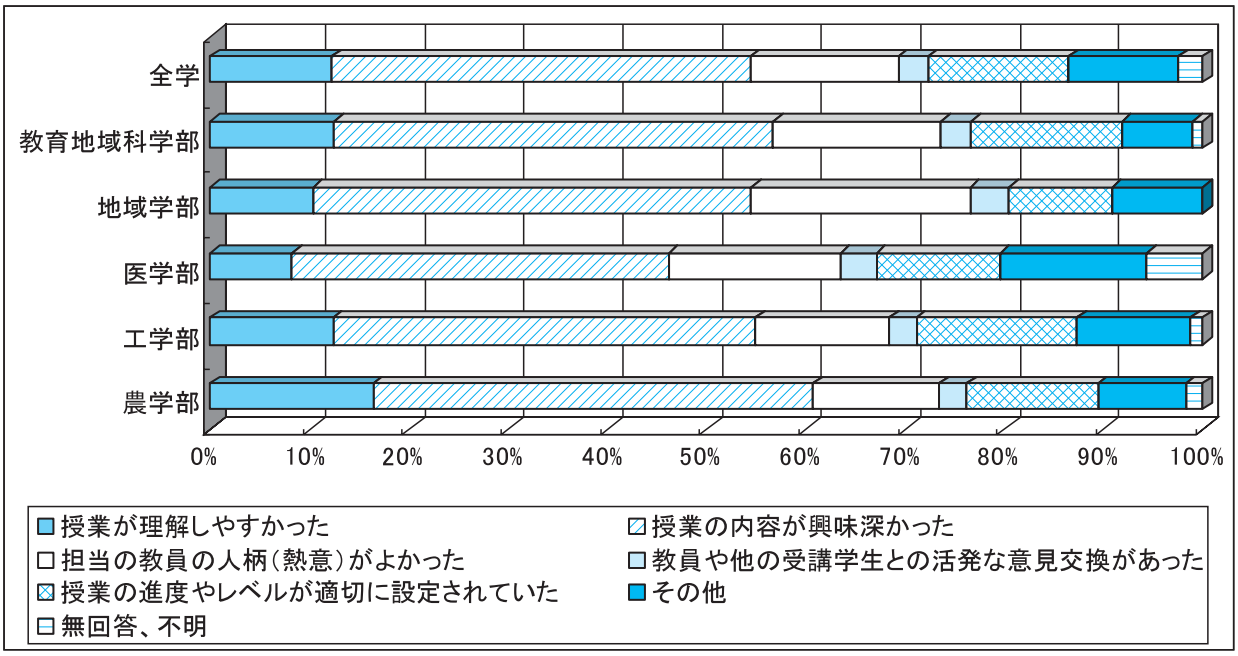
図Ⅰ―２―１―11　あなたは主題科目をどのように位置づけていますか。

これと関連して、学生が履修すべき主題科目の単位数をどう考えているか、を問うた（Q 23-5）。それによると、全学部平均して 70％の学生が「現在のままでよい」と答えている。



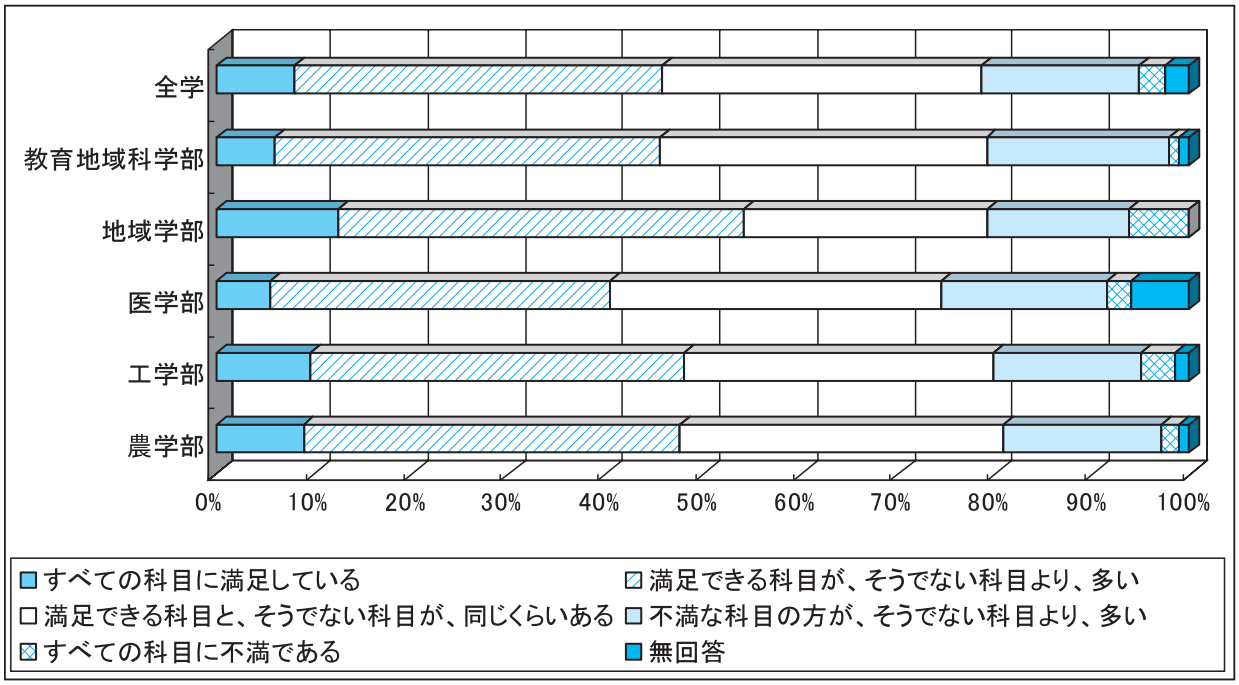
図Ⅰ―２―１―12　あなたが履修すべき主題科目の総単位数についてどう思いますか。

つぎに、主題科目にどれほど満足しているか、を問うた（Q 23-６, Q 23-７）。まず、満足の「質」について、１から６項目に分けて、複数回答を許して問うた（Q 23-６）。最も高い率を示したのは「授業の内容が興味深かった」の 65.5％（全学部平均）であり、それに、「担当の教員の人柄（熱意）がよかった」（23.2％）、「授業の進度やレベルが適切に設定されていた」（22.0％）、「授業が理解しやすかった」（19.0％）と続く。なによりも学生は、授業内容が自分の関心に合致するとき、最大の満足を感じている、と言えよう。



図Ⅰ―２―１―13　主題科目で、あなたが満足した点はどういう点ですか。

さらに、満足の度合いを、１から５までのランクにより、量的に問うたのが Q23-7 である。すると、「満足できる科目が、そうでない科目より多い」が 37.7％と最も高く、ついで「満足できる科目と、そうでない科目が同じくらいある」(32.8％)、「不満な科目の方が、そうでない科目より、多い」(16.3％)と続く。「すべての科目に満足」(8.0％)と、満足科目が不満科目より多いと答えた者を合わせると、全学部で 45％を超えるので、多くの学生が、半数以上の科目に満足している、と言える。しかし、３割を超える学生は、満足科目と不満科目は半々であると答えた。学生が満足に思う科目数を、もっと増やす努力は続ける必要があろう。



図Ⅰ―２―１―14　全般的に見て、主題科目に対するあなたの満足度は以下のどれですか。

４．実践科目の英語科目について

まず、英語科目の分析と考察から始める。在校生ではQ24、卒業生はQ22の７問である。

SQ１は「学ぶ意義」を問うものである。複数回答可である（表Ⅰ―２―１―１参照）。英語科目はすべての個別統計において、「学ぶ意義」を圧倒的に獲得している。特に、「読解力の向上」と「会話力の向上」はどの統計においても１・２位を競っている。この比率は紛れもなく今日における「英語」の位置づけを投影している。英語はインターネットの普及、米国の超大国化等に伴う「国際語」としての地歩を築いている。その英語は、「読解力」を向上させることでは在校生も卒業生も同じである。両者はわずか 1.0％の差でしかない 60 数％を頂戴している。しかし、英語の「国際化」は卒業生と在学生との近々数年に過ぎない年月の相違でありながら、にもかかわらずいくつかの選択肢で変化を及ぼしている。

表Ⅰ―２―１―１　SQ１の卒業生と在校生の回答結果

選択肢		卒業生	在校生
1	英語の読解力の向上	63.7%	64.7%
2	英語の会話力の向上	35.4%	56.4%
3	専門科目を学ぶ基礎	26.9%	18.7%
4	英米圏の文化・社会・歴史を学ぶ	11.9%	17.1%
5	就職活動・大学院進学に生かす	11.0%	17.4%
6	英語を修得して国際社会に生きる	13.0%	23.7%
7	授業を通して人間的に成長する	7.2%	8.1%
8	教員の人間性に触れる	4.3%	5.3%
9	この科目を学ぶ意義はない	6.8%	5.2%
0	よくわからない	9.4%	6.4%
	無回答	0.8%	1.4%

最大の特色は「会話力向上」である。卒業生の 35.4%に対して、在学生は 56.4%へ急上昇する。また、「国際社会に生きる」、即ち国際競争力をつけるスキルとしての英語は同じく 13.0%から 23.7%へ倍増している。これに「文化・社会・歴史」と「就職・大学院」も卒業生から在学生へと比率が上昇する。これら４選択肢は英語のグローバル化の趨勢と比例したものである。若者気質を考える上で重要な位相である。

SQ２は英語授業で感じたことを問う複数回答可の設問である。在校生において、全体としては英語授業に肯定的な感じを懐いていることは好ましい結果である。肯定的な選択肢７つのうちで、「授業の適切なレベル」「外国語を学ぶ楽しさ」「授業のわかりやすさ」が上位であり、残りの肯定的回答を総計すると、111.4%であり、百%に換算すると 71.8%の圧倒的なシェアである。在校生は英語の授業に快感を持っていると言える。しかし、快感の陰に潜む消極的なフィーリングを学生がしている事実をやはり押さえておきたいと思う。図表提示はしないが、入学年度別の統計に憂慮すべき数字が発見できる。

選択肢 7/8/9 は、「教員の無駄話の多さ」「教室の騒がしさ」「感じることがなく不満」を回答させる「不満」のトリオである。16 年度は総数 615 名中の 43 名、15 年度 383 の 57、14 年度 526 の 131、13 年度 687 の 129 である。それに 12・11 年度に 54 名いる。回答した在校生の中に 414 名もいる計算になる。確かに、配分比率では 17.2%（百%換算）の少数であるとしても、これは高い数値であると言えるのではないか。SQ１での英語の意義の高さを背景に考えると反省材料ではなかろうか。ただし、卒業生と在校生との比較においては上記の「不満」組は 30.3%→17.2%（百%換算）へ大幅に低下する。とりわけ「感じることがなく不満」は卒業生では全選択肢の最高値を得る汚名を頂戴していたが、在校生では５位にまで「後退」する。これは英語担当教員の努力やカリキュラム及び制度改正によるものであろう。

SQ３は文字通り、英語授業の「満足度」を直接に問う設問である（表Ⅰ―２―１―２参照）。

表Ⅰ―２―１―２　SQ３の入学年度別の回答結果(10年度以前は略)

	非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満	無回答	合計
16年度	11.2%	38.9%	32.8%	14.0%	2.7%	0.3%	100.0%
15年度	3.3%	29.3%	39.8%	18.3%	8.9%	0.4%	100.0%
14年度	4.1%	29.5%	39.8%	19.0%	6.8%	0.8%	100.0%
13年度	4.8%	32.4%	38.7%	15.6%	7.8%	0.9%	100.0%
12年度	2.9%	20.2%	46.2%	17.3%	5.8%	7.7%	100.0%
11年度	0.0%	19.5%	46.3%	19.5%	14.6%	0.0%	100.0%
合計	5.4%	31.4%	38.5%	16.6%	6.7%	1.3%	100.0%

「不満足」はSQ２の「不満」組に相応するようにかなりの比率を示している。16年度16.7%、15年度27.2%、14年度25.8%、13年度23.4%である。「どちらともいえない」という消極的な回答が32～46%あり、「不満」と合計するとゆうに過半数を越える。学部別統計においても、医学部は39.7%の最高率であり、最低率の工学部でも32.2%であった。後述する初修外国語のSQ３の比率と対比すると、英語の方に高い不満度が認められることは、英語の意義と必要が叫喚されているだけに、学生の厳しい視線を浴びているのだと解釈できる。逆に言うと、初修外国語はそもそも意義と必要が低下する分だけ、学生の評価が「温情的」であるためにすぎないのかもしれない。なお、男女別の統計では、満足する割合が32.1%対42.2%で女性が多いことを付言しておきたい。また、SQ２に呼応するように、在校生における「不満」分析は卒業生との対比においては相対化される。全選択肢において卒業生の「満足と不満」の各比率は、在校生にあっては「改善」されている。従って、SQ３に関しては「改善されつつあるが、不満度は無視できないほど比較的に高率である」と総合的に要約することができる。

SQ４は英語の必須単位数を問うものである。男女別、年度別、学部別、在校生と卒業生別、どれも「６単位維持」がトップで単独過半数を得ている。「もっと増やす」を加えると優に70%を越える高率である。英語の必要性が学生の隅々にまで浸透していると断定できる。なお、在校生と卒業生とのアンケート結果だけからの判断が許されるならば、英語の必須単位数はほぼ定点に達したと結論づけることができる。在校生の「現行維持」が対卒業生の比で10%余上昇し、逆に「もっと増やす」の選択肢が５%減少している事実は、在学する学生が現行の単位数で充足していることを間接的に示していると言える。

SQ５とSQ６は学生の「シラバス活用」と教員の「シラバス忠実度（実行度)」を学生に問うたものである。前者の設問分析は第１章第２節ⅡのQ11で外国語科目を併せて分析したので、それを参照願いたい。ここではその分析には載せることができなかった年度別の回答を紹介しておく（表Ⅰ―２―１―３参照)。

表Ⅰ―２―１―３　SQ５の入学年度別の回答結果(10年度以前は略)

	大いに利用した	まあまあ利用した	あまり利用しなかった	全く利用しなかった	シラバスはなかった	無回答	合計
16年度	4.9%	10.9%	30.7%	36.8%	15.8%	0.9%	100.0%
15年度	3.7%	15.9%	27.6%	48.4%	4.1%	0.4%	100.0%
14年度	5.7%	16.5%	27.9%	41.5%	7.3%	1.1%	100.0%
13年度	3.7%	18.1%	33.9%	39.1%	4.3%	0.9%	100.0%
12年度	2.9%	14.4%	25.0%	39.4%	9.6%	8.7%	100.0%
11年度	7.3%	2.4%	31.7%	34.1%	24.4%	0.0%	100.0%
合計	4.4%	15.1%	30.2%	40.3%	8.4%	1.5%	100.0%

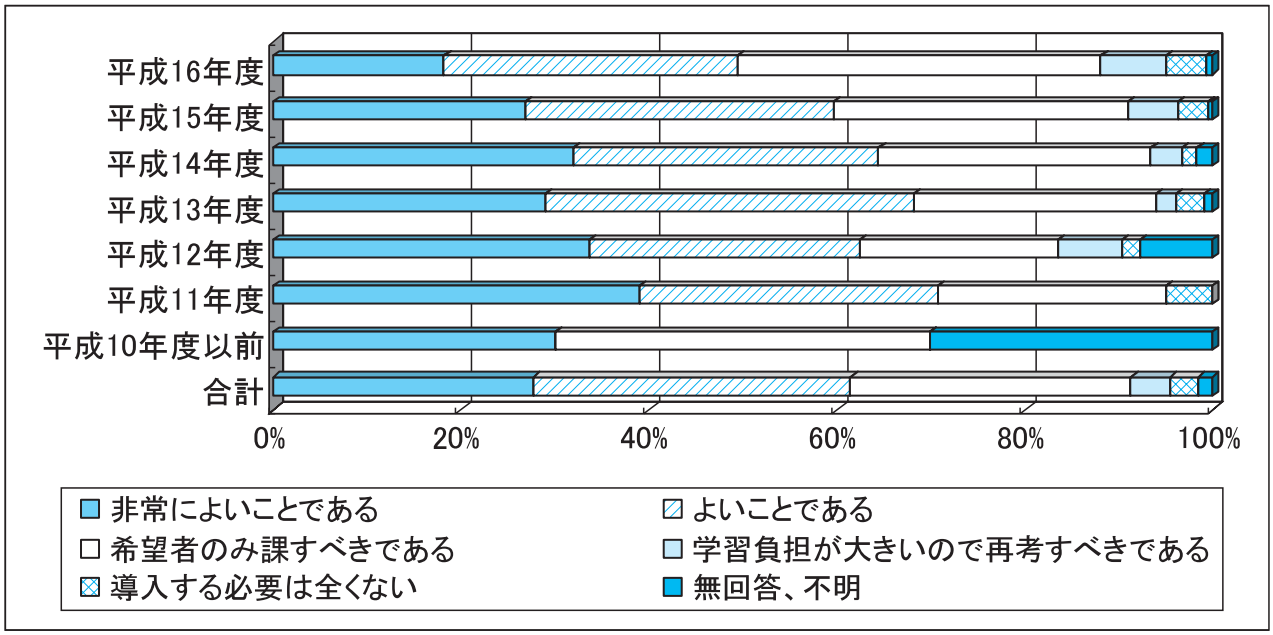
シラバスの充実と歩調をあわせて、学生の活用は年々上昇するものと予測したが、結果は必ずしもそうではない。16年度入学の学生と、シラバスを２年以上経験している15年度以前の学生との対比に注目すると、確かに「全く利用しなかった」は減少したとも言えるが、「まあまあ利用した」「あまり利用しなかった」を考慮すると入学年度が新しくなるにつれシラバス浸透度が上昇しているとの分析は全然できない。

なお、16年度学生に「シラバスがなかった」が15.8%に及んでいる。これは意味を解しかねる。16年度は分厚い冊子によるシラバスが作成されている。にもかかわらず、15年度、14年度と比較して２倍～３倍の高さであることが解しかねる。もしかして教員（非常勤講師を含めて）がシラバスを提出していないのであろうか。これは関係当局が精査する必要がある。

次のSQ６である「シラバス忠実度」の回答分布はまちまちである。在学生であれ卒業生であれ、また、年度別であれ学部別であれ、SQ５におけるシラバス活用度の低さが、教員のシラバス忠実度（実行度）に対する学生の反応と相応しているように思われる。

シラバスの履行に関して希望的観測を述べると、卒業生と在学生を比較した場合、シラバスの啓蒙活動（活用認知）が功を奏すれば、授業の満足度も比例して上昇すると推察されることである。これは選択肢「シラバス通りでよかった」が卒業生の回答比率20.4%を倍増する36.0%の勢いで在学生は回答していること、「シラバス通りであるが授業は不満」が卒業生対在学生では21.5%→13.7%へと「改善」されていること、以上の２つに「希望」が示唆されている。

SQ10は英語科目にのみ科した項目である。TOEICの導入を問うものであり、図Ⅰ－２－１－15と表Ⅰ－２－１－４を参照していただきたい。２つの図表が十分に実相を語っている。次のように概括することができる。TOEICはまさしく１年次生を「直撃」する。直撃を過半数の学生が好意的に受け止めている。しかし、奇妙なことも浮かび上がる。TOEICが教育制度化されていなかった14年度以前の学生と対比すると、15・16年度生の「導入賛成」派は劣るのである。それに反比例して、「希望者にのみ」「導入再考」「導入反対」が上昇している。15・16年度生の導入賛成は59.7%と49.5%であり、13・14年度生のそれは62.5%と64.5%である。「希望者」「再考」「導入反対」は同じく、39.9%と49.9%に対して、30.9%と33.9%である。この奇妙な数値相関は次のように分析できる。学生は重要な英語の資格取得を前向きによく納得している。しかし、制度が未導入であった学生はそれを憧憬するが、実際に資格試験を受ける学生はその学習負担の重みに若干「あえいでいる」ことが数値の開きになっていると忖度される。



図Ⅰ―２―１―15　SQ10 の在学生の入学年度別の回答結果

これを「奇妙」と言えるならば、もう一つの「奇妙」がある。それは卒業生の回答結果である（表Ⅰ―２―１―４参照）。卒業生における資格試験導入はもっと高い比率になると予想していた。卒業生の中には大学院生を含め、英語が必要である認識を体験中であろうと推量し、在学時には導入されていなかった制度を希求する気持ちが強いとみていたが、「賛成」は合計で 66.9%であり、在校生の 61.7%から飛躍した高みにあるわけではない。無論、反対の表現も可能である。５個の選択肢を設けて、その内の２肢だけで 66.9%は統計学上「圧倒的比率」であるとの考察である。特に選択肢３の「希望者のみ」の 28.1%を導入賛成に単純加算させると 95%になる。逆に「制度による強制はよくない」と解釈すれば、４人に１人以上が制度の是非を留保したことになると解釈できる。「奇妙」とはこのような文脈で使用している。

なお、学部別の統計において、同じ母体である地域学部と教育地域科学部にほとんど正反対とも言える結果がでている。「導入賛成」率と「希望者・再考・導入反対」率で大別すると、新学部が 30.6%対 69.4%、つまり、鳥取大学の学部で唯一「賛成」が極端に少ない。これに対して、旧組織の教育地域科学部は 63.0%対 37.0%である。これは他学部と相似である。この第３の「奇妙」の分析は控えるが、新設の学部としては例外的な回答結果を吟味することは無益ではないと考える。

表Ⅰ―２―１―４　　SQ10 の卒業生と在校生の回答結果

選択肢		卒業生	在校生
1	非常によいことである	37.4%	27.6%
2	よいことである	29.5%	34.1%
3	希望者にのみ課すべきである	28.1%	29.8%
4	学習負担が大きいので再考すべき	1.7%	4.1%
5	導入する必要は全くない	2.1%	2.9%
	無回答	1.2%	1.5%

５．実践科目の初修外国語について

初修外国語はＱ25 で在学生に、Ｑ23 で卒業生に問うた７問である。初修外国語の分析と考察に際しても、英語同様に以下の個別統計を援用する。

１　在校生の学部別統計
２　在校生の入学年度別統計
３　在校生の男女別統計
４　卒業生の全体統計

SQ１は「学ぶ意義」を問う設問である（表Ⅰ―２―１―５参照）。

表Ⅰ―２―１―５　SQ１の卒業生と在校生の回答結果

選択肢		卒業生	在校生
1	当該外国語の読解力の向上	32.4%	48.9%
2	当該外国語の会話力の向上	19.0%	36.8%
3	専門科目を学ぶ基礎	11.3%	9.7%
4	外国語の国の文化・社会・歴史を学ぶ	32.3%	38.0%
5	就職活動・大学院進学に生かす	3.0%	6.5%
6	外国語を修得して国際社会に生きる	8.6%	16.8%
7	授業を通して人間的に成長する	11.0%	8.8%
8	教員の人間性に触れる	3.7%	4.0%
9	この科目を学ぶ意義はない	16.0%	6.4%
0	よくわからない	16.8%	14.2%
	無回答	1.4%	2.1%

在校生においては選択肢９の「学ぶ意義はない」の回答率は予想外に低かった。わずか6.4％である。複数回答可であるから百％に換算するとわずか 3.3％である。百人に３人である。鳥取大学という高等教育機関に在籍する学生の賢明に敬意を表するものである。無論、「意義あり」とする諸選択肢が正規分布しているわけではない。「読解力の向上」という語学教育の不易の理念は初修外国語にもそのまま適用される。回答率 48.9％の最高率であった。しかし、実践力がものをいう英語と違って、選択肢「外国の文化・社会・歴史を学ぶ」が 38.0％の２位になることは初修外国語の受けてたつ宿命を今次の調査でも立証したと言えるであろう。それは取りもなおさず、相反する選択肢「専門科目」や「就職・大学院進学」の「下請け」的な使命はあまり求められていないことに通じる。両選択肢を合わせても 16.2％の低率である。これは入学年度別、学部別、性別の如何にかかわらず低い。

卒業生の統計を見てみよう。全体的には在校生同様に初修外国語を学ぶ意義をそれぞれの選択肢に分散させながらも認めている。しかし、厳しい批判を読み取ることもできるだろう。言うまでもなく選択肢９「学ぶ意義なし」が 16.0％、選択肢 10「よくわからない」が 16.8％のことである。百％換算すると、それぞれ 10.3％と 10.8％であるが、これは無視してよい数字ではない。在校生との２つの単純合計の比較では、21.1％対 10.7％（百％換算）なので卒業生が２倍高い。こういうことではなかろうか。社会人や大学院生になって経験することは初修外国語がほとんど活用されない現況があるということ。それがアン

ケート時の現在時点から過去時点を振り返ったときに自分の脳裏をよぎり、その結果、21.1%の数字としてはじき出されたのではあるまいか。仮にそうだとすると、－ なにしろ、大多数のアンケート回答は初修外国語に意義を認めている －　初修外国語の担当教員としては難題を提示されたことになる。なぜなら、日本の現況が英語以外の外国語に秋波を送っていないとき（中国語は例外であろう）、この難題は担当教員自身のアカウンタビリティを越える次元である。

それでもなお、初修外国語の意義の比率を高める努力を担当教員（というよりも、これは大学全体の当為である）がする場合、その意義の最大の比率を得ている「読解力」と「会話力」（在校生で計 85.7%、卒業生で 51.4%）は鳥取大学の現行カリキュラムにおいては少ない履修単位数とネイティブ講師雇用の困難（定員上、地理上、非常勤枠制限上）から非常にブレーキがかかるのが偽らざる現実であり、難題の解消は容易ではない。この高度の方程式を解くための模索を初修外国語の教員は、それでもなお、試みていかねばならぬ。

SQ２は初修外国語で感じたことを問う複数回答可の設問である（表Ⅰ―２―１―６参照）。

表Ⅰ―２―１―６　　SQ２の在校生の学部別の回答結果（教育学部は略）

	適正なレベル	わかりやすさ	学ぶ楽しさ	大学らしい	教員とのやりとり	教員の熱意	教員の無駄話	騒がしい	不満	わからない	無回答	合計
A	3.8%	2.8%	4.0%	3.5%	0.7%	1.9%	0.5%	0.1%	0.8%	2.1%	0.1%	20.3%
B	1.2%	0.8%	1.3%	0.9%	0.3%	0.6%	0.1%	0.2%	0.1%	0.4%	0.1%	6.1%
C	9.1%	7.0%	9.4%	7.3%	3.9%	5.6%	1.3%	0.4%	2.2%	4.5%	1.3%	51.9%
D	10.6%	7.4%	8.6%	7.5%	2.3%	2.9%	1.7%	1.1%	4.2%	6.2%	0.4%	53.0%
E	8.0%	5.9%	9.9%	6.0%	1.4%	2.1%	0.9%	0.4%	2.0%	4.2%	0.3%	41.1%
計	32.8%	23.9%	33.4%	25.3%	8.6%	13.1%	4.5%	2.2%	9.2%	17.4%	2.2%	172.6%

A：教育地域科学部　B：地域学部　C：医学部　D：工学部　E：農学部

表Ⅰ―２―１―６は学部別であるが、男女別でも入学年度別でも結果に大差はない。緑色のネガティブな回答は合計で15.8%である。複数回答であり、単純な百%換算では9.2%である。再び英語科目と対比させると、英語科目は 26.7%（百%換算で 17.2%）であるから、初修外国語は大健闘していると言える。これは初修外国語不要論の声が聞こえる現実を前にして、「危機意識」が担当教員をして熱心に教育していることを統計的に立証するものであろう。

このことは卒業生のアンケート結果でも追認される。SQ１の「学ぶ意義」に疑義を呈する一方で、在校生は緑色の「不満」のはけ口を、英語科目の 40.3%（百%換算で 30.3%）に対して、初修外国語には 22.5%（百%換算で 15.3%）の半減で応えている。結局、SQ１と２から帰納できることは、初修外国語を学ぶ意義に「？」マークを懐きながらも、担当教員の授業そのものにはかなりの誠意を学生は実感しているということである。

SQ３は「授業の満足度」である。英語科目の同項目でわずかばかり触れておいた。英語科目同様に「満足度」をずばり尋ねる設問はやはりシビアな回答がこだましてくる。図表は紙幅の関係で割愛するが、在校生の男女別では「非常に満足」「満足」が合計すると 41.8%対 53.6%で女性が高い。学部別では工学部の 40.5%が最低で、最高は地域学部の 59.1%であった。在校生全体では 47.3%である。卒業生においては 39.0%で、4 割に届か

ない。

以上の数値の意味するところは、確かに選択肢「不満」「非常に不満」の合計（在校生では 15.6%）をはるかに凌駕しているけれど、選択肢「どちらともいえない」の留保組（在校生では 34.8%）の態度如何では「不満度」がほぼ同値になるということである。

SQ１と２で示した「満足度」の高比率と SQ３の単刀直入の「満足度」設問に対する中程度の比率はどのような位相関係になるのであろうか。初修外国語のみならず、相似の数値を示した英語科目も視座に納めると、「乖離」とも言える「満足度」の温度差を検討する課題を教員につきつけている。

SQ４は初修外国語の必須単位数を問うものである。分析する前の「予断」としては、この設問は初修外国語にはネガティブな結果が出るであろうが、それはどのくらいの比率を刻むのかであった。しかし、SQ１～３が期待を上回るポジティブな回答であったことが、そのまま SQ４の「予断」が外れ、かなりにポジティブな成果を得ることに通底している。これは男女別、年度別、学部別、在校生と卒業生別、どれを取っても大差はなかった。選択肢１の「現行維持」と選択肢２の「現行より増加」のポジティブ度は、例えば男女別では 68.8%対 81.3%で、女性が断然高いけれど、男女を問わず初修外国語の必須単位数をポジティブに見ていることには変わりがない。学部別の統計においても、教育地域科学部、地域学部、医学部、工学部、農学部の順で、先のポジティブ度を紹介すると、74.7%、83.6%、75.2%、72.7%、75.2%である。これは高率そのものである。医学部が平成 17 年度から４単位→２単位、工学部の一部が履修単位の必須撤廃を実施するが、学生の意向とは合致していないことを当該学部は今一度検討してもよいのではあるまいか。

この高率を敷衍しながらも、必須単位数における初修外国語の手放しで喜べない現実にも触れるために、表Ⅰ―２―１―７の入学年度別を検討してみよう。

確かに、ポジティブ度が全年度において確認される。しかし、入学年度が下がるにつれて、つまり、２年間の初修外国語の履修が終了して、初修外国語から離れていく時間が経過するとともに、ポジティブ度は次第に低下する。現在履修中の 16 年度生の 78.5%が、履修から離れて一年半になる 12 年度生では 65.3%に下降する。

表Ⅰ―２―１―７　　SQ４の在校生の入学年度別の回答結果(10 年度以前は略)

	現行のまま	現行より増やす	現行より減らす	学生の自由選択	履修の必要なし	無回答	合計
16 年度	73.3%	5.2%	4.9%	11.6%	2.7%	2.4%	100.0%
15 年度	69.9%	6.9%	6.1%	13.0%	3.7%	0.4%	100.0%
14 年度	68.8%	6.2%	8.9%	10.6%	3.5%	1.9%	100.0%
13 年度	66.7%	7.3%	7.1%	12.7%	4.5%	1.5%	100.0%
12 年度	61.5%	3.8%	6.7%	11.5%	8.7%	7.7%	100.0%
11 年度	61.0%	7.3%	7.3%	14.6%	7.3%	2.4%	100.0%
合計	68.4%	6.3%	6.9%	12.2%	4.1%	2.2%	100.0%

依然としてポジティブ度は高率であるにしても、「初修外国語の魅力」を長期間に保つことがいかに難しいことであるかが思い知らされる。「入学２ヵ年の間ぐらいは初修外国語を勉強してみようか」という思いが高学年になるに従い継続できなくなるのが現実である。そう言えば、卒業生のポジティブ度は 61.4%にまで一段と低下している。

SQ５とSQ６は学生の「シラバス利用」と教員の「シラバス忠実度」を問うものである。後者のシラバス忠実度においては、英語科目の同項目で分析したことが初修外国語に過不足なくあてはまる。次のようにごく簡潔に復習するだけでよいであろう。シラバスを利用する学生は予想外に多くはなく、教員がシラバスに沿って当初の計画通りに授業を進行させようと、計画から外れようと、学生にとってはそれがために「よい授業」と「悪い授業」を区分する判断基準にはしていない。

６．英語科目の授業内容の評価と教員に対する評価

授業内容の評価と教員に対する評価を問うたのはSQ7/8/9の３項目である。SQ７はネイティブ・スピーカーの授業評価である（表Ⅰ―２―１―８参照）。

表Ⅰ―２―１―８　SQ７の卒業生と在学生の回答結果

選択肢		卒業生	在校生
1	もっと増やす方がよい	57.7%	43.2%
2	現行のままでよい	27.0%	40.9%
3	もっと減らす方がよい	0.8%	1.9%
4	不要である	1.8%	3.5%
5	受講の時はネイティブの授業はなかった	12.0%	8.8%
	無回答	0.7%	1.7%

在校生は男女別、学部別、年度別を問わず、現今の英語環境から考えると、実に常識的な回答を示している。ネイティブ授業を歓迎する姿勢は学生気質とぴったり一致するであろう。常識的な回答の確認が卒業生との比較においてもできる。卒業生では「増加」と「現状維持」のネイティブ授業を前向きにとらえる回答率は84.7%であり、在校生の84.1%と同値であると言える。さらに、両者の比較から、もう一つの前向きな回答結果が出ている。それは「増加」と「現行維持」の割合の逆転である。卒業生では「増加」を望む回答が57.7%の単独過半数である。このことは現在実施されているCALL授業やTOEIC導入がなかった卒業生の期待を現在の英語カリキュラムが実現させているということである。学生のネイティブ授業の期待に英語科目が応えているという輝かしい成果だと分析できる。

SQ８とSQ９は「成績評価」を問う設問である。ここでは特色が出ている在校生の年度別統計を分析することにする。

表Ⅰ―２―１―９　SQ８の在学生の入学年度別の回答結果(10年度以前は略)

	筆記と口頭の定期試験のみ	筆記の定期試験のみ	口頭の定期試験のみ	毎回の授業の評価	レポート評価	無回答	合計
16年度	38.6%	4.0%	10.9%	23.1%	22.8%	0.6%	100.0%
15年度	54.1%	8.1%	8.1%	19.9%	8.9%	0.8%	100.0%
14年度	39.0%	32.5%	3.0%	13.8%	9.8%	1.9%	100.0%
13年度	44.3%	19.0%	2.8%	17.3%	14.3%	2.4%	100.0%
12年度	45.2%	17.3%	4.8%	15.4%	7.7%	9.6%	100.0%
11年度	51.2%	17.1%	4.9%	7.3%	17.1%	2.4%	100.0%
合計	43.5%	17.1%	5.6%	17.7%	13.8%	2.3%	100.0%

表Ⅰ―２―１―９の年度別に限らず、在校生にも卒業生においても言えることは、英語は実践的な「演習」科目であるので、「毎回の授業」による評価形態を望む学生が高いと予想していた。しかし、意外に「定期試験」による「一発勝負」を望む結果がでた。緑色の合計は66.2%の高率である。また、「レポート」による評価も「毎回の授業」と拮抗している。13.8%対17.7%である。これは15年度からの「コミュニケーション英語」の導入によって、ネイティブ授業では「課題発表」「課題提出」というレポート形式が多いことに関連しているのかもしれない。その裏づけとして、表Ⅰ－２－１－９にある入学年度別の統計が示唆している。２年次になると日本人講師による授業を履修する。つまり、15年度以前の学生における「定期試験」の高比率（15年度生では70.3%）と「毎回授業」「レポート」の低比率（15年度生では合計28.8%）は日本人講師による所謂「読解力」の養成をする授業の増大が反映している。一方、ネイティブ授業だけを受講する16年度学生の場合は、「定期試験」が53.5%となり、15年度生との比では17ポイントの低下である。その低下の分が当然に「毎回授業」の23.1%、「レポート」の22.8%、合計45.9%の上昇によってそっくり吸収されている。16年度生の「レポート」派の22.8%は過去最高を記録しており、これは旧制度で学ぶ14年度生の2倍、12年度生の３倍である。「一発勝負」を望む学生が多数派であることには全年度において変わりがないが、ネイティブ授業の導入が学生の意識にボディーブローのような作用を与えていることを示している。

SQ９は教員の「成績のつけ方」をどのように受け止めているかを調査したものである。男女別、学部別、在校生と卒業生別において顕著な違いは見られない。70%前後の在校生、卒業生が「適切」「まあまあ適切」と高く評価し、「不適切」「まあまあ不適切」は全回答者の１割程度である。過去も現在も英語教員の正当なつけ方を立証している喜ばしい統計である。ちなみに、在校生の男女別による「適切」「まあまあ適切」の総計は男65.7%に対して女74.0%である。女性は４人に３人が「満足」している。

７．初修外国語の授業内容の評価と教員に対する評価

授業内容の評価と教員に対する評価を問うたのはSQ7/8/9の３項目である。SQ７はネイティブ・スピーカーの授業評価である。「ネイティブ授業」はアンケート以前の結果予想と実際の回答に一致が見られる項目である。誰がどう考えてもネイティブ授業を歓迎するのは時代の趨勢であり、今日、小学校にまで「特区」として英語授業が導入されている時代、ネイティブ授業の趨勢は留まるところを知らない。問題はむしろ、英語以外の外国語にまでネイティブ授業の奔流が認められるかということである。なぜなら、SQ１で問うた「初修外国語を学ぶ意義」のアンケートにおいて、同じ外国語でも英語とは異なる結果が出ているからである。それは「読解力の向上」が48.9%の最高率であり、続いて、「外国の文化・社会・歴史を学ぶ」が38.0%の２位であることに表れていた。即ち、この２つの意義は「ネイティブ授業」でなくとも「日本人による授業」で十分に獲得できることである。無論、そのためには日本人講師が「外国」を知悉していなければならないが、ならばネイティブ・スピーカーが「自国」を知悉しているかどうかと問えば、互いに相殺されるであろう。

いずれにせよ、ネイティブ授業でなくとも獲得できる意義が多数を占める初修外国語において、それでもなおネイティブ授業の希求度がどの程度なのかを調査することは有益な指針を与える。図表提示しないが、在校生はどの学部でもネイティブ授業を歓迎する。その回答率は、英語の81.4%にはかなわないが、65.4%の高率である。初修外国語も時代の趨勢を反映していることになる。この点において実に良識的、常識的な姿である。この事

実は卒業生へのアンケートでも別の意味で再確証してくれる。別の意味とは「自分の時代はネイティブ授業がなかった」という選択肢５が 40.6％で全選択肢のトップということである。これは在校生の 26.9％を大幅に超過する。ここには初修外国語の受講生が多いドイツ語とフランス語にネイティブの常勤講師がいないことが反映されている。卒業生の時代にはこの２外国語だけが「第２外国語」という名称で履修されていた。現在は中国語、ハングル、スペイン語がネイティブによる授業を開設している。その結果が 26.9％の回答率の背景である。しかし、それでもなお、４人に一人以上がネイティブ授業を知らない。ネオティブ授業を望む比率が学部別、入学年度別、性別を超えて高い事実を前にしたとき、初修外国語はネイティブ授業を開設する努力をすべきであろうし、非常勤枠をネイティブに限っては積極的に広げる教育的寛容を大学当局はしてほしい。アンケート結果は大学側にそれをアピールしている。

SQ８と SQ９は「成績評価」を問う設問である。まず、SQ８の統計結果である（表Ⅰ―２―１―10 参照）。

表Ⅰ―２―１―10　授業内容の評価と教員に対する評価の卒業生と在学生の回答結果

選択肢		卒業生	在校生
1	筆記と口頭の定期試験で評価	36.1%	39.4%
2	筆記の定期試験だけで評価	23.6%	30.7%
3	口頭の定期試験だけで評価	3.0%	3.0%
4	毎回の授業だけで評価	15.6%	13.1%
5	レポートによって評価	18.5%	11.0%
	無回答、不明	3.2%	2.9%

基本的には英語科目の同項目で分析したことが初修外国語にも汎用される。簡潔に繰り返すと、実践的な演習科目であるにもかかわらず、「毎回の授業」による評価形態よりも、「定期試験」による「一発勝負」の評価形態を学生の多数が望んでいる。在校生では 73.1％、卒業生では 62.7％を占める。

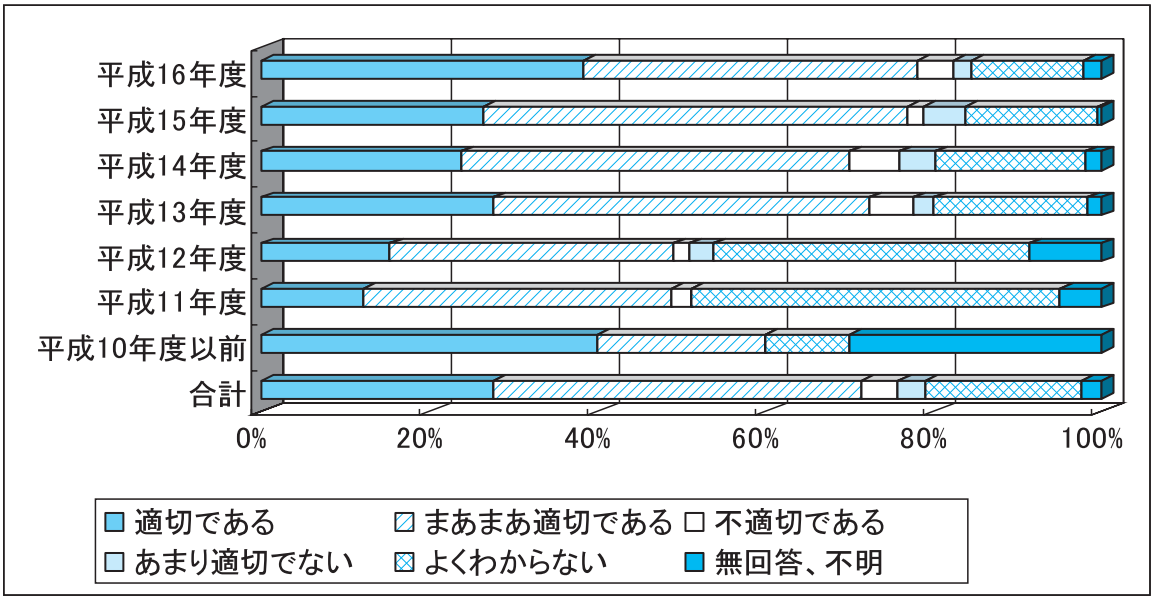
英語科目の分析が使えるとは言ったが、無論、細部に違いがある。それは「コミュニケーション英語」に相当する大規模な仕組みが初修外国語にはないことが回答率の多寡に反映している。つまり、ネイティブ授業の開設数が初修外国語は断然少ない。勢い、日本人講師による授業形態となる。初修外国語では初級文法を教え、読解力を涵養することに授業の重心が置かれる。それは他の設問項目でも傍証されている。その結果、英語科目と較べると、「毎回授業による評価」が 13.1％の低率であり、「定期試験による評価」の 73.1％とは比較にならないほどの距離がある。この統計傾向は卒業生を調査してもまったく揺らぐことがない。

しかし、初修外国語の教員の成績の評価方法の現実は「定期試験」だけで判断していることがむしろ少数派である。なぜならば、期末試験による成績評価をするならば、学生の点数は芳しいものにならないことを経験しているからである。すでに学生の「授業評価アンケート」で実施されている結果からわかることであるが、初修外国語に費やす勉強時間ははるかに少ない。他方、中学高校をかけて勉強する英語と違って、初修外国語は１～２年で学習する。その分だけ理解が容易でない。そのような客観事情を痛感している担当教員は「一発勝負」よりも「毎回の授業」に成績評価の重しを置くことで教育上の柔軟性を示しているつもりであるが、どうも学生の多数はそれを斟酌していないように思える。教

員と学生の意識のギャップである。学生の多数が望むようにすべきなのか、それとも教員側の多数（と推察する）が望むようにすべきなのか、その判断の是非は本稿で扱う権限を越えている。

SQ９は教員の「成績のつけ方」を学生がどのように受け止めているかを調査したものである。これに関しても英語科目での説明を繰り返すことになる。数行で反復すると、男女別、学部別、在校生と卒業生別のどのクロス調査においても、70％前後の学生が「適切である」と評価し、「不適切である」は全回答者の１割未満である。学生は初修外国語の成績のつけ方に満足している。また、英語科目同様、在校生の男女別による「適切」が男67.6％に対して女 75.9％で、女性が相当引き離している。なお、「成績のつけ方」に関しては、第１章第２節の２で総合的に考察しているので、それを参照願いたい。

最後に図Ⅰ―２―１―16 の在校生の入学年度別を見ていただきたい。



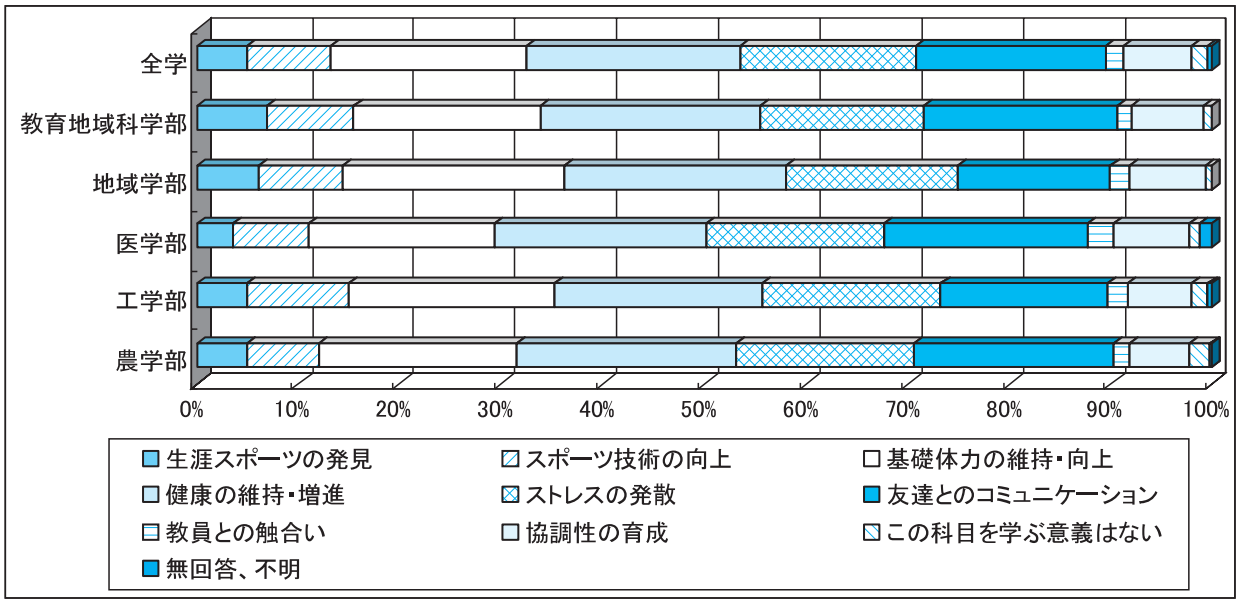
図Ⅰ―２―１―16　SQ９の在学生の入学年度別の回答結果

ここで英語と初修外国語に共通することを述べておきたい。選択肢５の「よくわからない」が年度を経るごとに上昇することである。（10 年度以前はサンプル数が微量なので考慮しない。）11 年度と 12 年度では全選択肢のトップであり、サンプル数が多い 12 年度では 37.5%の比率である。最新の 16 年度でも 13.4％である。70.5％が選択肢１と２の「適切」を挙げていることとどのような整合性をもつのであろうか。１つには成績の点数レベル（優良可）への学生の疑念である。学生は単位を認定されたことをよしとしながらも、学生自身が考える「優良可」と実際に彼らが手にする「優良可」に落差、「もっといいはずだが」という意識の落差が「わからない」の土壌ではなかろうか。学生からよく耳にすることの１つに、「あの学生は優なのに、私は良であった、あの学生よりも勉強したのに」がある。これは誠半分、嘘半分であろうが、このような発言に象徴される学生意識が「わからない」を育む土壌かもしれない。もう１点はグレード・ポイント・アベレージ（GPA）制度の導入である。この制度は種々の波及効果を及ぼすが、「わからない」に関連させることができる。GPA 制度は教員側に「優・良・可・不可」の「比率の均衡」を強いる傾向は否めない。本制度以前においては「不均衡」でもよかった。教員間による不均衡を是正することが GPA 導入の波及効果の１つであろう。しかし、不均衡は同時にまた、「優秀

な」クラスには優秀な点数、「不真面目な」クラスには低い点数を記入させる裁量が保障されていた。この「裁量」を GPA 制度が制限させたことは事実である。その事実が「優・良・可・不可」の「比率の均衡」として出現し、それが受講学生の「わからない」率の高さになって反射されたと解釈することができるかもしれない。仮にそうだとすると、「わからない」と疑問を感じる学生の意識を払拭させ、尚且つ「比率の均衡」を保つ努力を教員側は行うべきであろう。その具体策の１つはシラバスに記載する「成績評価の基準」を学生に明瞭に提示することである。

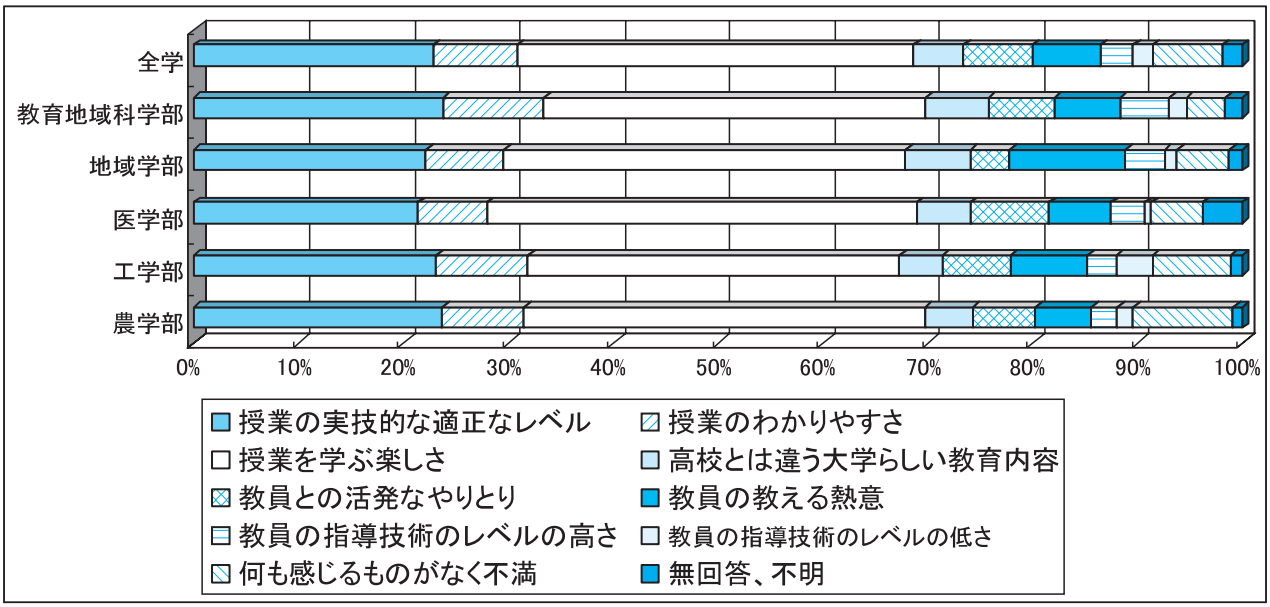
８．実践科目の健康スポーツ科学実技について

Q 26-1 は、「健康スポーツ科学実技を学ぶ意義」についての設問であるが、最も多かったのが、「健康の維持・増進」の 21％であり、次いで、「基礎体力の維持・向上」の 19％、「友達とのコミュニケーション」の 18％、「ストレスの発散」の 17％という順に高い数値が示された。どの学部においても、ほとんど同じような傾向の数値が示された。



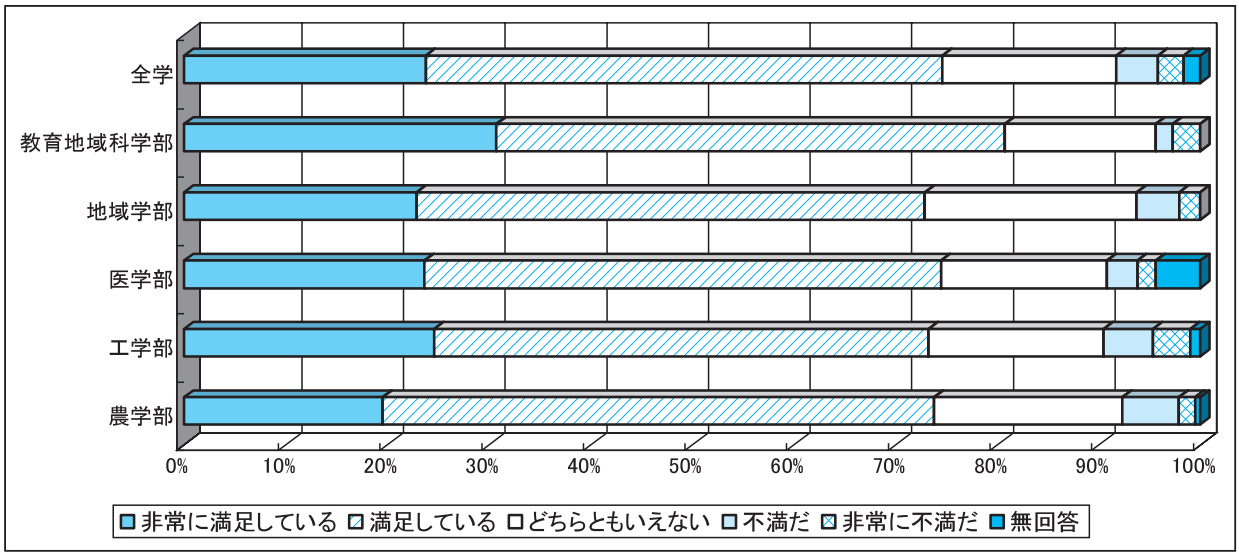
図Ⅰ―２―１―17　あなたにとって、この科目を学ぶ意義は何ですか。

Q 26-2 は、「健康スポーツ科学実技の授業に対する感想」であるが、最も多いのは「授業を学ぶ楽しさ」の 38％であり、次が「実技的な適正なレベル」が 23％であった。その他の設問に対しては２～８％くらいの数値であり、特徴的な感想は提示されなかった。「学びの楽しさの重要性」は、学長も指摘しており、その点からいえば、今後も同様の学生の反応が得られるよう、分野では一層の努力が必要ではないかと考えられる。この点も Q 26-1 と同様に学部による違いはほとんど認められなかった。



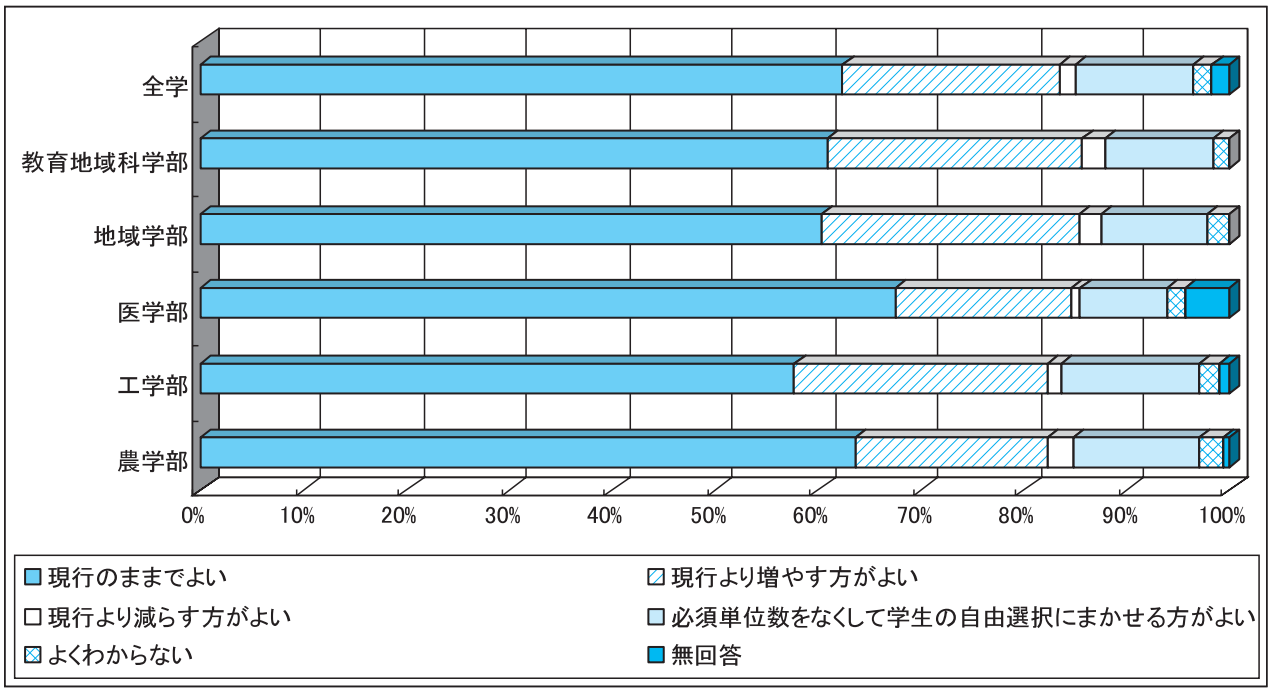
図Ⅰ―２―１―18　この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。

Q26-3 は、「健康スポーツ科学実技に対する満足度」に関する調査であるが、①の「非常に満足している」と、②の「満足している」を合わせると 75％くらいの数値が示されており、この数値は大学入門ゼミ（34％）、情報リテラシ（40％）、主題科目（46％）、英語（37％）、初修外国語（47％）、専門基礎科目（35％）などの他の教科と比べて顕著に高い数値であった。前回の調査時のおいても、この科目の満足度は極めて高く、学ぶ楽しさが重要な要因になっているものと考えられる。

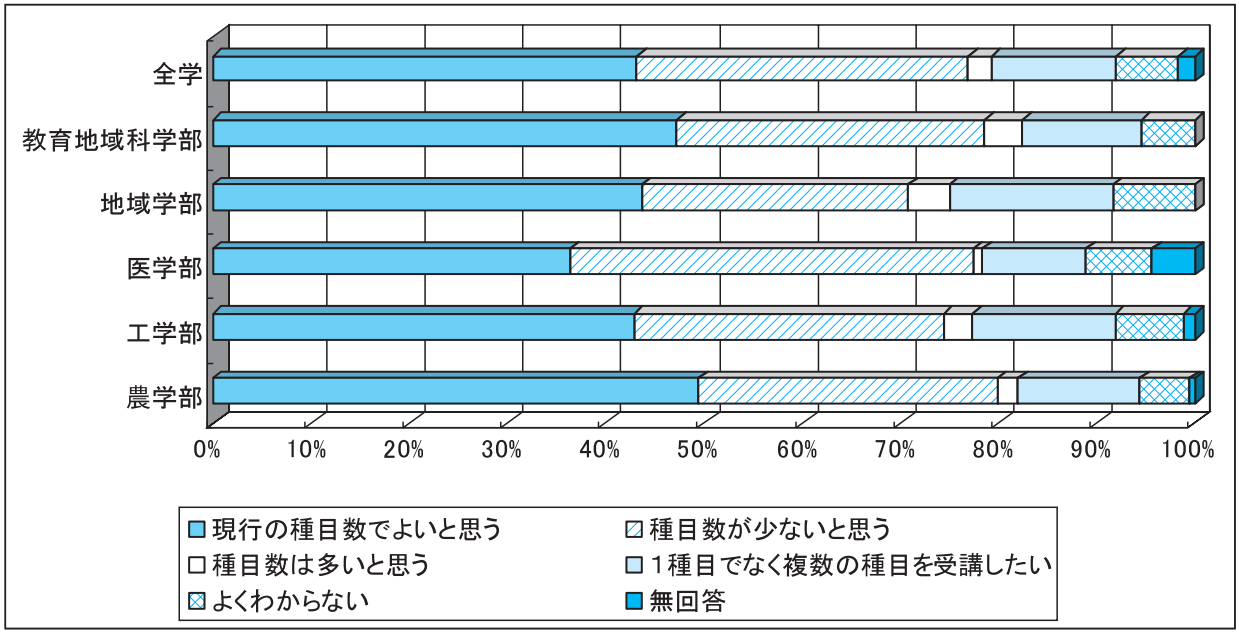


図Ⅰ―２―１―19　この科目の授業について、あなたは満足していますか。

Q26-4 及びQ26-5 は、健康スポーツ科学実技の必須単位数と種目数に関する設問であるが、どちらに対しても「現行のままでよい」と回答した学生が 60％、40％以上を占めており、現状肯定型の意見となっている。

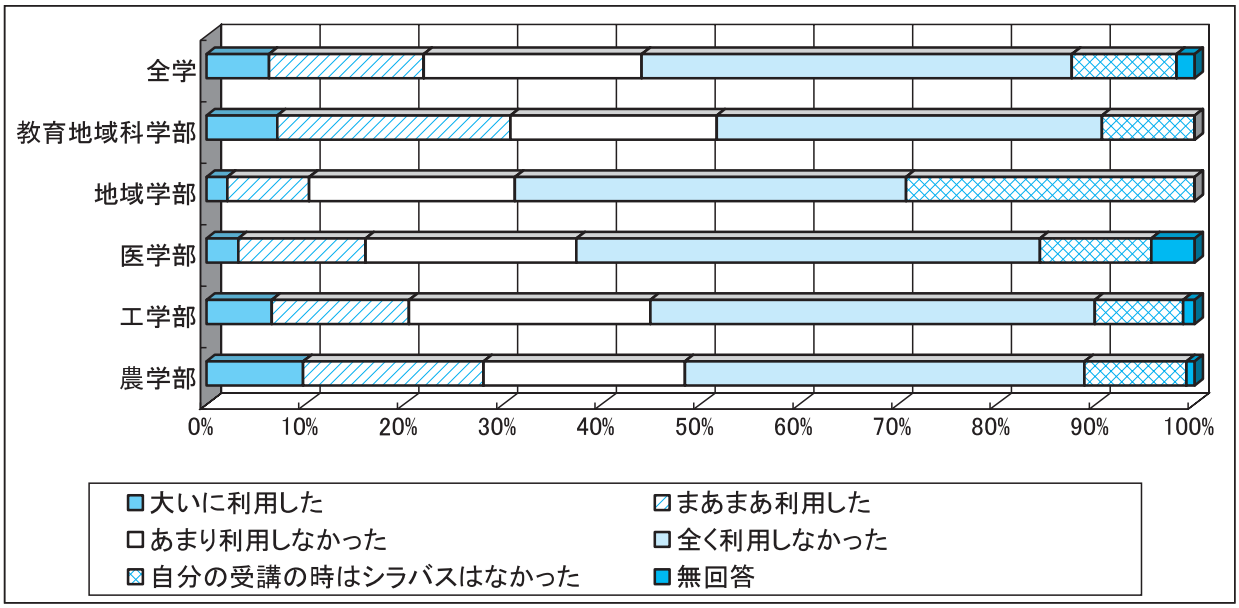


図Ⅰ―２―１―20　この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。



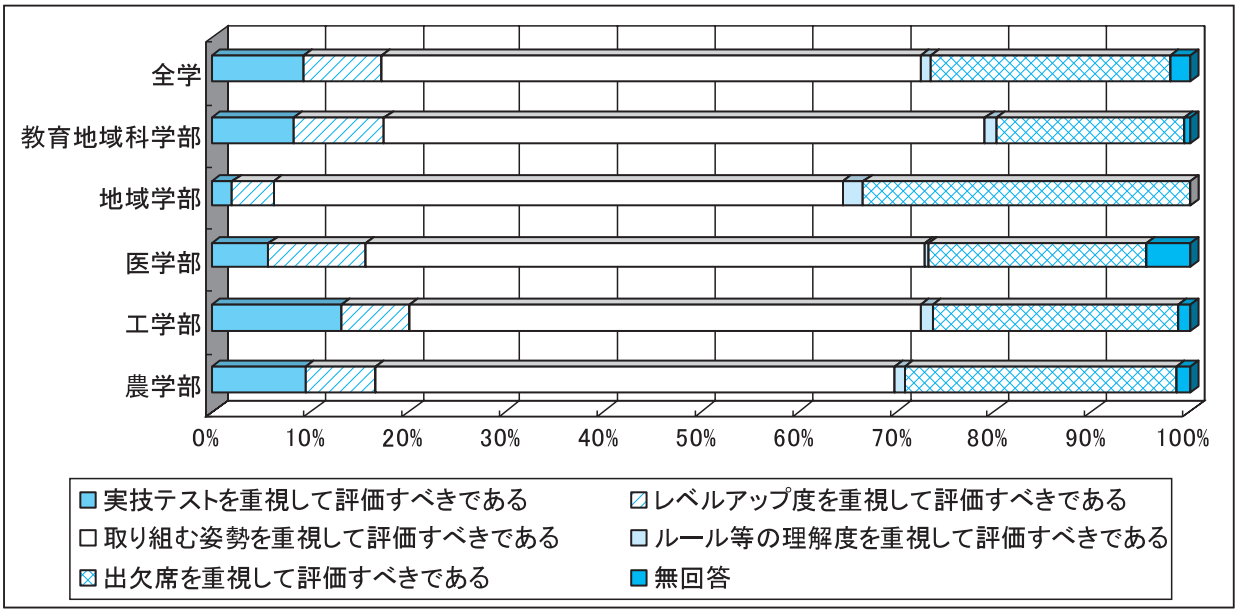
図Ⅰ―２―１―21　この授業の種目数についてどう思いますか。

シラバスに関しては、利用度はQ26-6に示されているように、「あまり利用しなかった」と「全く利用しなかった」を合わせると66%くらいの数値になっており、利用していない学生の多いことがわかる。この理由は、この科目の種目選択が入学前の説明会で行われることが影響しているのではないかと考えられる。Q26-7は、シラバスを参考にしている学生の意見であるが、半数近くの学生がこの科目は「シラバス通り進むのでよい」としている。

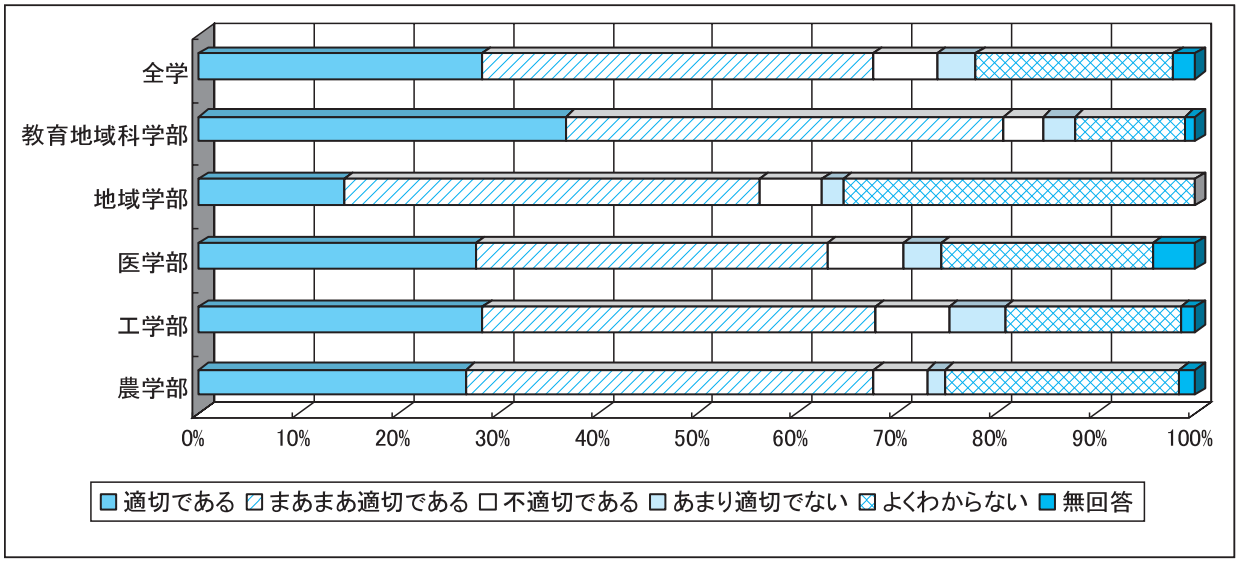


図Ⅰ―２―１―22　シラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。

Q26-８とQ26-９は、成績評価に関する設問であるが、「何を重視して評価すべきか」ということに関しては、「取り組む姿勢を重視して評価すべきである」という意見が55％あり、圧倒的に多い。この科目の内容を考えれば当然の回答かもしれない。また、教員の成績のつけ方に関しても「適切である」と「まあまあ適切である」とする回答が約70％あり、多くの学生が適切な成績評価がなされていると感じていることがわかる。



図Ⅰ―２―１―23　成績の評価方法についてどう思いますか。



図Ⅰ―２―１―24　教員の成績のつけ方についてどう思いますか。

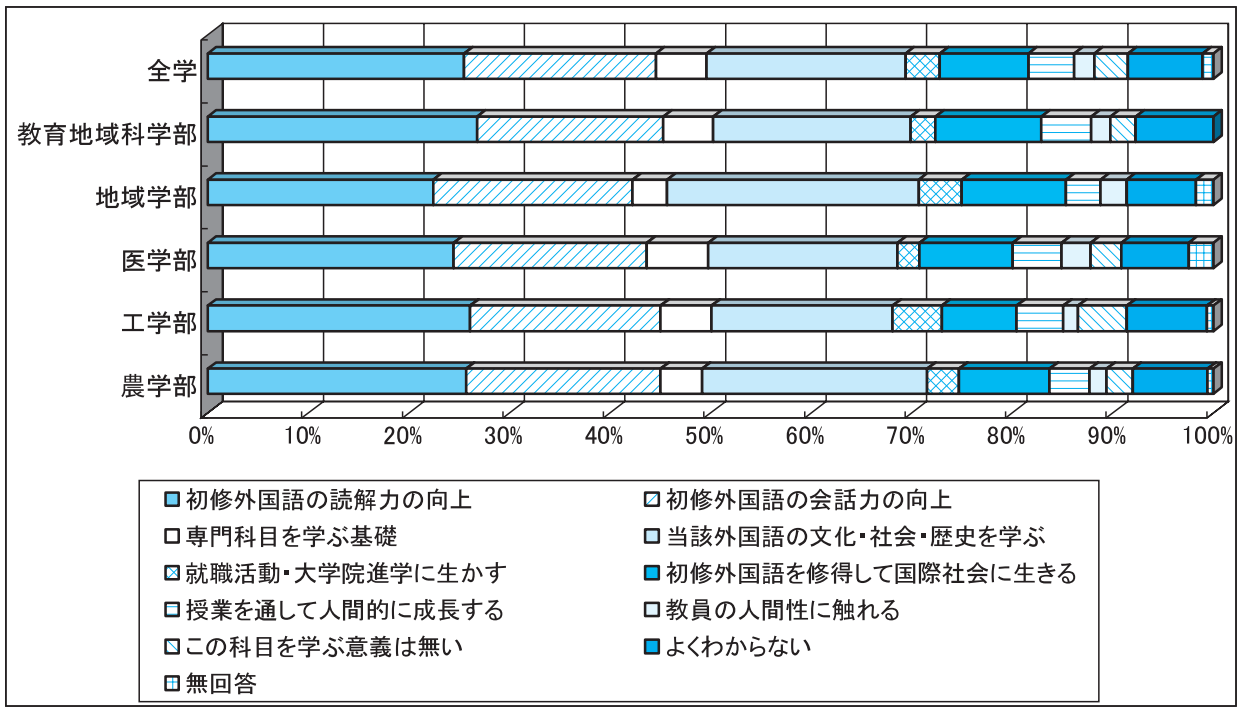
９．専門基礎科目について

Q25-１とQ27-１は「学ぶ意義」を問うものである。複数回答可である。

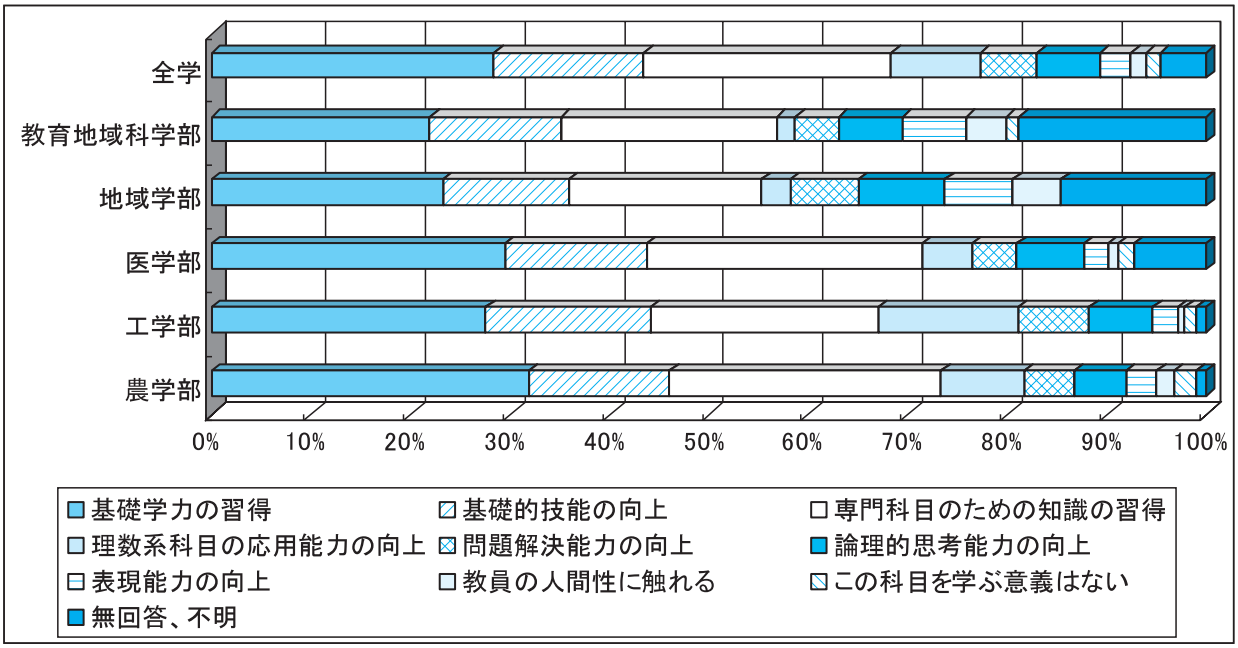
在学生では「基礎学力の習得」、「専門科目のための知識の習得」、「基礎的技能の向上」、「理数系科目の応用能力の向上」はそれぞれ 70.6%、62.0%、37.3%、22.4%であり、卒業生では 77.1%、72.0%、34.2%、28.0%であり、上位４位の順位は同じである。

学部別では、教育学部の在学生はサンプル数が少ないので考察から除外した。

教育学部、教育地域科学部、地域学部に対して専門基礎科目は開かれていない。上記４つの項目の「理数系科目の応用能力の向上」は工学部の在学生 14.0%、卒業生 13.5%で高く、医学部の卒業生 10.9%が高い。「学ぶ意義はない」は卒業生の 1.7%、在学生の 3.7%である。入学年度別には大きな違いは見られない。



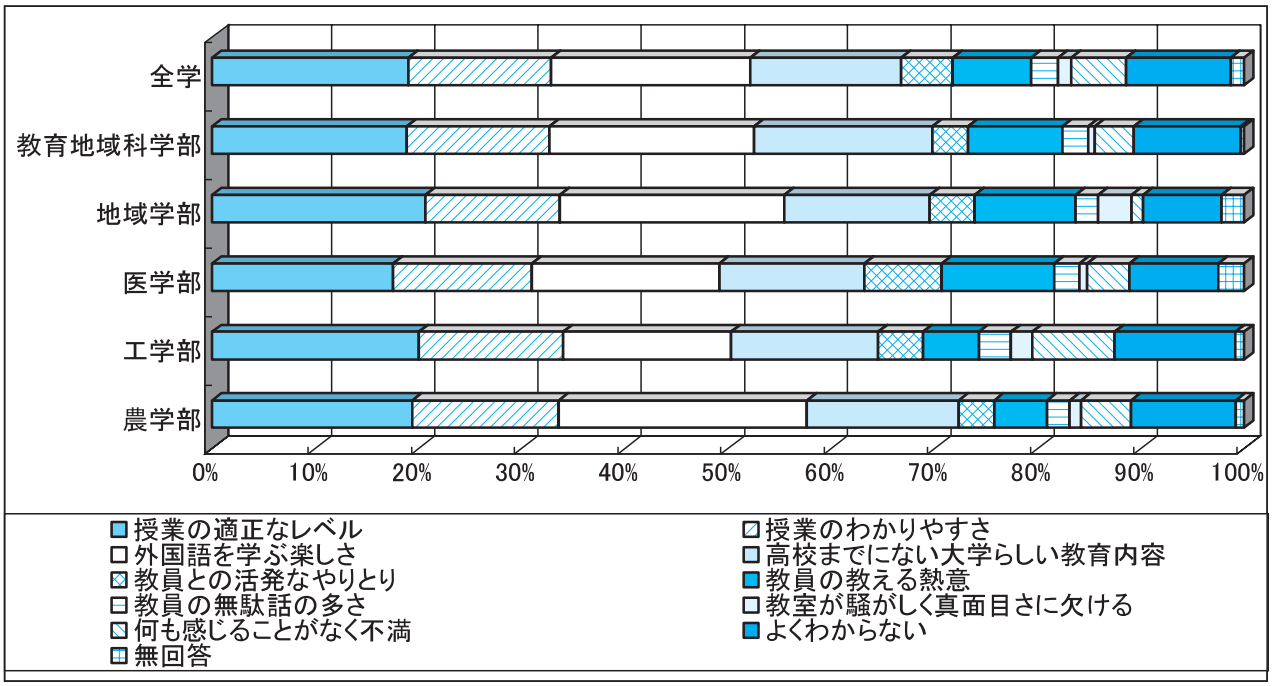
図Ⅰ―２―１―25　あなたにとって、この科目を学ぶ意義は何ですか。



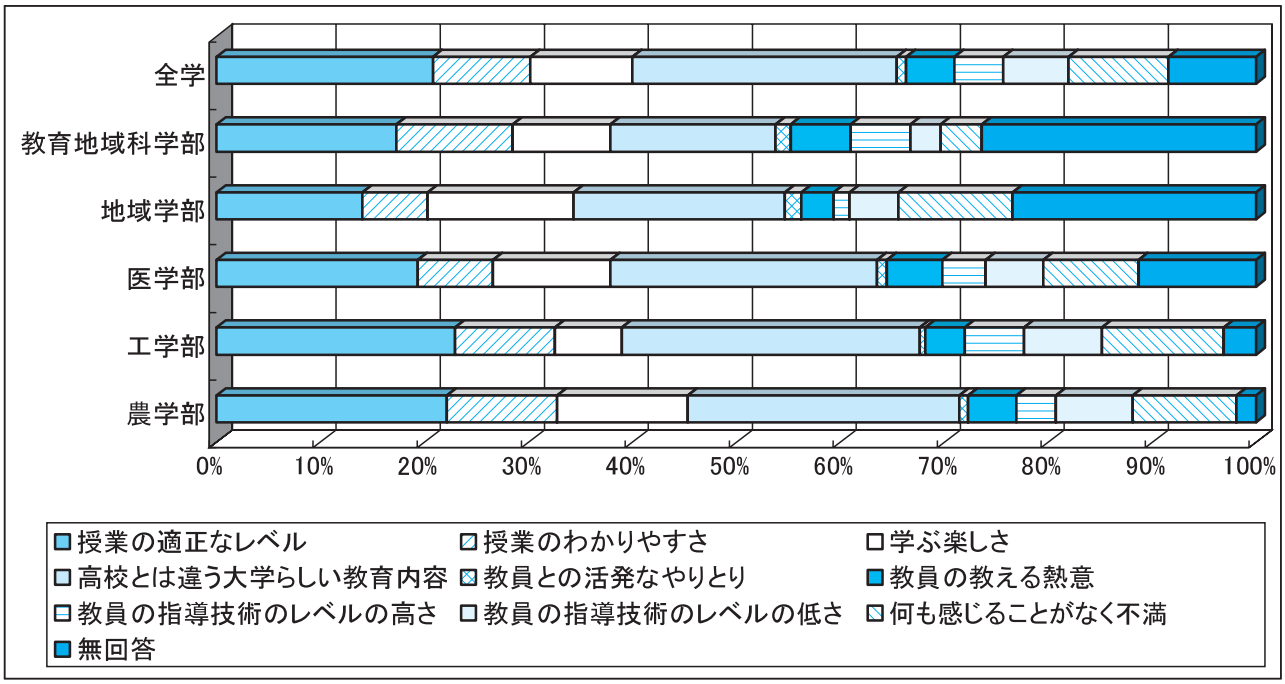
図Ⅰ―２―１―26　あなたにとって、この科目を学ぶ意義は何ですか。

Q25-２とQ27-２は授業で感じたことを問う複数回答可の設問である。

学部別では、在学生（卒業生）に対し、「適正なレベル」で医学部 19.3%（21.6%）、工学部 23.0%（28.6%）、農学部 22.1%（21.2%）である。工学部の卒業生が高いのが目立つ。「高校とは違う大学らしい教育内容」は、在学生（卒業生）に対し、医学部 25.6%（27.3%）、工学部 28.7%（29.9%）、農学部 26.1%（32.5%）と高い割合を示す。「何も感じるものがなく不満」は在学生（卒業生）に対し、医学部 9.2%（13.1%）、工学部 11.7%（4.8%）、農学部 10.1%（6.0%）であり、卒業生が在学生より高いのは医学部だけである。



図Ⅰ―２―１―27　この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。

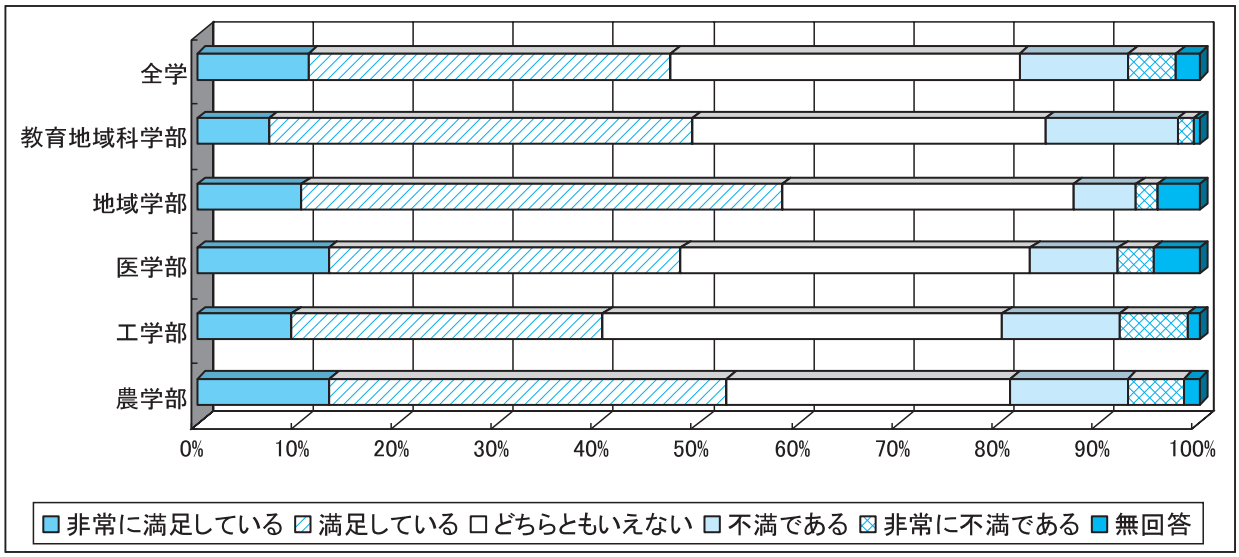


図Ⅰ―２―１―28　この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。

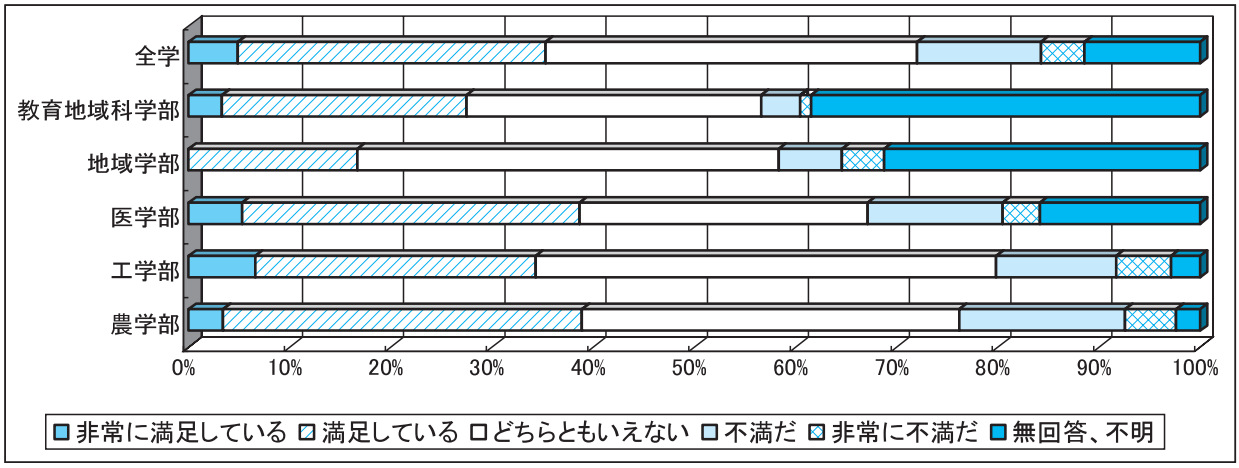
Q25-３とQ27-３は授業の「満足度」を直接に問う設問である。

学部別では、卒業生では医学部の「不満」19.5%、「非常に不満」10.6%が工学部 11.8%、1.2%、農学部 11.7%、2.9%に比べてその高さが目立つ。「満足」「非常に満足」の合計は農学部だけが 52.0%と 50%を超えている。医学部のそれは 35.7%と低い。

在学生では「不満」の合計、医学部 17.0%、工学部 17.2%、農学部 21.6%となり農学部が少し高い。また「満足」の合計は医学部 38.6%、工学部 34.4%、農学部 39.8%となり、工学部が少し低い。不満の高いのは医学部では卒業生、工学部、農学部では在校生である。満足の合計が農学部と工学部では卒業生、医学部は少し在学生が高い。



図Ⅰ―２―１―29　この科目の授業について、あなたは満足していますか。



図Ⅰ―２―１―30　この科目の授業について、あなたは満足していますか。

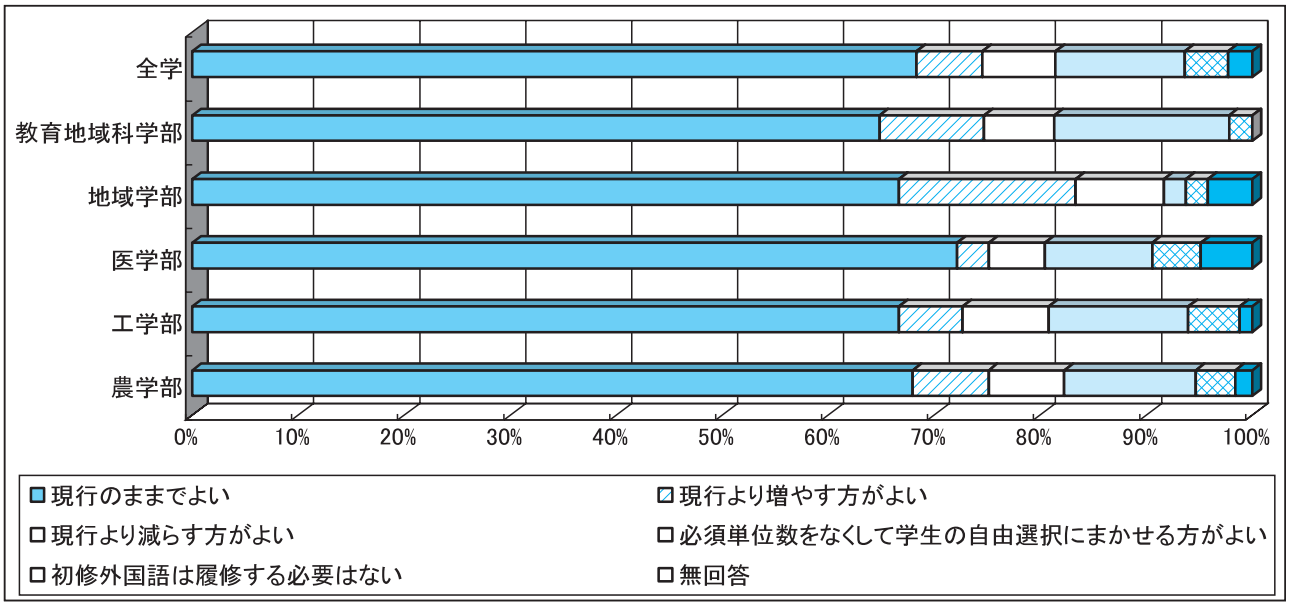
Q25-４とQ27-４は必須単位数を問うものである。

「現状維持」、「単位数の増」、「単位数の減」、「自由選択」は卒業生（在学生）ではそれぞれ 72.4%（63.2%）、11.0%（5.0%）、3.9%（8.6%）、6.8%（6.9%）である。卒業生は在学生より現状維持、単位数の増加を希望するのが多く、単位数の減は少ない。「自由選択」はほぼ同じある。

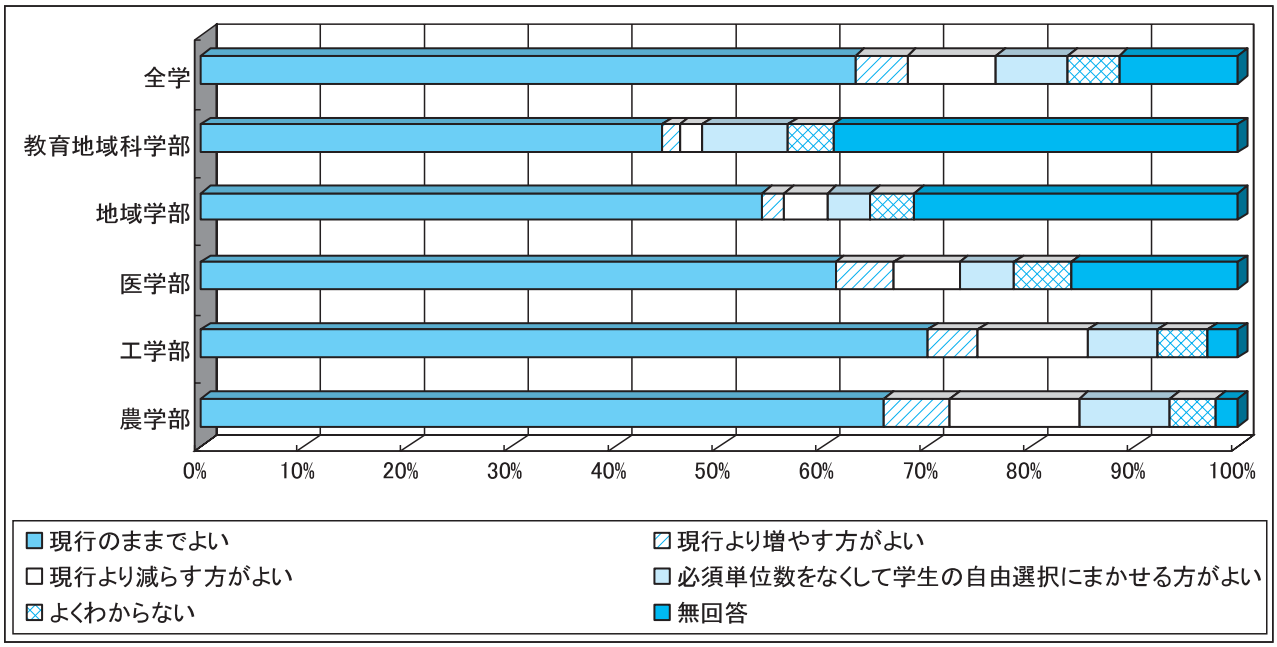
卒業生の学部別で見ると、「自由選択」は、医学部 8.9%、工学部 3.2%、農学部 10.5%であり、工学部は少ないことがわかる。「単位数の増」は医学部 7.3%、工学部 11.8%、農学部 14.０%である。「現状維持」は医学部 72.4%、工学部 76.4%、農学部 66.7%である。農学部は自由選択にして単位数を増やすのを希望するものが多い。

在学生の学部別で見ると、「現状維持」は医学部 61.2%、工学部 70.24%、農学部 66.0%である。「単位数の増」は医学部 5.7%、工学部 4.8%、農学部 6.3%であり、あまり差が見られない。「単位数の減」は医学部 6.2%、工学部 10.5%、農学部 12.4%であり、工農が多い。「自由選択」は、医学部 5.3%、工学部 6.8%、農学部 8.7%である。

卒業生と在学生とでは「現状維持」が多いことでは同じであるが、「単位数の増」では異なっている。



図Ⅰ―２―１―31　この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。



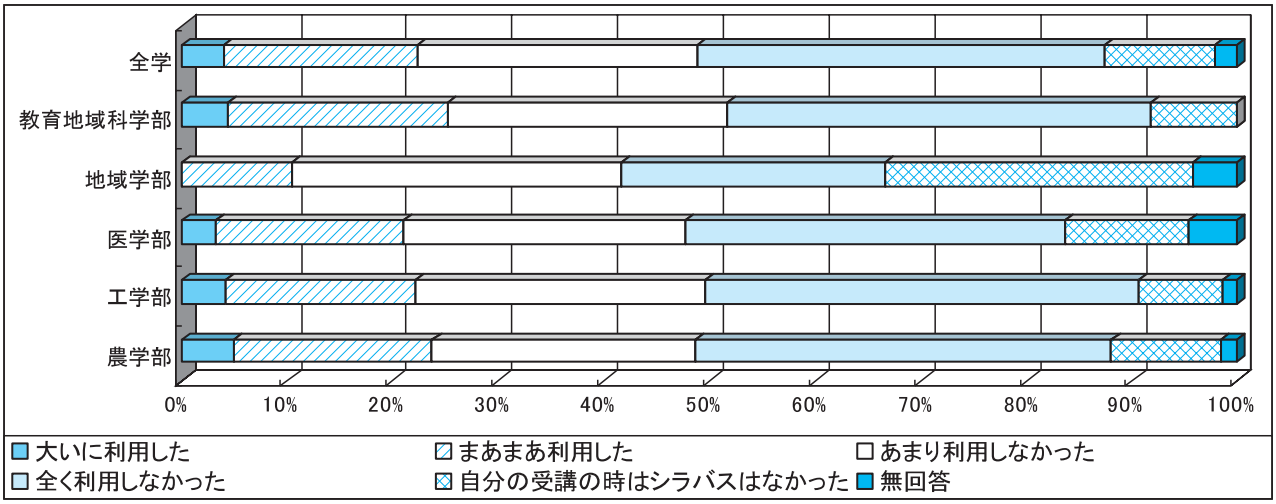
図Ⅰ―2―1―32　この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。

Q25-5、Q27-5とQ25-6、Q27-6は学生の「シラバス活用」と教員の「シラバス忠実度（実行度）」を学生に問うものである。

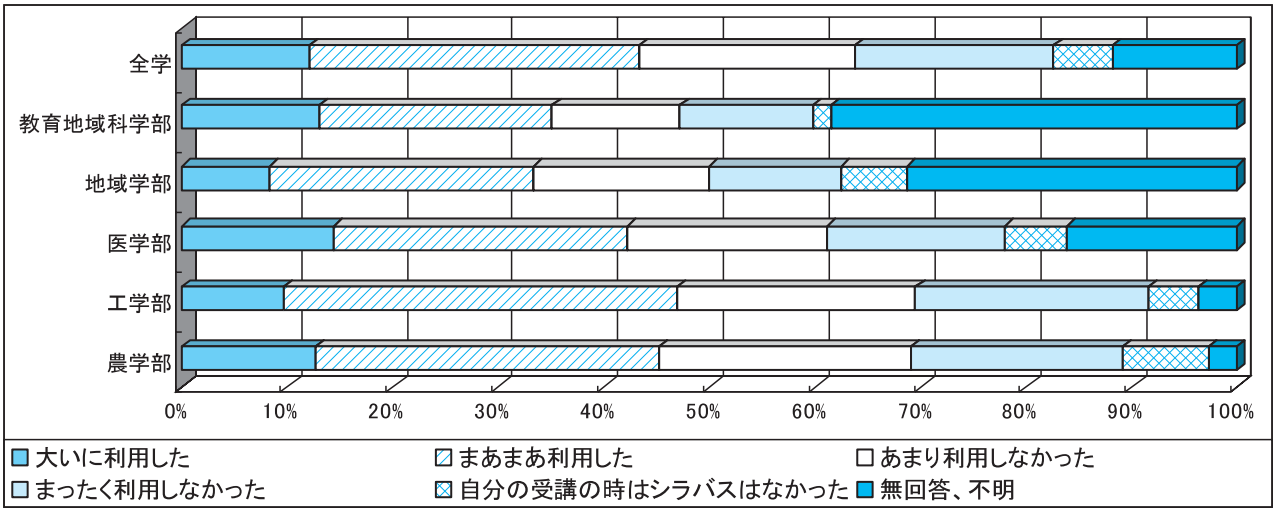
「シラバスがなかった」はQ25-5、Q25-6、Q27-5、Q27-6で聞いている。医学部、工学部、農学部の合計で「ない」と答えた人数は、卒業生でQ25-5（64名）、Q25-6（72名）、在学生でQ27-5（81名）、Q27-6（111名）である。Q25-5（Q27-5）の卒業生（在学生）に対し、「シラバスを利用した」の合計は医学部36.6%（42.2%）、工学部53.1%（46.9%）、農学部39.2%（45.2%）であり、工学部だけが卒業生の%が高い。

Q25-5（Q27-5）の卒業生（在学生）に対し、「シラバスを利用しない」の合計は医学部51.3%（35.8%）、工学部42.8%（44.8%）、農学部32.7%（44.0%）である。3学部の在学生では「シラバスを利用した」の合計が「「シラバスを利用しない」の合計を超えている。3学部の卒業生では「シラバスを利用した」の合計が「「シラバスを利用しない」の合計を超えているのは工学部、農学部である。

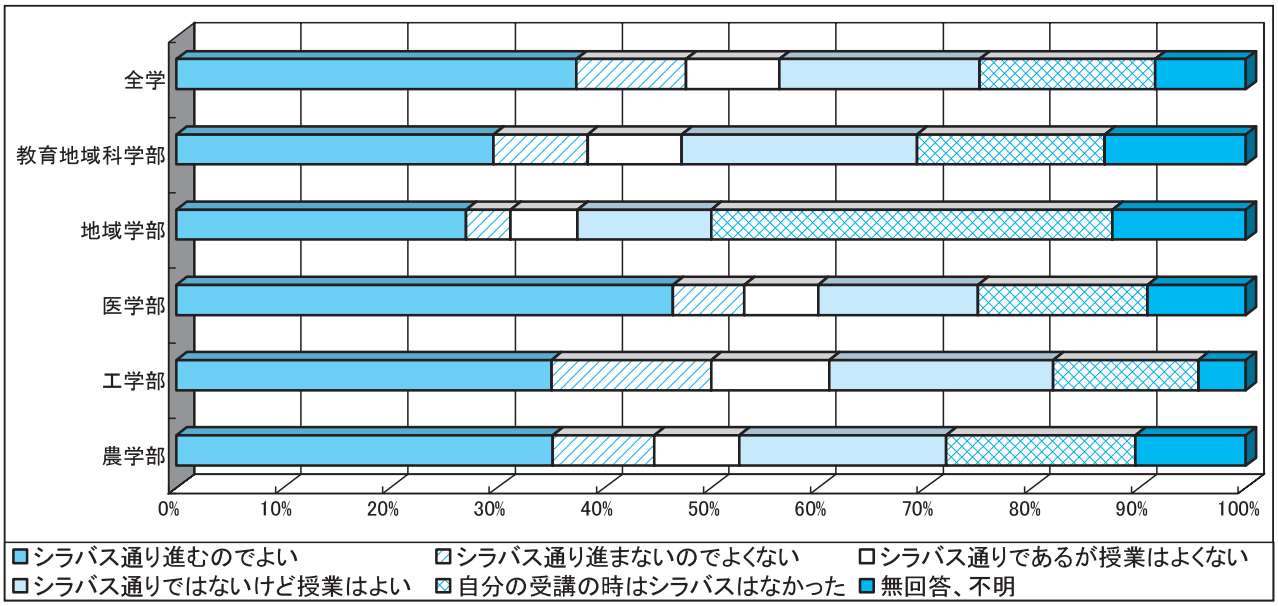
次のQ25-6（Q27-6）では「よい授業」でシラバスの通り、シラバスの通りではないはそれぞれ卒業生（在学生）で医学部28.5%、14.6%（43.6%、11.2%）、工学部41.0%、20.6%（38.8%、11.2%）、農学部25.7%、17.5%（34.6%、15.8%）である。いずれもシラバスの通りが多い。「わるい授業」でシラバスの通り、シラバスの通りではないはそれぞれ卒業生（在学生）で医学部9.8%、22.0%（9.6%、9.9%）、工学部14.7%、15.6%（17.1%、19.0%）、農学部7.6%、8.2%（12.9%、15.8%）である。シラバスの通りとそうでないのがほぼ同じで、ただ、医学部の卒業生のシラバスの通りでないが高い。



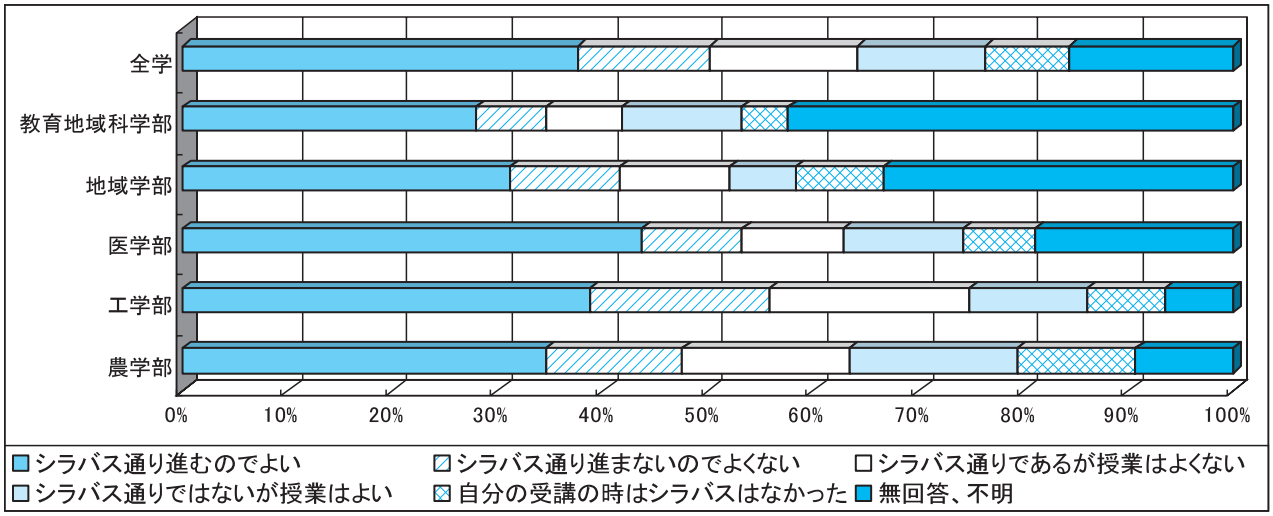
図Ⅰ―２―１―33　この科目の授業シラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。



図Ⅰ―２―１―34　シラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。



図Ⅰ―２―１―35　実際の授業とシラバスとの関係はどうですか。



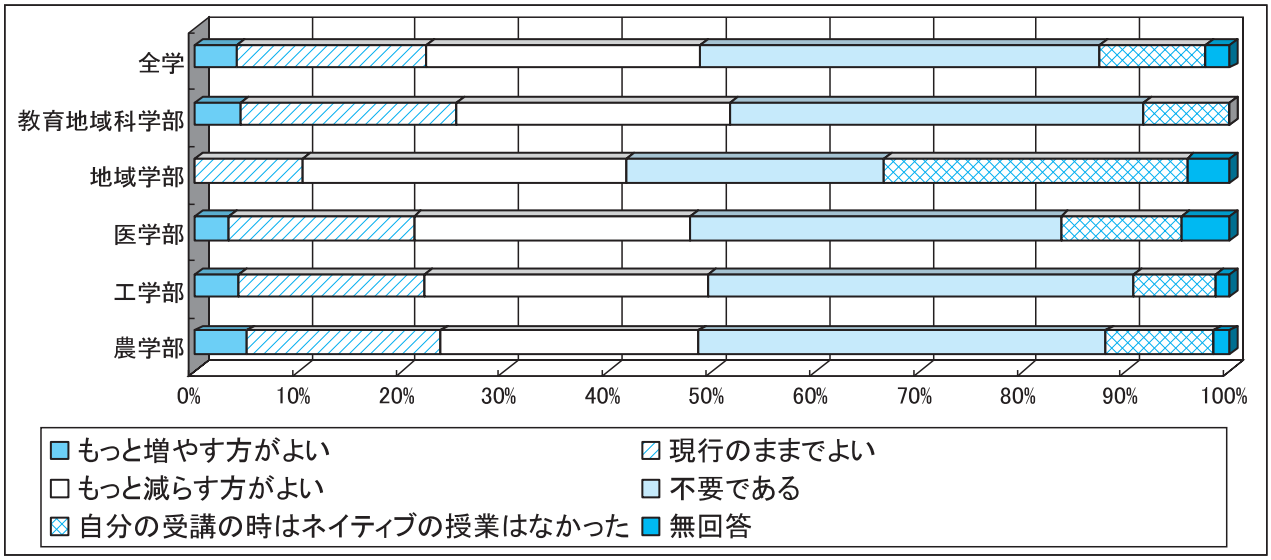
図Ⅰ―２―１―36　実際の授業とシラバスとの関係はどうですか。

Q25-7とQ27-7は「成績評価」を問う設問である。

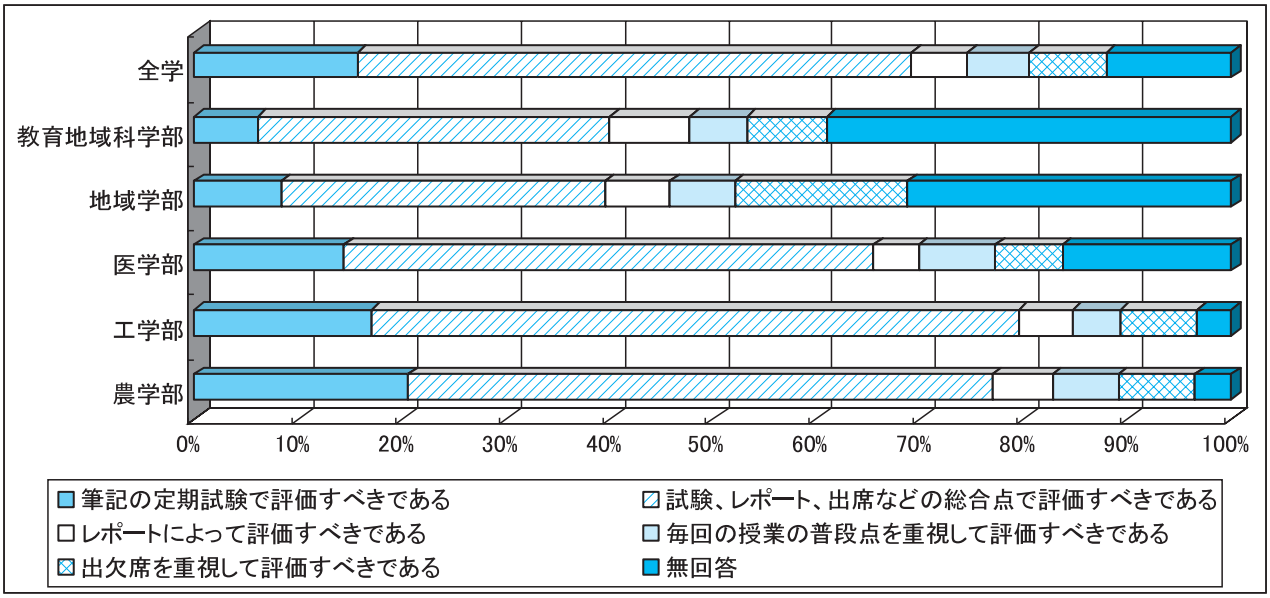
「試験、レポート、出席などの総合点」、「筆記の定期試験」、「レポート」は卒業生では、それぞれ66.5%、17.9%、7.2%にたいし、在学生では53.6%、15.6%、5.4%である。これら３つの項目の順位は同じである。

学部別では、在学生、卒業生とも医学部、工学部、農学部では上記の３つの項目は同じ傾向である。また、卒業生では目立たないが、在学生の医学部・農学部では「普段点」と「出欠席」が「レポート」より少し高い、工学部では「出欠席」が「レポート」より少し高い。ただし、専門基礎のない「教育学部」、「地域学部」などは「レポート」による評価をすべきとするのが多い。平成16年度入学者は「普段点」12.5%と「出欠席」10.0%が「レポート」5.2%よりはっきりと高い。

Q25-8とQ27-8は教員の「成績のつけ方」をどのように受け止めているかを調査したものである。「適切」の合計は、在学生、卒業生それぞれ61.4%、74.9%である。「不適切」の合計は、在学生、卒業生それぞれ9.6%、8.9%である。以上より「適切」ととらえるのは卒業生が多い。入学年度では差が見られない。



図Ⅰ―２―１―37　ネイティブ・スピーカーの授業はどう思いますか。



図Ⅰ―２―１―38　成績の評価方法についてどう思いますか。

第３章　一般教育に対する卒業生の意識と評価

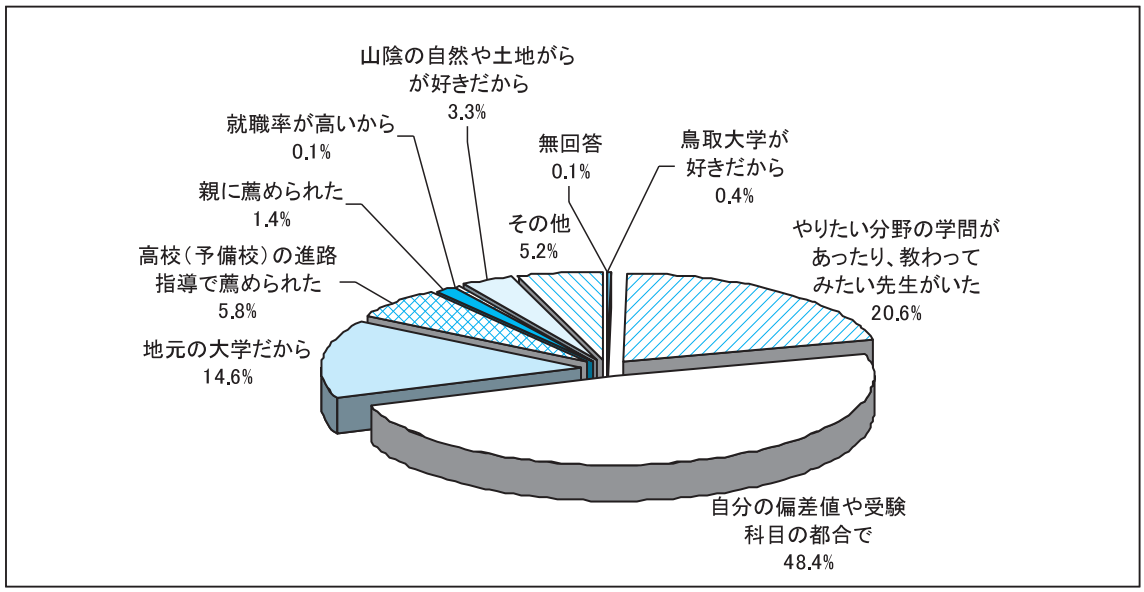
本年度（平成 16 年度）から見て、大部分の卒業生は（最新の）カリキュラム改革がなされた 13 年度以前のカリキュラムで教育を受けている。すなわち、「専門科目」と「一般教育科目」である。いわゆる「大綱化」によって、専門と一般教育の区別の法的・制度的根拠が消滅したとはいえ、名称に象徴されるように、一般教育は専門科目の基礎、ないしは準備科目という意識が教員にも学生にも残っていた、と思われる。現在の「全学共通科目」は、それ自身が独立した、専門の領域に限定されない、真の意味での全人的教養に資する科目であることを、その存在意義とする科目である。しかし、その理念が実現するには、当科目の前身である旧一般教育科目がどのように評価されていたか、を正確に把握することから始めざるを得ないであろう。その把握の反省に基づいて、現在の全学共通科目の一層の充実が図られることになろう。

そこで、以下、平成 13 年度以前の旧カリキュラムに関する卒業生の評価を、項目ごとに検討する。

第１節　鳥取大学への評価の諸側面

Ⅰ．鳥取大学と所属学部の選択動機

まず、どのような動機で学生が鳥取大学を選び、学部を選んだか、その動機を探ることにする(Ｑ７、Ｑ８)。鳥取大学と選択した理由は、「自分の偏差値や受験科目の都合で」が全学部平均で 48.4％と最も高い率を示している。ついで高いのは「やりたい分野の学問があったり、教わってみたい先生がいた」が 20.4％、「地元の大学だから」が 14.6％と続く。在学生の場合よりやや少ないものの、卒業生も、鳥取大学への入学動機として、約半数の学生が「偏差値」と「受験科目」を第一に挙げている。

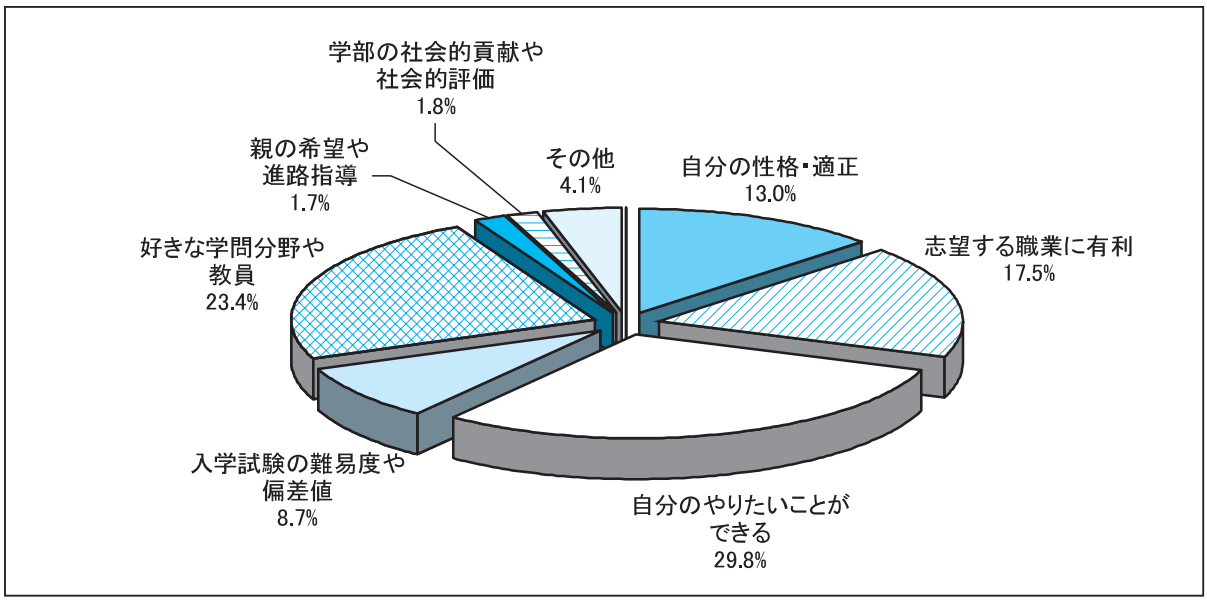


図Ⅰ―３―１―１　鳥取大学を選択した最も大きな理由は何でしたか。

つぎに、卒業生が卒業した学部をどのような動機で選んだか、を検討しよう。最も多いのは「自分のやりたいことができる」が（全学部平均で）29.8％で、それに続く理由が「好

きな学問分野や教員」23.4%、「志望する職業に有利」17.5%である。

卒業生の場合も、在学生と同様に、鳥取大学を選んだ理由は偏差値と受験科目という「絶対条件の制約」であるが、学部選択は「個人の願望の実現」が主要動機である。



図Ⅰ―３―１―２　あなたが卒業した学部を選ぶにあたって一番重視したのはどんなことでしたか。

ここでは、前回の調査では行わなかった卒業生から見た全学共通教育についての評価を取り上げ、在学生との認識の違い等を比較・検討した。

Ⅱ．大学入学への動機等

まず、卒業生が鳥取大学への入学に際して、どのような志望動機をもっていたのかについて見てみることにする。

Q７は、本学を選択した理由についての設問であるが、在学生と同様に、「自分の偏差値や受験科目の都合で」が 48.4%と圧倒的に高い回答であった。次いで「やりたい分野の学問があったり、教わってみたい先生がいた」が 20.6%、「地元の大学だから」が 14.6%と高く、在学生とまったく同じ傾向であり、年次的変化はみられなかった。

Q８は、学部を選択する際に何を重視したかという設問に対する回答であるが、「自分のやりたいことができる」が 29.8%で、在学生の 30.5%とほぼ同じ数値であった。次が、「好きな学問分野や教員」が 23.4%であり、「志望する職業に有利」が 17.5%と２位と３位の志望動機が逆転しており、在学生で比較的高値であった「入学試験の難易度や偏差値」は 8.7%と低値であった。学部選択においても、若干の違いは見られたものの卒業生と在学生との間に顕著な違いは認められず、以前からかなり明確な認識で学部の選択が行われてきたと考えられる。

Q10 は、「後輩に対して、鳥取大学への入学を勧めることができますか」という設問に対する回答であるが、「ぜひ入学するよう勧める」が 11.0%、「積極的にではないが勧める」が 57.1%であり、在学生の 7.0%と 47.0%より高い数値となっている。卒業生の 70%近くが本学への入学を肯定的に評価してくれているという事実は本学にとって貴重な実績であり、さらにこの数値がレベルアップするよう全学的な努力が必要であろう。

第２節　大学への期待と大学教育

Ⅰ．大学への期待感

Ｑ９は、環境・施設面に対する卒業生への設問であるが、最も不満に感じていたのが「厚生福利施設の貧弱さ」で 60％近い学生がこの点を指摘しており、この数値は在学生と全く同じであり、この間、本学の厚生福利施設はほとんど改善されていない現状を示している。「講義室・実験室の冷房等の設備が少ない」や「トイレが汚い」、「講義室にゴミが散乱している」などに対する指摘は在学生からの指摘されていることであり、これらについても今後も注意が必要であろう。大学が法人化されて外部評価される一面となるであろうことからいえば、施設面での改善は本学の今後の重要課題の一つであろう。

Ⅱ．勉学への取り組み等

Ｑ11 は、シラバスの利用についての設問であるが、全学的にみると「よく利用し参考になる」と答えた卒業生が 約 28％であり、在学生の約 49％に比べてかなり低かった。「あまり利用していない」と「まったく利用したことがない」と答えた卒業生は約 60％以上あり、在学生の約 48％と比べると差が大きいことがわかる。「シラバスがなかった」と回答している卒業生も約７％おり、シラバスの重要性が浸透してきたのが近年であり、そのような時代的な背景も影響しているものと考えられる。

Ｑ12 及びＱ13 は、授業内容が理解できなかった場合の理由や対応に対する回答であるが、授業内容が理解できなかった理由として「自分の勉強不足」と指摘した卒業生が 53％くらいおり、在学生の約 44％よりかなり高い数値を示した。「先生の教え方に工夫が足りない」という回答も約 28％と在校生よりやや少なかった。学部別にみても在校生同様に差が認められなかった。また、対応策としての回答も「友人に尋ねた」が約 46％と最も高く、次いで、「自分で参考書等によって調べる」が約 28％であり、在校生とほとんど変わらない回答であった。これらの結果から本学においては、教室などで教員に質問するという雰囲気が構築されていない現状にあり、ＦＤ活動などを活用した早急な改善が必要であると考えられる。

Ｑ14 は、卒業生が一番よいと評価した授業に関する設問であるが、「学問内容をなるべく分かり易く噛み砕いて教える」が約 55％あり、在校生の認識と同じである。在校生との違いがでたのは、「今の時代につながる点をよく教える」という点に対して 12％くらいの回答があり、社会人としての必要性からの指摘であると判断した。

Ｑ17 は、「在学時に授業に対して最も強く望んだこと」に関する設問に対して、③の「授業は、丁寧に分かり易く行ってほしかった」が 30％くらいであり、在学生の約 50％よりやや少ない数値であったが、④の「授業は、抽象的すぎず、事例をあげるなど具体的に説明してほしかった」は約 27％あり、在校生の約 23％をやや上回る数値であった。在校生と違ったのは、⑥の「満足しているわけではないが、特に望むことはなかった」という反応が在校生の倍近くあったことで、これは年月の経過による健忘的な要素が影響したのではないかと推測した。

Ｑ18 は、授業の予習・復習に関する設問であるが、「しなかった」が約 33％であり、この数値は在校生とまったく同じであった。また、「０～１時間」の約 50％という数値もほとんど同じであった。③の「１～２時間」及び④の「３時間以上」への回答も在校生と卒業生はほとんど違いがないという結果であった。

Ｑ19 は、勉学態度に対する調査であるが、①の「授業にはきちんと出席し、予習・復

習も行った」と答えた卒業生が約８％おり、在学生の約７％とあまり変わらない数値であった。⑤の「あまり真剣に取り組んではいなかった」という回答が５％程度あり、在校生の約２％の倍くらいとなっている。特に医学部医学科の卒業生は、15％くらい⑤を選んでおり、在学生の約３％と比較すると大きな差が示されている。今後、詳細な検討が必要と思われる。

第３節　カリキュラム改革後の一般教育

Ⅰ．一般教育と専門教育の関係

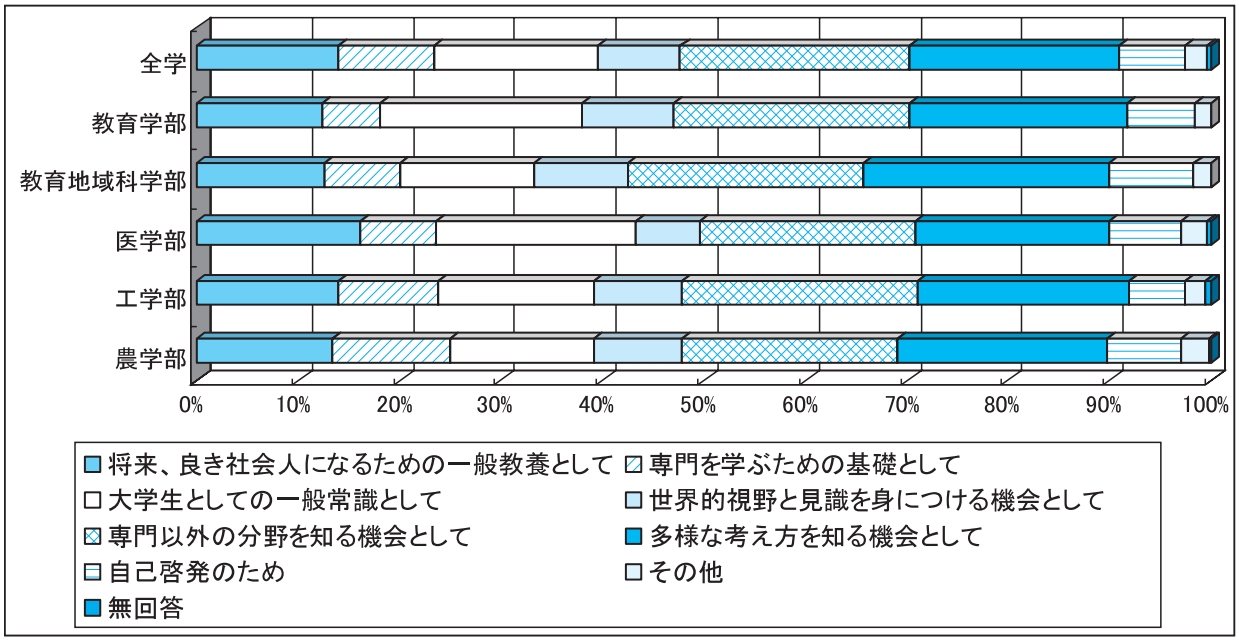
Q20 は、卒業生に対して「一般教育と専門教育はどのような関係にあるべきか」を問うた設問であるが、「一般教育と専門教育は、補いあって大学教育を構成すべきだ」という意見が約 34%で一番多く、次いで、「一般教育とは専門教育から独立した教育であってよい」や「一般教育は、専門教育の基礎になる教育であるべきだ」とする意見もほぼ同じくらいの約 30%という数値であった。在学生と違って学部による特徴的な意見はみられなかった

Ⅱ．個々の教育科目への評価と授業満足度

本節では、一般教育について、卒業生の評価がどのようになされたか、について検討する。これは、平成 13 年度より実施された新カリキュラムが、どれほど旧カリキュラムの不充分な点を改善したのか、ということを知るための反省材料となる。

１．教養科目について

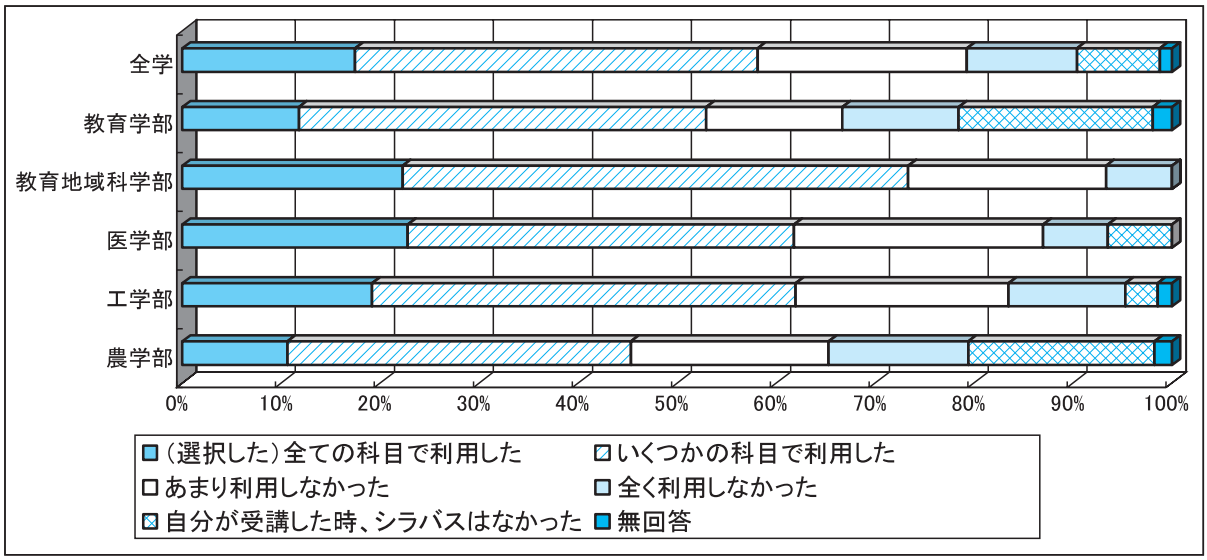
まず、教養科目が卒業生にはどのように位置づけられていたか(Q21-1)、である。「専門以外の分野を知る機会として」(58.5%)と「多様な考え方を知る機会として」(54.2%)が高い。この回答は在学生の場合と変わらない。その次に挙げられるのは「大学生の一般常識として」(41.9%)および「将来、良き社会人になるための一般教養として」(36.7%)の二つであり、これも、在学生の場合と変わらない。



図Ⅰ―３―３―１　あなたは教養科目をどのように位置付けていましたか。

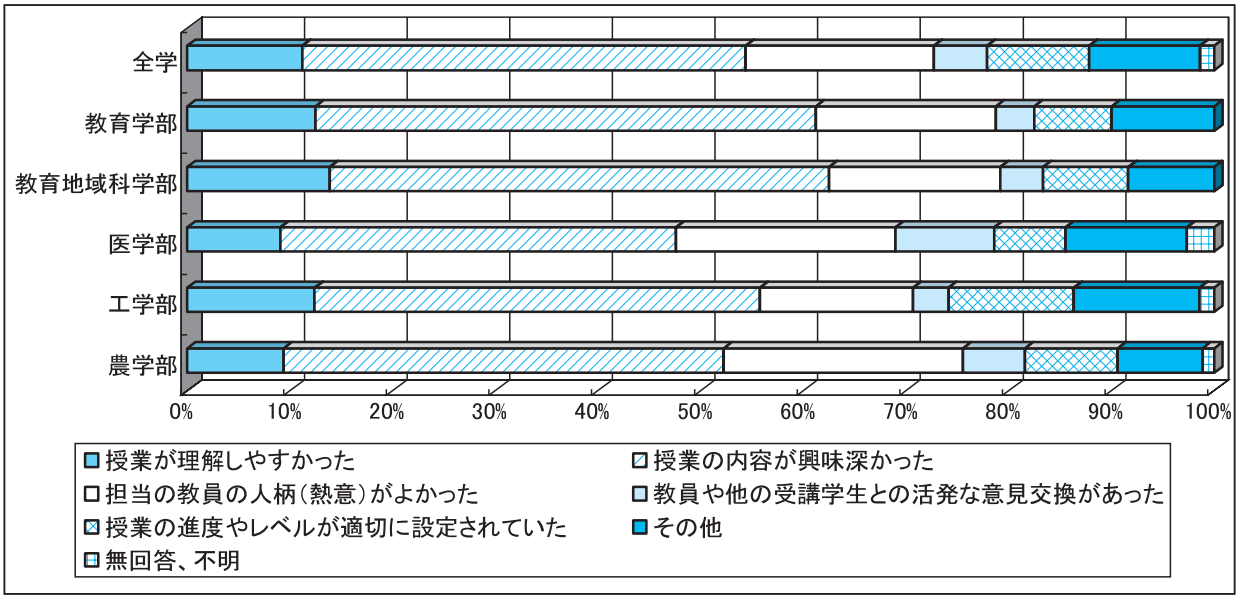
卒業生が在学生と著しい対照を示すのは、教養科目でのシラバスの利用である。在校生の場合、「(選択した) すべての科目で利用した」が 54.6%、「いくつかの科目で利用した」が 29.6%であり、この二つを合わせると、80%以上がシラバスをよく利用している、と言える。しかし、卒業生の場合、利用率ははるかに落ちる。「すべての科目で

利用した」は17.4%にすぎず、「いくつかの科目で利用した」も40.6%に止まる。この二つを合わせても、シラバスを良く利用した者は 60%に満たない。４年以前より現在の方が、シラバス利用のメリットが学生に理解され、シラバス自体も改善されて来ている、と言えよう。



図Ⅰ―３―３―２　教養科目を選択するためにシラバスを利用しましたか。

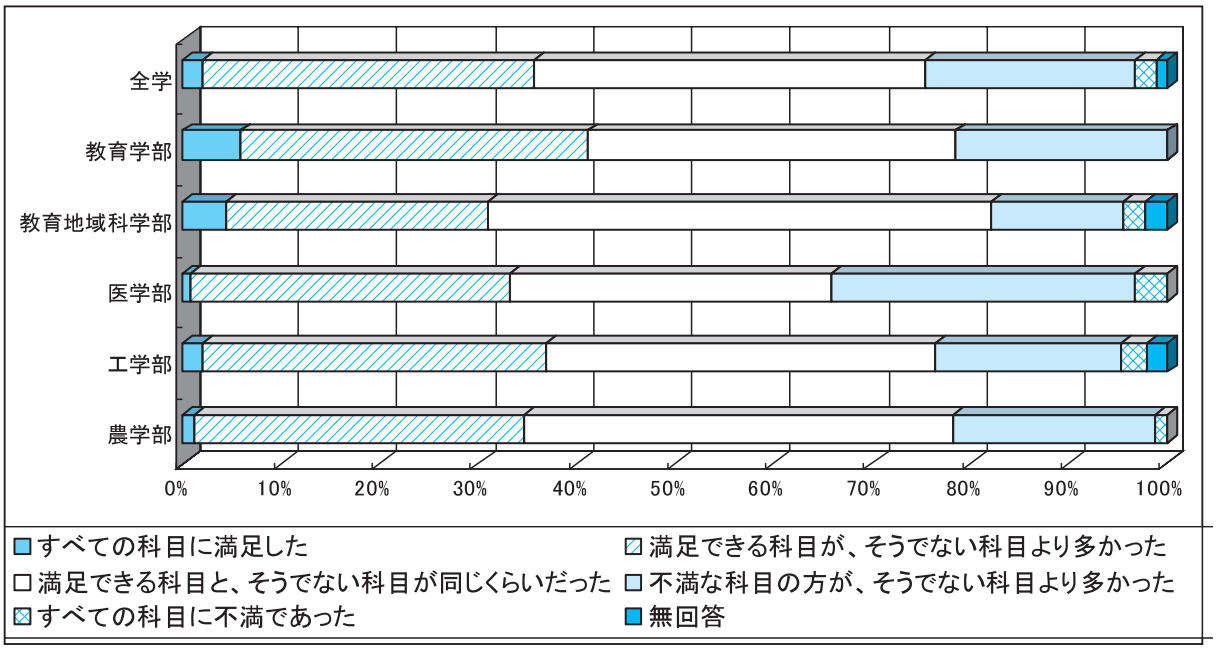
つぎに、教養科目の授業に卒業生がどの程度満足しているか、を検討する。まず、満足の内容、質についての問い(Q21-7)に対して、「授業の内容が興味深かった」65.0%と最も高く、ついで、「担当の教員の人柄（熱意）がよかった」(27.6%)、「授業が理解しやすかった」(16.8%)、と続く。この傾向は在学生と変わらない。やはり、講義内容に関心があればあるほど、満足度も高まる。



図Ⅰ―３―３―３　教養科目で、あなたが満足した点はどういう点ですか。

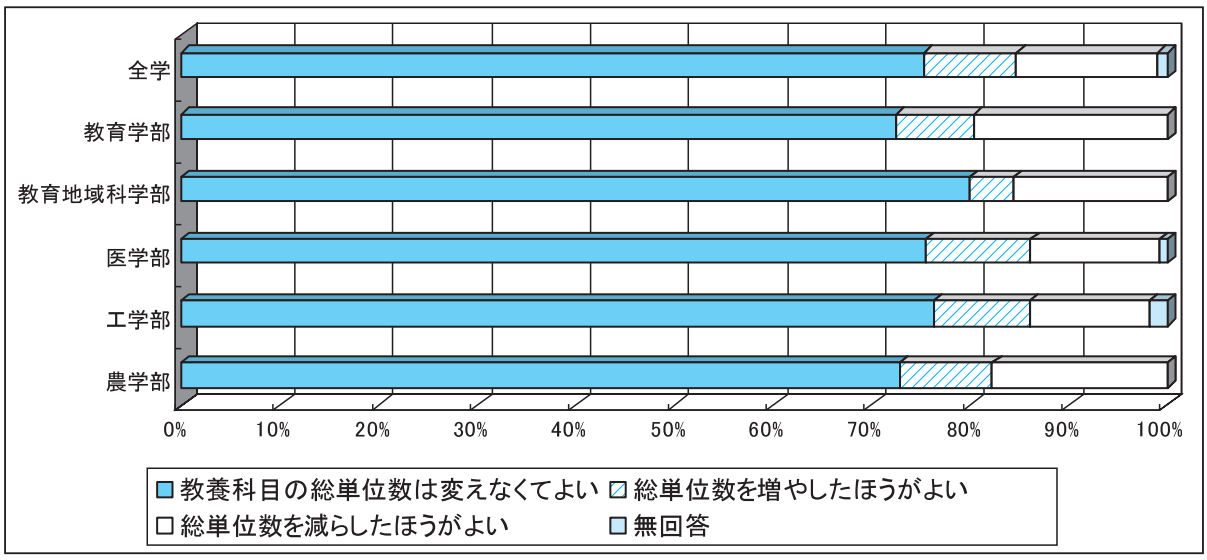
数多くの教養科目の満足度を、満足した科目数という観点から数量的に問う(Q21-8)、

「満足できる科目と、そうでない科目が同じくらいだった」が 40.0%と最も高く、ついで「満足できる科目が、そうでない科目より多かった」が 33.4%と続き、「不満な科目の方が、そうでない科目の方が多かった」が 21.2%ある。「すべての科目に満足した」は 2.1%と非常に少ない。この点では、在学生の方の満足度が、少々ではあるが高くなっている。カリキュラム改革により、学生を満足させる教養科目が多少は増えた、と言えよう。



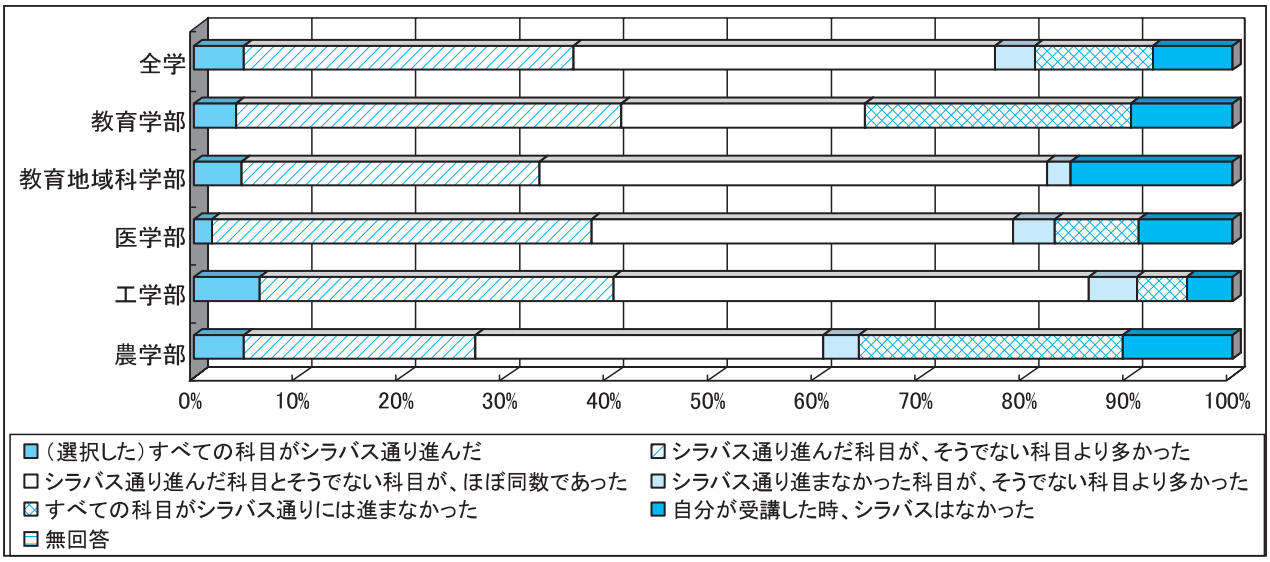
図Ⅰ―3―3―4　全般的に見て、教養科目に対するあなたの満足度は以下のどれですか。

最後に、卒業生が、自分が履修した教養科目の総単位数についてどう考えているかを問うと(Q21-6)、「変えなくてよい」が 75.4%と圧倒的に高く、「総単位数を減らしたほうがよい」は 14.3%にすぎない。よって、卒業生から見ると、教養科目の総単位数は妥当なものとなっている、と言える。



図Ⅰ―3―3―5　あなたが履修した教養科目の総単位数についてどう思いますか。

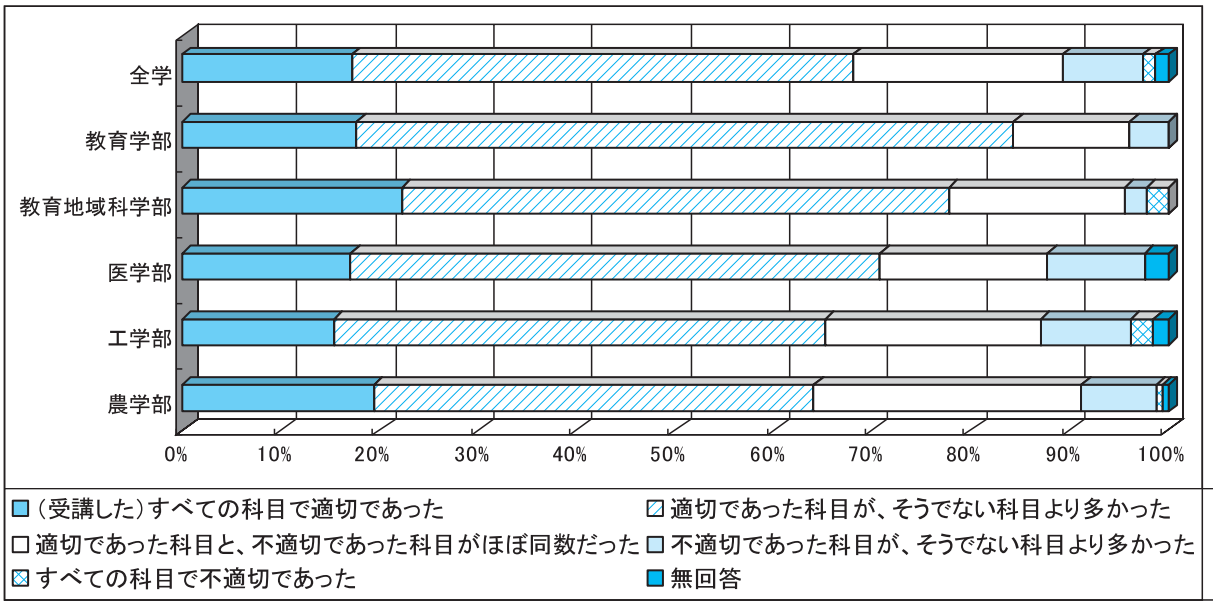
シラバスに実際の授業内容が合っていたか(Q21-3)という点から、教養科目の授業内容に対する評価を検討する。この問いに対する回答は、「シラバス通り進んだ科目とそうでない科目が、ほぼ同数であった」40.6%と最も高い率を示し、その次に、「シラバス通り進んだ科目が、そうでない科目より多かった」(31.9%)が続く。「(選択した)すべての科目がシラバス通り進んだ」は僅かに4.8%である。在校生の場合の17.5%より低い。言い換えると、カリキュラム改革後、シラバス通りに進む教養科目(名称が「主題科目」に変更)が増えてきている、ということである。



図Ⅰ―3―3―6　実際の授業とシラバスの関係はどうでしたか。

つぎに、成績のつけ方という観点からの、教員の評価を見てみる(Q21-5)。成績評価が「適切であった科目が、そうでない科目より多かった」が55.8%と最も高い。

ついで、「適切であった科目と、不適切であった科目がほぼ同数だった」が21.2%、「(受講した)すべての科目で適切であった」が17.2%と続く。「全ての科目が適切」と「半数以上が適切」を合わせると、約7割となる。こうして見ると、多くの卒業生が教養科目の成績評価は概ね妥当であった、と考えていると言えよう。



図Ⅰ―3―3―7　全般的に見て、教養科目の成績のつけ方は適切だと感じましたか。

２．共通基礎科目の英語について

卒業生の英語科目への評価は、第２章の実践科目の英語についてのところで分析・検討が行われているので、参照されたい。

３．共通基礎科目の第二外国語について

卒業生の第二外国語への評価は、第２章の実践科目の初修外国語のところで分析・検討が行われているので、参照されたい。

４．共通基礎科目の健康スポーツ科学実技について

Q24-１は、「健康スポーツ科学実技を学ぶ意義」についての卒業生に対する設問であるが、「友達とのコミュニケーション。」が約 22%、「健康の維持・増進」が約 21%と高く、次いで、「基礎体力の維持・向上」が約 19%、「ストレスの発散」が約 16%という順であった。在校生と似たような認識であり、時代的な変化は認められなかった。

Q24-２は、「健康スポーツ科学実技の授業に対する感想」であるが、最も多いのは「授業を学ぶ楽しさ」があげられ、約 37%という数値は在校生とほぼ同じであった。次に、高かったのが「実技的な適正なレベル」の約 24%であった。２つの回答は、在校生とほぼ同じ数値であった。卒業生の意見として特徴的だったのは、「何も感じるものがなく不満」という点が約 12%あったことである。実技種目は、必ずしも希望どおりの種目が選択できない場合もあるため、自分のやりたい種目以外に配分されるとなげやりな態度を示す学生の例などがあり、そのような事情もこのような数値としてあらわれたとも考えられる。

Q24-３は、「健康スポーツ科学実技に対する満足度」に関する調査であるが、①の「非常に満足している」と②の「満足している」を合わせると約 67%であり、在校生の約 75%よりやや低い数値であるが、教養科目（約 54%）、英語（約 23%）、第二外国語（約 39%）、専門基礎科目（約 45%）と比べてかなり高い数値が示されている。

Q24-４とQ24-５は、必須単位数と種目数に対する設問である。必須単位数については、「在学時のままでよい」が約 64%と顕著に多い意見であった。次いで、「必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい」という意見が約 17%あった。「在学時より増やす方がよい」は約 13%であった。種目数については、「在学時の種目数でよいと思う」が断然多く、約 48%と半数くらいの意見であった。「少ないと思う」という意見も約 24%と比較的多かった。この２つの調査にも、学部による差異はみられなかった。

Q24-６とQ24-７は、シラバスに関する調査であるが、利用度については「大いに利用した」と「まあまあ利用した」を合わせると 27%くらいの数値が示されており、在校生より若干多い数値であったが、在校生同様利用しなかった卒業生が約 58%と半数以上いたという結果が示された。実際の授業とシラバスとの関係に対する意見では「シラバス通り進むのでよかった」と答えている卒業生は 37%程度であり、在校生の回答より低い数値であった。シラバスの重要性に対する認識が教員に明確化されてきたのが近年であり、そのことがこの結果に現れているのであろう。

Q24-８とQ24-９は、健康スポーツ科学実技の成績評価に関する回答であるが、評価方法にかんしては、在校生同様「取り組む姿勢を重視して評価すべきである」が圧倒的に多く、約 55%と半数を越える意見であり、「出欠席を重視して評価すべきである」という意見も約 28%とかなり多かった。成績のつけ方については、「適切であった」と「ま

あまあ適切であった」を合わせると約 70%であり、この数値は在校生とまったく一致した数値であった。卒業生においても、この科目の成績評価は適切に行われていたと感じていることがわかった。

5．専門基礎科目

専門基礎科目に対する卒業生の意識と評価については、第２章の第１節のⅡ「個々の教育科目への評価と授業満足度」において分析・検討がなされているので参照されたい。

第 Ⅱ 部

専　門　教　育

第１章　教育地域科学・地域学部の専門教育を中心としてみた学生の意識と評価

第１節　教育地域科学部の専門教育に対する在学生の意識と評価

Ⅰ．はじめに

教育学部から教育地域科学部への移行期における学生教育の基本的状況

1980 年代に入ってから少子化の時代を迎え、児童・生徒数の長期にわたる全国的な減少が深刻化した。このような事態のもとで、教員養成学部の学生定員を全国で５千人削減する計画が実施され、鳥取大学も大きな変革をせまられた。鳥取大学では全学的な対応によって平成 11 年４月に従来の教育学部を改組・転換して、「教育学」と「地域科学」の２つからなるユニークな複合学部「教育地域科学部」を創設した。

ところが、教員養成学部の再編を求める動きはその後もとどまることなく、教員養成の拠点校をつくる方針が文部科学省から示された。鳥取大学では全国に先駆け、島根大学との協力のもと、教員の計画養成にあたる学生定員 70 名を島根大学に移し、かわりに島根大学教育学部０免課程の学生定員 100 名を鳥取大学に移すといった大改革を成し遂げた。このようにして平成 16 年４月から教育地域科学部は、教員養成機能を併せ持つ一般学部「地域学部」に生まれ変わった。

教育地域科学部の学部構成は、教育学部時代より引き継がれた「学校教育課程（定員 70 名）」に加えて、教員免許状の取得を卒業要件としない「人間文化課程（定員 30 名）」、さらに教員養成を行わない「地域政策課程（定員 30 名）」「地域科学課程（定員 30 名）」の４課程からなる。「地域のキー・パーソンの育成」という理念のもとで多彩な教育・研究が行われてきた。

一方、地域学部は、教育地域科学部への改革方針をさらにもう一歩進め、「環境」「文化」「教育」「政策」の４つをキーワードに「地域の公共課題」という視点から教育・研究を行う。つまり、人は皆、それぞれの地域に与えられた「環境（自然）」の中で暮らし、その環境から独自の「文化」を育み，発展させてきた。文化の担い手は、地域の「教育」によって受け継がれていく。地域の教育には、学齢期の学校教育だけでなく、社会人を対象とした生涯学習なども含まれる。この教育をとおして、地域が発展するための手立て、すなわち各地域の個性に合った具体的な「政策」を考えていくことになる。まさに現代社会に求められているものである。地域学部の学部構成は、上述の４つキーワードを反映したもので，「地域政策学科（定員 50 名）」「地域教育（定員 50 名）」「地域文化学科（定員 45 名）」「地域環境学科（定員 45 名）」の４学科からなる。教員免許の取得は選択制となり、卒業要件には含まれない。これが従来の教育学部と大きく異なる点である。

さて、教育学部から教育地域科学部へ、さらに地域学部へと進んだ改組は、方向性に一貫性がある。幅広い教育・研究分野を備えた教育学部をベースにして、「地域学」を形成し、新たな学問として位置づけていく一連の改革としては、理想的なかたちと外部から評価される。しかし教育・研究の現場にあっては、２度にわたる改組のなか、教員・学生ともに多大なる負担を強いられてきたことも事実である。一時期には３つの学部が併存する信じがたい状況まで生じた。しかも学部ごとに所属する教員グループが異なる事態が発生し、移行期特有の問題は避けられなかった。しかし、個々の学生にとっては、唯一の大学時代である。学部としてはできる限り良質な教育・研究を一貫して提供しなくてはならな

い。今回の「大学教育に関する調査」は、このような激動期に実施された。良質な教育・研究の機会を学生たちに提供できたかどうかを自己点検する貴重な機会である。

なお、教育地域科学部としては、２年～４年が調査対象であった。アンケートの回答件数（回答率）は、学校教育課程 79 件（32.8%）、人間文化課程 35 件（33.3%）、地域政策課程 32 件（32.3%）、地域科学課程 31 件（32.0%）であった。回収率でみた場合、課程による違いは認められない。しかし、「鳥取大学の現状と課題第８号」で報告された調査アンケート回収率が、ほとんどの課程で７割以上あるいは７割近くであった事実と比べ、今回の回収率はあまりにも低く、調査実施体制に大きな問題を残した。

２度にわたる改組の結果、教育地域科学部は５年間という極めて短期間の学部組織となってしまった。所属する（した）学生にとり極めて遺憾な状況と推察されるが、その実態を探る項目も今回の調査に含めた。

Ⅱ．教育地域科学部について

１．入学動機と大学・学部選択理由

教育地域学部への受験決定時期

教育地域科学部への受験を決めた時期については、５～６割の学生が「センター試験受験後」と答え、センター試験での自己採点結果と各種情報を照らし合わせて現実的に受験先を決めている実態がうかがえる。しかし４割近くの学生が、センター試験受験前に当学部の受験を決めている点も見逃せない。特に地域政策課程では、高校１・２年生の早い段階で受験の意志を固めていた学生が 18%近くおり、高校３年春までには 24%の学生が受験を決めている（Q28）。これには、「地元の大学だから」といった観点が多少反映しているようだ（Q31 参照）。

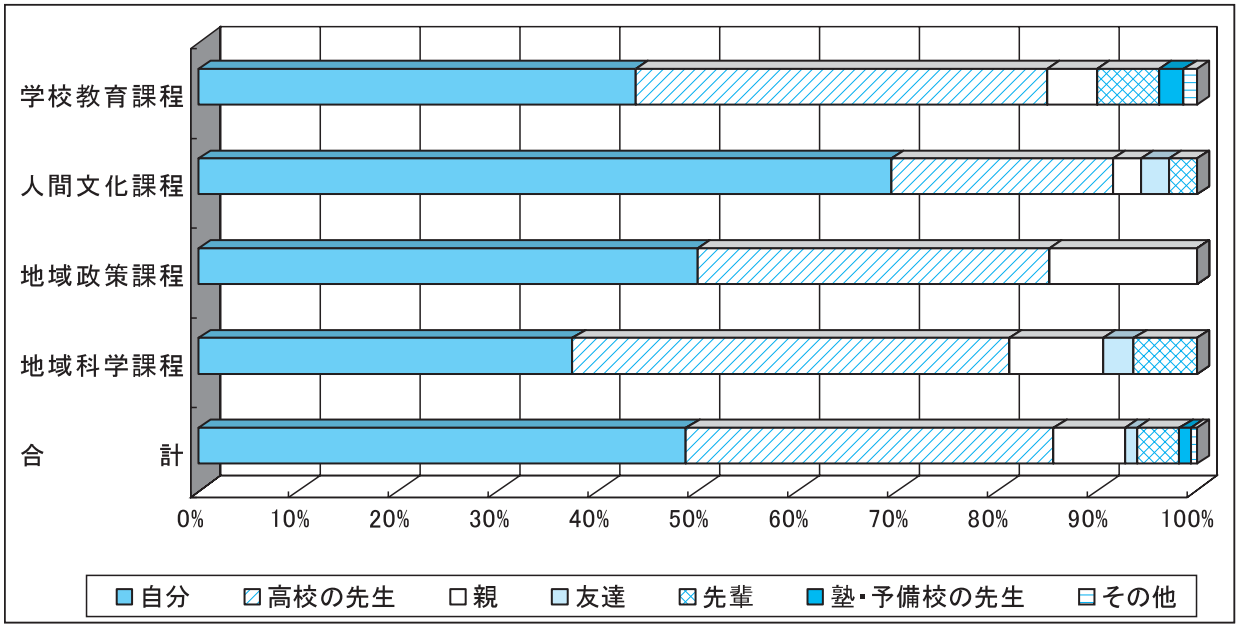
表Ⅱ―１―１―１　教育地域科学部への受験はいつ決めましたか。

	小・中学校	高校１・２年生	高校３年春	高校３年夏	高校３年秋	センター試験受験前	センター試験受験後	その他	無回答	合計
学校教育課程	1	4	8	5	13	3	42	3	1	80
	1.3%	5.0%	10.0%	6.3%	16.3%	3.8%	52.5%	3.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	1	1	5	1	4	2	21	1		36
	2.8%	2.8%	13.9%	2.8%	11.1%	5.6%	58.3%	2.8%	0.0%	100.0%
地域政策課程		6	2	1	2	2	20	1		34
	0.0%	17.6%	5.9%	2.9%	5.9%	5.9%	58.8%	2.9%	0.0%	100.0%
地域科学課程		1	2	3	3	3	18	2		32
	0.0%	3.1%	6.3%	9.4%	9.4%	9.4%	56.3%	6.3%	0.0%	100.0%
合計	2	12	17	10	22	10	101	7	1	182
	1.1%	6.6%	9.3%	5.5%	12.1%	5.5%	55.5%	3.8%	0.5%	100.0%

教育地域科学部への受験をすすめた助言者

約半数の学生が自分で考えて教育地域科学部への受験を決め、３～４割の学生が高校の先生の指導により受験を決定している実態がわかる。センター試験の結果を受けて現実的な対応をとったのであろう。人間文化課程では、７割の学生が自己意志で受験学部

を決定しており、学生気質の点で注目される（Q29)。地域政策課程では「親の勧め」が 15%を占め、地元の大学への進学と調和的である。



図Ⅱ―１―１―１　教育地域科学部への受験は誰の勧めで決めましたか。

表Ⅱ―１―１―２　教育地域科学部への受験は誰の勧めで決めましたか。

	自　分	高校の先　生	親	友　達	先　輩	塾・予備校の先　生	その他	合計
学校教育課程	35	33	4	0	5	2	1	80
	43.8%	41.3%	5.0%	0.0%	6.3%	2.5%	1.3%	100.0%
人間文化課程	25	8	1	1	1	0	0	36
	69.4%	22.2%	2.8%	2.8%	2.8%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	17	12	5	0	0	0	0	34
	50.0%	35.3%	14.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	12	14	3	1	2	0	0	32
	37.5%	43.8%	9.4%	3.1%	6.3%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	89	67	13	2	8	2	1	182
	48.9%	36.8%	7.1%	1.1%	4.4%	1.1%	0.5%	100.0%

２．入学した学部の評価、大学への期待と不満

志望からみた学部の評価

Q30 では、本意入学・不本意入学の実態を問うた。どこの課程でも２割弱の学生が、不本意入学であったと回答している。無視できない数字であろう。入学後にこれらの学生に対してどのようにして、勉学への動機付けをおこなっていくかで、課程全体の雰囲気が左右されるであろう。しかし回答が２年～４年であることを考慮すると、不本意入学であった学生も、それなりに納得して適応しながら、勉学を継続しているものと期待される。

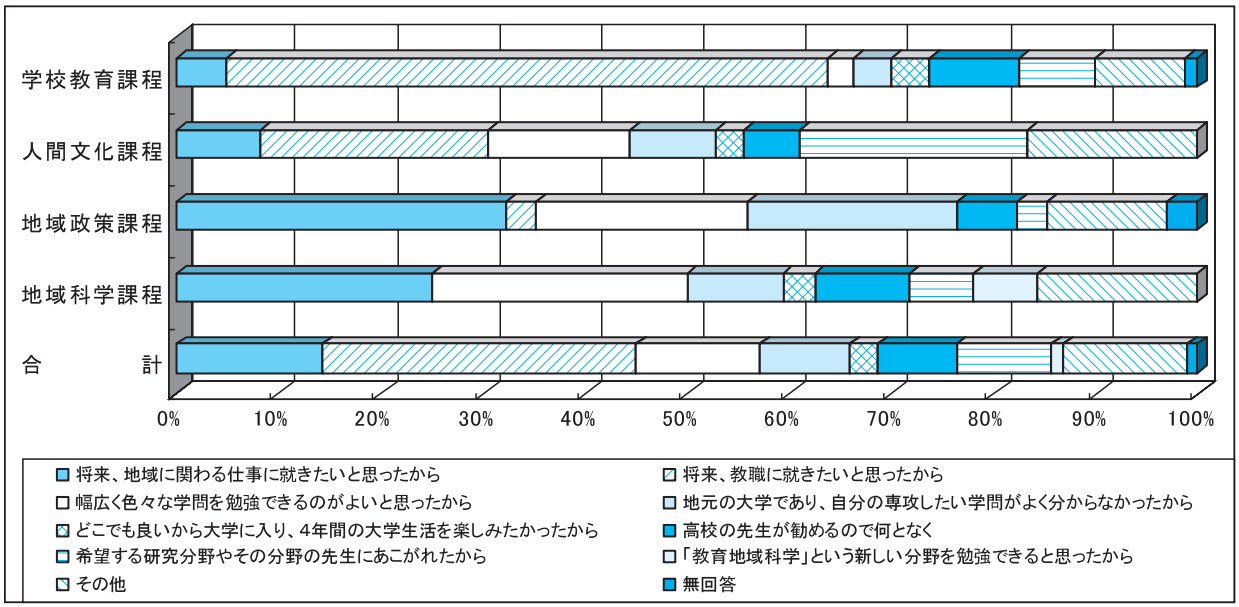
人間文化課程は、他の３課程と比べ不本意入学の割合が 11.1%と低い。自己意志で受験を決めた学生が多いことと関連していよう。学生気質が課程ごとに異なることを示唆している。

表Ⅱ―１―１―３　教育地域科学部への入学はあなたの希望通りでしたか。

	全く希望どおりであった	まずまず希望どおりであった	あまり希望どおりではなかった	全く希望どおりではなかった	その他	無回答	合計
学校教育課程	11	33	21	14	0	1	80
	13.8%	41.3%	26.3%	17.5%	0.0%	1.3%	100.0%
人間文化課程	8	15	9	4	0	0	36
	22.2%	41.7%	25.0%	11.1%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	5	10	13	6	0	0	34
	14.7%	29.4%	38.2%	17.6%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	2	17	8	5	0	0	32
	6.3%	53.1%	25.0%	15.6%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	26	75	51	29	0	1	182
	14.3%	41.2%	28.0%	15.9%	0.0%	0.5%	100.0%

教育地域科学部に入学した理由には、２つの傾向が認められた。「将来，教職に就きたいから」とする回答が学校教育課程では６割を占め、人間文化課程でも２割を占めているのに対して、地域政策課程や地域科学課程では「将来，地域に関わる仕事に就きたいから」や「幅広く色々な学問が勉強できるから」とする回答が２～３割前後を占め、対照的であった。「教育」と「地域」の２つの色が強く映し出されたものと思われる。このことは、教育学部から教育地域科学部へと改組してすでに５年が経過し、受験生への学部情報が的確に浸透した結果と判断される。

人間文化課程では「希望する研究分野やその分野の先生にあこがれたから」との回答が２割を超えた。Q29 とあわせ志望動機の高さが推察される。一方、地域政策課程では、「地元の大学であり、自分の専攻したい学問がよく分からなかったから」とする学生が２割を占めた。入学後、学生の意識改革を行う努力が求められよう（Q31）。



図Ⅱ―１―１―２　教育地域科学部に入学した理由は何ですか。

表Ⅱ―１―１―４　教育地域科学部に入学した理由は何ですか

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計
学校教育課程	4	47	2	3	3	7	6	0	7	1	80
	5.0%	58.8%	2.5%	3.8%	3.8%	8.8%	7.5%	0.0%	8.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	3	8	5	3	1	2	8	0	6	0	36
	8.3%	22.2%	13.9%	8.3%	2.8%	5.6%	22.2%	0.0%	16.7%	0.0%	100.0%
地域政策課程	11	1	7	7	0	2	1	0	4	1	34
	32.4%	2.9%	20.6%	20.6%	0.0%	5.9%	2.9%	0.0%	11.8%	2.9%	100.0%
地域科学課程	8	0	8	3	1	3	2	2	5	0	32
	25.0%	0.0%	25.0%	9.4%	3.1%	9.4%	6.3%	6.3%	15.6%	0.0%	100.0%
合計	26	56	22	16	5	14	17	2	22	2	182
	14.3%	30.8%	12.1%	8.8%	2.7%	7.7%	9.3%	1.1%	12.1%	1.1%	100.0%

１．将来、地域に関わる仕事に就きたいと思ったから
２．将来、教職に就きたいと思ったから
３．幅広く色々な学問を勉強できるのがよいと思ったから
４．地元の大学であり、自分の専攻したい学問がよく分からなかったから
５．どこでも良いから大学に入り、４年間の大学生活を楽しみたかったから
６．高校の先生が勧めるので何となく
７．希望する研究分野やその分野の先生にあこがれたから
８．「教育地域科学」という新しい分野を勉強できると思ったから
９．その他
１０．無回答

大学への期待

Q32とQ33では、大学に期待していることを問うた。どの課程においても「専門的な知識を身につける」と「社会人になったときに、すぐに役に立つ知識・技術・技能を

身につける」が５割以上を占め、次いで「広く教養を身につける」「各種の免許や資格を取得する」ことを期待している。教員が期待しがちな「学問に対する取り組み方法を身につける」ことは、学生にとり期待度が低いことを再認識すべきであろう。

学校教育課程では、「学習だけでなく，サークル活動・社会活動を通じて人間性を養う」ことを期待する学生がより多く認められ、教育者をめざす若者の心意気を感じる。

表Ⅱ―１―１―５　今あなたは、大学に何を期待していますか。（第１番目）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
学校教育課程	7	21	19	4	6	5	16	1	1	80
	8.8%	26.3%	23.8%	5.0%	7.5%	6.3%	20.0%	1.3%	1.3%	100.0%
人間文化課程	3	19	1	3	4	4	2	0	0	36
	8.3%	52.8%	2.8%	8.3%	11.1%	11.1%	5.6%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	1	8	11	7	1	2	4	0	0	34
	2.9%	23.5%	32.4%	20.6%	2.9%	5.9%	11.8%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	1	7	10	6	3	4	1	0	0	32
	3.1%	21.9%	31.3%	18.8%	9.4%	12.5%	3.1%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	12	55	41	20	14	15	23	1	1	182
	6.6%	30.2%	22.5%	11.0%	7.7%	8.2%	12.6%	0.5%	0.5%	100.0%

表Ⅱ―１―１―６　今あなたは、大学に何を期待していますか。（第２番目）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
学校教育課程	3	18	10	11	10	18	8	1	1	80
	3.8%	22.5%	12.5%	13.8%	12.5%	22.5%	10.0%	1.3%	1.3%	100.0%
人間文化課程	1	6	4	13	3	2	7	0	0	36
	2.8%	16.7%	11.1%	36.1%	8.3%	5.6%	19.4%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	1	7	8	4	4	4	6	0	0	34
	2.9%	20.6%	23.5%	11.8%	11.8%	11.8%	17.6%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	2	5	6	2	4	6	6	1	0	32
	6.3%	15.6%	18.8%	6.3%	12.5%	18.8%	18.8%	3.1%	0.0%	100.0%
合計	7	36	28	30	21	30	27	2	1	182
	3.8%	19.8%	15.4%	16.5%	11.5%	16.5%	14.8%	1.1%	0.5%	100.0%

１．学問に対する取り組み方法を身につける
２．専門的な知識を身につける
３．社会人になったときに、すぐに役に立つ知識・技術・技能を身につける
４．広く教養を身につける
５．物事を総合的に判断する能力を養う
６．学習だけでなく、サークル活動・社会活動を通じて人間性を養う
７．各種の免許や資格を取得する
８．その他
９．無回答

３．自分の学び方、授業への取り組み方、そして指導改善への希望

勉学の満足度

教育地域科学部での勉学に全般的に満足しているかどうかを問うた（Q35）。全体と

しては、「どちらとも言えない」を最頻として、両方向に分布が広がっている。課程ごとにみると、満足度：不満足度の比率が異なる。つまり、学校教育課程（35%：26%）、人間文化課程（39%：28%）、地域政策課程（18%：32%）、地域科学課程（28%：34%）となっている。ただしこの結果は、地域学部のものとも大いに異なる（地域・学生 Q35）。地域学部への改組で、学生・教員ともに大きく揺らいでいることの反映と思われる。地域政策課の学生が相対的に低い満足度であることと、Q36 の教員氏名の認知度の低さとは関連しているかもしれない。

教授方法・内容

授業の＜分かりやすさ－分かりにくさ＞を問うた（Q37）。全体でみると、「分かりやすい授業が多い」と「どちらかといえば分かりやすい授業が多い」が 41%を占め、「分かりにくい授業が多い」と「どちらかといえば分かりにくい授業が多い」の 19%よりも明らかに高い値であった。望ましい傾向である。今後も教授方法改善への意識を高め、さらに「分かりやすい授業」への努力を続けるべきであろう。

表Ⅱ―１―１―７　教員の授業の方法について、どう思いますか。

	分かりやすい授業が多い	どちらかといえば分かりやすい授業が多い	分かりやすい授業と分かりにくい授業が半々である	どちらかといえば分かりにくい授業が多い	分かりにくい授業が多い	その他	無回答	合計
学校教育課程	7	22	31	16	3	0	1	80
	8.8%	27.5%	38.8%	20.0%	3.8%	0.0%	1.3%	100.0%
人間文化課程	2	15	14	4	1	0	0	36
	5.6%	41.7%	38.9%	11.1%	2.8%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	3	10	13	4	2	2	0	34
	8.8%	29.4%	38.2%	11.8%	5.9%	5.9%	0.0%	100.0%
地域科学課程	1	14	12	4	0	1	0	32
	3.1%	43.8%	37.5%	12.5%	0.0%	3.1%	0.0%	100.0%
合計	13	61	70	28	6	3	1	182
	7.1%	33.5%	38.5%	15.4%	3.3%	1.6%	0.5%	100.0%

授業内容のレベルについては、「難しい授業とやさしい授業が半々である」を最頻として、両方向に分布が広がっている。この傾向は全課程に共通しており、講義内容の難易度についてはうまくバランスがとれているものと評価する。

少人数教育

Q39～Q42 では、少人数教育について学生の希望等を問うた。その結果、学生たちは少人数教育の実施を強く望んでいる実態が如実にあらわれた。

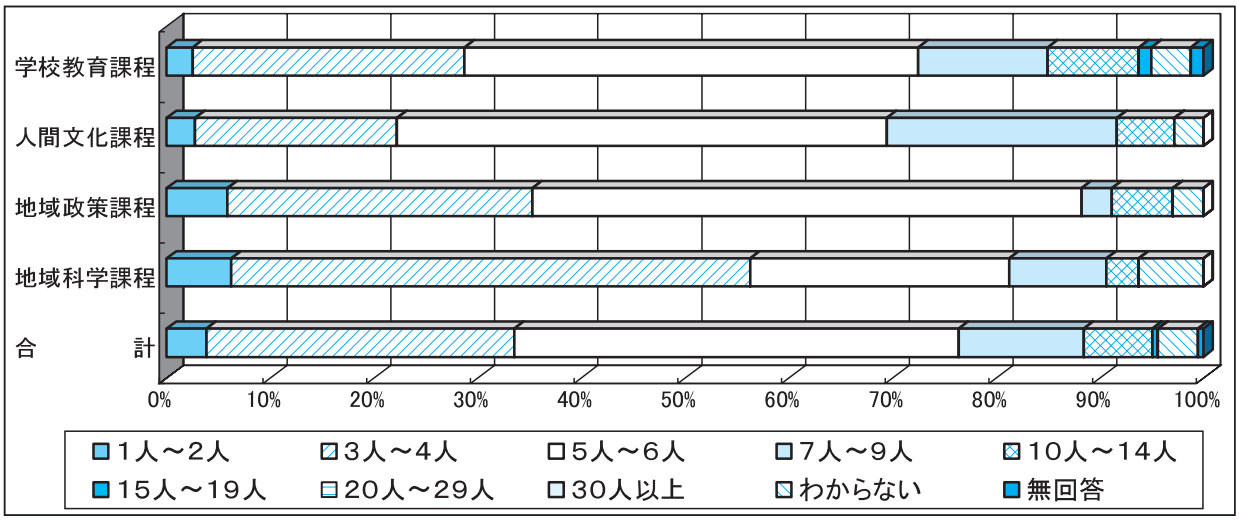
「勉学意欲が高まるので少人数教育の機会を大幅に増やして欲しい」と答えた学生が 23%、「もう少し増やして欲しい」が 31%と、５割の学生が少人数教育の機会増を希望している。一方、「減らして欲しい」と答えた学生は数％しかいない。少人数授業の受

講状況（Q40）をみると、週０コマが３割弱、１コマが４割、２コマが１割強、３コマ以上が１割強といった状況である。

表Ⅱ―１―１―８　ゼミなどの少人数教育について、お聞きします。

	勉学意欲が高まるので、少人数教育の機会を大幅に増やして欲しい	少人数教育の機会をもう少し増やして欲しい	現在実施されているもので、充分である	少人数教育の機会をもう少し減らして欲しい	勉学意欲が低下するので、少人数教育の機会を大幅に減らして欲しい	少人数教育は不要である	わからない	無回答	合計
学校教育課程	22	22	24	1	0	4	6	1	80
	27.5%	27.5%	30.0%	1.3%	0.0%	5.0%	7.5%	1.3%	100.0%
人間文化課程	10	16	7	1	1	0	1	0	36
	27.8%	44.4%	19.4%	2.8%	2.8%	0.0%	2.8%	0.0%	100.0%
地域政策課程	7	6	17	2	0	0	2	0	34
	20.6%	17.6%	50.0%	5.9%	0.0%	0.0%	5.9%	0.0%	100.0%
地域科学課程	3	12	9	1	1	1	5	0	32
	9.4%	37.5%	28.1%	3.1%	3.1%	3.1%	15.6%	0.0%	100.0%
合計	42	56	57	5	2	5	14	1	182
	23.1%	30.8%	31.3%	2.7%	1.1%	2.7%	7.7%	0.5%	100.0%

教員一人に対して最適と思われる学生数を問うた（Q42）。その結果、「５～６人」が 43%、次いで「３～４人」が 30%、「７～９人」が 12%と続いた。つまり 10 人未満の授業が最適であると考える学生が 85%を占めている。ただし「１～２人」は 4%と、あまり好まれていない。



図Ⅱ―１―１―３　少人数教育では、教員一人に対して、何人ほどの学生が最適だと思いますか。

表Ⅱ―１―１―９　少人数教育では、教員一人に対して、何人ほどの学生が最適だと思いますか。

	１人～２人	３人～４人	５人～６人	７人～９人	１０人～１４人	１５人～１９人	２０人～２９人	３０人以上	わからない	無回答	合計
学校教育課程	2	21	35	10	7	1	0	0	3	1	80
	2.5%	26.3%	43.8%	12.5%	8.8%	1.3%	0.0%	0.0%	3.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	1	7	17	8	2	0	0	0	1	0	36
	2.8%	19.4%	47.2%	22.2%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	100.0%
地域政策課程	2	10	18	1	2	0	0	0	1	0	34
	5.9%	29.4%	52.9%	2.9%	5.9%	0.0%	0.0%	0.0%	2.9%	0.0%	100.0%
地域科学課程	2	16	8	3	1	0	0	0	2	0	32
	6.3%	50.0%	25.0%	9.4%	3.1%	0.0%	0.0%	0.0%	6.3%	0.0%	100.0%
合計	7	54	78	22	12	1	0	0	7	1	182
	3.8%	29.7%	42.9%	12.1%	6.6%	0.5%	0.0%	0.0%	3.8%	0.5%	100.0%

これに対して、教育地域科学部で実際に受講している少人数授業での学生数は、「５～６人」が23%と最多で、「３～４人」19%、「７～９人」16%と続き、これらの合計が58%に達する。学生が最適と考えている人数での授業が、着実に実施されていることがわかる。さらに「１～２人」が 15%と高い値を示す。この「１～２人」の授業については教育効果の検証が望まれる。

表Ⅱ―１―１―10　少人数での授業について、教員一人に対して何人の学生で受けているものが多いですか。

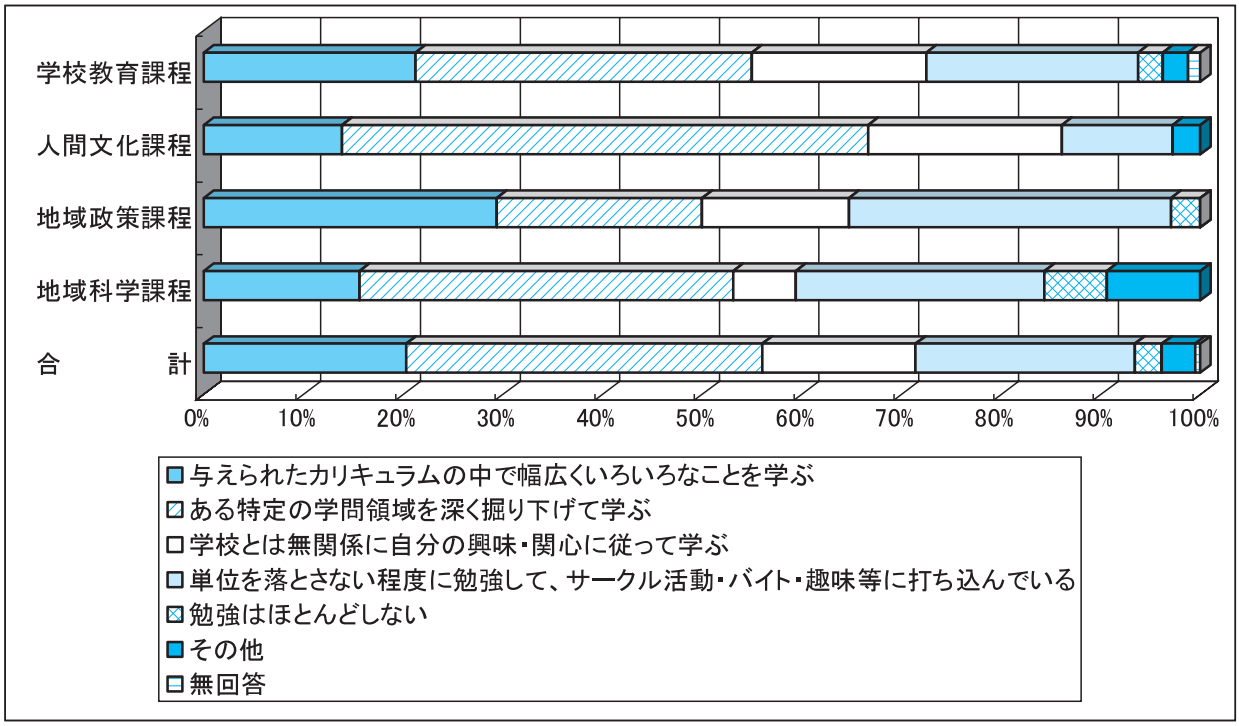
	１人～２人	３人～４人	５人～６人	７人～９人	１０人～１４人	１５人～１９人	２０人～２９人	３０人以上	わからない	無回答	合計
学校教育課程	10	14	20	12	13	2	1	0	7	1	80
	12.5%	17.5%	25.0%	15.0%	16.3%	2.5%	1.3%	0.0%	8.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	6	7	3	8	7	1	0	0	2	2	36
	16.7%	19.4%	8.3%	22.2%	19.4%	2.8%	0.0%	0.0%	5.6%	5.6%	100.0%
地域政策課程	4	8	10	4	0	0	0	0	6	2	34
	11.8%	23.5%	29.4%	11.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	17.6%	5.9%	100.0%
地域科学課程	8	6	9	5	0	0	0	0	4	0	32
	25.0%	18.8%	28.1%	15.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	100.0%
合計	28	35	42	29	20	3	1	0	19	5	182
	15.4%	19.2%	23.1%	15.9%	11.0%	1.6%	0.5%	0.0%	10.4%	2.7%	100.0%

自分の学び方

学生たちが基本的にどのような構えで勉学に取り組んでいるかを知るために、Q43で「今、どのような学び方をしているか」を問うた。全体としては、ある特定の学問領域を深く掘り下げて学ぶ」が36%、「与えられたカリキュラムの中で幅広くいろいろな

ことを学ぶ」が 20%、「自分の興味・関心に従って学ぶ」が 15%で、合計 71%の学生が積極的に学ぶ姿勢を示しているのに対して、「単位を落とさない程度に勉強して、サークル活動・バイト・趣味等に打ち込んでいる」が 22%を占め、「勉強をほとんどしない」学生が 3%も存在する。これら 1/4 の学生は消極的な学び方しかしておらず、勉学の動機付けに成功していないグループと指摘できる。これらの学生と不本意入学生との関連性を分析すべき点であった。

課程別にみると、人間文化課程の学生たちが最も積極的な学び方を示している。このことは、図書館の利用回数にも反映している。図書館を全く利用しない学生が、学校教育課程、人間文化課程、地域政策課程では２割程度、地域科学課程では４割近くも存在する（Q44）。今回の調査では、学年別の集計に値するだけの回答が集まらず、学年進行に伴う学び方の実態をとらえるまでには至らなかった。



図Ⅱ―１―１―４　あなたは今、どのような学び方をしていますか。

表Ⅱ―１―１―11　あなたは今、どのような学び方をしていますか。

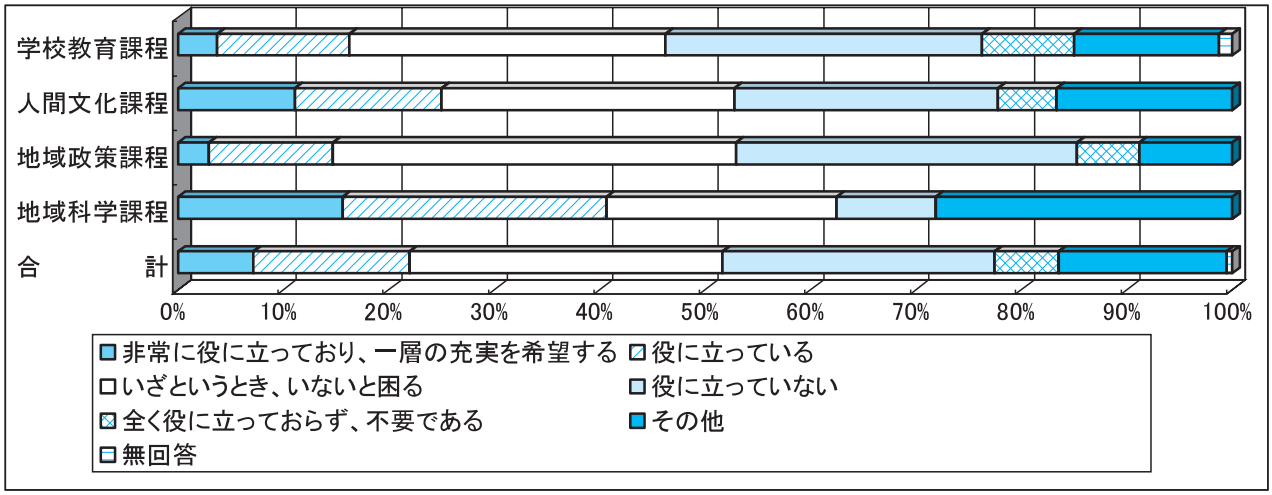
	1	2	3	4	5	6	7	合計
学校教育課程	17	27	14	17	2	2	1	80
	21.3%	33.8%	17.5%	21.3%	2.5%	2.5%	1.3%	100.0%
人間文化課程	5	19	7	4	0	1	0	36
	13.9%	52.8%	19.4%	11.1%	0.0%	2.8%	0.0%	100.0%
地域政策課程	10	7	5	11	1	0	0	34
	29.4%	20.6%	14.7%	32.4%	2.9%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	5	12	2	8	2	3	0	32
	15.6%	37.5%	6.3%	25.0%	6.3%	9.4%	0.0%	100.0%
合計	37	65	28	40	5	6	1	182
	20.3%	35.7%	15.4%	22.0%	2.7%	3.3%	0.5%	100.0%

１．与えられたカリキュラムの中で幅広くいろいろなことを学ぶ
２．ある特定の学問領域を深く掘り下げて学ぶ
３．学校とは無関係に自分の興味・関心に従って学ぶ
４．単位を落とさない程度に勉強して、サークル活動・バイト・趣味等に打ち込んでいる
５．勉強はほとんどしない
６．その他
７．無回答

学生支援システムの評価

学級教員やチューター制度（Q47）、カリキュラムに関するガイダンスやオリエンテーションの実施（Q48）、授業評価アンケートの教員への効果（教地Q46）について、有用性を問うた。

学級教員やチューター制度については、学部全体としては有用性を感じている回答が半数以上を占め、感じていない回答が３割におよんだ。特に地域科学課程では、６割以上の学生が有用性を指摘し、不要との回答がみられなかった。「その他」の回答内容が把握できない点は残念であるが、地域科学課程の学級教員がシステムとしてうまく機能しているものと指摘できる。

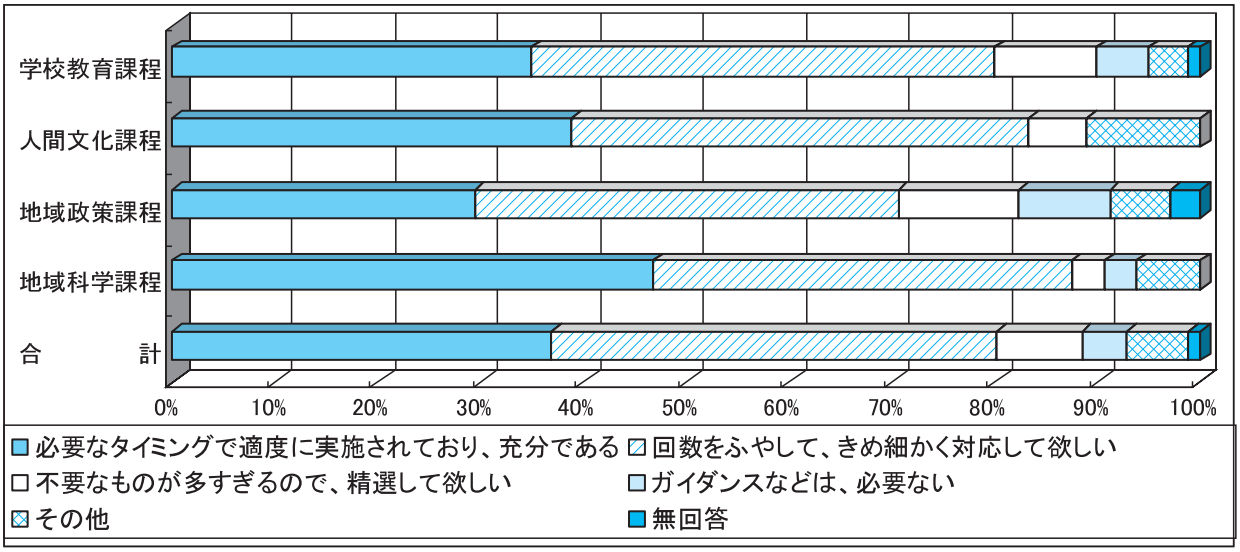


図Ⅱ―１―１―５　学級教員やチューター制度について、お聞きします。

表Ⅱ―１―１―12　学級教員やチューター制度について、お聞きします。

	非常に役に立っており、一層の充実を希望する	役に立っている	いざというとき、いないと困る	役に立っていない	全く役に立っておらず、不要である	その他	無回答	合計
学校教育課程	3	10	24	24	7	11	1	80
	3.8%	12.5%	30.0%	30.0%	8.8%	13.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	4	5	10	9	2	6	0	36
	11.1%	13.9%	27.8%	25.0%	5.6%	16.7%	0.0%	100.0%
地域政策課程	1	4	13	11	2	3	0	34
	2.9%	11.8%	38.2%	32.4%	5.9%	8.8%	0.0%	100.0%
地域科学課程	5	8	7	3	0	9	0	32
	15.6%	25.0%	21.9%	9.4%	0.0%	28.1%	0.0%	100.0%
合計	13	27	54	47	11	29	1	182
	7.1%	14.8%	29.7%	25.8%	6.0%	15.9%	0.5%	100.0%

ガイダンスやオリエンテーションの実施については、学部全体では「回数をふやして、きめ細かく対応して欲しい」が 43%を占め、次いで「必要なタイミングで適度に実施されており充分である」の 37%となっている。「ガイダンスなどは必要ない」とする回答は極めて少ない。近年の学生たちは、よりきめ細かいガイダンスの実施を望んでいる。特にカリキュラムのガイダンス等は、課程ごとに学級教員が指揮をとる場合が多く、学級教員の有用性についての回答結果とガイダンスについての回答結果とは，課程ごと比較してみると密接な関連性が認められる。ガイダンスの実施等は、学級教員やチューターの重要な役割のひとつと認識すべきで、学生支援システムとして今後ますます大切となろう。



図Ⅱ―１―１―６　カリキュラムに関する、ガイダンスやオリエンテーションの実施について、どう思いますか。

表Ⅱ―１―１―13　カリキュラムに関する、ガイダンスやオリエンテーションの実施について、どう思いますか。

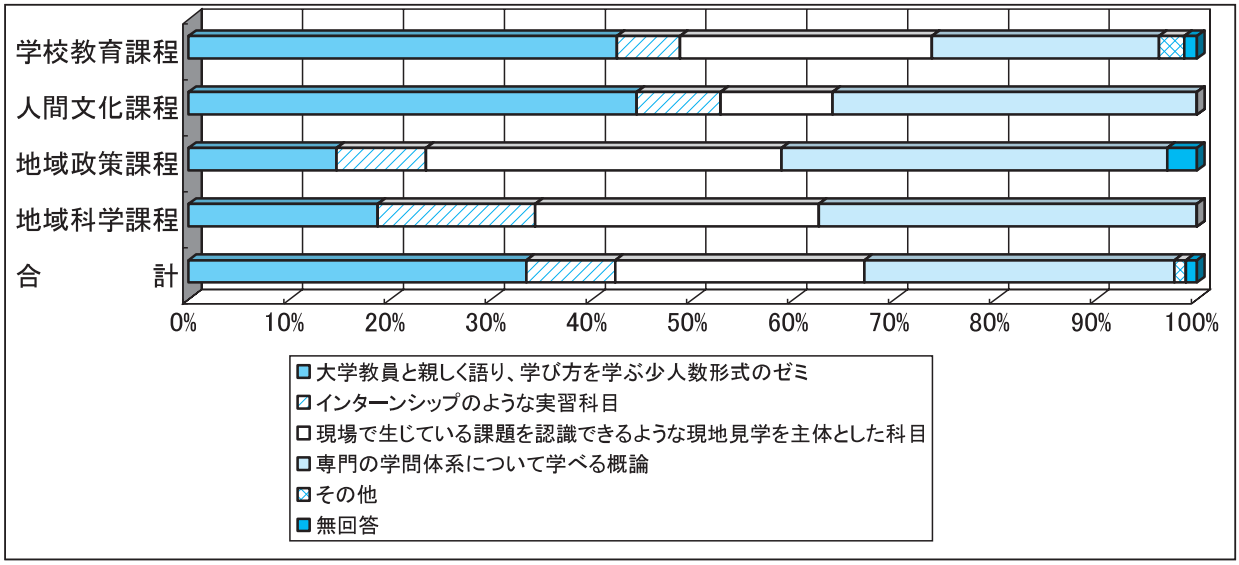
	必要なタイミングで適度に実施されており、充分である	回数をふやして、きめ細かく対応して欲しい	不要なものが多すぎるので、精選して欲しい	ガイダンスなどは、必要ない	その他	無回答	合計
学校教育課程	28	36	8	4	3	1	80
	35.0%	45.0%	10.0%	5.0%	3.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	14	16	2	0	4	0	36
	38.9%	44.4%	5.6%	0.0%	11.1%	0.0%	100.0%
地域政策課程	10	14	4	3	2	1	34
	29.4%	41.2%	11.8%	8.8%	5.9%	2.9%	100.0%
地域科学課程	15	13	1	1	2	0	32
	46.9%	40.6%	3.1%	3.1%	6.3%	0.0%	100.0%
合計	67	79	15	8	11	2	182
	36.8%	43.4%	8.2%	4.4%	6.0%	1.1%	100.0%

授業評価アンケートについては、学部全体でみて「参考になっていない教員が多い」とするマイナスの回答が６割近くを占め、「わからない」が２割、「教員の参考になっている」とするプラスの回答は、２割に満たない。学生たちがこのようなマイナスイメージを抱いているにもかかわらず、授業評価アンケートは毎年同じ形式で粛々と続けられている。至急改善しないと、授業評価アンケートに学生が誠意を持って答えなくなり、調査の意味が薄れることが危惧される。

１年次に開設を望む専門科目の希望

「１年次に専門科目としてどのような科目を望むか」を問うた（Q50）。この回答は、新入生が勉学意欲を向上させるのに適する科目と考えられ、カリキュラム改善に生かすべき視点である。

学校教育課程・人間文化課程と地域政策課程・地域科学課程とで、異なる傾向が認められた。学校教育課程・人間文化課程では、「大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」を４割以上の学生が望んでいる点が特徴であろう。次いで「専門の学問体系について学べる概論」や「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」が２～３割を占める。一方、地域政策課程・地域科学課程では、「専門の学問体系について学べる概論」が４割近くを占め、次いで「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」が３割前後であった。「教育」と「地域」の違いがここでも浮き彫りになっている。



図Ⅱ―１―１―７　あなたは１年次にどのような専門科目を最も望みますか。

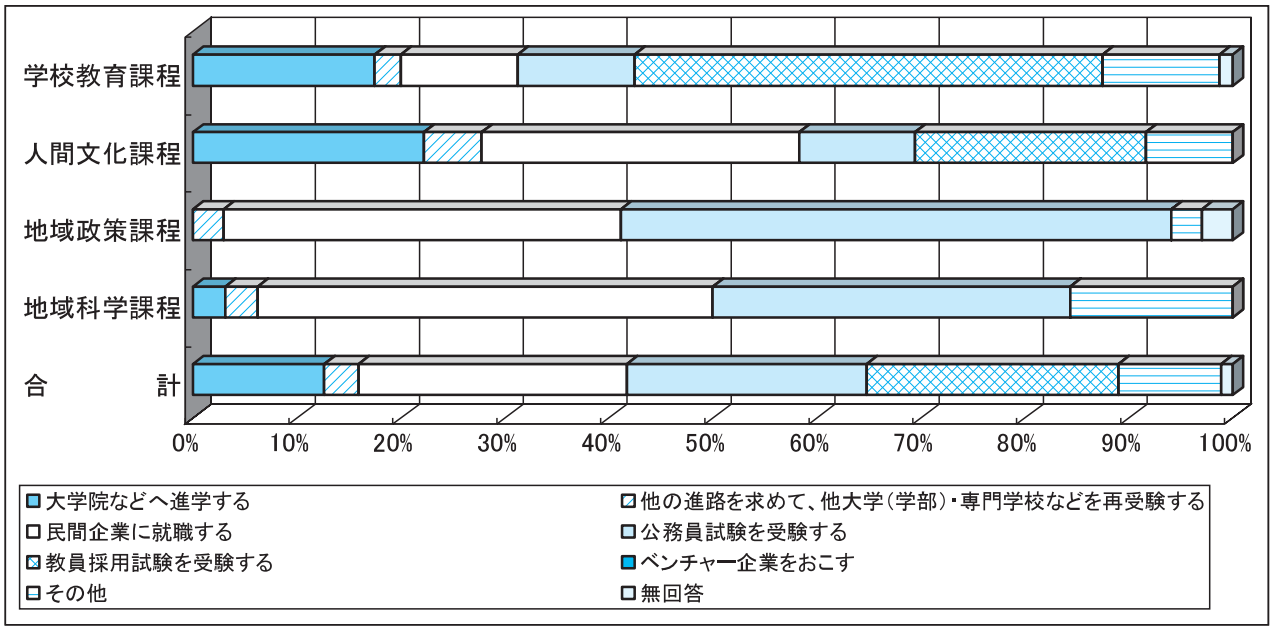
表Ⅱ―１―１―14　あなたは１年次にどのような専門科目を最も望みますか。

	大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ	インターンシップのような実習科目	現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目	専門の学問体系について学べる概論	その他	無回答	合計
学校教育課程	34	5	20	18	2	1	80
	42.5%	6.3%	25.0%	22.5%	2.5%	1.3%	100.0%
人間文化課程	16	3	4	13	0	0	36
	44.4%	8.3%	11.1%	36.1%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	5	3	12	13	0	1	34
	14.7%	8.8%	35.3%	38.2%	0.0%	2.9%	100.0%
地域科学課程	6	5	9	12	0	0	32
	18.8%	15.6%	28.1%	37.5%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	61	16	45	56	2	2	182
	33.5%	8.8%	24.7%	30.8%	1.1%	1.1%	100.0%

４．将来の進路希望

卒業後の進路希望およびカリキュラムとの整合性

卒業後の進路希望は、課程ごとに大きく異なる（Q51)。学校教育課程では「教員採用試験の受験」が 45%と最多であり、次いで「大学院進学」が 18%,「公務員試験の受験」と「民間企業への就職」がそれぞれ 11%を占める。人間文化課程では「民間企業への就職」が最も多く 31%であり、次いで「大学院進学」と「教員採用試験の受験」がそれぞれ 22%、「公務員試験の受験」が 11%を示す。これらとは対照的に地域政策課程では 53%が「公務員試験の受験」と答え、次いで「民間企業への就職」が 38%となっている。地域科学課程では「民間企業への就職」が最も多く 44%で、次いで「公務員試験の受験」35%となっている。課程ごとに進路希望に多様性が認められることは、ごく自然なりゆきであり、教育学部からの脱却が着実に進行している。



図Ⅱ―１―１―８　あなたは将来の進路をどのように考えていますか。

表Ⅱ―１―１―15　あなたは将来の進路をどのように考えていますか。

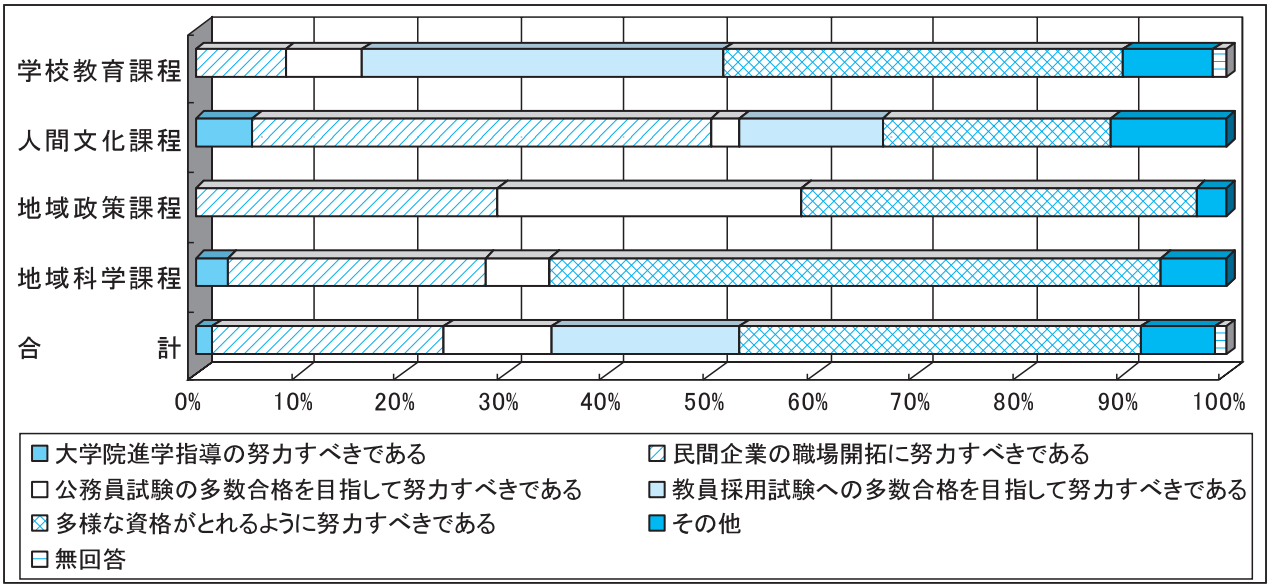
	大学院などへ進学する	他の進路を求めて、他大学（学部）・専門学校などを再受験する	民間企業に就職する	公務員試験を受験する	教員採用試験を受験する	ベンチャー企業をおこす	その他	無回答	合計
学校教育課程	14	2	9	9	36	0	9	1	80
	17.5%	2.5%	11.3%	11.3%	45.0%	0.0%	11.3%	1.3%	100.0%
人間文化課程	8	2	11	4	8	0	3	0	36
	22.2%	5.6%	30.6%	11.1%	22.2%	0.0%	8.3%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	1	13	18	0	0	1	1	34
	0.0%	2.9%	38.2%	52.9%	0.0%	0.0%	2.9%	2.9%	100.0%
地域科学課程	1	1	14	11	0	0	5	0	32
	3.1%	3.1%	43.8%	34.4%	0.0%	0.0%	15.6%	0.0%	100.0%
合計	23	6	47	42	44	0	18	2	182
	12.6%	3.3%	25.8%	23.1%	24.2%	0.0%	9.9%	1.1%	100.0%

Q54では、「専門教育のカリキュラムが就職に有利な条件を満たしているか」を問うた。

「満たしている」:「満たしていない」と判断した比率は、学校教育課程では56%:34%、人間文化課程では31%:64%、地域政策課程では29%:53%、地域科学課程では22%:67%であった。学校教育課程以外では、学生にとり就職先の明確なイメージを抱きにくいために、カリキュラムとの整合性も把握できないことがひとつの原因と思われる。また大学は、専門学校ではないわけで、「カリキュラムが即，就職に有利に働く」ことをめざすべきものでもない。「大学で学んだことが役立った」と、多くの卒業生が将来、感じてくれることを期待したい。

多様な進路希望に対して学部に希望する支援方法

「学生の多様な進路希望に対して、学部に期待する対処方法」について、全体としては「多様な資格が取れるように」が 39%と最多で、次いで「民間企業の職場開拓」が23%を占める。進路希望先が異なる課程ごとに、当然希望項目は異なるわけであるが、どの課程にも共通して「多様な資格の取得」希望が強い。資格神話はいまだに健在であるようだ。資格については、学部として議論を重ね、確固としたスタンスを確立し学生に明示すべき段階にきていると指摘できる。



図Ⅱ―１―１―９　学生の多様な進路希望に対して、学部はどのように対応して欲しいと思いますか。

表Ⅱ―１―１―16　学生の多様な進路希望に対して、学部はどのように対応して欲しいと思いますか。

	大学院進学指導の努力すべきである	民間企業の職場開拓に努力すべきである	公務員試験の多数合格を目指して努力すべきである	教員採用試験への多数合格を目指して努力すべきである	多様な資格がとれるように努力すべきである	その他	無回答	合計
学校教育課程	0	7	6	28	31	7	1	80
	0.0%	8.8%	7.5%	35.0%	38.8%	8.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	2	16	1	5	8	4	0	36
	5.6%	44.4%	2.8%	13.9%	22.2%	11.1%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	10	10	0	13	0	1	34
	0.0%	29.4%	29.4%	0.0%	38.2%	0.0%	2.9%	100.0%
地域科学課程	1	8	2	0	19	2	0	32
	3.1%	25.0%	6.3%	0.0%	59.4%	6.3%	0.0%	100.0%
合計	3	41	19	33	71	13	2	182
	1.6%	22.5%	10.4%	18.1%	39.0%	7.1%	1.1%	100.0%

５．学部のイメージ

教育地域科学部のイメージ

教育地域科学部に対するイメージを＜明るいー暗い＞を軸とする項目で問うた。「特別なイメージはない」が４～５割を占め、「どちらかというと暗い」24%・「暗くて希望がもてない」７%のマイナスイメージの方が、「どちらかというと明るい」21%・「明るく希望にあふれている」３%よりも高い。地域学部の結果は、対照的に逆の傾向を示す（地域・学生Q34）ことから、学部改組に伴い教育地域科学部がなくなることが、教育地域科学部へのイメージをマイナスに感じさせていると判断される（Q34)。

表Ⅱ―１―１―17　あなたの教育地域科学部に対するイメージをお聞かせください。

	明るい希望にあふれている	どちらかというと明るい	特別なイメージはない	どちらかというと暗い	暗くて希望が持てない	無回答	合計
学校教育課程	2	12	40	18	7	1	80
	2.5%	15.0%	50.0%	22.5%	8.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	3	10	14	8	1	0	36
	8.3%	27.8%	38.9%	22.2%	2.8%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	7	16	9	2	0	34
	0.0%	20.6%	47.1%	26.5%	5.9%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	9	12	8	3	0	32
	0.0%	28.1%	37.5%	25.0%	9.4%	0.0%	100.0%
合計	5	38	82	43	13	1	182
	2.7%	20.9%	45.1%	23.6%	7.1%	0.5%	100.0%

学部教員の名前の認知

学生たちが学部教員の名前をどれ程の数知っているかは、学生と教員の関係を知る１つの手がかりになると思われる（Q36)。

全体でみれば、「10～19 人」が 59%で最大であり、次いで「20～29 人」が 19%となっている。課程の教員の名前はほぼ全員で、それ以外に所属課程外の教員とも接点がある学生が多いことがうかがえる。地域政策課程で「10 人未満」が 27%と、他課程と比べ高い点が気がかりである。学生―教員の関係に改善が求められる。

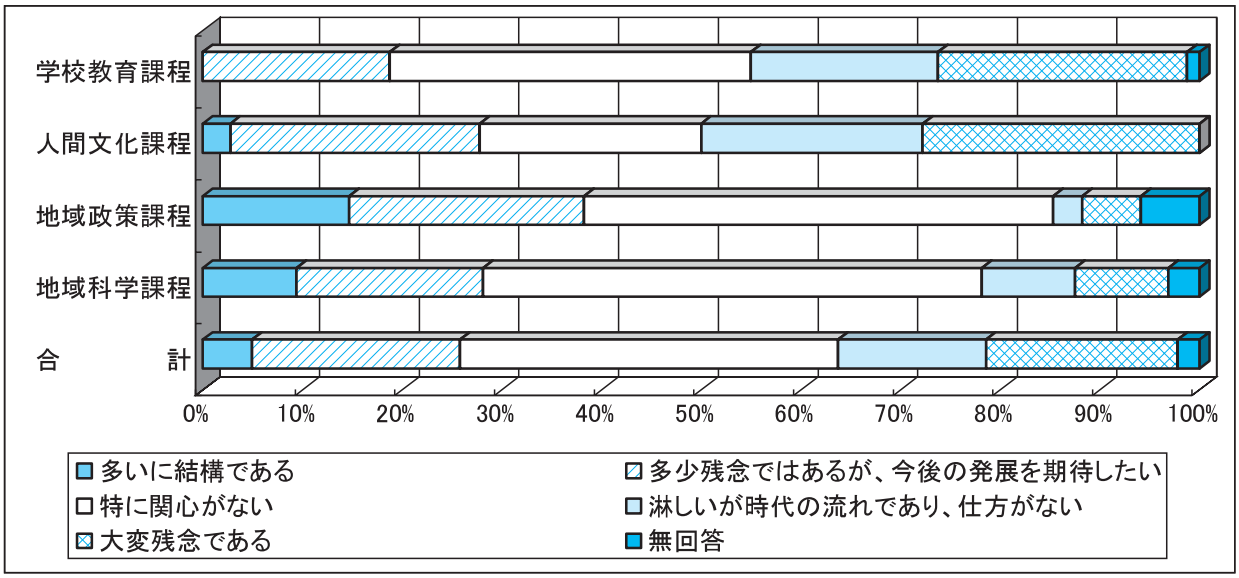
表Ⅱ―１―１―18　教育地域学部の教員の名前（姓）をどの程度知っていますか。

	10人未満	10人～19人	20人～29人	30人～39人	40人以上	無回答	合計
学校教育課程	10	41	20	7	1	1	80
	12.5%	51.3%	25.0%	8.8%	1.3%	1.3%	100.0%
人間文化課程	6	25	3	2	0	0	36
	16.7%	69.4%	8.3%	5.6%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	9	20	5	0	0	0	34
	26.5%	58.8%	14.7%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	3	21	7	0	1	0	32
	9.4%	65.6%	21.9%	0.0%	3.1%	0.0%	100.0%
合計	28	107	35	9	2	1	182
	15.4%	58.8%	19.2%	4.9%	1.1%	0.5%	100.0%

教育地域科学部から地域学部への改組

Q58で,「学部の改組についてどのように感じているか」を問うた。改組に対してプラス思考の回答は、学校教育課程19%、人間文化課程28%、地域政策課程38%、地域科学課程28%、一方マイナス思考の回答は、学校教育課程44%、人間文化課程50%、地域政策課程９%、地域科学課程19%であった。「無関心」「無回答」が地域２課程では半数を超えた。

教育２課程の方が、地域２課程とくらべ改組に対して明らかにマイナスのイメージが強い。地域学部の同じ設問（地域・学生Q58）と比較すると、当然のことではあるが、自ら所属する学部名の消滅について、やるせない気持ちが回答にあらわれている。



図Ⅱ―１―１―10　教育地域科学部は、地域学部へと改組されました。学部の変化について、どのように感じていますか。

表Ⅱ―１―１―19　教育地域科学部は、地域学部へと改組されました。学部の変化について、どのように感じていますか。

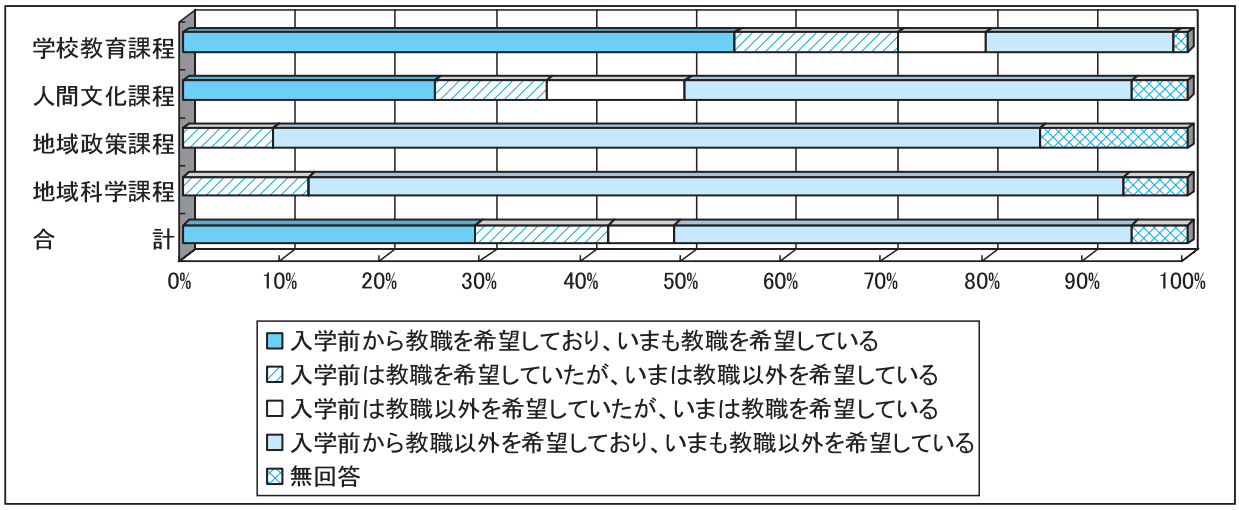
	多いに結構である	多少残念ではあるが、今後の発展を期待したい	特に関心がない	淋しいが時代の流れであり、仕方がない	大変残念である	無回答	合計
学校教育課程	0	15	29	15	20	1	80
	0.0%	18.8%	36.3%	18.8%	25.0%	1.3%	100.0%
人間文化課程	1	9	8	8	10	0	36
	2.8%	25.0%	22.2%	22.2%	27.8%	0.0%	100.0%
地域政策課程	5	8	16	1	2	2	34
	14.7%	23.5%	47.1%	2.9%	5.9%	5.9%	100.0%
地域科学課程	3	6	16	3	3	1	32
	9.4%	18.8%	50.0%	9.4%	9.4%	3.1%	100.0%
合計	9	38	69	27	35	4	182
	4.9%	20.9%	37.9%	14.8%	19.2%	2.2%	100.0%

Ⅲ．教員免許取得について

１．教員免許の取得希望と社会的評価

Q56 では、教職への希望について問うた。地域２課程については、「入学前は教職を希望していたが、いまは教職以外を希望している」学生が１割程存在する。その理由を問うたQ57 では「その他」が５割を占める。これは４年間での取得が不可能なことを知っての、希望変更と考えられる。地域２課程で教員免許取得が困難であることの広報が、いまだに一部には行き届いていないためと思われる。

学校教育課程では 64%の学生が、人間文化課程では 39%の学生が、それぞれ教職を希望している。両課程では入学後に進路を変更した学生がそれぞれ 25%いる。変更あるいは継続の理由として、学校教育課程では「教育実習を通して」が半数を占め、人間文化課程では「大学以外での体験を通して」「教育実習を通して」で約半数に達する。教職への適正を自ら判断する機会として、また教職への強い動機付けとして、教育実習が貴重な場であることが推察される。



図Ⅱ―１―１―11　あなたは教職をどの程度希望していますか。

表Ⅱ―１―１―20　あなたは教職をどの程度希望していますか。

	入学前から教職を希望しており、いまも教職を希望している	入学前は教職を希望していたが、いまは教職以外を希望している	入学前は教職以外を希望していたが、いまは教職を希望している	入学前から教職以外を希望しており、いまも教職以外を希望している	無回答	合計
学校教育課程	44	13	7	15	1	80
	55.0%	16.3%	8.8%	18.8%	1.3%	100.0%
人間文化課程	9	4	5	16	2	36
	25.0%	11.1%	13.9%	44.4%	5.6%	100.0%
地域政策課程	0	3	0	26	5	34
	0.0%	8.8%	0.0%	76.5%	14.7%	100.0%
地域科学課程	0	4	0	26	2	32
	0.0%	12.5%	0.0%	81.3%	6.3%	100.0%
合計	53	24	12	83	10	182
	29.1%	13.2%	6.6%	45.6%	5.5%	100.0%

表Ⅱ―１―１―21　前問において希望の変更の理由、あるいは希望の継続の契機は、何ですか。

	大学での教員のアドバイスを通して	大学での授業を通して	大学でのサークル・クラブ活動を通して	教育実習を通して	大学以外での体験を通して	その他	無回答	合計
学校教育課程	0	9	2	42	11	14	2	80
	0.0%	11.3%	2.5%	52.5%	13.8%	17.5%	2.5%	100.0%
人間文化課程	3	6	1	8	9	7	2	36
	8.3%	16.7%	2.8%	22.2%	25.0%	19.4%	5.6%	100.0%
地域政策課程	1	6	0	0	2	18	7	34
	2.9%	17.6%	0.0%	0.0%	5.9%	52.9%	20.6%	100.0%
地域科学課程	0	5	2	0	6	16	3	32
	0.0%	15.6%	6.3%	0.0%	18.8%	50.0%	9.4%	100.0%
合計	4	26	5	50	28	55	14	182
	2.2%	14.3%	2.7%	27.5%	15.4%	30.2%	7.7%	100.0%

２．多様な進路に対する認識

多少、意地の悪い質問と思われるもものの、「教職への道が困難であるとすれば、どのような道を選ぶか」を問うた（Q61）。教職への志望動機の強さ、あるいは多様な進路に対する認識を知るためである。

「なおかつ教職を求めて待つ」とする志望の強さが、学校教育課程では24%占めるのに対して、人間文化課程では８％にとどまり、対照的であった。学校教育課程では、「塾・専門学校などで教える」が11%に達し、教職への強い志望をうかがわせる。逆に「民間企業への就職」や「公務員試験を受験」が、学校教育課程では28%であるのに対して、人間文化課程では45％におよぶ。

表Ⅱ―１―１―22　教職への道が困難であるとすれば、あなたはどのような進路を選びますか。

	大学院などへ進学する	他の進路を求めて、他の大学（学部）・専門学校などを再受験する	民間企業へ就職する	公務員試験を受験する	なおかつ教職を求めて待つ	塾・専門学校などで教える	その他	無回答	合計
学校教育課程	8	3	14	8	19	9	11	8	80
	10.0%	3.8%	17.5%	10.0%	23.8%	11.3%	13.8%	10.0%	100.0%
人間文化課程	4	2	10	6	3	1	0	10	36
	11.1%	5.6%	27.8%	16.7%	8.3%	2.8%	0.0%	27.8%	100.0%
地域政策課程	0	0	0	0	0	0	0	34	34
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
地域科学課程	0	0	0	0	0	0	0	32	32
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
合計	12	5	24	14	22	10	11	84	182
	6.6%	2.7%	13.2%	7.7%	12.1%	5.5%	6.0%	46.2%	100.0%

第２節　地域学部の専門教育に対する在学生の意識と評価

Ⅰ．はじめに

教育地域科学部から地域学部への移行期における学生教育の基本的状況

1980 年代に入ってから少子化の時代を迎え、児童・生徒数の長期にわたる全国的な減少が深刻化した。このような事態のもとで、教員養成学部の学生定員を全国で５千人削減する計画が実施され、鳥取大学も大きな変革をせまられた。鳥取大学では全学的な対応によって平成 11 年４月に従来の教育学部を改組・転換して、「教育学」と「地域科学」の２つからなるユニークな複合学部「教育地域科学部」を創設した。

ところが、教員養成学部の再編を求める動きはその後もとどまることなく、教員養成の拠点校をつくる方針が文部科学省から示された。鳥取大学では全国に先駆け、島根大学との協力のもと、教員の計画養成にあたる学生定員 70 名を島根大学に移し、かわりに島根大学教育学部０免課程の学生定員 100 名を鳥取大学に移すといった大改革を成し遂げた。このようにして平成 16 年４月から教育地域科学部は、教員養成機能を併せ持つ一般学部「地域学部」に生まれ変わった。

教育地域科学部の学部構成は、教育学部時代より引き継がれた「学校教育課程（定員 70 名）」に加えて、教員免許状の取得を卒業要件としない「人間文化課程（定員 30 名）」、さらに教員養成を行わない「地域政策課程（定員 30 名）」「地域科学課程（定員 30 名）」の４課程からなる。「地域のキー・パーソンの育成」という理念のもとで多彩な教育・研究が行われてきた。

一方、地域学部は，教育地域科学部への改革方針をさらにもう一歩進め、「環境」「文化」「教育」「政策」の４つをキーワードに「地域の公共課題」という視点から教育・研究を行う。つまり、人は皆、それぞれの地域に与えられた「環境（自然）」の中で暮らし、その環境から独自の「文化」を育み，発展させてきた。文化の担い手は、地域の「教育」によって受け継がれていく。地域の教育には、学齢期の学校教育だけでなく、社会人を対象とした生涯学習なども含まれる。この教育をとおして、地域が発展するための手立て、すなわち各地域の個性に合った具体的な「政策」を考えていくことになる。まさに現代社会に求められているものである。地域学部の学部構成は、上記の４つキーワードを反映したもので、「地域政策学科（定員 50 名）」「地域教育（定員 50 名）」「地域文化学科（定員 45 名）」「地域環境学科（定員 45 名）」の４学科からなる。教員免許の取得は選択制となり、卒業要件には含まれない。これが従来の教育学部と大きく異なる点である。

さて、教育学部から教育地域科学部へ、さらに地域学部へと進んだ改組は、方向性に一貫性がある。幅広い教育・研究分野を備えた教育学部をベースにして、「地域学」を形成し、新たな学問として位置づけていく一連の改革としては、理想的なかたちと外部から評価される。しかし教育・研究の現場にあっては、２度にわたる改組のなか、教員・学生ともに多大なる負担を強いられてきたことも事実である。一時期には３つの学部が併存する信じがたい状況まで生じた。しかも学部ごとに所属する教員グループが異なる事態が発生し、移行期特有の問題は避けられなかった。しかし、個々の学生にとっては、唯一の大学時代である。学部としてはできる限り良質な教育・研究を一貫して提供しなくてはならない。今回の「大学教育に関する調査」は、このような激動期に実施された。良質な教育・研究の機会を学生たちに提供できたかどうかを自己点検する貴重な機会である。

なお地域学部としては、１年生のみが調査対象であった。１年生特有の回答が寄せられる可能性が高い。しかし、アンケートへの回答件数(回答率)は、地域政策学科 11 件(21.2%)、

地域教育学科 15 件（27.3%）、地域文化学科 11 件（23.4%）、地域環境学科 11 件（22.0%）といずれも極端に少ない（低い）。教育地域科学部の回収率と比較しても 10%程低い。残念ながら本調査の分析が統計的にどこまで意味があるのかについては大いに疑問が残る。

地域学部のカリキュラムや学生指導については、新たにはじまったばかりで試行錯誤の手探り段階にある。学部独自でも別途１年生を対象としたアンケートが実施されており、さらに学科によっては独自のアンケート調査も実施されているようだ。１年生が似かよったアンケートに閉口したことが、今回の回収率の低さに影響したかもしれない。

Ⅱ．地域学部について

１．入学動機と大学・学部選択理由

地域学部への受験決定時期

地域学部への受験を決めた時期については、８―９割の学生が「センター試験受験後」と答え、センター試験での自己採点結果と各種情報を照らし合わせて現実的に受験先を決めている実態がうかがえる。しかし数人の学生は、高校１・２年生の段階で受験を決めている。地域政策学科と地域文化学科でこの傾向がやや強い（Q28）。

表Ⅱ―１―２―１　地域学部への受験はいつ決めましたか。

	小・中学校	高校１・２年生	高校３年生春	高校３年生夏	高校３年生秋	センター試験受験前	センター試験受験後	合計
地域教育学科	0	0	0	2	1	0	12	15
	0.0%	0.0%	0.0%	13.3%	6.7%	0.0%	80.0%	100.0%
地域文化学科	0	1	0	0	0	1	9	11
	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	81.8%	100.0%
地域政策学科	0	2	1	0	1	0	7	11
	0.0%	18.2%	9.1%	0.0%	9.1%	0.0%	63.6%	100.0%
地域環境学科	0	0	1	0	0	0	10	11
	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	90.9%	100.0%
合計	0	3	2	2	2	1	38	48
	0.0%	6.3%	4.2%	4.2%	4.2%	2.1%	79.2%	100.0%

地域学部への受験をすすめた助言者

地域環境学科以外では、４～５割の学生が自分で考えて地域学部への受験を決め、３～４割の学生が高校・塾・予備校の先生の指導により受験を決定している実態がわかる。地域環境学科では、高校の先生の指導により受験を決めた学生が６割以上を占める。地域政策学科では約２割が親のすすめで受験を決めている。（Q29）。

表Ⅱ―１―２―２　地域学部への受験は誰の勧めで決めましたか。

	自分	高校の先生	親	友達	先輩	塾・予備校の先生	その他	合計
地域教育学科	7	5	1	0	0	1	1	15
	46.7%	33.3%	6.7%	0.0%	0.0%	6.7%	6.7%	100.0%
地域文化学科	6	3	0	0	0	2	0	11
	54.5%	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%	18.2%	0.0%	100.0%
地域政策学科	5	2	2	0	0	2	0	11
	45.5%	18.2%	18.2%	0.0%	0.0%	18.2%	0.0%	100.0%
地域環境学科	3	7	1	0	0	0	0	11
	27.3%	63.6%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	21	17	4	0	0	5	1	48
	43.8%	35.4%	8.3%	0.0%	0.0%	10.4%	2.1%	100.0%

２．入学した学部の評価、大学への期待と不満

志望からみた学部の評価

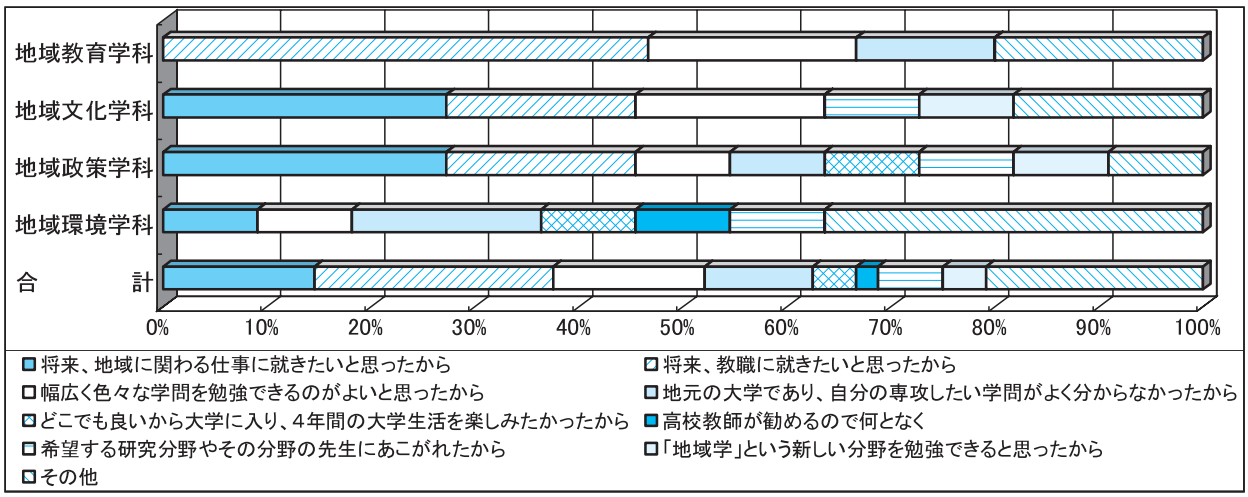
Q30 では、本意入学・不本意入学の実態を問うた。不本意入学であったと回答している割合が驚くほど高い。地域政策学科 36%、地域教育学科 47%、地域文化学科 46%、地域環境学科 73%であり、はたして新学部特有の問題とすませられるのであろうか。地域環境学科では、「全く希望通りでなかった」が 28%を占め、「全く希望通りであった」は 0%と惨たんたる状況である。事実を厳粛に受け止め、入学後にいかにして学生の勉学への動機付けをおこなっていくかが、真に問われている。

表Ⅱ―１―２―３　地域学部への入学はあなたの希望どおりでしたか。

	全く希望通りであった	まずまず希望通りであった	あまり希望通りではなかった	全く希望通りではなかった	その他	合計
地域教育学科	3	4	5	2	1	15
	20.0%	26.7%	33.3%	13.3%	6.7%	100.0%
地域文化学科	3	3	4	1	0	11
	27.3%	27.3%	36.4%	9.1%	0.0%	100.0%
地域政策学科	3	4	3	1	0	11
	27.3%	36.4%	27.3%	9.1%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	3	5	3	0	11
	0.0%	27.3%	45.5%	27.3%	0.0%	100.0%
合計	9	14	17	7	1	48
	18.8%	29.2%	35.4%	14.6%	2.1%	100.0%

地域学部に入学した理由には、地域政策学科と地域文化学科では「将来、地域に関わる仕事に就きたいと思ったから」とする回答が３割近くを占め、「将来教職に就きたい

と思ったから」が２割弱であった。地域教育学科では５割弱が「将来教職に就きたいと思ったから」で、次いで「幅広く色々な学問が勉強できるのがよいと思ったから」が２割を占めた。地域環境学科で「地元の大学であり、自分の専攻したい学問がよくわからなかった」「どこでもよいから大学に入り、４年間の大学生活を楽しみたかったから」「高校教師が勧めるので何となく」といった消極的な理由が、４割弱であった。大学へ進学する目的意識の低さが、不本意入学に影響しているのであれば、これらの学生はどこの大学に進学しようが、不本意であったかもしれない。「その他」の回答が多くみられ、その内容を聞き出す必要がある（Q31）。



図Ⅱ―１―２―１　地域学部に入学した理由は何ですか。

表Ⅱ―１―２―４　地域学部に入学した理由は何ですか。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
地域教育学科	0	7	3	2	0	0	0	0	3	15
	0.0%	46.7%	20.0%	13.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	100.0%
地域文化学科	3	2	2	0	0	0	1	1	2	11
	27.3%	18.2%	18.2%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	9.1%	18.2%	100.0%
地域政策学科	3	2	1	1	1	0	1	1	1	11
	27.3%	18.2%	9.1%	9.1%	9.1%	0.0%	9.1%	9.1%	9.1%	100.0%
地域環境学科	1	0	1	2	1	1	1	0	4	11
	9.1%	0.0%	9.1%	18.2%	9.1%	9.1%	9.1%	0.0%	36.4%	100.0%
合計	7	11	7	5	2	1	3	2	10	48
	14.6%	22.9%	14.6%	10.4%	4.2%	2.1%	6.3%	4.2%	20.8%	100.0%

１．将来、地域に関わる仕事に就きたいと思ったから
２．将来、教職に就きたいと思ったから
３．幅広く色々な学問を勉強できるのがよいと思ったから
４．地元の大学であり、自分の専攻したい学問がよく分からなかったから
５．どこでも良いから大学に入り、４年間の大学生活を楽しみたかったから
６．高校教師が勧めるので何となく
７．希望する研究分野やその分野の先生にあこがれたから
８．「地域学」という新しい分野を勉強できると思ったから
９．その他

大学への期待

Q32とQ33では、大学に期待していることを問うた。どの学科においても「専門的な知識を身につける」と「社会人になったときに、すぐに役に立つ知識・技術・技能を身につける」が４～５割以上を占め、次いで地域政策学科では「学習だけでなく、サークル活動・社会活動等を通じて人間性を養う」こと、地域教育学科では「各種の免許や資格を取得する」こと、地域環境学科では「広く教養を身につける」ことを第１に期待している。教員が期待しがちな「学門に対する取り組み方法を身につける」ことは、地域教育学科で１名回答があったのみで、学生にとり期待度が低いことを再認識すべきであろう。

第２に期待することとしては、地域文化学科と地域環境学科で「各種の免許や資格を取得する」ことが半数近くを占め、地域政策学科では、「物事を総合的に判断する能力を養う」ことへの期待度が相対的に高い。

表Ⅱ―１―２―５　今あなたは、大学に何を期待していますか。（第１番目）

	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
地域教育学科	1	4	2	0	1	0	5	2	15
	6.7%	26.7%	13.3%	0.0%	6.7%	0.0%	33.3%	13.3%	100.0%
地域文化学科	0	2	3	2	2	1	1	0	11
	0.0%	18.2%	27.3%	18.2%	18.2%	9.1%	9.1%	0.0%	100.0%
地域政策学科	0	3	3	2	0	3	0	0	11
	0.0%	27.3%	27.3%	18.2%	0.0%	27.3%	0.0%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	3	2	3	0	1	1	1	11
	0.0%	27.3%	18.2%	27.3%	0.0%	9.1%	9.1%	9.1%	100.0%
合計	1	12	10	7	3	5	7	3	48
	2.1%	25.0%	20.8%	14.6%	6.3%	10.4%	14.6%	6.3%	100.0%

表Ⅱ―１―２―６　今あなたは、大学に何を期待していますか。（第２番目）

	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
地域教育学科	0	3	1	2	3	3	3	0	15
	0.0%	20.0%	6.7%	13.3%	20.0%	20.0%	20.0%	0.0%	100.0%
地域文化学科	0	1	0	2	1	2	5	0	11
	0.0%	9.1%	0.0%	18.2%	9.1%	18.2%	45.5%	0.0%	100.0%
地域政策学科	0	3	0	4	3	0	1	0	11
	0.0%	27.3%	0.0%	36.4%	27.3%	0.0%	9.1%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	0	1	2	1	2	5	0	11
	0.0%	0.0%	9.1%	18.2%	9.1%	18.2%	45.5%	0.0%	100.0%
合計	0	7	2	10	8	7	14	0	48
	0.0%	14.6%	4.2%	20.8%	16.7%	14.6%	29.2%	0.0%	100.0%

１．学問に対する取り組み方法を身につける
２．専門的な知識を身につける
３．社会人になったときに、すぐに役に立つ知識・技術・技能を身につける
４．広く教養を身につける
５．物事を総合的に判断する能力を養う
６．学習だけでなく、サークル活動・社会活動を通じて人間性を養う
７．各種の免許や資格を取得する
８．その他

３．自分の学び方、授業への取り組み方、そして指導改善への希望勉学の満足度

地域学部での勉学に全般的に満足しているかどうかを問うた（Q35)。全体としては、「どちらとも言えない」を最頻として、両方向に分布が広がっている。課程ごとにみると、満足度：不満足度の比率が大きく異なる。つまり、地域政策学科（64%：18%)、地域教育学科（13%：67%)、地域文化学科（36%：46%)、地域環境学科（９%：18%)となっている。地域政策学科では、満足度が高く、地域教育学科で不満度が高い。この結果は、教育地域科学部のものと大きく異なる。学年による差か、それとも改組に伴う差か、今後の追跡調査が必要である。

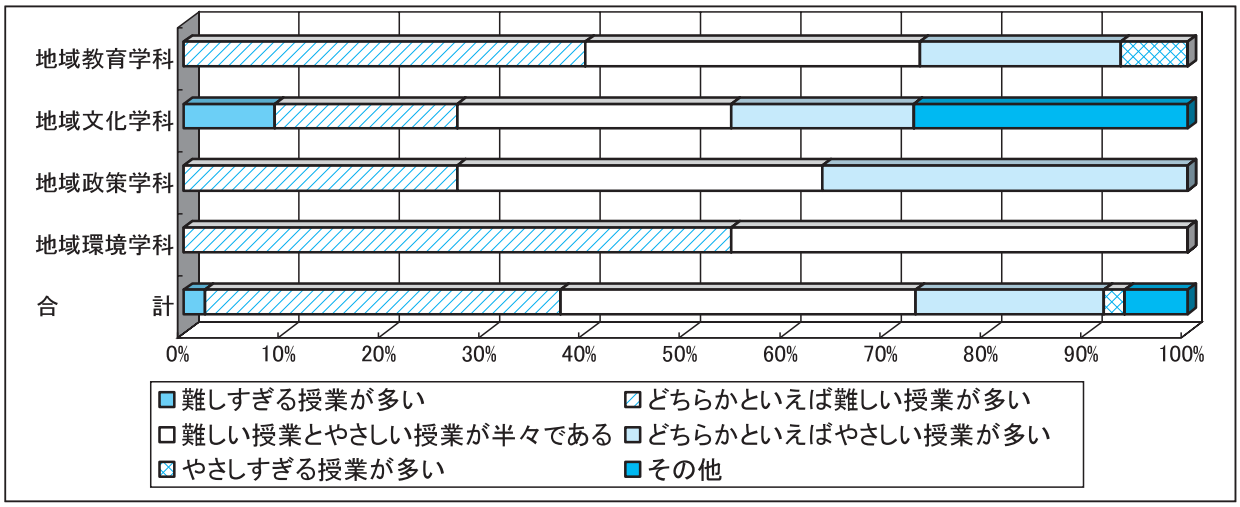
教授方法・内容

授業の＜分かりやすさ－分かりにくさ＞を問うた（Q37)。全体でみると、「分かりやすい授業が多い」と「どちらかといえば分かりやすい授業が多い」が 40%を占め、「分かりにくい授業が多い」と「どちらかといえば分かりにくい授業が多い」の 27%よりも高い値であった。しかし教育地域科学部と比較すると、「わかりにくい授業」の比率が高い。教員はほぼ同であるため、学年による理解度の違いが反映していると考えられる。特に地域教育学科では「分かりにくい授業が多い」と「どちらかといえば分かりにくい授業が多い」が 47%を占め、このことが勉学一般への不満足度の高さ（Q35）にあらわれている。１年生向け講義のあり方を検討する必要がある。

表Ⅱ―１―２―７　教員の授業の方法について、どう思いますか。

	分かりやすい授業が多い	どちらかといえば分かりやすい授業が多い	分かりやすい授業と分かりにくい授業が半々である	どちらかといえば分かりにくい授業が多い	分かりにくい授業が多い	その他	合計
地域教育学科	0	4	4	6	1	0	15
	0.0%	26.7%	26.7%	40.0%	6.7%	0.0%	100.0%
地域文化学科	2	4	1	1	2	1	11
	18.2%	36.4%	9.1%	9.1%	18.2%	9.1%	100.0%
地域政策学科	2	4	3	2	0	0	11
	18.2%	36.4%	27.3%	18.2%	0.0%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	3	7	1	0	0	11
	0.0%	27.3%	63.6%	9.1%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	4	15	15	10	3	1	48
	8.3%	31.3%	31.3%	20.8%	6.3%	2.1%	100.0%

授業内容のレベルについては、学科ごとに傾向が異なる。「難しすぎる」「難しい」と答えた割合と「易しすぎる」「易しい」と答えた割合は、地域政策学科では（27%:36%)、地域教育学科（40%：27%)、地域文化学科（27%：18%)、地域環境学科（55%：0%)であった。地域教育学科と地域環境学科で、授業レベルを難しいと感じる学生が多く認められるが、Q37 の教員の教授方法と照らせ合わすと、地域環境学科では難しい内容を分かりやすく教える工夫がなされていると評価できる。



図Ⅱ―１―２―２　授業内容のレベルについて、どう思いますか。

表Ⅱ―１―２―８　授業内容のレベルについて、どう思いますか。

	難しすぎる授業が多い	どちらかといえば難しい授業が多い	難しい授業とやさしい授業が半々である	どちらかといえばやさしい授業が多い	やさしすぎる授業が多い	その他	合計
地域教育学科	0	6	5	3	1	0	15
	0.0%	40.0%	33.3%	20.0%	6.7%	0.0%	100.0%
地域文化学科	1	2	3	2	0	3	11
	9.1%	18.2%	27.3%	18.2%	0.0%	27.3%	100.0%
地域政策学科	0	3	4	4	0	0	11
	0.0%	27.3%	36.4%	36.4%	0.0%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	6	5	0	0	0	11
	0.0%	54.5%	45.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	1	17	17	9	1	3	48
	2.1%	35.4%	35.4%	18.8%	2.1%	6.3%	100.0%

少人数教育

Q39～Q42 では、少人数教育について学生の希望等を問うた。１年生であるため、少人数教育の受講経験もまだ少なく、少人数教育といったものを充分に理解できていない状況があらわれた。

それにしても、「勉学意欲が高まるので少人数教育の機会を大幅に増やして欲しい」と答えた学生が 15%、「もう少し増やして欲しい」が 35%と、５割の学生が少人数教育の機会増を希望している。一方、「減らして欲しい」と答えた学生は 6%しかいない点は注目される。「わからない」との回答が２割ほど認められることは仕方がないことであろう。

人数授業の受講状況（Q40）をみると、週０コマが３割弱、１コマが 5 割弱、２コマが１割、３コマ以上が少々といった状況である。Q41 で「何人の受講生で受けている少人数授業が多いか」を問うたが、地域文化学科や地域環境学科では「わからない」がそれぞれ 55%、73%を占め、少人数教育そのものをまだ理解していないようだ。

表Ⅱ―１―２―９　ゼミなどの少人数教育について、お聞きします。

	勉学意欲が高まるので、少人数教育の機会を大幅に増やして欲しい	少人数教育の機会をもう少し増やして欲しい	現在実施されているもので、充分である	少人数教育の機会をもう少し減らして欲しい	勉学意欲が低下するので、少人数教育の機会を大幅に減らして欲しい	少人数教育は不要である	わからない	合計
地域教育学科	2	4	5	1	1	0	2	15
	13.3%	26.7%	33.3%	6.7%	6.7%	0.0%	13.3%	100.0%
地域文化学科	3	4	0	0	1	0	3	11
	27.3%	36.4%	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	27.3%	100.0%
地域政策学科	0	6	4	0	0	0	1	11
	0.0%	54.5%	36.4%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	100.0%
地域環境学科	2	3	1	0	0	0	5	11
	18.2%	27.3%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	45.5%	100.0%
合計	7	17	10	1	2	0	11	48
	14.6%	35.4%	20.8%	2.1%	4.2%	0.0%	22.9%	100.0%

教員一人に対して最適と思われる学生数を問うた（Q42)。その結果、「５～６人」が 33%、次いで「７～９人」が 19%、「10～14 人」が 19%と続いた。高学年の回答と比べると、「３～４人」での受講など少人数での受講状況をまだ想像できない段階にあると思われる。少人数教育を経験してはじめて、その効果が認識されることが、教育地域科学部（２～４年）との比較で明らかになった。

表Ⅱ―１―２―10　少人数教育では、教員一人に対して、何人ほどの学生が最適だと思いますか。

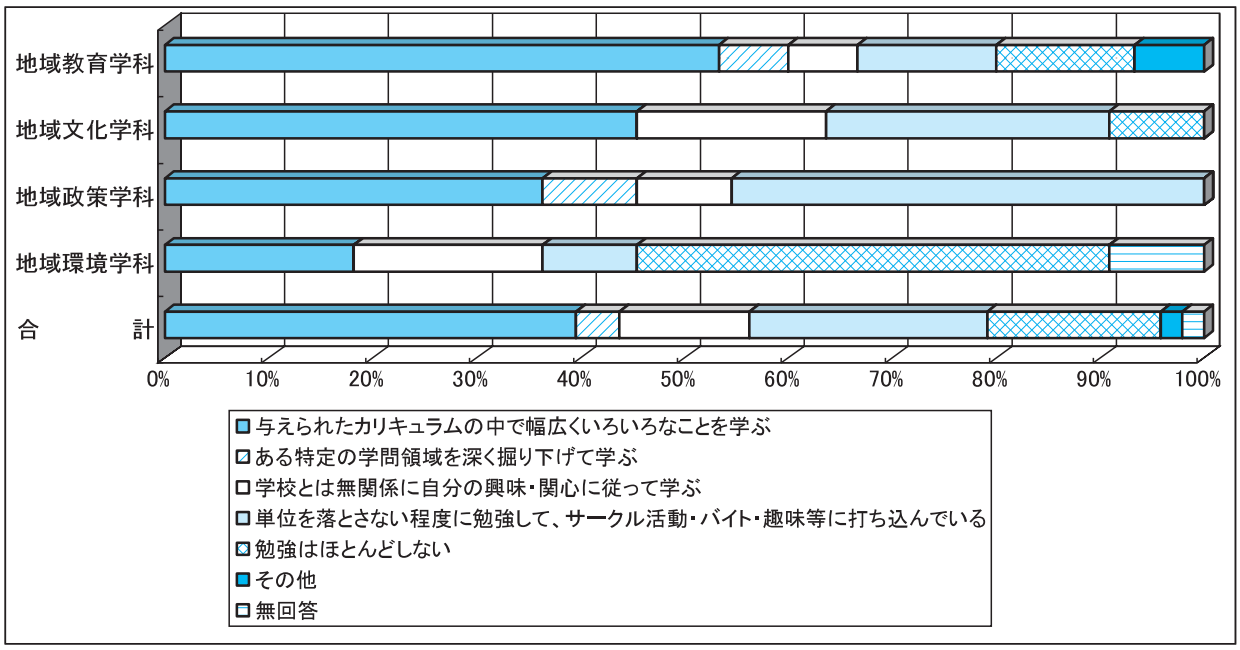
	１人～２人	３人～４人	５人～６人	７人～９人	１０人～１４人	１５人～１９人	２０人～２９人	３０人以上	わからない	合計
地域教育学科	0	1	6	1	3	2	0	0	2	15
	0.0%	6.7%	40.0%	6.7%	20.0%	13.3%	0.0%	0.0%	13.3%	100.0%
地域文化学科	2	1	3	1	1	1	0	0	2	11
	18.2%	9.1%	27.3%	9.1%	9.1%	9.1%	0.0%	0.0%	18.2%	100.0%
地域政策学科	0	1	4	4	2	0	0	0	0	11
	0.0%	9.1%	36.4%	36.4%	18.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	0	3	3	3	0	0	0	2	11
	0.0%	0.0%	27.3%	27.3%	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%	18.2%	100.0%
合計	2	3	16	9	9	3	0	0	6	48
	4.2%	6.3%	33.3%	18.8%	18.8%	6.3%	0.0%	0.0%	12.5%	100.0%

自分の学び方

学生たちが基本的にどのような構えで勉学に取り組んでいるかを知るために、地Q43 で「今、どのような学び方をしているか」を問うた。全体としては、「与えられたカリキュラムの中で幅広くいろいろなことを学ぶ」が 40%、「自分の興味・関心に従って学ぶ」が 13%、しかし「ある特定の学問領域を深く掘り下げて学ぶ」は 4%と低い。１年生の特徴であろう。合計 56%の学生が積極的に学ぶ姿勢を示しているのに対して、「単位を落とさない程度に勉強して、サークル活動・バイト・趣味等に打ち込んでいる」が

23%を占め、「勉強をほとんどしない」学生が 17%も存在する。これら 40%の学生は消極的な学び方しかしておらず、勉学への動機付けに工夫が望まれる。これらの学生と不本意入学生との関連性を分析すべき点であった。教育地域科学部の結果（教地・学生Q43）と比べると、勉学意欲の低下が著しく目立つ結果である。地域学部生に対して、学年進行に合わせた勉学意欲の変化を追跡する必要がある。

学科別にみると、積極的な学び方を示す割合は、地域教育学科が最も高く 67%、次いで地域文化学科の 64%、地域政策学科の 55%、地域環境学科は最も低く 36%である。「勉強をほとんどしない」学生が、地域環境学科では 45%も存在し、至急の対策が必要である。



図Ⅱ―１―２―３　あなたは今、どのような学び方をしていますか。

表Ⅱ―１―２―11　あなたは今、どのような学び方をしていますか。

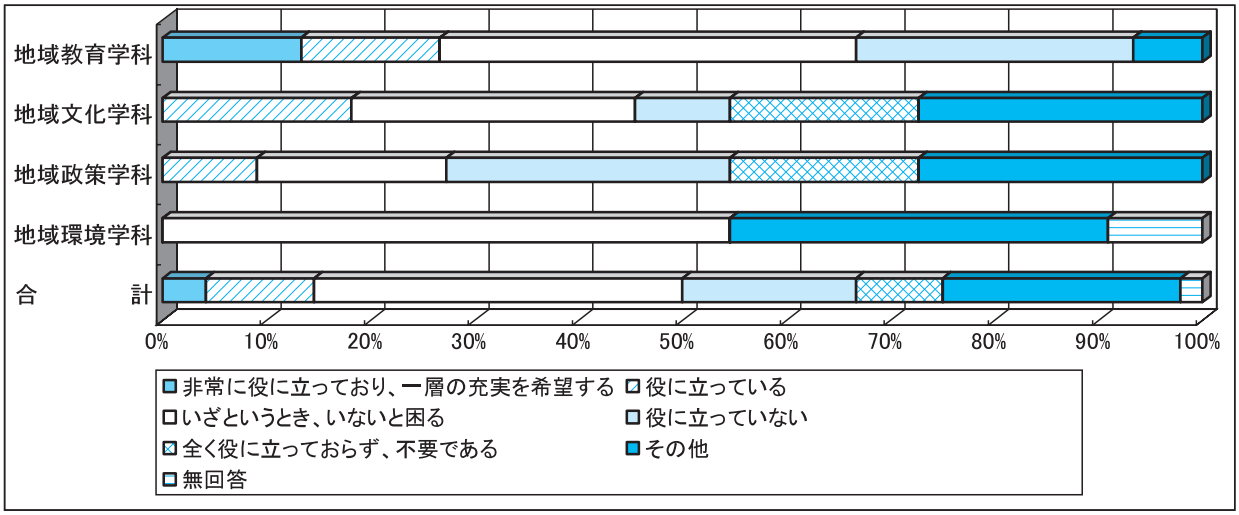
	1	2	3	4	5	6	7	合計
地域教育学科	8	1	1	2	2	1	0	15
	53.3%	6.7%	6.7%	13.3%	13.3%	6.7%	0.0%	100.0%
地域文化学科	5	0	2	3	1	0	0	11
	45.5%	0.0%	18.2%	27.3%	9.1%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策学科	4	1	1	5	0	0	0	11
	36.4%	9.1%	9.1%	45.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域環境学科	2	0	2	1	5	0	1	11
	18.2%	0.0%	18.2%	9.1%	45.5%	0.0%	9.1%	100.0%
合計	19	2	6	11	8	1	1	48
	39.6%	4.2%	12.5%	22.9%	16.7%	2.1%	2.1%	100.0%

1．与えられたカリキュラムの中で幅広くいろいろなことを学ぶ
2．ある特定の学問領域を深く掘り下げて学ぶ
3．学校とは無関係に自分の興味・関心に従って学ぶ
4．単位を落とさない程度に勉強して、サークル活動・バイト・趣味等に打ち込んでいる
5．勉強はほとんどしない
6．その他
7．無回答

学生支援システムの評価

学級教員やチューター制度（Q47)、カリキュラムに関するガイダンスやオリエンテーションの実施（Q48)、授業評価アンケートの教員への効果（Q46）について、有用性を問うた。

学級教員やチューター制度については、学部全体としては有用性を感じている回答が14%を占め、感じていない回答が 25%におよんだ。「その他」「無回答」が 25%あり、回答内容が把握できない点は残念である。１年生こそが、学級教員やチューター制度の恩恵を最も被ると思われるが、高校までの学級教員と比較してしまうためか、有用性の回答は意外と少ない。地域教育学科は、「大学入門ゼミ」および「総合演習」でチューター制を導入し、５人に１人の割合で教員が張り付き演習形式の授業を展開した。チューターに接する機会が多いせいか、アンケートの回答には多様性が認められた。「非常に役に立っている」「役に立っている」が 26%を占める一方、「役に立っていない」も27%に達した。地域文化学科、地域政策学科では、「全く役に立っておらず、不要である」が、それぞれ 18%あり、学級教員の取り組みにさらなる改善が求められる。



図Ⅱ―１―２―４　学級教員やチューター制度について、お聞きします。

表Ⅱ―１―２―12　学級教員やチューター制度について、お聞きします。

	非常に役に立っており、一層の充実を希望する	役に立っている	いざというとき、いないと困る	役に立っていない	全く役に立っておらず、不要である	その他	無回答	合計
地域教育学科	2	2	6	4	0	1	0	15
	13.3%	13.3%	40.0%	26.7%	0.0%	6.7%	0.0%	100.0%
地域文化学科	0	2	3	1	2	3	0	11
	0.0%	18.2%	27.3%	9.1%	18.2%	27.3%	0.0%	100.0%
地域政策学科	0	1	2	3	2	3	0	11
	0.0%	9.1%	18.2%	27.3%	18.2%	27.3%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	0	6	0	0	4	1	11
	0.0%	0.0%	54.5%	0.0%	0.0%	36.4%	9.1%	100.0%
合計	2	5	17	8	4	11	1	48
	4.2%	10.4%	35.4%	16.7%	8.3%	22.9%	2.1%	100.0%

ガイダンスやオリエンテーションの実施については、学部全体では「回数をふやして、きめ細かく対応して欲しい」が 44%を占め、次いで「必要なタイミングで適度に実施されており充分である」の 17%となっている。「ガイダンスなどは必要ない」とする回答はみられなかった。学生たちは、よりきめ細かいガイダンスの実施を望んでいる。ただし、「不要なものが多すぎるので精選して欲しい」の回答も 13%あった。地域環境学科では「その他」が 46%を占め、その内容の把握が望まれる。

表Ⅱ―1―2―13　カリキュラムに関する、ガイダンスやオリエンテーションの実施について、どう思いますか。

	必要なタイミングで適度に実施されており、充分である	回数をふやして、きめ細かく対応して欲しい	不要なものが多すぎるので、精選して欲しい	ガイダンスなどは、必要ない	その他	無回答	合計
地域教育学科	2	9	2	0	2	0	15
	13.3%	60.0%	13.3%	0.0%	13.3%	0.0%	100.0%
地域文化学科	2	7	1	0	1	0	11
	18.2%	63.6%	9.1%	0.0%	9.1%	0.0%	100.0%
地域政策学科	2	5	1	0	3	0	11
	18.2%	45.5%	9.1%	0.0%	27.3%	0.0%	100.0%
地域環境学科	2	0	2	0	5	2	11
	18.2%	0.0%	18.2%	0.0%	45.5%	18.2%	100.0%
合計	8	21	6	0	11	2	48
	16.7%	43.8%	12.5%	0.0%	22.9%	4.2%	100.0%

授業評価アンケートについては、１年生であるために「わからない」の回答が 27%～64%を占めた。学部全体でみて「参考になっていない教員が多い」とするマイナスの回答が 38%を占め、「教員の参考になっている」とするプラスの回答は、10%であった。学生たちがこのようなマイナスイメージを抱いているにもかかわらず、授業評価アンケートは毎年同じ形式で粛々と続けられている。至急改善しないと、授業評価アンケートに学生が誠意を持って答えなくなり、調査の意味が薄れることが危惧される。

１年次に開設を望む専門科目の希望

「１年次に専門科目としてどのような科目を望むか」を問うた（Q50）。この回答は、新入生が勉学意欲を向上させるのに適する科目と考えられ、カリキュラム改善に生かすべき視点である。

学科ごとに異なる傾向が認められた。地域政策学科では、「大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」を 46%の学生が望んでいる点が特徴であろう。次いで「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」が 36%を占める。地域教育学科では、「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」や「専門の学問体系について学べる概論」がそれぞれ 27%を占め、次いで「大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」が 20%であった。地域文化学科では「大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」と「専門の学問体系について学べる概論」がそれぞれ 36%で、強く望まれている。地域環境学科では、「専門の学問体系について学べる概論」が 46%と圧倒的高い。次いで「大学教員

と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」が 27%であった。

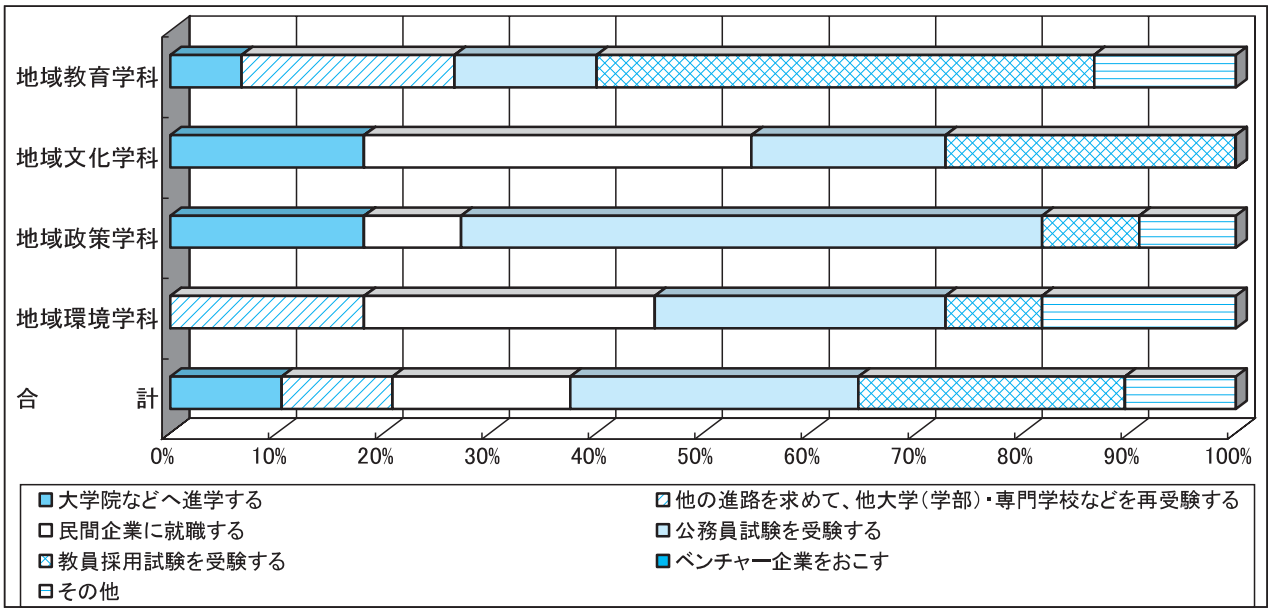
表Ⅱ―１―２―14　あなたは１年次にどのような専門科目を最も望みますか。

	大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ	インターンシップのような実習科目	現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目	専門の学問体系について学べる概論	その他	無回答	合計
地域教育学科	3	1	4	4	3	0	15
	20.0%	6.7%	26.7%	26.7%	20.0%	0.0%	100.0%
地域文化学科	4	2	1	4	0	0	11
	36.4%	18.2%	9.1%	36.4%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策学科	5	0	4	2	0	0	11
	45.5%	0.0%	36.4%	18.2%	0.0%	0.0%	100.0%
地域環境学科	3	2	0	5	0	1	11
	27.3%	18.2%	0.0%	45.5%	0.0%	9.1%	100.0%
合計	15	5	9	15	3	1	48
	31.3%	10.4%	18.8%	31.3%	6.3%	2.1%	100.0%

４．将来の進路希望

卒業後の進路希望およびカリキュラムとの整合性

卒業後の進路希望は、学科ごとに大きく異なる（Q51）。地域政策学科では、53%が「公務員試験の受験」と答え、次いで「大学院進学」が 18%となっている。地域教育学科では「教員採用試験の受験」が 47%と最多であり、「他の進路を求めて他大学・専門学校などを受験」が 20%でつづく。地域文化学科では「民間企業への就職」が最も多く 36%であり、次いで「教員採用試験の受験」が 27%を占める。地域環境学科では「民間企業への就職」と「公務員試験の受験」がそれぞれ 27%を占める。学科ごとに進路希望に多様性が認められることは、自然のなりゆきである。



図Ⅱ―１―２―５　あなたは将来の進路をどのように考えていますか。

表Ⅱ―１―２―15　あなたは将来の進路をどのように考えていますか。

	大学院などへ進学する	他の進路を求めて、他大学（学部）・専門学校などを再受験する	民間企業に就職する	公務員試験を受験する	教員採用試験を受験する	ベンチャー企業をおこす	その他	合計
地域教育学科	1	3	0	2	7	0	2	15
	6.7%	20.0%	0.0%	13.3%	46.7%	0.0%	13.3%	100.0%
地域文化学科	2	0	4	2	3	0	0	11
	18.2%	0.0%	36.4%	18.2%	27.3%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策学科	2	0	1	6	1	0	1	11
	18.2%	0.0%	9.1%	54.5%	9.1%	0.0%	9.1%	100.0%
地域環境学科	0	2	3	3	1	0	2	11
	0.0%	18.2%	27.3%	27.3%	9.1%	0.0%	18.2%	100.0%
合計	5	5	8	13	12	0	5	48
	10.4%	10.4%	16.7%	27.1%	25.0%	0.0%	10.4%	100.0%

Q54 では、「専門教育のカリキュラムが就職に有利な条件を満たしているか」を問うた。

「満たしている」:「満たしていない」と判断した比率は、地域政策学科では 64%：９%、地域教育学科では 40%：40%、地域文化学科では 36%：36%、地域環境学科では 27%:46%であった。「全く満たしていない」と感じている学生が地域環境学科では 36%、地域教育学科でも 20%地域文化学科では 18%いる。大学は、専門学校ではないわけで、「カリキュラムが即、就職に有利に働く」ことをめざすべきものでもないが、「大学で学んだことが役立った」と、多くの卒業生が将来いつか、感じてくれることを期待したい。

多様な進路希望に対して学部に希望する支援方法

「学生の多様な進路希望に対して、学部に期待する対処方法」について、全体としては「多様な資格が取れるように」が 42%と最多で、次いで「民間企業の職場開拓」が 19%を占める。進路希望が異なる学科ごとで、当然のこととして支援希望項目は異なるわけであるが、どの学科にも共通して「多様な資格の取得」の希望が強い。資格神話はいまだに健在であるようだ。資格については、学部として議論を重ね、確固としたスタンスを確立し学生に明示すべき段階にきていると指摘できる。

表Ⅱ―１―２―16　学生の多様な進路希望に対して、学部はどのように対応して欲しいと思いますか。

	大学院進学指導に努力すべきである	民間企業の職場開拓に努力すべきである	公務員試験の多数合格を目指して努力すべきである	教員採用試験への多数合格を目指して努力すべきである	多様な資格が取れるように努力すべきである	その他	合計
地域教育学科	0	1	2	7	4	1	15
	0.0%	6.7%	13.3%	46.7%	26.7%	6.7%	100.0%
地域文化学科	2	1	0	0	8	0	11
	18.2%	9.1%	0.0%	0.0%	72.7%	0.0%	100.0%
地域政策学科	0	5	3	0	2	1	11
	0.0%	45.5%	27.3%	0.0%	18.2%	9.1%	100.0%
地域環境学科	1	2	1	1	6	0	11
	9.1%	18.2%	9.1%	9.1%	54.5%	0.0%	100.0%
合計	3	9	6	8	20	2	48
	6.3%	18.8%	12.5%	16.7%	41.7%	4.2%	100.0%

５．学部のイメージ

地域学部のイメージ

地域学部に対するイメージを＜明るい－暗い＞を軸とする項目で問うた。全体としては、「特別なイメージはない」が３～４割を占め、「どちらかというと明るい」27%・「明るく希望にあふれている」6%のプラスイメージの方が、「どちらかというと暗い」21%・「暗くて希望がもてない」10%のマイナスイメージよりも若干高い。教育地域科学部の結果は、逆の傾向を示す（教地・学生Q34）ことから、新たに生まれた地域学部への期待と判断される（Q34)。地域政策学科では５割以上が「どちらかというと暗い」と感じている。

表Ⅱ―１―２―17　あなたの地域学部に対するイメージをお聞かせ下さい。

	明るい希望にあふれている	どちらかというと明るい	特別なイメージはない	どちらかというと暗い	暗くて希望が持てない	合計
地域教育学科	0	5	4	2	4	15
	0.0%	33.3%	26.7%	13.3%	26.7%	100.0%
地域文化学科	1	3	6	0	1	11
	9.1%	27.3%	54.5%	0.0%	9.1%	100.0%
地域政策学科	2	3	0	6	0	11
	18.2%	27.3%	0.0%	54.5%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	2	7	2	0	11
	0.0%	18.2%	63.6%	18.2%	0.0%	100.0%
合計	3	13	17	10	5	48
	6.3%	27.1%	35.4%	20.8%	10.4%	100.0%

学部教員の名前の認知

学生たちが学部教員の名前をどれ程の数知っているかは、学生と教員の関係を知る１つの手がかりになると思われる（Q36)。

全体でみれば、「10～19人」が56%で最大であり、次いで「20～29人」が33%となっている。1年の段階で学科の教員の名前はほぼ全員知っており、他学科の教員とも接点がある学生が多いことがうかがえる。教育地域科学部の地域政策課程で問題と指摘されたことは、地域政策学科ではすでに改善されているようだ。

表Ⅱ―1―2―18　地域学部の教員の名前（姓）をどの程度知っていますか。

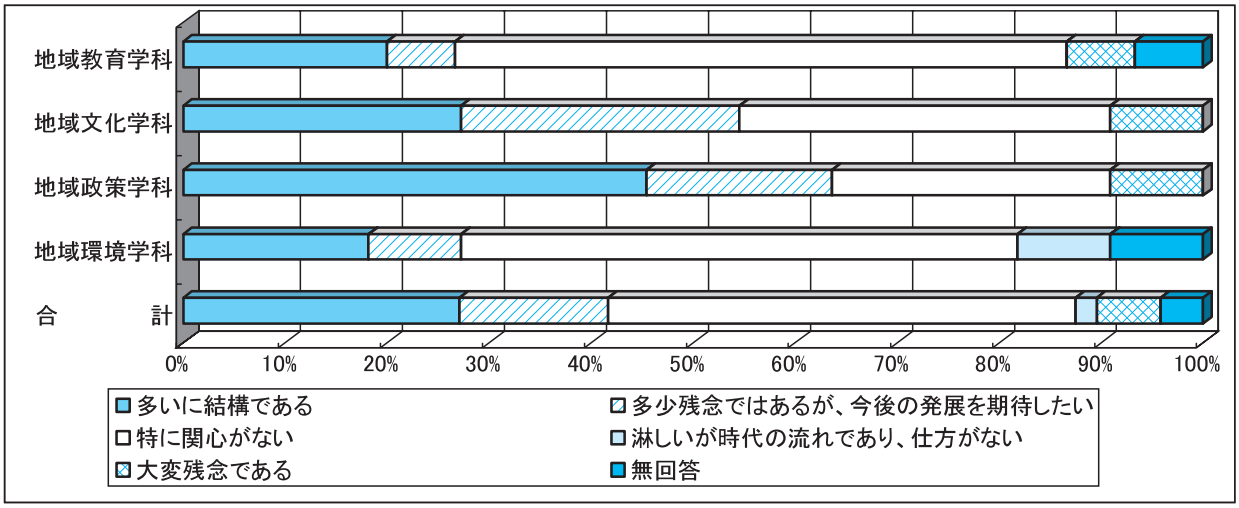
	１０人未満	10人～19人	20人～29人	30人～39人	４０人以上	合計
地域教育学科	9	4	2	0	0	15
	60.0%	26.7%	13.3%	0.0%	0.0%	100.0%
地域文化学科	8	3	0	0	0	11
	72.7%	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策学科	3	7	1	0	0	11
	27.3%	63.6%	9.1%	0.0%	0.0%	100.0%
地域環境学科	7	2	0	1	1	11
	63.6%	18.2%	0.0%	9.1%	9.1%	100.0%
合計	27	16	3	1	1	48
	56.3%	33.3%	6.3%	2.1%	2.1%	100.0%

教育地域科学部から地域学部への改組

Q58で、「学部の改組についてどのように感じているか」を問うた。改組に対してプラス思考の回答は、地域政策学科64%、地域教育学科27%、地域文化学科55%、地域環境学科27%、一方マイナス思考の回答は、各1名（7－9%）と少ない。「無関心」「無回答」が地域教育学科と地域環境学科では6割を超えた。

表Ⅱ―1―2―19　教育地域科学部は、地域学部へと改組されました。
学部の変化について、どのように感じていますか。

	多いに結構である	多少残念ではあるが、今後の発展を期待したい	特に関心がない	淋しいが時代の流れであり、仕方がない	大変残念である	無回答	合計
地域教育学科	3	1	9	0	1	1	15
	20.0%	6.7%	60.0%	0.0%	6.7%	6.7%	100.0%
地域文化学科	3	3	4	0	1	0	11
	27.3%	27.3%	36.4%	0.0%	9.1%	0.0%	100.0%
地域政策学科	5	2	3	0	1	0	11
	45.5%	18.2%	27.3%	0.0%	9.1%	0.0%	100.0%
地域環境学科	2	1	6	1	0	1	11
	18.2%	9.1%	54.5%	9.1%	0.0%	9.1%	100.0%
合計	13	7	22	1	3	2	48
	27.1%	14.6%	45.8%	2.1%	6.3%	4.2%	100.0%



図Ⅱ―１―２―６　教育地域科学部は、地域学部へと改組されました。学部の変化について、どのように感じていますか。

Ⅲ．教員免許取得について

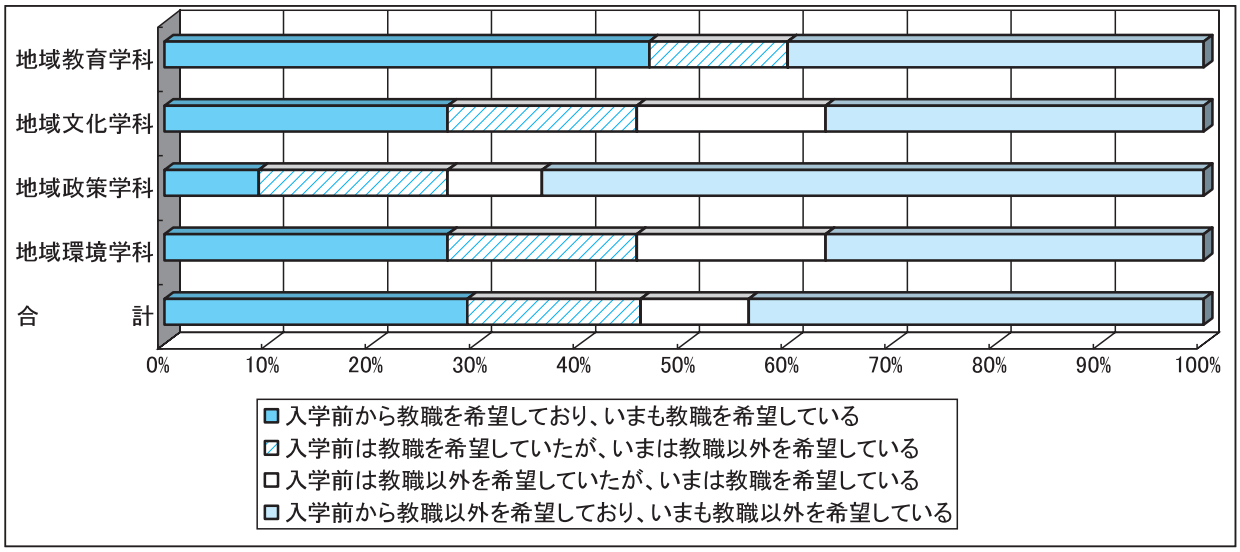
１．教員免許の取得希望と社会的評価

「地域学部」は、教員養成機能を併せ持つ一般学部として生まれ変わった。Q56では、教職への希望について問うた。教育地域科学部からの大きな変化としては、地域環境学科や地域政策学科で、それぞれ教員免許取得希望者が46%、18%と増加したことである。何らかの資格を取りたいとする学生気質のあらわれで、教育地域科学部時代の地域２課程ではほとんど不可能であった教員免許取得が、地域学部では「制限付きであるものの可能になった」ことに敏感に反応している。

「入学前は教職を希望していたが、いまは教職以外を希望している」または逆に「入学前は教職以外を希望していたが、いまは教職を希望している」学生が 27%存在する。教師志望の変更や継続の理由を問うたQ57 では、「大学での授業を通して」が４割弱、「その他」が３割を占める。「その他」の内容調査が望まれる。学年進行に伴い「教育実習」などを経験して、再び考える適正を自己判断する機会が訪れるであろう。新学部について今後の推移が興味深い。

表Ⅱ―１―２―20　あなたは教職をどの程度希望していますか。

	入学前から教職を希望しており、いまも教職を希望している	入学前は教職を希望していたが、いまは教職以外を希望している	入学前は教職以外を希望していたが、いまは教職を希望している	入学前から教職以外を希望しており、いまも教職以外を希望している	合計
地域教育学科	7	2	0	6	15
	46.7%	13.3%	0.0%	40.0%	100.0%
地域文化学科	3	2	2	4	11
	27.3%	18.2%	18.2%	36.4%	100.0%
地域政策学科	1	2	1	7	11
	9.1%	18.2%	9.1%	63.6%	100.0%
地域環境学科	3	2	2	4	11
	27.3%	18.2%	18.2%	36.4%	100.0%
合計	14	8	5	21	48
	29.2%	16.7%	10.4%	43.8%	100.0%



図Ⅱ―１―２―７　あなたは教職をどの程度希望していますか。

表Ⅱ―１―２―21　前問において希望の変更の理由、あるいは希望の継続の契機は、何ですか。

	大学での教員のアドバイスを通して	大学での授業を通して	大学でのサークル・クラブ活動を通して	教育実習を通して	大学以外での体験を通して	その他	無回答	合計
地域教育学科	0	5	1	0	3	5	1	15
	0.0%	33.3%	6.7%	0.0%	20.0%	33.3%	6.7%	100.0%
地域文化学科	0	5	0	0	3	3	0	11
	0.0%	45.5%	0.0%	0.0%	27.3%	27.3%	0.0%	100.0%
地域政策学科	2	6	0	0	1	2	0	11
	18.2%	54.5%	0.0%	0.0%	9.1%	18.2%	0.0%	100.0%
地域環境学科	0	2	1	0	1	5	2	11
	0.0%	18.2%	9.1%	0.0%	9.1%	45.5%	18.2%	100.0%
合計	2	18	2	0	8	15	3	48
	4.2%	37.5%	4.2%	0.0%	16.7%	31.3%	6.3%	100.0%

取得を希望する教員免許の種類は、地域教育学科では、「小学校教諭」33%、「幼稚園教諭」20%、あるのに対して、地域政策学科・地域文化学科・地域環境学科では「中学校（高校）教諭」が 46～55%を占め対照的である。

表Ⅱ―１―２―22　あなたが取得を希望する免許はどれですか。
（教員免許取得希望のみ）

	小学校教諭	中学校（高校）教諭	幼稚園教諭	養護学校教諭	無回答	合計
地域教育学科	5	0	3	1	6	15
	33.3%	0.0%	20.0%	6.7%	40.0%	100.0%
地域文化学科	1	5	0	0	5	11
	9.1%	45.5%	0.0%	0.0%	45.5%	100.0%
地域政策学科	0	6	0	0	5	11
	0.0%	54.5%	0.0%	0.0%	45.5%	100.0%
地域環境学科	1	5	1	0	4	11
	9.1%	45.5%	9.1%	0.0%	36.4%	100.0%
合計	7	16	4	1	20	48
	14.6%	33.3%	8.3%	2.1%	41.7%	100.0%

２．多様な進路に対する認識

多少、意地の悪い質問と思われるもものの、「教職への道が困難であるとすれば、どのような道を選ぶか」を問うた（Q61）。教職への志望動機の強さ、あるいは多様な進路に対する認識を知るためである。

「なおかつ教職を求めて待つ」とする志望の強さが、地域教育学科では２人であるのに対して、他学科では０人と対照的であった。地域教育学科でも、「塾・専門学校などで教える」は０人であった。「民間企業への就職」や「公務員試験を受験」が、各学科とも２～３人であった。

表Ⅱ―１―２―23　教職への道が困難であるとすれば、あなたはどのような進路を選びますか。（教員免許取得希望のみ）

	大学院などへ進学する	他の進路を求めて、他の大学（学部）・専門学校などを再受験する	民間企業へ就職する	公務員試験を受験する	なおかつ教職を求めて待つ	塾・専門学校などで教える	その他	無回答	合計
地域教育学科	2	0	1	3	2	0	1	6	15
	13.3%	0.0%	6.7%	20.0%	13.3%	0.0%	6.7%	40.0%	100.0%
地域文化学科	0	0	3	2	0	0	1	5	11
	0.0%	0.0%	27.3%	18.2%	0.0%	0.0%	9.1%	45.5%	100.0%
地域政策学科	2	0	2	2	0	0	0	5	11
	18.2%	0.0%	18.2%	18.2%	0.0%	0.0%	0.0%	45.5%	100.0%
地域環境学科	1	1	2	2	0	0	1	4	11
	9.1%	9.1%	18.2%	18.2%	0.0%	0.0%	9.1%	36.4%	100.0%
合計	5	1	8	9	2	0	3	20	48
	10.4%	2.1%	16.7%	18.8%	4.2%	0.0%	6.3%	41.7%	100.0%

第３節　教育地域科学部の専門教育に対する卒業生（本学出身の大学院生も含む）の意識と評価

Ⅰ．はじめに

教育学部から教育地域科学部への移行期における学生教育の基本的状況

1980 年代に入ってから少子化の時代を迎え、児童・生徒数の長期にわたる全国的な減少が深刻化した。昭和 63 年の「総合科学課程」の設置で、いわゆる「０免課程」が設けられたのも教員養成課程の定員を減少させる目的であった。しかし、教員需要の減少はおさまらず、教員養成学部の学生定員を全国で５千人削減する計画が実施され、鳥取大学も大きな変革をせまられた。鳥取大学では全学的な対応によって平成 11 年４月に従来の教育学部を改組・転換して、「教育学」と「地域科学」の２つからなるユニークな複合学部「教育地域科学部」を創設した。

ところが、教員養成学部の再編を求める動きはその後もとどまることなく、教員養成の拠点校をつくる方針が文部科学省から示された。鳥取大学では全国に先駆け、島根大学との協力のもと、教員の計画養成にあたる学生定員 70 名を島根大学に移し、かわりに島根大学教育学部０免課程の学生定員 100 名を鳥取大学に移すといった大改革を成し遂げた。このようにして平成 16 年４月から教育地域科学部は、教員養成機能を併せ持つ一般学部「地域学部」に生まれ変わった。

教育地域科学部の学部構成は、教育学部時代より引き継がれた「学校教育課程（定員 70 名）」に加えて、教員免許状の取得を卒業要件としない「人間文化課程（定員 30 名）」、さらに教員養成を行わない「地域政策課程（定員 30 名）」「地域科学課程（定員 30 名）」の４課程からなる。「地域のキー・パーソンの育成」という理念のもとで多彩な教育・研究が行われてきた。

さて、教育学部から教育地域科学部へ、さらに地域学部へと進んだ改組は、方向性に一貫性がある。幅広い教育・研究分野を備えた教育学部をベースにして、「地域学」を形成し、新たな学問として位置づけていく一連の改革としては、理想的なかたちと外部から評価される。しかし教育・研究の現場にあっては、２度にわたる改組のなか、教員・学生ともに多大なる負担を強いられてきたことも事実である。一時期には３つの学部が併存する信じがたい状況まで生じた。しかも学部ごとに所属する教員グループが異なる事態が発生し、移行期特有の問題は避けられなかった。しかし、個々の学生にとっては、唯一の大学時代である。学部としてはできる限り良質な教育・研究を一貫して提供しなくてはならない。今回の「大学教育に関する調査」は、このような激動期に実施された。良質な教育・研究の機会を学生たちに提供できたかどうかを自己点検する貴重な機会である。

なお、教育地域科学部の卒業生にあっては、卒業後２年以内であることを考慮して、多くの質問項目を在学生と同じにした。アンケートの回答件数は、学校教育課程 26 件、人間文化課程８件、地域政策課程５件、地域科学課程５件であった。バイアスがかかった意見となる可能性が高いが、現にある卒業生の声としてここに報告する。

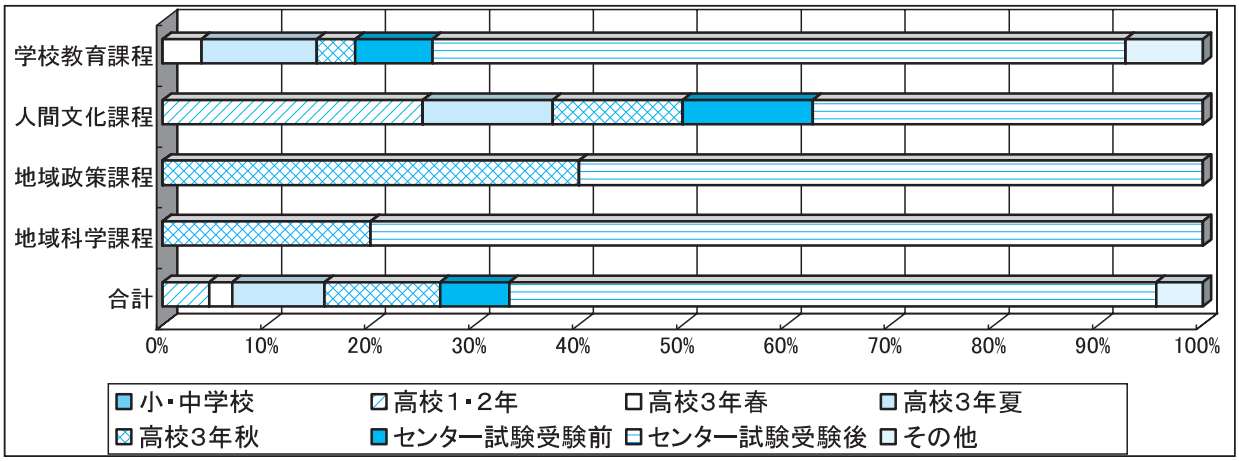
２度にわたる改組の結果、教育地域科学部は５年間という極めて短期間の学部組織となってしまった。所属した学生にとり極めて遺憾な状況と推察されるが、その実態を探る項目も今回の調査に含めた。

Ⅱ．教育地域科学部について

１．入学動機と大学・学部選択理由

教育地域学部への受験決定時期

Q33 では、「教育地域科学部への受験を決めた時期」について問うた。人間文化課程以外で、６～８割の卒業生が「センター試験受験後」と答え、センター試験での自己採点結果と各種情報を照らし合わせて現実的に受験先を決めている実態がうかがえる。人間文化課程では、「高校１・２年」との回答が２割を超え、６割の学生がセンター試験の受験前に当学部の受験を決めている点も見逃せない。



図Ⅱ―１―３―１　教育地域科学部への受験はいつ決めましたか。

表Ⅱ―１―３―１　教育地域科学部への受験はいつ決めましたか。

	小・中学校	高校１・２年	高校３年春	高校３年夏	高校３年秋	センター試験受験前	センター試験受験後	その他	合計
学校教育課程	0	0	1	3	1	2	18	2	27
	0.0%	0.0%	3.7%	11.1%	3.7%	7.4%	66.7%	7.4%	100.0%
人間文化課程	0	2	0	1	1	1	3	0	8
	0.0%	25.0%	0.0%	12.5%	12.5%	12.5%	37.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	0	0	0	2	0	3	0	5
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	40.0%	0.0%	60.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	0	0	0	1	0	4	0	5
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	80.0%	0.0%	100.0%
合計	0	2	1	4	5	3	28	2	45
	0.0%	4.4%	2.2%	8.9%	11.1%	6.7%	62.2%	4.4%	100.0%

教育地域科学部への受験をすすめた助言者

Q34 では、「誰の勧めで受験を決めたか」を問うた。６割前後の学生が自分で考えて教育地域科学部への受験を決め、３～４割の学生が高校の先生の指導により受験を決定している実態がわかる。人間文化課程では８割近くの学生が自分で考えて受験を決めている。この傾向は、在学生のものと似ており、学生気質の点で注目される（教地・学生Q29)。在学生と比べ、課程ごとのばらつきは小さい。

表Ⅱ―１―３―２　教育地域科学部への受験は誰の勧めで決めましたか。

	自分	高校の先生	親	友達	先輩	塾・予備校の先生	その他	合計
学校教育課程	17	7	2	0	0	0	1	27
	63.0%	25.9%	7.4%	0.0%	0.0%	0.0%	3.7%	100.0%
人間文化課程	6	1	0	0	0	1	0	8
	75.0%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	3	2	0	0	0	0	0	5
	60.0%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	3	2	0	0	0	0	0	5
	60.0%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	29	12	2	0	0	1	1	45
	64.4%	26.7%	4.4%	0.0%	0.0%	2.2%	2.2%	100.0%

２．入学した学部の評価、大学への期待と不満

志望からみた学部の評価

Q35 では、本意入学・不本意入学の実態を問うた。不本意入学であったと回答している卒業生が、地域科学課程では６割、地域政策課程では４割、学校教育課程では３割。人間文化課程でも２～３割と、極めて高い値であった。人間文化課程は、他の３課程と比べ不本意入学の割合が低いものの、それでも３割であった。新設学部の宿命とも思われる。在学生の不本意入学の割合は、初期の頃と比べるとずいぶん減少していることがわかる。

表Ⅱ―１―３―３　教育地域科学部への入学はあなたの希望どおりでしたか。

	全く希望どおりであった	まずまず希望どおりであった	あまり希望どおりではなかった	全く希望どおりでなかった	その他	合計
学校教育課程	10	7	7	2	1	27
	37.0%	25.9%	25.9%	7.4%	3.7%	100.0%
人間文化課程	1	5	1	1	0	8
	12.5%	62.5%	12.5%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	3	2	0	0	5
	0.0%	60.0%	40.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	2	3	0	0	5
	0.0%	40.0%	60.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	11	17	13	3	1	45
	24.4%	37.8%	28.9%	6.7%	2.2%	100.0%

教育地域科学部に入学した理由には、２つの傾向が認められた。「将来，教職に就きたいから」とする回答が学校教育課程や人間文化課程では５～６割を占めるのに対して、地域政策課程では、「希望する研究分野やその分野の先生にあこがれたから」が６割、地域科学課程では「教育地域科学という新しい分野を勉強できるから」が４割であった。「教育」と「地域」の２つの色が映し出されたものと思われる。回答数が少ないため、これ以上の分析は控えたい（Q36）。

表Ⅱ―１―３―４　教育地域科学部に入学した理由はなにでしたか。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
学校教育課程	1	15	3	3	1	0	2	0	2	27
	3.7%	55.6%	11.1%	11.1%	3.7%	0.0%	7.4%	0.0%	7.4%	100.0%
人間文化課程	0	4	1	0	2	0	1	0	0	8
	0.0%	50.0%	12.5%	0.0%	25.0%	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	0	1	0	0	1	3	0	0	5
	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	20.0%	60.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	0	1	0	0	1	0	2	1	5
	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	40.0%	20.0%	100.0%
合計	1	19	6	3	3	2	6	2	3	45
	2.2%	42.2%	13.3%	6.7%	6.7%	4.4%	13.3%	4.4%	6.7%	100.0%

１．将来、地域に関わる仕事に就きたいと思ったから
２．将来、教職に就きたいと思ったから
３．幅広く色々な学問を勉強できるのがよいと思ったから
４．地元の大学であり、自分の専攻したい学問がよく分からなかったから
５．どこでも良いから大学に入り、４年間の大学生活を楽しみたかったから
６．高校教師が勧めるので何となく
７．希望する研究分野やその分野の先生にあこがれたから
８．「教育地域科学」という新しい分野を勉強できるから
９．その他

大学への期待

Q37とQ38では、大学に期待していることを問うた。学校教育課程では「専門的な知識を身につける」が最も多く４割を、人間文化課程では「専門的な知識を身につける」と「社会人になったときに、すぐに役に立つ知識・技術・技能を身につける」がそれぞれ５割を占めた。地域政策課程では「広く教養を身につける」「物事を総合的に判断する能力を養う」がそれぞれ４割あり、期待度が高い。２番目に期待していることは、いずれの課程においても「各種の免許や資格を取得する」が２～３割あがっている。

表Ⅱ―１―３―５　今、あなたは大学に何を期待していますか（第１番目）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
学校教育課程	1	10	5	2	4	2	1	1	1	27
	3.7%	37.0%	18.5%	7.4%	14.8%	7.4%	3.7%	3.7%	3.7%	100.0%
人間文化課程	0	4	4	0	0	0	0	0	0	8
	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	1	0	2	2	0	0	0	0	5
	0.0%	20.0%	0.0%	40.0%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	1	1	0	1	0	1	1	0	5
	0.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	20.0%	20.0%	0.0%	100.0%
合計	1	16	10	4	7	2	2	2	1	45
	2.2%	35.6%	22.2%	8.9%	15.6%	4.4%	4.4%	4.4%	2.2%	100.0%

表Ⅱ―１―３―６　今、あなたは大学に何を期待していますか（第２番目）

	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
学校教育課程	4	5	2	0	4	4	7	1	27
	14.8%	18.5%	7.4%	0.0%	14.8%	14.8%	25.9%	3.7%	100.0%
人間文化課程	0	1	1	2	1	0	3	0	8
	0.0%	12.5%	12.5%	25.0%	12.5%	0.0%	37.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	0	3	0	1	0	1	0	5
	0.0%	0.0%	60.0%	0.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	0	1	1	0	1	1	1	5
	0.0%	0.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%	20.0%	20.0%	100.0%
合計	4	6	7	3	6	5	12	2	45
	8.9%	13.3%	15.6%	6.7%	13.3%	11.1%	26.7%	4.4%	100.0%

１．学問に対する取り組み方法を身につける
２．専門的な知識を身につける
３．社会人になったときに、すぐに役に立つ知識・技術・技能を身につける
４．広く教養を身につける
５．物事を総合的に判断する能力を養う
６．学習だけでなく、サークル活動・社会活動を通じて人間性を養う
７．各種の免許や資格を取得する
８．その他
９．無回答

３．自分の学び方、授業への取り組み方、そして指導改善への希望

勉学の満足度

教育地域科学部を卒業して満足しているかどうかを問うた（Q39）。全体としては、「満足している」が６割を占める。ただし地域科学課程では、２割にとどまっている。

表Ⅱ―１―３―７　あなたは教育地域科学部を卒業して満足していますか。

	とても満足している	満足している	どちらともいえない	不満である	とても不満である	合計
学校教育課程	3	17	5	2	0	27
	11.1%	63.0%	18.5%	7.4%	0.0%	100.0%
人間文化課程	1	4	2	1	0	8
	12.5%	50.0%	25.0%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	4	1	0	0	5
	0.0%	80.0%	20.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	1	4	0	0	5
	0.0%	20.0%	80.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	4	26	12	3	0	45
	8.9%	57.8%	26.7%	6.7%	0.0%	100.0%

教授方法・内容

授業の＜分かりやすさ－分かりにくさ＞を問うた（Q42）。全体でみると、「分かりやすい授業が多い」と「どちらかといえば分かりやすい授業が多い」が４割を占め、「分かりにくい授業が多い」と「どちらかといえば分かりにくい授業が多い」の２割よりも

明らかに高い値であった。望ましい傾向である。今後も教授方法改善への意識を高め、さらに「分かりやすい授業」への努力を続けるべきであろう。地域政策課程では、「わかりにくい授業が多い」との回答がやや多い。

表Ⅱ―１―３―８　教員の授業の方法について、どう思いましたか。

	分かりやすい授業が多かった	どちらかといえば分かりやすい授業が多かった	分かりやすい授業と分かりにくい授業が半々であった	どちらかといえば分かりにくい授業が多かった	分かりにくい授業が多かった	その他	無回答	合計
学校教育課程	4	5	13	2	2	0	1	27
	14.8%	18.5%	48.1%	7.4%	7.4%	0.0%	3.7%	100.0%
人間文化課程	1	4	2	1	0	0	0	8
	12.5%	50.0%	25.0%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	0	3	2	0	0	0	5
	0.0%	0.0%	60.0%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	1	2	0	1	0	1	0	5
	20.0%	40.0%	0.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	100.0%
合計	6	11	18	6	2	1	1	45
	13.3%	24.4%	40.0%	13.3%	4.4%	2.2%	2.2%	100.0%

授業内容のレベルについては、「難しい授業とやさしい授業が半々である」を最頻として、「どちらかといえば難しい授業が多い」側にやや偏っている。大学の講義としては、難易度についてはうまくバランスがとれているものと評価する。

少人数教育

Q44～Q47 では、少人数教育について卒業生の希望等を問うた。その結果、卒業生は少人数教育の実施を強く望んでいる実態が如実にあらわれた。

「勉学意欲が高まるので少人数教育の機会を大幅に増やして欲しい」との答えが２割、「もう少し増やして欲しい」が４割と、６割以上の学生が少人数教育の機会増を希望している。一方、「減らして欲しい」との答えはなかった。少人数授業の受講状況（Q45）をみると、週１コマが３.5 割、２コマが２割、３コマが 1.5 割、４コマ以上が１.5 割といった状況である。

表Ⅱ―１―３―９　あなたは平均して週に何コマの少人数教育を受けていましたか。

	０コマ	１コマ	２コマ	３コマ	４コマ	５コマ	６コマ	７コマ	８コマ以上	無回答	合計
学校教育課程	0	9	6	4	2	3	0	0	0	3	27
	0.0%	33.3%	22.2%	14.8%	7.4%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	100.0%
人間文化課程	1	1	3	1	1	0	0	0	1	0	8
	12.5%	12.5%	37.5%	12.5%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	5
	0.0%	80.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	2	1	1	0	0	0	0	0	1	5
	0.0%	40.0%	20.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	100.0%
合計	1	16	10	7	3	3	0	0	1	4	45
	2.2%	35.6%	22.2%	15.6%	6.7%	6.7%	0.0%	0.0%	2.2%	8.9%	100.0%

教員一人に対して最適と思われる学生数を問うた（Q47)。その結果、「５～６人」が３～４割と最頻で、次いで「３～４人」と「７～９人」が２～３割と続いた。つまり10 人未満の授業が最適であると考える学生が９割近くを占めている。ただし「１～２人」は、あまり好まれていない。

表Ⅱ―１―３―10　少人数教育では、教員一人に対して、何人ほどの学生が最適だと思いますか。

	1 人～2人	3 人～4人	5 人～6人	7 人～9人	10 人～14 人	15 人～19 人	20 人～29 人	30 人以上	わからない	無回答	合計
学校教育課程	0	6	8	8	3	0	0	0	1	1	27
	0.0%	22.2%	29.6%	29.6%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	3.7%	3.7%	100.0%
人間文化課程	0	2	4	2	0	0	0	0	0	0	8
	0.0%	25.0%	50.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	1	3	1	0	0	0	0	0	0	5
	0.0%	20.0%	60.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	3	1	0	0	0	0	0	1	0	5
	0.0%	60.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	100.0%
合計	0	12	16	11	3	0	0	0	2	1	45
	0.0%	26.7%	35.6%	24.4%	6.7%	0.0%	0.0%	0.0%	4.4%	2.2%	100.0%

これに対して、教育地域科学部で実際に受講していた少人数授業での学生数は、「５～６人」が３割強と最多で、「７～９人」３割弱、「10～14 人」と「３～４人」がそれぞれ１割強であった。学生が最適と考えている人数での授業が、着実に実施されていることがわかる（Q46)。

表Ⅱ―１―３―11　少人数での授業について、教員一人に対して何人の学生で受けているものが多かったですか。

	1 人～2人	3 人～4人	5 人～6人	7 人～9人	10 人～14 人	15 人～19 人	20 人～29 人	30 人以上	わからない	無回答	合計
学校教育課程	0	3	8	10	3	1	0	0	0	2	27
	0.0%	11.1%	29.6%	37.0%	11.1%	3.7%	0.0%	0.0%	0.0%	7.4%	100.0%
人間文化課程	0	2	3	1	2	0	0	0	0	0	8
	0.0%	25.0%	37.5%	12.5%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	1	0	3	1	0	0	0	0	0	0	5
	20.0%	0.0%	60.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	1	1	0	1	0	0	0	1	1	5
	0.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	20.0%	100.0%
合計	1	6	15	12	6	1	0	0	1	3	45
	2.2%	13.3%	33.3%	26.7%	13.3%	2.2%	0.0%	0.0%	2.2%	6.7%	100.0%

カリキュラム構成

Q51 では、各課程のカリキュラム構成が、勉学をすすめる上で系統的に組まれていたかどうか」を問うた。カリキュラム全体を体験済みの卒業生となって、はじめて問える質問である。「おおかたうまく構成されていた」との回答が４割を占め、「カリキュラムの系統性が不明確で、大幅に改善すべき」との回答が３割に達した。地域学部への改組が実施され、教育地域科学部については実質的にカリキュラムの見直しは不可能な段

階にあり、今回の声が生かせないのが残念である。

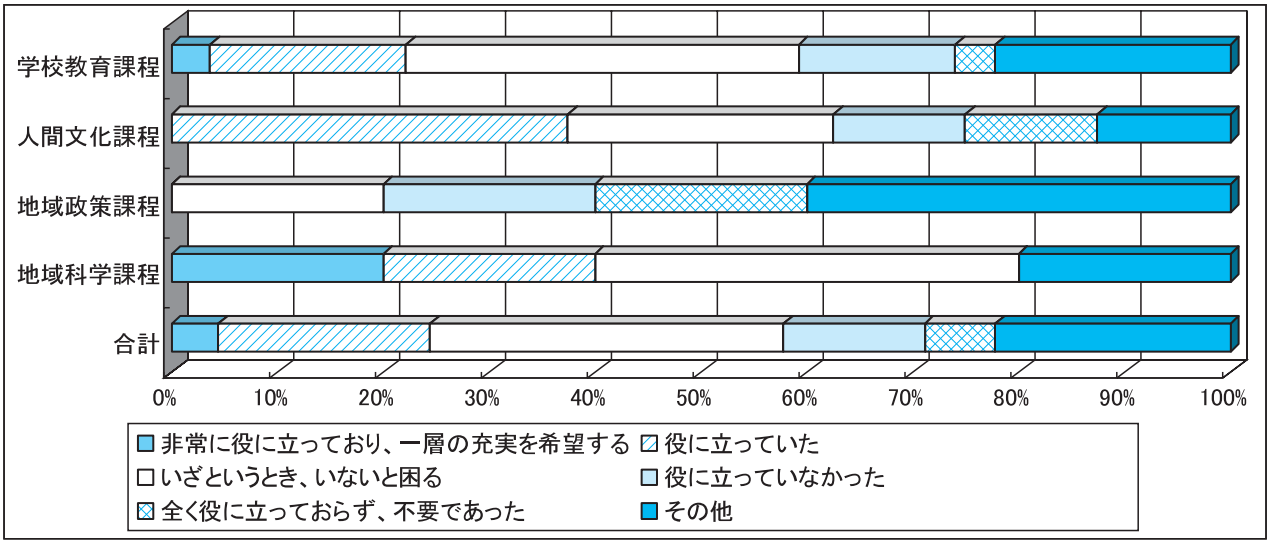
表Ⅱ―１―３―12　勉学を進める上でのカリキュラム構成について、お聞きします。

	うまく構成されており、年次進行に伴い系統的に専門性を高めることができた。	おおかたうまく構成されていた	コア・カリキュラム以外で入れ替えたほうがよいものが多くあった	カリキュラムの系統性が不明確で、大幅に改善すべきであった	わからない	その他	合計
学校教育課程	1	11	4	8	2	1	27
	3.7%	40.7%	14.8%	29.6%	7.4%	3.7%	100.0%
人間文化課程	1	4	1	1	1	0	8
	12.5%	50.0%	12.5%	12.5%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	2	0	3	0	0	5
	0.0%	40.0%	0.0%	60.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	2	1	1	0	1	5
	0.0%	40.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%	100.0%
合計	2	19	6	13	3	2	45
	4.4%	42.2%	13.3%	28.9%	6.7%	4.4%	100.0%

学生支援システムの評価

学級教員やチューター制度（Q49)、カリキュラムに関するガイダンスやオリエンテーションの実施（Q50)、授業評価アンケートの教員への効果（Q48）について、有用性を問うた。

学級教員やチューター制度については、学部全体としては有用性を感じている回答が2.5割を占め、感じていない回答が２割におよんだ。特に地域科学課程では、一層の充実を望む声が聞かれるのに対して、他の３課程では不要との声が一部に寄せられている。「その他」の回答内容が把握できない点は残念であるが、学級教員制度をうまく利用して学生を支援することが今後ますます求められよう。

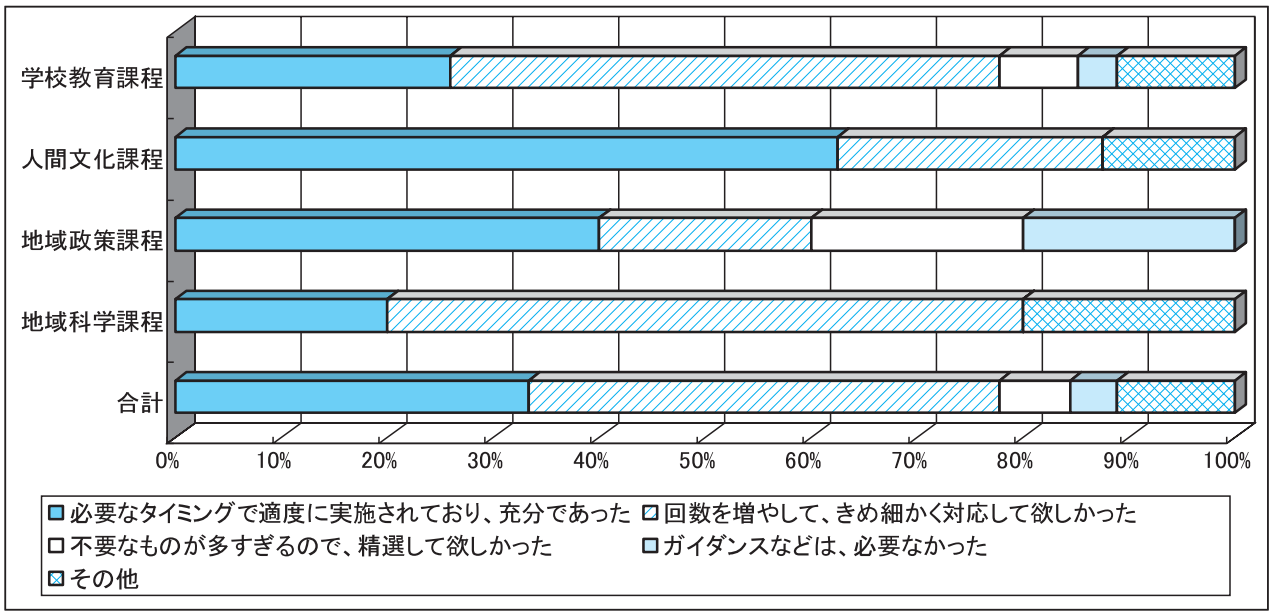


図Ⅱ―１―３―２　学級教員やチューター制度について、お聞きします。

表Ⅱ―１―３―13　学級教員やチューター制度について、お聞きします。

	非常に役に立っており、一層の充実を希望する	役に立っていた	いざというとき、いないと困る	役に立っていなかった	全く役に立っておらず、不要であった	その他	合計
学校教育課程	1	5	10	4	1	6	27
	3.7%	18.5%	37.0%	14.8%	3.7%	22.2%	100.0%
人間文化課程	0	3	2	1	1	1	8
	0.0%	37.5%	25.0%	12.5%	12.5%	12.5%	100.0%
地域政策課程	0	0	1	1	1	2	5
	0.0%	0.0%	20.0%	20.0%	20.0%	40.0%	100.0%
地域科学課程	1	1	2	0	0	1	5
	20.0%	20.0%	40.0%	0.0%	0.0%	20.0%	100.0%
合計	2	9	15	6	3	10	45
	4.4%	20.0%	33.3%	13.3%	6.7%	22.2%	100.0%

ガイダンスやオリエンテーションの実施については、学部全体では「回数をふやして、きめ細かく対応して欲しい」が４割を占め、次いで「必要なタイミングで適度に実施されており充分である」が３割となっている。「ガイダンスなどは必要ない」とする回答は極めて少ない。卒業生はよりきめ細かいガイダンスの実施を望んでいたことがわかる。



図Ⅱ―１―３―３　カリキュラムに関する、ガイダンスやオリエンテーションの実施について、どう思いましたか。

表Ⅱ―１―３―14　カリキュラムに関する、ガイダンスやオリエンテーションの実施について、どう思いましたか。

	必要なタイミングで適度に実施されており、充分であった	回数を増やして、きめ細かく対応して欲しかった	不要なものが多すぎるので、精選して欲しかった	ガイダンスなどは、必要なかった	その他	合計
学校教育課程	7	14	2	1	3	27
	25.9%	51.9%	7.4%	3.7%	11.1%	100.0%
人間文化課程	5	2	0	0	1	8
	62.5%	25.0%	0.0%	0.0%	12.5%	100.0%
地域政策課程	2	1	1	1	0	5
	40.0%	20.0%	20.0%	20.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	1	3	0	0	1	5
	20.0%	60.0%	0.0%	0.0%	20.0%	100.0%
合計	15	20	3	2	5	45
	33.3%	44.4%	6.7%	4.4%	11.1%	100.0%

授業評価アンケートについては、学部全体でみて「参考になっていない教員が多い」とするマイナスの回答が５割近くを占め、「わからない」が４割,「教員の参考になっている」とするプラスの回答は、２割に満たない。学生たちがこのようなマイナスイメージを抱いているにもかかわらず、授業評価アンケートは毎年同じ形式で粛々と続けられている。至急改善しないと、授業評価アンケートに学生が誠意を持って答えなくなり、調査の意味が薄れることが危惧される。

１年次に開設を望む専門科目の希望

「１年次に専門科目としてどのような科目を望むか」を問うた（Q52)。卒業して社会にでた卒業生がひしひしと感じることとして、この回答はカリキュラム改善に生かすべき視点である。

学校教育課程・人間文化課程と地域政策課程・地域科学課程とで、異なる傾向が認められた。学校教育課程では、「専門の学問体系について学べる概論」が４割で、次いで「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」が 2.5 割であった。人間文化課程では、「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」が５割で、次いで「専門の学問体系について学べる概論」が４割であった。地域政策課程では、「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」と「専門の学問体系について学べる概論」がそれぞれ４割を占め、地域科学課程では、「大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」を４割の卒業生が最も望んでいる。学部全体でみると、「専門の学問体系について学べる概論」と「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」が強く望まれている。

表Ⅱ―１―３―15　あなたは１年次にどのような専門科目を最も望みますか。

	大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ	インターンシップのような実習科目	現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目	専門の学問体系について学べる概論	その他	合計
学校教育課程	4	2	7	11	3	27
	14.8%	7.4%	25.9%	40.7%	11.1%	100.0%
人間文化課程	0	1	4	3	0	8
	0.0%	12.5%	50.0%	37.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	1	2	2	0	5
	0.0%	20.0%	40.0%	40.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	2	0	1	1	1	5
	40.0%	0.0%	20.0%	20.0%	20.0%	100.0%
合計	6	4	14	17	4	45
	13.3%	8.9%	31.1%	37.8%	8.9%	100.0%

４．将来の進路希望

卒業後の進路選択で重視した点およびカリキュラムとの整合性

卒業後の進路希望で重視した点をQ53、Q54で問うた。第１番目に重視した点は「働きがいがある」で５割を示す。次いで学校教育課程や人間文化課程では、「大学で学んだ専門性が生かせる」との回答がそれぞれ２割と４割を占め，地域政策課程と地域科学課程では「身分が安定している」がそれぞれ４割と２割であった。第２番目に重視した点として、「職場が郷里に近い」が２割近くに浮かび上がっている。地域科学課程では、「大学で学んだ専門性が生かせる」ことを期待している学生がいない点は、改善が望まれる。

表Ⅱ―１―３―16　あなたが職業等を決めるにあたって重視した点は何でしたか。（第１番目）

	大学で学んだ専門性が生かせる	働きがいがある	収入が多い	仕事が楽である	身分が安定している	一流（有名な）会社である	職場が郷里に近い	その他	無回答	合計
学校教育課程	6	14	0	0	1	0	1	4	1	27
	22.2%	51.9%	0.0%	0.0%	3.7%	0.0%	3.7%	14.8%	3.7%	100.0%
人間文化課程	3	4	0	0	0	0	0	1	0	8
	37.5%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	2	0	0	2	0	0	1	0	5
	0.0%	40.0%	0.0%	0.0%	40.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	2	0	0	1	0	0	1	1	5
	0.0%	40.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	20.0%	20.0%	100.0%
合計	9	22	0	0	4	0	1	7	2	45
	20.0%	48.9%	0.0%	0.0%	8.9%	0.0%	2.2%	15.6%	4.4%	100.0%

表Ⅱ―１―３―17　あなたが職業等を決めるにあたって重視した点は何でしたか。（第２番目）

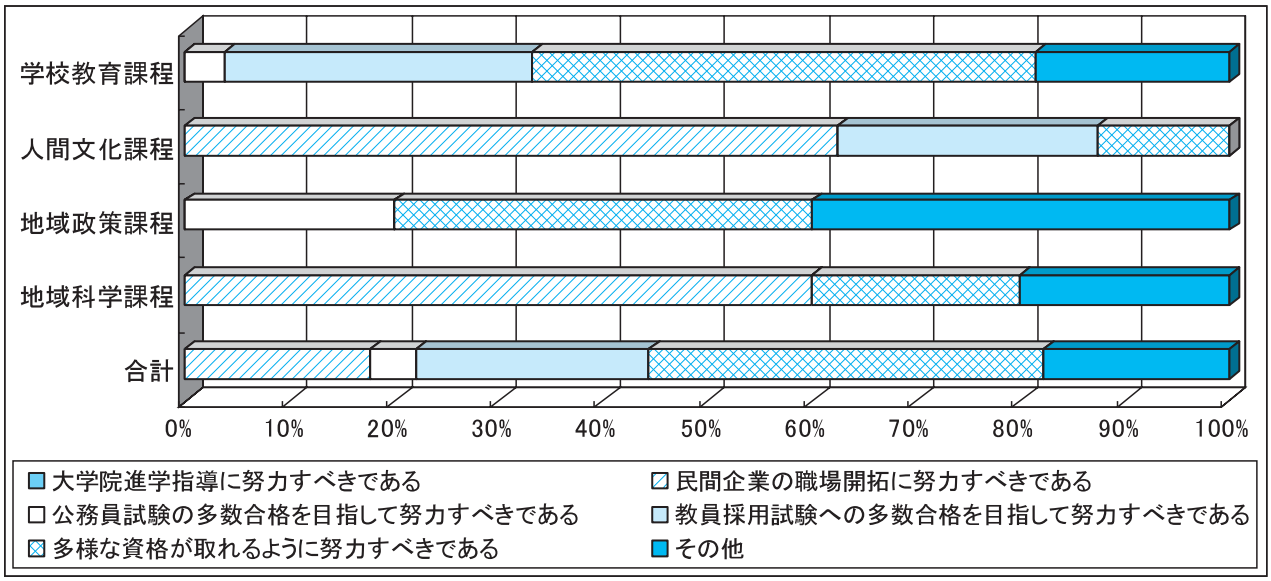
	大学で学んだ専門性が生かせる	働きがいがある	収入が多い	仕事が楽である	身分が安定している	一流（有名な）会社である	職場が郷里に近い	その他	無回答	合計
学校教育課程	7	6	1	0	3	0	2	7	1	27
	25.9%	22.2%	3.7%	0.0%	11.1%	0.0%	7.4%	25.9%	3.7%	100.0%
人間文化課程	1	1	0	0	2	0	3	1	0	8
	12.5%	12.5%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	37.5%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	1	1	0	0	0	0	2	1	0	5
	20.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	40.0%	20.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	1	0	0	1	0	1	0	2	5
	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	40.0%	100.0%
合計	9	9	1	0	6	0	8	9	3	45
	20.0%	20.0%	2.2%	0.0%	13.3%	0.0%	17.8%	20.0%	6.7%	100.0%

Q55 では、「専門教育のカリキュラムが就職に有利な条件を満たしているか」を問うた。

「満たしている」:「満たしていない」と判断した比率は、学校教育課程では 48%：33%、人間文化課程では 75%：13%、地域政策課程では 80%：20%、地域科学課程では 20%：60%であった。地域科学課程で「全く満たしていない」との回答が６割におよんだが、そもそも就職にあたり「大学で学んだ専門性を生かせる」意識が低いことと対応している。そのためカリキュラムとの整合性も把握できないためと考えられる。また大学は、専門学校ではないわけで、「カリキュラムが即，就職に有利に働く」ことをめざすべきものでもない。「大学で学んだことが役立った」と、多くの卒業生が将来、いつか感じてくれることを期待したい。

多様な進路希望に対して学部に希望する支援方法

「学生の多様な進路希望に対して、学部に期待する対処方法」について、全体としては「多様な資格が取れるように」が 38%と最多で、次いで「民間企業の職場開拓」が 18%を占める。進路希望先が異なる課程ごとに、当然希望項目は異なるわけであるが、どの課程にも共通して「多様な資格の取得」希望が強い。教育２課程では「教員採用試験への多数合格を目指して努力すべき」が、それぞれ３割近くに達し、人間文化課程と地域科学課程では、「民間企業の職場開拓」が６割を超す。（Q56）。



図Ⅱ―１―３―４　学生の多様な進路希望に対して、学部はどのように対応して欲しいと思いましたか。

表Ⅱ―１―３―18　学生の多様な進路希望に対して、学部はどのように対応して欲しいと思いましたか。

	大学院進学指導に努力すべきである	民間企業の職場開拓に努力すべきである	公務員試験の多数合格を目指して努力すべきである	教員採用試験への多数合格を目指して努力すべきである	多様な資格が取れるように努力すべきである	その他	合計
学校教育課程	0	0	1	8	13	5	27
	0.0%	0.0%	3.7%	29.6%	48.1%	18.5%	100.0%
人間文化課程	0	5	0	2	1	0	8
	0.0%	62.5%	0.0%	25.0%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	0	1	0	2	2	5
	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	40.0%	40.0%	100.0%
地域科学課程	0	3	0	0	1	1	5
	0.0%	60.0%	0.0%	0.0%	20.0%	20.0%	100.0%
合計	0	8	2	10	17	8	45
	0.0%	17.8%	4.4%	22.2%	37.8%	17.8%	100.0%

５．学部のイメージ

教育地域科学部のイメージ

教育地域科学部に対するイメージを＜明るい－暗い＞を軸とする項目で問うた。「特別なイメージはない」が５割を占め、「どちらかというと明るい」３割のプラスイメージの方が、「どちらかというと暗い」２割のマイナスイメージよりも高い。地域学部１年の結果も同様であり、新学部設置当初は、明るいイメージで入学している傾向が、推察される。

表Ⅱ―１―３―19　あなたの教育地域科学部に対するイメージをお聞かせください。

	明るい希望にあふれている	どちらかというと明るい	特別なイメージはない	どちらかというと暗い	暗くて希望がもてない	合計
学校教育課程	0	9	14	4	0	27
	0.0%	33.3%	51.9%	14.8%	0.0%	100.0%
人間文化課程	0	4	3	1	0	8
	0.0%	50.0%	37.5%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	0	3	2	0	5
	0.0%	0.0%	60.0%	40.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	0	2	3	0	0	5
	0.0%	40.0%	60.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	0	15	23	7	0	45
	0.0%	33.3%	51.1%	15.6%	0.0%	100.0%

学部教員の名前の認知

卒業生が学部教員の名前をどれ程の数知っているかは、学生と教員の関係を知る１つの手がかりになると思われる（Q41）。

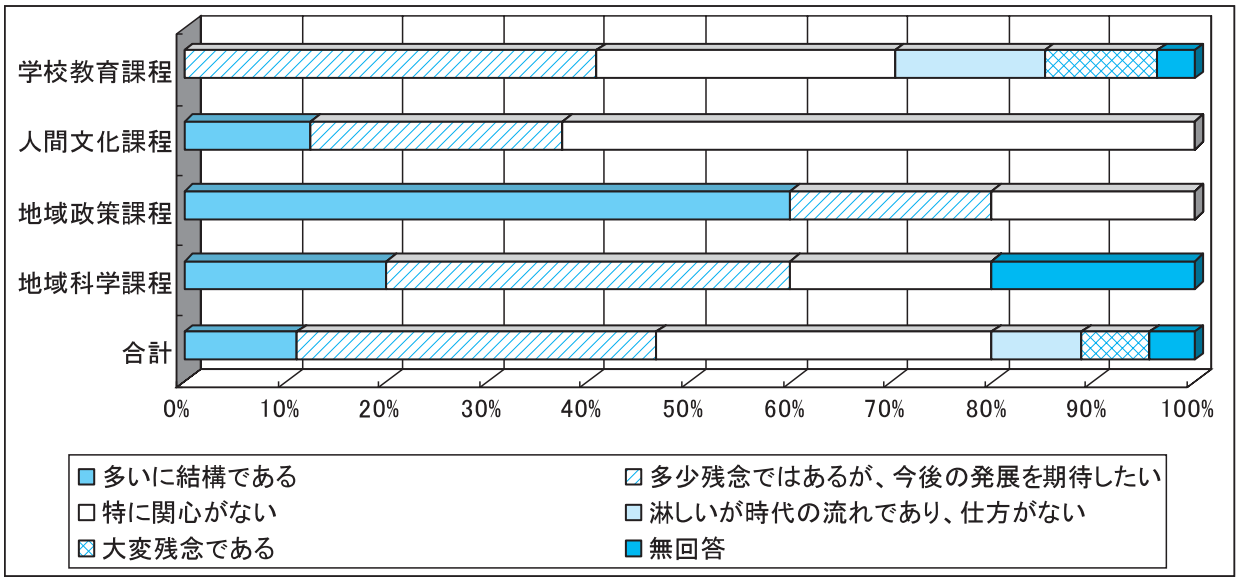
全体でみれば、「10～19 人」が５割で最大を示し、次いで「10 人未満」が３割となっている。「20～29 人」は２割以下であった。

表Ⅱ―１―３―20　教育地域科学部の教員の名前（姓）をどの程度覚えていますか。

	１０人未満	10人～19人	20人～29人	30人～39人	４０人以上	無回答	合計
学校教育課程	8	12	5	1	0	1	27
	29.6%	44.4%	18.5%	3.7%	0.0%	3.7%	100.0%
人間文化課程	3	4	1	0	0	0	8
	37.5%	50.0%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	2	2	1	0	0	0	5
	40.0%	40.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	1	3	0	1	0	0	5
	20.0%	60.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	14	21	7	2	0	1	45
	31.1%	46.7%	15.6%	4.4%	0.0%	2.2%	100.0%

教育地域科学部から地域学部への改組

Q59 で、「学部の改組についてどのように感じているか」を問うた。改組に対してプラス思考の回答は、学校教育課程 41%、人間文化課程 38%、地域政策課程 80%、地域科学課程 60%、一方マイナス思考の回答は、学校教育課程 26%、人間文化課程 0%、地域政策課程 0%、地域科学課程 0%であった。「無関心」「無回答」が学校教育課程 33%、人間文化課程 63%、地域政策課程 20%、地域科学課程 40%におよんだ。教育２課程と地域２課程とで改組の捉え方に差が認められる。



図Ⅱ―１―３―５　教育地域科学部は、地域学部へと改組されました。学部の変化について、どのように感じていますか。

表Ⅱ―１―３―21　教育地域科学部は、地域学部へと改組されました。学部の変化について、どのように感じていますか。

	多いに結構である	多少残念ではあるが、今後の発展を期待したい	特に関心がない	淋しいが時代の流れであり、仕方がない	大変残念である	無回答	合計
学校教育課程	0	11	8	4	3	1	27
	0.0%	40.7%	29.6%	14.8%	11.1%	3.7%	100.0%
人間文化課程	1	2	5	0	0	0	8
	12.5%	25.0%	62.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域政策課程	3	1	1	0	0	0	5
	60.0%	20.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
地域科学課程	1	2	1	0	0	1	5
	20.0%	40.0%	20.0%	0.0%	0.0%	20.0%	100.0%
合計	5	16	15	4	3	2	45
	11.1%	35.6%	33.3%	8.9%	6.7%	4.4%	100.0%

Ⅲ．教員免許取得について

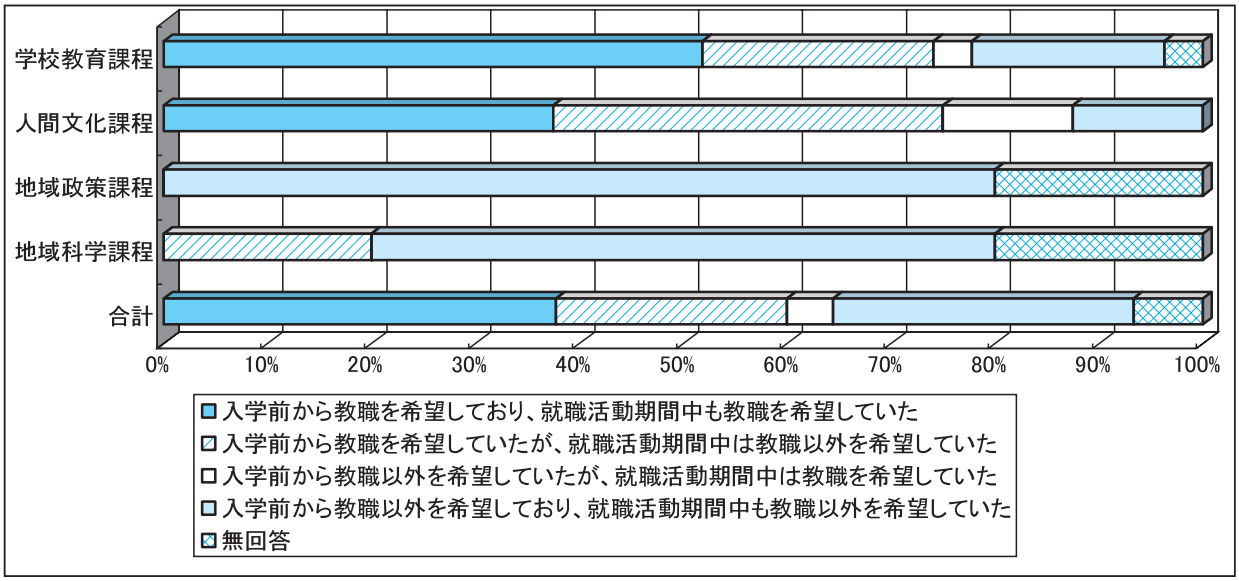
１．教員免許の取得希望と社会的評価

Q57では、教職への希望について問うた。地域科学課程では、「入学前は教職を希望していたが、就職活動期間中は教職以外を希望した」学生が２割程存在する。それ以外の学生は地域２課程では教職以外を希望し、教職以外で就職した。

学校教育課程では52%の学生が、人間文化課程では38%の学生が、それぞれ教職を希望して、そのまま教職を目指した。一方、「入学時には教職を希望していたが、就職活動では教職以外を希望した」学生、また逆に「入学時には教職以外を希望していたが、就職活動では教職を希望した」学生が学校教育課程では、それぞれ22%と4%、人間文

化課程ではそれぞれ 38%と 13%存在する。

変更あるいは継続の理由として、学校教育課程では「教育実習を通して」が半数近くを占め、人間文化課程では「大学以外での体験を通して」が 50%、「教育実習を通して」が 25%に達する。教職への適正を自ら判断する機会として、また教職への強い動機付けとして、教育実習が貴重な場であることが推察される。



図Ⅱ―１―３―６　あなたは教職をどの程度希望していましたか。

表Ⅱ―１―３―22　あなたは教職をどの程度希望していましたか。

	入学前から教職を希望しており、就職活動期間中も教職を希望していた	入学前から教職を希望していたが、就職活動期間中は教職以外を希望していた	入学前から教職以外を希望していたが、就職活動期間中は教職を希望していた	入学前から教職以外を希望しており、就職活動期間中も教職以外を希望していた	無回答	合計
学校教育課程	14	6	1	5	1	27
	51.9%	22.2%	3.7%	18.5%	3.7%	100.0%
人間文化課程	3	3	1	1	0	8
	37.5%	37.5%	12.5%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	0	0	4	1	5
	0.0%	0.0%	0.0%	80.0%	20.0%	100.0%
地域科学課程	0	1	0	3	1	5
	0.0%	20.0%	0.0%	60.0%	20.0%	100.0%
合計	17	10	2	13	3	45
	37.8%	22.2%	4.4%	28.9%	6.7%	100.0%

表Ⅱ―１―３―23　前問において希望の変更の理由、あるいは希望の継続の契機は、何でしたか。

	大学での教員のアドバイスを通して	大学での授業を通して	大学でのサークル・クラブ活動を通して	教育実習を通して	大学以外での体験を通して	その他	無回答	合計
学校教育課程	0	2	1	12	5	5	2	27
	0.0%	7.4%	3.7%	44.4%	18.5%	18.5%	7.4%	100.0%
人間文化課程	0	1	0	2	4	1	0	8
	0.0%	12.5%	0.0%	25.0%	50.0%	12.5%	0.0%	100.0%
地域政策課程	0	1	0	0	1	2	1	5
	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	20.0%	40.0%	20.0%	100.0%
地域科学課程	0	1	0	0	0	3	1	5
	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	60.0%	20.0%	100.0%
合計	0	5	1	14	10	11	4	45
	0.0%	11.1%	2.2%	31.1%	22.2%	24.4%	8.9%	100.0%

第４節　教育学部の専門教育を中心としてみた卒業生（本学出身の大学院生も含む）の意識と評価

Ⅰ．はじめに

教育学部から教育地域科学部への移行期における学生教育の基本的状況

1980 年代に入ってから少子化の時代を迎え、児童・生徒数の長期にわたる全国的な減少が深刻化した。昭和 63 年の総合科学課程の設置で、いわゆる０免課程が設けられたのも教員養成課程の定員を減少させる目的であった。しかし教員需要の減少はおさまらず、教員養成学部の学生定員を全国で５千人削減する計画が実施され、鳥取大学も大きな変革をせまられた。鳥取大学では全学的な対応によって平成 11 年４月に従来の教育学部を改組・転換して、「教育学」と「地域科学」の２つからなるユニークな複合学部「教育地域科学部」を創設した。

ところが、教員養成学部の再編を求める動きはその後もとどまることなく、教員養成の拠点校をつくる方針が文部科学省から示された。鳥取大学では全国に先駆け、島根大学との協力のもと、教員の計画養成にあたる学生定員 70 名を島根大学に移し、かわりに島根大学教育学部０免課程の学生定員 100 名を鳥取大学に移すといった大改革を成し遂げた。このようにして平成 16 年４月から教育地域科学部は、教員養成機能を併せ持つ一般学部「地域学部」に生まれ変わった。

教育地域科学部の学部構成は、教育学部時代より引き継がれた「学校教育課程（定員 70 名）」に加えて、教員免許状の取得を卒業要件としない「人間文化課程（定員 30 名）」、さらに教員養成を行わない「地域政策課程（定員 30 名）」「地域科学課程（定員 30 名）」の４課程からなる。「地域のキー・パーソンの育成」という理念のもとで多彩な教育・研究が行われてきた。

さて、教育学部から教育地域科学部へ、さらに地域学部へと進んだ改組は、方向性に一貫性がある。幅広い教育・研究分野を備えた教育学部をベースにして、「地域学」を形成し、新たな学問として位置づけていく一連の改革としては、理想的なかたちと外部から評価される。しかし教育・研究の現場にあっては、２度にわたる改組のなか、教員・学生ともに多大なる負担を強いられてきたことも事実である。一時期には３つの学部が併存する信じがたい状況まで生じた。しかも学部ごとに所属する教員グループが異なる事態が発生し、移行期特有の問題は避けられなかった。しかし、個々の学生にとっては、唯一の大学時代である。学部としてはできる限り良質な教育・研究を一貫して提供しなくてはならない。今回の「大学教育に関する調査」は、このような激動期に実施された。良質な教育・研究の機会を学生たちに提供できたかどうかを自己点検する貴重な機会である。

なお、教育学部の卒業生にあっては、卒業後３年以上を経ていることを考慮して、教育学部を卒業した満足感や卒業後の大学との関わりを中心とした質問項目とした。アンケートの回答件数は、小学校教員養成課程 23 件、中学校教員養成課程 14 件、養護学校教員養成課程５件、総合科学課程９件であった。バイアスがかかった意見となる可能性が高いが、現にある卒業生の声としてここに報告する。

Ⅱ．教育学部について

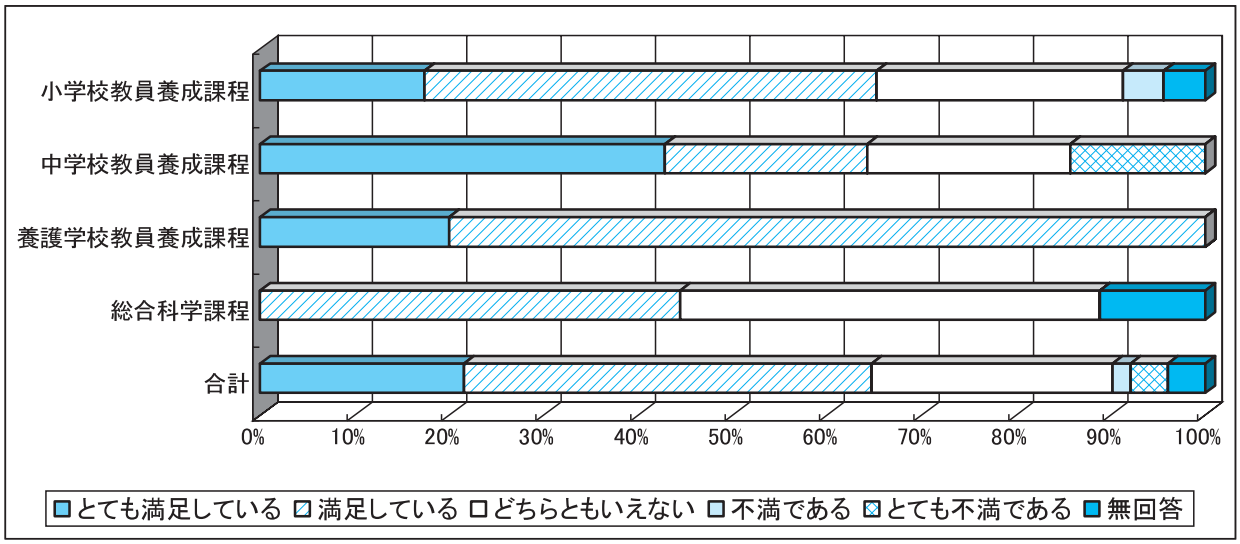
１．卒業後の満足度

Q27 では、「教育学部を卒業した満足度」を大づかみに問うた。「満足している」と

の回答が、小学校教員養成課程と中学校教員養成課程でそれぞれ６割、養護学校教員養成課程ではすべてであった。一方、新課程であった総合科学課程では４割と少なかった。

Q28では、「教員の名前を何人ほど思い出せるか」を問うた。卒業生が学部教員の名前をどれ程の数知っているかは、学生と教員の関係を知る１つの手がかりになると思われる。小学校教員養成課程や中学校教員養成課程では、思い出せる教員の数は、総合科学課程（10 人未満が８割）と比べ明らかに多い。満足度と思い出せる教員の数の間には相関が認められる。

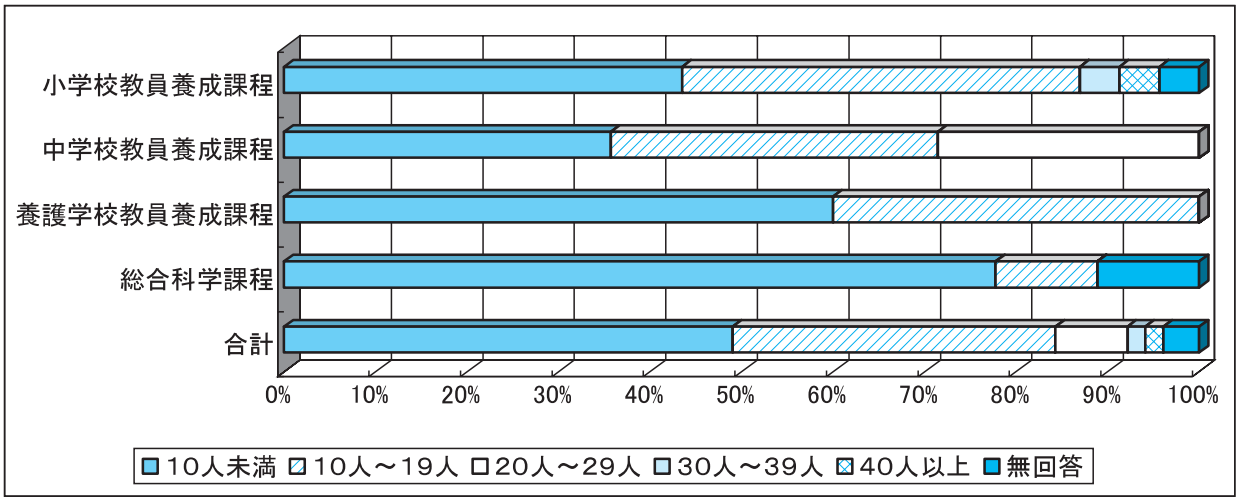
総合科学課程設置の経験をふまえて、教育地域科学部や地域学部では、課程あるいは学科ごとに教員の所属を明確にさせる手立てが講じられた。



図Ⅱ―１―４―１　あなたは教育学部を卒業して満足していますか。

表Ⅱ―１―４―１　あなたは教育学部を卒業して満足していますか。

	とても満足している	満足している	どちらともいえない	不満である	とても不満である	無回答	合計
小学校教員養成課程	4	11	6	1	0	1	23
	17.4%	47.8%	26.1%	4.3%	0.0%	4.3%	100.0%
中学校教員養成課程	6	3	3	0	2	0	14
	42.9%	21.4%	21.4%	0.0%	14.3%	0.0%	100.0%
養護学校教員養成課程	1	4	0	0	0	0	5
	20.0%	80.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
総合科学課程	0	4	4	0	0	1	9
	0.0%	44.4%	44.4%	0.0%	0.0%	11.1%	100.0%
合計	11	22	13	1	2	2	51
	21.6%	43.1%	25.5%	2.0%	3.9%	3.9%	100.0%



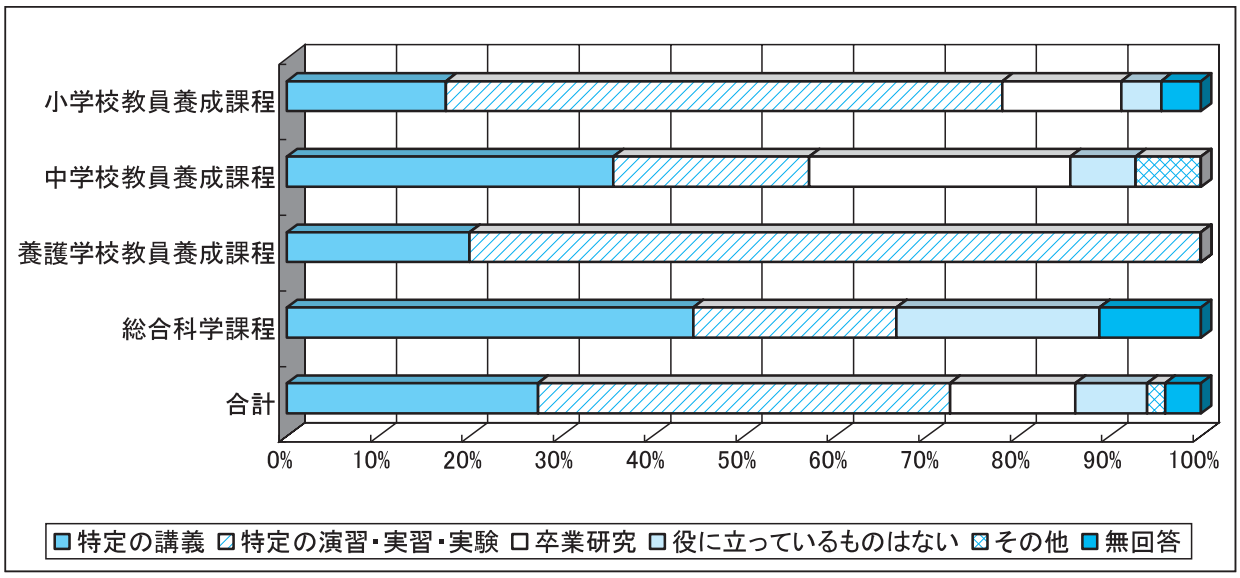
図Ⅱ―１―４―２　今、教育学部の教員の名前（姓）を何人ほど思い出せますか。

表Ⅱ―１―４―２　今、教育学部の教員の名前（姓）を何人ほど思い出せますか。

	１０人未満	10人～19人	20人～29人	30人～39人	４０人以上	無回答	合計
小学校教員養成課程	10	10	0	1	1	1	23
	43.5%	43.5%	0.0%	4.3%	4.3%	4.3%	100.0%
中学校教員養成課程	5	5	4	0	0	0	14
	35.7%	35.7%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
養護学校教員養成課程	3	2	0	0	0	0	5
	60.0%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
総合科学課程	7	1	0	0	0	1	9
	77.8%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	100.0%
合計	25	18	4	1	1	2	51
	49.0%	35.3%	7.8%	2.0%	2.0%	3.9%	100.0%

２．専門教育について

Q28 では、「専門科目のうちで，一番役に立っているもの」を問うた。学部全体としては、「特定の演習・実習・実験」が約半数で最も多く、次いで「特定の講義」が３割弱、「卒業研究」は１割強であった。課程別にみると、中学校教員養成課程では「特定の講義が」３～４割、「卒業研究」３割弱と高く、養護学校教員養成課程・小学校教員養成課程では「特定の演習・実習・実験」がそれぞれ８割・６割を占める。総合科学課程では「特定の講義」が４～５割と高い。また総合科学課程では「役に立っているものはない」が２割を占め、他課程と比べ高い割合であった。



図Ⅱ―１―４―３　大学時代に学んだ専門教育のうちで、一番役に立っているものはどれですか。

表Ⅱ―１―４―３　大学時代に学んだ専門教育のうちで、一番役に立っているものはどれですか。

	特定の講義	特定の演習・実習・実験	卒業研究	役に立っているものはない	その他	無回答	合計
小学校教員養成課程	4	14	3	1	0	1	23
	17.4%	60.9%	13.0%	4.3%	0.0%	4.3%	100.0%
中学校教員養成課程	5	3	4	1	1	0	14
	35.7%	21.4%	28.6%	7.1%	7.1%	0.0%	100.0%
養護学校教員養成課程	1	4	0	0	0	0	5
	20.0%	80.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
総合科学課程	4	2	0	2	0	1	9
	44.4%	22.2%	0.0%	22.2%	0.0%	11.1%	100.0%
合計	14	23	7	4	1	2	51
	27.5%	45.1%	13.7%	7.8%	2.0%	3.9%	100.0%

Q29 では、教員の授業方法について、Q30 では、授業内容のレベルについて問うた。教授方法に関しては、全体として「わかりやすい授業が多い」が４割以上と好ましい。「わかりにくい授業が多い」が２～３割の回答であった。教員にとり教授方法の改善は永遠の課題である。

授業の内容レベルについては、半数が「難しい授業とやさしい授業が半々」と答え、「どちらかといえば難しい授業が多い」が 1/4 であった。大学の授業としては妥当なレベルと判断される。

表Ⅱ―１―４―４　教員の授業の方法について、どう思いましたか。

	分りやすい授業が多かった	どちらかといえば分りやすい授業が多かった	分りやすい授業と分りにくい授業が半々であった	どちらかといえば分りにくい授業が多かった	分りにくい授業が多かった	その他	無回答	合計
小学校教員養成課程	3	8	4	5	2	0	1	23
	13.0%	34.8%	17.4%	21.7%	8.7%	0.0%	4.3%	100.0%
中学校教員養成課程	2	5	4	2	1	0	0	14
	14.3%	35.7%	28.6%	14.3%	7.1%	0.0%	0.0%	100.0%
養護学校教員養成課程	0	2	2	1	0	0	0	5
	0.0%	40.0%	40.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
総合科学課程	1	2	3	1	1	0	1	9
	11.1%	22.2%	33.3%	11.1%	11.1%	0.0%	11.1%	100.0%
合計	6	17	13	9	4	0	2	51
	11.8%	33.3%	25.5%	17.6%	7.8%	0.0%	3.9%	100.0%

表Ⅱ―１―４―５　授業内容のレベルについて、どう思いましたか。

	難しすぎる授業が多かった	どちらかといえば難しい授業が多かった	難しい授業とやさしい授業が半々であった	どちらかといえばやさしい授業が多かった	やさしすぎる授業が多かった	その他	無回答	合計
小学校教員養成課程	2	7	11	2	0	0	1	23
	8.7%	30.4%	47.8%	8.7%	0.0%	0.0%	4.3%	100.0%
中学校教員養成課程	1	3	6	2	1	1	0	14
	7.1%	21.4%	42.9%	14.3%	7.1%	7.1%	0.0%	100.0%
養護学校教員養成課程	0	1	4	0	0	0	0	5
	0.0%	20.0%	80.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
総合科学課程	0	2	4	1	0	1	1	9
	0.0%	22.2%	44.4%	11.1%	0.0%	11.1%	11.1%	100.0%
合計	3	13	25	5	1	2	2	51
	5.9%	25.5%	49.0%	9.8%	2.0%	3.9%	3.9%	100.0%

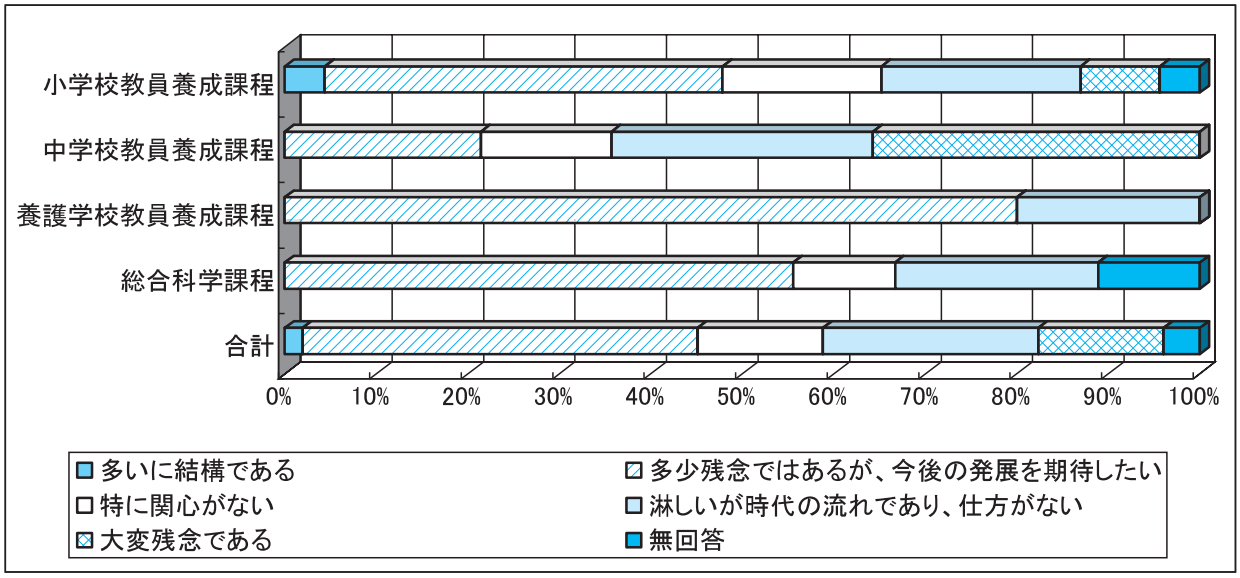
３．卒業後の大学との関わり

Q31 では、「卒業後の大学との関わり」について問うた。「全く関わりはない」が、小学校教員養成課程と総合科学課程では４割程度、中学校教員養成課程では２割、養護学校教員養成課程では２割弱であった。関わりの多い養護学校教員養成課程では、「教員との交流」が５割、「大学施設の利用」が３割であった。総合科学課程の卒業生には「サークル活動への参加」が多い。全体としてみると「教員との関わり」が３割以上を占め、卒業後の大学との関わりのなかでも最も重要な役割を教員が担っている。

４．卒業学部の改組について

Q32 では、「学部の改組についてどのように感じているか」を問うた。改組に対してプラス思考の回答は、小学校教員養成課程で５割、中学校教員養成課程で２割、養護学

校教員養成課程で８割、総合科学課程で５～６割、一方マイナス思考の回答は、小学校教員養成課程で３割、中学校教員養成課程で６～７割、養護学校教員養成課程で２割、総合科学課程で２割であった。中学校教員養成課程では「大変残念である」が，３～４割みられた。同じ職場に入ってくる後輩の減少、あるいは自らの卒業学部の消滅はやるせないのであろう。



図Ⅱ―１―４―４　教育学部は、教育地域科学部さらに地域学部へと改組されました。ご卒業された学部の変化について、どのように感じていますか。

表Ⅱ―１―４―６　教育学部は、教育地域科学部さらに地域学部へと改組されました。ご卒業された学部の変化について、どのように感じていますか。

	多いに結構である	多少残念ではあるが、今後の発展を期待したい	特に関心がない	淋しいが時代の流れであり、仕方がない	大変残念である	無回答	合計
小学校教員養成課程	1	10	4	5	2	1	23
	4.3%	43.5%	17.4%	21.7%	8.7%	4.3%	100.0%
中学校教員養成課程	0	3	2	4	5	0	14
	0.0%	21.4%	14.3%	28.6%	35.7%	0.0%	100.0%
養護学校教員養成課程	0	4	0	1	0	0	5
	0.0%	80.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	100.0%
総合科学課程	0	5	1	2	0	1	9
	0.0%	55.6%	11.1%	22.2%	0.0%	11.1%	100.0%
合計	1	22	7	12	7	2	51
	2.0%	43.1%	13.7%	23.5%	13.7%	3.9%	100.0%

第２章　医学部の教育を中心としてみた学生の意識と評価

第１節　在学生の専門教育に対する意識と評価

Ⅰ．大学教育に関する調査の概要

医学部学生に全学共通質問（I-1Q1ーQ27）と医学科・生命科学科・保健学科共通の質問（Ⅲ-1ー1Q28ーQ44）、医学科学生対象の質問（Ⅲ-2-1Q45ーQ49）、生命科学科学生対象の質問（Ⅲ-3-1Q45ーQ53）、保健学科看護学専攻学生対象の質問（Ⅲ-4-1Q45ーQ53）、保健学科検査技術科学専攻学生対象の質問（Ⅲ-5-1Q45ーQ53）を回答させた。鳥取キャンパスに在籍している学生には、全学共通質問のみ回答させ、米子キャンパスの学生には、全学共通の質問と医学科学生対象、生命科学科学生対象、保健学科学生対象の質問を回答させた。調査期間は16年10月26日～11月19日に質問用紙を配布し、回収した。回収状況は、医学部学生で調査対象者1,182名、回答者434名で回答率は36.8%であった。

Ⅱ．医学科・生命科学科・保健学科共通について

１．大学院への進学について

大学院への進学（表Ⅱ－２－１－１）については、医学科では31.5%、生命科学科では81.5%の学生が大学院に進学したいと答えている。医学科・生命科学科ともに平成12年の調査と比較して「鳥取大学の大学院に進学したい」「他大学の大学院に進学したい」とするものは大きな変化がない。「大学は特定していないが、大学院に進学したい」と答えた学生は生命科学科で増加している。今回調査対象に加わった保健学科（看護）では25.7%、保健学科（検査）は35.2%である。

一方、「希望しない」と答えた学生は、医学科では28.7%、生命科学科では11.6%、保健学科（看護）では45.7%、保健学科（検査）は24.3%である。生命科学科では進学を希望する学生の割合が高く、保健学科（看護）では少ない。

表Ⅱ－２－１－１　大学院への進学希望（医学・学生Q28）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. 鳥取大学の大学院に進学したい	6.3%　(7.5%)	16.3%　(18.7%)	4.0%	8.1%
2. 他大学の大学院に進学したい	11.9%　(11.3%)	23.3%　(26.4%)	9.7%	17.6%
3. 大学は特定していないが、大学院に進学したい	13.3%　(19.5%)	41.9%　(26.4%)	12.0%	9.5%
4. 希望しない	28.7%　(24.8%)	11.6%　(13.2%)	45.7%	24.3%
5. 分からない	36.4%　(30.1%)	4.7%　(11.0%)	28.0%	39.2%
6. 無回答	3.5%　(6.8%)	2.3%　(5.5%)	0.6%	1.4%

（　）は平成12年度調査時

２．学生生活について

鳥取大学医学部の現在の学生生活の満足度（表Ⅱ－２－１－２）については、「大変満足している」と「満足している」と答えた合計は、医学科で51.8%（49.6%）、生命科学科で51.1%（48.4%）であった。「たいへん不満足である」と「やや不満足である」と答えた合計は、医学科で44.8%（43.6%）、生命科学科で46.6%（46.2%）であり、平成12年の調査と比較してあまり変化がないが、前回の調査と比較すると、両学科と

もに、満足度がやや増加している。

今回調査対象に加わった保健学科では「大変満足している」と 「満足している」と答えた合計は、看護学専攻で54.8%、検査医学専攻では66.2%である。

表Ⅱ－２－１－２　鳥取大学医学部の現在の学生生活の満足度（医学・学生Q29）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. 大変満足している	7.0%　(6.0%)	2.3%　(5.5%)	5.1%	2.7%
2. 満足している	44.8%　(43.6%)	48.8%　(42.9%)	49.7%	63.5%
3. やや不満足である	37.8%　(35.3%)	41.9%　(35.2%)	38.9%	28.4%
4. たいへん不満足である	7.0%　(8.3%)	4.7%　(11.0%)	5.7%	4.1%
5. 無回答	3.5%　(6.8%)	2.3%　(5.5%)	0.6%	1.4%

（　）は平成12年度調査時

３．医学部の講義について

カリキュラムについて

医学部のカリキュラムの過密度（表Ⅱ－２－１－３） については、医学科では、「過密と思う」が 59.4%（71.4%）、「比較的余裕がある」が 25.2% （19.5%）であった。生命科学科では、「過密と思う」が16.3%（29.7%）であるのに対して「比較的余裕がある」が 69.8%（49.5%）であった。医学科・生命科学科では「余裕がありすぎる」と答えた者が7%である。保健学科（看護）では「過密と思う」が74.3%、「比較的余裕がある」が24.0%、保健学科（検査）では「過密と思う」が47.3%、「比較的余裕がある」が51.4%であった。保健学科ではカリキュラムに余裕がありすぎると答えた者は極めて少ないのが特徴的である。

医学科・生命科学科ともに、平成12年の調査と比較して「過密と思う」と回答したものが減少し、「比較的余裕がある」と答えたものが増加している。

表Ⅱ－２－１－３　医学部のカリキュラムの過密度（医学・学生Q34）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. 過密と思う	59.4%　(71.4%)	16.3%　(29.7%)	74.3%	47.3%
2. 比較的余裕がある	25.2%　(19.5%)	69.8%　(49.5%)	24.0%	51.4%
3. 余裕がありすぎる	7.0%　(2.3%)	7.0%　(15.4%)	1.1%	0.0%
4. 無回答	8.4%　(6.8%)	7.0%　(5.5%)	0.6%	1.4%

（　）は平成12年度調査時

履修方法、試験及び成績評価にかかわる医学部規則について

医学部規則で履修方法、試験及び成績評価が行われている（表Ⅱ－２－１－４）ことを医学科の42.7%、生命科学科の46.5%、保健学科（看護）の46.3%、保健学科（検査）の44.6%の学生が知らない。知らないと答えた学生の割合が前回の調査より上昇している。医学教育を受ける学生の基本姿勢として極めて大切なことである。学生に対する周知徹底が必要である。

表Ⅱ－２－１－４　医学部規則で履修方法、試験及び成績評価が行われていることの認知度（医学・学生Q35）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. 知っている	51.0%　(66.2%)	51.2%　(58.2%)	53.1%	54.1%
2. 知らない	42.7%　(27.1%)	46.5%　(37.4%)	46.3%	44.6%
3. 無回答	6.3%　(6.8%)	2.3%　(4.4%)	0.6%	1.4%

（　）は平成12年度調査時

講義について

講義の最も良い点（表Ⅱ－２－１－５～表Ⅱ－２－１－８）と悪い点（表Ⅱ－２－１－９～表Ⅱ－２－１－12）について、順位を付けて答えさせた。

３学科とも、「教官がよく準備している」と「講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している」との項目を良い点としてあげたものが多い。

「教官がよく準備している」を１番目にあげたものは、医学科では28.7%、生命科学科では18.6%、保健学科（看護）では39.4%、保健学科（検査）では35.1%で、保健学科の教員に対する評価が高い。

「講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している」を１番目にあげたものは、医学科では30.8%、生命科学科では34.9%、保健学科（看護）では29.7%、保健学科（検査）では31.1%である。

表Ⅱ－２－１－５　医学部の講義で最も良いこと（医学・学生Q30、Q31）

医学科	１番目	２番目
1. 教官がよく準備している	28.7%　(28.6%)	17.5%　(9.0%)
2. 説明が明快で理解しやすい	4.9%　(9.8%)	9.1%　(10.5%)
3. 重点を要約して説明している	11.2%　(12.8%)	13.3%　(14.3%)
4. 講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している	30.8%　(21.0%)	27.3%　(21.1%)
5. その他	13.3%　(12.8%)	17.5%　(21.1%)
6. 無回答	11.2%　(9.8%)	15.4%　(9.8%)

（　）は平成12年度調査時

表Ⅱ－２－１－６　医学部の講義で最も良いこと（医学・学生Q30、Q31）

生命科学科	１番目	２番目
1. 教官がよく準備している	18.6%　(19.8%)	25.6%　(7.7%)
2. 説明が明快で理解しやすい	4.7%　(7.7%)	18.6%　(6.6%)
3. 重点を要約して説明している	16.3%　(16.5%)	7.0%　(19.8%)
4. 講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している	34.9%　(36.3%)	25.6%　(29.7%)
5. その他	18.6%　(8.8%)	11.6%　(20.9%)
6. 無回答	7.0%　(14.3%)	11.6%　(14.3%)

（　）は平成12年度調査時

表Ⅱ－２－１－７　医学部の講義で最も良いこと（医学・学生Q30、Q31）

保健学科（看護）	１番目	２番目
1.教官がよく準備している	39.4%	26.9%
2.説明が明快で理解しやすい	9.7%	6.3%
3.重点を要約して説明している	9.7%	14.9%
4.講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している	29.7%	32.0%
5.その他	9.7%	17.1%
6.無回答	1.7%	2.9%

表Ⅱ－２－１－８　医学部の講義で最も良いこと（医学・学生Q30、Q31）

保健学科（検査）	１番目	２番目
1.教官がよく準備している	35.1%	20.3%
2.説明が明快で理解しやすい	10.8%	13.5%
3.重点を要約して説明している	9.5%	14.9%
4.講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している	31.1%	27.0%
5.その他	10.8%	17.6%
6.無回答	2.7%	6.8%

最も悪い点では、３学科とも、「説明の要点がわからない」と「理解しているかどうかに配慮せず、独断的である」との項目をあげたものが多い。

「説明の要点がわからない」を１番目にあげたものは、医学科では24.5%、生命科学科では20.9%、保健学科（看護）では38.9%、保健学科（検査）では31.1%で、保健学科でやや高くなっている。

「理解しているかどうかに配慮せず、独断的である」を１番目にあげたものは、医学科では30.8%、生命科学科では30.2%、保健学科（看護）では41.7%、保健学科（検査）では45.9%で、保健学科でかなり高い。

「講義が体系的でない」と答えたものは、前回の調査より減少している。シラバスが充実してきた現れであると考えて良かろう。

「講義の始まりと終わりの時間を守らない」との回答は、生命科学科では0%であるが、他学科では数%のものが「守らない」と答えている。

表Ⅱ－２－１－９　医学部の講義で最も悪いこと（医学・学生Q32、Q33）

医学科	１番目	２番目
1. 説明の要点がわからない	24.5%　(30.1%)	21.0%　(19.5%)
2. 理解しているかどうかに配慮せず、独断的である	30.8%　(35.3%)	16.8%　(29.3%)
3. 講義が体系的でない	15.4%　(20.3%)	19.6%　(17.9%)
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない	4.2%　(3.8%)	4.2%　(2.3%)
5. 試験が難しすぎる	13.3%　(1.5%)	21.0%　(13.5%)
6. その他	3.5%　(2.3%)	4.2%　(9.0%)
7. 無回答	8.4%　(9.8%)	13.3%　(9.8%)

（　）は平成12年度調査時

表Ⅱ－２－１－10　医学部の講義で最も悪いこと（医学・学生Q32、Q33）

生命科学科	１番目	２番目
1. 説明の要点がわからない	20.9%　(28.6%)	20.9%　(17.6%)
2. 理解しているかどうかに配慮せず、独断的である	30.2%　(35.2%)	20.9%　(28.6%)
3. 講義が体系的でない	20.9%　(26.4%)	14.0%　(18.7%)
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない	0.0%　(2.2%)	0.0%　(6.6%)
5. 試験が難しすぎる	2.3%　(1.1%)	11.6%　(3.3%)
6. その他	14.0%　(2.2%)	18.6%　(19.8%)
7. 無回答	11.6%　(14.3%)	14.0%　(14.3%)

（　）は平成12年度調査時

表Ⅱ－２－１－11　医学部の講義で最も悪いこと（医学・学生Q32、Q33）

保健学科（看護）	１番目	２番目
1. 説明の要点がわからない	38.9%	29.7%
2. 理解しているかどうかに配慮せず、独断的である	41.7%	26.9%
3. 講義が体系的でない	8.0%	9.1%
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない	2.3%	9.1%
5. 試験が難しすぎる	6.3%	10.9%
6. その他	2.3%	12.6%
7. 無回答	0.6%	1.7%

表Ⅱ－２－１－12　医学部の講義で最も悪いこと（医学・学生Q32、Q33）

保健学科（検査）	１番目	２番目
1. 説明の要点がわからない	31.1%	29.7%
2. 理解しているかどうかに配慮せず、独断的である	45.9%	21.6%
3. 講義が体系的でない	8.1%	14.9%
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない	4.1%	4.1%
5. 試験が難しすぎる	2.7%	12.2%
6. その他	6.8%	12.2%
7. 無回答	1.4%	5.4%

４．クラス担当の教員について

クラス担当の教員についてどのような認識をしているかを調査した。

クラス担当の教員の名前（表Ⅱ－２－１－13）について、「知っている」と回答したのは、医学科が43.4%、生命科学科は79.1%、保健学科（看護）は53.1%、保健学科（検査）は48.6%である。生命科学科では、クラス担当の教員の名前を知っている率が高い。これに対し、医学科では教員の名前を知っている率は低い。

表Ⅱ－２－１－13　クラス担当の教員の名前（医学・学生Q36）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. 知っている	43.4%　(24.1%)	79.1%　(64.8%)	53.1%	48.6%
2. おそらく誰という程度	34.3%　(35.3%)	16.3%　(22.0%)	35.4%	40.5%
3. 知らない	17.5%　(33.8%)	2.3%　(7.7%)	10.9%	9.5%
4. 無回答	4.9%　(6.8%)	2.3%　(5.5%)	0.6%	1.4%

（　）は平成12年度調査時

クラス担当教員との接触（表Ⅱ－２－１－14）については、「よく世話になる」は医学科が7.7%であるが、生命科学科は16.3%、保健学科（看護）は18.3%、保健学科（検査）は13.5%である。「接触がない」と回答したものは、医学科が45.5%であるが、生命科学科は16.3%、保健学科（看護）は30.9%、保健学科（検査）は41.9%である。医学科ではクラス担当の教員と接触が少なく、生命科学科や保健学科（看護）では多いといえる。

表Ⅱ－２－１－14　クラス担当の教員との接触（医学・学生Q37）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. よく世話になる	7.7%　(1.5%)	16.3%　(11.0%)	18.3%	13.5%
2. あまり世話にならない	42.0%　(21.8%)	65.1%　(58.2%)	50.3%	43.2%
3. ない	45.5%　(69.9%)	16.3%　(25.3%)	30.9%	41.9%
4. 無回答	4.9%　(6.8%)	2.3%　(5.5%)	0.6%	2.3%

（　）は平成12年度調査時

クラス担当の教員の必要性（表Ⅱ－２－１－15）については、医学科の74.1%、生命科学科の86.0%、保健学科（看護）の88.0%、保健学科（検査）の77.0%が必要と認め

ている。３学科とも、クラス担当の教員の必要性は認識しているが、とくに医学科ではほとんど接触がない現実を示している（Ⅲ-1-1Q37）。医学科では、現在のクラス担当制度のあり方の検討が必要である。

表Ⅱ－２－１－15　クラス担当の教員の必要性（医学・学生Q38）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. 必要である	74.1%　(60.2%)	86.0%　(78.0%)	88.0%	77.0%
2. 不必要である	20.3%　(30.1%)	11.6%　(16.5%)	11.4%	21.6%
3. 無回答	5.6%　(9.8%)	2.3%　(5.5%)	0.6%	2.5%

（　）は平成12年度調査時

５．課外活動について

米子キャンパスでのサークル活動（表Ⅱ－２－１－16）については、医学科の68.6%（85.7%）、生命科学科の65.2%（71.5%）、保健学科（看護）の50.8%、保健学科（検査）の35.1%は、なんらかのサークル活動に参加している。

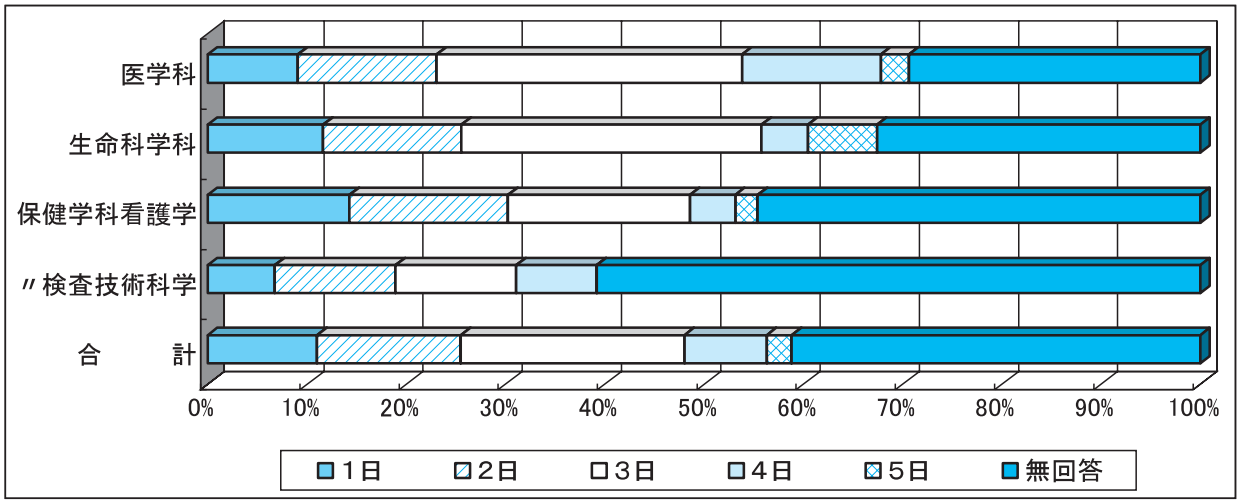
前回の調査と比較すると、医学科では文化系サークルに属するものが減少し、サークルに属さないものが増加した。体育系サークルならびに文化系・体育系の両方のサークルに属するものは、ほとんど変化がない。生命科学科では、体育系サークルに属するものがやや減少したが、サークル活動をしないものは変わりがない。文化系サークルならびに文化系・体育系の両方のサークルに属するものは、ほとんど変化がみられない。保健学科では、看護学・検査技術科学専攻ともに文化系・体育系の両方のサークルに所属している割合が少なく、なかでも検査医学専攻のサークル加入率が低い。

表Ⅱ－２－１－16　米子キャンパスでのサークル活動（医学・学生Q39）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. 文化系サークルに所属している	10.5%　(27.1%)	16.3%　(15.4%)	13.7%	16.2%
2. 体育系のサークルに所属している	41.3%　(42.1%)	32.6%　(46.2%)	29.7%	16.2%
3. 文化系・体育系の両方のサークルに所属している	16.8%　(16.5%)	16.3%　(9.9%)	7.4%	2.7%
4. サークル活動はしていない	16.1%　(7.5%)	20.9%　(22.0%)	46.3%	62.2%
5. 無回答	15.4%　(6.8%)	14.0%　(6.6%)	2.9%	2.7%

（　）は平成12年度調査時

講義のある期間中において、１週あたりどれくらいの日数をサークル活動に使っているのかについて尋ねた（図Ⅱ－２－１－１）。多くの学生は２－３日であるが、４日以上の学生が医学科では16.8%、生命科学科では11.7%、保健学科（看護）では6.9%、保健学科（検査）では8.1%おり、特に医学科で目立つ。



図Ⅱ―２―１―１　講義のある期間中において、１週あたりどれくらいの日数をサークル活動に使っていますか。

米子キャンパスのサークル活動のための施設（表Ⅱ－２－１－17）については、３学科とも、「とてもよい」と「よい」と回答したものは極めて少なく、「よくない」と「あまりよくない」の合計は、医学科が65.8%、生命科学科が60.5%、保健学科（看護）が50.2%、保健学科（検査）が43.2%と高い。米子キャンパスにおけるサークル活動のための施設の充実が切望される。

表Ⅱ－２－１－17　米子キャンパスのサークル活動のための施設（医学・学生Q41）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. とてもよい	0.7%　(1.5%)	4.7%　(5.5%)	2.3%	0.0%
2. よい	2.8%　(3.0%)	2.3%　(4.4%)	4.0%	4.1%
3. 普通	9.1%　(15.8%)	4.7%　(22.0%)	21.7%	27.0%
4. あまりよくない	21.0%　(31.6%)	25.6%　(25.3%)	29.1%	24.3%
5. よくない	44.8%　(41.4%)	34.9%　(35.2%)	21.1%	18.9%
6. 無回答	21.7%　(7.5%)	27.9%　(7.7%)	21.7%	25.7%

（　）は平成12年度調査時

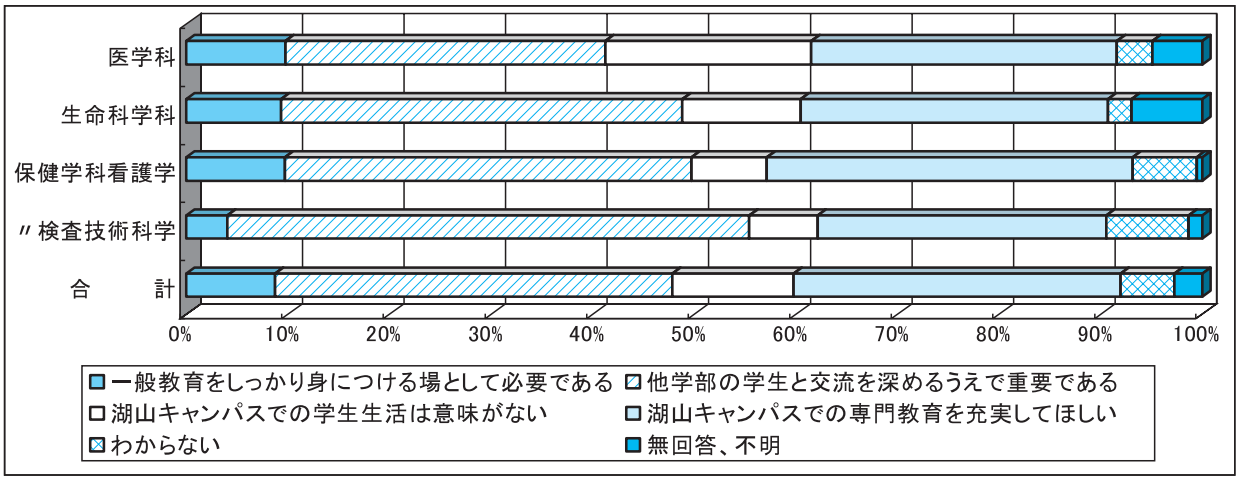
６．湖山キャンパスでの授業生活について

現在、医学部の１年次学生は湖山キャンパスで過ごすが、その意義についてどう思うかを尋ねた（図Ⅱ―２―１―２）。

「一般教育を身につける場として必要」と答えたものは３学科ともに極めて少なく、医学科では9.8%、生命科学科では9.3% 、保健学科（看護）では9.7%、保健学科（検査）では4.1%しかいない。しかしながら、「他学部の学生との交流を深めるうえで重要」との認識を持っているものは多く、医学科では31.5%、生命科学科では39.5% 、保健学科（看護）では40.0%、保健学科（検査）では51.4%に達する。また、「湖山キャンパスでの生活は意味がない」と答えた学生は、保健学科（看護）では7.4%、保健学科（検査）では6.8%であったのに対し、生命科学科では11.6%、医学科では20.3%に達している。

湖山キャンパスでの専門教育の充実を望む声は、３学科ともに高く、医学科では

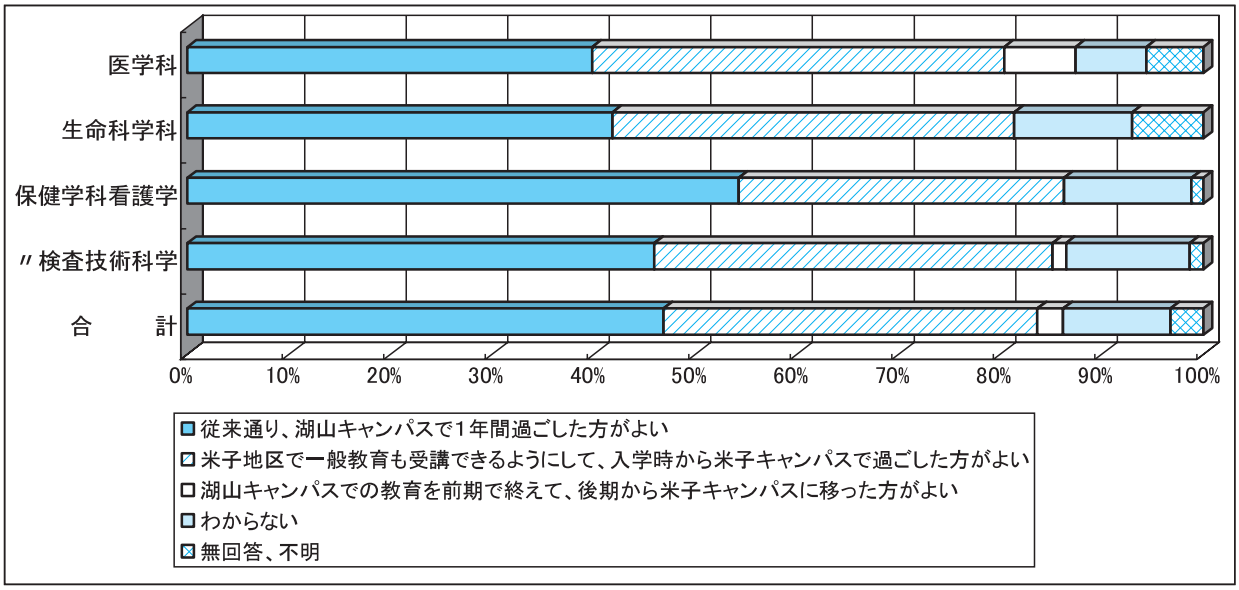
30.1%、生命科学科では30.2% 、保健学科（看護）では36.0%、保健学科（検査）では28.4%に及んでいる。



図Ⅱ―２―１―２　医学部の１年次は湖山キャンパスで過ごしますが、その意義についてどう考えますか。

入学時のキャンパスについて質問したところ（図Ⅱ―２―１―３）、医学科と生命科学科では、「従来どおり湖山キャンパスで１年間を過ごした方がよい」とする意見と「米子地区で一般教育も受講できるようにして、入学時から米子キャンパスで過ごす」という意見がほぼ同数であった。これに対し、保健学科では、「従来どおり湖山キャンパスで１年間を過ごした方がよい」とする意見が「米子地区で一般教育も受講できるようにして、入学時から米子キャンパスで過ごす」とする意見よりもやや上回った。

また、いずれの学科でも、「湖山キャンパスを前期で終え、後期から米子キャンパスに移る」とする考えには否定的であった。

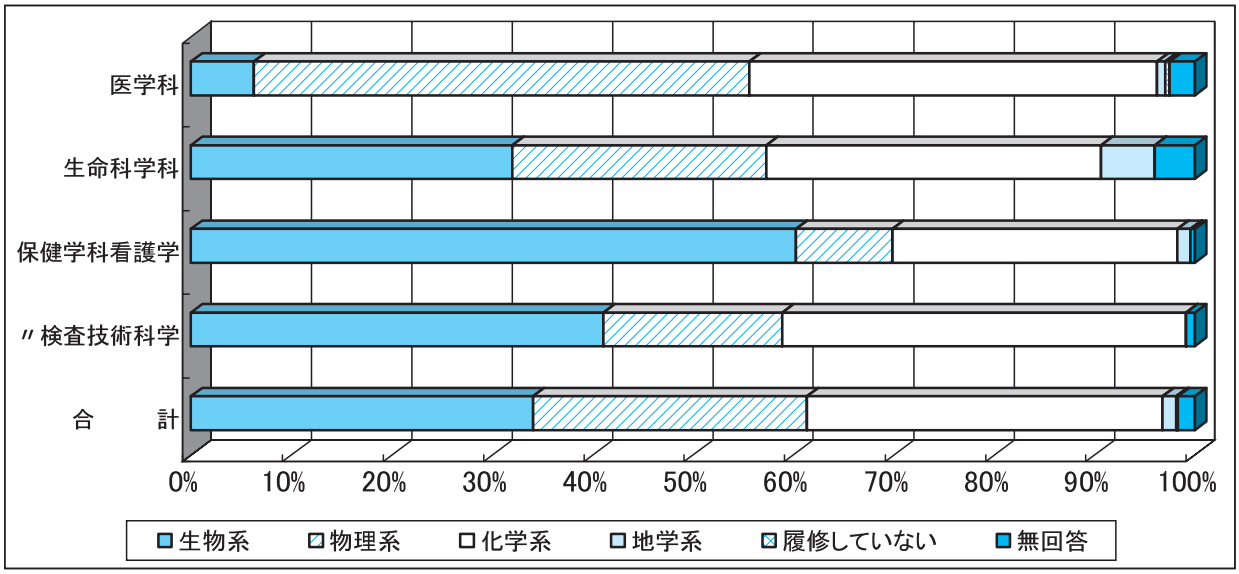


図Ⅱ―２―１―３　入学時のキャンパスについて質問します。

7．高等学校での履修科目について

高等学校で履修した理系科目について質問した（図Ⅱ―２―１―４）。「化学系」を履修したと答えたものは、医学科では40.6%、生命科学科では33.3% 、保健学科（看護）では28.4%、保健学科（検査）では40.2%と学科間でそれほど大きな違いは見られない。ところが、「生物系」を履修したと答えたものは、保健学科（看護）では60.3%、保健学科（検査）では41.1%、生命科学科では32.0%であるが、医学科では6.3%しかいない。また、「物理系」を履修したと答えたものは、保健学科（看護）では9.6%しかいないのが特徴的である。

入学試験の受験科目との関係もあろうが、医学部は理科系の学部であるので、生物系や物理系の科目を履修していないのは問題があり、未履修学生の対応が望まれる。



図Ⅱ―２―１―４　高等学校で履修した理系科目について、該当するものに印をつけてください。

Ⅲ．医学科について

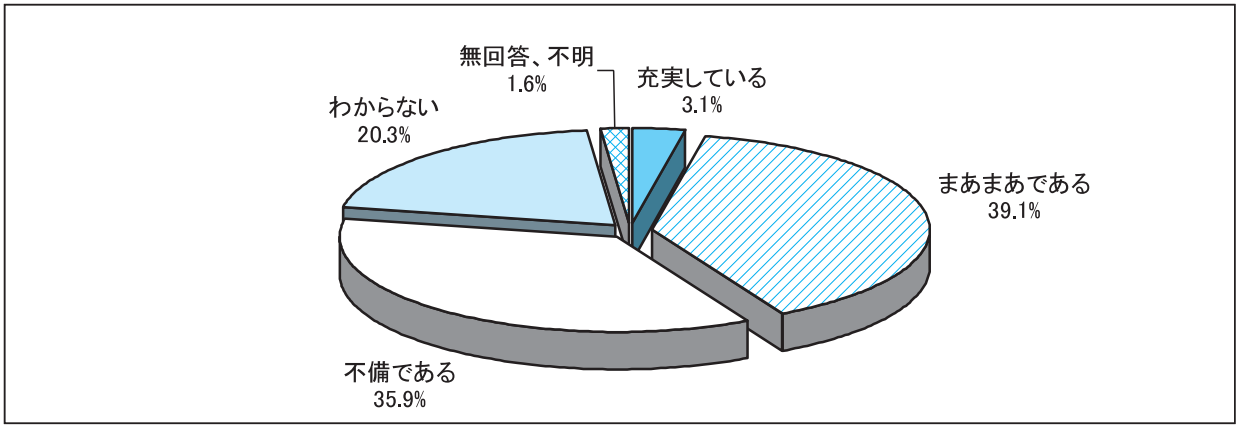
医学科の講義の理解度（表Ⅱ－２－１－18）については、「80%以上の講義が理解できる」のは19.5%で、前回の調査より上昇している。「50%以上の講義が理解できる」のは53.9%であり、「20%以上の講義が理解できる」と「理解できる講義は20%未満である」の合計は19.5%で、前回の調査より減少している。鳥取大学で検討されてきた「分かりやすい授業の進め方」が教員に浸透してきたのかもしれない。

表Ⅱ－２－１－18　医学科の講義の理解度（医医・学生Q46）

	医学科
1. 80%以上の講義が理解できる	19. 5%　(10. 5%)
2. 50%以上の講義が理解できる	53. 9%　(52. 6%)
3. 20%以上の講義が理解できる	11. 7%　(24. 8%)
4. 理解できる講義は 20%未満である	7. 8%　(7. 5%)
5. 無回答	7. 0%　(4. 5%)

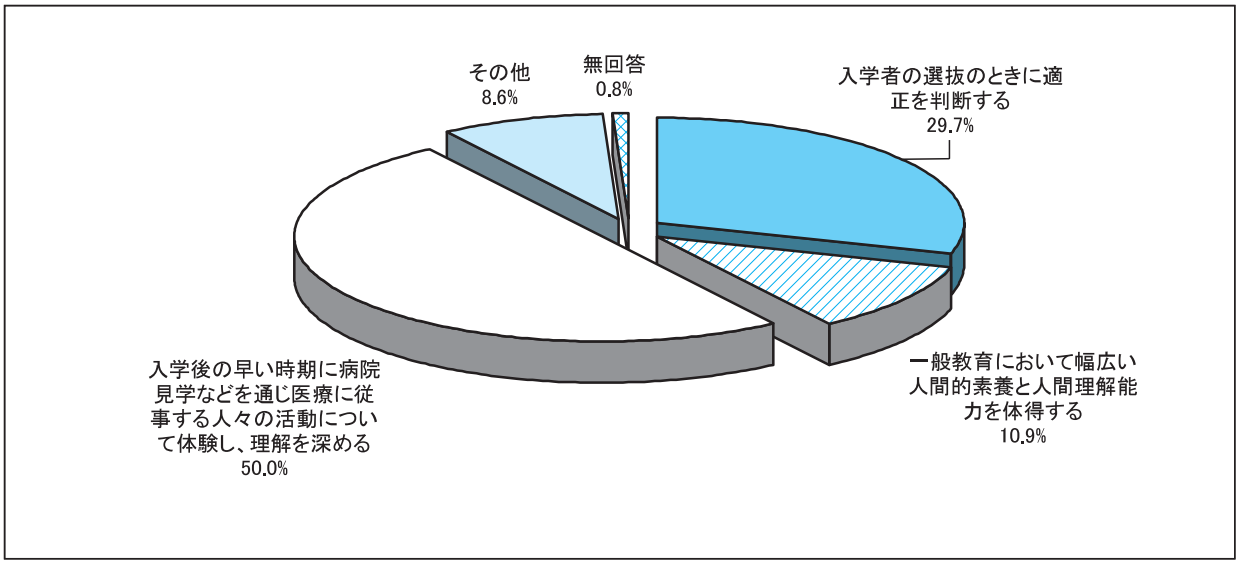
（　）は平成12年度調査時

医学科の実験・実習設備について尋ねたところ（図Ⅱ―２―１―５）、「充実している」あるいは「まあまあである」と答えたものは42.2％で、「不備である」と答えたものは35.9％である。



図Ⅱ―２―１―５　医学科の実験・実習設備について質問します。

医学に関わる分野に従事する者として、倫理観を育成する方法について最も重要と思うものをあげさせた（図Ⅱ―２―１―６）。「入学後の早い時期に病院見学などを通じ医療に従事する人々の活動について体験し、理解を深める」とした回答が最も多く、50.0％を占める。ついで、「入学者の選抜のときに適正を判断する」が29.7％で、「一般教育において幅広い人間的素養と人間理解能力を体得する」と答えた者は10.9％ しかいなかった。



図Ⅱ―２―１―６　医学に関わる分野に従事する者として倫理観を育成する方法について最も重要と思うのは、どれですか。

卒業後に研修したい分野（表Ⅱ－２－１－19）については、外科系臨床医学が増加し、内科系臨床医学が激減している。基礎医学はほとんど変化がないが、社会医学は増加している。

表Ⅱ－２－１－19　将来専攻したい分野（医医・学生Q48）

	医学科
1. 基礎医学	2.3%　(2.3%)
2. 社会医学	3.9%　(1.5%)
3. 外科系臨床医学	33.6%　(24.1%)
4. 内科系臨床医学	16.9%　(46.6%)
5. 分からない	13.3%　(21.1%)
6. 無回答	0.0%　(4.5%)

（　）は平成12年度調査時

卒業後に研修したいところ（表Ⅱ－２－１－20）については、卒後臨床研修の必修化に伴い、前回と質問項目が変わっている。従って、前回の調査と正確に比較することはできない。しかしながら、鳥取大学附属病院や鳥取県内の指定病院での研修を希望するものが合わせて14.9%しかおらず、鳥取大学附属病院での研修希望者は激減している。

表Ⅱ－２－１－20　卒後臨床研修を行いたいところ（医医・学生Q49）

	医学科
1. 鳥取大学附属病院	6.3%　(27.1%)
2. 鳥取県内の指定病院	8.6%
3. 県外の大学附属病院	13.3%
4. 県外の研修指定病院	51.6%
5. 分からない	20.3%　(30.1%)
6. 無回答	0.0%　(4.5%)

（　）は平成12年度調査時

Ⅳ．生命科学科について

生命科学科の学生（在学生 39 名、卒業生 58 名）からの回答があった。

１．生命科学科の教育全般について

生命科学科の実験・実習の設備について

今回の調査で、在学生回答者の 76.9%が「充実している」または、「まあまあである」と回答し、前回調査（H11）の 75.9%とほぼ同じであるが、H4 年度調査の 39.3%に比べ高い割合であった。平成５年に生命科学科棟が新築されたことにより、実験・実習の設備が大幅に改善され、現在に至っていることが示された。しかし、未だ 7.7%前後の学生が極めて貧弱であると感じていることから、さらに改善の余地がある。

表Ⅱ－２－１－21　生命科学科の実験・実習の設備

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q45)	卒業生 (Q42)		
1. 充実している	23.1%	39.7%	33.0%	1.6%
2. まあまあである	53.8%	43.1%	42.9%	37.7%
3. 不備である	0%	3.4%	14.3%	39.3%
4. 極めて貧弱である	7.7%	1.7%	5.5%	21.3%
5. 無回答	15.4%	12.1%	4.4%	

講義科目について

カリキュラムに「満足している」は 12.8%と少ない。「科目について選択の幅が狭すぎる」点について、平成 11 年の調査では 45.1%と多くの学生が感じていたが、平成 12 年度からの保健学科との合同講義による基礎医学科目の選択科目の開設により、この問題は改善され「科目について選択の幅が狭すぎる」と思う学生は半減したが、それでもまだ、18-20%の学生、卒業生が選択科目を少ないと感じているようである。平成 16 年度からは「機能再生医科学概論」や「構造生物学・バイオインフォマティクス」を新設し改善の努力が進められているが、表Ⅱ－２－１－23 に示すように、「遺伝子治療学・再生医療学」「ゲノム創薬・製薬学」「バイオ産業システム学」「教員免許用科目」などの開設を望む声も多い。特に「教員免許用科目」の開設は在学生の 28.2%、卒業生の 31.0%が希望している。

表Ⅱ－２－１－22　カリキュラムについて

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q46)	卒業生 (Q43)		
1. 満足している	12.8%	20.7%	14.3%	
2. 科目の選択の幅が狭すぎる	17.9%	20.7%	45.1%	
3. 開設科目に片寄りがある	10.3%	6.9%	7.7%	
4. 開設科目が広範すぎる	0%	1.7%	1.1%	
5. 開設科目の間の関連性が明確でない	15.4%	5.2%	18.7%	
6. 他にも開設してほしい科目がある	12.8%	20.7%	-	
7. 特に何も思わない	12.8%	10.3%	5.5%	
8. その他	12.8%	1.7%	4.4%	
9. 無回答	5.1%	12.1%	3.3%	

表Ⅱ－２－１－23　今後取り入れたらよいと思うカリキュラム

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q47)	卒業生 (Q44)		
1. 遺伝子治療学・再生医療学	38.5%	13.8%		
2. ゲノム創薬・製薬学	12.8%	24.1%		
3. 生物資源応用学	2.6%	0%		
4. バイオ産業システム学	15.4%	12.1%		
5. 教員免許用科目	28.2%	31.0%		
6. その他	2.6%	5.2%		
7. 無回答	0%	13.8%		

講義に対する満足度について

医学系科目の講義について、表Ⅱ－２－１－24に示すように、「やや不満」「不満」「大いに不満」は在学生で56.4%、卒業生で63.8%と、H11年度調査78.1%、H4年度調査 73.4%に比べて若干減少傾向にあるが、医学系の講義に対する不満は依然として高い割合であり、その問題点を検討し、改善する必要があると考えられる。また、講義の難易度については、表Ⅱ－２－１－25に示すように、全調査を通じて、「むつかしい、やさしいが半々」と回答したものが多く、難易度としては適当であることが示された。

表Ⅱ－２－１－24　医学系の講義に対する満足度

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q48)	卒業生 (Q45)		
1. 大いに満足	0%	8.6%	3.3%	3.1%
2. 満足	33.3%	15.5%	15.4%	23.4%
3. やや不満	38.5%	37.9%	37.4%	32.8%
4. 不満	5.1%	13.8%	24.2%	28.1%
5. 大いに不満	12.8%	12.1%	16.5%	12.5%
6. 無回答	10.3%	12.1%	3.3%	

表Ⅱ－２－１－25　医学系の講義のレベル

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q49)	卒業生 (Q46)		
1. むつかしい講義が多い	20.5%	15.5%	26.4%	20.6%
2. やさしすぎる講義が多い	5.1%	15.5%	12.1%	7.9%
3. むつかしい、やさしいが半々	56.4%	56.9%	58.2%	71.4%
4. 無回答	17.9%	12.1%	3.9%	

また、生命科学系科目の講義について、表Ⅱ－２－１－26 に示すように、「大いに満足」と「満足」は併せて、在学生で 43.6%、卒業生で 53.5%であり、H11 年度調査 45.1%、H4 年度調査 48.4% と比べても、ほぼ半数は満足であるが、半数は不満であることが示された。また、難易度については、「むつかしい、やさしいが半々」が在学生で 59.0%、卒業生で 65.5%とそれまでの調査と同様に大半の学生が感じており、難易度としては適当ではないかと思われる。

表Ⅱ－２－１－26　生命科学系の講義に対する満足度

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q50)	卒業生 (Q47)		
1. 大いに満足	2.6%	13.8%	14.3%	3.1%
2. 満足	41.0%	39.7%	30.8%	45.3%
3. やや不満	33.3%	19.0%	28.6%	34.4%
4. 不満	2.6%	13.8%	16.5%	14.1%
5. 大いに不満	5.1%	1.7%	6.6&	3.1%
6. 無回答	15.4%	12.1%	3.3%	

表Ⅱ－２－１－27　生命科学系の講義のレベル

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q51)	卒業生 (Q48)		
1. むつかしい講義が多い	17.9%	19.0%	25.3%	40.3%
2. やさしすぎる講義が多い	5.1%	3.4%	8.8%	6.5%
3. むつかしい、やさしいが半々	59.0%	65.5%	62.6%	53.2%
4. 無回答	17.9%	12.1%	3.3%	

２．生命科学科の進路について

大学院への進学について

大学院への進学を希望する学生は、「鳥取大学の大学院に進学したい」ものは、H11 年度調査や H4 年度調査と比較して 16-18%とほぼ一定している。「他大学の大学院に進学したい」「大学は特定していないが、大学院に進学したい」ものを含め大学院への進学希望者は、H4 年度調査で 67.2%、H11 年度調査で 71.5%、今回調査の 81.5%と、増加傾向にあり、ほとんどの学生が、大学院に進学を希望しているといえる。

表Ⅱ－２－１－28　大学院への進学希望

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q28)	卒業生		
1. 鳥取大学の大学院に進学したい	16.3%		18.7%	15.6%
2. 他大学の大学院に進学したい	23.3%		26.4%	17.2%
3. 大学は特定していないが、大学院に進学したい	41.9%		26.4%	34.4%
4. 希望しない	11.6%		13.2%	14.1%
5. 分からない	4.7%		11.0%	18.8%
6. 無回答	2.3%		5.5%	

就職を希望する職種について

生命科学科では、卒業によって得られる免許や資格試験免除等の特典は特に準備されていない。これまで、生命科学科卒業生、大学院修了生は、国公立および民間企業の研究職・技術開発職、とくに大学、国公立研究機関、製薬企業研究機関の研究職に就職するものが多く、ほかに、製薬企業の営業職等、サービス部門への就職も多くあった。これらの実績から、表Ⅱ－２－１－29 に示すように、これまでの全調査をとおして「国公立および民間企業の研究職・技術開発職」への就職希望が大半を占めている。この結果は、大学院進学希望者が８割近くいることと対応し、より高度な知識と技術を求めて大学院へ進学し、それを実践できる研究開発分野への就職を希望する学生が著しく多いことを示している。このことは、入学試験での生命科学に対するモチベーションの高さにも反映されている。

表Ⅱ－２－１－29　希望する就職分野

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q52)	卒業生 (Q49)		
1. 国公立および民間企業の研究職・技術開発職	61.5%	74.1%	54.9%	55.6%
2. 国公立および民間企業のサービス部門や営業職	0%	3.4%	6.6%	9.5%
3. 医療関連の専門職（医師、看護師、検査技師など）	12.8%	3.4%		
4. 報道・出版関連の学術職	0%	0%		
5. 教育職及び公務員（官公庁、地方自治体の行政分野）	0%	1.7%	3.3%	3.2%
6. その他	5.1%	3.4%	11.0%	15.9%
7. 未定	20.5%	1.7%	24.2%	15.9%
8. 無回答	0%	12.1%	3.3%	

また、これらの目標を叶えるべく、生命科学科で学んだことが、役に立つと思うか（役に立ったか）の質問（表Ⅱ－２－１－30）に対して、在学生の87.2%、卒業生の84.5%が役に立つ（役に立った）と思っている。現在のところ、かならずしも100%学生の希望に沿った就職は実現していないと思われるが、学生の期待が大きいことを示している。

表Ⅱ－２－１－30　生命科学科で学んだことが役に立つと思うか（役に立ったか）

生命科学科	H16		H11	H4
	在学生 (Q53)	卒業生 (Q50)		
1. 大いに役に立つと思う（役に立った）	38.5%	48.3%		
2. ある程度役に立つと思う	48.7%	36.2%		
3. ほとんど役に立たないと思う	0%	3.4%		
4. 無回答	12.8%	12.1%		

Ⅴ．保健学科（看護学専攻・検査技術科学専攻）について

１．保健学科の教育全般について

保健学科における問題点について述べる。まず、１年次の湖山地区における教育については、表Ⅱ－２－１－31のごとく、「大体満足している」ものは30%弱であるが、「専門科目を増やして欲しい」が看護学専攻で45%、検査技術科学専攻で36%と高率であることが注目される。このことは、後述の２年次以降のカリキュラムにおける専門科目の過密化（表Ⅱ－２－１－33）を招く原因の１つと考えられるので、対応が急がれる。

表Ⅱ－２－１－31　１年次湖山地区での講義について
（医保看・学生Q47、医保検・学生Q47）

	看護学専攻	検査学専攻
1.大体満足している	27.3%	27.6%
2.講義（取得単位）が少なすぎる	14.5%	25.0%
3.講義（取得単位）が多すぎる	2.3%	1.3%
4.一般教育科目を増やして欲しい	3.5%	2.6%
5.専門科目を増やして欲しい	44.8%	35.5%
6.分からない、無回答	7.5%	7.9%

１年次湖山地区から２年次米子地区への進級基準については、多くの学生が妥当なものと納得しているものと思われる（表Ⅱ－２－１－32）。

表Ⅱ－２－１－32　１年次湖山地区から２年次以降の米子への進級基準について
（医保看・学生Q49、医保検・学生Q49）

	看護学専攻	検査学専攻
1.妥当である	55.8%	55.3%
2.きびしすぎる	9.3%	5.3%
3.やさしすぎる	6.4%	10.5%
4.分からない、無回答	28.5%	28.9%

２年次以降の医学部カリキュラムの過密度について、医学部３学科において比較した（表Ⅱ－２－１－33）。過密と思う学生は、保健学科看護学専攻では 74.3％であり、これは医学科の 59.4％をしのぐものであった。この背景には、国家試験受験資格の確保に多様の科目の単位取得が必要であるほか、鳥取大学保健学科としての特徴を強調するために、独自の科目を多く設けていることが指摘される。この過密化により、必修科目単位を１科目でも取得不可能になると、進級したまま、その科目を再履修して単位取得をすることがカリキュラム上で不可能になり（講義の空き時間がない）、留年学生を出すことになっている。さらに、留年学生は翌年に単位取得することだけが在学の目的となり、単位取得に無関係の半期は休学処置を取る結果を招くことになる。従って、前述のごとく専門科目を１年次に移すこと、また、取得単位数の軽減化、必修、選択科目の再調整が今後の課題であろう。

表Ⅱ－２－１－33　医学部カリキュラムの過密度について（医学・学生Q34）

	医学科	生命科学科	保健学科（看護）	保健学科（検査）
1. 過密と思う	59.4%	16.3%	74.3%	47.3%
2. 比較的余裕がある	25.2%	69.8%	24.0%	51.4%
3. 余裕がありすぎる	7.0%	7.0%	1.1%	0.0%
4. 無回答	8.4%	7.0%	0.6%	1.4%

保健学科における実験・実習設備については、「充実している」、「まあまあである」を合わせて看護学で 50.6％、検査学で 60.5％であった（表Ⅱ－２－１－34）。しかし、看護学に計画されていた４室の実習室のうち、完成しているのは１室のみであり、未完成の３室は共用や代室でまかなわれている現状の改善が望まれる。

表Ⅱ－２－１－34　保健学科の実験・実習の設備について
（医保看・学生Q45、医保検・学生Q45）

	看護学専攻	検査学専攻
1. 充実している	15.7%	6.6%
2. まあまあである	34.9%	53.9%
3. 不備である	32.0%	13.2%
4. 分からない、無回答	17.5%	26.3%

医学系講義についての理解度については、「よく理解できる」、「大体理解できる」を合わせて、両専攻共に 50％を超えていた（表Ⅱ－２－１－35）。しかし、看護学で 41.3％、検査学で 32.9％の学生が「理解できないことが多い」と述べている。これについては、両専攻共に、多くの実習、演習が必修化されているために、講義時間が少なくなっている。その割に講義内容が多岐で膨大であるために、じっくり講義できず、どんどんと講義を進めざるを得ない事情があると思われ、これについても、講義時間配分の再調整が望まれる。

表Ⅱ－２－１－35　医学系講義の理解度ついて（医保看・学生Q52、医保検・学生Q52）

	看護学専攻	検査学専攻
1. よく理解できる	1.7%	3.9%
2. 大体理解できる	51.7%	60.5%
3. 理解できないことが多い	41.3%	32.9%
4. やさしすぎる	0.6%	0.0%
5. わからない、無回答	4.7%	2.6%

今後、新たに取り入れるべき講義について表Ⅱ－２－１－36に示した。看護学では、救急看護学（29.1%）を筆頭に、看護倫理学、応用看護学に希望が高く、遺伝看護学（分子生物学）は低率であった。これに対し、検査学では、遺伝検査学（分子生物学）を半数以上が希望しており、看護学との対比は顕著であった。これらの講義は、いずれも、既に他の科目の中に取り入れられているものではあるが、今後は独立させて更に強化することも必要であろう。

表Ⅱ－２－１－36　今後の講義に取り入れる必要のある分野について
（医保看・学生Q50、医保検・学生Q50）

看護学専攻		検査学専攻	
1. 遺伝看護学（分子生物学）	9.9%	1. 遺伝検査学（分子生物学）	51.3%
2. 看護倫理学	19.8%	2. 応用検査学	19.7%
3. 応用看護学	19.2%	3. 海外との連携を強化した検査学	15.8%
4. 海外との連携を強化した看護学	15.1%	4. ウイルス検査学	9.2%
5. 救急看護学	29.1%	5. その他、無回答	3.5%
6. 東洋医学を加味した看護学	3.5%		
7. その他、無回答	3.5%		

２．保健学科学生の進路について

保健学科学生の進路について表Ⅱ－２－１－37 に示した。看護学、検査学の両専攻とも、官公庁、行政職への希望は比較的少なく、都市、あるいは地域の医療施設への就職希望がいずれも高率で 30%を超えていた。一方、保健学の研究者、教育者の希望者は、検査学では 13.2%であったが、看護学ではわずか 4.7%と極めて低率であった。保健学は大学教育の学問としていまだ歴史が浅く、今後の重要性が高まる新しい学問領域である。講義を通じて学生にこのことを充分に認識させ、この方面への希望者の高まりを期待したい。

表Ⅱ－２－１－37　今後の希望する職業分野について
（医保看・学生Q53、医保検・学生Q53）

	看護学専攻	検査学専攻
1. 官公庁（都道府県、市町村）行政	15.7%	3.9%
2. 都市の医療施設	31.7%	36.8%
3. 地域の医療施設	39.5%	30.3%
4. 保健学の研究者、教育者	4.7%	13.2%
5. その他、無回答	8.8%	15.8%

第２節　卒業生の専門教育に対する意識と評価

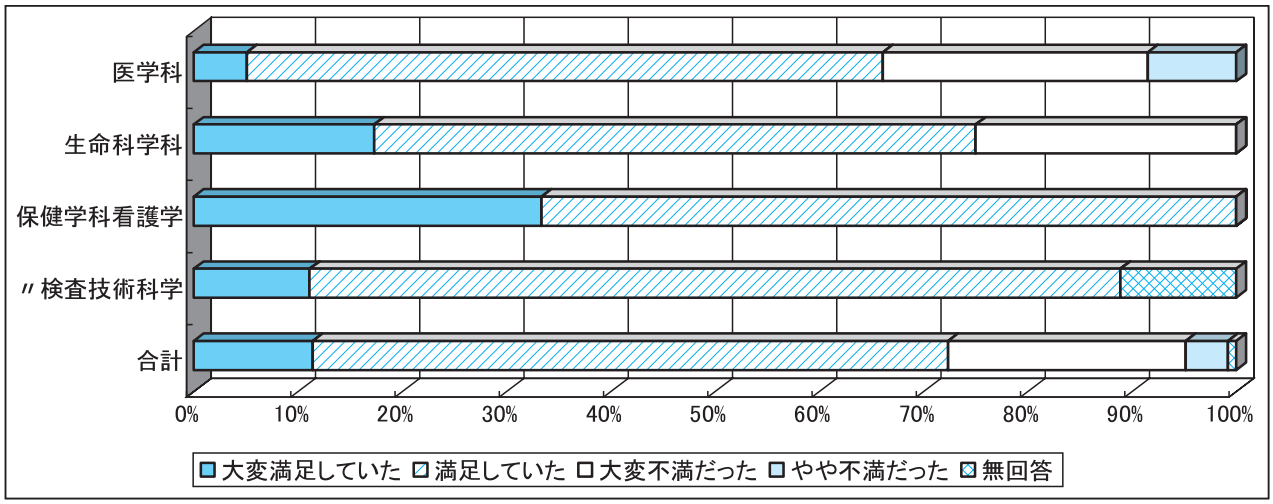
Ⅰ．大学教育に関する調査の概要

医学部および医学系研究科卒業・修了生を対象にして、全学共通項目（Ⅰ-2Q1ーQ25）と医学科・生命科学科・保健学科共通の質問（Ⅲ-1-2Q26ーQ41)、医学科学生対象の質問（Ⅲ-2-2Q42ーQ45)、生命科学科学生対象の質問（Ⅲ-3-2Q42ーQ50)、保健学科看護学専攻学生対象の質問（Ⅲ-4-2Q42ーQ49)、保健学科検査技術科専攻学生対象の質問（Ⅲ-5-2Q42ーQ50）を回答させた。調査期間は平成16年10月26日～11月19日に質問用紙を配布し、回収した。その回収状況は、医学部卒業生で回答率は19.2%、医学系研究科修了生で回答率は21.5%であった。医学部卒業の回答者の内訳を見ると、医学科が59名、生命科学科が52名であったのに対し、保健学科（看護）は３名、保健学科（検査）は９名であった。保健学科では卒業生がまだ１学年しか出ていないので回答者数も少なかったが、以下に述べるデータが保健学科の卒業生の意見を正しく反映しているかどうかについては、今後調査を重ねることによって検討しなければならない。

Ⅱ．医学科・生命科学科・保健学科共通について

１．学生生活の満足度について

鳥取大学医学部の学生生活の満足度（図Ⅱ―２―２―１）については、「大変満足していた」と「満足していた」と答えた合計は、医学科で66.1%、生命科学科で75.0%であったのに対し、保健学科（看護）で100.0%、保健学科（検査）の89.8%と高い満足度を示した。



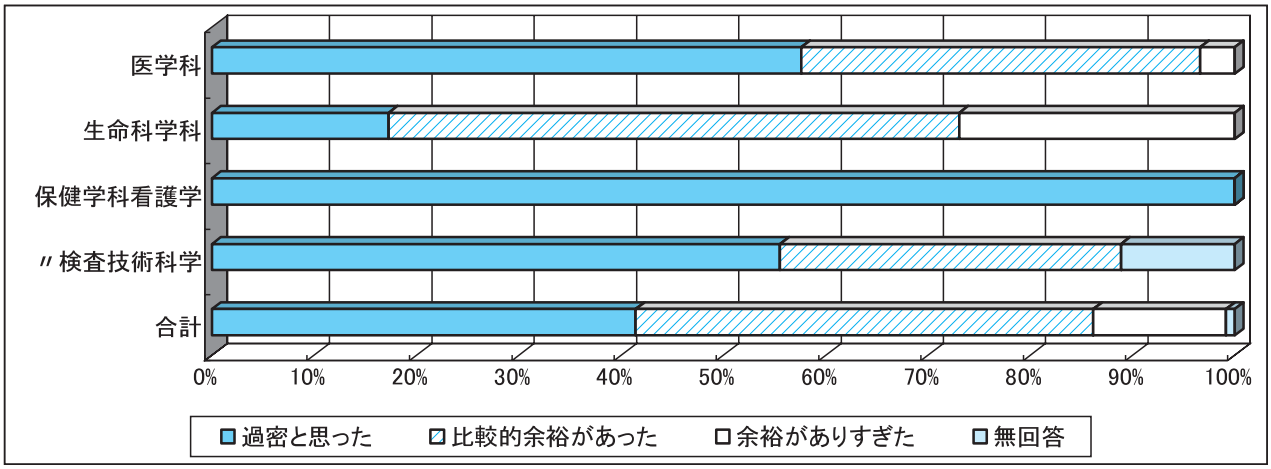
図Ⅱ―２―２―１　鳥取大学に入学した結果、あなたは学生生活に満足していましたか。

２．医学部の講義、カリキュラム等について

カリキュラムについて

医学部のカリキュラムの過密度(図Ⅱ―２―２―２）については、医学科では「過密と思った」が57.6%、「比較的余裕があった」が39.0%であった。生命科学科では「過密と思った」が17.3%であるのに対して、「比較的余裕がある」が55.8%であった。保健学科（看護）では「過密と思った」が100%、保健学科（検査）では「過密と思った」が55.6%、「比較的余裕があった」が33.3%であった。生命科学科では「余裕があ

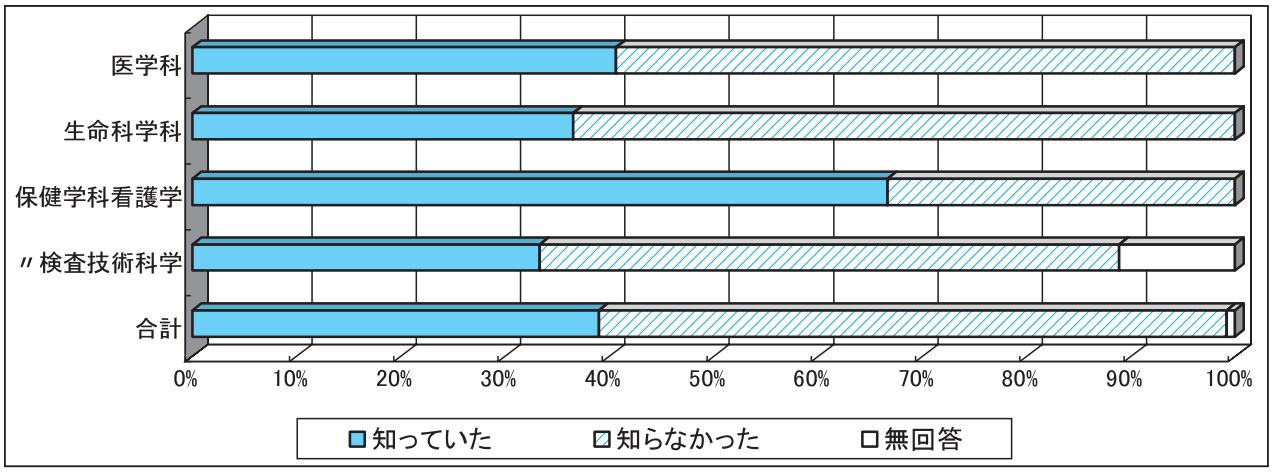
りすぎた」と答えた者が 26.9%に達する。



図Ⅱ―２―２―２　医学部のカリキュラムは過密で時間の余裕がないと思いましたか。

履修方法,試験及び成績評価にかかわる医学部規則について

医学部規則で履修方法、試験及び成績評価が行われている（図Ⅱ―２―２―３）ことを医学科の 59.3%、生命科学科の 63.5%、保健学科（看護）の 33.3%、保健学科（検査）の 55.6%の学生が知らなかった。



図Ⅱ―２―２―３　医学部のカリキュラムの過密度（医学・卒生Q32）

講義について

講義の最も良い点と悪い点について、順位を付けて答えさせた。

最も良い点では、医学科、生命科学科とも、「講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している」との項目を良い点としてあげたものが多い。

「講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している」を１番目にあげたものは、医学科では 40.7%、生命科学科では 50.0%である。保健学科は回答者数が少ないが、「教官がよく準備している」、「重点を要約して説明している」、「講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している」を良い点としてあげたものが多い。

表Ⅱ―２―２―１　医学部の講義で最も良いと思ったこと（医学・卒生 Q27、Q28）

医学科	１番目	２番目
1. 教官がよく準備している	18.6%	3.4%
2. 説明が明快で理解しやすい	8.5%	8.5%
3. 重点を要約して説明している	10.2%	20.3%
4. 講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している	40.7%	23.7%
5. その他	18.6%	27.1%
6. 無回答	3.4%	16.9%

表Ⅱ―２―２―２　医学部の講義で最も良いと思ったこと（医学・卒生 Q27、Q28）

生命科学科	１番目	２番目
1. 教官がよく準備している	9.6%	13.5%
2. 説明が明快で理解しやすい	19.2%	7.7%
3. 重点を要約して説明している	13.5%	30.8%
4. 講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している	50.0%	26.9%
5. その他	7.7%	15.4%
6. 無回答	0.0%	5.8%

表Ⅱ―２―２―３　医学部の講義で最も良いと思ったこと（医学・卒生 Q27、Q28）

保健学科（看護）	１番目	２番目
1. 教官がよく準備している	33.3%	0.0%
2. 説明が明快で理解しやすい	0.0%	33.3%
3. 重点を要約して説明している	33.3%	33.3%
4. 講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している	33.3%	33.3%
5. その他	0.0%	0.0%
6. 無回答	0.0%	0.0%

表Ⅱ―２―２―４　医学部の講義で最も良いと思ったこと（医学・卒生 Q27、Q28）

保健学科（検査）	１番目	２番目
1. 教官がよく準備している	22.2%	22.2%
2. 説明が明快で理解しやすい	11.1%	11.1%
3. 重点を要約して説明している	33.3%	22.2%
4. 講義の進度が適当である。もしくは基礎的なことから説明している	11.1%	22.2%
5. その他	11.1%	11.1%
6. 無回答	11.1%	11.1%

最も悪い点では、３学科とも、「説明の要点がわからない」と「理解しているかどうかに配慮せず、独断的である」、「講義が体系的でない」との項目をあげたものが多い。

「説明の要点がわからない」を１番目にあげたものは、医学科では 28.8%、生命科学科では 15.4%、保健学科（看護）では 0.0%、保健学科（検査）では 11.1%で、保健学科では低い。

「理解しているかどうかに配慮せず、独断的である」を１番目にあげたものは、医学科では 28.8%、生命科学科では 36.5%、保健学科（看護）では 66.7%、保健学科（検査）では 33.3%で、保健学科（看護）でかなり高い。

表Ⅱ―２―２―５　医学部の講義で最も悪いこと（医学・卒生 Q29、Q30）

医学科	１番目	２番目
1. 説明の要点がわからない	28.8%	20.3%
2. 理解しているかどうかに配慮せず、独断的である	28.8%	25.4%
3. 講義が体系的でない	28.8%	23.7%
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない	0.0%	10.2%
5. 試験が難しすぎる	8.5%	6.8%
6. その他	5.1%	11.9%
7. 無回答	0.0%	1.7%

表Ⅱ―２―２―６　医学部の講義で最も悪いこと（医学・卒生 Q29、Q30）

生命科学科	１番目	２番目
1. 説明の要点がわからない	15.4%	21.2%
2. 理解しているかどうかに配慮せず、独断的である	36.5%	32.7%
3. 講義が体系的でない	30.8%	19.2%
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない	7.7%	3.8%
5. 試験が難しすぎる	1.9%	5.8%
6. その他	7.7%	11.5%
7. 無回答	0.0%	5.8%

表Ⅱ―２―２―７　医学部の講義で最も悪いこと（医学・卒生 Q29、Q30）

保健学科（看護）	１番目	２番目
1. 説明の要点がわからない	0.0%	33.3%
2. 理解しているかどうかに配慮せず、独断的である	66.7%	0.0%
3. 講義が体系的でない	0.0%	33.3%
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない	0.0%	0.0%
5. 試験が難しすぎる	33.3%	33.3%
6. その他	0.0%	0.0%
7. 無回答	0.0%	0.0%

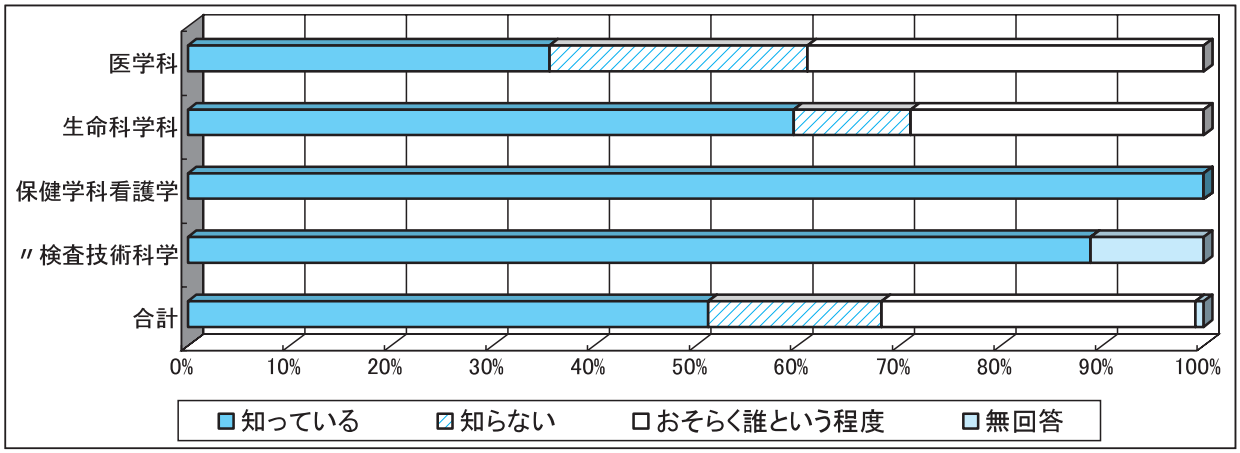
表Ⅱ―２―２―８　医学部の講義で最も悪いこと（医学・卒生 Q29、Q30）

保健学科（検査）	１番目	２番目
1. 説明の要点がわからない	11.1%	44.4%
2. 理解しているかどうかに配慮せず、独断的である	33.3%	22.2%
3. 講義が体系的でない	33.3%	22.2%
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない	0.0%	0.0%
5. 試験が難しすぎる	0.0%	0.0%
6. その他	11.1%	0.0%
7. 無回答	11.1%	11.1%

３．クラス担当の顧問教官・学級教官について

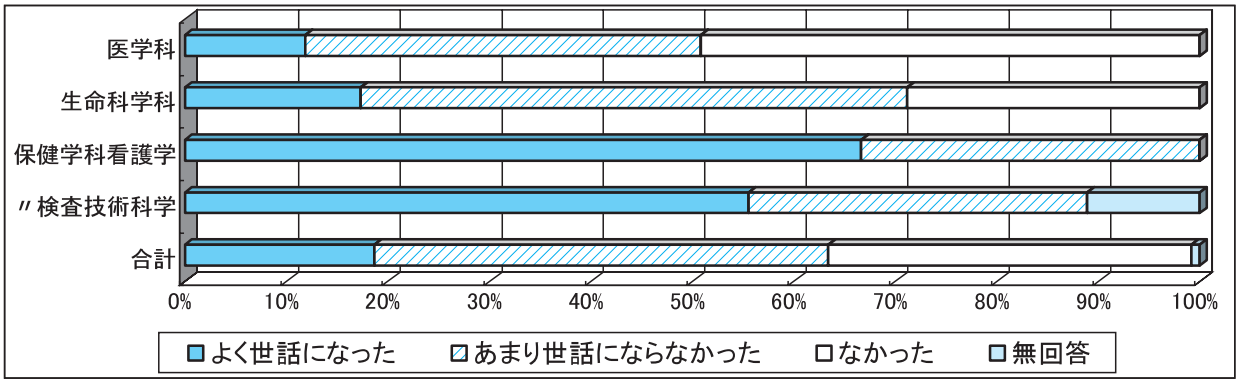
クラス担当の教官についてどのような認識をしているかを調査した。

クラス担当の教官の名前（図Ⅱ―２―２―４）について、「知っている」と回答したのは、医学科が 35.6%、生命科学科は 59.6%、保健学科（看護）は 100.0%、保健学科（検査）は 88.9%である。保健学科では大部分の学生がクラス担当の教官の名前を知っており、生命科学科でも知っている率が高い。これに対し、医学科では教官の名前を知っている率は低い。



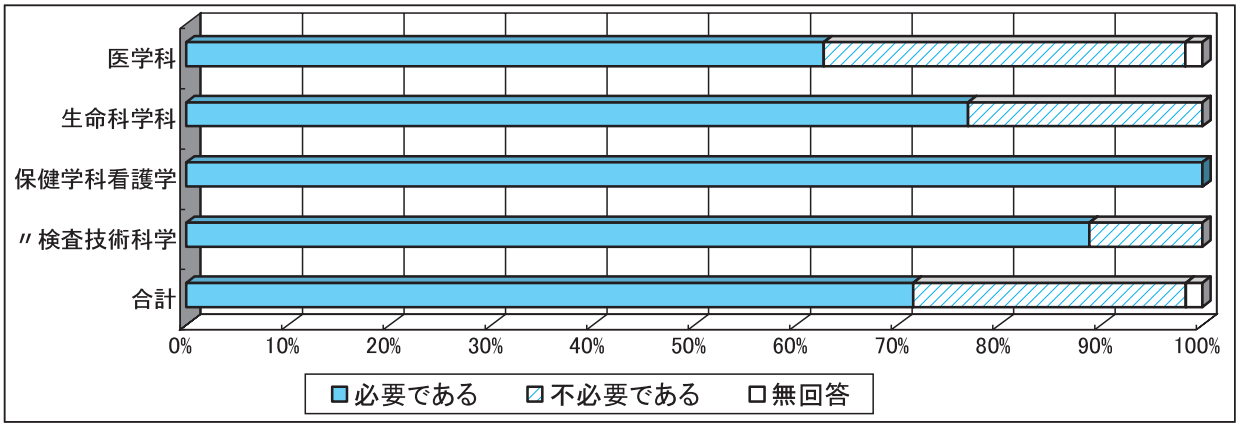
図Ⅱ―２―２―４　あなたのクラス担当の顧問教師・学級教官名についてお聞きします。

クラス担当教官との接触（図Ⅱ―２―２―５）については、「よく世話になった」は医学科が 1.9%であるが、生命科学科は 17.3%、保健学科（看護）は 66.7%、保健学科（検査）は 55.6%である。「接触がなかった」と回答したものは、医学科が 49.2%であるが、生命科学科は 28.8%、保健学科（看護）は 0.0%、保健学科（検査）は 0.0%である。医学科ではクラス担当の教官と接触が少なく、生命科学科や保健学科（看護）では多いといえる



図Ⅱ―２―２―５　顧問教官・学級教官との接触はどうでしたか。

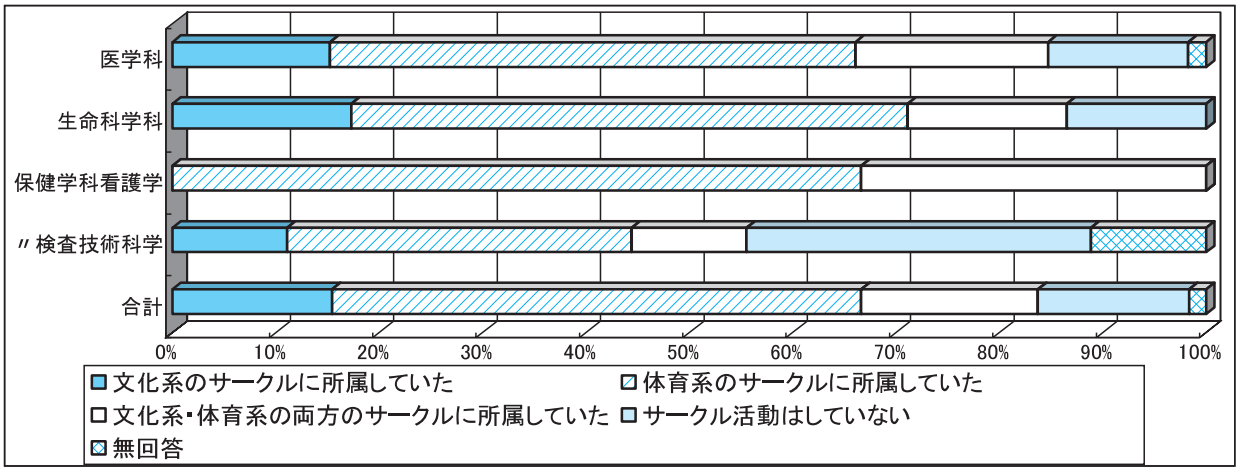
クラス担当の教官の必要性（図Ⅱ―２―２―６）については、医学科の 62.7%、生命科学科の 76.9%、保健学科（看護）の 100.0%、保健学科（検査）の 88.9%が必要と認めている。医学科では、不必要であると答えた者が 35.6%で、他学科より多い。



図Ⅱ―２―２―６　クラス担当の顧問教官・学級教官は必要でしょうか。

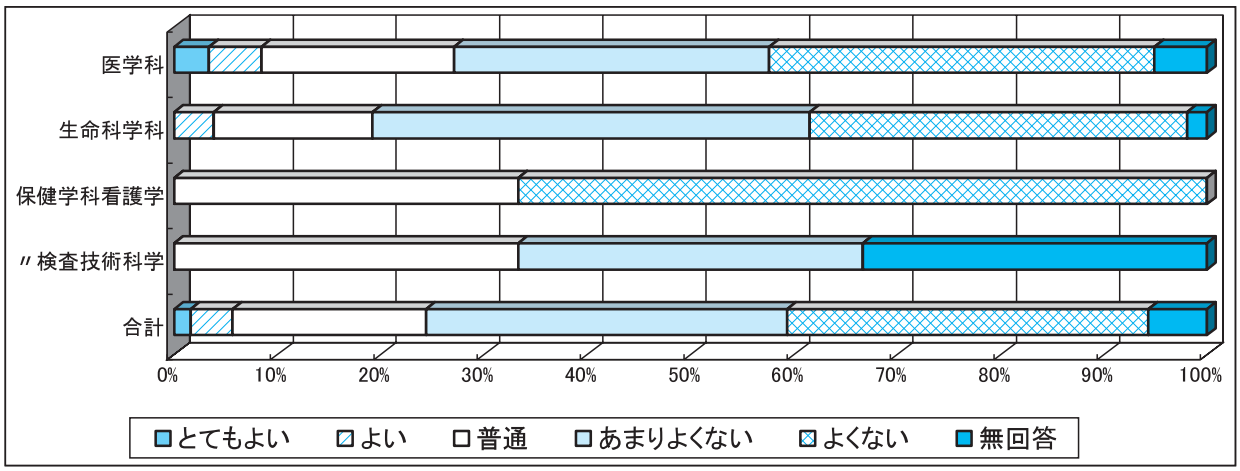
４．課外活動について

米子キャンパスでのサークル活動（図Ⅱ―２―２―７）については、医学科の 84.7%、生命科学科の 86.5%、保健学科（看護）の 100.0%、保健学科（検査）の 55.5%の学生がなんらかのサークル活動に参加していた。



図Ⅱ―２―２―７　米子キャンパスで、サークル活動をしていましたか。

米子キャンパスのサークル活動のための施設（図Ⅱ―２―２―８）については、３学科とも「とてもよい」と「よい」と回答したものは極めて少なく、「よくない」と「あまりよくない」の合計は、医学科が 67.8%、生命科学科が 78.8%と高い。



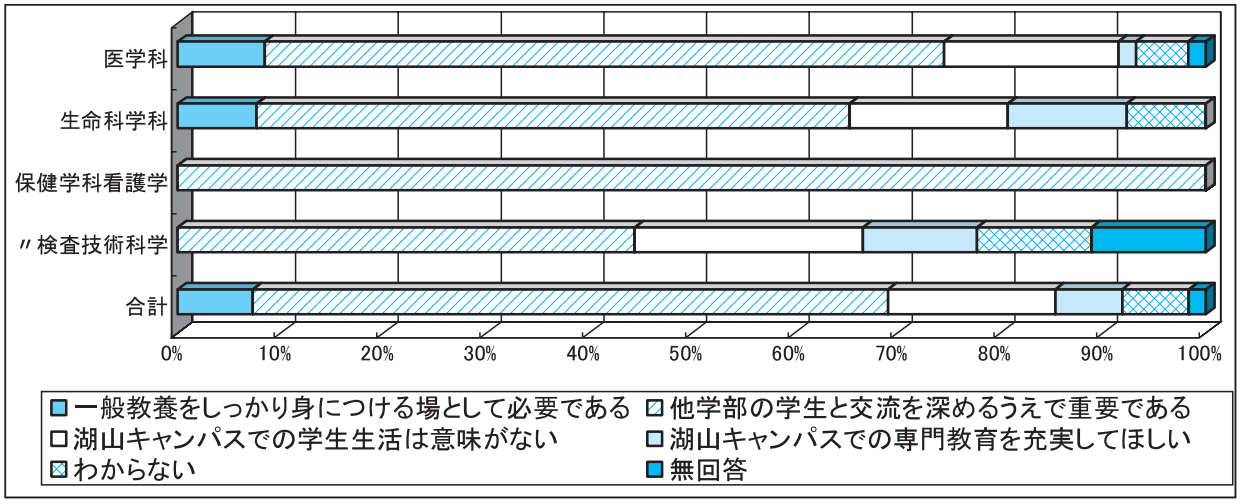
図Ⅱ―２―２―８　米子キャンパスのクラブ・サークル活動のための施設について質問します。

５．湖山キャンパスでの学生生活について

現在、医学部の１年次学生は湖山キャンパスで過ごすが、その意義についてどう思うかを尋ねた（図Ⅱ―２―２―９）。

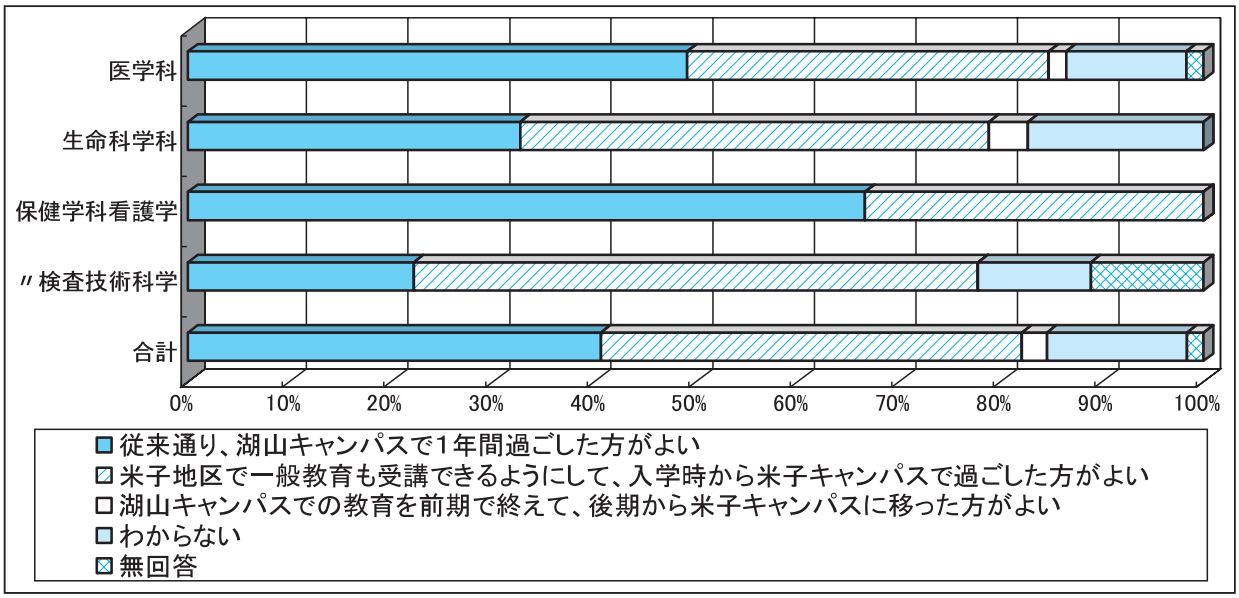
「一般教育を身につける場として必要」と答えたものは、３学科ともに極めて少なく、医学科では 8.5%、生命科学科では 7.7%、保健学科（看護）では 0.0%、保健学科（検査）では 0.0%しかいない。しかしながら、「他学部の学生との交流を深めるうえで重要」との認識を持っているものは多く、医学科では 66.1%、生命科学科では 57.7%、保健学科（看護）では 100.0%、保健学科（検査）では 44.4%に達する。また、「湖山キャンパスでの生活は意味がない」と答えた学生は、医学科では 16.9%、生命科学科では 15.4%、保健学科（検査）では 22.2%に達している。

湖山キャンパスでの専門教育の充実を望む声は、在校生に比べて極めて低く、医学科では 1.7%、生命科学科では 11.5%、保健学科（看護）では 0.0%、保健学科（検査）では 11.1%しかない。



図Ⅱ―２―２―９　医学部の１年次は湖山キャンパスで過ごしますが、その意義についてどう思いますか。（医学・卒生Ｑ39）

入学時のキャンパスについて質問したところ（図Ⅱ－２－２－10)、医学科と生命科学科では、「従来どおり湖山キャンパスで１年間を過ごした方がよい」とする意見と「米子地区で一般教育も受講できるようにして、入学時から米子キャンパスで過ごす」という意見がほぼ同数であった。いずれの学科でも、「湖山キャンパスを前期で終え、後期から米子キャンパスに移る」とする考えには否定的であった。

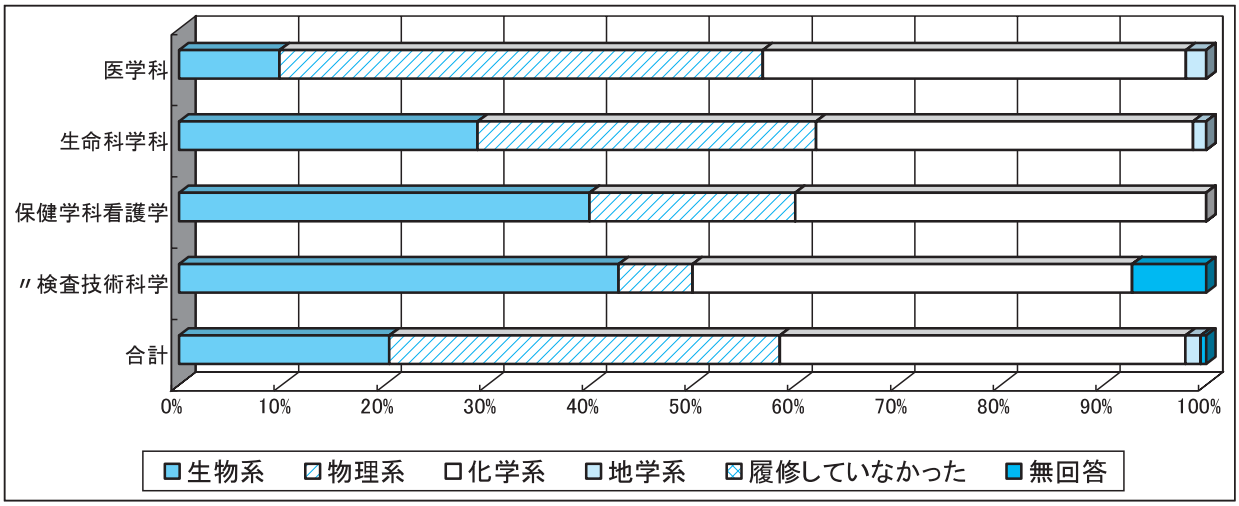


図Ⅱ－２－２－10　入学時のキャンパスについて質問します。

６．高等学校で履修した理系科目について

高等学校で履修した理系科目について質問した（図Ⅱ－２－２－11)。

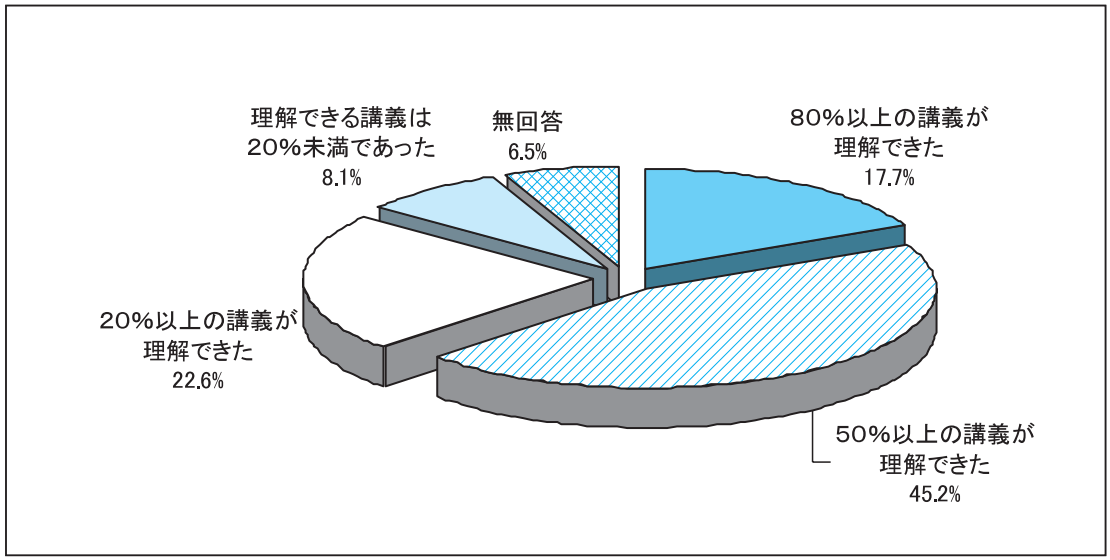
「化学系」を履修したと答えたものは、医学科では 41.2%、生命科学科では 32.9%、保健学科（看護）では 40.0%、保健学科（検査）では 42.9%と学科間でそれほど大きな違いは見られない。ところが、「生物系」を履修したと答えたものは、保健学科（看護）では 40.0%、保健学科（検査）では 40.0%、生命科学科では 29.1%であるが、医学科では 9.8%しかいない。



図Ⅱ－２－２－11　高等学校で履修した理系科目について、該当するものに印をつけてください。

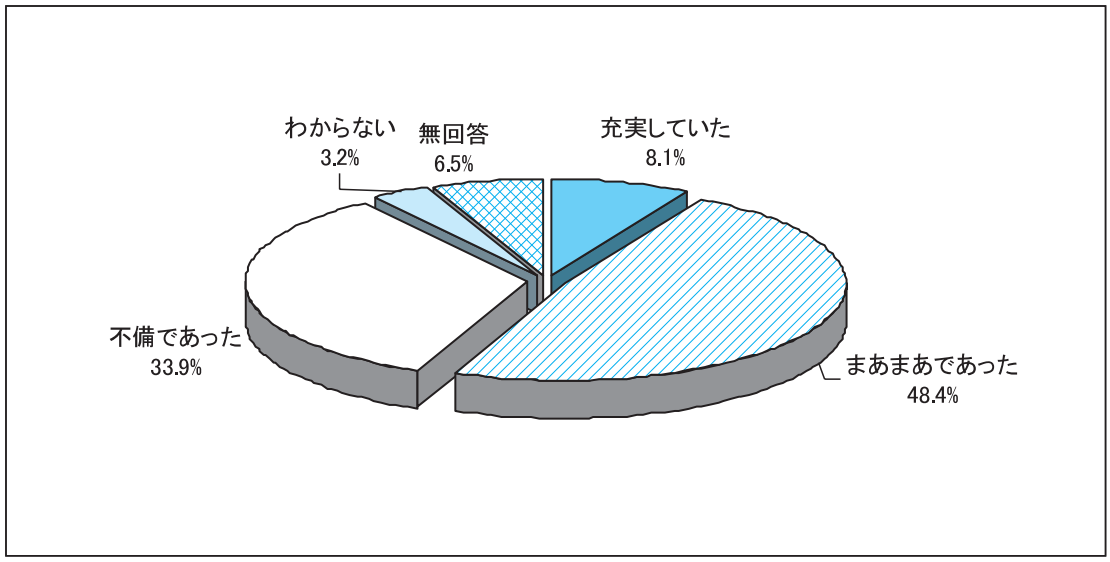
Ⅲ．医学科について

医学科の講義の理解度（図Ⅱ―２―２―12）については、「80%以上の講義が理解できた」のは、17.7%である。「50%以上の講義が理解できる」のは 45.2%であり、「20%以上の講義が理解できた」と「理解できる講義は 20%未満である」の合計は 30.7%である。



図Ⅱ―２―２―12　医学科の講義はどの程度理解できましたか。

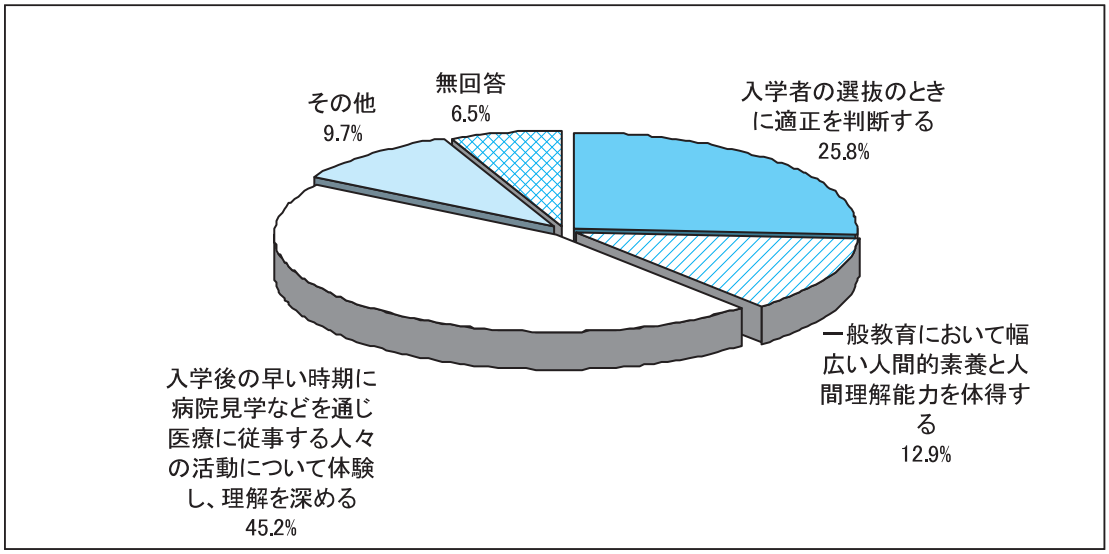
医学科の実験・実習設備について尋ねたところ（図Ⅱ―２―２―13）、「充実していた」あるいは「まあまあであった」と答えたものは 56.5%で、「不備であった」と答えたものは 33.9%である。



図Ⅱ―２―２―13　医学科の実験・実習設備について質問します。

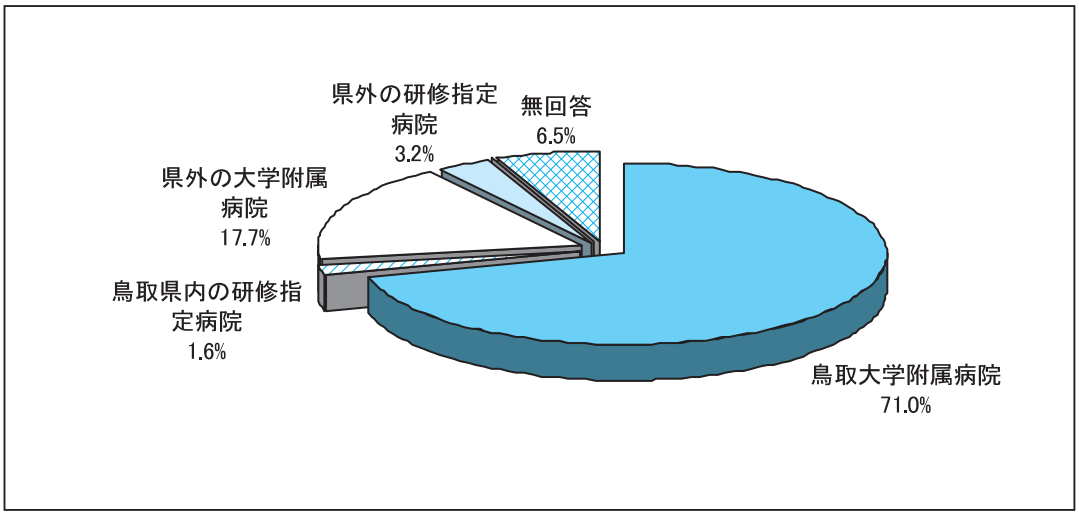
医学に関わる分野に従事する者として、倫理観を育成する方法について最も重要と思うものをあげさせた（図Ⅱ―２―２―14）。「入学後の早い時期に病院見学などを通じ医療に従事する人々の活動について体験し、理解を深める」とした回答が最も多く、45.2%を占める。ついで、「入学者の選抜のときに適正を判断する」が 25.8%で、「一般教育において

幅広い人間的素養と人間理解能力を体得する」と答えた者は 12.9% しかいなかった。



図Ⅱ―２―２―14　医学に関わる分野に従事する者として倫理観を育成する方法について最も重要と思われたのは、どれですか。

卒後臨床研修を受けた機関について質問したところ（図Ⅱ―２―２―15)、鳥取大学附属病院が 71.0%と答えたものが多かったが、現状とかなりかけ離れている。アンケート回答者の偏りを反映しているものと思われ、今後の調査に問題を残した。



図Ⅱ―２―２―15　あなたはどの機関で卒後臨床研修を受けられましたか。

Ⅳ．生命科学科について

生命科学科の卒業生からの回答は５２名からあったが、在学生との比較を行うため、第２部第３章の第４節「生命科学科について」の項に併記した。

今回の調査では卒業生の回答は在学生の回答と概ね一致した。

Ⅴ．保健学科について

保健学科の卒業生はまだ１期生しか出ておらず、得られた回答は極めて少ない。従って、正確な解析は困難と思われるので、今回はコメントを差し控えたい。

第３章　工学部の教育を中心としてみた学生の意識と評価

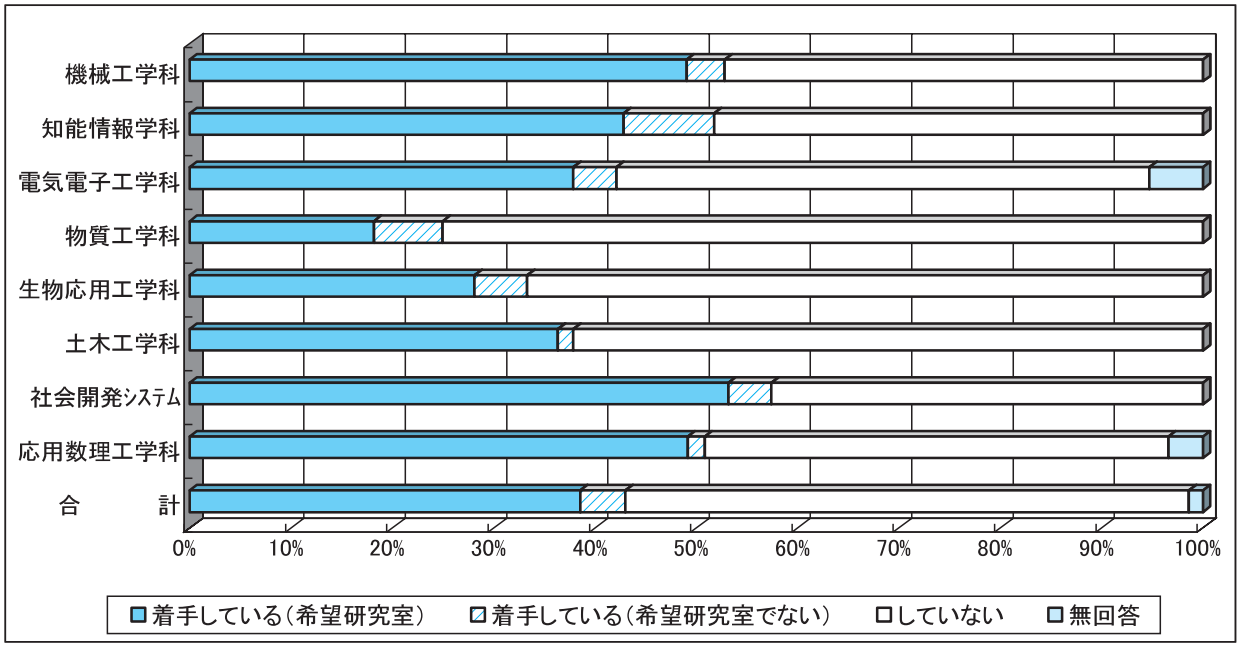
第１節　在学生の専門教育に対する意識と評価

Ⅰ．工学部について

ここでは、工学部教育の特徴と、各学科での相違・特徴・改良点などについて述べる。

１．卒業研究に着手している割合

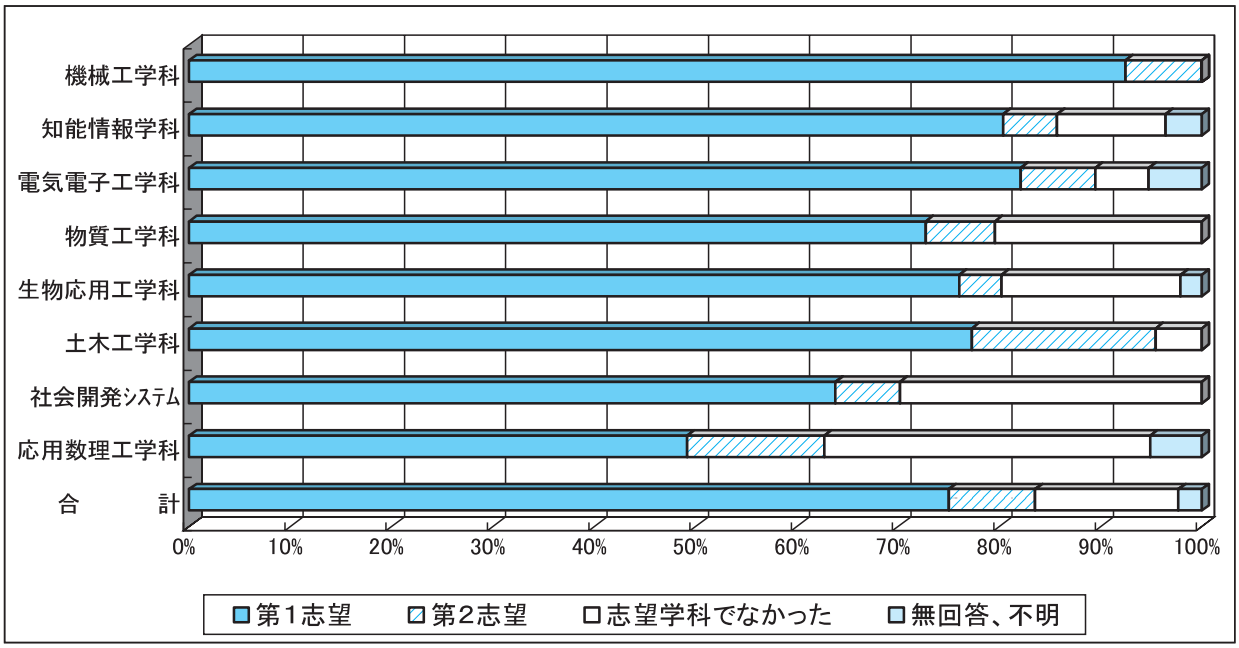
在学している平成 16 年度から平成８年度入学の在学生について、調査を実施した。「研究に着手している学生」と「着手していない学生」は工学部全体では 43.1%～55.6%と、一般学生が多い。学科別では、「着手している」工学科が多いのは、機械（52.9%）、知能情報（51.8%）、社会開発システム（57.4%）、応用数理（50.9%）である。「着手していない」工学科多いのは、電気電子（52.6%）、物質（75%）、生物応用（66.7%）、土木（62.1%）である。これによって学科ごとの評価に多少の差異が出ることが考えられる。



図Ⅱ―３―１―１　卒業研究に着手していますか。

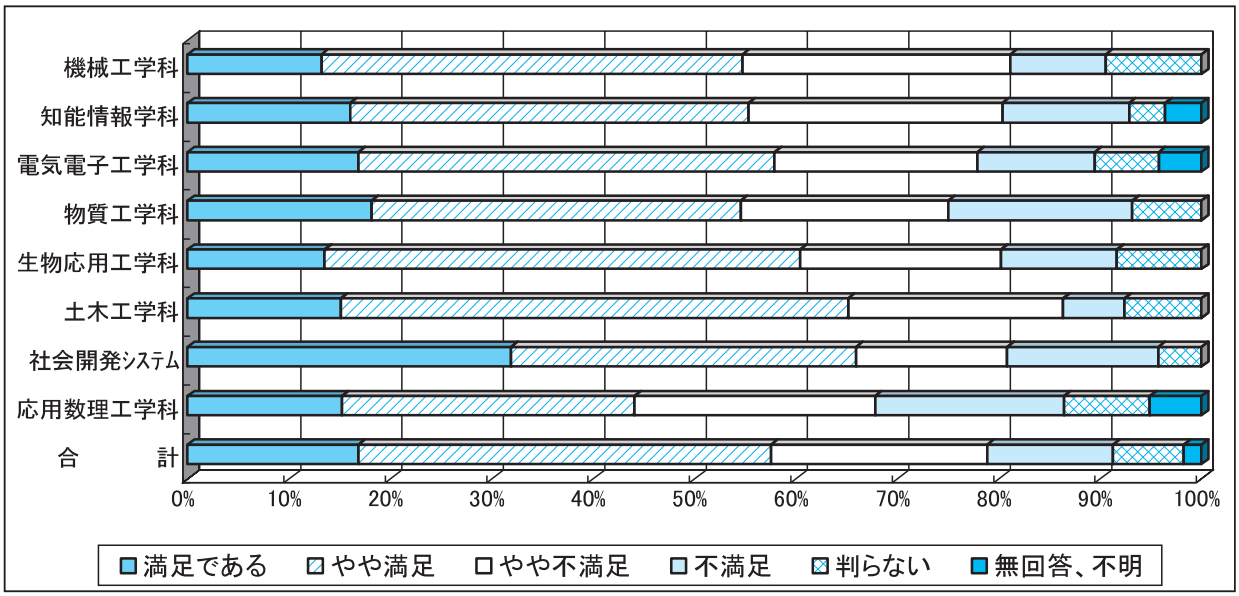
２．所属学科との関連について

所属している学科への志望（Q29）について、第２志望までの学生は工学部全体（83.5%）の高率で入学している。学科別では、機械（100.0%）、知能情報（85.8%）、電気電子（89.5%）、物質（79.5%）、生物応用（80.2%）、土木（95.5%）、社会開発システム（70.2%）、応用数理（62.8%）とばらつきがあり、機械、土木工学科の志望が高く、物質・社会開発システム・応用数理工学科では志望でない学科への入学が 20%を越えている。



図Ⅱ―３―１―２　あなたの所属学科は第１志望ですか。

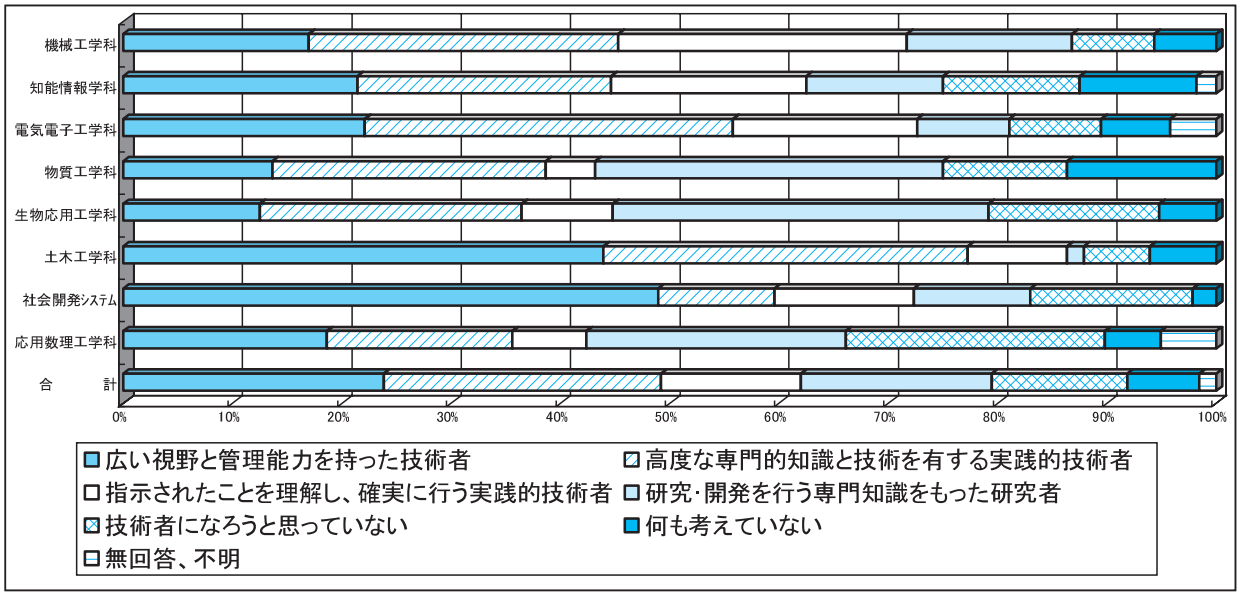
「あなたの現在の満足度はいかがですか」（Q30）、曖昧な質問ではあるが、「満足・やや満足」－「不満足・やや不満足」、工学部全体（57.6%～33.7%）、機械（54.7%～35.8%）、知能情報（55.4%～37.5%）、電気電子（57.9%～31.6%）、物質（54.6%～38.7%）、生物応用（60.1%～31.3%）、土木（65.2%～27.3%）、社会開発システム（65.9%～29.8%）、応用数理（44.1%～42.3%）である。７学科で満足度が高く、特に生物応用、土木、社会開発システム工学科で高い満足度が得られているが、応用数理工学科は50%を切って、ほぼ同率である。



図Ⅱ―３―１―３　あなたの現在の満足度はいかがですか。

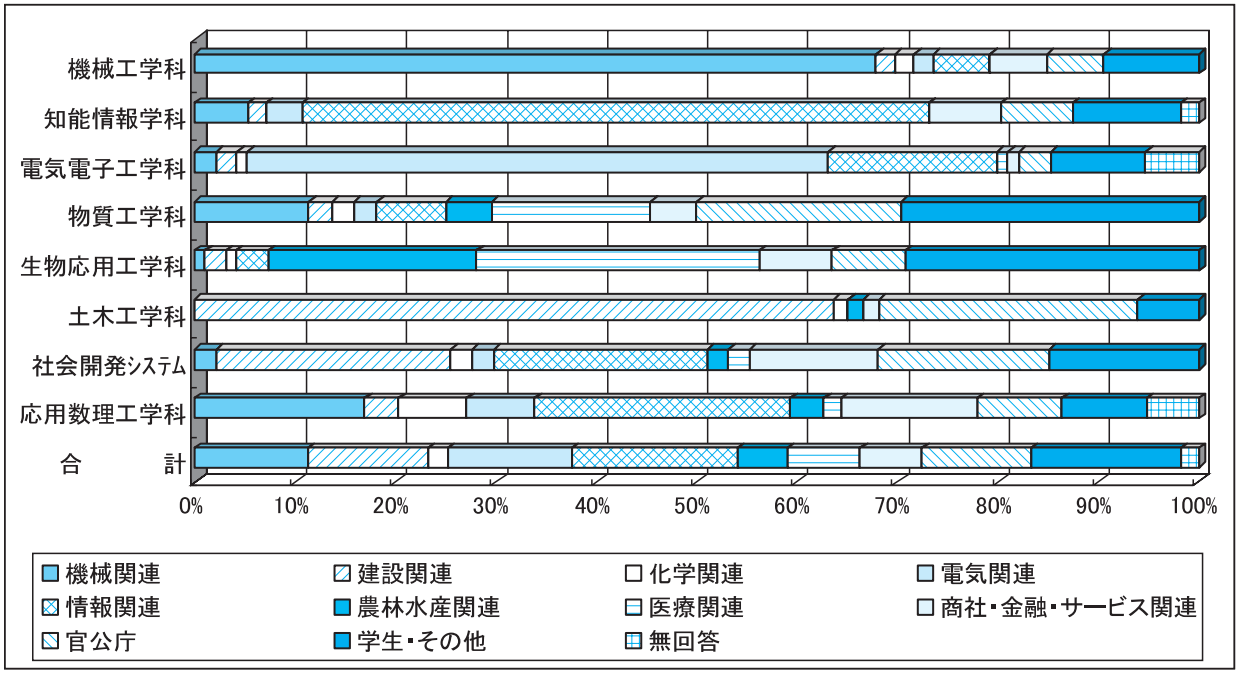
目指す技術者のタイプ（Q３１）は、「広い視野と管理能力を持った技術者」（23.8%）「高度な専門的知識と技術を有する実践的技術者」（25.4%）の２つでほぼ半数（49.2%）

を占めているが、物質・生物応用工学科の学生は「研究・開発を行う専門知識をもった研究者」への志向が大きい。応用数理工学科は学科としてのコンセンサスが見られず、「技術者にならない」ものが23.7%になっている。また、「何も考えていない」学生が知能情報（10.7%）、物質（13.6%）に少し多い。



図Ⅱ―３―１―４　あなたはどのようなタイプの技術者になりたいですか。

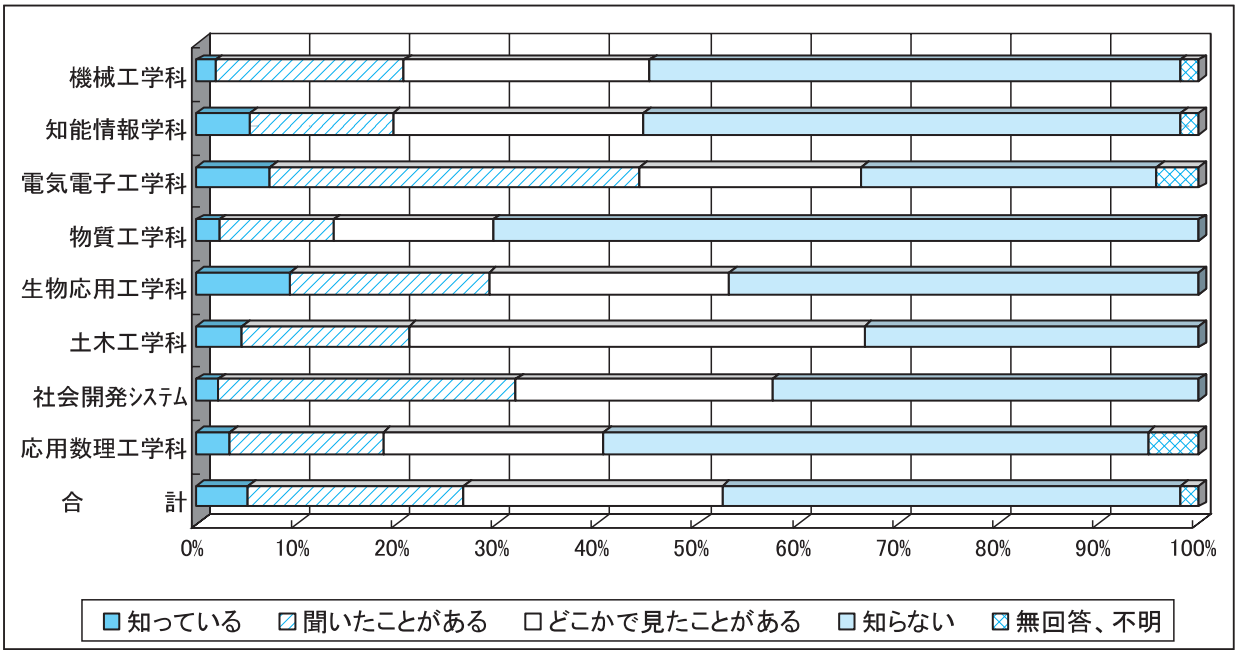
Q32は前問と関連の質問であるが、印刷ミスによって化学関連の学科に答えはない。希望の職業については、それぞれの関連の職業が多いが、他の学科についての特徴は、機械、知能情報、電気電子、土木工学科はそれぞれの関連分野への就職を希望している。しかし、社会開発システム・応用数理工学科は特定の分野に集中せず、学科の教育方針との関連が困難なことが推定される。



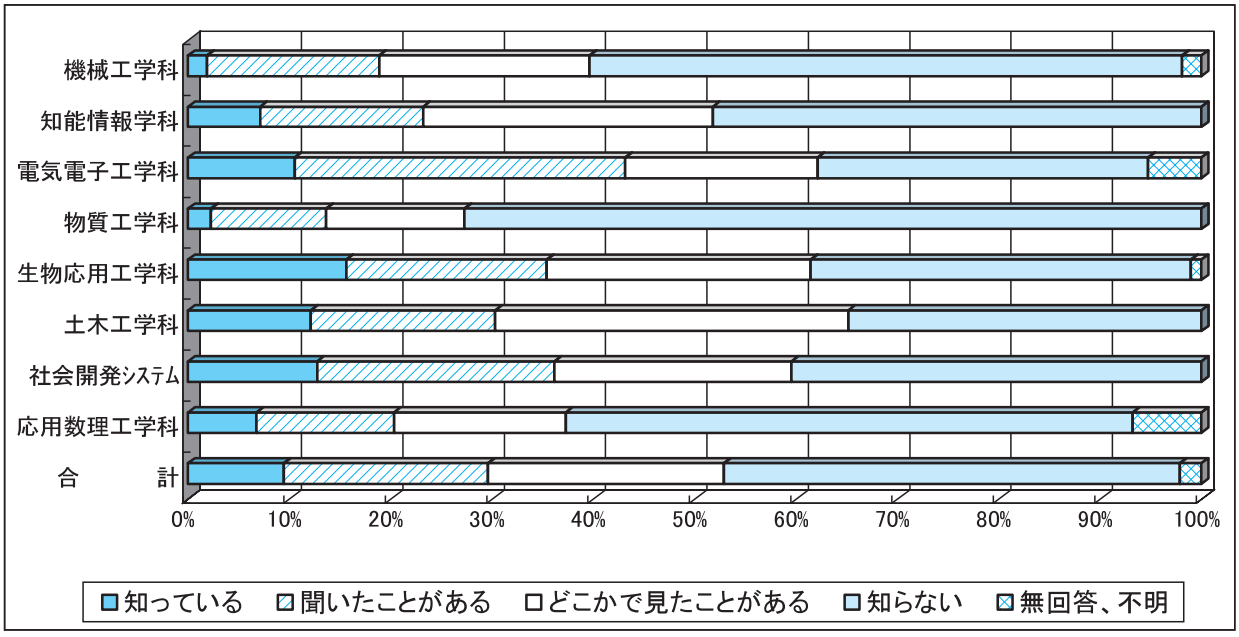
図Ⅱ―３―１―５　将来どのような職業につきたいですか。

３．工学部・各学科の教育目的・目標

工学部の教育目的・目標（Q33）を知っているかを見ると、工学部全体で 45.7%の学生が知らないとの回答を寄せているが、電気電子・土木工学科の学生は 70%前後の学生は知っている。逆に物質工学科の学生は 70%が知らない。所属学科の教育目的・目標（Q35）についてもほぼ同様の傾向を示す。知っている者ではパンフレットとインターネットで多く知っている。所属学科については、学科長などからの情報が多くなっている。



図Ⅱ―３―１―６　「鳥取大学工学部の教育目的･教育目標」などを知っていますか。

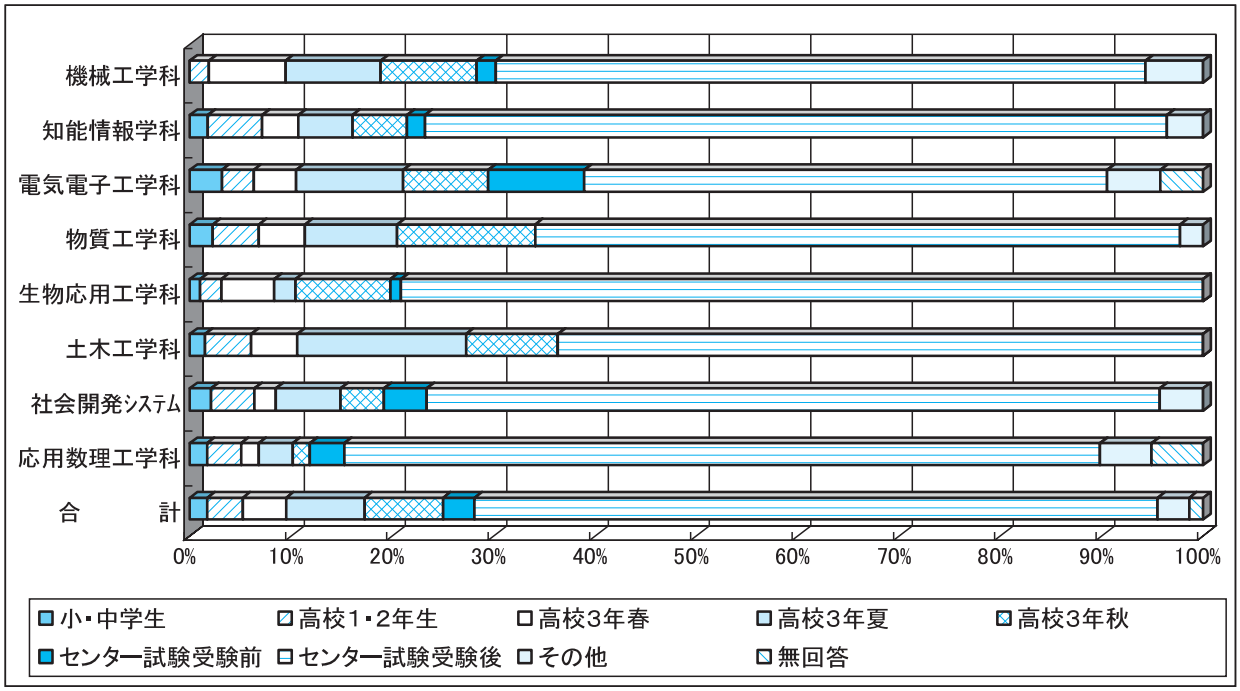


図Ⅱ―３―１―７　「所属学科の教育目的・教育目標」などを知っていますか。

Ⅱ．工学部への入学について

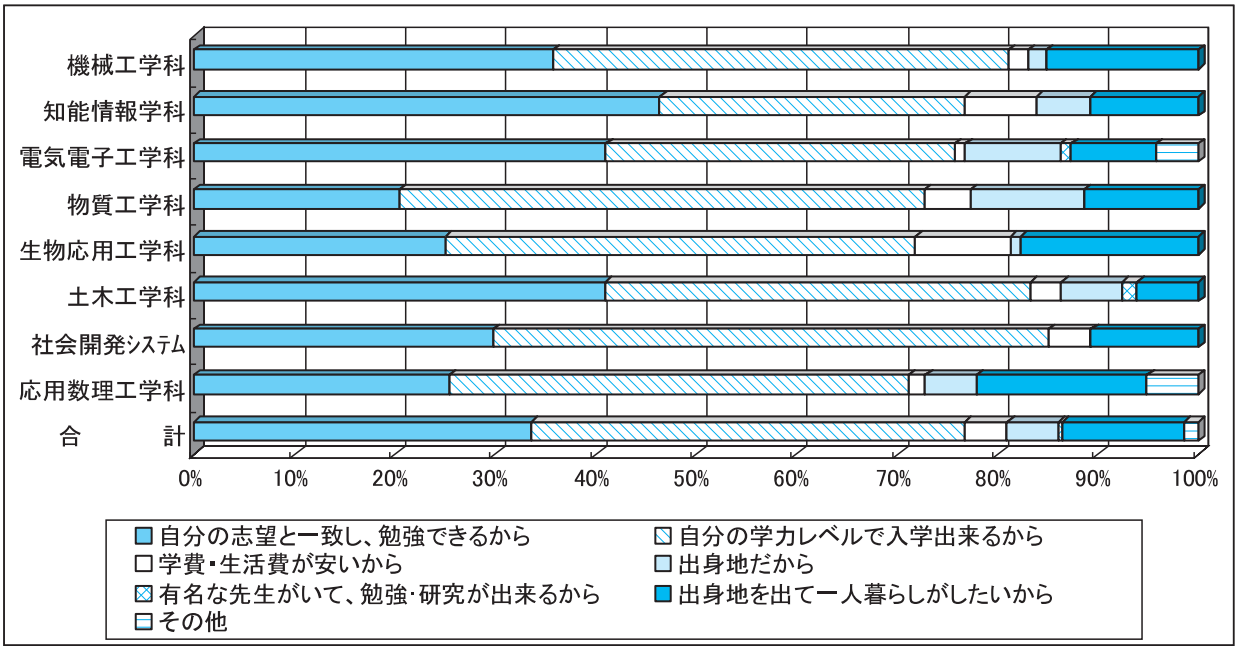
１．入学について

鳥取大学への入学を決めた時期（Q37)、「センター試験受験後」が 67.4%と圧倒的に多く、次に高校３年の夏から秋に 15.6%が決めている。センター試験の成績によって鳥取大学工学部が受験学部として浮かび上がってくる状況が現状である。しかし、電気電子工学科は約 40%がセンター前に受験を決めている。機械・物質・土木工学科はセンター試験前に受験を決めている学生が 30%を越えている。知能情報、生物応用、社会開発システム、応用数理工学科は 70%以上がセンター試験の成績によって受験を決めている。鳥取大学の入学情報などは、「大学のパンフレット」「大学のホームページ」「受験雑誌」「学校の先生」である。



図Ⅱ―３―１―８　鳥取大学工学部への受験はいつ決めましたか。

「工学部に入学した理由」（Q41）について、「自分の志望と一致し、勉強が出来るから」33.5%と「自分の学力レベルで入学できる」43.2%が合計で 76.7%を占めて、自分の学力レベルと志望によって決めている。工学部入学後の学習に大いに期待していること推定できる。しかし、他の理由である「一人暮らしをしたい」12.2%、「出身地だから」５%、「学費が安い」4.3%の合計 21.3%いる。

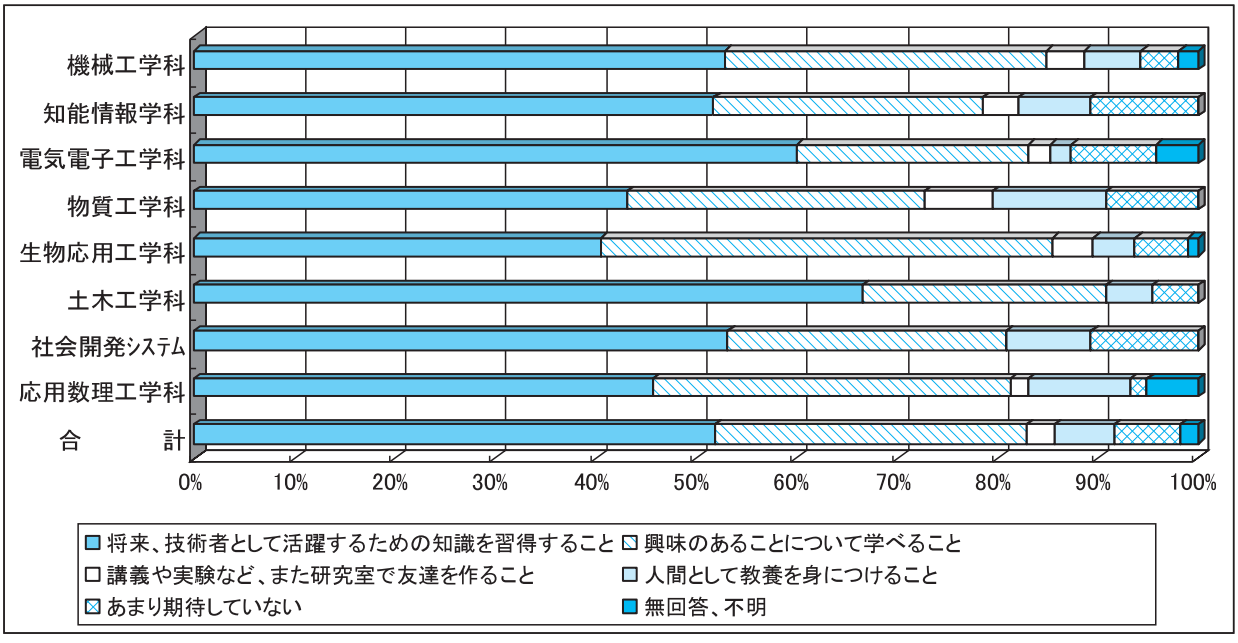


図Ⅱ－３－１－９　工学部に入学した理由は何ですか。

Ⅲ．工学教育及び各学科のカリキュラムについて

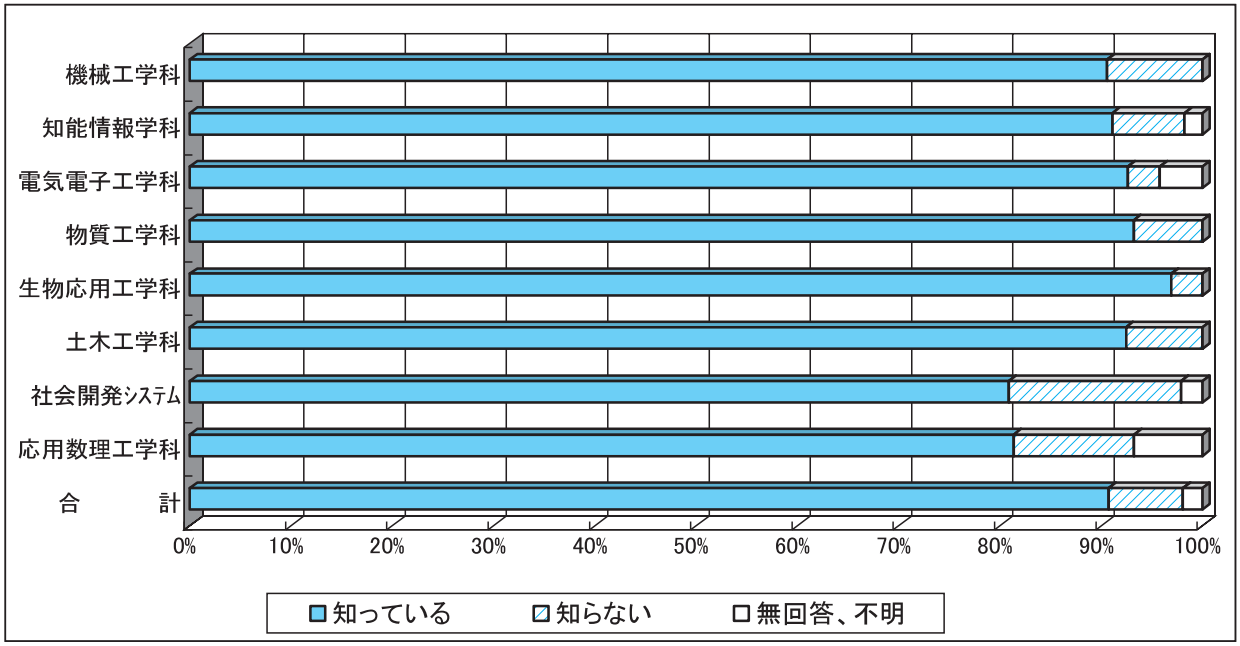
１．工学教育プログラム

「あなたは所属学科の教育カリキュラムに何を期待しますか」（Q42）に、工学部全体では「将来、技術者として活躍するための知識を習得すること」51.9%、「興味のあることについて学べる」31%、「人間として教養を身につけること」6%と合計 88.9%の学生が肯定的な理由によっている。しかし、「あまり期待していない」6.6%が否定的な考えを持っている。土木工学科と電気電子工学科は「将来、技術者としてかつやくするための知識を習得すること」66.7%と 60%と高い割合を示す。生物応用・数理応用工学科では「興味あることについて学べること」にも学生の期待が多い、また、「人間として教養を身につけること」にも 10%以上の期待がある。

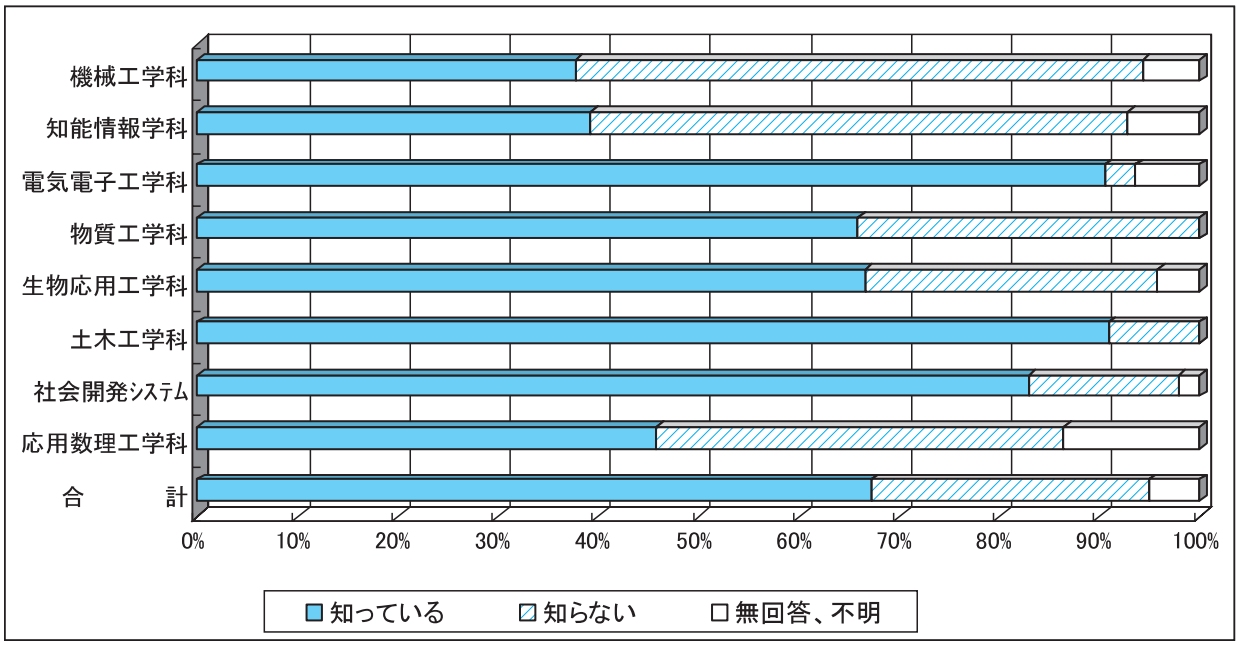


図Ⅱ－３－１－10　あなたは所属学科の教育カリキュラムに何を期待しますか。

JABEE（Q43）については、知っている学生は90%を越えていて、内容について知っているかどうかは別であるが、言葉としては聞いている。電気電子・土木・社会開発システム工学科はそれぞれ 90.5%、90.8%、83%の学生が学科で JABEE を取得したことを知っている（Q44）。



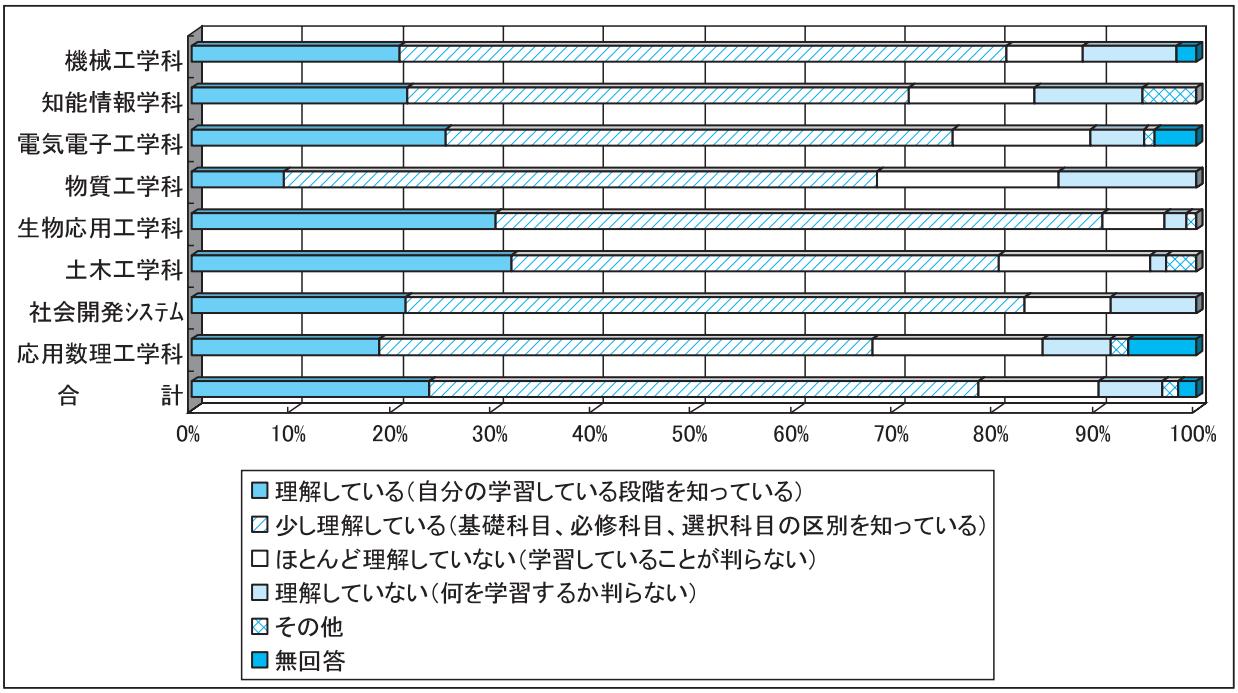
図Ⅱ―３―１―11　「JABEE」を知っていますか。



図Ⅱ―３―１―12　所属学科が「JABEE」を取得したことを知っていますか。

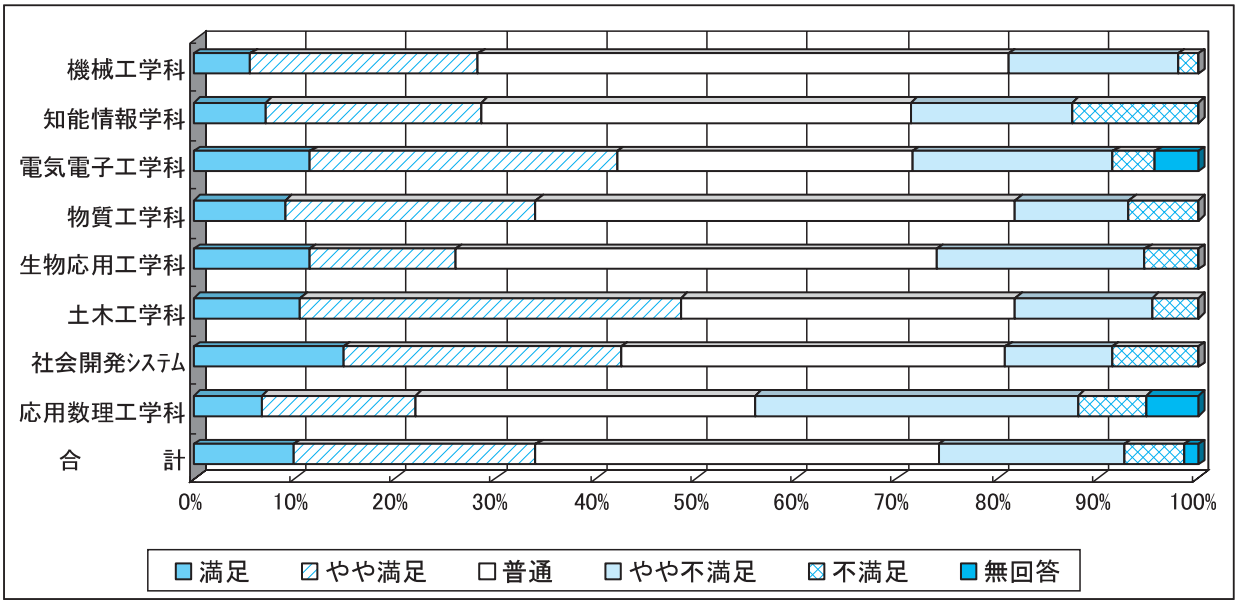
曖昧な質問として、「学科の教育プログラムを理解しているか」（Q45）と聞いた時に、「理解している・少し理解している」の肯定的意見と「理解していない・ほとんど理解していない」の否定的な意見の分布を見ると、工学部全体では「肯定的」78.3%－「否定的」18.4%と工学部教育は理解されている。生物応用工学科の学生は 90.6%が

理解している。機械・土木・社会開発システム工学科の学生は 80%を越えている。知能情報・電気電子・は 70%を越え、物質・応用数理工学科は 70%を下回っている。



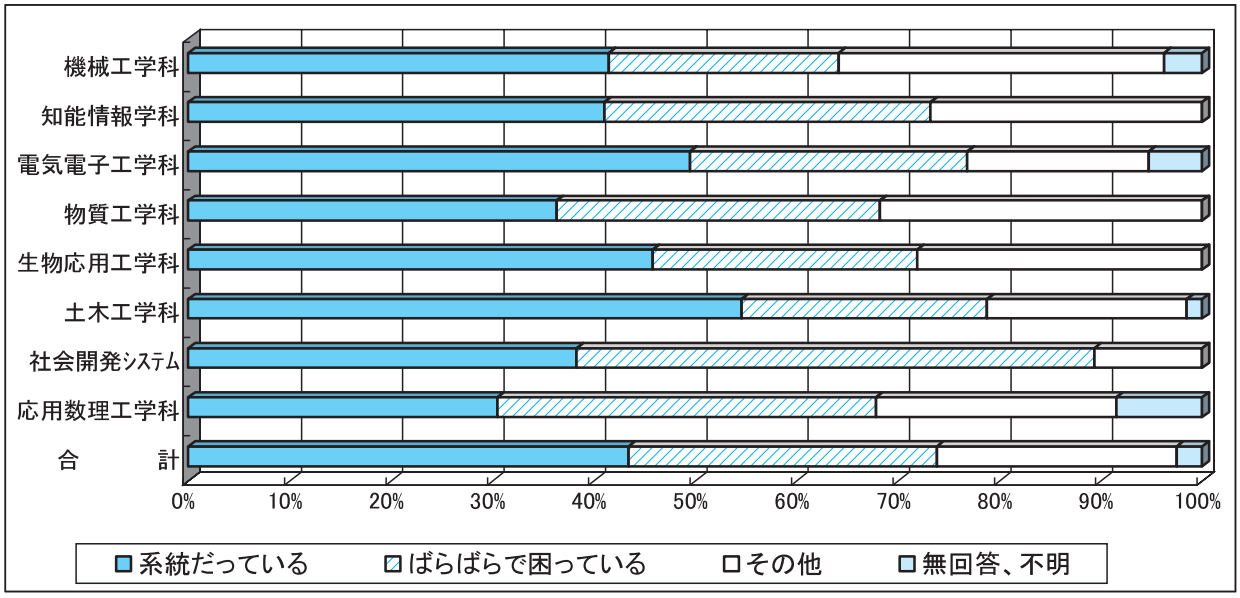
図Ⅱ―3―1―13　学科の教育プログラムを理解していますか。

「所属学科の教育カリキュラムで十分な教育を受けることが出来るか」（Q51）については、「満足・やや満足」が 34.1%、「不満足・やや不満足」が 24.4%と肯定している割合が 10%近く上回っているが、学科による差が見られる。電気電子・土木・社会開発システム工学科は 40%以上が満足しているが、知能情報・生物応用・応用数理工学科は 30%を下回っている。特に、応用数理工学科は不満足度が 39%ある。



図Ⅱ―3―1―14　所属学科の教育カリキュラムで十分な教育を受けることが出来ると思いますか。

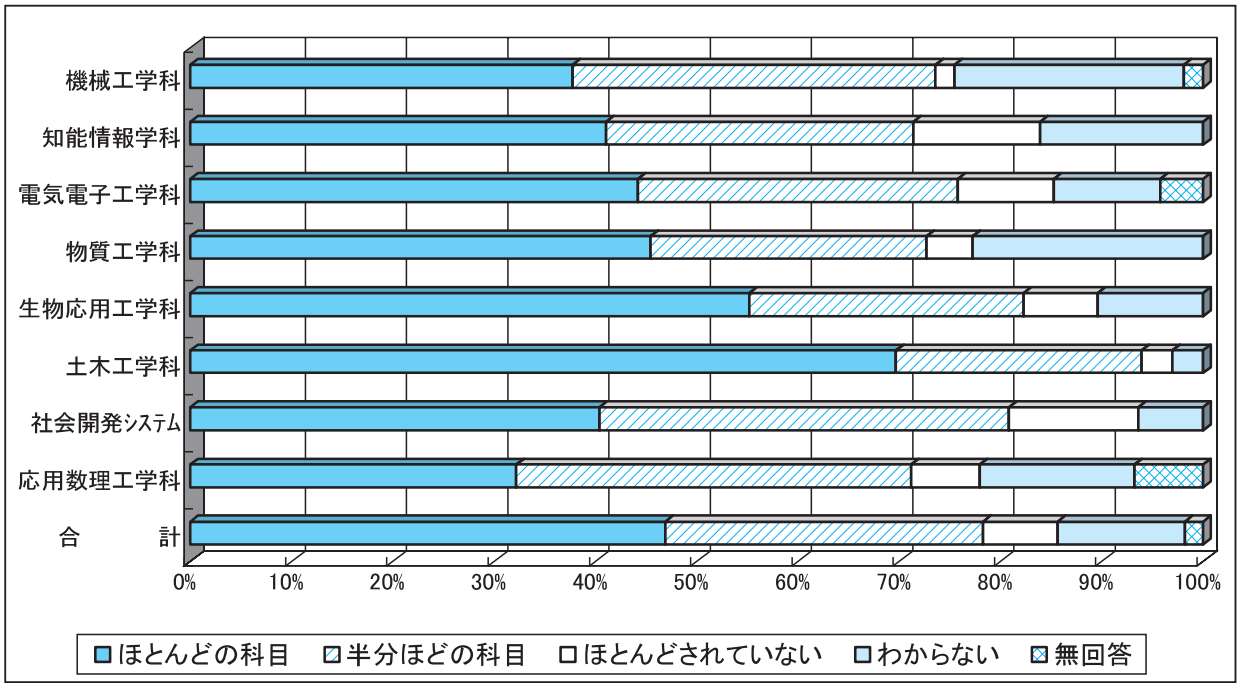
しかし、踏み込んで、「教育方針があり、系統だった教育を受けることが出来るか」（Q52）に対して、電気電子・土木工学科は50%が系統だっていると答えているのに、社会開発システム工学科の学生は51%が「ばらばらで困っている」と回答している。



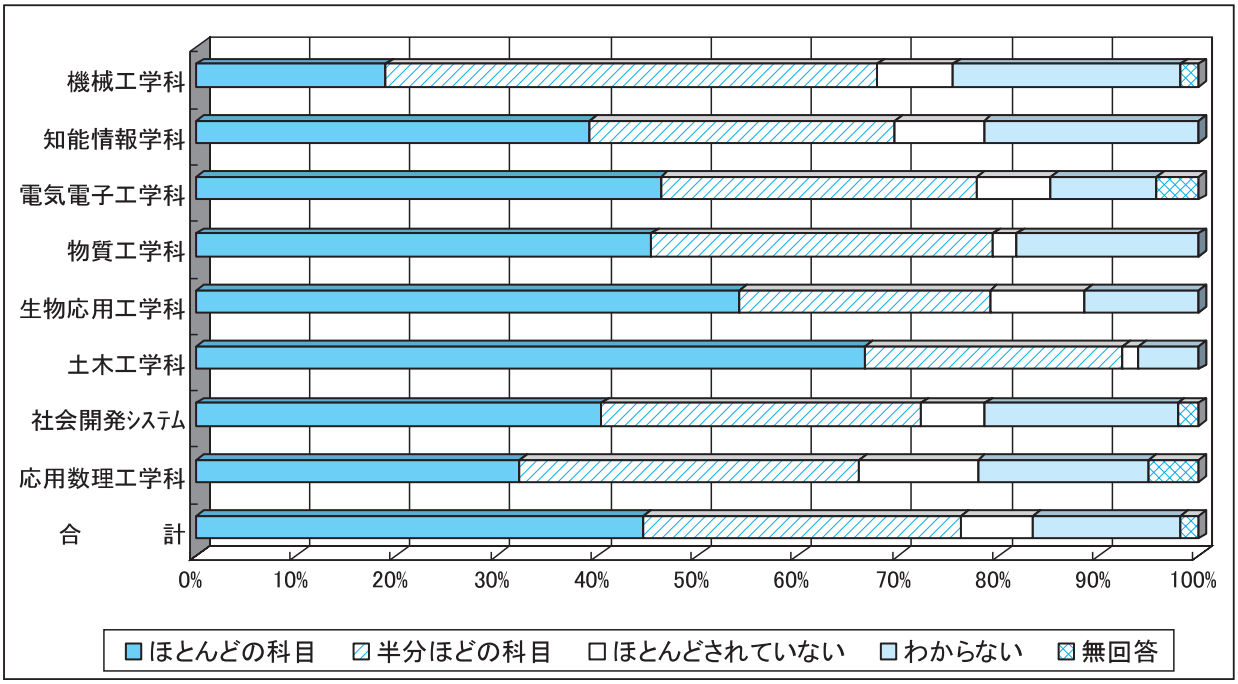
図Ⅱ―３―１―15　専門科目（講義科目）の内容について

２．シラバスについて

シラバスと講義内容・進行の関係（Q46、Q47）について、半分以上の科目がシラバスに基づいて講義している学科の割合（専門科目必修、選択）は、工学部全体（78.3%、76.4%）となり、学科別では土木工学科（93.9%、92.5%）が飛び抜けて、シラバスが活用されている。また、必修と選択の差もほとんどない。

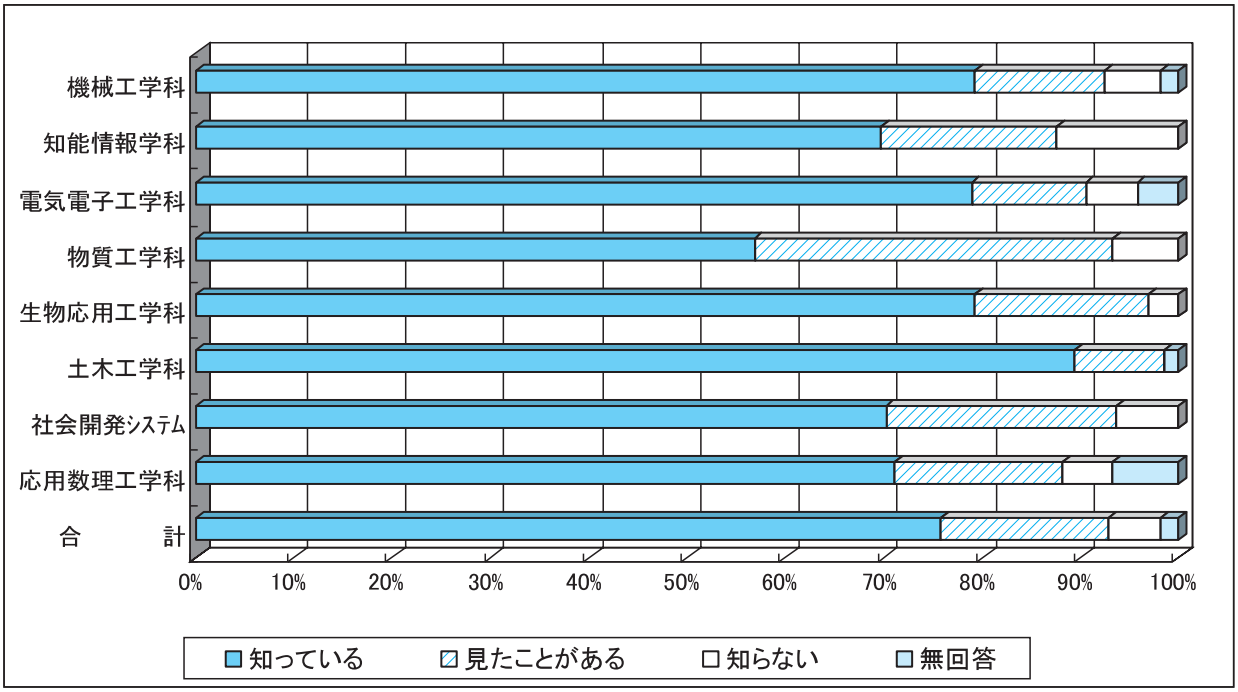


図Ⅱ―３―１―16　専門科目（必修科目）はシラバスに基づいて講義が行われているか。

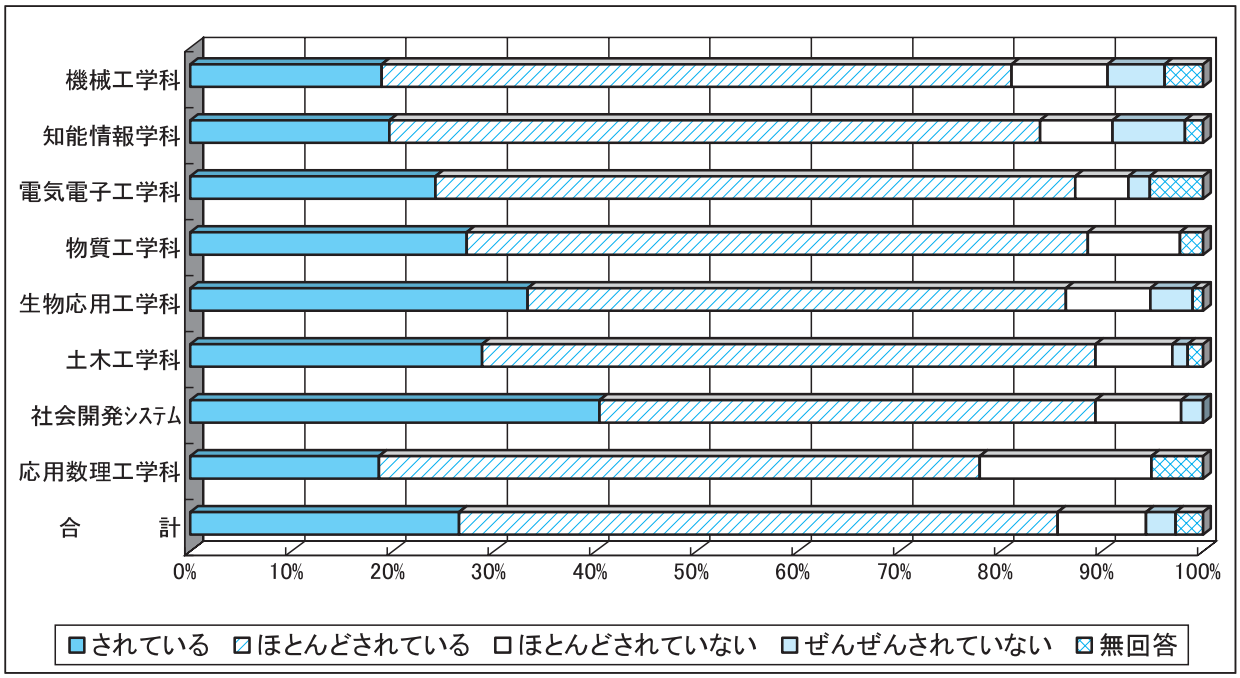


図Ⅱ―３―１―17　専門科目（選択科目）はシラバスに基づいて講義が行われていますか。

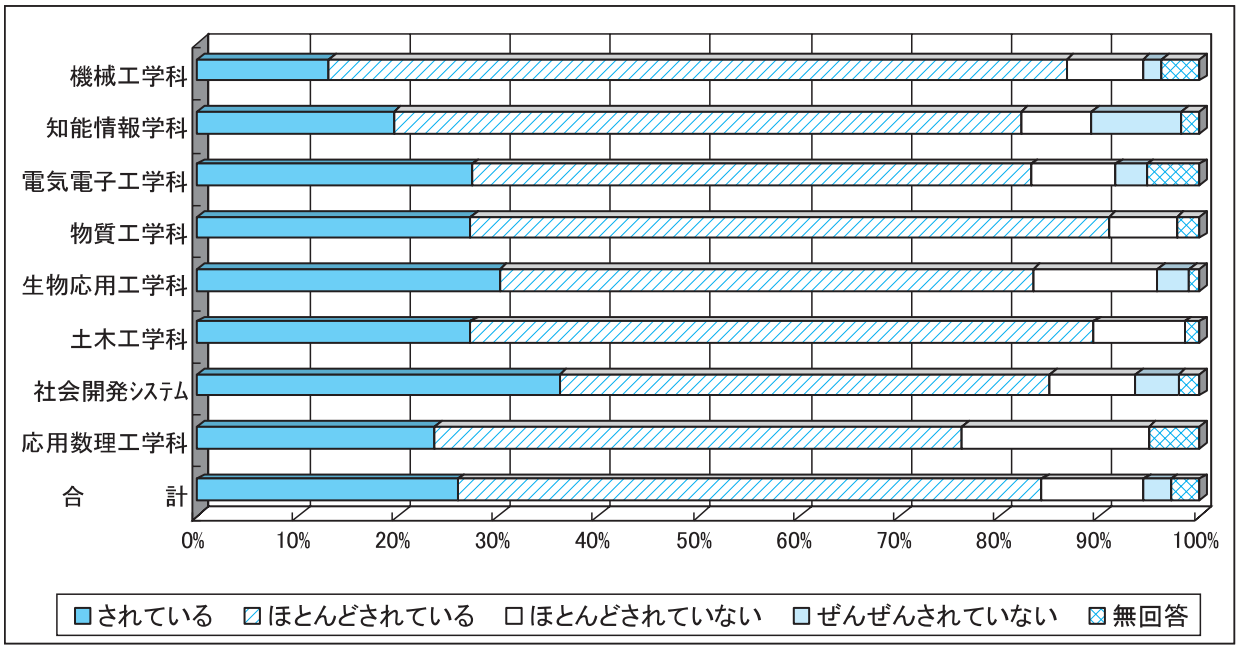
「成績の評価・採点基準がシラバスに明示してあること知っている」（Q48）は、92.9%の学生は知っていて、その明示された評価基準で採点されている専門科目（必修、選択）（Q49、Q50）は 85.7%、84.3%である。学科別では、シラバスに基づいて成績評価している学科の割合（専門科目必修、選択）は、機械（81.2%、90.8%）、知能情報（83.9%、82.1%）、電気電子（87.4%、83.2%）、物質（88.7%、90.9%）、生物応用（86.4%、83.3%）、土木（89.4%、89.4%）、社会開発システム（89.3%、85.1%）、応用数理（77.9%、76.2%）で活用されている。



図Ⅱ―３―１―18　シラバスに成績評価・採点基準が書いてあることを知っていますか。



図Ⅱ―３―１―19　専門科目（必修科目）はシラバスに公開している評価基準で採点されていますか。

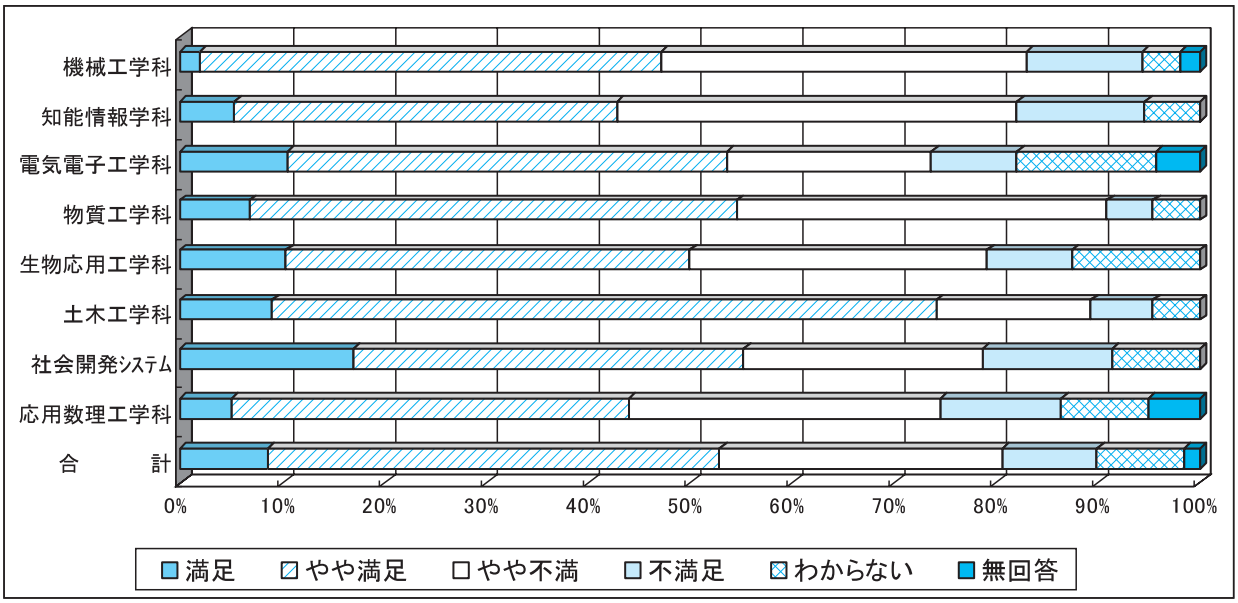


図Ⅱ―３―１―20　専門科目（選択科目）はシラバスに公開している評価基準で成績評価されていますか。

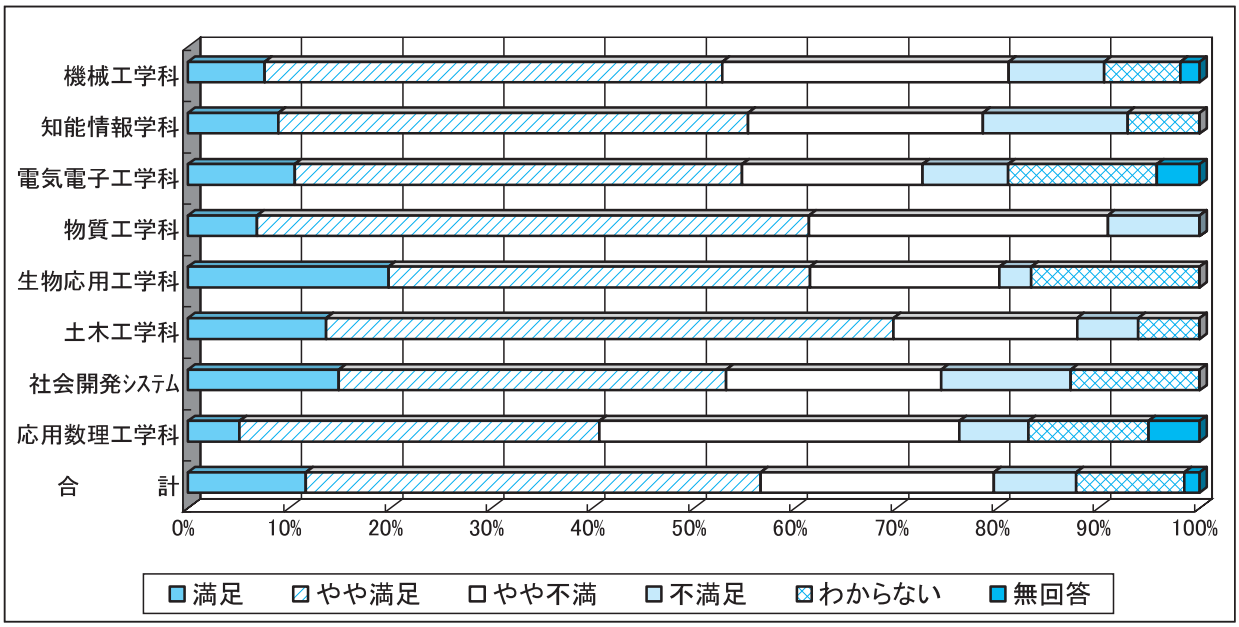
３．所属学科のカリキュラムの内容について

専門科目（講義科目、実験・演習）（Q53、Q54）について、工学部全体で、「満足・やや満足」と「不満足・やや不満足」は、講義科目では（52.9%、37%）、実験・演習科目では（56.6%、31.2%）と満足度が上回っている。また、実験・演習科目のほうで満足度が高く、不満足度が低かった。学科別では、講義科目の満足度は、土木（74.3%、21.3%）、物質（56.5%、40.9%）、社会開発システム（55.3%、36.2%）、電気電子（53.7%、

28.4%）工学科の満足度が 50%以上と高く、知能情報工学科（42.9%、51.8%）と不満足度が上回っている。実験・演習科目では、土木工学科（69.7%、24.3%）、生物応用（61.5%、21.9%）、物質工学科（61.3%、38.6%）と 60%を越えた満足度が示されている。また、機械、知能情報、電気電子、社会開発システム工学科が 50%以上の満足度がある。ただ、応用数理工学科（40.7%、31.2%）と不満度が高くなっている。講義科目では知能情報工学科の不満足度 51.8%と、実験・演習科目での応用数理工学科の不満足度 42.4%が他学科と大きな差異を示している。



図Ⅱ―３―１―21　専門科目（講義科目）の内容について

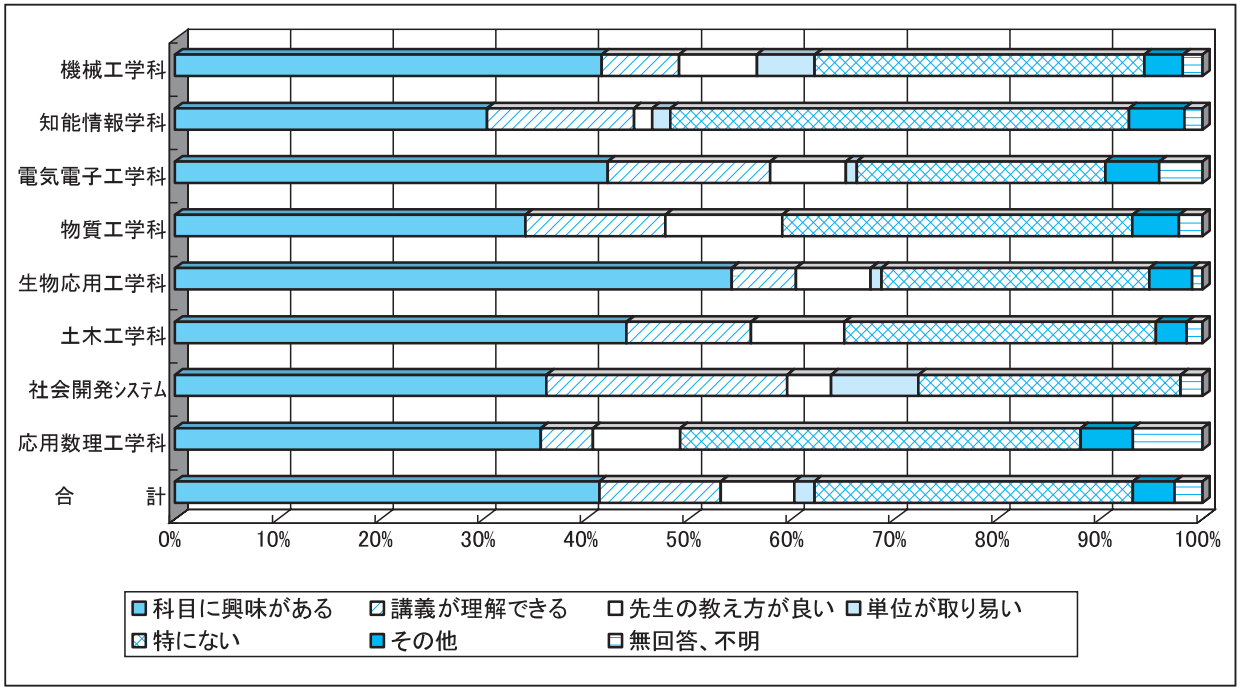


図Ⅱ―３―１―22　専門科目（実験・演習）の内容について

工学教育の講義でよいと思われる点（Q56）について、「科目に興味がある」41.3%、「講義が理解できる」11.8%で 50%以上を占めているが、「特にない」が 31%あるこ

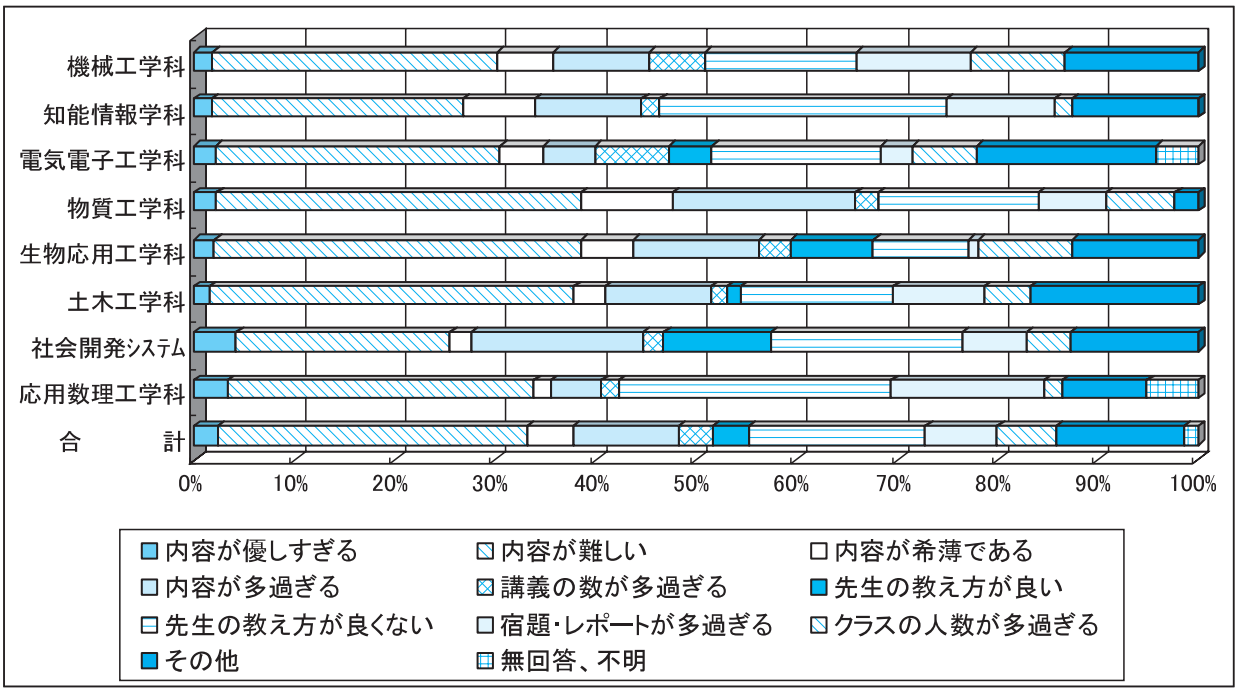
とは反省点である。特に、知能情報、応用数理工学科では「特にない」が 40%前後ある。

また、物質工学科では「先生の教え方が良い」が 11.4%と他学科と違う特徴が見られるが、Q57 では「先生の教え方が良くない」15.9%あり、設問の仕方で評価が違っている。



図Ⅱ―３―１―23　工学教育の講義でよいと思われることは何ですか。

講義内容（Q57）について、「内容が難しい」が 30.8%あり、全体としての反省点である。特に、物質、生物応用、土木工学科の３学科は 36%を越える学生が不満を示している。半面、「内容が希薄である」は物質工学科」9.1%が少し高い割合を示す。「内容が多過ぎる」「講義の数が多過ぎる」「宿題・レポートが多過ぎる」の３つをあわせた合計は 21.2%になり、学生が講義で忙しくしていることに不満が示されている。「先生の教え方が良い、良くない」は良い 3.5%、良くない 17.6%と、教員が教え方について努力をする必要が指摘されている。生物応用、土木工学科において、「先生の教え方が良い」が 10%近くになっている。特に、知能情報、応用数理工学科で「良くない」が 25%を越えている。「クラスの人数が多過ぎる」は、機械、生物応用工学科で、10%ちかくの割合で示されている。

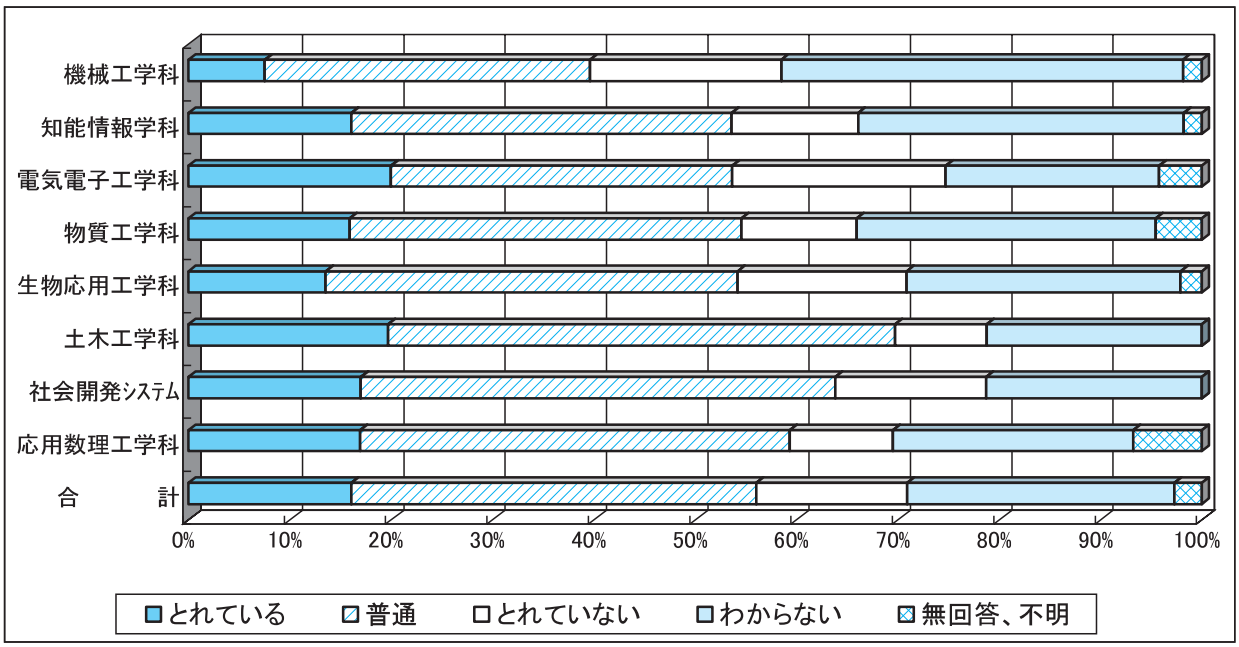


図Ⅱ－３－１－24　工学教育の講義内容についてどの様に思いますか。

Ⅳ．教育組織・教育環境・学生への支援について

１．教員構成

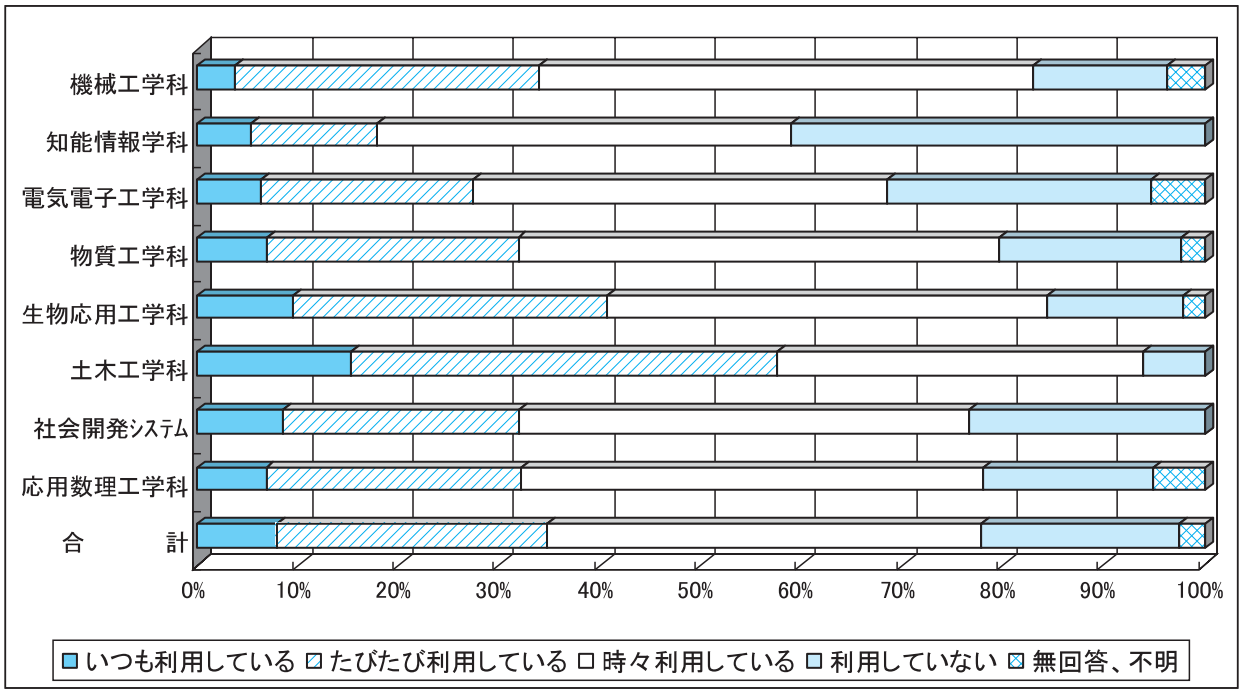
教員の構成について、「研究分野はバランスが取れている」（Q58）の問いに対して、「とれている」16.1%、「普通」が 39.9%、「とれていない」14.9%を示しているが、「わからない」26.4%を考えると、ほとんど学生は判断できていないと思われる。しかし、土木工学科は「とれている」が 19.7%と高く、機械工学科は「とれていない」が 18.9%とそれぞれ反対の意見より倍以上の差が示され、その他の学科と違う特徴である。



図Ⅱ－３－１－25　所属学科の教員（法人前は教官）の研究分野はバランスがとれていると思いますか。

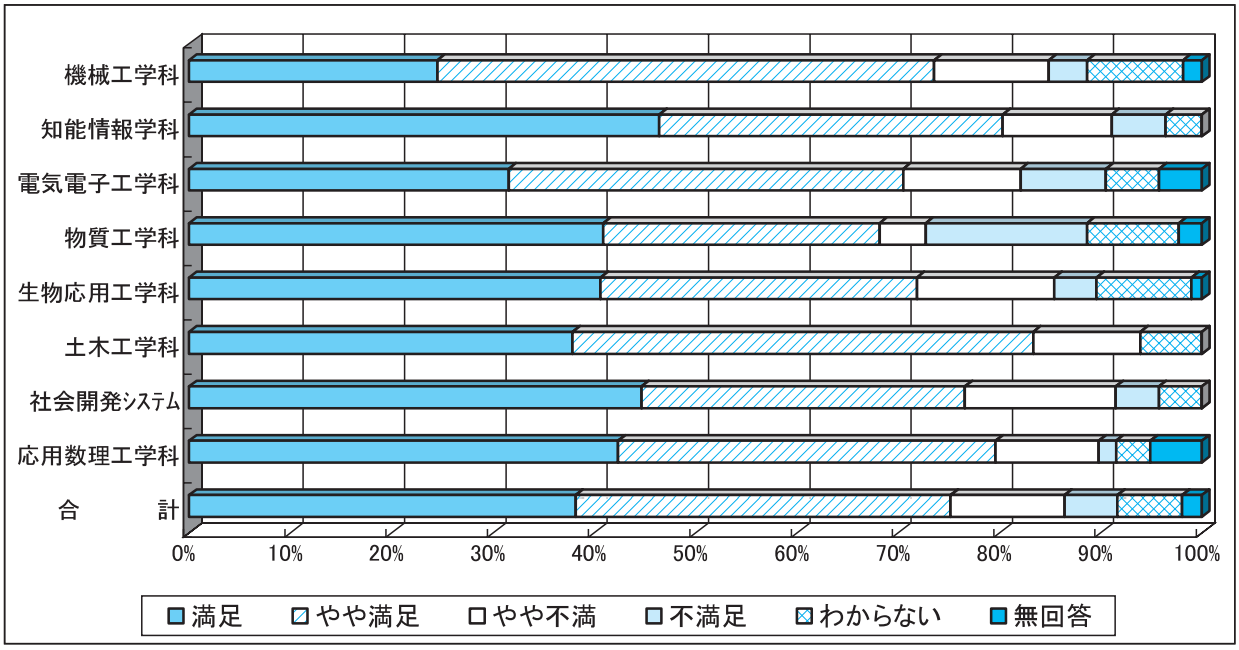
２．教育環境および鳥取の自然環境

教育環境（講義室・図書館・学生会館・研究室など）を一括して聞いているので、個々の判断は難しいが、工学部全体で「満足・やや満足」44%、「不満足・やや不満足」47.3%となり「不満足度」がやや多い。学科別で見ると、土木、社会開発システム、応用数理工学科が「満足」が上回り、特に、応用数理、土木工学科で 50%を越える満足度が見られた。機械、知能情報、電気電子、生物応用工学科で「不満足」が上回っている。特に、機械、知能情報、生物応用工学科では 50%を越える学生が不満足を示している。図書館とリフレッシュルームの利用（Q60）については、「いつも」「たびたび」34.6%、「時々」43.2%で、77.8%の学生が何らかの場面で活用している。「利用していない」は 19.6%、２割の学生がせっかくの施設を活用していない。学科別に見てゆくと、知能情報工学科の学生の 41.1%、電気電子工学科の 26.3%、社会開発システム工学科の 23.4%が利用していない。土木工学科では 94%の学生が利用しているのに、知能情報工学科では 59%の学生しか活用していない。



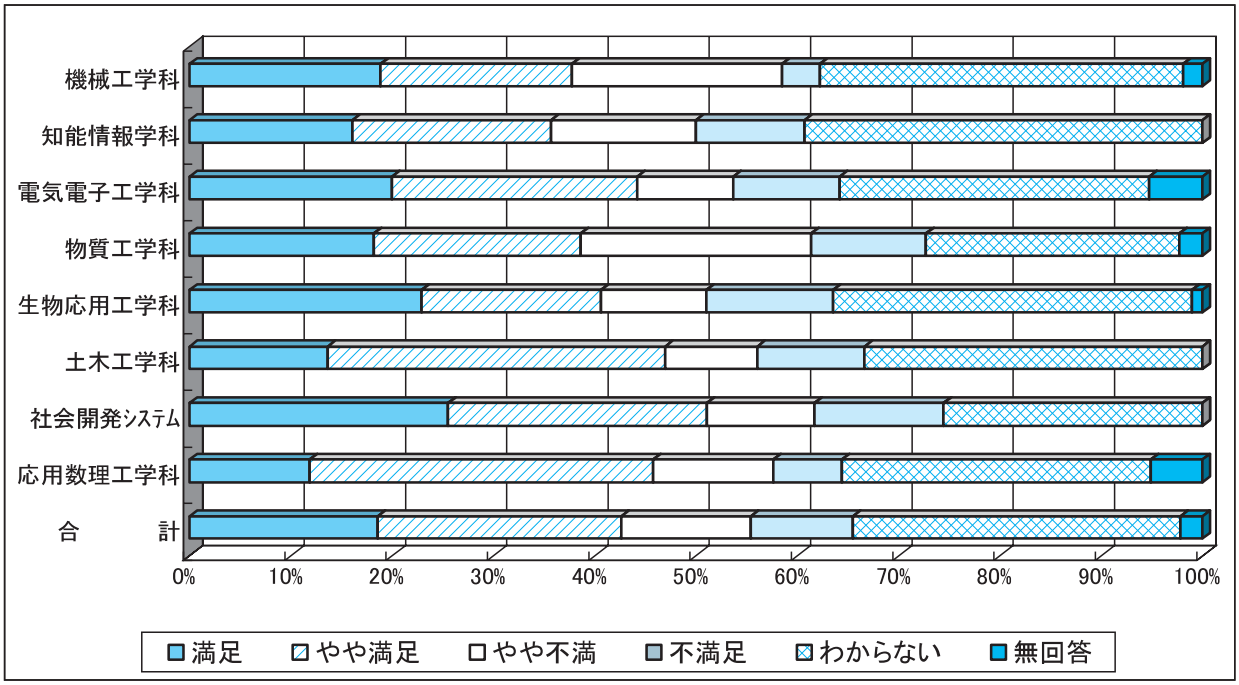
図Ⅱ―３―１―26　図書館・リフレッシュルーム（自主学習室）などを利用して勉強しますか。

県外から来た学生が多いので、大学がある地域の環境（Q61）について、「満足・やや満足」と「不満足・やや不満足」の割合は、75.2%と 16.4%で、自然環境のすばらしさを実感している。



図Ⅱ―３―１―27　鳥取の自然環境についていかがですか。

奨学金・授業料免除（Q62）は「満足・やや満足」42.6%、「不満足・やや不満足」22.9%、「わからない」32.4%となっている。奨学金などの環境は必要でない学生を考えれば、満足度が高いと推定できる。学科別では、電気電子、土木、社会開発システム、応用数理工学科で満足度が高く、物質工学科で不満足度がやや高い。

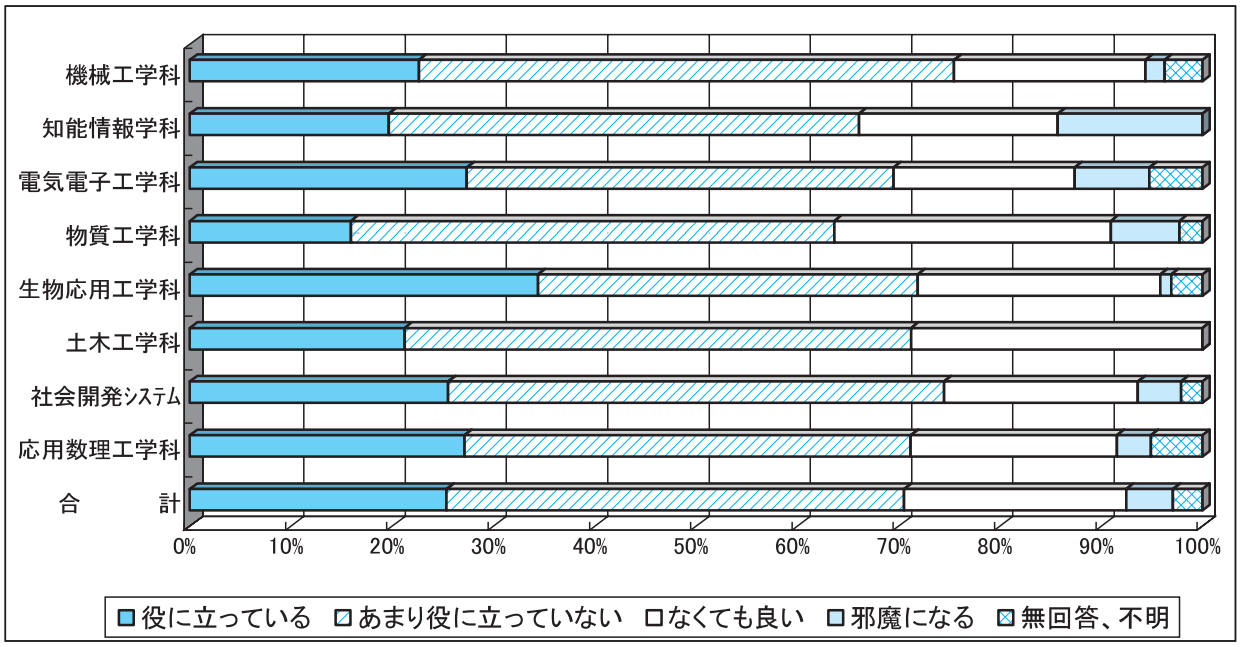


図Ⅱ―３―１―28　奨学金や授業料免除について充実していますか。

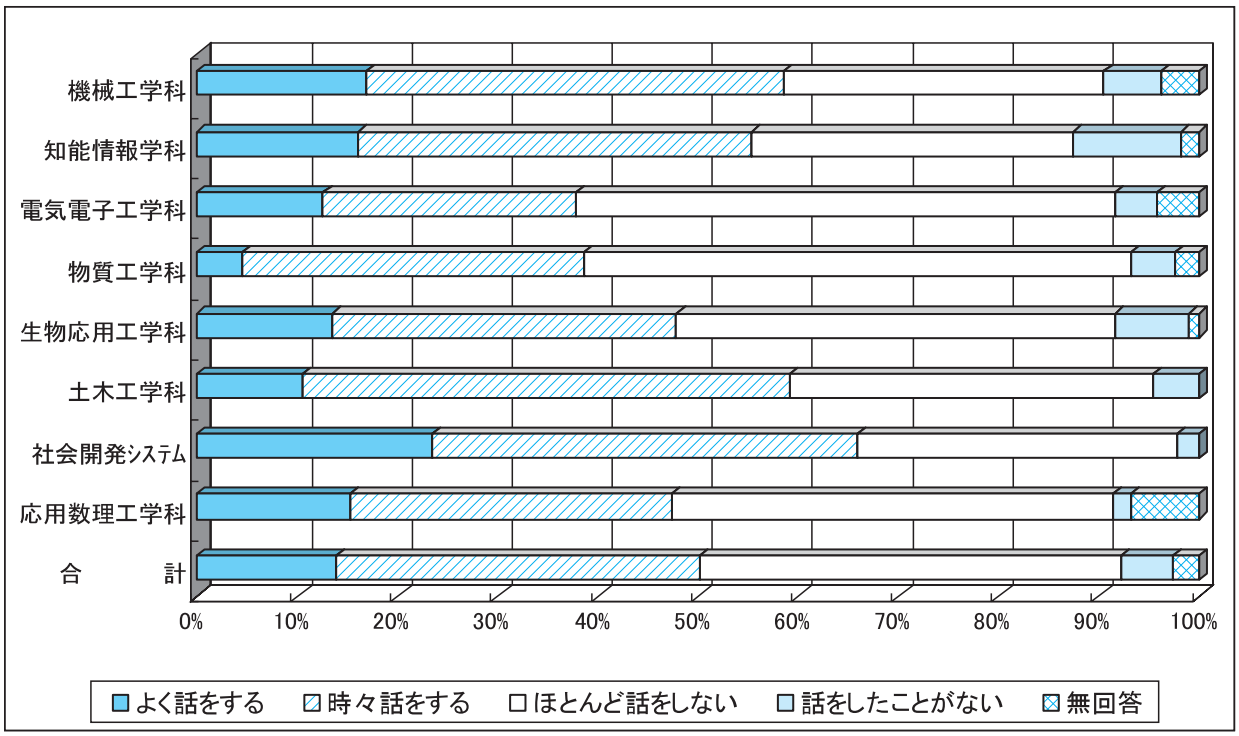
３．学生への支援

「学級教員・チューター制が役に立っているか」（Q63）について、「役に立っている」25.4%、「あまり役に立っていない」45.2%、「なくてもよい」21.9%、この制度の

趣旨・活用が不十分との結果である。「邪魔になる」4.7%あり、特に知能情報工学科では 14.3%も不満を漏らしている。ほとんどの学科で活用されていない。特に、知能情報、物質工学科は 80%以上否定的な意見が占めている。早急に改善する手立てが必要ではある。その前提となる先生との対話（Q64）は「よく・時々話をする」50.2%、「ほとんど・ぜんぜん話をしたことがない」47.3%で、約半数の学生が先生と話をしている。

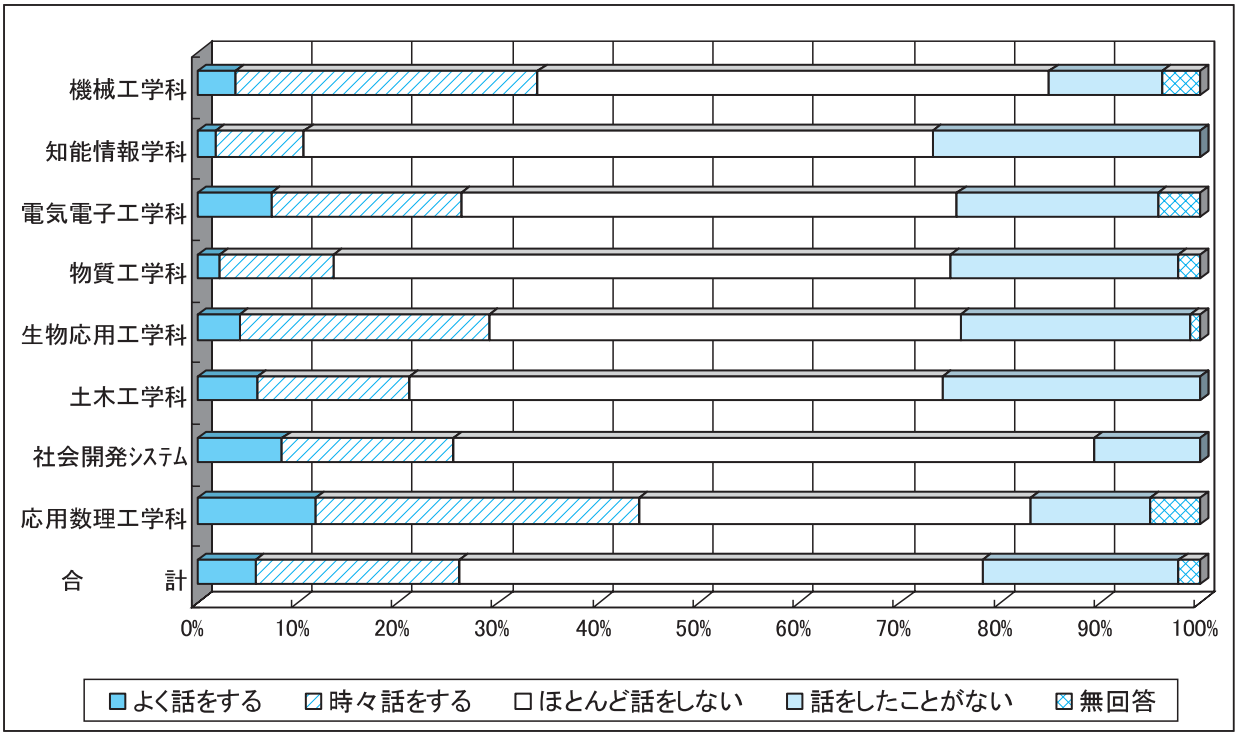


図Ⅱ―３―１―29　学級教官・チューター制について、役に立っていますか。



図Ⅱ―３―１―30　先生（教授・助教授・講師・助手）と話をしますか。

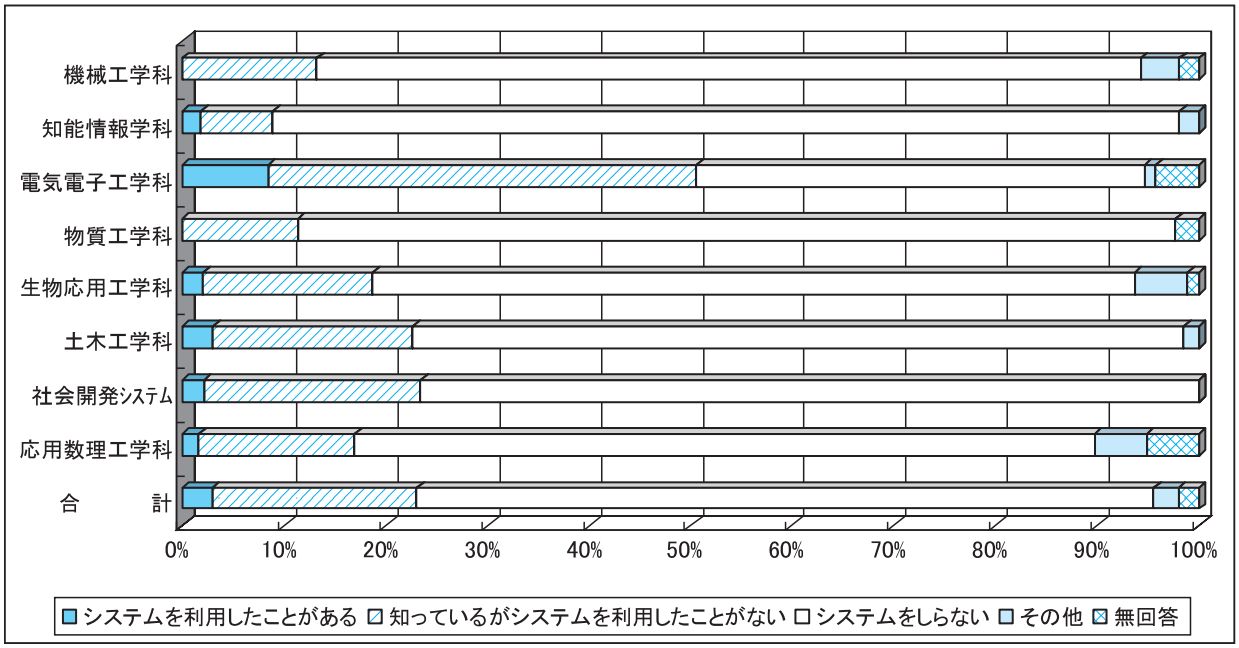
学科別では、機械（58.5%）、知能情報（55.4%）、土木（59.1%）、社会開発システム（67%）工学科が話をしているのに、話をしていない学生が上回っているのは電気電子（57.9%）、物質（59%）、生物応用（51.1%）工学科である。職員との対話（Q65）は 26.1%と低いが、応用数理工学科 44.1%だけが先生との対話と同様の高い対話率を示している。



図Ⅱ―３―１―31　職員（事務・技術職・他）と話をしますか。

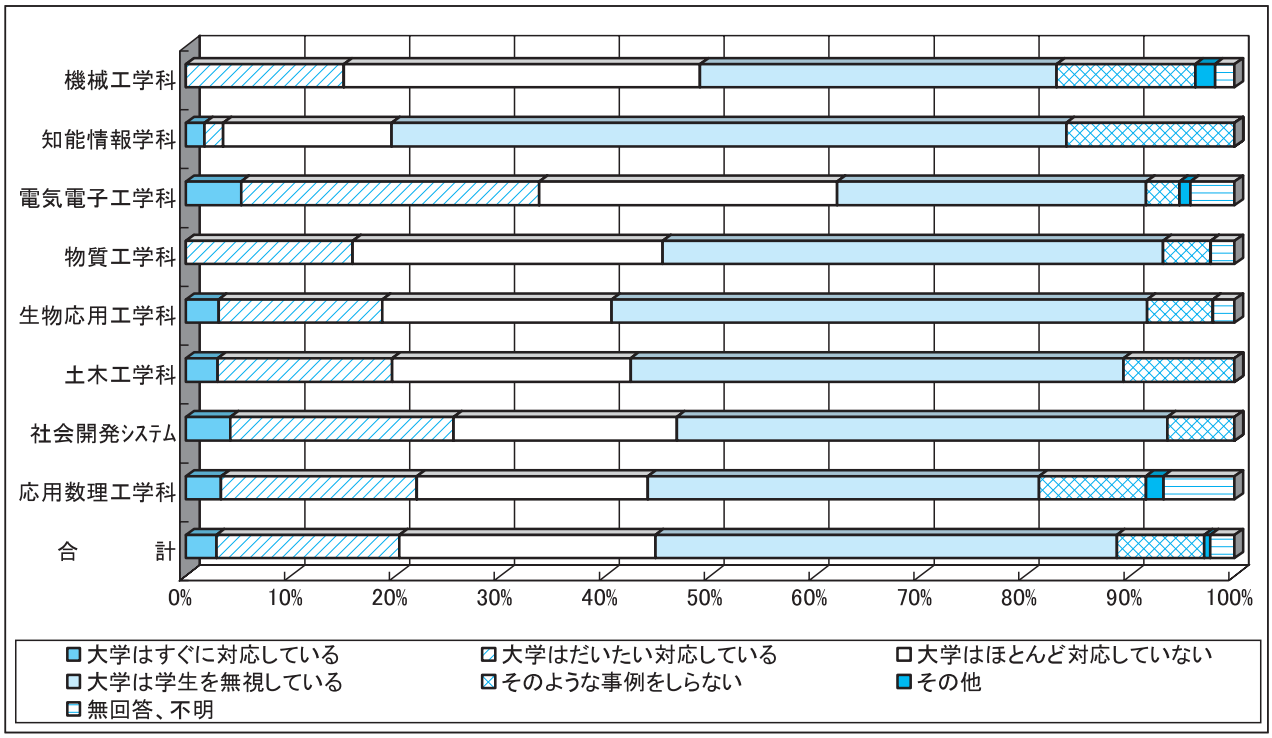
４．学生の要望を取り上げるシステム

学生の要望を取り上げるシステムが大学と所属学科にあるかと、そのシステムが機能しているかについて聞いた。「大学にシステムのあることを知っているか」（Q66）の問いに対して、工学部全体としては、「利用したことがある」2.9%、「知っている」20.2%、「知らない」72.5%と学生の３／４にあたる者が知らなかった。しかし、学科別で見ると、電気電子工学科では「利用したことがある」8.4%、「知っている」42.1%、「知らない」44.2%とこのシステムが活用され、教育効果が上がっていることが推察される。逆に、知能情報工学科は９割の学生がこのシステムを知らない。



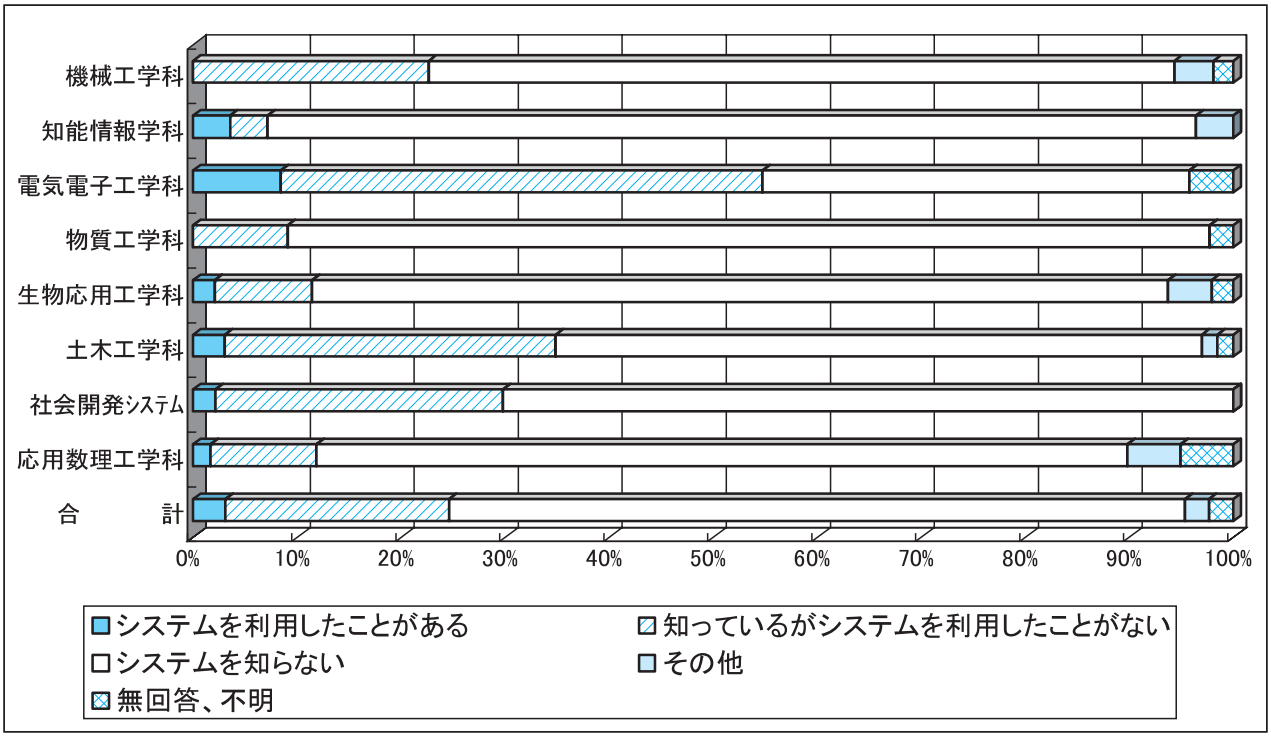
図Ⅱ―３―１―32　学生の要望を取り上げるシステムがあることを知っていますか。

このシステムの活用について大学当局の現状を聞く「大学は学生の意見を取り上げ、改善する努力をしていますか」(Q67)との問いに、「大学はすぐに対応している」2.9%、「だいたい対応している」17.4%、と約20%がプラスの感触を持っているが、「大学はほとんど対応していない」24.4%、「学生を無視、そのような事例は知らない」44%、と 68.4%の学生がマイナスの感触を持っている。その中でも、電気電子工学科では、33.7%がプラスの感触で、ＦＤ教育の成果が見られる。



図Ⅱ―３―１―33　大学は学生の意見を取り上げ、改善する努力をしていますか。

所属学科での取り組みについて、「所属学科に学生の要望を取り上げるシステムがあることを知っているか」(Q68)を聞くと、学科での取り組みの差が浮き彫りになった。電気電子工学科は「利用したことがある・知っている」54.7%と半数以上の学生がシステムを知っている。次いで、土木工学科 34.8%、社会開発システム工学科 29.8%、機械工学科 22.6%となる。反対に、知能情報工学科 7.2%、物質工学科 9.1%、応用数理工学科 11.9%と、知っている学生でさえ 10%前後である。意見を取り上げ、改善の努力をしているかは、電気電子 (33.7%)、社会開発システム (31.9%) 工学科以外は非常に低い。

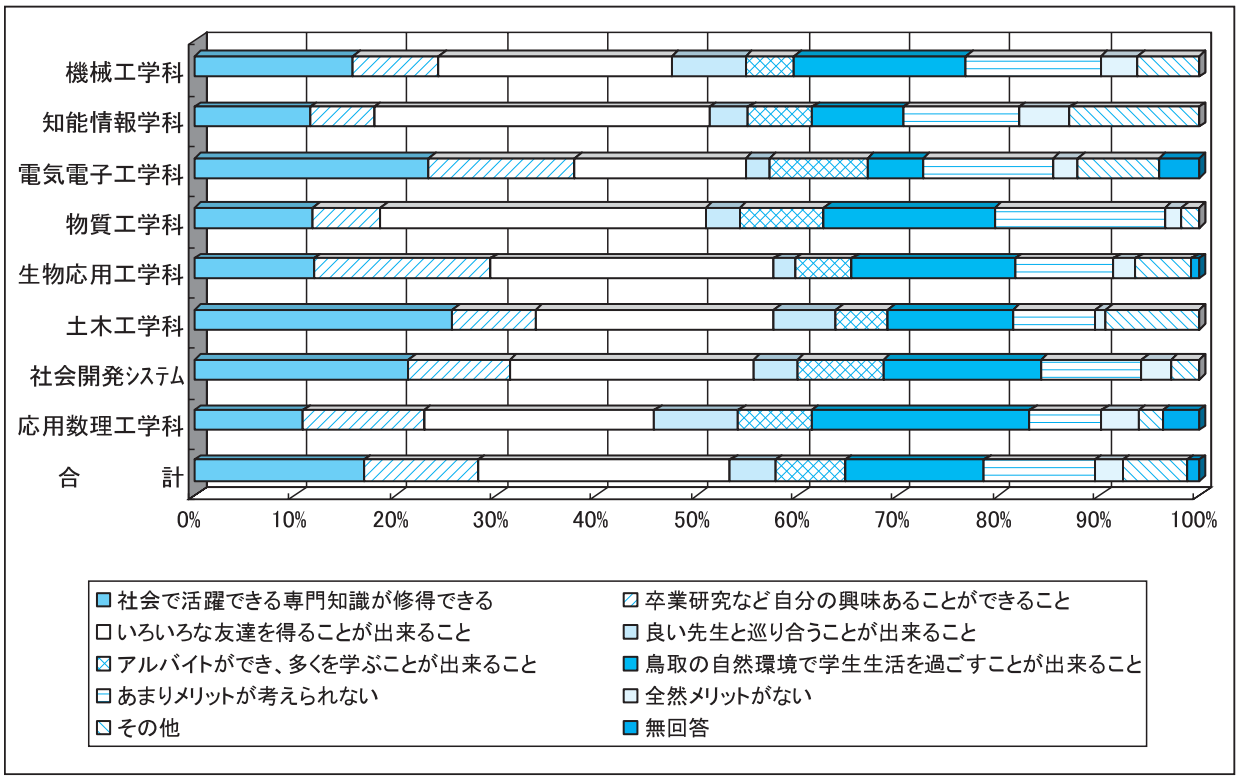


図Ⅱ―3―1―34　所属学科に学生の要望を取り上げるシステムがあることを知っていますか。

Ⅴ．大学の役割について

1．鳥取大学の役割

「あなたが鳥取大学に入学した一番大きなメリット」(Q70) については、「社会で活躍できる専門知識が習得できる」16.9%、「卒業研究など自分の興味あることができる」11.4%、「良い先生とめぐり合うことが出来る」4.5%の工学教育に関係する項目の合計は 32.8%となっている。「いろいろな友達を得ることが出来る」25.0%、「アルバイトができ、多く学ぶことが出来る」6.9%の合計は 31.9%である。「鳥取の自然環境で学生生活をすごすことが出来る」13.9%である。「あまり・全然メリットがない」13.7%である。工学部教育に対して、メリットをおく学生が約1／3である。



図Ⅱ―３―１―35　あなたが鳥取大学入学した一番大きなメリットはなにと思いますか。

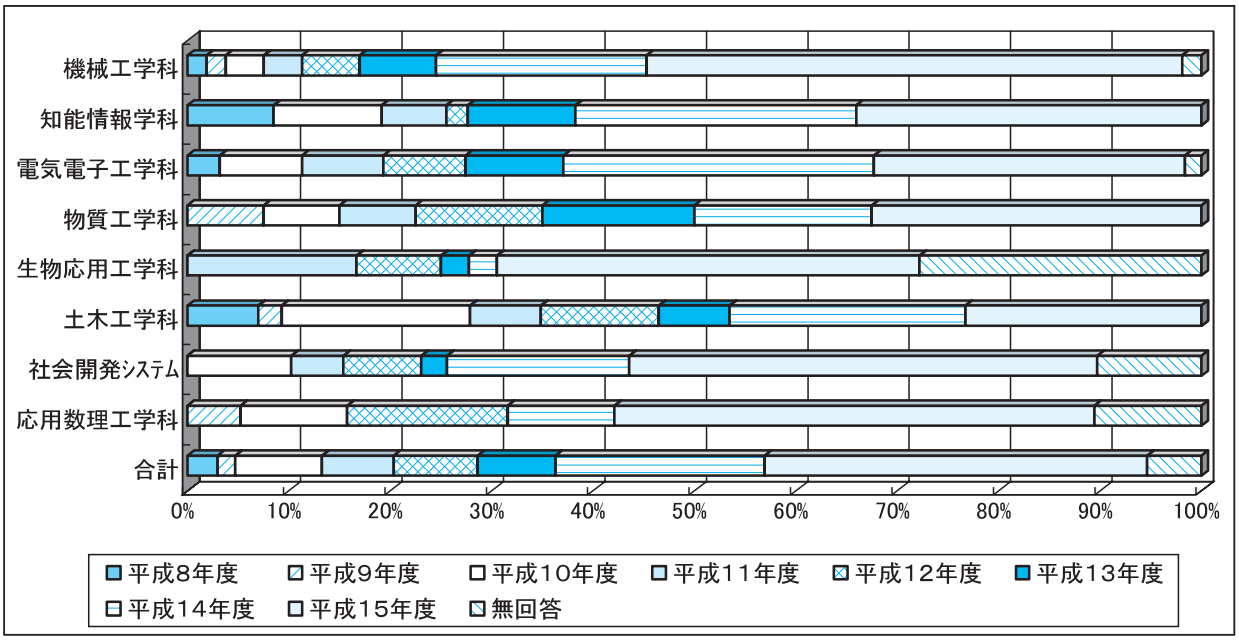
第２節　卒業生の専門教育に対する意識と評価

Ⅰ．工学部について

１．工学部卒業生アンケート

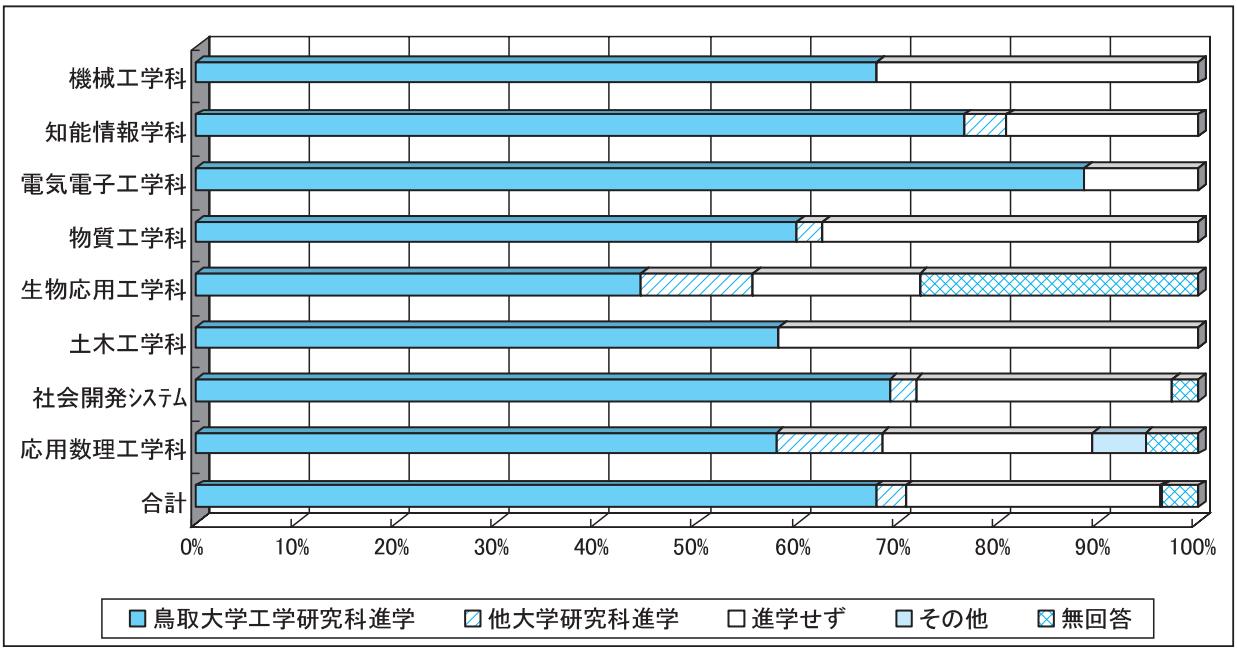
ここでは、工学部教育の特徴と、各学科での相違・特徴・改良点などについて述べる。

在学していた平成８年度から平成 15 年度卒業生について、調査を実施した。回答数が 339 であり、平成 14・15 年度卒業生で 58.4%を占めている（Q26）。



図Ⅱ―３―２―１　卒業年度はいつですか。

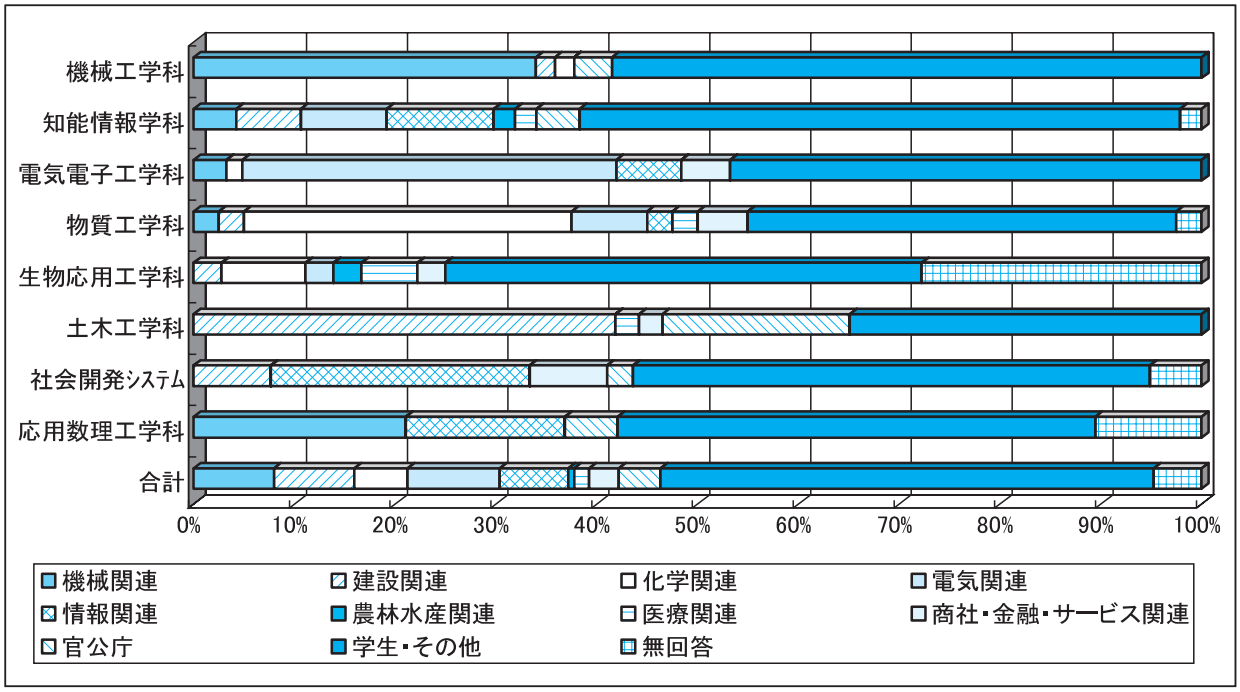
そのうち、「鳥取大学工学研究科進学」67.8%、「他大学研究科進学」2.9%、「進学せず」25.4%と多くが大学院へ進学している（Q27）。



図Ⅱ―３―２―２　工学研究科への進学はされましたか。

２．現在の職業

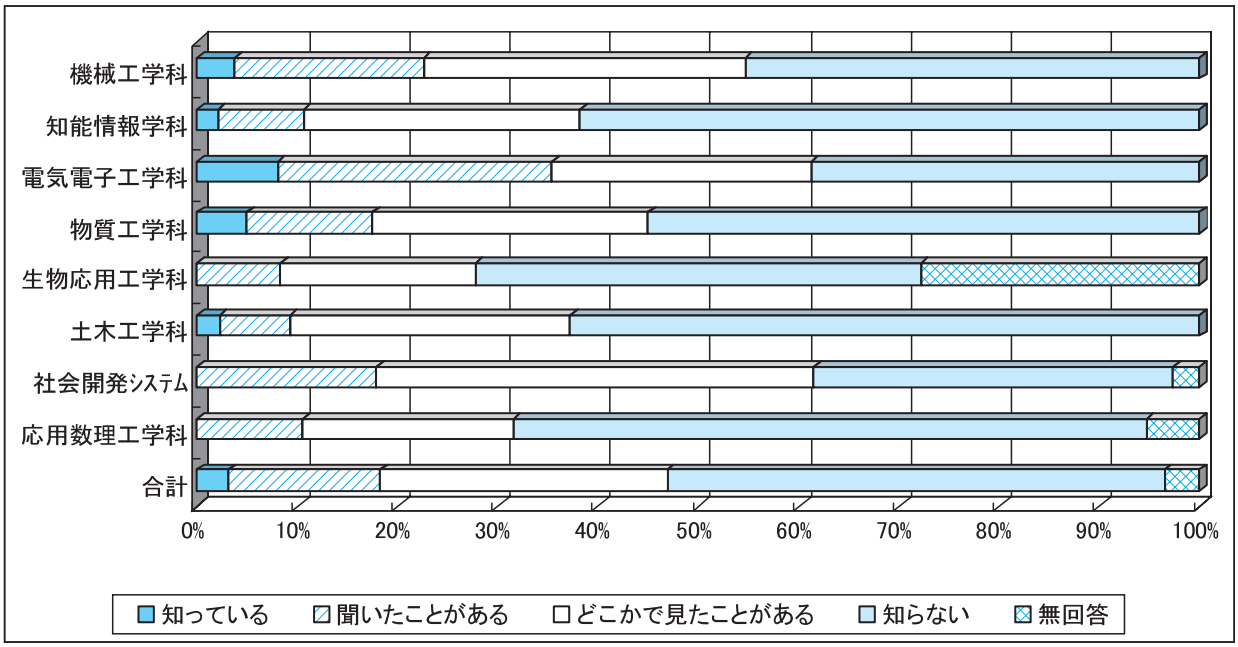
Q28 の回答を見ると、それぞれの専門分野へ就職しているが、機械工学科は「機械関連」34%、電気電子工学科は「電気関連」37.1%、物質工学科は「化学関連」32.5%、土木工学科は「建設関連」41.9%と「官公庁」18.6%、社会開発システム工学科は「情報関連」25.6%、応用数理工学科は「機械関連」21.1%と「情報関連」15.8%の特徴が見られるが、知能情報工学科は「情報関連」10.6%、「電気関連」8.5%、「建設関連」6.4%、「機械関連」4.3%、「官公庁」4.3%と幅広い分野に就職している。生物応用工学科はサンプル数が少ないが「化学関連」8.3%と「医療関連」5.6%などいろいろな分野に就職している。



図Ⅱ―３―２―３　現在の職業を以下の分野からお選びください。

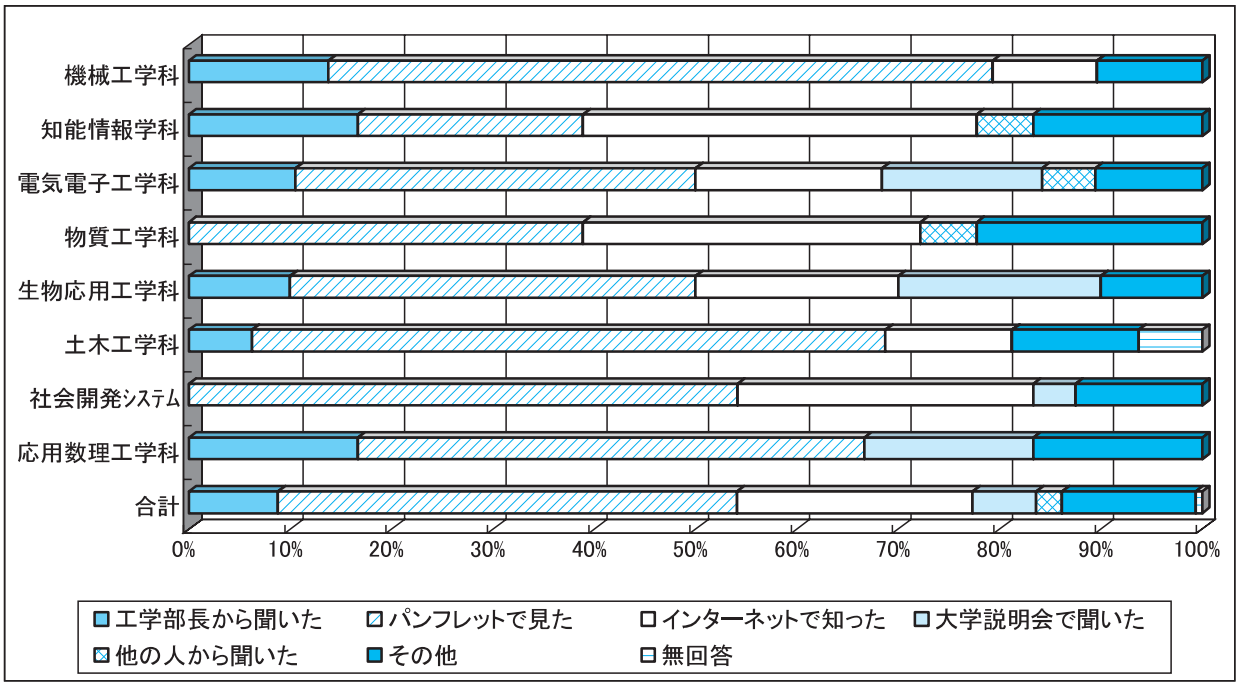
３．鳥取大学工学部・所属学科の理念・教育目的・教育目標

「工学部の教育目的・目標を知っているか」（Q29）の問いに、「知っている」3.2%、「聞いたことがある」15%、「見たことがある」28.6%の合計 46.8%が何らかの形で知っている。機械、電気電子、社会開発システム工学科は卒業生の 50%以上が知っているが、知能情報、物質、生物応用、土木、応用数理工学科の卒業生の 60%以上が知らないと答えている。

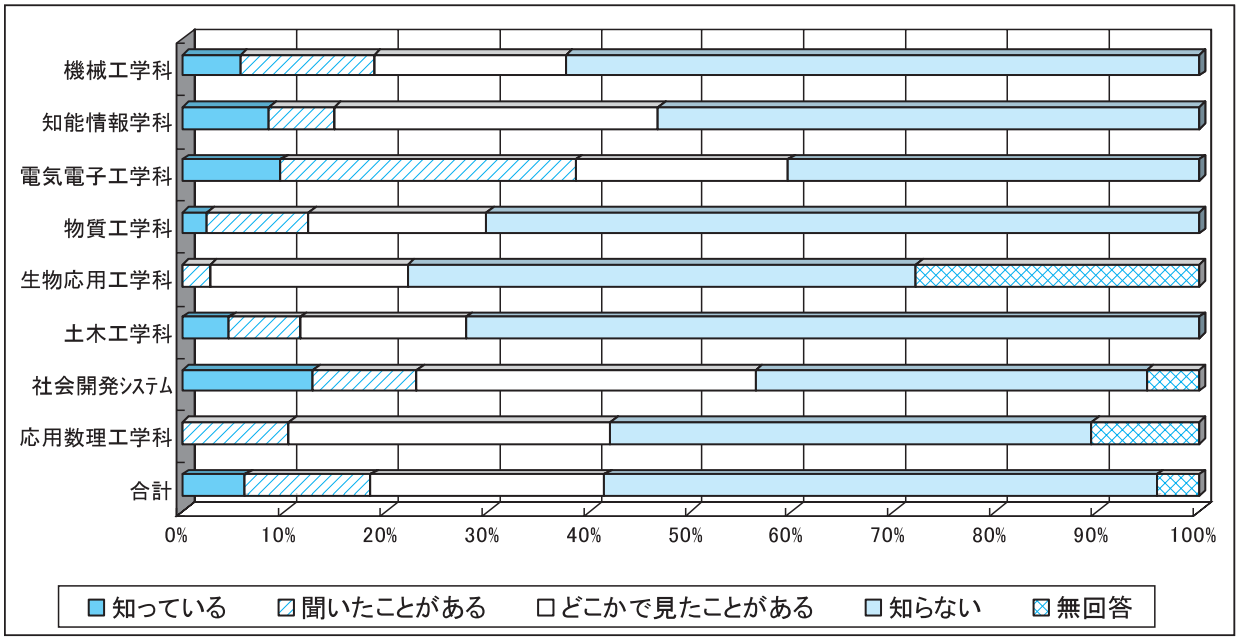


図Ⅱ―３―２―４　「鳥取大学工学部の理念・教育目的・教育目標」などを知っていますか。

情報を入手する方法（Q30）はパンフレットとインターネットで多く情報を得ている。次に、「所属学科の教育目的・教育目標を知っているか」（Q31）については、電気電子（59.7%）、社会開発システム（56.4%）と半数以上が知っているが、他学科は低く、特に生物応用（22.2%）、土木（28%）工学科は30%以下の認知度である。情報の入手方法は、パンフレットとインターネットと学科の教授などから得ている。



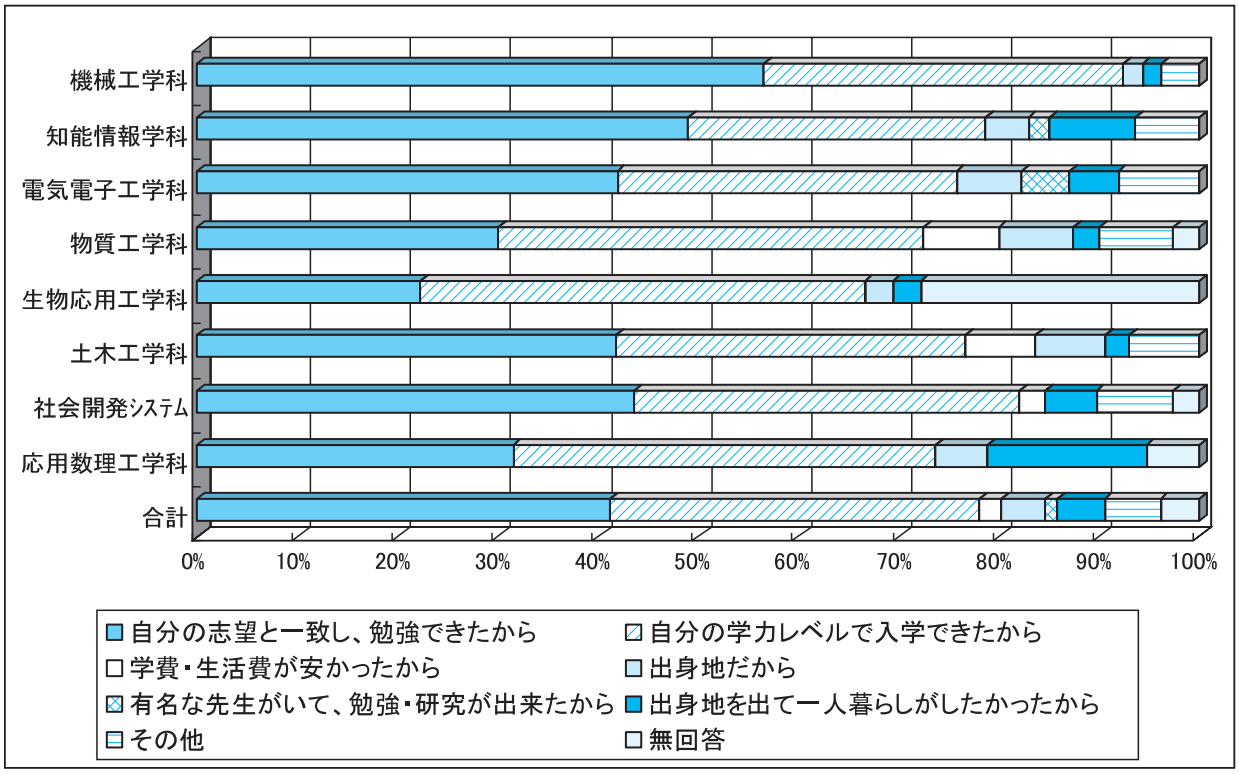
図Ⅱ―３―２―５　どこで知りましたか。（前問で４以外の方のみお答えください。）



図Ⅱ―３―２―６　卒業学科の教育目的・教育目標などを知っていますか。

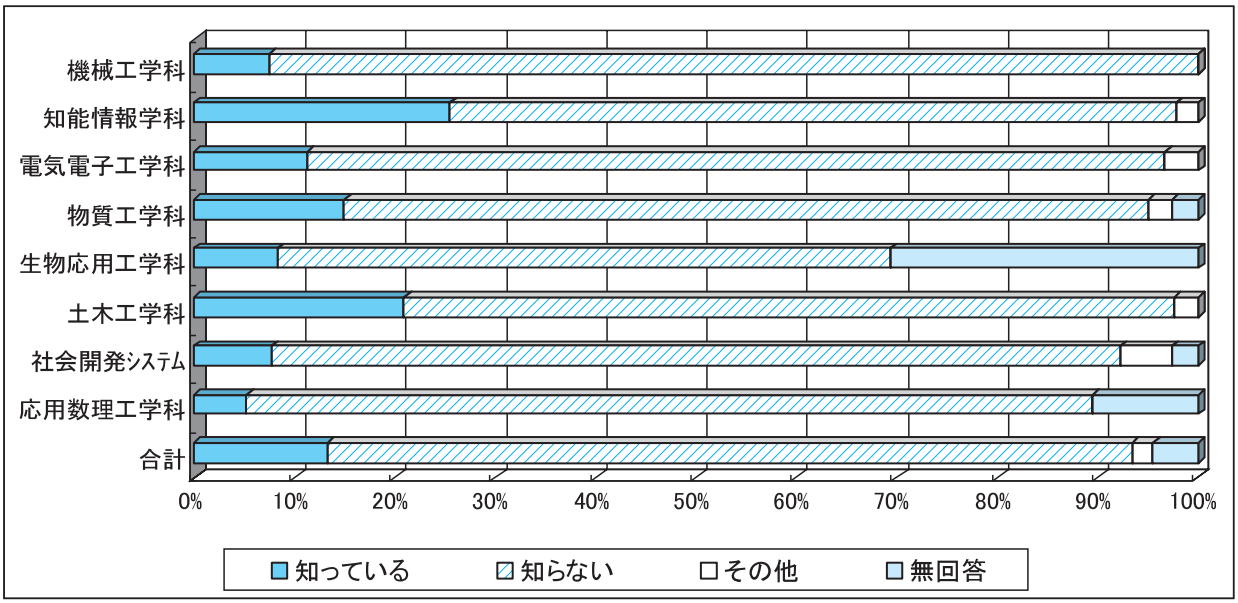
４．入学について

「工学部に入学した理由」（Q33）について、「自分の志望と一致し、勉強が出来た」41.3%（在学生 33.5%）と「自分の学力レベルで入学できた」36.9%（在学生 43.2%）が合計で 78.2%（76.7%）を占める。「一人暮らしをしたかった」4.7%（在学生 12.2%）など、卒業した後で少し変化が見られる。



図Ⅱ―３―２―７　あなたが工学部に入学した理由は何ですか。

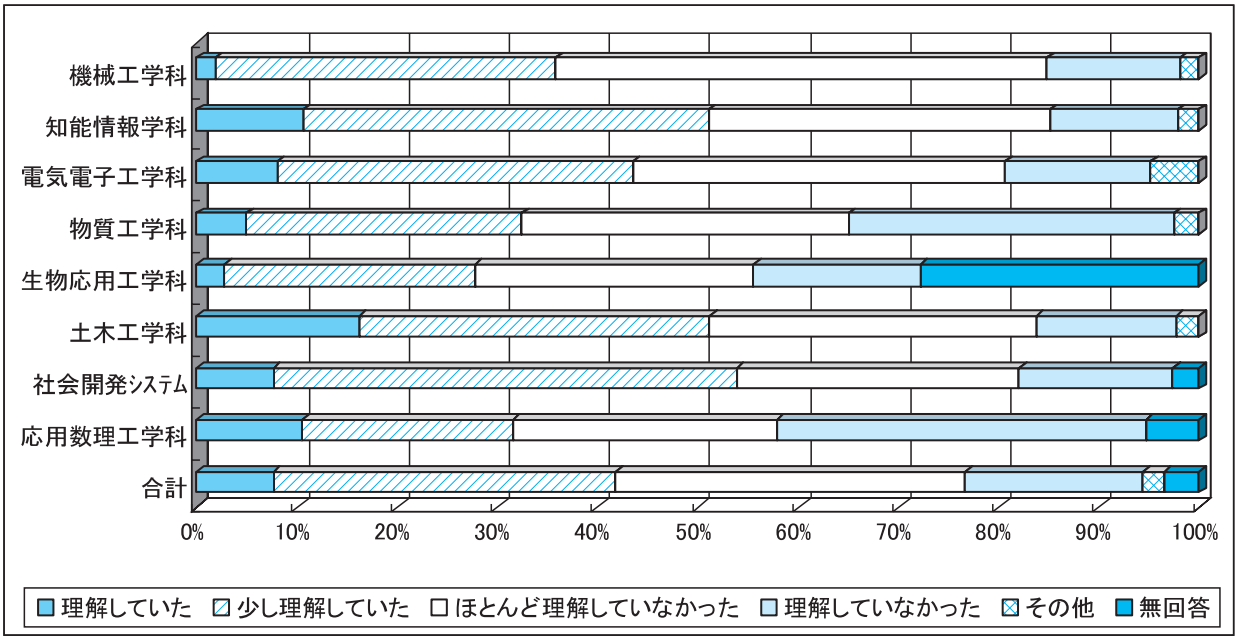
入学試験について、現在鳥取大学工学部で実施されている試験について、正確に知っているのは、約１／４である（Q34）。



図Ⅱ―３―２―８　最近、鳥取大学の入学試験情報を見たり、聞いたことがありますか。

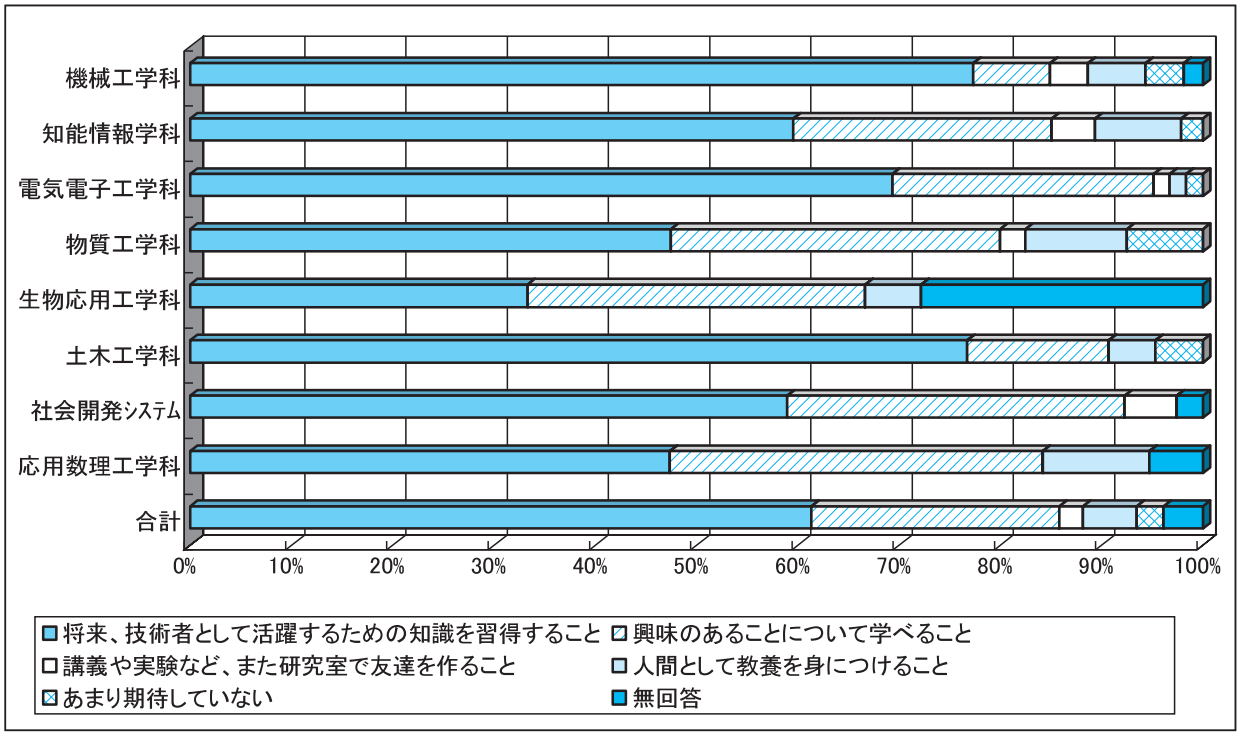
５．工学教育プログラム

曖昧な質問として、「学科の教育プログラムを理解していましたか」（Q41）と聞いた時に、工学部卒業生全体では、「理解していた・少し理解していた」の肯定的な割合41.9%（在学生78.3%）、「ほとんど・理解していなかった」の否定的な割合52.5%（在学生 18.4%）と、卒業生と在学生で異なる反応が見られた。特に、知能情報（51%）、土木（51.1%）、社会開発システム（53.9%）工学科の卒業生は50%以上の肯定的な反応を示している。機械（62.3%）、電気電子（51.6%）、物質（65%）、応用数理（63.1%）工学科の卒業生の50%以上が否定的な反応を示している。



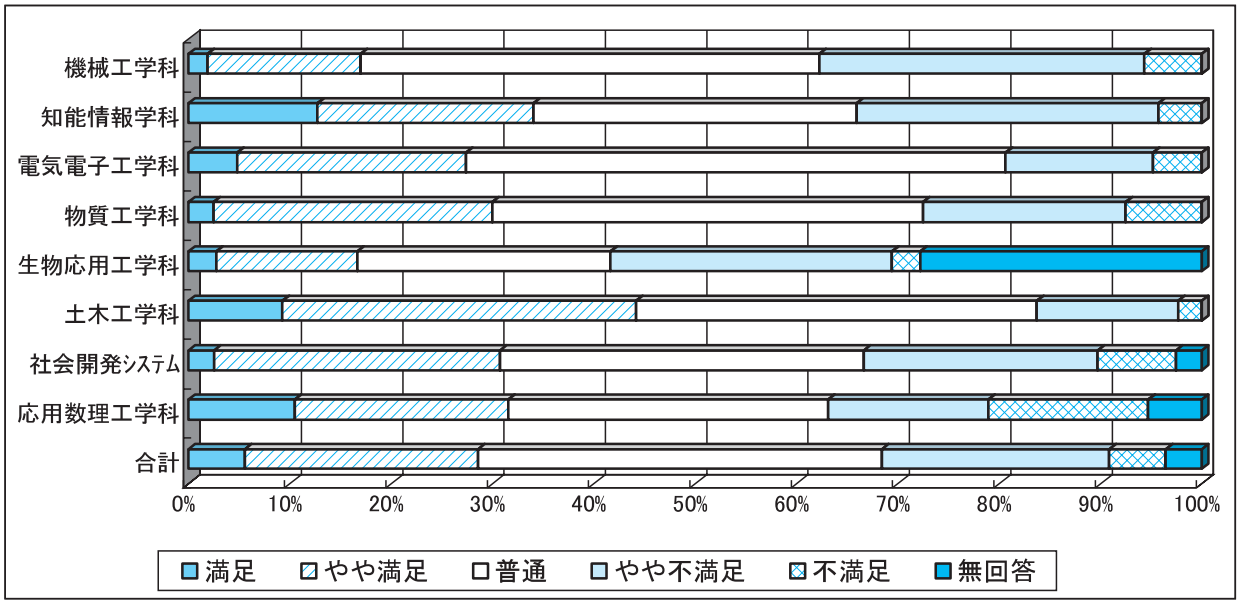
図Ⅱ―３―２―９　卒業学科の教育プログラムを理解していましたか。

「あなたは所属学科の教育カリキュラムに何を期待していましたか」（Q38）には、工学部全体で「将来、技術者として活躍するための知識を習得すること」61.4%（在学生 51.9%）、「興味あることについて学べること」24.5%（在学生 31%）、「人間として教養を身につけること」5.3%（在学生 6%）合計 91.3%（在学生 88.9%）と教育カリキュラムの期待が卒業生で高くなっている。技術者教育を希望している学科として、機械工学科 77.4%（在学生 52.8%）、電気電子 69.4%（在学生 60%）、土木 76.7%（在学生 66.7%）と学生時より約 10%も増加している。生物応用工学科 33.3%（在学生 40.6%）と減少している。「興味あることについて学べること」について、電気電子 25.8%（在学生 23.2%）、物質 32.5%（29.5%）、社会開発システム 33.3%（27.7%）、応用数理 36.8%（35.6%）とやや増加している。電気電子、物質工学科卒業生では、「人間として教養を身につけること」にそれぞれ 8.5%、10%（在学生 8.4%、9.1%）の期待がある。



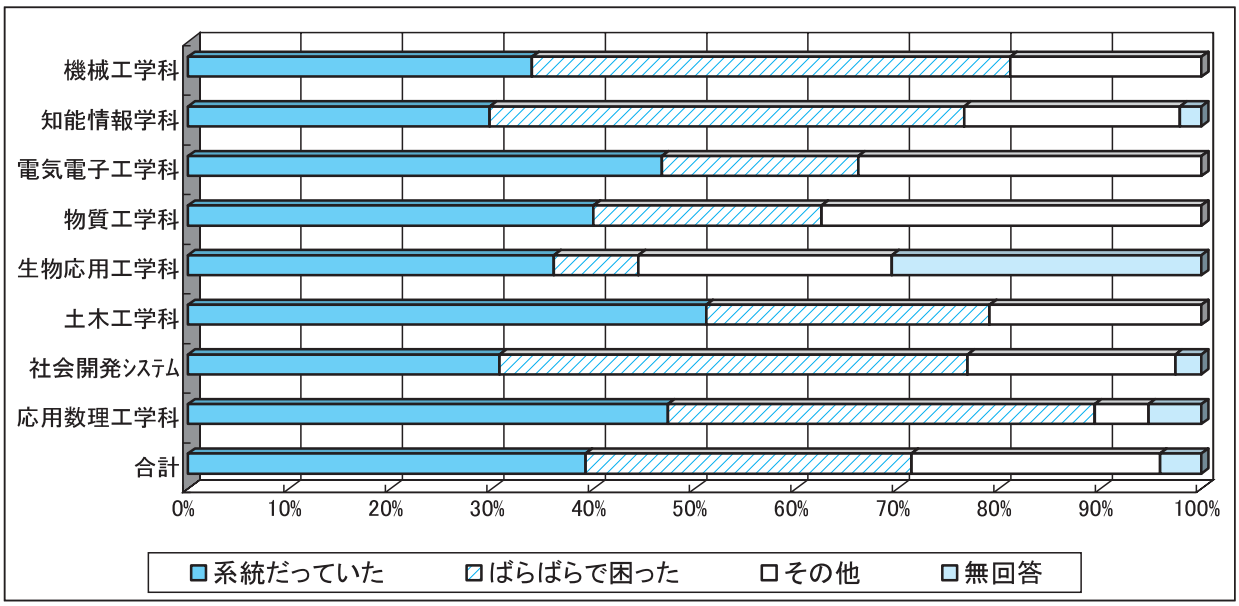
図Ⅱ―３―２―10　あなたは所属学科の教育カリキュラムに何を期待していましたか。

「卒業された学科の教育カリキュラムで十分な教育が受けられたか」（Q42）の問いに、工学部全体の卒業生「満足・やや満足」28.6%（在学生 34.1%）、「普通」39.8%（在学生 40.1%）、「不満足・やや不満足」28%（在学生 24.4%）とほぼ１／３ずつである。土木工学科卒業生の専門教育への満足度が高く（満足 44.2%－普通 39.5%－不満足 16.3%：在学生 48.5%－33.3%－18.1%）、電気電子、応用数理工学科と続いている。機械工学科卒業生（17%－45.3%－37.8%：在学生 28.3%－52.8%－18.9%）の専門教育への満足度が低い。



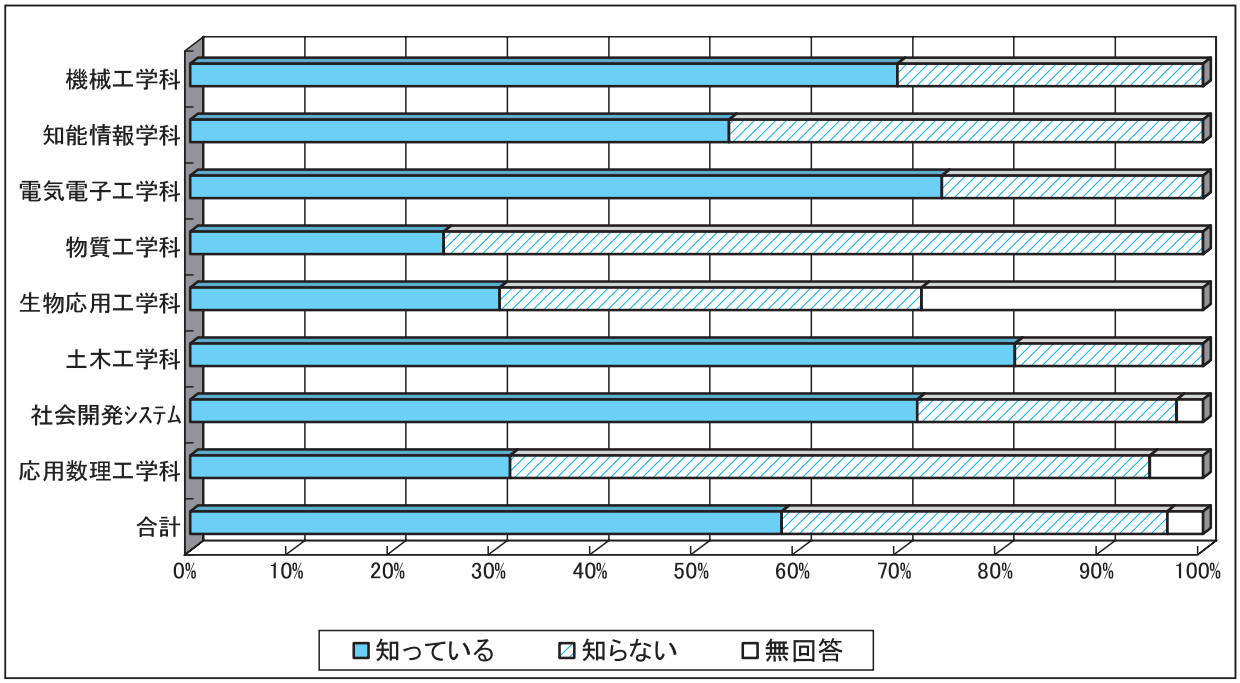
図Ⅱ―３―２―11　卒業された学科の教育カリキュラムで十分な教育を受けることが出来ましたか。

「教育方針があり、系統だった教育を受けたか」（Q43）では、工学部卒業生全体で「系統だっていた」39.2%（在学生 43.4%）、「ばらばらで困った」32.2%（30.4%）と肯定的な評価が上回った。学科別卒業生では、「系統だっていた」－「ばらばらで困った」の割合は、土木工学科（51.2%－27.9%：在学生 54.5%－24.2%）、電気電子工学科（46.8%－19.4%：在学生 49.5%－27.4%）、物質工学科（40%－22.5%；在学生 36.4%－31.8%）、生物応用工学科（36.1%－8.3%：在学生 45.8%－26%）と高い評価を得ている。応用数理工学科（47.4%－42.1%：在学生 30.5%－37.3%）は肯定―否定的な意見が接近している。機械工学科（34%－47.2%：在学生 41.5%－22.6%）、知能情報工学科（29.8%－46.8%：在学生 41.1%－32.1%）、社会開発システム工学科（30.8%－46.2%；在学生 38.3%－51.1%）と否定的反応が卒業生で上回っている。



図Ⅱ―３―２―12　卒業された学科の教育方針があり、系統立てた教育を受けることが出来ましたか。

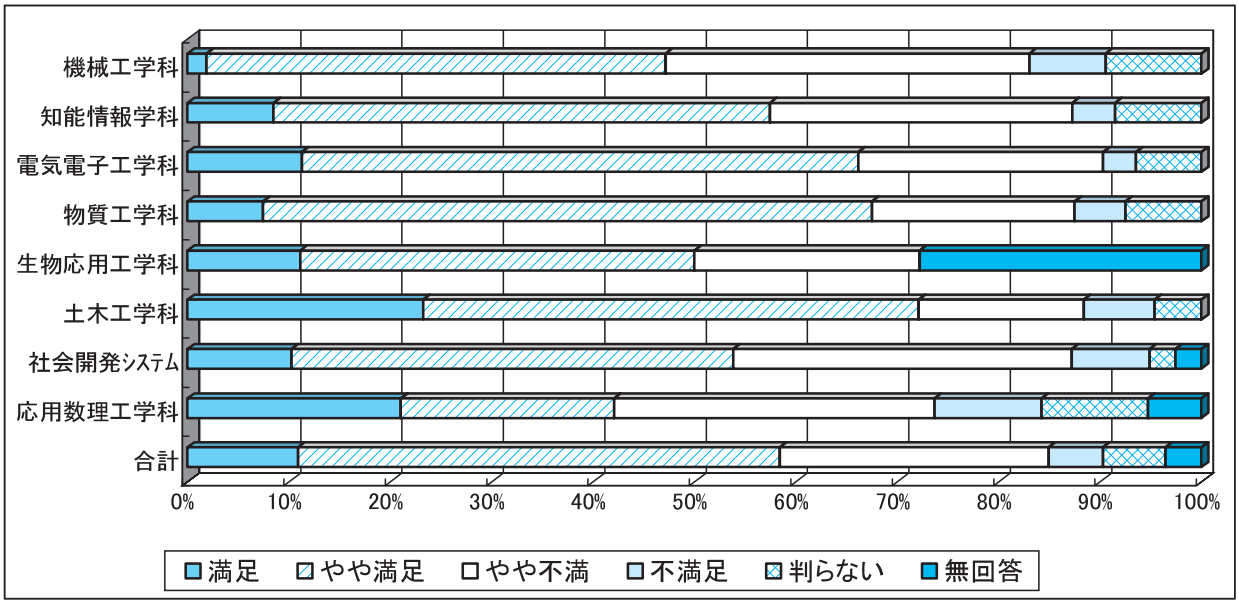
JABEE について知っている卒業生（Q39）は 58.4%（在学生 90.7%）でまだまだ一般的な評価となっていない。学科別で大きな差がある。電気電子工学科卒業生 74.2%（在学生 92.6%）、土木工学科卒業生 81.4%（在学生 92.4%）、社会開発システム工学科卒業生 71.8%（在学生 80.9%）、機械工学科卒業生 69.8%（在学生 90.6%）と比較的高い割合で知っているが、知能情報工学科卒業生 53.2%（在学生 91.1%）、物質工学科卒業生 25%（在学生 93.2%）、生物応用工学科卒業生 30.6%（在学生 96.6%）、応用数理工学科卒業生 31.6%（在学生 81.4%）は関心が低い。所属学科が JABEE を取得したことを知っている卒業生（Q40）は、電気電子・土木・社会開発システム工学科で、それぞれ 69.4%（在学生 90.5%）、67.4%（在学生 90.8%）、71.8%（在学生 83%）である。



図Ⅱ―３―２―13　「ＪＡＢＥＥ」を知っていますか。

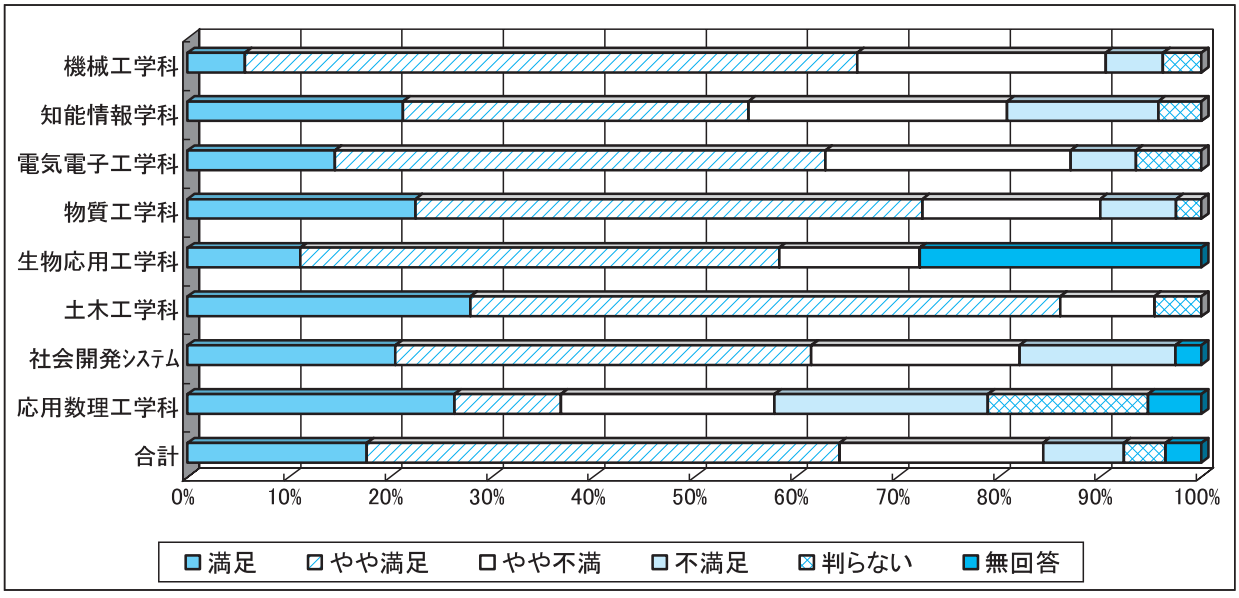
６．所属学科の教育カリキュラム

次に、専門科目で講義科目と実験・演習と卒業研究について満足度（Q44）を問うた。「専門科目（講義科目）」について、工学部卒業生全体で、「満足・やや満足」58.4%（在学生 52.9%）と「不満足・やや不満足」31.8%（在学生 37%）とどの学科も満足度のほうが高い割合を示している。特に、土木工学科卒業生 72.1%（在学生 74.3%）、物質工学科卒業生 67.5%（在学生 56.5%）、電気電子工学科卒業生 66.1%（在学生 53.7%）の満足度が高く、教育効果が上がっていることを示している。応用数理工学科卒業生は満足度－不満足度が 42.2%－42.2%（在学生 44.1%－42.4%）と拮抗している。



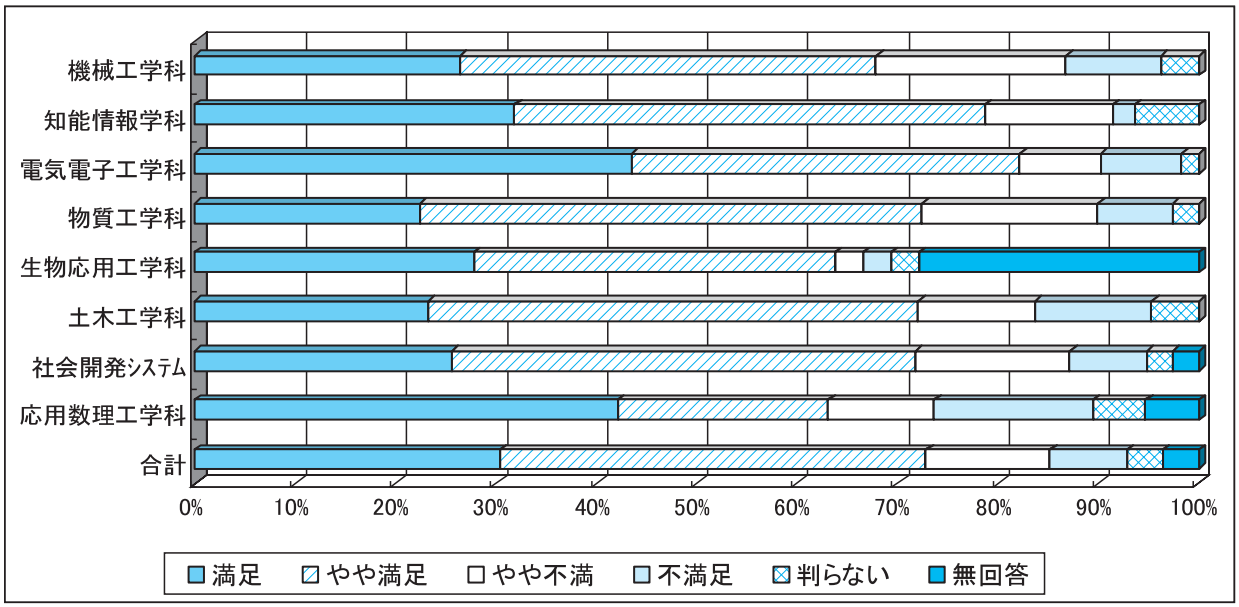
図Ⅱ―３―２―14　専門科目（講義科目）について

専門科目（実験・演習科目）（Q45）では、「満足・やや満足」64.3%（在学生 56.6%）が「不満足・やや不満足」28.1%（在学生 31.2%）を上回り、また在学生より卒業生のほうで評価が高くなっていることは教育効果があったことを示している。学科別では、土木工学科卒業生（86%－9.3%：在学生 69.7%－24.3%）、物質工学科卒業生が 72.5%－25%：在学生 61.3%－38.6%）とそれぞれ 70%を越えた満足度を示している。不満足度が高いのは応用数理工学科卒業生（36.8%－42.2%：在学生 40.7%－42.4%）である。



図Ⅱ―３―２―15　専門科目（実験・演習）について

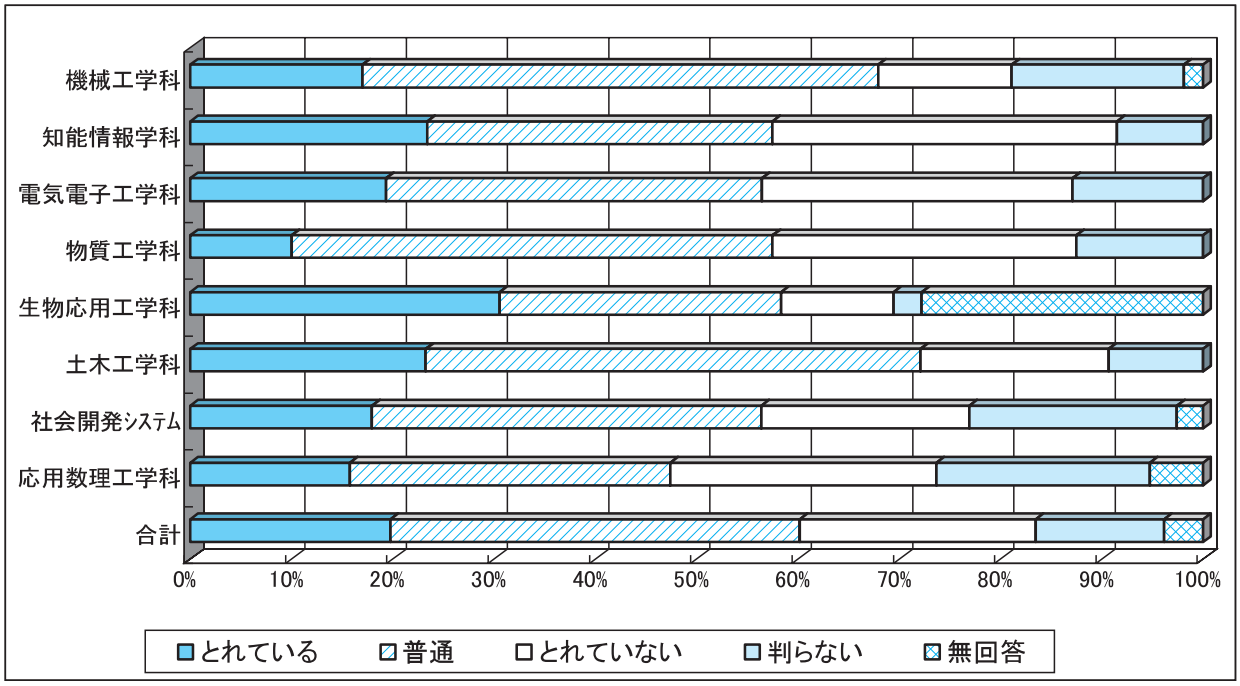
「卒業研究について」（Q47）満足度－不満足度を工学部全体の卒業生 72.9%－20.1%で満足度は高い。特に、電気電子工学科卒業生 82.2%－16.2%、知能情報工学科卒業生 78.7%－14.9%と満足度が高い。不満足度が２５%を越えたのは、機械（28.3%）、物質（25%）、応用数理（26.3%）工学科である。



図Ⅱ―３―２―16　卒業研究について

７．所属学科の教員構成

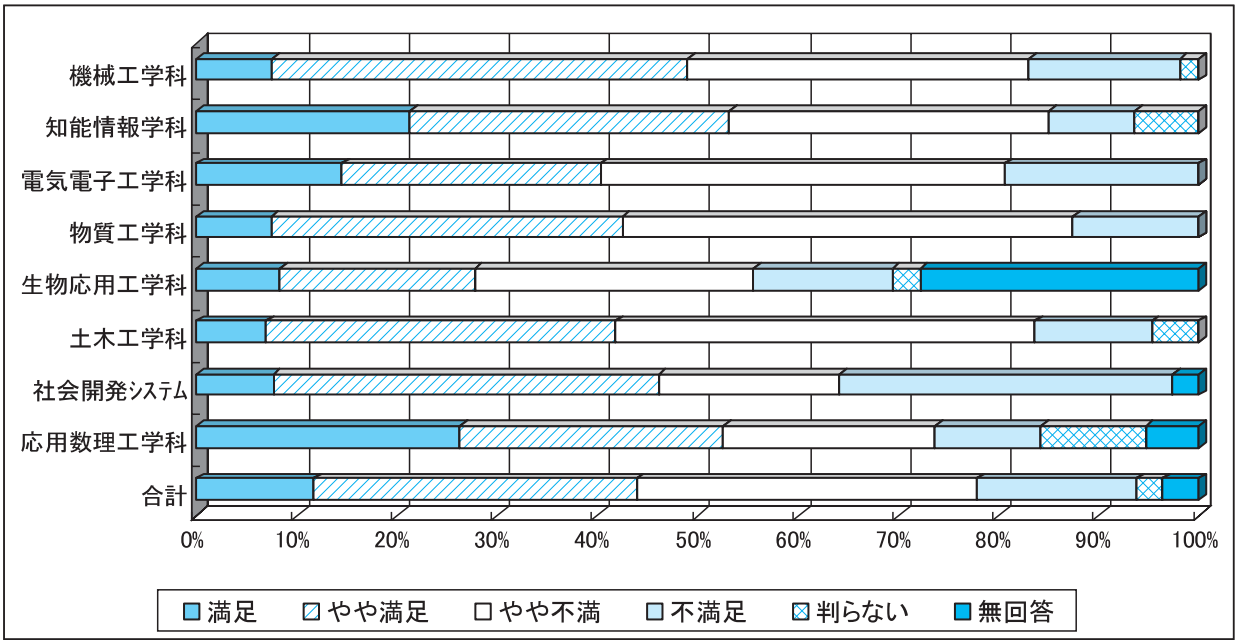
「所属学科の教員の研究分野はバランスがとれていたか」（Q48）の問いに対して、「とれている」－「普通」－「とれていない」の割合は、工学部全体の卒業生 19.8%－40.4%－23.3%（在学生 16.1%－39.9%－14.9%）となる。機械工学科卒業生（17%－50.9%－13.2%：在学生 7.5%－32.1%－18.9%）、生物応用工学科卒業生（30.6%－27.8%－11.1%：在学生 13.5%－40.6%－16.7%）、土木工学科卒業生（23.3%－48.8%－18.6%：在学生 19.7%－50%－9.11%）は「とれている」が上回っている。知能情報、電気電子、物質、社会開発システム、応用数理工学科では「とれていない」が上回っている。



図Ⅱ―３―２―17　所属学科の教員の研究分野はバランスがとれていましたか。

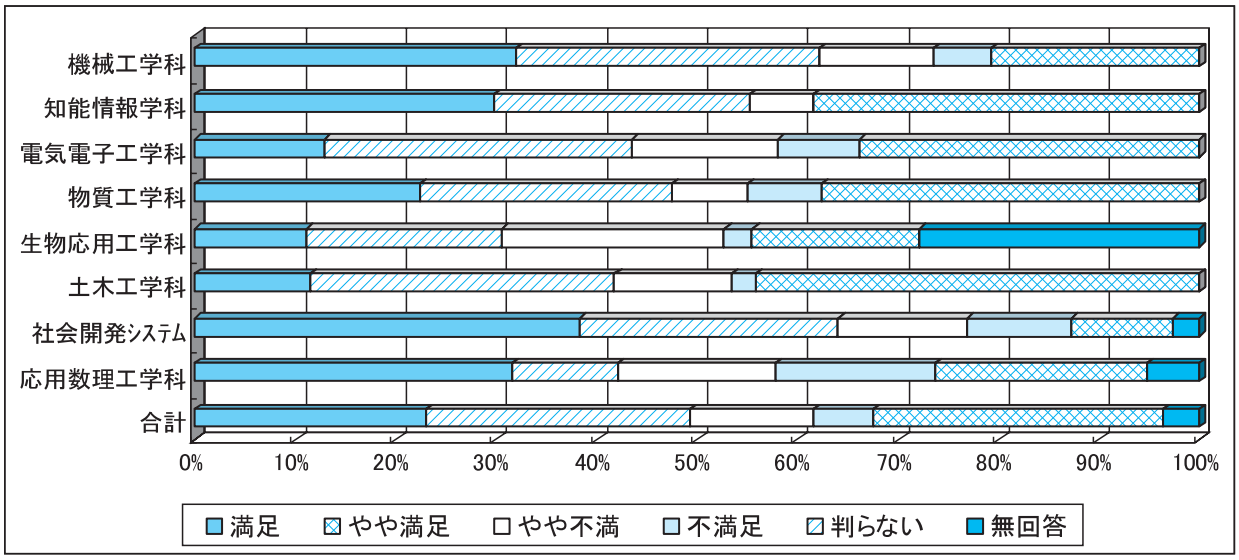
８．教育環境

教育環境（講義室・図書館・学生会館・研究室など）一括して聞いている（Q49）ので、ここの判断は難しいが、工学部卒業生全体で「満足・やや満足」44%（在学生44%）、「不満足・やや不満足」49.8%（在学生 47.3%）と「不満足」がやや多い。学科別で見ると、知能情報工学科卒業生（53.2%－40.4%：在学生 35.8%－57.2%）、応用数理工学科卒業生（52.6%－31.6%：在学生 66.1%－25.4%）で「満足」が上回り、他の学科は不満度のほうが大きい。特に、土木工学科では卒業生 41.2%－53.5%は在学生 53%－39.4%と評価が逆転している。



図Ⅱ―３―２―18　教育環境（講義室・図書館・学生会館・研究室など）は充実していましたか。

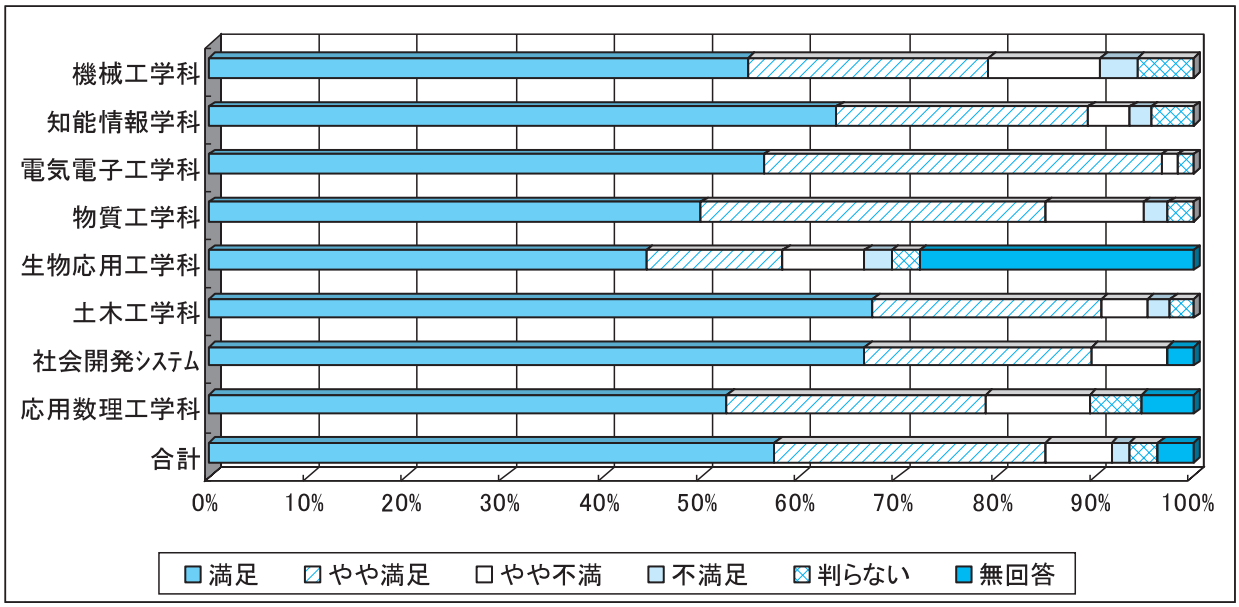
「奨学金や授業料免除について」（Q51）では、工学部全体の卒業生では、「満足・やや満足」49.3%（在学生 42.6%）、「不満足・やや不満足」18.3%（在学生 22.9%）、「わからない」28.9%（在学生 32.4%）となっている。奨学金などの環境は必要でない学生を考えれば、満足度が高いと推定できる。



図Ⅱ―３―２―19　奨学金や授業免除について、充実していましたか。

９．鳥取の自然環境

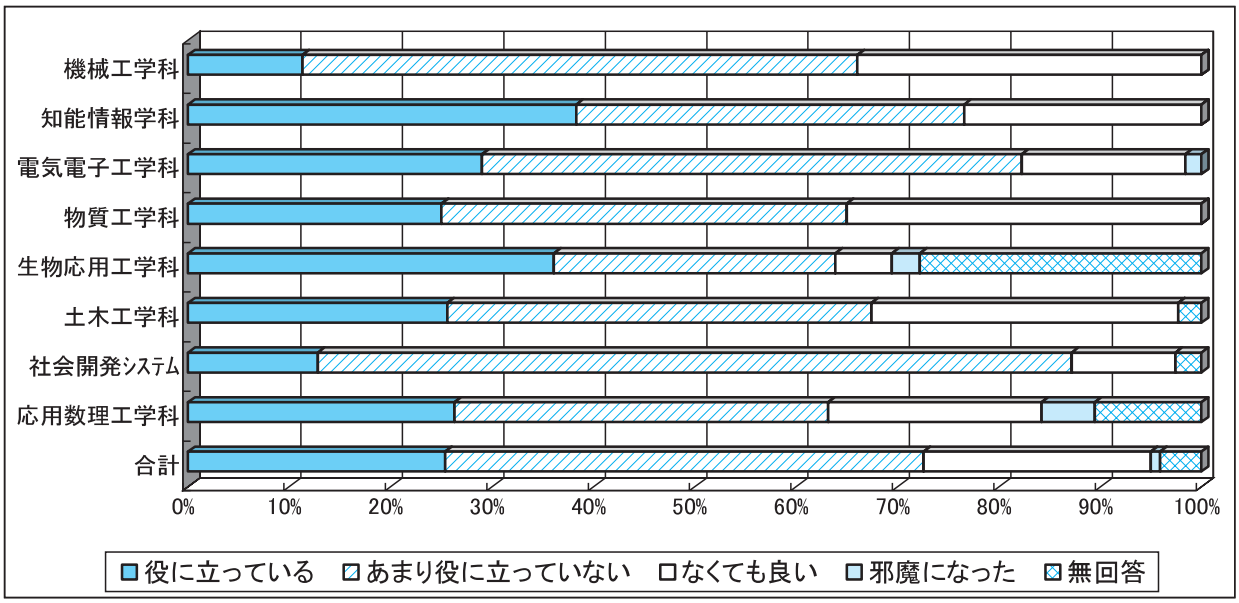
鳥取の自然環境について問うた質問（Q50）に関して、「満足・やや満足」－「不満足・やや不満足」は、工学部生全体では、卒業生 84.9%－8.6%（在学生 75.2%－16.4%）と卒業後の評価のほうが非常に高くなっている。すべての学科で「満足」が 50%を越えている。



図Ⅱ―３―２―20　鳥取の自然環境についていかがですか。

１０．学生への支援

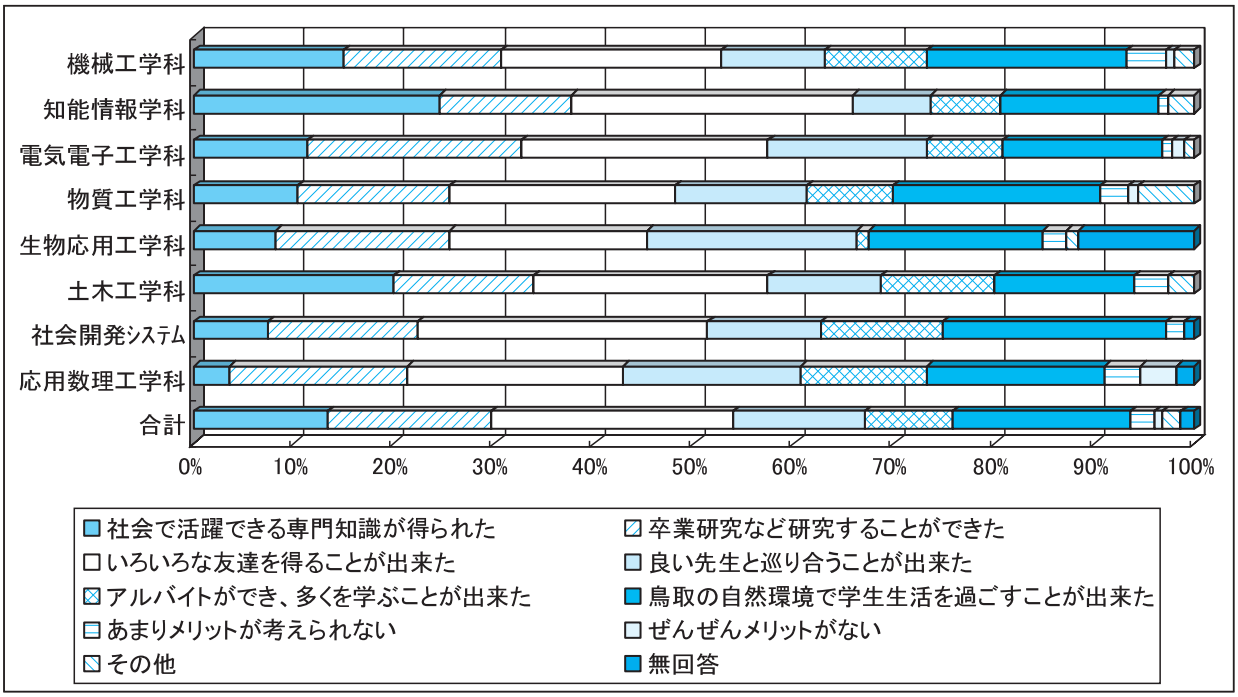
「学級教員・チューター制が役に立っているか」（Q52）について、工学部全体の卒業生では、「役に立っている」25.4%（在学生 25.4%）、「あまり役に立っていない」47.2%（在学生 45.2%）、「なくてもよい」22.4%（在学生 21.9%）、「邪魔になる」0.9%（在学生 4.7%）と在学生とほとんど同じ意見分布である。この制度の趣旨・活用が不十分との結果である。特に、物質、土木工学科卒業生で否定的な意見が多数を占めている。



図Ⅱ―３―２―21　学級教官・チューター制について、役に立ちましたか。

１１．鳥取大学の役割

「あなたが鳥取大学工学部を卒業した一番大きなメリットは何ですか」（Q53）について、工学部全体の卒業生では、「社会で活躍できる専門知識が習得できた」13.4%（在学生 16.9%）、「卒業研究など自分の興味あることができた」16.4%（在学生 11.4%）、「良い先生とめぐり合うことが出来た」13.1%（在学生 4.5%）の教育に関係する合計は 42.9%（在学生 32.8%）となっている。「いろいろな友達を得ることが出来た」24.1%（在学生 25.0%）、「アルバイトができ、多く学ぶことが出来た」8.8%（在学生 6.9%）の合計は 32.9%（在学生 31.9%）である。「鳥取の自然環境で学生生活をすごすことが出来た」17.9%（在学生 13.9%）である。「あまり・全然メリットがない」3.1%（在学生 13.7%）である。



図Ⅱ―３―２―22　鳥取大学工学部を卒業した一番大きなメリットはなんですか。

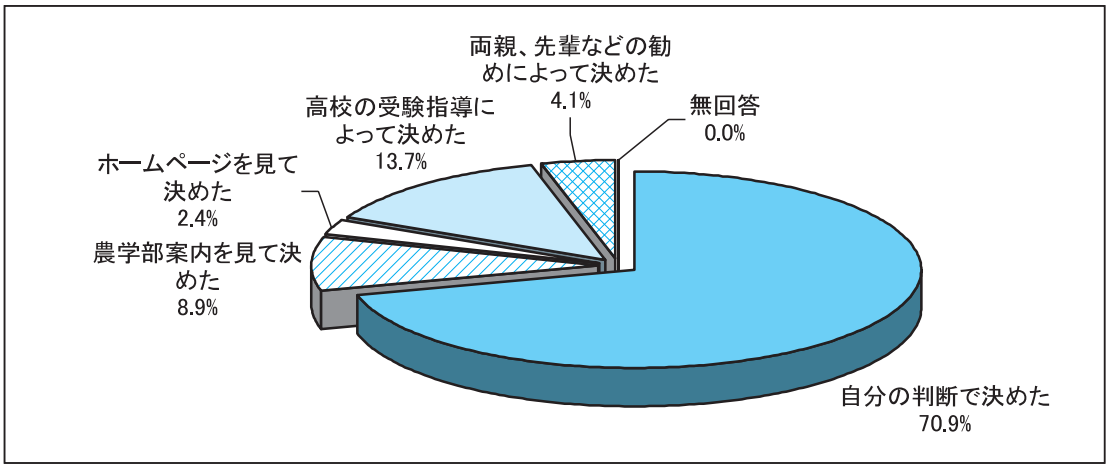
第４章　農学部の教育を中心としてみた在学生の意識と評価

第１節　在学生の専門教育に対する意識と評価

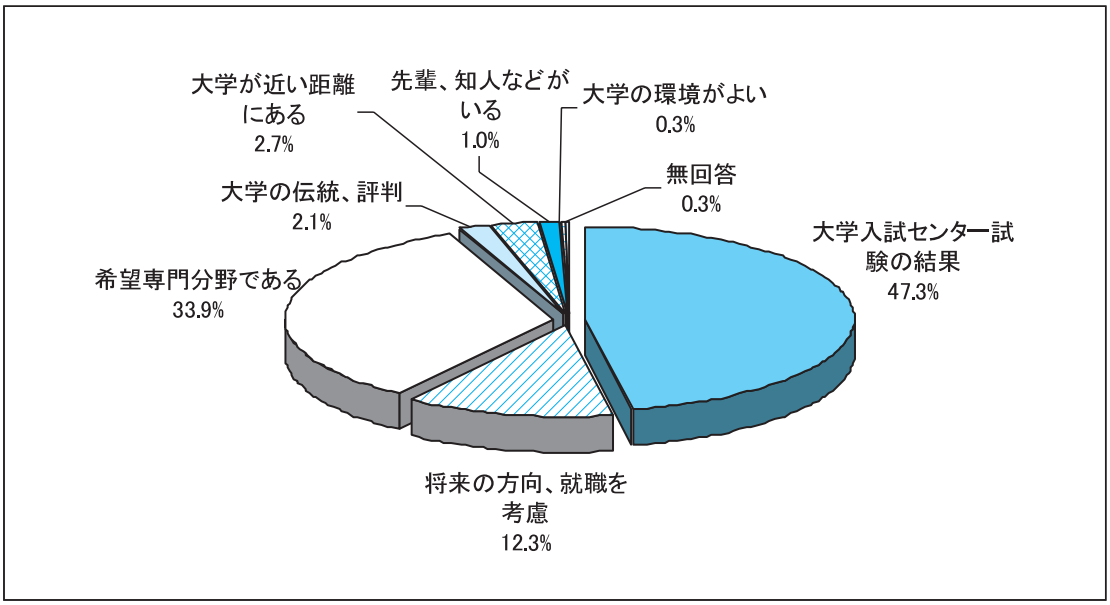
Ⅰ．生物資源環境学科について

１．入学及び学科選択の動機と意識

学部・学科への受験の選択は、「自分の判断で決めた」とする者が約 71％に達しており、前回の調査時の 72％とほとんど変わらない数値であった。次に多いのが「高校の受験指導によって決めた」が 14％近くあり、農学部案内やホームページを見て決めたという者は、前回と同様少なかった（Q28）。また、決めた判断要素は「大学入試センター試験の結果」が半数近い 47.3％であった。次いで「希望専門分野である」が 33.9％であり、この結果も前回とほぼ同様の数値が示されている（Q29）。しかし、「大学の環境がよい」とする者は、極端に少なく 0.3％を占めるにすぎず、法人化された大学として真摯に受け止めなければならない問題であろう。



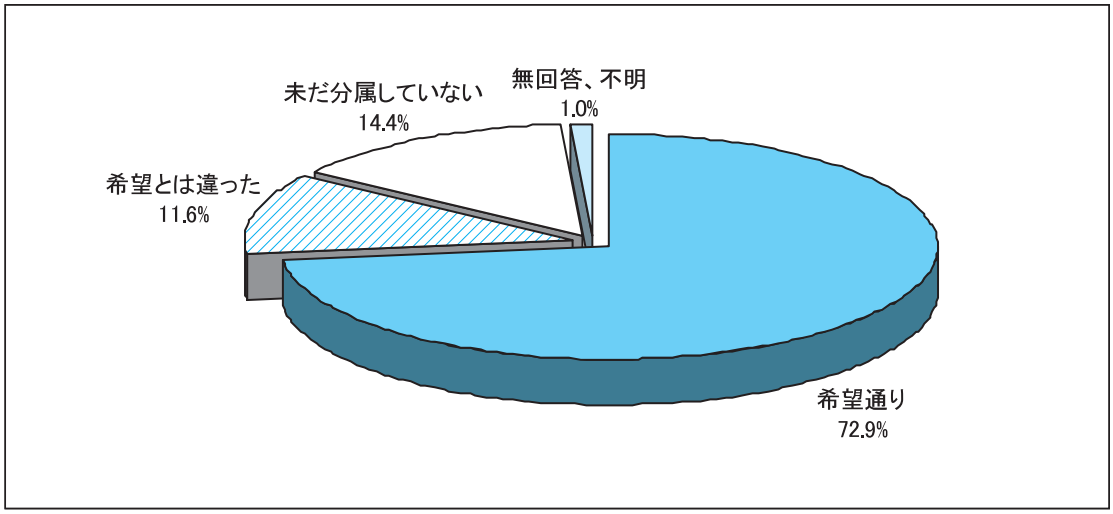
図Ⅱ―４―１―１　農学部生物資源環境学科への受験をどのように決めましたか。



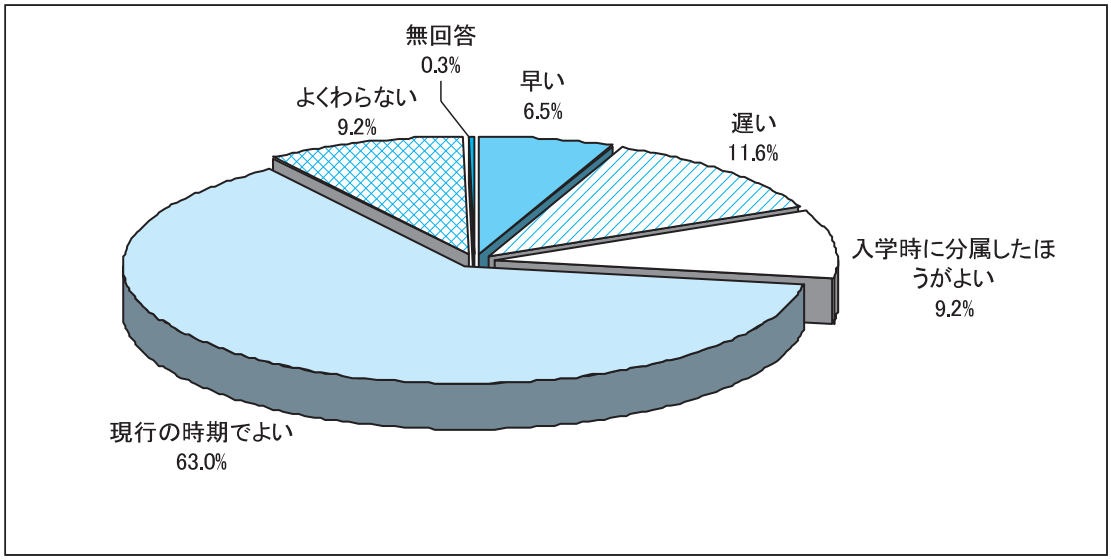
図Ⅱ―４―１―２　受験を決めたときの判断要素は何でしたか。（第１番目）

２．専門教育体制についての評価と意見

生物資源環境学科における専門教育体制の特徴は、学年進行によって分属していく方式をとっているところである。Q34は、「入学後、専門学習の分属は希望通りですか」との設問に対しての回答であるが、72.9%の学生が肯定の回答をしている。農学部では1年次から2年次に進むときにコース分属分けが行われているが、その際、希望コースに偏りが生じた場合は、基本的には成績評価によって分属を決定している。したがって希望分属に進めない場合には不満が残ることになる。今回の調査では大部分の学生は希望通りであったと受け止めているようであるが、希望と違ったとしているものも11.6%を占めている。サブコース分属及び分野分属においても6割くらいの学生が希望通りであったと回答しているが、未だに分属していないとする学生もそれぞれ20%以上存在している。分属の時期については、「現行の時期でよい」とするものが63%に達しており、前回の調査時の53%よりさらに多くなっていることから時期的には問題がないと判断できる。コース分属は学生のモチベーションにも大きな影響を与える要素であることから、今後もよりよい分属方式に向けて詳細な検討を行っていく必要があろう。



図Ⅱ―４―１―３　入学後、専門学習の分属は希望通りですか（コース分属）



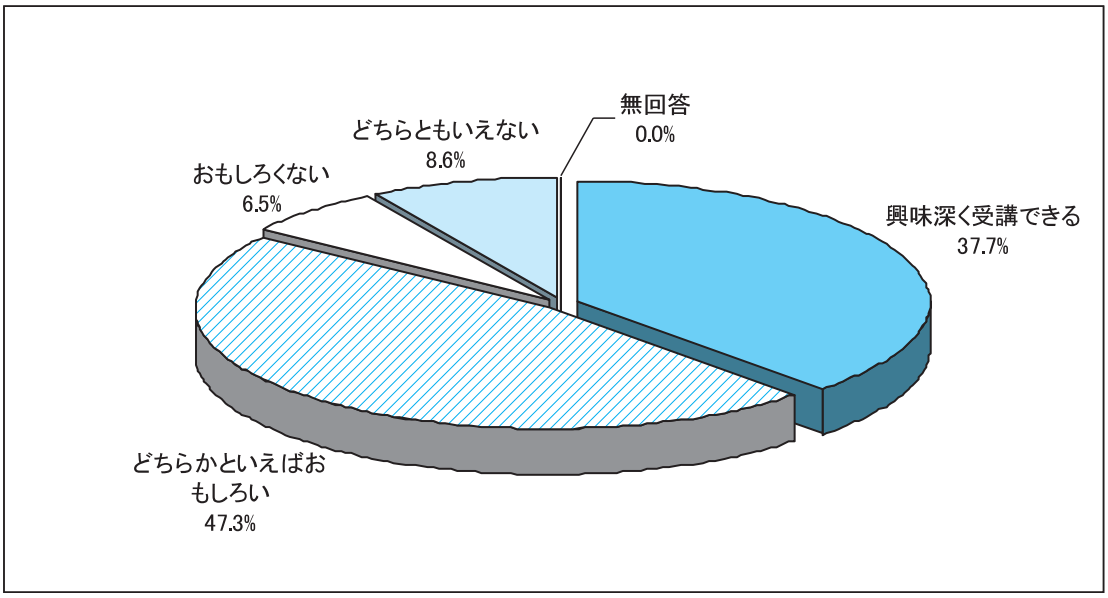
図Ⅱ―４―１―４　コース（サブコース）分属の時期についてたずねます。

専門教育についての選択・必修の割合に対する設問では、49%の学生が「選択を増やし、必修を減らす」という回答をしている。前回の調査では、60%近くの学生がこの回答を選んでおり、必修科目への負担感はやや減少している傾向がみてとれる。専門の講義内容については、「重要な事項を専門的に詳しく解説し、重要でないと思われる事項は省く」という回答が44.2%を占めている。次いで、「内容が浅くなっても全体系を網羅して標準的な解説を行う」、「教官が研究している得意とする分野の解説を中心とし、個性に富んだものとする」という回答がそれぞれ28.1%、23.6%となっている。これらの傾向は前回の調査と比べてあまり大きな変化はみられていない。講義では、基本的で重要な事項の説明と専門分野に特化した講義内容を、いかにバランスよく行うべきか難しいところである。

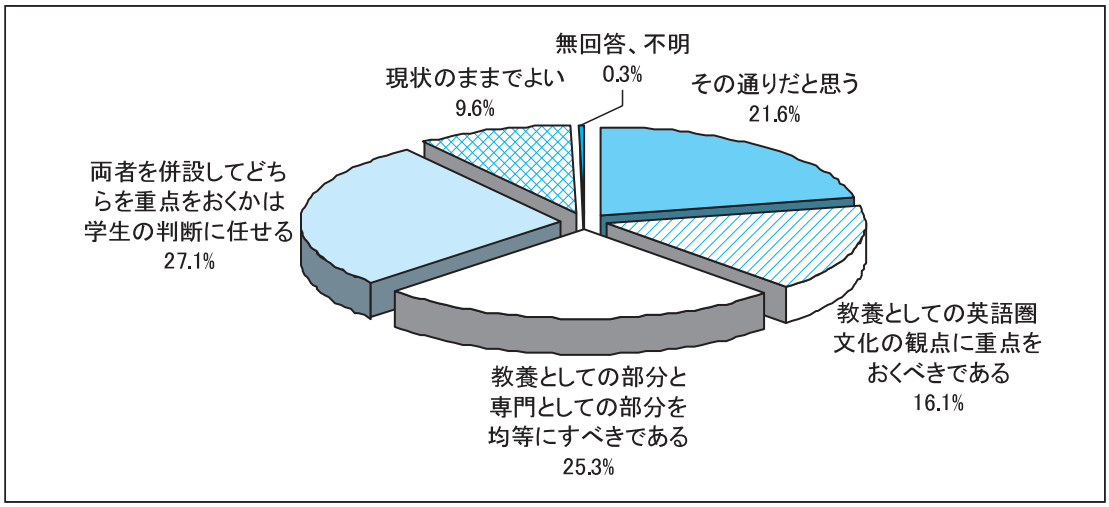
3．専門教育と全学共通教育についての意識と意見

専門教育の評価は前項で取り上げたが、ここでは専門の授業を全学共通教育の授業と比較してみることにする。Q40は、「専門の授業は全学共通教育の授業に比べてどのように感じますか」という設問に対する回答であるが、「どちらかといえばおもしろい」が47.3%、「興味深く受講できる」が37.7%と高い数値が示されている。両方を合わせると85%に達しており、専門の授業は全学共通教育に比べて興味深く、おもしろく受講しているようである。

次に、前回と同様に全学共通科目の英語の授業について、どのようにとらえているのかを分析してみることにする。「全学共通教育の英語科目は、専門論文の読み、書きにもっと重点をおくべきである」という設問に対して「その通りだと思う」が21.6%、「教養としての英語圏文化の観点に重点をおくべきである」が16.1%、「教養としての部分と専門としての部分を均等にすべきである」が25.3%、「両者を併設してどちらを重点におくかは学生の判断に任せる」が27.1%と回答はほぼ拮抗しており、特徴的な回答はみられなかった。前回の調査時の回答も似たような数値が示されており、設問自体が回答しにくい面があることが起因しているとも考えられる。



図Ⅱ―4―1―5　専門の授業は一般教育の授業に比べてどのように感じますか。



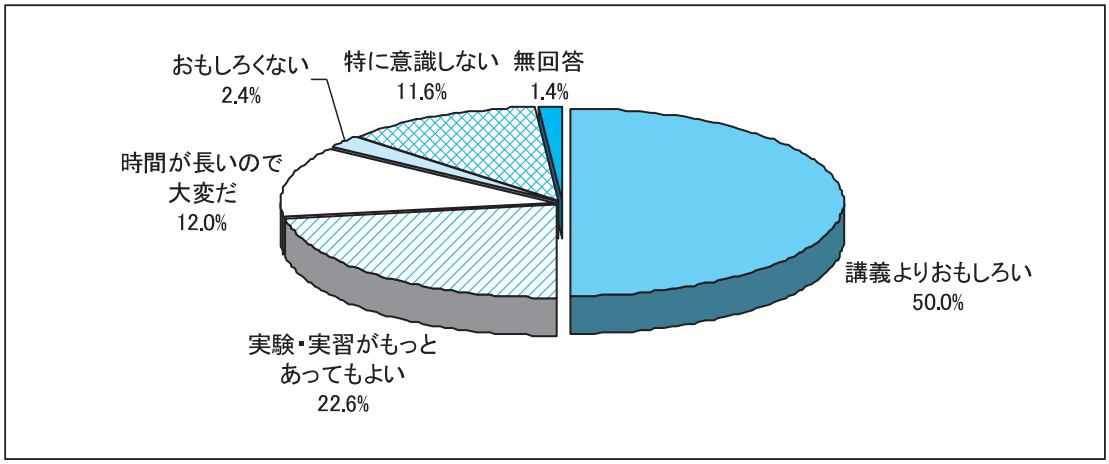
図Ⅱ―4―1―6　「一般教育の英語科目は、専門論文の読み、書きにもっと重点をおくべきである」との意見をあなたはどう思いますか。

また、コンピューターの実習を含む専門科目の情報処理教育についての設問に対し、「充実すべきである」が44.9%、「ある程度充実すべきである」が50.3%と合わせると95%以上であり、極めて肯定的にとらえていることがわかる。

より有効な学習効果をあげるための方法として、「たびたびレポートを提出する」が49.3%、「中間試験を行う（3回程度）」が26.4%と多数を占めたが、これは前回の調査時の数値とほとんど同じであり、学習効果をあげる方法について学生の考えは変わっていないことがわかる。

外部の招聘講師による講演・授業に対する反応は、「とてもよい」と「あった方がよい」を合わせると90%近くになり、時々外部から講師を呼んで話しを聞くことについては強い希望が感じられる。

次に、実験・実習の授業に対しては、「講義よりおもしろい」が50%、「実験・実習がもっとあってよい」が22.6%であり、講義より実験・実習に興味を感じている学生がかなり多くいることが見てとれる。ただ、「時間が長いので大変だ」とする回答も12%あり、実験・実習に必ずしも関心を寄せているというわけではない。そもそも実験・実習は講義とセットで教育効果を上げるもので、相互の効果的な教育が要求されるべきものとなろう。



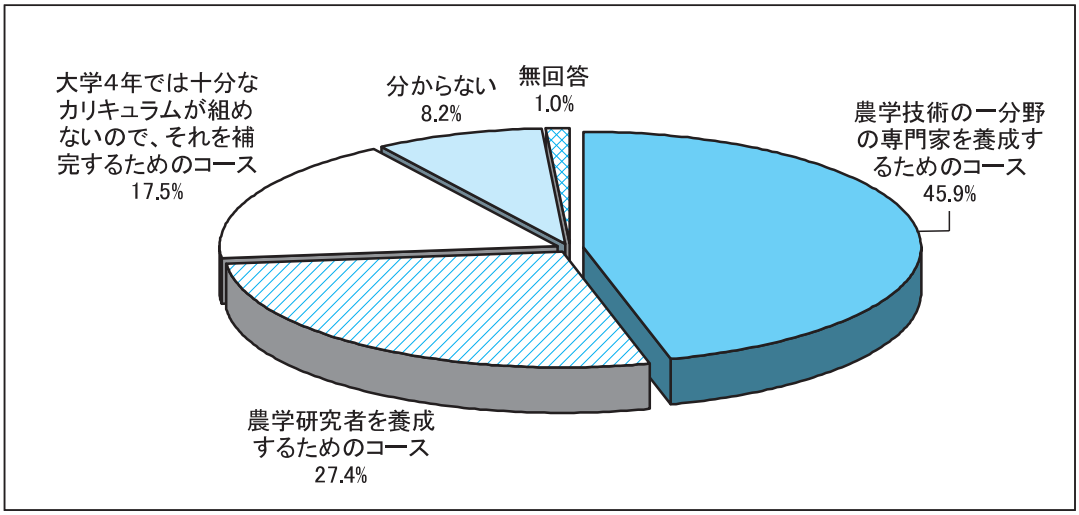
図Ⅱ―4―1―7　実験・実習の授業についてたずねます。

４．今後の展望について

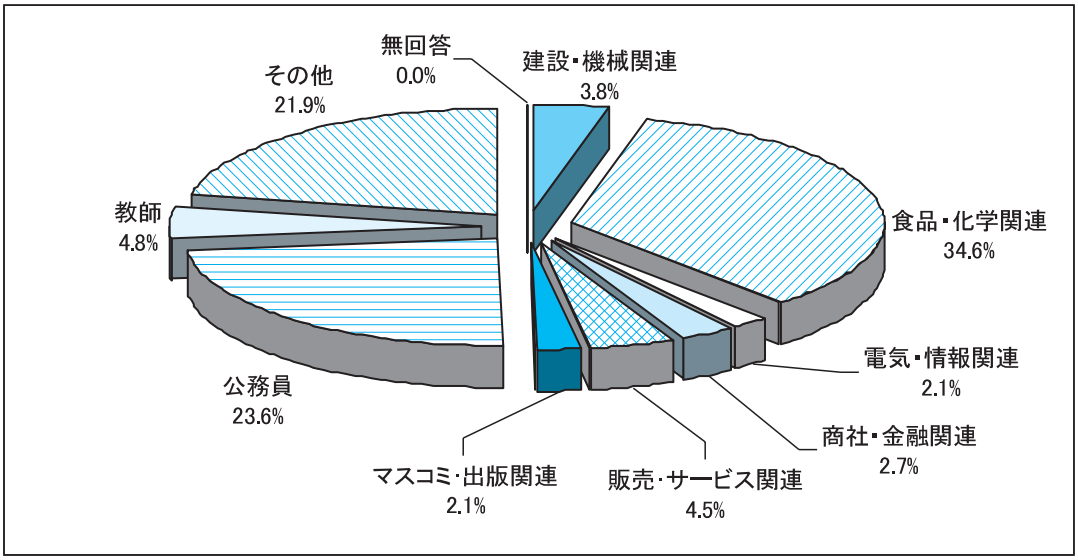
Ｑ48は、大学院修士課程に対する認識についての調査であるが、「農学技術の一分野の専門家を養成するためのコース」と考えているものが45.9%おり、「農学研究者を養成するためのコース」と位置づけているものが27.4%いることがわかった。大学院教育の位置づけを明確にし、目的を持った教育の推進が一層必要となろう。

Ｑ50は、将来希望する職業についての設問であるが、「食品・化学関連」を希望するものが34.6%と一番多く、次いで、「公務員」志望が23.6%である。そのほかは、全て５%以下の構成比であり、現状の生物資源環境学科の学生の半数以上は上記の職業につくことをイメージしているようである。

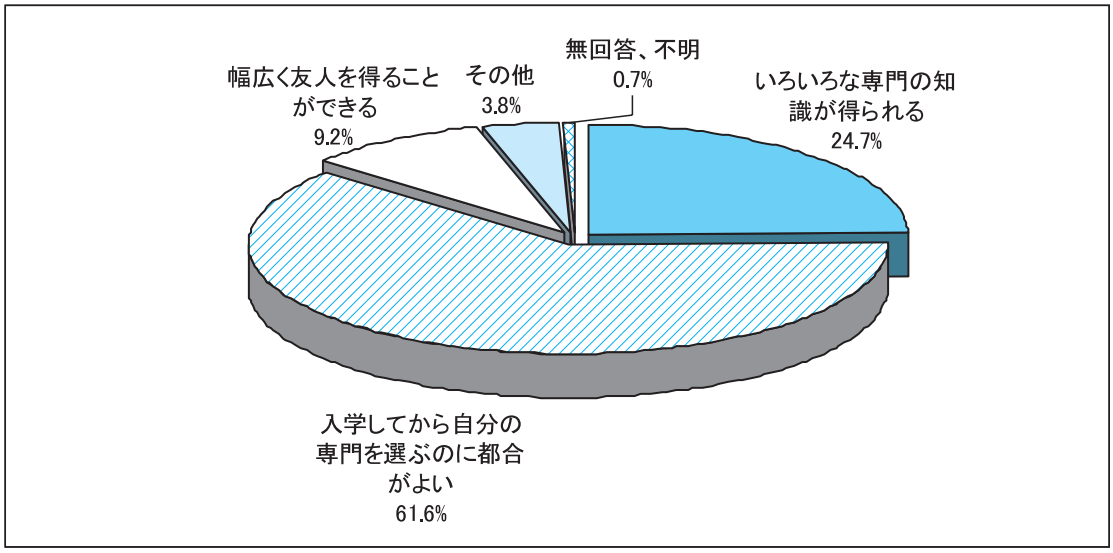
Ｑ52は、生物資源環境学科のメリットに対する回答であるが、「入学してから自分の専門を選ぶのに都合がよい」とする答えが圧倒的に多く、61.6%を占めている。次に多いのが「いろいろな専門の知識が得られる」が24.7%となっている。生物資源環境学科では入学時は学科一本でとり、その後二年、三年と進むにしたがって専門課程に分化していくシステムになっているが、このシステムが評価されている結果ととらえたい。



図Ⅱ―４―１―８　あなたは大学院修士課程をどのように理解していますか。



図Ⅱ―４―１―９　あなたが将来希望する職業は、以下の業種のどれに近いですか。



図Ⅱ―4―1―10　生物資源環境学科のメリットと考えられるものは何ですか。

Ⅱ．獣医学科について

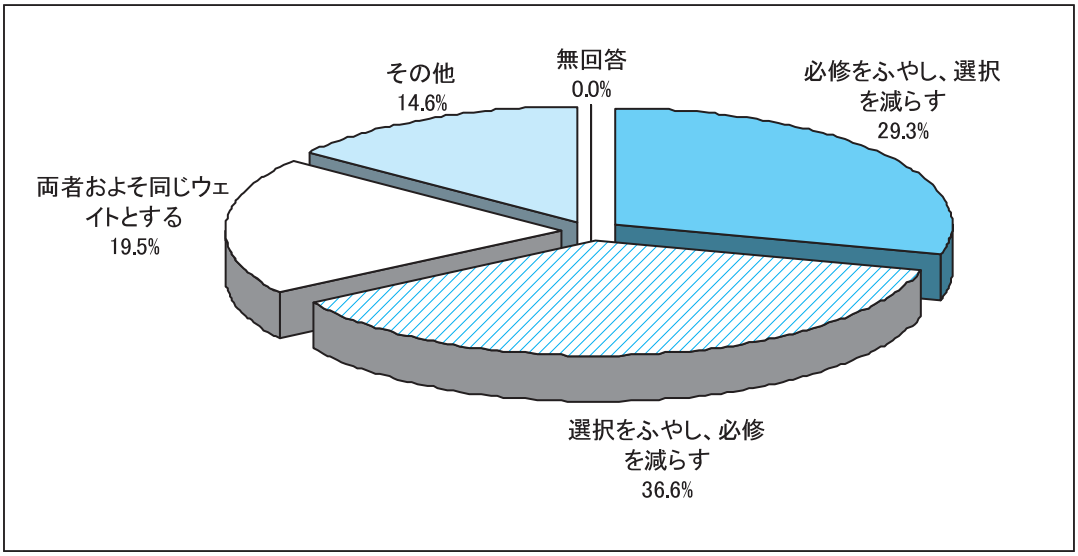
1．入学及び学科選択の動機と意識

学科への受験の選択は、「自分の判断で決めた」とする者が 89%に達しており、受験の選択の自主性が明確である。他の選択肢は 1～4%くらいの数値であり、獣医学科という特性が影響しているのではないかと考えられる。また、決めた判断要素は「大学入試センター試験の結果」が 45.1%と一番多く、次いで、「希望専門分野である」が 29.3%と続き、「将来の方向、就職」も 23.2%とかなり高い数値を示している。獣医学科に入学したとき将来どのような獣医師になりたいと思ったかという設問に対しては、「犬、猫、小鳥などのコンパニオン・アニマルを対象とする臨床獣医師」が一番多く、半数以上の 52.4%が示されている。次いで、「野生の鳥や動物の保護に携わる獣医師」が 22%であり、その他の選択肢は少ない数値であった。

獣医学科の 6 年制教育に対する評価は、「メリットが多い」と考えている者は 42.7%であり、その理由として「講義時間が増えて学習範囲が広がる」（37.1%）や「余裕を持って学習ができる」(37.1%)をあげている。しかし、「デメリットが多い」（17.1%）や「どちらとも言えない」とする意見も多く、学生のこの点に関する評価は一様ではない。

2．専門教育体制についての評価と意見

Q31 は、専門学習での必修と選択に関する設問であるが、「選択をふやし、必修を減らす」という回答が 36.6%であり、続いて、「必修をふやし、選択を減らす」という回答も 30%近くあった。生物資源環境学科の学生では「必修をふやし、選択を減らす」という回答は 11%と少なく、両学科を比較すると、この点に差が認められた。専門の講義内容については、「重要な事項を専門的に詳しく解説し、重要でないと思われる事項は省く」が 57.3%と極めて高い数値となっている。生物資源学科より獣医学科の学生は重要事項の解説的な講義を重く考えているようである。



図Ⅱ―４―１―11　専門学習での必修と選択の割合は、どうあった方が良いと思いますか。

３．専門教育と全学共通教育についての意識と意見

Q33 は、専門の授業と全学共通教育の授業の比較であるが「興味深く受講できる」が 58.5%とかなり高く、「どちらかといえばおもしろい」も 30.5%と高く、両方を合わせると約９割の学生が専門の授業に関心を示している。

次に、全学共通教育の英語の授業について見てみると、「全学共通教育の英語科目は専門論文の読み、書きにもっと重点をおくべきである」という設問に対し、「その通りだと思う」が 30.5%あり、「教養としての部分と専門としての部分を均等にすべきである」という意見も 19.5% ある。「両者を併設してどちらに重点を置くかは学生の判断にまかせる」は 25.6%という数値になっている。

更に、コンピューターの実習を含む専門科目の情報処理教育に対しては、「充実すべきである」という回答が 53.7%とかなり高く、「ある程度充実すべきである」も 31.7%あり、生物資源環境学科と同様に情報処理教育の充実を多くの学生が望んでいるようである。

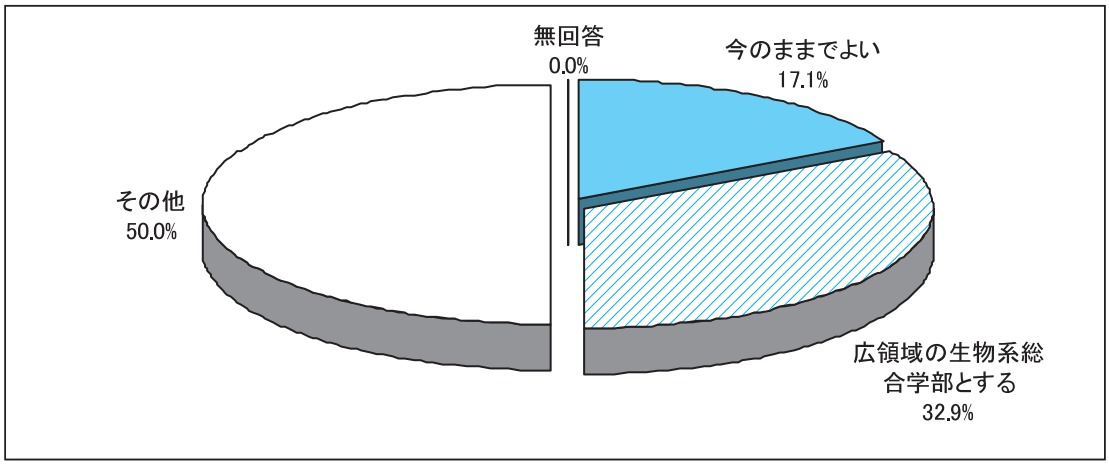
講義の学習効果をあげるための方法としての希望については、「たびたびレポートを提出する」と「中間試験を３回程度行う」が合わせて 70%くらい占めており、生物資源環境学科と似たような回答であった。

外部の招聘講師による講演・授業に対する反応は、「とてもよい」と「あった方がよい」を合わせると 90.2%になり、生物資源環境学科と同様きわめて肯定的な意見の多いことがわかる。

実験・実習の授業については、「時間が長いので大変だ」と回答したものが 39.0%と一番多く、「講義よりおもしろい」と「実験・実習がもっとあってよい」という意見がそれぞれ 20%以上ある結果となった。生物資源環境学科では「時間が長いので大変だ」とする回答は 12%くらいしかなかったのに比べ、獣医学科の学生は実験・実習に対して時間的な負担感を感じているようである。また、「おもしろくない」という意見も 7.3%と生物資源環境学科と比べて高い数値が示されており、検討課題の一つと言えよう。

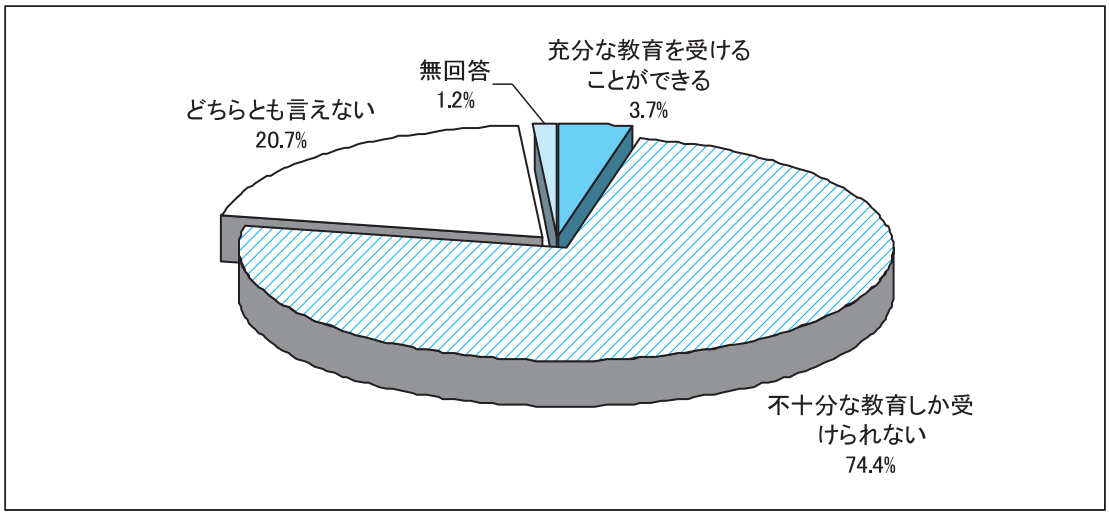
4．今後の展望について

Q42は、「将来農学部は、どのような方向に向かったらよいとおもいますか」という設問に対する回答であるが、「広領域の生物系総合学部とする」が32.9%と一番多く、名称に関しては、「農学部」が36.6%、「農獣医学部」が19.5%であった。「今のままでよい」や「その他」の意見もかなり多く見られ、全体的にみて、この問題に対する関心度はあまり高くないようである。

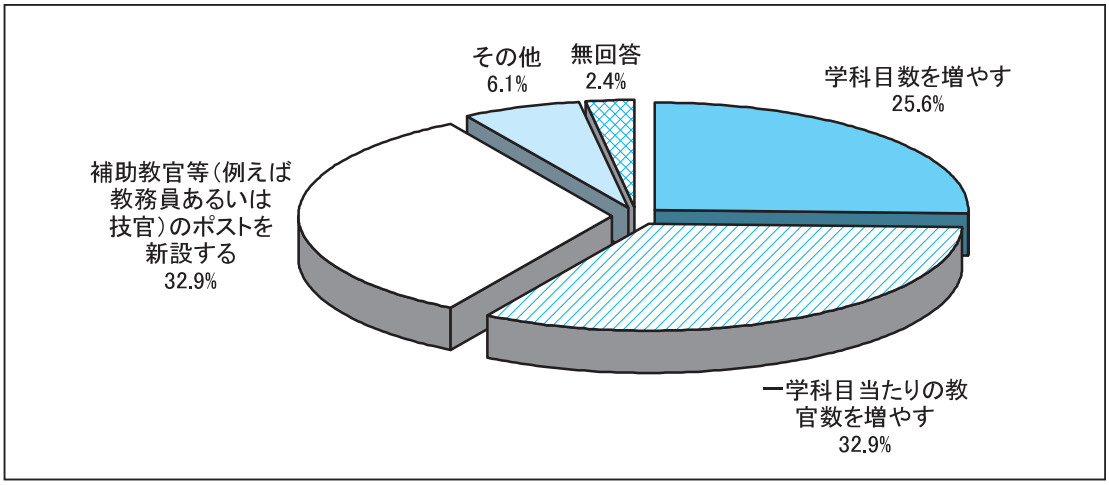


図Ⅱ―4―1―12　将来農学部（生物資源環境学科、獣医学科を含む全体）は、どのような方向に向かったらよいと思いますか。

Q50は、獣医学科の現状の教育体制に関する設問であるが、「不十分な教育しか受けられない」とする回答が実に74.4%あり、「どちらともいえない」の20.7%を加えると95%の学生が現状の教育体制に不満を感じていることになる。その理由として、「教官の絶対数が不足しており、きめ細かい教育が受けられない」を最大の問題点としてあげている。そして、今後の獣医学教育を充実させるための方法として「一学科当たりの教官数を増やす」（32.9%）、「補助教官等のポストを新設する」（32.9%）、「学科目数を増やす」（25.6%）などをあげている。



図Ⅱ―4―1―13　獣医学科は現在10学科目、教官26名で教育を行っていますが、どのような感想を持っていますか。



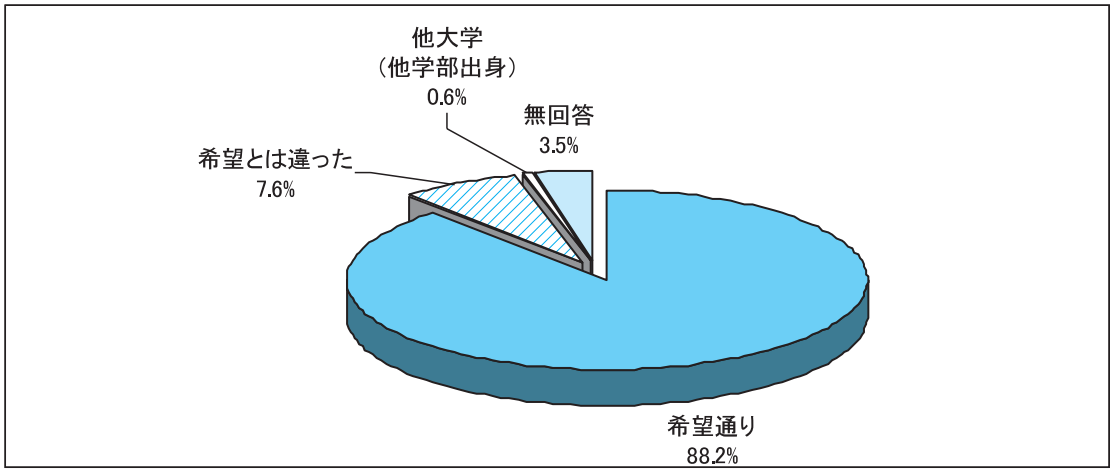
図Ⅱ―４―１―14　６年制に見合った教育を心掛けていますが、獣医学教育をさらに充実させるためにはどのような方法が考えられますか。

第２節　卒業生の専門教育に対する意識と評価

Ⅰ．農学部の専門教育について

１．専門教育体制についての評価と意見

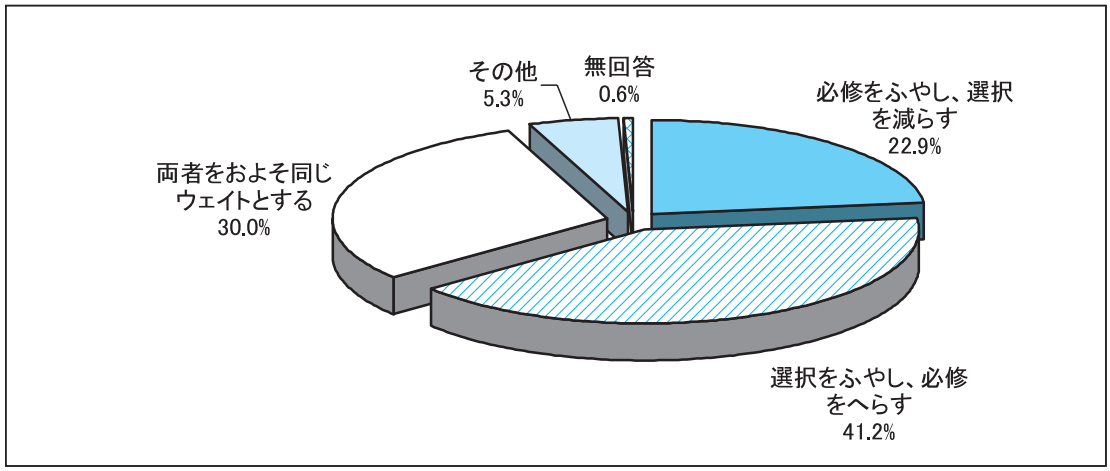
Ｑ２９ は、入学後の専門学習の分属は希望通りであったかという設問に対する回答であるが、88.2％の卒業生が「希望通り」と答えており、この数値は在学生（72.9％）よりさらに高いものであっ。た。サブコース分属や分野分属においても 80％～90％が「希望通り」と回答していることから、農学部における分属体制は卒業生からは十分な支持を受けているといえる結果が示された。



図Ⅱ―４―２―１　入学後、農学部の専門学習の分属は希望通りでしたか。（コース分属）

農学部で受講した専門科目については、「内容がちょうどよかった」とするものが 64.1％いるものの、「内容が難しすぎて理解できないことが多かった」とする意見も 30％近くあり、どのようなことが要因なのかは検討する必要があろう。

専門教育での選択・必修の割合についての設問に対する回答では、「選択を増やし、必修を減らす」が 41.2％と一番多く、「両者をおよそ同じウエイトとする」が 30.0％、「必修を増やし、選択を減らす」が 22.9％となっている。この数値は生物資源環境学科の在学生と同じような傾向であった。

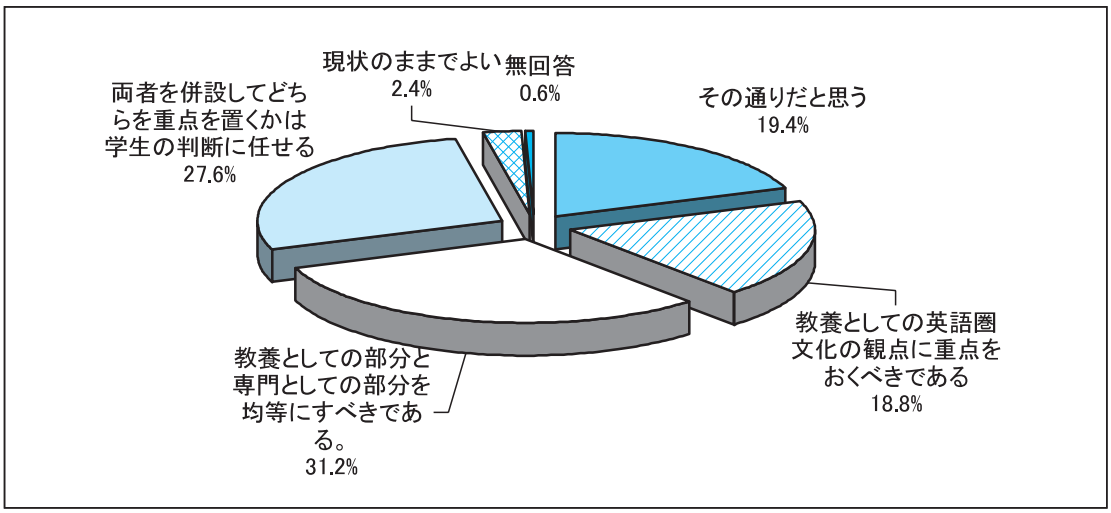


図Ⅱ―４―２―２　専門学習での必修と選択の割合は、どうあった方が良いと思いましたか。

２．専門教育と一般教育についての意識と意見

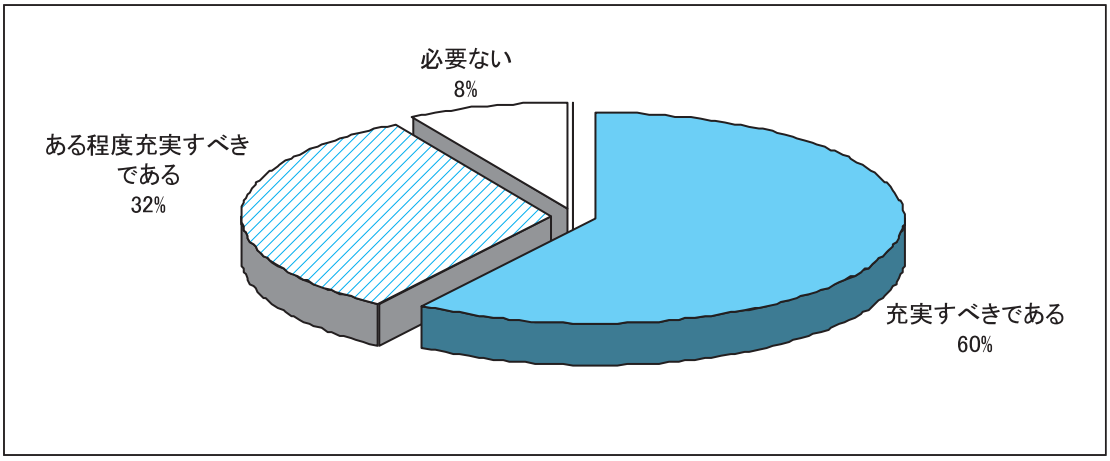
Q35 は、専門の授業と一般教育の授業の比較であるが、「興味深く受講できる」という回答が 47.6%、「どちらかといえばおもしろかった」が 42.9%あり、両方を合わせると 90.5%という高値であった。この数値は在学生（85%）より高かった。

次に、一般教育の英語科目への「一般教育の英語科目は、専門論文の読み、書きにもっと重点をおくべきである」という設問に対する回答であるが、「教養としての部分と専門としての部分を均等にすべきである」が 31.2%で一番多く、次いで、「両者を併設してどちらに重点を置くかは学生の判断に任せる」が 27.6%と続き、「その通りだと思う」、「教養としての英語圏文化の観点に重点を置くべきである」が 19%くらいの数値であった。この回答は在学生とほぼ同様な傾向であった。



図Ⅱ―４―２―３　「一般教育の英語科目は、専門論文の読み、書きにもっと重点をおくべきである」との意見をあなたはどう思いますか。

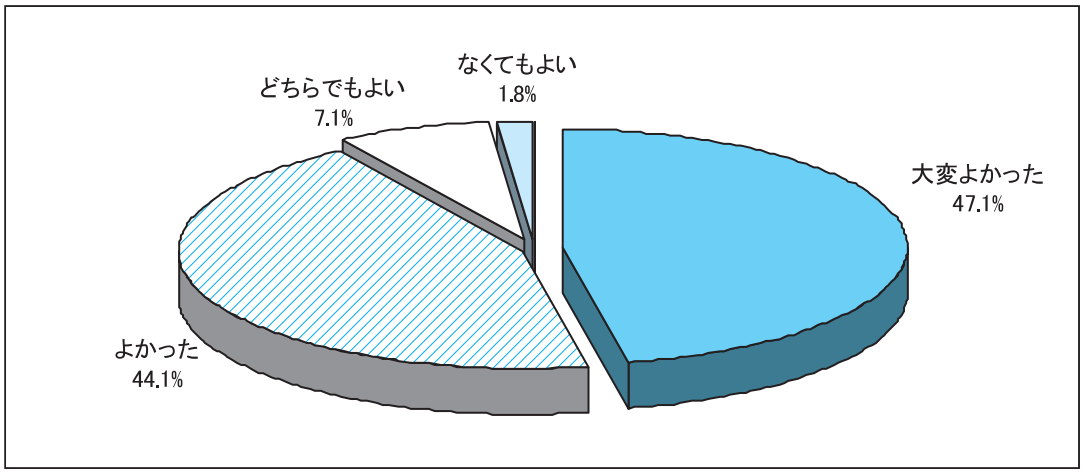
コンピューターの実習を含む専門科目の情報処理教育にたいしては、「充実すべきである」が 59.4%とかなり高く、「ある程度充実すべきである」が 32.4%であり、合わせると 90%以上になり、情報処理教育に関しては在学生同様きわめて前向きな回答が示された。特に、「充実すべきである」という卒業生の回答は 60%近くになっており、時代的な影響のうかがわれる結果が示された。



図Ⅱ―４―２―４　コンピュータの実習を含む専門科目の情報処理教育についてたずねます。

3．卒業論文及び実験・実習について

ここでは、農学部の卒業論文に関する回答について分析する。Q38は、卒業論文のテーマの決め方に関する設問であるが、51.5%の卒業生が「指導教官から個別に与えられた」と答えており、その次が「自分で決め、指導教官の許可を得た」の25.7%であった。「研究室の共通テーマであったので、それを分担した」という回答も17.5%あった。また、「卒業論文のあったことをどのように評価しているか」という設問に対し、「大変よかった」が47.1%を占め、「よかった」が44.1%であり、卒業生は卒業論文を積極的に評価していることがわかった。目下卒業論文を義務づけるべきかどうかが問題になっているところであるが、この調査の結果はこれからの卒論問題の示唆となろう。

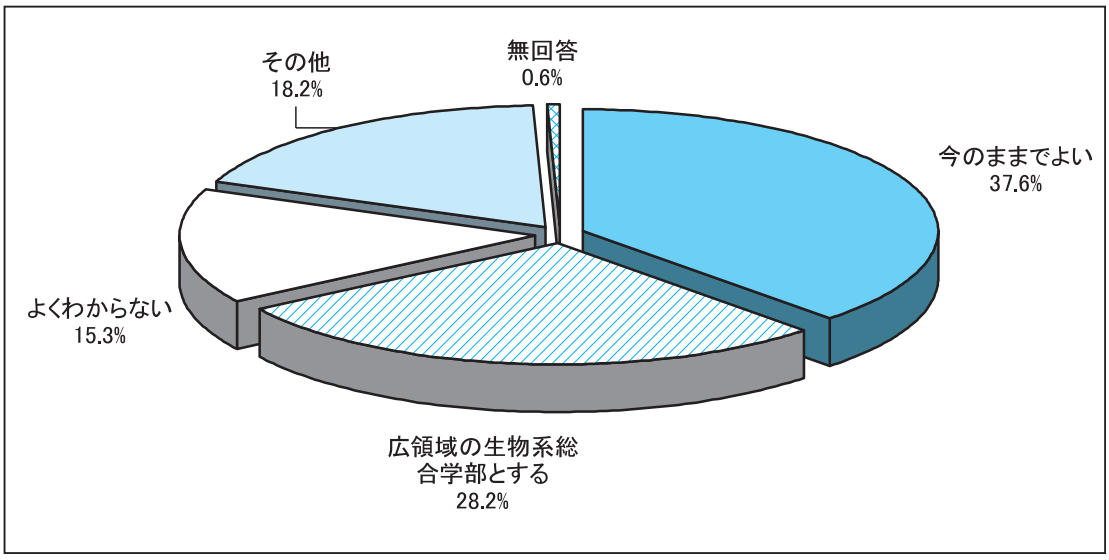


図Ⅱ―4―2―5　卒業論文のあったことをどのように評価していますか。

Q41は、実験・実習の授業に関する設問であるが、「講義よりおもしろい」が44.7%の回答であり、「実験・実習がもっとあってもよい」という意見も36.5%と高い数値を示している。獣医学科の在学生に多かった「時間が長いので大変だ」という回答は10%と低値であった。「専門の学習で最も身に付いたものは、どういう形であったのか」という設問に対しても一番多かったのが「実験・実習」(37.6%)であり、卒業生の実験・実習に対する評価はかなり高いことがわかった。また、実験・実習の設備に関しては、「まあまあである」と評価している卒業生が42.4%いるものの、「不満である」と回答した卒業生も35.9%とかなり多かった。実験・実習に関わる設備の充実も大きな課題の一つである。

4．今後の展望について

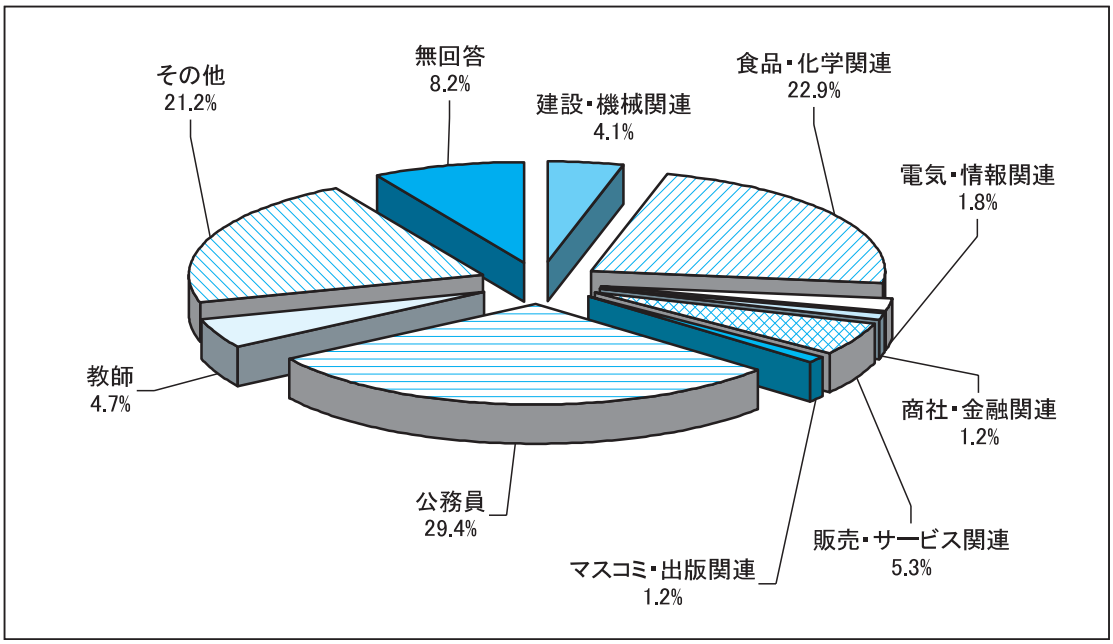
Q46は、「将来鳥取大学農学部は、どのような方向に向かったらよいと思いますか」という設問に対する卒業生の回答である。「今のままでよい」とする意見が37.6%であり、「広領域の生物系総合学部とする」は28.2%、「よくわからない」と「その他」を合わせると33.5%であり、具体的なイメージを持っている卒業生は少ないようである。また、「広領域の生物系総合学部となるならば、それにふさわしいと思う名称を選んでください」という設問に対しても「農学部のまま」という意見が半数近くあり、現状からの変革を在学生および卒業生を含めた農学部の関係者は望んでいないようである。



図Ⅱ―４―２―６　将来鳥取大学農学部（生物資源環境学科、獣医学科を含む全体）は、どのような方向に向かったらよいと思いますか。

大学院修士に対する卒業生の見解は、「農学技術の一分野の専門家を養成するためのコース」が 45.3％であり、「農学研究者を養成するためのコース」が 23.5％、「大学４年では十分なカリキュラムが組めないので、それを補完するためのコース」が 21.8％であった。そして、「大学院博士課程に進学することを希望しますか」という問いかけには「進学はしない」が 75.9％あったが、大学院博士課程は連合大学院であり、本学のみで「進学する予定である」が 5.3％あることは十分な進学率という考え方もできよう。

Q 45 は、将来希望する職業に関する設問であるが、「公務員」が 29.4％と一番多く、次が「食品・化学関連」の 22.9％であり、その他の職業に目立った数値は見られなかった。



図Ⅱ―４―２―７　あなたが将来希望する職業は、以下の業種のどれに近いですか。

第 Ⅲ 部

調査から現れた鳥取大学の教育課題

第１章　大学全体の課題

本年度の自己点検評価結果から、鳥取大学の教育改革の課題として次のことが言えるであろう。

Ⅰ．鳥取大学の情報の提供

前回の自己点検評価報告書でも指摘されていたように、「鳥取大学が好きだから」という志望理由がゼロに近いという事実は深刻であるとされていたが、今回の調査においても、その傾向は全く変わっていなかった。偏差値等の理由で志望大学を決定するという受験生の姿勢は以前より助長されているとさえ感じる結果であった。ただ、学部の選択理由として、前回の調査では5%程度であった「好きな学問分野や教員」という回答が１７％に増加していることである。また、「後輩に対して、鳥取大学への入学を勧めることができますか」という設問に対しては、在学生の 50%以上、卒業生の 70%近くが肯定的な回答を示している。これは大学及び各学部の情報提供の成果であると考えられないか、今後の推移をみまもりつつ検討していきたい。

Ⅱ．福利厚生施設を中心とした施設整備

大学への期待感についての調査では、「期待どおりである」と回答した学生の数値は「期待はずれである」と回答した学生の３分の１であった。ここ数年の本学に対する外部評価は、かなり高くなってきているにも関わらず、内部的な評価はあまり変化してきていないのが実情である。外部評価に対する詳細な検討・分析を行うと共に、内部的な課題についても真摯な対応が必要と思われる。特に、在学生、卒業生いずれもが問題ありと指摘したのが福利厚生施設の貧弱さであり、60%くらいの回答者がこの点を課題としている。福利厚生関係や冷房等の施設を含めた施設整備への対応が国立大学法人鳥取大学の大きな課題であることが示されている。

Ⅲ．全学共通教育の今後の課題

「あなたがよいと評価する授業」についての設問に対して、在校生も卒業生も 50%以上の回答が「学問内容をなるべく分かり易く噛み砕いて教える」という項目に集中している。そして、「授業内容が理解できなかった理由」として「自分の勉強不足」を理由として在校生の 44%、卒業生の 53%があげている。また、授業内容が理解できなかった場合の対応は「友人に尋ねた」が在校生（48%）、卒業生（46%）と 50%近くが友人を当てにしていることがわかる。「教室で質問した」や「授業後に先生に尋ねた」は２つ合わせても 15%程度であり、授業内容が理解できないときにも教員をあまり当てにしていない傾向が読み取れる。平成 13 年度のカリキュラム改革において、シラバスの充実という点も課題の１つであったが、シラバスの利用状況は「よく利用し、参考になる」と答えた在校生が卒業生に比べて 20%以上も多い数値を示しており、シラバスについては、改善の成果が認められている結果が示されている。

個々の教育科目の課題について分析すると、「大学入門科目」では、「大学入門ゼミ」は学部・学科によって授業内容が相当異なっているため、一律の評価は難しいが学生からは一定の評価がなされているようである。一方、「情報リテラシ」は工学部生からの不満が顕著に認められ、改善の必要性を感じるが、今後は新設の総合メディア基盤センターに期待したい。主題科目については、満足度調査の数値から言えば、多くの学生が半数以上の科目に満足しており、まずまずの評価と言えるが３割を超える学生が満足科目と不満科目

は半々であると答えており、学生が満足するような科目数を増やす努力が必要であろう。実践科目の英語科目において、「学ぶ意義」を認めている在校生はかなり多く、「読解力の向上」や「会話力の向上」については半数以上の学生が選択している。しかし、満足度調査では、16年度入学生からはやや改善傾向が認められるが、「不満」や「どちらともいえない」が過半数を超えていることは問題点として依然あげられる。初修外国語において、予想以上に在学生は「学ぶ意義」は認めているものの、卒業生からの「この科目を学ぶ意義はない」や「よくわからない」という意見を合わせると 30%を超えており、多様化や担当教員の努力により学生の評価は改善されているが、非常勤講師の問題など厳しい条件が今後予測される中、一層の創意・工夫が必要であろう。健康スポーツ科学実技に対しては、「健康の維持・増進」や「基礎体力の維持・向上」などを「学ぶ意義」としてあげており、「授業を学ぶ楽しさ」を多くの学生があげているのが特徴的な科目である。前回の調査時と同様に授業に対する満足度も 75%くらいの数値が示されている。専門基礎科目に対しては、「基礎学力の習得」や「専門科目のための知識の習得」が「学ぶ意義」としてあげられているが、医学部の卒業生からの「不満度」が 30%くらいの数値が示されている。今後この分野の担当教員の不足も懸念されていることから対応策を真剣に考える必要があろう。

第２章　各学部の課題

第１節　教育地域科学・地域学部の課題

Ⅰ. 教育地域科学部全体としての現状と課題

１．改組に伴う移行期の問題

教育地域科学部は、学部改組の嵐にもまれ、５年間といった極めて短期間の学部となった。教育学部から改組して平成 11 年４月に誕生した教育地域科学部は、「教育学」と「地域学」の複合学部としてユニークな存在であった。しかし教員養成学部の再編を求める動きはその後もとどまることなく、平成 16 年４月には、地域学部へと再び改組された。一時は、教育学部・教育地域科学部・地域学部の３つが併存するといった信じがたい状況が発生した。しかも改組のたびに、課程や学科に所属する教員のグループが異なる事態が生じ、移行期特有の問題が発生した。つまり新設学部には教員の目が行き届くものの、旧学部に対してはしばしば関心が薄れがちである。５年という短期間のうちに、２度も学部改組が行われ、一番翻弄されたのが教育地域科学部といえる。

不本意入学の割合を、卒業生（新学部設置直後に入学）と在学生とで比較してみると、新学部設置直後の学生には不本意入学の割合が極めて高いことがわかる。つまり、地域科学課程の６割を筆頭に、地域政策課程では４割、学校教育課程で３割、最も少ない人間文化課程ですら２～３割を占めていた。新課程である地域２課程で、特に高い。しかし数年が経過した在学生でみると、いずれの課程も不本意入学は２割弱にまで減っている。地域学部においても１年目は同様の傾向が確認された。

２．志望動機と大学への期待

教育地域科学部への志望動機には、２つの傾向が認められる。「将来、教職を目指したいから」とする教育２課程と、「将来、地域に関わる仕事に就きたいから」あるいは「幅広く色々な学問が勉強できるから」とする地域２課程である。志望動機で見ると、人間文化課程は他課程と比べ、明らかに高い意識を示す学生が多い。

大学に期待していることとしては、「専門的な知識を身につける」と「社会人になったとき、すぐに役立つ知識・技術・技能を身につける」が半数以上を占め、次いで「広く教養を身につける」や「各種の免許や資格を取得する」ことがあがっている。学生はすぐに役に立ちそうな知識を期待している傾向が強い。一方、教員側が期待している「学問に対する取り組み方法を身につける」ことへの期待度は、学生にはほとんど見受けられない。この点は大学教育の意義やあり方をめぐる大きな課題と指摘できる。

社会人として長い間活躍するためには、大学時代に学び方を身につけておくことが、大変重要である。将来問題に直面した際、その問題を解決する力は、「大学時代に学んだ知識」よりも、むしろそれぞれの問題に即して「自ら学び考えることができる能力」に依存する。このことを、学生に充分理解させる必要があろう。

３．学び方、授業への取り組み方

教育地域科学部での勉学に全般的に満足しているかどうかは、教育２課程で満足度がやや高く、地域２課程でやや低い。勉学の満足度と関連するひとつに「授業のわかりやすさ」がある。教育地域科学部の授業は、「わかりやすい」ものの方が比較的多いが、

今後も教授方法の改善努力を続けていかなくてはならない。大学で学ぶ意義のひとつとして、「小骨がのどに刺さった状態を如何に多く作り出すか」であるとの指摘を、最近新聞で読んだ（内田樹，朝日新聞 2005 年 5 月 30 日）。小骨が刺さることによって、何とか消化しようと努力を払うことになるし、小骨が刺さって気になっていると、周りにあふれている無数の情報から関連するものを適格につかむ機会が増える。大学の教育は、個々の学生が卒業後に小骨を消化できた時に、はじめて完結する、といった趣旨であったと記憶する。「分かりやすい」講義であると同時に、学生の心にいつまでも疑問点が残るような内容レベルも要求される。

大学での満足度は、教員と学生の関係にも関連している。地域政策課程は、他の課程と比べ学生と教員の関係がやや希薄であるようだ。課程全体あるいは学級教員を中心として、学生支援にさらなる努力が求められる。しかし、地域政策課程（教育地域科学部）から地域政策学科（地域学部）への改革で、教員メンバーが大きく入れ替わった点に、問題解決の難しさが残る。

さて、少人数教育に関しては、「３人以上 10 人以下のものが最も学習意欲が高まる」と多くの学生が感じており、「そのような授業の機会を増やして欲しい」と学生は表明している。質の高い教育の提供として、今後も配慮すべき点である。

学生自らの学び方としては、積極的に取り組んでいる学生が７割で、残り３割の学生に勉学への動機付けをいかに行うかが課題である。特に、１年次の早い段階での動機付けが望まれ、それにはカリキュラムの変更も一つの方策であろう。学校教育課程と人間文化課程では、「大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」が、一方、地域政策課程と地域科学課程では、「専門の学問体系について学べる概論」が、それぞれ１年生のカリキュラムとして望まれている。

４．学生支援システムの評価

学級教員やチューター制度に関しては、課程毎に学生の感触が異なる。地域科学課程では６割以上が有用性を指摘している。地域科学課程では、課程全体で学級教員の役割などを検討し、学級教員が学生に積極的に働きかけることで、低学年時の学生との窓口あるいは相談役としてうまく機能している現れである。

ガイダンスやオリエンテーションについても、多くの学生が、よりきめ細かい対応を希望している。「掲示だけで理解せよ」といった態度では、現在の学生には伝わらないのであろうか。しかし、あまりにも手取り足取り状態になると、逆に「支持待ち人間」を育成することにならないか、といったことも懸念される。「支持待ち人間」では、社会に出たら役に立たない。

授業評価アンケートが毎年粛々と実施されている。しかし「教員の参考になっていない」との意見が多く、授業評価アンケートに対してマイナスのイメージが確立している。全学で大至急改善に取り組むまないと、授業評価アンケート実施の意味がなくなる。さらに、カリキュラム等は学科毎に大きく異なるわけで、きめ細かいアンケート調査は学科毎に実施されるべきであろう。分析結果を基に、カリキュラムや授業方法について、学科内で真摯に話し合いが行われるべきである。

５．進路希望にあった学部の対応

課程毎に進路希望は大きく異なる。学校教育課程を中心とする「教員志望」グループ、地域政策課程を中心とする「公務員志望」グループ、そして人間文化課程と地域科学課

程を中心とする「民間企業志望」グループである。教員採用試験講座や公務員試験講座などの情報は、学生に確実に伝わり、受講生も増えている。地域政策学科では学生の自主ゼミも始まった。民間企業に関しては、就職先を広げる努力が学部、課程に求められている。学生が学部に期待することとして、「多様な資格が取れること」が最頻である。しかし、多くの資格はキャリアーがともなってはじめて有効であることを伝え、資格を取るためのエネルギーを大学での勉学に向け、知力を養うよう指導すべきである。その方が就職には有利であると、学生に充分に理解させる必要がある。

Ⅱ．地域学部全体としての現状と課題

１．改組に伴う移行期の問題

地域学部は、教育地域科学部から改組して平成 16 年４月に誕生した。教育地域科学部は、教育学部が改組されて平成 11 年４月に設置された「教育学」と「地域学」の複合学部であった。しかし、教員養成学部の再編を求める動きはその後もとどまることなく、地域学部へと改組が進んだ。一時は、教育学部・教育地域科学部・地域学部の３つが併存するといった信じがたい状況が発生した。しかも改組のたびに、課程や学科に所属する教員のグループが異なる事態が生じ、移行期特有の問題が発生した。つまり新設学部には教員の目が行き届くものの、旧学部に対してはしばしば関心が薄れがちである。地域学部の本アンケート調査は、１年生のみが対象であった。

不本意入学の割合は、驚くほど高い。地域政策学科で 36%、地域教育学科で 47%、地域文化学科で 46%、地域環境学科に至っては 73%に達する。新学部設置直後の学生には、不本意入学の割合が極めて高い状況が発生するものの、この値は尋常ではない。この事実を厳粛に受け止め、入学後いかにして学生の勉学意欲をかき立てるかが、真に問われている。また今後も追跡調査が必要である。

２．志望動機と大学への期待

地域学部への志望動機には、「将来、地域に関わる仕事に就きたいから」や「将来、教職を目指したいから」が優勢であった。ところが、地域環境学科では、「地元の大学であり、自分の専攻したい学問がよくわからなかった」「どこでもよいから大学に入り、４年間の大学生活を楽しみたかったから」「高校教師が勧めるので何となく」といった消極的な理由が、４割弱であった。大学へ進学する目的意識の低さが、不本意入学にも影響しているようだ。

大学に期待していることとしては、「専門的な知識を身につける」と「社会人になったとき、すぐに役立つ知識・技術・技能を身につける」が半数近くを占めている。学生はすぐに役に立ちそうな知識を期待している傾向が強い。一方、教員側が期待している「学問に対する取り組み方法を身につける」ことへの期待度は、学生にはほとんど見受けられない。この点は大学教育の意義やあり方をめぐる大きな課題と指摘できる。

社会人として長い間活躍するためには、大学時代に学び方を身につけておくことが、大変重要である。将来問題に直面した際、その問題を解決する力は、「大学時代に学んだ知識」よりも、むしろそれぞれの問題に即して「自ら学び考えることができる能力」に依存する。このことを、学生に充分理解させる必要があろう。

３．学び方、授業への取り組み方

地域学部での勉学に全般的に満足しているかどうかは、地域政策学科のみが満足度が

高く、他学科は不満足度の方が高い。勉学の満足度と関連するひとつに「授業のわかりやすさ」がある。地域教育学科の１年生向け授業では、わかりにくい授業が多いとの回答が半数近くを占めた。このことが、勉学への不満足度の高さに反映している可能性がある。1年生向け講義のあり方を検討する必要を感じる。

一方、大学で学ぶ意義のひとつとして、「小骨がのどに刺さった状態を如何に多く作り出すか」であるとの指摘を、最近新聞で読んだ（内田樹，朝日新聞 2005 年 5 月 30 日）。小骨が刺さることによって、何とか消化しようと努力を払うことになるし、小骨が刺さって気になっていると、周りにあふれている無数の情報から関連するものを適格につかむ機会が増える。大学の教育は、個々の学生が卒業後に小骨を消化できた時に、はじめて完結する、といった趣旨であったと記憶する。「分かりやすい」講義であると同時に、学生の心にいつまでも疑問点が残るような内容レベルも要求される。

さて、少人数教育に関しては、「３人以上 10 人以下のものが最も学習意欲が高まる」と多くの学生が感じており、「そのような授業の機会を増やして欲しい」と学生は表明している。質の高い教育の提供として、今後も配慮すべき点である。

学生自らの学び方としては、積極的に取り組んでいる学生が６割近くを占めるものの、「自分の興味・関心に従って学ぶ」や「ある特定の学問領域を深く掘り下げて学ぶ」姿勢は、２割に満たない。１年生の特徴であろう。勉学に消極的にしか取り組んでいない４割の学生に、勉学への動機付けをいかに行うかが課題である。特に１年次の早い段階での動機付けが望まれ、それにはカリキュラムの変更が望まれる。地域政策学科では、半分近くが「大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」を求め、地域教育学科では、「現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目」や「専門の学問体系について学べる概論」が、地域文化学科では、「大学教員と親しく語り、学び方を学ぶ少人数形式のゼミ」が、地域環境学科では、「専門の学問体系について学べる概論」が、それぞれ１年生のカリキュラムとして望まれている。カリキュラム検討時の参考としたい。

４．学生支援システムの評価

学級教員やチューター制度に関しては、学部全体としては有用性を感じている回答が14%を占め、感じていない回答が 25%におよんだ。「その他」「無回答」が 25%あり、回答内容が把握できない点は残念である。１年生こそが、学級教員やチューター制度の恩恵を最も被ると思われるが、高校までの学級教員と比較してしまうためか、有用性の回答は意外と少ない。

ガイダンスやオリエンテーションについても、多くの学科の学生が、よりきめ細かい対応を希望している。「掲示だけで理解せよ」といった態度では、現在の学生には伝わらないのであろう。しかし、あまりにも手取り足取り状態になると、逆に「支持待ち人間」を育成することにならないか、といったことも懸念される。「支持待ち人間」では、社会に出たら役に立たない。

授業評価アンケートが毎年粛々と実施されている。１年生で１回しか経験していないので、「わからない」が半数近くを占めることはしかたがない。しかし、「教員の参考になっていない」との意見が次に多く、授業評価アンケートに対してマイナスのイメージが強い。全学で大至急改善に取り組まないと、授業評価アンケート実施の意味がなくなる。さらに、カリキュラム等は学科毎に大きく異なるわけで、きめ細かいアンケート調査は学科毎に実施されるべきであろう。分析結果を基に、カリキュラムや授業方法につ

いて、学科内で真摯に話し合いが行われるべきである。

５．進路希望にあった学部の対応

学科毎に進路希望は大きく異なる。地域政策学科を中心とする「公務員志望」グループ、地域教育学科を中心とする「教員志望」グループ、そして地域文化学科と地域環境学科を中心とする「民間企業志望」グループである。それぞれのグループに見合った就職情報の提供が望まれる。地域政策学科では、学生の自主ゼミも始まった。民間企業に関しては、就職先を広げる努力が学部、学科に求められている。その際、教育学部の時代の学生は、圧倒的多数が地元の学生であった。教育地域科学部を経て、さらに地域学部となり、現在では他府県からの学生が圧倒的多数を占めるに至った。当然、就職先も広域におよぶと期待される。中四国・関西圏を視野に民間企業の就職先を開拓する必要がある。

学生が学部に期待することとして、「多様な資格が取れること」が最頻である。しかし、多くの資格はキャリアーがともなってはじめて有効であることを伝え、資格を取るためのエネルギーを大学での勉学に向け、知力を養うよう指導すべきである。その方が就職には有利であると、学生に充分に理解させる必要がある。

第２節　医学部の課題

Ⅰ. 平成 12 年度の大学教育調査以後の医学部のカリキュラムの改革

平成 12 年度の大学教育調査の結果は、平成 13 年発行の「鳥取大学の現状と課題」にまとめられている。その後、保健学科の設置や医師養成に関する医学教育の改革が起こり、医学部のカリキュラムを改変した。

医学部の教育カリキュラムを円滑に運営し、新カリキュラムの改革を図るため、平成 14 年には学部内措置として教育支援室を設置した。平成 17 年４月現在、室長（兼務）を中心に、専任教官３名を配置し、学務・研究課教務係と連携をとりながらカリキュラムの運営にあたっている。

今回の調査対象となった医学科の学生は、新カリキュラム、旧カリキュラム、旧々カリキュラムで履修したものが混在しており、それぞれのカリキュラムに対する評価は難しい。しかしながら、個々のカリキュラムの欠点については、カリキュラムの変更によって徐々に解決されてきている。

Ⅱ. 教養教育の改革

平成 13 年度より、従来行われてきた一般教育科目を全学共通科目とする改革が行われた。この改革に伴い、一般教育科目を構成していた教養科目、共通基礎科目、専門基礎科目の区分が、全学共通科目では大学入門科目、主題科目、実践科目、専門基礎科目という区分に変更された。この改変では、大学入門科目の中に大学入門ゼミが新たに導入され、従来の教養科目は主題科目として開講されることになった。また、共通基礎科目の中の第一外国語と第二外国語は、実践科目の英語とドイツ語・フランス語などに変更された。

平成 15 年度からは入学者全員にノートパソコンを必携とし、コミュニケーション英語の授業が実施された。

医学科では、平成 13 年度から基礎生物学を必修とした。学生の生物学に対する知識が乏しく、専門科目が理解できない学生が見受けられたことに伴う変更である。また、平成 14 年度から米子キャンパスで医学部の教員による医学英語（専門基礎科目）の授業を開設した。平成 18 年度からは、専門基礎科目であった医学英語を実践科目の医療英語へと科目名の変更を行い、引き続き米子キャンパスで医学部の教員による授業を行う予定である。この授業は、実践的な医学英語教育の充実を望む声に応えたものである。

医学部では医師、看護師・保健師、臨床検査技師などの資格取得の教育は、法令上の制約のもとに置かれている。従って、全学共通科目という「くくり」は、資格取得の教育カリキュラムには適していない。後述するように、医師養成における教養教育では、「準備教育モデル・コア・カリキュラム」が提起されたが、一部の科目を除いて対応ができていないのが現状である。今後の教養教育についてはさらなる検討が必要である。

Ⅲ. 教員の教育能力の開発と教育活動の評価

平成 14 年度後期から、後述する「21 世紀における医学・歯学教育の改善方策について－学部教育の再構築のために－」と題する答申に基づいて、授業評価アンケートを実施した。授業評価アンケートは全学的にも実施されているが、答申と医学部の実情を勘案して独自のアンケート調査を実施している。回答者に責任を持たせるために記名アンケートとし、アンケートの結果は学生の名前を匿名として各教員にフィードバックしている。さらに、全体の集計結果は学生、教員、事務職員に公開している。

医学科では、カリキュラム改革の必要性を共有し、教育能力の向上を図るためにＦＤを随時開催してきた。平成 12 年度には、医学における教育プログラム研究・開発事業委員会の佐藤達夫委員長（東京医科歯科大学医学部長）をお招きして、「21 世紀の医学教育」についてご講演いただき、討論を行った。また、平成 15 年度には、医学部のカリキュラム担当教員によって、「医学教育のためのＦＤ研修会」を実施した。

さらに、平成 13 年度からは、共用試験問題の作成もかねて、良問を作成するための講習会を開催している。講習後はお互いに作成した問題を持ち寄り、グループに分かれて、相互評価のもとにさらに問題をブラッシュアップするという、数週間にわたるＦＤを毎年開催してきている。

このようなＦＤ研修会は、これまでは医学科で実施されてきたが、今後は生命科学科や保健学科でも教育能力の開発に関するＦＤが開催されることが望まれる。

IV. 医学科、生命科学科、保健学科の 3 学科コンビネーション教育

医療人育成の目標には職種間での重なりが大きい。相互乗り入れ、多学科の学生の合同講義は、この目標の達成のために重要で、学科間の教員の相互乗り入れや合同講義を実施してきた。

現在、米子キャンパスでは医学科と生命科学科の間、生命科学科と保健学科との間で、教員の相互乗り入れや学生の合同講義が実施されている。

コンビネーション教育は理念としてはすばらしいものであったが、現実問題として、講義室の確保、各学科における試験期間の調整、講義日数と単位の考え方の相違、学科の教育の一貫性に欠けるなどの問題点も出てきている。いったんコンビネーション教育をカリキュラムに導入してしまうと、各学科のカリキュラム改革がスムーズに進まないなどの弊害も出てきている。しかるべき時期に、コンビネーション教育の再評価を行う必要があろう。

V. 新しい医学教育カリキュラム

医学は専門細分化しており、教育すべき内容も飛躍的に増大している。今回の調査で、医学部カリキュラムの過密度の質問に対して、「過密と思う」と答えたものは、医学科が 59.4% 、生命科学科が 16.3%、保健学科（看護）が 74.3%、保健学科（検査）が 47.3% であった。「比較的余裕がある」と答えたものや「過密と思う」と答えたものは前回の調査より減少しており、カリキュラム改革の成果が現れてきているのかもしれない。保健学科（看護）では、「過密と思う」と答えたものが極めて多いが、平成 17 年度にカリキュラム改正を行っている。今後の推移を見守りたい。

医学部全体における新しい医学教育の動向として以下の三点を挙げ、各学科固有のカリキュラムの変更については後述する。

・シラバスの充実

医学部では、教育改革の一環としてシラバスの充実を図った。医学部の授業にはオムニバス形式をとるものが多く、教員間や科目間の連携が薄いきらいがあった。すべての授業について、講義日ごとの授業内容、到達目標、授業のキーワードを挙げ、授業内容の重複を防止するとともに、どの科目でどのような授業が行われているのかが、教員・学生に周知徹底させることを目指した。この試みは、医学科では平成 13 年度から実施し、平成 16 年度からは医学科・生命科学科・保健学科のすべての学科で実施されている。

・早期体験実習

医学科では、平成 15 年度まで２年次に「ボランティア医学実習」、「早期体験」を附属病院で実施した。平成 16 年度からは同じく２年次に「ボランティア医学実習」を保育園、「早期体験」を附属病院で実施した。平成 17 年度は１年次に「ヒューマン・コミュニケーション」が開講されたが、２年次以降の実習内容については現在検討中である。

保健学科では、１年次に「初期体験・ボランティア」を開講し、病院・老人保健施設での体験実習を実施している。

・ チューター(特別指導教員)制度

これまでも、医学科では成績不良の学生に対してチューター制度を設けてきたが、入学時より学生 10 名当たり１名のチューター教官を配置する制度に変更した。保健学科では留年学生に対してチューター教官を配置して、対応にあたっている。

１．医学科におけるカリキュラムの変更

・医学教育の改革の波

医学教育の改革の動向として、「医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議」が平成 12 年３月 27 日に「21 世紀における医学・歯学教育の改善方策についてー学部教育の再構築のためにー」と題する答申を出し、これからの医学教育に関する指針が示された。この中には、モデル・コア・カリキュラムとして、医学教育モデル・コア・カリキュラムと準備教育モデル・コア・カリキュラム、診療参加型臨床実習の実施のためのガイドライン、教員の教育業績評価ガイドラインが含まれている。それとともに、臨床実習に入る前の医学生の保証要件として、共用試験が実施されることが明らかにされた。

共用試験は、コンピューターを用いた CBT(computer based testing)と OSCE (objective structured clinical examination)からなり、知識ばかりでなく、医学生の臨床技能や医療面接などの資質を見ようとするものである。

医学教育モデル・コア・カリキュラムが策定された背景には、これまでの「基礎医学」「社会医学」「臨床医学」という枠を打破し、講座単位での授業をやめて、講義中心の一方的な知識伝授型の医学教育から、学生が自ら問題点を見いだしてそれを解決する能力を養う問題解決型の医学教育への変換を図る意図がある。

さらに、臨床実習においても、従来の見学型の実習から、学生の医行為を伴う診療参加型実習への変換を促し、多くの大学で行われてきた臨床診療科を均等に回る実習ではなく、内科、外科、産婦人科、小児科、精神科、救急医学などの重点診療科を回り、残りの科は選択実習とすることが提言された。

このような医学教育改革の波は、全国の医系大学に及び、鳥取大学医学部医学科では、新カリキュラム検討委員会を平成 12 年６月に立ち上げ、２週間に１回の割合で、朝７時 30 分から８時 30 分まで開催し、新カリキュラムの策定に入った。臨床の教員は診療業務があり、日中は十分な時間がとれないため、早朝開催としたものである。

全国的なカリキュラム改革の動向調査を参考に、本学独自のカリキュラム改革の準備に入り、平成 13 年度入学者よりコア・カリキュラムをもとに策定した新カリキュラムを導入し、平成 17 年度現在で、５年次まで進行中である。

・カリキュラム変更の要点

基本的に医学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠して、新カリキュラムを立案した。基本的な考え方は、従来通り１年次は湖山キャンパスでの一般教育、２年次以降は

米子キャンパスでの専門教育を行うこととした。他大学では膨大な医学知識の習得に当たり、１年次から専門教育を導入しているところが多いが、本学ではキャンパスが離れていることもあって、１年次からの専門教育の導入は不可能である。以下、主な変更点について述べる。

・前・後期制と単位制の導入

従来、医学科では３学期制で授業・実習が行われてきたが、カリキュラムの変更を機会に前・後期制を導入した。また、他学部や他学科との整合性を持たせるため、従来の時間制から単位制へと変更した。しかしながら、単位制そのものは医学教育になじまない面が多く、時間数を単位に置き換えただけの変更にとどまらざるを得なかった。

・一部の授業に選択制を導入

先端医学特別講義１、２などに選択制を導入し、学生が興味を持った授業をより深く学ぶことができるようにした。この選択授業は少人数での開講も可能で、ゼミ形式の授業を行うことができるようになった。

・器官別カリキュラム

これまで専門医学は各講座別に授業されてきた。これに対して呼吸器系、循環器系、神経系などの各器官ごとに、解剖、生理、病理、症候、診断（画像診断も含む)、治療について、基礎医学教員と臨床医学教員がチームワークで授業したほうが学生に理解されやすいのではないかという考えがあり、いくつかの大学で実践されてきた。提示された医学教育モデル・コア・カリキュラムもまさにこのような概念に基づくものであった。基礎と臨床の講義を統合して、器官別の講義体系を作り上げるのはかなりの改革であり、本学の現状では無理がある。従って、基礎系と臨床系の講義を別々に器官別に組み立てて、カリキュラムを作成することを考えた。例えば、消化器の講義では、基礎消化学と臨床消化学の二本立てとし、前者には従来の解剖学、生理学、薬理学などを、後者には消化器系の内科学、外科学、診断学などを配置した。基礎○○学は主に３年生の、臨床○○学は主に４年生の授業とした。このような器官別カリキュラムでは、教育支援室およびコーディネーターの果たす役割が大きい。Web シラバスを作成して、各教員にはどのような授業を行っているのかが分かるようにしているが、まだ十分に生かされていない面も多い。

・チュートリアル教育

チュートリアル教育とは、一定期間継続して、教員が特定の学生を個別に指導する形の教育の総称である。チュートリアル教育の要点は、少人数のグループで問題解決型の学習をさせることにある。呈示された症例に対し、問題点を抽出し、自学自習して発表するというプロセスを経る能動的学習である。教員は学生に勉強の方向性を示し、大学は学習の場と教材を提供する。

鳥取大学医学部医学科では、平成 12 年９月 29 日にチュートリアル教育の先進校である岐阜大学医学部のチュートリアル教育の現場を視察し、チュートリアル教育に必要な組織・施設を検討した。現在、基礎医学チュートリアル、社会医学チュートリアル、解剖・病理・画像診断チュートリアルを正規の授業科目として実施するとともに、臨床医学においても一部チュートリアル教育を実施している。

・臨床実習

従来の臨床各科を２週間で回る見学型実習（38 週）を、医学教育モデル・コア・カリキュラムで提唱されたコアとなる臨床科に重点を置いた臨床実習に変更した。コア以外の臨床科は、モデル・コア・カリキュラムで示されたように選択制として実習するこ

とを検討したが、短期間であってもすべての臨床科の実習を行うべきとの声が多く、臨床実習期間に強弱を付けながら、すべての科を回らせることを基本とした。さらに、実習後半には選択制を導入して、学生の希望に応じてアドバンスの臨床実習を行うこととした。その結果、コア科 10 科で 26 週、コア以外 11 科 10 週の実習に変更し、選択した 3 科を各 2 週の選択実習と併せ全 42 週の実習となった。

今後の課題として、医療事故防止（感染含む）、医療情報の取り扱い、指導体制の確立、学外実習などの点についてさらに検討していく必要がある。

・クリニカル・クラークシップの導入

一定の条件の下で「医学生の医行為」が認められたことに伴い、各大学はクリニカル・クラークシップを導入してきた。クリニカル・クラークシップとは、医学生が医療チームの一員として、実際の患者診療に従事しながら臨床実習を行い、指導医の指導あるいは監視のもとに、許容された一定範囲の医行為を行うもので、将来、医師となるために必要な知識、技能および態度・価値観を身につけさせるのが目的である。

本学では導入は遅れたが、平成 17 年度より導入することが決定し、本学における医行為水準表を作成した。

・OSCE の導入

OSCE (objective structured clinical examination)は、臨床能力を客観的に評価することができる方法で、クリニカル・クラークシップに入る学生の資質の判定に欠かせない。平成 13 年度、14 年度は、学内 OSCE トライアルを実施し、平成 15 年度より共用試験実施機構による全国トライアルに参加してきた。

平成 15 年度までは旧カリキュラムであったため、臨床科目の講義時間延べ 27 時限を振替え、講義、演習、実習を実施した後、OSCE トライアルを実施した。

平成 16 年度からは、新カリキュラムの「臨床実習入門／診断学チュートリアル」（42 時限）で基本的臨床能力の習得のための授業を行い、共用試験最終 OSCE トライアルを実施した。

2．生命科学科におけるカリキュラムの変更

・寄附講座「ゲノム医工学講座」の新設

平成 13 年 4 月、キリンビール株式会社による寄附講座「ゲノム医工学講座」が生命科学専攻大学院講座として設置され、大学院における企業との連携研究に関する講義、指導を充実させた。平成 18 年 3 月に寄附契約が終了するが、この講座の生命科学科教育における役割や、教育内容の社会還元に関する役割は大きく、その後の本講座化が切に望まれている。

・大学院独立専攻「医学系研究科機能再生医科学専攻」の設置

平成 15 年 4 月に、生命科学科の一部の教員と医学科の一部の教員とによって、大学院独立専攻「医学系研究科機能再生医科学専攻」が設置された。生命科学の基礎研究と臨床医学が連携し、トランスレーショナルな研究・技術開発を目指し、学生を指導する組織として発足し、その実績を上げている。

・大講座制への移行

平成 16 年 4 月より、生命科学科 6 講座、および寄附講座は、カリキュラムの改革に柔軟に対応するため、2 大講座（分子細胞生物学講座、生体情報機能学講座）と寄附講座とに改組した。それによって、大講座内により学部教育を実施することで、カリキュラムの効率化、改革への柔軟な対応を可能にした。

・相互乗り入れ・合同講義の教育プログラム

現在の医療技術は、医師と医療技術者との連携によって飛躍的に進歩した。これらの共同医療技術を教育の場で実践することはきわめて重要である。これまで医学科と生命科学科の間の教員の相互乗り入れ、両学科の学生の合同講義はすでに実施されていた。平成13年4月より、生命科学科と保健学科との間の教員の相互乗り入れ、両学科の学生の合同講義が開始された。

・「機能再生医科学概論」の開設

平成16年4月より、医学系研究科機能再生医科学専攻教官による、「機能再生医科学概論」を開設した。独立専攻の設置に伴い、機能再生医科学専攻大学院へ進学を希望する学生に対応するため、当専攻の研究内容を概論する科目を設置した。

・「構造生物学・バイオインフォマティクス」の開設

平成16年4月より、パソコン必携の学生の進級に伴い、講義室に学生用情報端末の設置が実現し、学生が個人用パソコンによってインターネットを始め、各種の情報教育を受けることが可能になった。生命科学科では、これまで実現が困難であった、コンピューターによる生命情報処理教育を実施するため、分子構造をシミュレーションする「構造生物学」と大量の生命情報を処理する「バイオインフォマティクス」を組み合わせ講義として、新科目を設置した。これらの科目は、飛躍的に発展する生命科学の新分野を教育するカリキュラムである。

3．保健学科におけるカリキュラムの変更

保健学科では平成15年度に第1期生が卒業したことに伴い、平成15年8月に看護学専攻指定校変更承認申請を行い、カリキュラムの見直しを実施した。

カリキュラム検討委員会を設置し、鳥取大学、医学部、保健学科それぞれの基本理念や教育目標に照らし合わせながら、平成16年度からの新カリキュラム編成に当たった。修正の概要を以下に列記する。

・1年次講義の増加による2年次以降のカリキュラム過密化の軽減

1年次湖山地区の講義に以下の科目を追加した。

1）「人体の構造と機能」、2）「健康と生体情報」、3）「リハビリテーション概論」、4）「人間発達と健康論」 5）「保健統計論」

・科目の新設

従来のカリキュラムをコア・カリキュラムに当てはめ、その過不足を新しいカリキュラムに反映させた。新設科目は以下の通りである。

「保健統計学」、「看護研究方法論」、「家族看護演習」、「看護倫理」、「死生学」

・生命倫理に関する講義の増大

科学の発展に伴って、重要性が増大してきた生命倫理に関する講義を拡大し、以下のとおり再調整した。

1年次「生命倫理」、「看護学概論」

2年次「コミュニケーション論」、「カウンセリング」、「臨床心理学」

4年次「看護管理」、「死生学」

・授業時間、および講義科目名の変更

1）「生命維持と免疫」 3年次前期から2年次前期へ

2）「病気と病理（病理学）」 2年次後期から2年次前期へ

3）「病気と微生物」 2年次後期から2年次前期へ

４）「周産期医学」２年次後期から２年次前期へ
５）「医学概論」を「保健医療概論」に変更
６）「脳の老化」を「老年医学」に変更

・廃止、あるいは縮小科目
１）「老人福祉論」、「障害者福祉論」、「児童福祉論」の廃止
２）「社会福祉言論」の縮小（60 時間から 30 時間）

Ⅵ．各学科の課題

１．医学科の課題

「医学教育モデル・コア・カリキュラム」は、カリキュラム全体の６割程度の時間数で履修させ、残りの４割程度は学生が余裕をもって自主的に選択できるよう各大学の特色あるカリキュラムを編成することが求められている。しかしながら、本学では専門教育が行える環境は米子キャンパスに限られており、米子キャンパスでの過密なスケジュールを強いられている。さらに、卒後臨床研修の義務化に伴い、医師国家試験の実施日程が繰り上げられ、従来の６年次における教育期間は大幅に縮小された。

医学教育の改革は、現在各大学が真摯に取り組んでいる大きな課題であり、本学においてもその流れに逆らうことは許されない。６年一環教育を円滑に進めるためにも、湖山キャンパスでの教育を根本的に見直すことが急務である。

今回の調査では、卒業後に研修したいところについては、鳥取大学附属病院および県内の医療機関と答えたものが極めて少なく、このままでは大学附属病院の存続そのものが危ぶまれる。魅力ある教育を実施するのは言を待たないが、卒前教育と卒後教育を一体して考えるべきであろう。そのためにも、平成 17 年度から学部内措置として設置が予定されている総合医学教育センターが、今後果たすべき役割は大きい。

２．生命科学科の課題

医学部の中に設置されたバイオサイエンス教育機関としての生命科学科は、全国的にもユニークな存在であり、分子レベルでの生命現象の解明と新しい医療技術の開発に対する学生のモチベーションは非常に高い。これらの学生の学習意欲に対して、十分なカリキュラムが提供できているかどうかや、その目的性にあった学習目標が達成できているかは、重要な問題である。今回のアンケートが示すように、医学系科目によせる期待に対する距離感を感じている学生が多い。職業教育としての医学教育と研究者養成教育を中心とする生命科学教育との温度差を学生は感じているし、教育者はそれを埋める努力を必要とされている。さらにこのモチベーションを維持し続けるための恒常的な刺激（実技・実習や外部研究者による特別講義、研究会など）を効果的に低学年より開始する必要があるが、距離的、設備的、経済的、人的障壁の前に断念せざるを得ないのが現状であり、早急に改善策を講じる必要がある。

発展し続ける生命科学の新分野に対応するため、さらにパソコン必携学生への対応として、これまでに生命科学系科目の中に新しいカリキュラム「ゲノム医工学」、「遺伝子再生医療学（機能再生医科学概論）」、「構造生物学」、「バイオインフォマティクス」を新設してきた。さらに、免許や資格試験免除などの特典がない生命科学科卒業生や学生の中から、教員免許取得のための科目の開設を求める声も多い。しかし、教員免許の将来的なあり方の検討が進む中、人材確保の困難性、開講のための時間数の不足など、科目新設に向けての道程は遠いようである。一方、生命科学科学生の就職先の一つである

製薬企業に向けてのカリキュラムの不足が指摘されている。また、学生の自発的な学習を支援するための、グループ学習室の確保が必要である。生命科学実習におけるグループレポートの作成やグループ課題研究、セミナーにおける論文抄読など、自発的な学習、チュートリアル教育の開設が計画されている。

３．保健学科の課題

今回の「大学教育に関する調査」中間報告の解析から、保健学科の課題として以下の項目があげられた。なお、その一部については、次項に述べるごとく、平成16年のカリキュラム変更にて、すでに対応がなされている。

１年次の教育において専門科目を増やし、２年次以降のカリキュラムにおける過密化を解消しつつある。カリキュラムが過密であれば、必修科目単位を１科目でも取得できないと、学生は留年せざるを得なくなる。例えば、２年次に１科目単位認定されなかった学生を３年次に進級させると、３、４年次のカリキュラムに空き時間がないため、２年次の不認定科目の受講が不可能になる。留年学生は翌年に単位取得することだけが在学の目的となり、単位取得に無関係の半期は休学処置を取る結果を招くことになる。従って、専門科目をもっと１年次に移して２年次以降のカリキュラムに余裕を持たせることが必要で、湖山キャンパスにおける教育内容の再検討が急がれる。また、取得単位数の軽減や必修・選択科目の再調整が今後必要である。

医学系講義についての理解度を向上させる必要がある。両専攻ともに、実習、演習が必修化されていて多くの時間がさかれ、講義用の時間配分が少なくなっている。その反面、講義内容が多岐にわたり広すぎるために、時間内にじっくり講義できず、どんどんと進めざるを得ない事情があると思われる。これについても、講義時間配分の再調整が望まれる。

新講義科目としては、看護学専攻では「救急看護学」、「応用看護学」、検査技術科学専攻では「遺伝検査学（分子生物学）」を要望する声が高かった。これらの講義は、いずれも、すでに他の科目の中に取り入れられているが、今後は独立させてさらに内容を強化することが望まれる。

教育方法の改善として、今後は、フィジカルアセスメントの強化、チュートリアル教育、模擬患者の活用など、問題解決学習を反映した教育方法の改善を検討したい。

医学科総合研究棟完成後に、保健学科看護学専攻に実習室が４室計画されていた。しかし、完成しているのは１室のみであり、未完成の３室は共用や代室でまかなわれている現状の改善が望まれる。

Ⅶ．まとめ

医学部が抱える、（１）平成12年度の「鳥取大学の現状と課題」以後のカリキュラムの改革、（２）教養教育の改革、（３）ファカルティ・ディベロップメントと教員の教育活動の評価、（４）３学科コンビネーション教育、（５）新しい医学教育カリキュラム、などの教育の諸問題について述べた。独立行政法人となった現在、全国の医学教育改革の波に乗り遅れてはならない。今後さらなる改革が必要であるが、そのために、今回の調査の結果が生かされることを期待している。

第３節　工学部の課題

Ⅰ．工学部全体としての現状と課題

１．はじめに

ここでは、工学部教育の特徴と、各学科での相違・特徴などから工学部の現状と課題について述べる。

アンケート調査の在学生については、平成８年度から平成 16 年度入学の学生を対象に調査を実施した。研究室に所属している学生と一般学生の比は 43.1％対 55.6％で、一般学生が多い。学科別では、卒業論文に「着手している」学生が多いのは機械工学科、知能情報工学科、社会開発システム工学科、応用数理工学科であり、一般学生が多い学科は、電子電気工学科、物質工学科、生物応用工学科、土木工学科である。このことによって学科ごとの評価に多少の差異が出ることが考えられる。

卒業生については、平成８年度から平成 15 年度卒業生を対象に調査を実施した。回答数が 339 であり、其の内平成 14・15 年度卒業生が 58.4％を占めている。卒業生の大学院進学は、「鳥取大学工学研究科」進学が 67.8％、「他大学研究科」進学が 2.9％、「進学せず」が 25.4％である。卒業生の就職先は、ほとんどがそれぞれの専門分野へ就職している。機械工学科は「機械関連」が 34％、電子電気工学科は「電気関連」が 37％、物質工学科は「化学関連」が 33％、土木工学科は「建設関連」が 42％及び「官公庁」が 18％と、これらの学科の卒業生の主な就職先は専門分野である。しかし、社会開発システム工学科は「情報関連」が 26％、応用数理工学科は「機械関連」21％及び「情報関連」16％と分かれている。また、知能情報工学科では「情報関連」11％、「電気関連」9％、「建設関連」６％、「機械関連」4％、「官公庁」4％と、いろいろな分野に就職している。生物応用工学科については、サンプル数が少ないが「化学関連」８％、「医療関連」６％となっている。出口と称されている「就職」問題は、その学部・学科の魅力につながる重要事項であり、全入時代といわれている大学運営の今後に大きな影響を与えることが予測されることから、工学部においても現状の分析とこれからの課題についての検討が必要であろう。

２．志望動機と学部・学科への期待

「工学部に入学した理由」について、「自分の志望と一致し、勉強が出来た」と「自分の学力レベルで入学できた」の合計が卒業生で 78％、在学生で 77％を占め、自分の意志や学力レベルで志望を決定しており、工学部入学後の学習に期待していることが伺える。

在学生で鳥取大学への入学を決めた時期は「センター試験受験後」が 67％と圧倒的に多く、次に高校３年の夏から秋頃に 16％が決めている。

工学部の在学生では、所属している学科選択において第一志望と第二志望を合わせと 83.5％の高率であり、不本意入学者はあまり多くないことが今回の調査でわかった。特に、機械工学科と土木工学科は 95～100％という極めて高い数値を示しており、志望通りの入学であったといえる。しかし、社会開発システム工学科や応用数理工学科においては、30～40％くらいの不本意入学者がおり、どのような理由なのかを詳細に検討する必要があろう。

在学生が目指す技術者のタイプは、「広い視野と管理能力を持った技術者」と「高度な専門的知識と技術を有する実践的技術者」の２つでほぼ分数の 49％を占めているが

物質工学科や生物応用工学科の学生は「研究・開発を行う専門知識をもった研究者」への志向が高く、応用数理工学科は学科としてのコンセンサスが見られず、「技術者にならない」ものが 23.7%になっている。また、「何も考えていない」学生が知能情報工学科に 11%、物質工学科に 14%も存在しており、学生の「アウエアネス」を教育目標にしている学部として改善のための努力が必要である。

現在の満足度調査に関しては、工学部全体では 57.6%が「満足・やや満足」と回答しており、「不満足・やや不満足」が 33.7%の回答であった。学科別では、ほとんどの学科が 55%～65%くらいの満足度の数値が示されているが、応用数理工学科は 44.1%と低い満足度となっており、不満足度も 42.3%と高い数値を示しており、検討課題の一つと考えられる。

3．工学教育及び各学科のカリキュラムについて

「所属学科の教育カリキュラムに何を期待しますか」という設問に対して、「将来、技術者として活躍するための知識を習得すること」を選択した学生が半数以上おり、学生のカリキュラムに対する期待は、この内容であることが明確化された。

また、「学科の教育プログラムを理解しているか」という設問に対しては、学部全体では 78.3%とかなりの高値であり、工学部教育は学生に十分理解されている。そして、同じ設問に対する卒業生の 52.5%が「ほとんど理解していなかった」と回答していることと比較すると「学科の教育プログラム」がかなり改善されてきているといえよう。しかしながら、「所属学科の教育カリキュラムで十分な教育を受けることができるか」という設問に対する肯定的な回答は 34.1%とあまり高くない。そして、「教育方針があり、系統だった教育を受けることが出来るか」という設問に対しても、社会開発システム工学科の 51%の学生が、「ばらばらで困っている」と回答している。

専門科目（講義、実験・演習）の満足度については、学部全体の数値では講義科目の満足度が 52.9%、実験・演習科目が 56.6%とまずまずの数値であり、不満足度は 30%台であったが、学科別にみると知能情報工学科や応用数理工学科では不満足度が 42%～52%という高い数値も認められている。

このように、学部全体としての数値には、それほど大きな問題は認められないものの、部分的には改善のための努力が必要と思われる点もあり、取り組むべき課題として認識しなければならないであろう。

4．学生への支援等について

教育環境（講義室、図書館、学生会館、研究室など）については、「満足・やや満足」が 44%、「不満足・やや不満足」が 47.3%と若干不満足度の方が上回っている結果であったが福利厚生施設に対するような顕著なものではなかった。

「学級教員・チューター制が役に立っているか」という設問に対しては、「役に立っている」と答えた学生が 25.4%であるのに対し、「あまり役に立っていない」、「なくともよい」、「邪魔になる」などの否定的意見が 70%を超えており、早急に改善する手立てが必要である。

学生の要望を取り上げるシステムについての設問に対しては、72.5%の学生が「知らない」と回答している。また、このシステムの活用に対しての大学側の姿勢にも学生は、極めて否定的な見解を示していることから、このシステムの説明をもっと積極的に行う必要があろう。

奨学金・授業料免除に関しては、「満足・やや満足」が 42.6%とかなり高く、不満に感じている学生も 22.9%いるが、すべての学生を対象者に出来る性質のものではないので、現状にそれほど大きな問題点はないと考えられる。

第４節　農学部の課題

Ⅰ．生物資源環境学科

１．生物資源環境学科における諸課題のポイント

①コース分属等のデメリットーメリットについて：生物資源環境学科では、入学時点では学科一本で入学するが、入学後は順次学年の進行と共に、コース、サブコース、研究分野へと分属される。このようなシステムは平成元年時改組の大きな目玉として内外に注目された。事実、これに対する学生の評価も高くその効果が認められるものであった。しかし、問題点も表れた。すなわち、希望分属に偏りが生じた場合の処理についてである。各専門分野では実験設備、指導スタッフなどの面において収容能力に限界があるため、コース分属受け入れ可能数等に定員を設けなければならない。当然定員を超えて分属希望があった場合には、第二、第三希望へと進路を変えなければならない。第二、第三希望に回った学生は当然不満を感じることとなる。現在希望コースに偏りが生じた場合には、基本的には成績評価によって分属を決定しており、希望分属を果たすためには良い成績を上げるための努力が必要になる。従って、この点で生物資源環境学科の入学後の学業成績向上に効果を上げている。大きなメリットの一つである。すなわち、コース分属のシステムについてはメリットとデメリットの両面があるのである。

②実験・実習授業における設備の充実について：質問 47 において実験・実習授業における設備について尋ねたところ、まあまあである、と回答したものが一応 5 割を超えているものの、不備である、あるいは極めて不備であるとするものも 4 割近くあり、実験・実習授業における設備の充実を図ることは重要である。また、卒業生に関してみると、「不備である、あるいは極めて不備である」とするものの割合は一層高まり、獣医学科に関しては 82.9%に達している。実験・実習に関わる設備の充実を図ることは大きな課題といえる。

③授業(専門)科目の必修、選択について：専門の授業科目については、必修、選択、あるいは選択必修の別にカリキュラムが用意されているが、その割合がいつも議論されるところである。アンケートでは「選択をふやし、必修を減らす」が在学生で 49.0%、卒業生で 41.2%、獣医学科では 36.6%を示している。又全く逆に「必修をふやし、選択を減らす」とするものが在学生で 11.0%、卒業生で 22.9%、獣医学科では 29.2%を示している。さらには「両者およそ同じウェイトとする」が在学生で 27.1%、卒業生で 30.0%、獣医学科では 19.5%を示すなど、その判断は複雑である。必修、選択の判断は、単に授業科目の選択に関する自由度の問題にとどまらず、授業内容・単位認定の仕方にも関連しているため、慎重に対処していかなくてはならない問題である。

④学科全体の関連性、学科の性格について：特に生物資源環境学科のデメリットに関するアンケート結果では、「入学後分属によって自分の希望する専門の勉学ができないこともある」、「学科全体の関連が分かりにくいし、学科としてまとまりがない」、「学科の性格が捉えにくいので外部に対して説明するとき困る」、さらには「この学科名では、勉学した専門をよく表せないので、社会の評価が心配である」等の問題点が指摘されている。第一の「入学後分属によって自分の希望する専門の勉学ができないこともある」とする回答は入学後のコース分属制に関わる問題であり、別の見方をすれば「入学してから自分の専門を選ぶのに都合がよい」として大きなメリットとして評価されている事と裏腹の関係にあるもので別の項目で改めて触れているので、ここでは第二以降の回答内容について指摘すると、「学科全体の関連が分かりにくいし、学科としてまとま

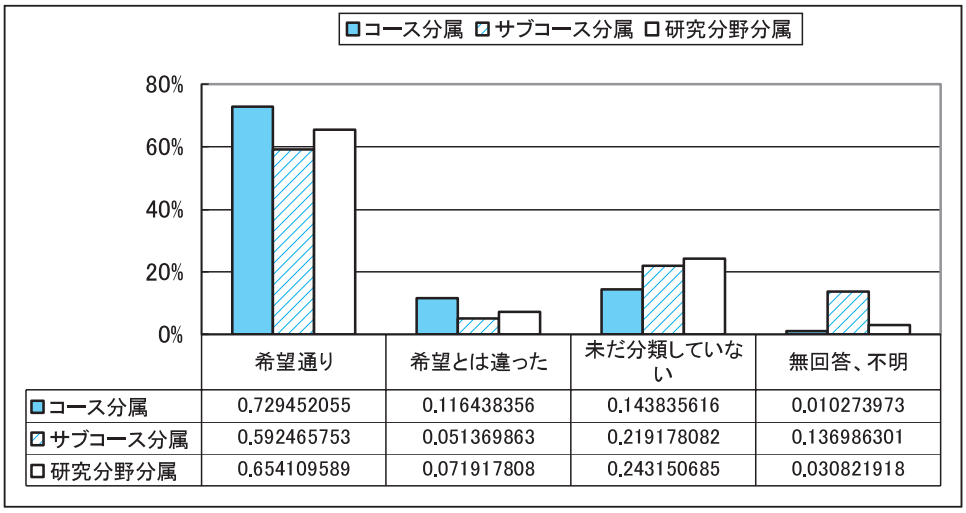
りがない、学科の性格が捉えにくい、さらに、この学科名では、勉学した専門をよく表せないので、社会の評価が心配である」等の問題点が指摘されていることを記しておきたい。

⑤卒業論文の評価及び実験実習に対する高い評価：卒業論文は自由選択コースを除き、他の生物資源環境科学では専門 10 単位の必修科目として設定されている。卒業論文を必修科目として義務づけるべきか否か議論になるところである。卒業生について「卒業論文のあったことをどのように評価していますか」との質問に対して、最も多かったものは、「大変よかった、47.1%」。ついで、「よかったが 44.1%」を占める。これに対して、「無くても良い」とするものはわずかに 1.8%を占めるにとどまる。卒業生の意識としては、卒業論文は積極的に評価されていると言える。さらに、卒業生に対する別の設問で「専門の学習で最も身に付いたものは、どういう形だったでしょうか」との質問に対しては「実験・実習、卒論」をダントツの上位に挙げている。卒論は論文を取りまとめるという単に技術的な問題にとどまらず、指導教官との密接な接触が図られ人生上の幅広い指導を受けることも大きなメリットとなっていること、さらに実験実習は科学の基本であり、高い評価を受けることとなる。

２．生物資源環境学科における分属システムについて

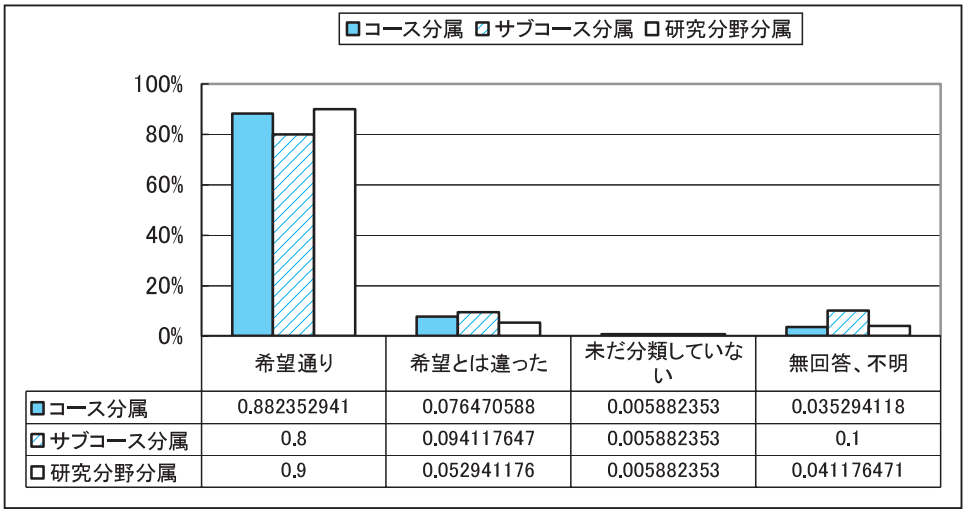
生物資源環境学科では、入学時点では学科一本で入学するが、入学後は順次学年の進行と共に、コース、サブコース、研究分野へと分属され、それによるメリット、デメリットについては既述しているが、ここではこれら三段階の分属結果をとりまとめると図Ⅲ―２－４－１の様になる。「希望通りであった」とするものはコース分属では 72.9%を占めていたものが、サブコース分属では 59.2%へと一時低下し、研究室分属では再び構成比を高めている。また、「希望とは違った」とするものは 11.6%からサブコース分属で一時低下し、研究室分属では再び増加している。このような傾向は卒業生を対象とした場合にはやや異なり、全体として満足度は高まり、さらに、研究室分属への満足度はコース分属、サブコース分属の満足度を超えるものとなっている。しかし、図Ⅲ―２－４－２より在学生と卒業生の違いをコース分属制に対する年次変化と捉えるなら、最近年次になるにつれて、コース分属はサブコース分属を除き、「希望通り」とするものの割合がやや低下し、「希望とは違った」とする構成比が高まっていると言える。今後の改組に向け、コース分属制をどの様に行っていくべきか慎重を要すところである。

さらに分属の時期に対する在学生と卒業生を比較してみると、図Ⅲ―２－４－３のようになる。すなわち「現行の時期でよい」とするものが殆どであり、且つその割合は卒業生の方が高い値を示している。少なくても分属の時期については現行時期が評価されていると思われる。



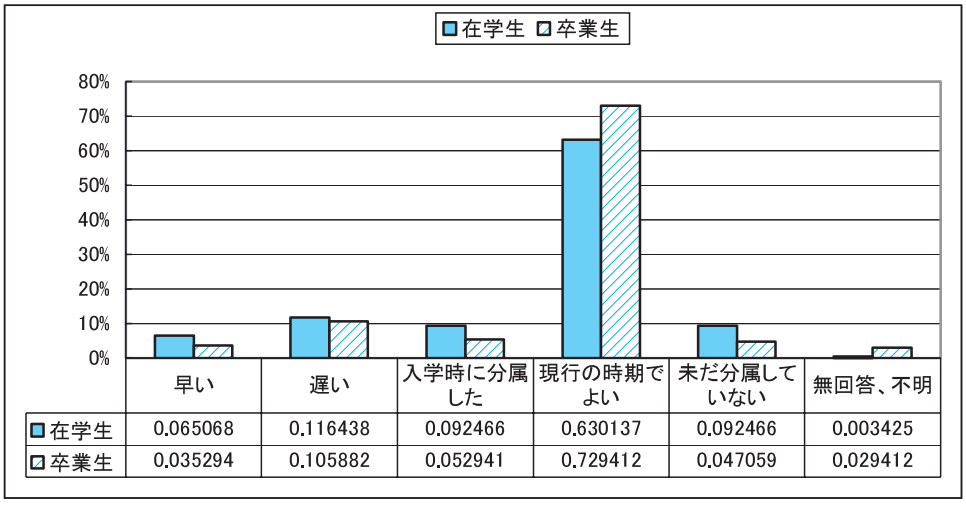
	希望通り	希望とは違った	未だ分類していない	無回答、不明
コース分属	0.729452055	0.116438356	0.143835616	0.010273973
サブコース分属	0.592465753	0.051369863	0.219178082	0.136986301
研究分野分属	0.654109589	0.071917808	0.243150685	0.030821918

図Ⅲ―２－４－１　コース分属は希望通り行っているか(在学生対象)



	希望通り	希望とは違った	未だ分類していない	無回答、不明
コース分属	0.882352941	0.076470588	0.005882353	0.035294118
サブコース分属	0.8	0.094117647	0.005882353	0.1
研究分野分属	0.9	0.052941176	0.005882353	0.041176471

図Ⅲ―２－４－２　コース分属は希望通り行っているか(卒業生対象)



	早い	遅い	入学時に分属した	現行の時期でよい	未だ分属していない	無回答、不明
在学生	0.065068	0.116438	0.092466	0.630137	0.092466	0.003425
卒業生	0.035294	0.105882	0.052941	0.729412	0.047059	0.029412

図Ⅲ―２－４－３　コース分属の時期について

Ⅱ．獣医学科

１．獣医学科における諸課題のポイント

①設備の不備について：獣医学科における実験・実習授業の設備に関するアンケート調査では、不十分さを指摘するものが圧倒的に多く、今後設備の充実を図ることが重要と考える。具体的には、「極めて貧弱である」と回答したものが 46.3%を占め、ついで、「不備である」とするものが 36.6%となっている。逆に、「充実している」がわずかに 1.2%であり、「まあまあである」との回答も 15.9%に留まっている。実験・実習に関わる設備は決して十分といえるものではなく、今後の一層の充実が課題と言える。

②博士課程設置の周知について：先の質問で、獣医学科が６年制に移行した後に、大学院後期課程として連合獣医学研究科（博士課程）が鳥取大学に設置されていることを知っていますか。との質問に対する回答では、「知っているが 69.5%」と当然の事ながら７割に近い構成比を示すが、「聞いているがよく知らないが」15.9%あり、さらに、「知らない」とするものも 13.4%もある。小中学生ならいざ知らず、当該大学所属の学生が自分の大学に設置されている博士課程の存在を知らないと言うことは誠に認識不足と言えよう。博士課程の周知に努力すべきであろう。

③10 学科、26 名教官に対する不備：獣医学科は現在(調査時点で)10 学科目、教官 26 名で教育を行っていますが、どのような感想を持っていますか。との質問に対し、圧倒的多数の 74.4%が、「不十分な教育しか受けられない」と答えており、続いて、「どちらとも言えない」が 20.7%を占めるものの、「充分な教育を受けることができる」と回答したものはわずかに 3.7%に留まっている。現在の獣医学教育では、設備の不十分さを置くとしても、教官数、教科科目数などの面で、教育内容は不十分とならざるを得ないようである。さらにその不十分な理由に対してより具体的に質問した結果、最も多かったものは、「教官の絶対数が不足しており、きめ細かい教育が受けられない」とするものが 42.7%を占め、続いて、「学科目数が少なく専門分野が限られている(15.9%)」、「実験・実習用の設備・器具、動物数が不足している(14.6%)」と続いている。

さらに、獣医学教育をさらに充実させるためにはどのような方法が考えられますか。と獣医学教育をさらに充実させるための方法について質問したところ、最も多かったものは、「一学科目当たりの教官数を増やす」及び「補助教官等（例えば教務員あるいは技官）のポストを新設する」とするものが共に 32.9%で最も高く、続いて、「学科目数を増やす(25.6%)」と続いている。獣医学科では、この調査後 10 名の教官定員増が確定し、年次計画で増員が図られる予定となっている。学科、教官数の問題も解決への努力が図られつつあると言えよう。

２．獣医学科の６年制教育システムについて

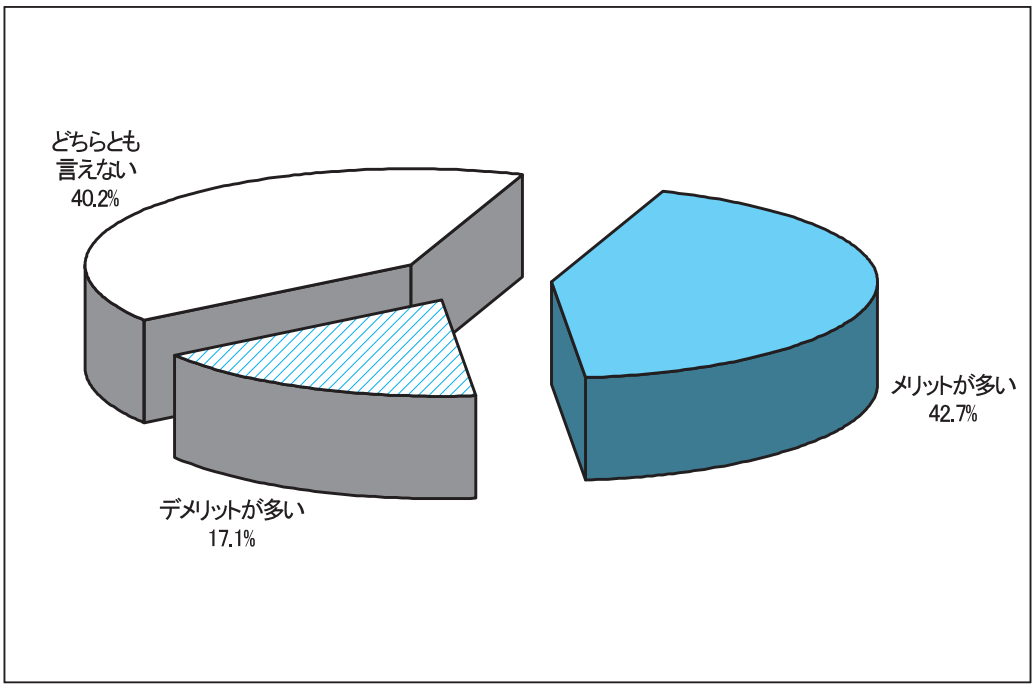
獣医学科については現在６年制制度が取られているが、このことに関して勉学上のメリットと、就職上のメリットについて尋ねたが、その結果が図Ⅲ―２－４－４から図Ⅲ―２－４－７までである。図Ⅲ―２－４－４は「獣医学科は６年制教育ですが、この教育年限は勉学や就職上のメリットが多いと考えられますか。勉学上のメリットはどうでしょうか。」と言う問に対する回答で、「メリットが多い」が 42.7%で最も多く、ついで「どちらとも言えない」が 40.2%と続いている。しかし、デメリットが多い、と回答したものは 17.1%に留まっている。

さらに、図Ⅲ―２－４－５は「勉学上のメリットが多い」と答えたもののみに対してその理由を質問し、その内訳内容を表したものである。すなわち、６年制制度の勉学上

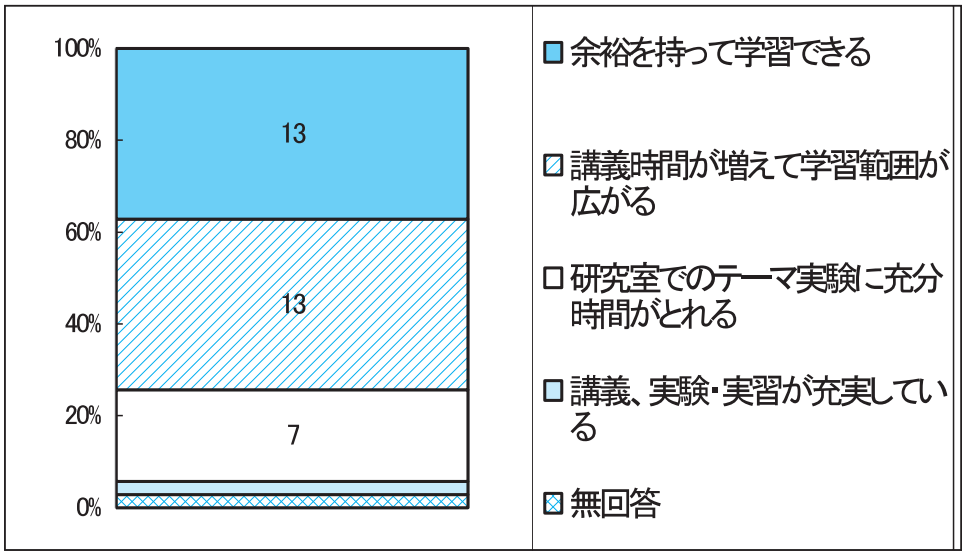
のメリット有りと答えたものの根拠である。これによると、講義時間が増えて学習範囲が広がる、及び、余裕を持って学習できる、とする回答が 37.1%(13 件)の同率で最も高い。やはり、在学期間が二年延びることによって講義や実験・実習時間が長くなり、研究室でのテーマ実験に充分時間がとれるなど、教育効果は認められるとしている。

同様に図Ⅲ―２－４－６は「獣医学科の６年制教育に関し、それによる就職上のメリット」について尋ねたものの回答である。これによると、「どちらとも言えない」が 51.2%で最も多く、ついで「メリットが多い」が 31.7%とつづいている。しかし、デメリットが多い、と回答したものは 9.8%に留まっている。

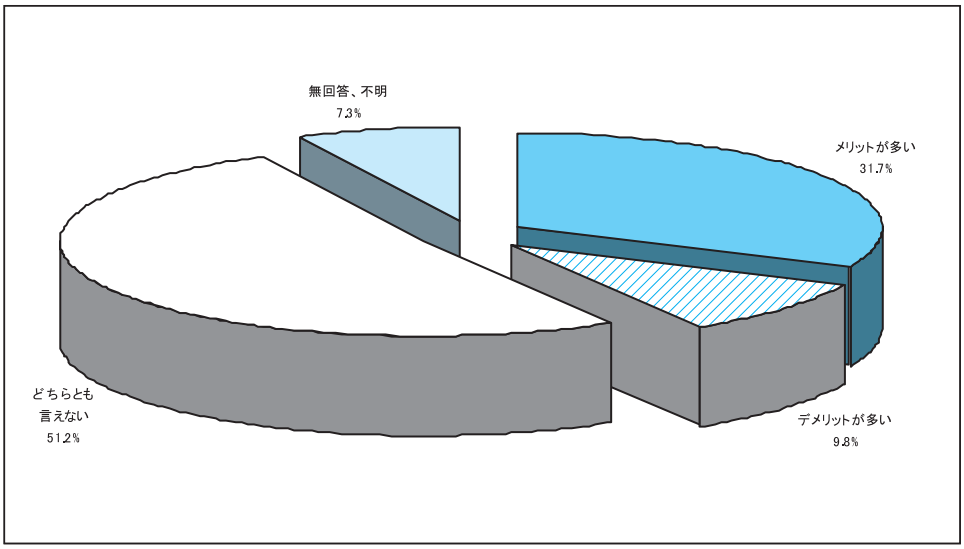
さらに、図Ⅲ―２－４－７は「就職上のメリットが多い」と答えたもののみに対してその理由を質問し、その内訳内容を表したものである。すなわち、６年制制度の就職上のメリット有りと答えたものの根拠である。これによると、「希望する職種につける」が 61.5%の６割以上を占め、さらに、「社会的評価が上がる」と答えたものは 23.1%、また、「待遇が良くなる」と答えたものは 15.4%となっている。就職上のメリットとしては、やはり希望する職種につけることが大きな理由のようである。メリット、デメリットどちらとも言えないとしながらも、やはり、デメリットの占める割合が低く、６年制制度の教育効果は認められるものと思われる。



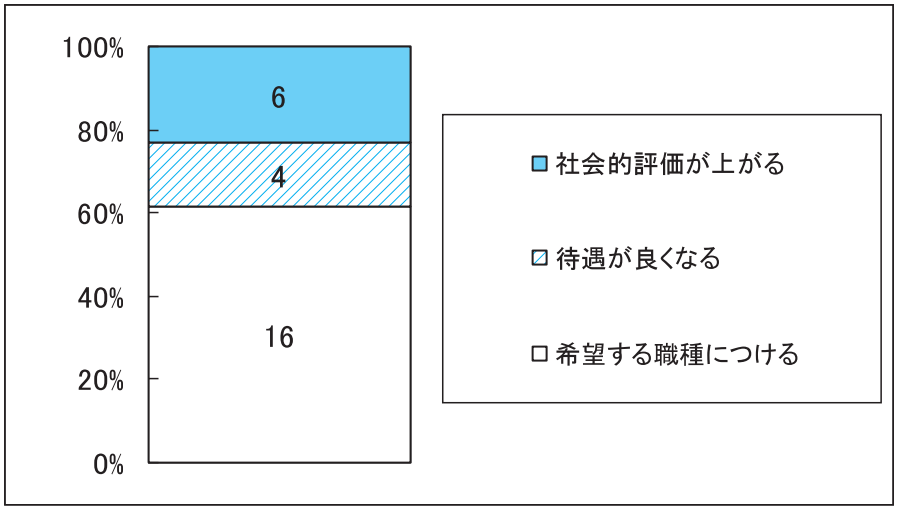
図Ⅲ―２－４－４　獣医学科の６年制教育に対する勉学上のメリットについて



図Ⅲ―２－４－５　勉学上メリットが多いと回答したものについての内訳理由



図Ⅲ―２－４－６　獣医学科の６年制教育に対する就職上のメリットについて



図Ⅲ―２－４－７　就職上メリットが多いと回答したものについての内訳理由

お　わ　り　に

鳥取大学では、平成３年に鳥取大学自己評価委員会が設置されてから、大学全体のあらゆる分野についての点検・評価が実施され、数多くの評価報告書が発行されてきた。

この度の報告書は、平成 13 年以降行われてきたカリキュラム改革を主とした教育改革に対する鳥取大学の教育評価であり、主に、そのカリキュラムの下で教育を受けた在学生と卒業生によるアンケート調査を分析･検討したものである。これまでにも、このような形式での調査は定期的に行われてきたが、卒業生を対象とした本格的な調査は、今回が初めてであり、調査結果には調査前から興味深いものを感じていた。

前述したような意味合いもあって、この調査報告書において、この間に新たに導入された専門教育及び全学共通教育の成果や問題点が在学生や卒業生から提起され、それらの点について詳細に点検・評価することにより、これからの鳥取大学の新たなる教育改革につながることを期待したい。

最後に、分析･執筆にあたられた委員諸氏をはじめ、評価監査課等の事務員の各位、そして調査にご協力頂いた在学生及び卒業生の皆様に深甚な敬意を表する次第である。

平成１７年１０月

鳥取大学評価委員会
自己点検・評価報告書作成作業部会長　清水　克哉

資　　料

全学部共通

「大学教育」に関するアンケート調査票

【回答にあたっての留意事項】

１．質問には全学共通の質問（Q1～Q27）と各学部ごとの質問（Q28 以降）がありますので，指示に従って回答してください。

２．質問に「複数回答可」と明記している質問以外は，原則として該当するものを１つだけ選んで，その番号を回答用紙にご記入ください。

３．回答用紙は，学生部教育支援課（学生センター内）又は各学部の教務係に提出してください。

最初に、あなた自身についてお尋ねします。

Q 1．性別　　1．男　　2．女

Q 2．何年度入学ですか。

1．平成 16 年度　　2．平成 15 年度　　3．平成 14 年度　　4．平成 13 年度
5．平成 12 年度　　6．平成 11 年度　　7．平成 10 年度以前

Q 3．学部はどれですか。

1．教育学部　　2．教育地域科学部　　3．地域学部　　4．医学部　　5．工学部
6．農学部

Q 4．学科・課程はどれですか。

【教育学部】

1．小学校教員養成課程　　2．中学校教員養成課程　　3．養護学校教員養成課程
4．総合科学課程

【教育地域科学部】

1．学校教育課程　　2．人間文化課程　　3．地域政策課程　　4．地域科学課程

【地域学部】

1．地域教育学科　　2．地域文化学科　　3．地域政策学科　　4．地域環境学科

【医学部】

1．医学科　2．生命科学科　3．保健学科看護学専攻　4．保健学科検査技術科学専攻

【工学部】

1．機械工学科　　2．知能情報学科　　3．電気電子工学科　　4．物質工学科
5．生物応用工学科　　6．土木工学科　　7．社会開発システム工学科
8．応用数理工学科

【農学部】

1．農林総合科学科　2．生物資源環境学科　3．獣医学科

Q 5. あなたの出身高校の所在地はどこですか。

1. 鳥取県　2. 島根県　3. 岡山県　4. 広島県　5. 山口県
6. 兵庫県　7. 大阪府　8. その他の近畿地方　9. 四国地方　0. その他

あなたの鳥取大学への入学に関連して質問します。

Q 6. 大学進学を希望した最も大きな理由は何ですか。

1. 将来やりたい仕事を決めており，そのために必要だから
2. 学問を身につけ，人間として教養を高めたいから
3. 自分に適した分野を見つけ，その能力を高めたいから
4. 大学を卒業したほうが将来の給料や社会的評価が高いから
5. まわりの多くの人たちが進学するから
6. その他

Q 7. 鳥取大学を選択した最も大きな理由は何ですか。

1. 鳥取大学が好きだから
2. やりたい分野の学問があったり，教わってみたい先生がいるから
3. 自分の偏差値や受験科目の都合で
4. 地元の大学だから
5. 高校（予備校）の進路指導で薦められたから
6. 親に薦められたから
7. 就職率が高いから
8. 山陰の自然や土地がらが好きだから
9. その他

Q 8. あなたが在学している学部を選ぶにあたって一番重視したのはどんなことでしたか。

1. 自分の性格・適正　2. 志望する職業に有利
3. 自分のやりたいことができる　4. 入学試験の難易度や偏差値
5. 好きな学問分野や教員　6. 親の希望や進路指導
7. 学部の社会的貢献や社会的評価　8. その他

Q 9. 環境・施設面について，特に不満なことがありますか。**（複数回答可）**

1. 図書館・大学会館・学生寮等の厚生福利施設が貧弱である
2. 講義・実験室に冷房等の設備が少ない　3. トイレが汚い
4. 講義室の視聴覚機器類が乏しい　5. 移動机の講義室が少ない
6. コインロッカーが少ない　7. 講義室にゴミが散乱している
8. 建物内の喫煙箇所が多い
9. 教官研究室等の案内表示が分かりにくい
0. 特になし

Q10．後輩に対して，鳥取大学への入学を勧めることができますか。

1. ぜひ入学するよう勧める　　2. 積極的にではないが勧める
3. あまり勧めない　　4. 入学しないよう勧める
5. その他

あなたの学生生活・勉学への取り組み方等に関して質問します。

Q11．授業科目を選択する際にシラバスを利用していますか。

1. よく利用し，参考になる　　2. あまり利用していない
3. まったく利用したことがない　　4. シラバスはなかった
5. その他

Q12．授業内容が理解できなかった場合，その理由は何であると思いますか。

1. 自分の勉強不足　　2. 先生の教え方に工夫が足りない
3. 内容自体が難しすぎる　　4. 内容が多すぎる
5. その他

Q13．授業内容が理解できなかった場合，どのようにしますか。

1. 教室で質問する　　2. 授業後に先生に尋ねる
3. 友人に尋ねる　　4. 自分で参考書等で調べる
5. 何もしない

Q14～Q16．あなたがよいと評価するのはどんな授業ですか。次の選択肢の中から３つ選び，よい順に**Q14～Q16**に記入してください。

1. 学問内容をなるべく分かり易く噛み砕いて教える
2. テキスト・プリント等を適切に使う
3. 板書が丁寧である
4. 出欠席のチェックを行う
5. 教育機器を有効に使用し，理解を助ける工夫をしている
6. 学問のレベルの高さが感じられる
7. 今の時代につながる点をよく教える
8. 教員がその学問に打ち込んでいる事が伝わる
9. 予習・復習の負担が少ない
0. 単位取得が容易である

Q17．授業に対して最も強く望むことは何ですか。

1. 満足しており，特に望むことはない
2. 教員は授業に対し熱意をもってほしい
3. 授業は，丁寧に分かり易く行ってほしい
4. 授業は，抽象的すぎず，事例をあげるなどし具体的に説明してほしい
5. 官公庁，企業等の外部講師による授業を増やしてほしい
6. 満足しているわけではないが，特に望むことはない

Q18．あなたは授業の予習・復習を１日何時間しますか。

1.　しない　　2.　０～１時間　　3.　１～２時間　　4.　３時間以上

Q19．あなたの勉学態度は次のうちどれに最も近いですか。

1.　授業にはきちんと出席し，予習・復習もする
2.　授業には出席し，ノートだけはきちんととる
3.　とりあえず授業には出席する
4.　試験勉強だけを集中して行う
5.　あまり真剣に取り組んではいない

全学共通教育に関連してお尋ねします。

Q20．全学共通科目と専門教育はどのような関係にあるべきだと思いますか。

1.　全学共通科目は，専門教育の基礎になる教育であるべきだ
2.　全学共通科目と専門教育は，補いあって大学教育を構成すべきだ
3.　全学共通科目は専門教育から独立した教育であってよい
4.　分からない

これから主に全学共通教育の授業に関して質問します。全学共通科目は大学入門科目、主題科目、実践科目、専門基礎科目の４つに区分されています。

Q21．大学入門科目のうち、「大学入門ゼミ」について，以下の質問にお答え下さい。

SQ 1）この科目はどういう点で有益でしたか。（複数回答可）

1.　大学での勉強の仕方がわかった
2.　大学生活を始めるのに役立った
3.　大学全体のことを知るのに役立った
4.　専門科目・コース等の概要を知るのに役立った
5.　教養科目（大学生としての一般常識）として役立った
6.　プレゼンテーションの仕方を学べた
7.　教員や学生仲間と親しく知り合えた
8.　その他

SQ 2）この科目のシラバスは，受講においてどのくらい利用しましたか。

1.　大いに利用した　　2.　まあまあ利用した
3.　あまり利用しなかった　　4.　全く利用しなかった
5.　自分の受講のときはシラバスはなかった

SQ 3）実際の授業とシラバスの関係はどうでしたか。

1.　シラバス通り進むのでよい
2.　シラバス通り進まないのでよくない
3.　シラバス通りであるが授業はよくない
4.　シラバス通りではないが授業はよい
5.　自分の受講のときはシラバスはなかった

SQ 4) この科目の授業について，あなたは満足していますか。

1. 非常に満足している　2. 満足している　3. どちらともいえない
4. 不満だ　5. 非常に不満だ

Q22. 大学入門科目のうち「情報リテラシ」について，以下の質問にお答え下さい。

SQ 1) あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何ですか。**(複数回答可)**

1. パソコンの仕組みと操作法　2. ワープロ　3. 表計算
4. インターネット（情報検索）　5. 電子メール
6. Windows などパソコンの OS（オペレーティングシステム）
7. プレゼンテーション　8. 情報倫理
9. この科目を学ぶ意義はない

SQ 2) この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。**(複数回答可)**

1. 授業の適正なレベル　2. 授業のわかりやすさ
3. 学ぶ楽しさ　4. 高校とは違う大学らしい教育内容
5. 教員との活発なやりとり　6. 教員の教える熱意
7. 教員の指導技術のレベルの高さ　8. 教員の指導技術のレベルの低さ
9. 何も感じるものがなく不満

SQ 3) この科目の授業について，あなたは満足していますか。

1. 非常に満足している　2. 満足している　3. どちらともいえない
4. 不満だ　5. 非常に不満だ

SQ 4) この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。

1. 現行のままでよい
2. 現行より増やす方がよい
3. 現行より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. よくわからない

SQ 5) この科目のシラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。

1. 大いに利用した　2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった　4. 全く利用しなかった
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 6) 実際の授業とシラバスとの関係はどうですか。

1. シラバス通り進むのでよい
2. シラバス通り進まないのでよくない
3. シラバス通りであるが授業はよくない
4. シラバス通りではないが授業はよい
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 7）成績の評価方法についてどう思いますか。

1. 筆記の定期試験で評価すべきである
2. レポートによって評価すべきである
3. パソコンの操作方法等のレベルアップ度を重視して評価すべきである
4. 試験、レポート、出席などの総合点で評価すべきである
5. 授業態度を重視して評価すべきである

SQ 8）教官の成績のつけ方についてどう思いますか。

1. 適切である　　2. まあまあ適切である　　3. 不適切である
4. あまり適切でない　　5. よくわからない

Q23. 主題科目について，以下の質問にお答え下さい。

SQ 1）あなたは主題科目をどのように位置づけていますか。**（複数回答可）**

1. 将来、良き社会人になるための一般教養として
2. 専門を学ぶための基礎として
3. 大学生としての一般常識として
4. 世界的視野と見識を身につけるために活用する機会として
5. 専門以外の分野を知る機会として
6. 多様な考え方を知る機会として
7. 自己啓発のため
8. その他

SQ 2）主題科目を選択するためにシラバスを利用しましたか。

1. （選択した）全ての科目で利用した　　2. いくつかの科目で利用した
3. あまり利用しなかった　　4. 全く利用しなかった
5. 自分の受講のときはシラバスはなかった

SQ 3）実際の授業とシラバスの関係はどうでしたか。

1. （選択した）すべての科目がシラバス通り進んだ
2. シラバス通り進んだ科目が，そうでない科目より多かった
3. シラバス通り進んだ科目とそうでない科目が，ほぼ同数であった
3. シラバス通り進まなかった科目が，そうでない科目より多かった
4. すべての科目がシラバス通りには進まなかった
5. 自分の受講のときはシラバスはなかった

SQ 4）全般的に見て，主題科目の成績のつけ方は適切だと感じましたか。

1. （受講した）すべての科目で適切であった
2. 適切であった科目が，そうでない科目より多かった
3. 適切であった科目と，不適切であった科目がほぼ同数だった
4. 不適切であった科目が，そうでない科目より多かった
5. すべての科目で不適切であった

SQ 5) あなたが履修すべき主題科目の総単位数についてどう思いますか。

1. 主題科目の総単位数は現在のままでよい
2. 総単位数を増やしたほうがよい
3. 総単位数を減らしたほうがよい

SQ 6) 主題科目で、あなたが満足した点はどういう点ですか。**（複数回答可）**

1. 授業が理解しやすかった
2. 授業の内容が興味深かった
3. 担当の教員の人柄（熱意）がよかった
4. 教員や他の受講学生との活発な意見交換があった
5. 授業の進度やレベルが適切に設定されていた
6. その他

SQ 7) 全般的に見て，主題科目に対するあなたの満足度は以下のどれですか。

1. すべての科目に満足している
2. 満足できる科目が，そうでない科目より多い
3. 満足できる科目と，そうでない科目が同じくらいある
4. 不満な科目の方が，そうでない科目より多い。
5. すべての科目に不満である

Q24. 実践科目の英語科目について、以下の質問にお答えください。

SQ 1) あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何ですか。**（複数回答可）**

1. 英語の読解力の向上
2. 英語の会話力の向上
3. 専門科目を学ぶ基礎
4. 英米圏の文化・社会・歴史を学ぶ
5. 就職活動・大学院進学に生かす
6. 英語を修得して国際社会に生きる
7. 授業を通して人間的に成長する
8. 教員の人間性に触れる
9. この科目を学ぶ意義はない
0. よくわからない

SQ 2) この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。**（複数回答可）**

1. 授業の適正なレベル
2. 授業のわかりやすさ
3. 外国語を学ぶ楽しさ
4. 高校までにない大学らしい教育内容
5. 教員との活発なやりとり
6. 教員の教える熱意
7. 教員の無駄話の多さ
8. 教室が騒がしく真面目さに欠ける
9. 何も感じることがなく不満
0. よくわからない

SQ 3) この科目の授業について，あなたは満足していますか。

1. 非常に満足している
2. 満足している
3. どちらともいえない
4. 不満である
5. 非常に不満である

SQ 4) この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。

1. 現行のままでよい
2. 現行より増やす方がよい
3. 現行より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. よくわからない

SQ 5) この科目の授業シラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。

1. 大いに利用した　　2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった　　4. 全く利用しなかった
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 6) 実際の授業とシラバスとの関係はどうですか。

1. シラバス通り進むのでよい
2. シラバス通り進まないのでよくない
3. シラバス通りであるが授業はよくない
4. シラバス通りではないけど授業はよい
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 7) ネイティブ・スピーカーの授業はどう思いますか。

1. もっと増やす方がよい　　2. 現行のままでよい
3. もっと減らす方がよい　　4. 不要である
5. 自分の受講の時はネイティブの授業はなかった

SQ 8) 成績の評価方法についてどう思いますか。

1. 筆記と口頭の定期試験で評価すべきである
2. 筆記の定期試験だけで評価すべきである
3. 口頭の定期試験だけで評価すべきである
4. 演習の性格から毎回の授業だけで評価すべきである
5. レポート（発表・提出）によって評価すべきである

SQ 9) 教員の成績のつけ方についてどう思いますか。

1. 適切である　　2. まあまあ適切である　　3. 不適切である
4. あまり適切でない　　5. よくわからない

SQ10) 授業外の制度(TOFEL, TOEIC 等)の導入をどう思いますか。

1. 非常によいことである　　2. よいことである
3. 希望者にのみ課すべきである　　4. 学習負担が大きいので再考すべきである
5. 導入する必要は全くない

Q25. 実践科目の初修外国語について，以下の質問にお答えください。

SQ 1) あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何ですか。**（複数回答可）**

1. 初修外国語の読解力の向上
2. 初修外国語の会話力の向上
3. 専門科目を学ぶ基礎
4. 当該外国語の国の文化・社会・歴史を学ぶ
5. 就職活動・大学院進学に生かす
6. 初修外国語を修得して国際社会に生きる
7. 授業を通して人間的に成長する
8. 教員の人間性に触れる
9. この科目を学ぶ意義はない
0. よくわからない

SQ 2) この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。**（複数回答可）**

1. 授業の適正なレベル
2. 授業のわかりやすさ
3. 外国語を学ぶ楽しさ
4. 高校までにない大学らしい教育内容
5. 教員との活発なやりとり
6. 教員の教える熱意
7. 教員の無駄話の多さ
8. 教室が騒がしく真面目さに欠ける
9. 何も感じることがなく不満
0. よくわからない

SQ 3) この科目の授業について，あなたは満足していますか。

1. 非常に満足している
2. 満足している
3. どちらともいえない
4. 不満である
5. 非常に不満である

SQ 4) この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。

1. 現行のままでよい
2. 現行より増やす方がよい
3. 現行より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. 初修外国語は履修する必要はない

SQ 5) この科目の授業シラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。

1. 大いに利用した
2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった
4. 全く利用しなかった
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 6) 実際の授業とシラバスとの関係はどうですか。

1. シラバス通り進むのでよい
2. シラバス通り進まないのでよくない
3. シラバス通りであるが授業はよくない
4. シラバス通りではないけど授業はよい
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 7) ネイティブ・スピーカーの授業はどう思いますか。

1. もっと増やす方がよい
2. 現行のままでよい
3. もっと減らす方がよい
4. 不要である
5. 自分の受講の時はネイティブの授業はなかった

SQ 8）成績の評価方法についてどう思いますか。

1. 筆記と口頭の定期試験で評価すべきである
2. 筆記の定期試験だけで評価すべきである
3. 口頭の定期試験だけで評価すべきである
4. 演習の性格から毎回の授業だけで評価すべきである
5. レポート（発表・提出）によって評価すべきである

SQ 9）教員の成績のつけ方についてどう思いますか。

1. 適切である　2. まあまあ適切である　3. 不適切である
4. あまり適切でない　5. よくわからない

SQ10）初修外国語の多様化と履修選択数について、どう思いますか。

1. 初修外国語は１科目選択するのがよい
2. 初修外国語は２科目選択するのがよい
3. 履修する初修外国語とその数を所属学部・学科が指定するのがよい
4. 初修外国語の多様化は興味関心がない
5. よくわからない

Q26. 実践科目の健康スポーツ科学実技について，以下の質問にお答え下さい。

SQ 1）あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何ですか。**（複数回答可）**

1. 生涯スポーツの発見　2. スポーツ技術の向上
3. 基礎体力の維持・向上　4. 健康の維持・増進
5. ストレスの発散　6. 友達とのコミュニケーション
7. 教員との触合い　8. 協調性の育成
9. この科目を学ぶ意義はない

SQ 2）この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。**（複数回答可）**

1. 授業の実技的な適正なレベル　2. 授業のわかりやすさ
3. 授業を学ぶ楽しさ　4. 高校とは違う大学らしい教育内容
5. 教員との活発なやりとり　6. 教員の教える熱意
7. 教員の指導技術のレベルの高さ　8. 教員の指導技術のレベルの低さ
9. 何も感じるものがなく不満

SQ 3）この科目の授業について，あなたは満足していますか。

1. 非常に満足している　2. 満足している　3. どちらともいえない
4. 不満だ　5. 非常に不満だ

SQ 4）この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。

1. 現行のままでよい　2. 現行より増やす方がよい　3. 現行より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. よくわからない

SQ 5) この授業の種目数についてどう思いますか

1. 現行の種目数でよいと思う
2. 種目数が少ないと思う
3. 種目数は多いと思う
4. １種目でなく複数の種目を受講したい
5. よくわからない

SQ 6) シラバスは受講においてどのくらい利用しましたか

1. 大いに利用した
2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった
4. 全く利用しなかった
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 7) 実際の授業とシラバスとの関係はどうですか

1. シラバス通り進むのでよい
2. シラバス通り進まないのでよくない
3. シラバス通りであるが授業はよくない
4. シラバス通りではないが授業はよい
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 8) 成績の評価方法についてどう思いますか

1. 実技テストを重視して評価すべきである
2. レベルアップ度を重視して評価すべきである
3. 取り組む姿勢を重視して評価すべきである
4. ルール等の理解度を重視して評価すべきである
5. 出欠席を重視して評価すべきである

SQ 9) 教員の成績のつけ方についてどう思いますか。

1. 適切である
2. まあまあ適切である
3. 不適切である
4. あまり適切でない
5. よくわからない

Q27. 専門基礎科目について，受講者のみ以下の質問にお答え下さい。

SQ 1) あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何ですか。**(複数回答可)**

1. 基礎学力の習得
2. 基礎的技能の向上
3. 専門科目のための知識の習得
4. 理数系科目の応用能力の向上
5. 問題解決能力の向上
6. 論理的思考能力の向上
7. 表現能力の向上
8. 教員の人間性に触れる
9. この科目を学ぶ意義はない

SQ 2) この科目の授業であなたが感じたことは何ですか。**(複数回答可)**

1. 授業の適正なレベル
2. 授業のわかりやすさ
3. 学ぶ楽しさ
4. 高校とは違う大学らしい教育内容
5. 教員との活発なやりとり
6. 教員の教える熱意
7. 教員の指導技術のレベルの高さ
8. 教員の指導技術のレベルの低さ
9. 何も感じるものがなく不満

SQ 3) この科目の授業について，あなたは満足していますか。

1. 非常に満足している　2. 満足している　3. どちらともいえない
4. 不満だ　5. 非常に不満だ

SQ 4) この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。

1. 現行のままでよい
2. 現行より増やす方がよい
3. 現行より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. よくわからない

SQ 5) シラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。

1. 大いに利用した　2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった　4. まったく利用しなかった
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 6) 実際の授業とシラバスとの関係はどうですか。

1. シラバス通り進むのでよい
2. シラバス通り進まないのでよくない
3. シラバス通りであるが授業はよくない
4. シラバス通りではないが授業はよい
5. 自分の受講の時はシラバスはなかった

SQ 7) 成績の評価方法についてどう思いますか。

1. 筆記の定期試験で評価すべきである
2. 試験，レポート，出席などの総合点で評価すべきである
3. レポートによって評価すべきである
4. 毎回の授業の普段点を重視して評価すべきである
5. 出欠席を重視して評価すべきである

SQ 8) 教員の成績のつけ方についてどう思いますか。

1. 適切である　2. まあまあ適切である　3. 不適切である
4. あまり適切でない　5. よくわからない

教育地域科学部の方のみ，次の質問項目Q28～Q61についてお答えください。

Q28．教育地域科学部への受験はいつ決めましたか

1. 小・中学校　2. 高校1・2年生　3. 高校3年生春　4. 高校3年生夏
5. 高校3年生秋　6. センター試験受験前　7. センター試験受験後
8. その他

Q29．教育地域科学部への受験は誰の勧めで決めましたか

1. 自分　2. 高校の先生　3. 親　4. 友達　5. 先輩
6. 塾・予備校の先生　7. その他

Q30．教育地域科学部への入学はあなたの希望どおりでしたか

1. 全く希望どおりであった　2. まずまず希望どおりであった
3. あまり希望どおりではなかった　4. 全く希望どおりではなかった
5. その他

Q31．教育地域科学部に入学した理由は何ですか。

1. 将来，地域に関わる仕事に就きたいと思ったから
2. 将来，教職に就きたいと思ったから
3. 幅広く色々な学問を勉強できるのがよいと思ったから
4. 地元の大学であり，自分の専攻したい学問がよく分からなかったから
5. どこでも良いから大学に入り，4年間の大学生活を楽しみたかったから
6. 高校の先生が勧めるので何となく
7. 希望する研究分野やその分野の先生にあこがれたから
8. 「教育地域科学」という新しい分野を勉強できると思ったから
9. その他

Q32＆Q33．今あなたは，大学に何を期待していますか。最も期待していることをQ32に，2番目に期待していることをQ33の回答欄に記入してください。

1. 学問に対する取り組み方法を身につける
2. 専門的な知識を身につける
3. 社会人になったときに，すぐに役に立つ知識・技術・技能を身につける
4. 広く教養を身につける
5. 物事を総合的に判断する能力を養う
6. 学習だけでなく，サークル活動・社会活動等を通じて人間性を養う
7. 各種の免許や資格を取得する
8. その他

Q34. あなたの教育地域科学部に対するイメージをお聞かせ下さい。

1. 明るい希望にあふれている　　2. どちらかというと明るい
3. 特別なイメージはない　　4. どちらかというと暗い
5. 暗くて希望が持てない

Q35. あなたは教育地域科学部での勉学に満足していますか。

1. とても満足している　　2. 満足している
3. どちらともいえない　　4. 不満である
5. とても不満である

Q36. 教育地域科学部の教員の名前（姓）をどの程度知っていますか。

1. １０人未満　2. １０人～１９人　3. ２０人～２９人　4. ３０人～３９人
5. ４０人以上

Q37. 教員の授業の方法について，どう思いますか。

1. 分かりやすい授業が多い
2. どちらかといえば分かりやすい授業が多い
3. 分かりやすい授業と分かりにくい授業が半々である
4. どちらかといえば分かりにくい授業が多い
5. 分かりにくい授業が多い
6. その他

Q38. 授業内容のレベルについて，どう思いますか。

1. 難しすぎる授業が多い　　2. どちらかといえば難しい授業が多い
3. 難しい授業とやさしい授業が半々である　4. どちらかといえばやさしい授業が多い
5. やさしすぎる授業が多い　　6. その他

Q39. ゼミなどの少人数教育について，お聞きします。

1. 勉学意欲が高まるので，少人数教育の機会を大幅に増やして欲しい
2. 少人数教育の機会をもう少し増やして欲しい
3. 現在実施されているもので，充分である
4. 少人数教育の機会をもう少し減らして欲しい
5. 勉学意欲が低下するので，少人数教育の機会を大幅に減らして欲しい
6. 少人数教育は不要である
7. わからない

Q40. あなたは週に何コマの少人数教育を受けていますか。

1. ０コマ　2. １コマ　3. ２コマ　4. ３コマ　5. ４コマ
6. ５コマ　7. ６コマ　8. ７コマ　9. ８コマ以上

Q41. 少人数での授業について，教員一人に対して何人の学生で受けているものが多いですか。

1. 1 人～2 人　2. 3 人～4 人　3. 5 人～6 人　4. 7 人～9 人　5. 10 人～14 人
6. 15 人～19 人　7. 20 人～29 人　8. 30 人以上　9. わからない

Q42．少人数教育では，教員一人に対して，何人ほどの学生が最適だと思いますか。

1.　1 人～2 人　　2.　3 人～4 人　　3.　5 人～6 人　4.　7 人～9 人　　5.　10 人～14 人
6.　15 人～19 人　　7.　20 人～29 人　　8.　30 人以上　　9.　わからない

Q43．あなたは今，どのような学び方をしていますか。

1.　与えられたカリキュラムの中で幅広くいろいろなことを学ぶ
2.　ある特定の学問領域を深く掘り下げて学ぶ
3.　学校とは無関係に自分の興味・関心に従って学ぶ
4.　単位を落とさない程度に勉強して，サークル活動・バイト・趣味等に打ち込んでいる
5.　勉強はほとんどしない
6.　その他

Q44．あなたは週に平均して何日，図書館を利用していますか。

1.　１日　　2.　２日　　3.　３日　　4.　４日　　5.　５日　　6.　６日　　7.　７日
8.　０日

Q45．図書館を利用する主な目的は何ですか。**（複数回答可）**

1.　図書の閲覧　　2.　雑誌の閲覧　　3.　新聞の閲覧　　4.　辞書・事典等の利用
5.　講義・実験等の予習・復習　　6.　レポートの作成　　7.　その他

Q46．授業評価アンケートが実施されていますが，教員の参考になっていると思いますか。

1.　参考になっている教員が多い
2.　どちらかといえば参考になっている教員が多い
3.　参考になっている教員と参考になっていない教員が半々である
4.　どちらかといえば参考になっていない教員が多い
5.　参考になっていない教員が多い
6.　わからない

Q47．学級教員やチューター制度について，お聞きします。

1.　非常に役に立っており，一層の充実を希望する　　2.　役に立っている
3.　いざというとき，いないと困る　　4.　役に立っていない
5.　全く役に立っておらず，不要である　　6.　その他

Q48．カリキュラムに関する，ガイダンスやオリエンテーションの実施について，どう思いますか。

1.　必要なタイミングで適度に実施されており，充分である
2.　回数を増やして，きめ細かく対応して欲しい
3.　不要なものが多すぎるので，精選して欲しい
4.　ガイダンスなどは，必要ない
5.　その他

Q49．勉学を進める上でのカリキュラム構成について，お聞きします。

1. うまく構成されており，年次進行に伴い系統的に専門性を高めることができる
2. おおかたうまく構成されている
3. コア・カリキュラム以外で入れ替えたほうがよいものが多くある
4. カリキュラムの系統性が不明確で，大幅に改善すべきである
5. わからない
6. その他

Q50．あなたは１年次にどのような専門科目を最も望みますか。

1. 大学教員と親しく語り，学び方を学ぶ少人数形式のゼミ
2. インターンシップのような実習科目
3. 現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目
4. 専門の学問体系について学べる概論
5. その他

Q51．あなたは将来の進路をどのように考えていますか

1. 大学院などへ進学する
2. 他の進路を求めて，他大学（学部）・専門学校などを再受験する
3. 民間企業に就職する
4. 公務員試験を受験する
5. 教員採用試験を受験する
6. ベンチャー企業をおこす
7. その他

Q52＆Q53．あなたが将来の職業等を決めるにあたって重視する点は何ですか。次の中から２つ選んで，最も重視する点をQ52に，次に重視する点をQ53の回答欄に記入してください。

1. 大学で学んだ専門性が生かせる
2. 働きがいがある
3. 収入が多い
4. 仕事が楽である
5. 身分が安定している
6. 一流（有名な）会社である
7. 職場が郷里に近い
8. その他

Q54．専門教育のカリキュラムは，将来あなたの就職に有利な条件を満たしていますか。

1. 十分に満たしている
2. どちらかといえば満たしている
3. どちらかといえば満たしていない
4. まったく満たしていない
5. わからない

Q55．学生の多様な進路希望に対して，学部はどのように対応して欲しいと思いますか。次の選択肢中から最も強く希望するもの１つを選んで下さい。

1. 大学院進学指導に努力すべきである
2. 民間企業の職場開拓に努力すべきである
3. 公務員試験の多数合格を目指して努力すべきである

4. 教員採用試験への多数合格を目指して努力すべきである
5. 多様な資格が取れるように努力すべきである
6. その他

Q56. あなたは教職をどの程度希望していますか。
1. 入学前から教職を希望しており，いまも教職を希望している
2. 入学前は教職を希望していたが，いまは教職以外を希望している
3. 入学前は教職以外を希望していたが，いまは教職を希望している
4. 入学前から教職以外を希望しており，いまも教職以外を希望している

Q57. 前問において希望の変更の理由，あるいは希望の継続の契機は，何ですか。
1. 大学での教員のアドバイスを通して
2. 大学での授業を通して
3. 大学でのサークル・クラブ活動を通して
4. 教育実習を通して
5. 大学以外での体験を通して
6. その他

Q58. 教育地域科学部は，地域学部へと改組されました。学部の変化について，どのように感じていますか。
1. 多いに結構である
2. 多少残念ではあるが，今後の発展を期待したい
3. 特に関心がない
4. 淋しいが時代の流れであり，仕方がない
5. 大変残念である

以下 3 つは，<u>教員免許取得を希望している方のみ</u>，お答え下さい。

Q59. あなたが取得を希望する免許はどれですか。
1. 小学校教諭　2. 中学校（高校）教諭　3. 幼稚園教諭　4. 養護学校教諭

Q60. 教員免許状は教員採用の基礎資格以外に，一般の就職に際してどの程度価値があると考えますか。
1. 教育産業（塾）など有効な分野がある
2. 一般的な信用があり，民間企業への就職に際しても考慮される
3. 教員採用の基礎資格でしかなく，他にはほとんど価値がない
4. 市場価値があるかどうかは別として，免許を持っているといざというときに安心

Q61. 教職への道が困難であるとすれば，あなたはどのような進路を選びますか。
1. 大学院などへ進学する
2. 他の進路を求めて，他の大学（学部）・専門学校などを再受験する
3. 民間企業へ就職する
4. 公務員試験を受験する
5. なおかつ教職を求めて待つ
6. 塾・専門学校などで教える
7. その他

（教育地域科学部の方の質問は以上で終りです。ご協力ありがとうございました。）

地域学部の方のみ、次の質問項目Q28～Q61についてお答えください。

Q28．地域学部への受験はいつ決めましたか。

1. 小・中学校　2. 高校1・2年生　3. 高校3年生春　4. 高校3年生夏
5. 高校3年生秋　6. センター試験受験前　7. センター試験受験後
8. その他

Q29．地域学部への受験は誰の勧めで決めましたか。

1. 自分　2. 高校の先生　3. 親　4. 友達　5. 先輩
6. 塾・予備校の先生　7. その他

Q30．地域学部への入学はあなたの希望どおりでしたか。

1. 全く希望どおりであった　2. まずまず希望どおりであった
3. あまり希望どおりではなかった　4. 全く希望どおりではなかった
5. その他

Q31．地域学部に入学した理由は何ですか。

1. 将来，地域に関わる仕事に就きたいと思ったから
2. 将来，教職に就きたいと思ったから
3. 幅広く色々な学問を勉強できるのがよいと思ったから
4. 地元の大学であり，自分の専攻したい学問がよく分からなかったから
5. どこでも良いから大学に入り，4年間の大学生活を楽しみたかったから
6. 高校教師が勧めるので何となく
7. 希望する研究分野やその分野の先生にあこがれたから
8. 「地域学」という新しい分野を勉強できると思ったから
9. その他

Q32＆Q33．今あなたは，大学に何を期待していますか。最も期待していることをQ32に，2番目に期待していることをQ33の回答欄に記入してください。

1. 学問に対する取り組み方法を身につける
2. 専門的な知識を身につける
3. 社会人になったときに，すぐに役に立つ知識・技術・技能を身につける
4. 広く教養を身につける
5. 物事を総合的に判断する能力を養う
6. 学習だけでなく，サークル活動・社会活動等を通じて人間性を養う
7. 各種の免許や資格を取得する
8. その他

Q34．あなたの地域学部に対するイメージをお聞かせ下さい。

1. 明るい希望にあふれている　2. どちらかというと明るい
3. 特別なイメージはない　4. どちらかというと暗い
5. 暗くて希望が持てない

Q35. あなたは地域学部での勉学に満足していますか。

1. とても満足している　2. 満足している　3. どちらともいえない
4. 不満である　5. とても不満である

Q36. 地域学部の教員の名前（姓）をどの程度知っていますか。

1. １０人未満　2. １０人～１９人　3. ２０人～２９人　4. ３０人～３９人
5. ４０人以上

Q37. 教員の授業の方法について，どう思いますか。

1. 分かりやすい授業が多い
2. どちらかといえば分かりやすい授業が多い
3. 分かりやすい授業と分かりにくい授業が半々である
4. どちらかといえば分かりにくい授業が多い
5. 分かりにくい授業が多い
6. その他

Q38. 授業内容のレベルについて，どう思いますか。

1. 難しすぎる授業が多い　2. どちらかといえば難しい授業が多い
3. 難しい授業とやさしい授業が半々である　4. どちらかといえばやさしい授業が多い
5. やさしすぎる授業が多い　6. その他

Q39. ゼミなどの少人数教育について，お聞きします。

1. 勉学意欲が高まるので，少人数教育の機会を大幅に増やして欲しい
2. 少人数教育の機会をもう少し増やして欲しい
3. 現在実施されているもので，充分である
4. 少人数教育の機会をもう少し減らして欲しい
5. 勉学意欲が低下するので，少人数教育の機会を大幅に減らして欲しい
6. 少人数教育は不要である
7. わからない

Q40. あなたは週に何コマの少人数教育を受けていますか。

1. ０コマ　2. １コマ　3. ２コマ　4. ３コマ　5. ４コマ
6. ５コマ　7. ６コマ　8. ７コマ　9. ８コマ以上

Q41. 少人数での授業について，教員一人に対して何人の学生で受けているものが多いですか。

1. 1 人～2 人　2. 3 人～4 人　3. 5 人～6 人　4. 7 人～9 人　5. 10 人～14 人
6. 15 人～19 人　7. 20 人～29 人　8. 30 人以上　9. わからない

Q42. 少人数教育では，教員一人に対して，何人ほどの学生が最適だと思いますか。

1. 1 人～2 人　2. 3 人～4 人　3. 5 人～6 人　4. 7 人～9 人　5. 10 人～14 人
6. 15 人～19 人　7. 20 人～29 人　8. 30 人以上　9. わからない

Q43．あなたは今，どのような学び方をしていますか。

1. 与えられたカリキュラムの中で幅広くいろいろなことを学ぶ
2. ある特定の学問領域を深く掘り下げて学ぶ
3. 学校とは無関係に自分の興味・関心に従って学ぶ
4. 単位を落とさない程度に勉強して，サークル活動・バイト・趣味等に打ち込んでいる
5. 勉強はほとんどしない
6. その他

Q44．あなたは週に平均して何日，図書館を利用していますか。

1. １日　2. ２日　3. ３日　4. ４日　5. ５日　6. ６日　7. ７日
8. ０日

Q45．図書館を利用する主な目的は何ですか。**（複数回答可）**

1. 図書の閲覧　2. 雑誌の閲覧　3. 新聞の閲覧　4. 辞書・事典等の利用
5. 講義・実験等の予習・復習　6. レポートの作成　7. その他

Q46．授業評価アンケートが実施されていますが，教員の参考になっていると思いますか。

1. 参考になっている教員が多い
2. どちらかといえば参考になっている教員が多い
3. 参考になっている教員と参考になっていない教員が半々である
4. どちらかといえば参考になっていない教員が多い
5. 参考になっていない教員が多い
6. わからない

Q47．学級教員やチューター制度について，お聞きします。

1. 非常に役に立っており，一層の充実を希望する
2. 役に立っている
3. いざというとき，いないと困る
4. 役に立っていない
5. 全く役に立っておらず，不要である
6. その他

Q48．カリキュラムに関する，ガイダンスやオリエンテーションの実施について，どう思いますか。

1. 必要なタイミングで適度に実施されており，充分である
2. 回数を増やして，きめ細かく対応して欲しい
3. 不要なものが多すぎるので，精選して欲しい
4. ガイダンスなどは，必要ない
5. その他

Q49．勉学を進める上でのカリキュラム構成について，お聞きします。

1. うまく構成されており，年次進行に伴い系統的に専門性を高めることができる
2. おおかたうまく構成されている
3. コア・カリキュラム以外で入れ替えたほうがよいものが多くある
4. カリキュラムの系統性が不明確で，大幅に改善すべきである
5. わからない
6. その他

Q50．あなたは１年次にどのような専門科目を最も望みますか。

1. 大学教員と親しく語り，学び方を学ぶ少人数形式のゼミ
2. インターンシップのような実習科目
3. 現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目
4. 専門の学問体系について学べる概論
5. その他

Q51．あなたは将来の進路をどのように考えていますか

1. 大学院などへ進学する
2. 他の進路を求めて，他大学（学部）・専門学校などを再受験する
3. 民間企業に就職する
4. 公務員試験を受験する
5. 教員採用試験を受験する
6. ベンチャー企業をおこす
7. その他

Q52＆Q53．あなたが将来の職業等を決めるにあたって重視する点は何ですか。次の中から２つ選んで，最も重視する点をQ52に，次に重視する点をQ53の回答欄に記入してください。

1. 大学で学んだ専門性が生かせる
2. 働きがいがある
3. 収入が多い
4. 仕事が楽である
5. 身分が安定している
6. 一流（有名な）会社である
7. 職場が郷里に近い
8. その他

Q54．専門教育のカリキュラムは，将来あなたの就職に有利な条件を満たしていますか。

1. 十分に満たしている
2. どちらかといえば満たしている
3. どちらかといえば満たしていない
4. まったく満たしていない
5. わからない

Q55．学生の多様な進路希望に対して，学部はどのように対応して欲しいと思いますか。次の選択肢中から最も強く希望するもの１つを選んで下さい。

1. 大学院進学指導に努力すべきである
2. 民間企業の職場開拓に努力すべきである
3. 公務員試験の多数合格を目指して努力すべきである

4. 教員採用試験への多数合格を目指して努力すべきである
5. 多様な資格が取れるように努力すべきである
6. その他

Q56. あなたは教職をどの程度希望していますか。
1. 入学前から教職を希望しており，いまも教職を希望している
2. 入学前は教職を希望していたが，いまは教職以外を希望している
3. 入学前は教職以外を希望していたが，いまは教職を希望している
4. 入学前から教職以外を希望しており，いまも教職以外を希望している

Q57. 前問において希望の変更の理由，あるいは希望の継続の契機は，何ですか。
1. 大学での教員のアドバイスを通して
2. 大学での授業を通して
3. 大学でのサークル・クラブ活動を通して
4. 教育実習を通して
5. 大学以外での体験を通して
6. その他

Q58. 教育地域科学部は，地域学部へと改組されました。学部の変化について，どのように感じていますか。
1. 多いに結構である
2. 多少残念ではあるが，今後の発展を期待したい
3. 特に関心がない
4. 淋しいが時代の流れであり，仕方がない
5. 大変残念である

以下 3 つは，<u>教員免許取得を希望している方のみ</u>，お答え下さい。

Q59. あなたが取得を希望する免許はどれですか。
1. 小学校教諭　2. 中学校（高校）教諭　3. 幼稚園教諭　4. 養護学校教諭

Q60. 教員免許状は教員採用の基礎資格以外に，一般の就職に際してどの程度価値があると考えますか。
1. 教育産業（塾）など有効な分野がある
2. 一般的な信用があり，民間企業への就職に際しても考慮される
3. 教員採用の基礎資格でしかなく，他にはほとんど価値がない
4. 市場価値があるかどうかは別として，免許を持っているといざというときに安心

Q61. 教職への道が困難であるとすれば，あなたはどのような進路を選びますか。
1. 大学院などへ進学する
2. 他の進路を求めて，他の大学（学部）・専門学校などを再受験する
3. 民間企業へ就職する
4. 公務員試験を受験する
5. なおかつ教職を求めて待つ
6. 塾・専門学校などで教える
7. その他

地域学部の方の質問は以上で終りです。ご協力ありがとうございました。

ここからの設問には、医学科・生命科学科・保健学科共通のものと、それぞれの学科独自のものがあります。指示に従って回答してください。

［医学科・生命科学科・保健学科共通］

Q28．将来，大学院に進学を希望しますか。

1. 鳥取大学の大学院に進学したい
2. 他大学の大学院に進学したい
3. 大学は特定していないが，大学院に進学したい
4. 希望しない
5. わからない

Q29．鳥取大学医学部に入学した結果，現在の学生生活にあなたは満足していますか。

1. 大変満足している　　2. 満足している　　3. やや不満である
4. 大変不満足である

Q30＆Q31．医学部の講義で最も良いと思われることは何ですか。第１番目の理由をQ30に，第２番目の理由をQ31の回答欄に記入してください。

1. 教官がよく準備している　　2. 説明が明快で理解しやすい
3. 重点を要約して説明している　　4. 講義の進度が適当である
4. 基礎的なことから説明している　　5. その他

Q32＆Q33．医学部の講義で最も悪いと思われることは何ですか。第１番目の理由をQ32に，第２番目の理由をQ33の回答欄に記入してください。

1. 説明の要点がわからない
2. 理解しているかどうかに配慮せず，独断的である
3. 講義が体系的でない
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない
5. 試験が難しすぎる
6. その他

Q34．医学部のカリキュラムは過密で時間の余裕がないと考えますか。

1. 過密と思う　　2. 比較的余裕がある　　3. 余裕がありすぎる

Q35．あなたは医学部規則に沿って履修方法，試験及び成績評価が行われていることを知っていますか。

1. 知っている　　2. 知らない

Q36．あなたのクラス担当の顧問教官・学級教官名についてお聞きします。

1. 知っている　　2. 知らない　　3. おそらく誰という程度

Q37．顧問教官・学級教官との接触はどうですか。

1.　よく世話になる　　2.　あまり世話にならない　　3.　ない

Q38．クラス担当の顧問教官・学級教官は必要でしょうか。

1.　必要である　　2.　不必要である

Q39．米子キャンパスで，現在サークル活動をしていますか。

1.　文化系のサークルに所属している
2.　体育系のサークルに所属している
3.　文化系・体育系の両方のサークルに所属している
4.　サークル活動はしていない

Q40．サークル活動を行っている人のみ答えてください。講義のある期間中において，１週あたりどれくらいの日数をサークル活動に使っていますか。

1.　１日　　2.　２日　　3.　３日　　4.　４日　　5.　５日

Q41．米子キャンパスのクラブ・サークル活動のための施設について質問します。

1.　とてもよい　　2.　よい　　3.　普通　　4.　あまりよくない　　5.　よくない

Q42．医学部の１年次は湖山キャンパスで過ごしますが，その意義についてどう考えますか。

1.　一般教育をしっかり身につける場として必要である
2.　他学部の学生と交流を深めるうえで重要である
3.　湖山キャンパスでの学生生活は意味がない。
4.　湖山キャンパスでの専門教育を充実してほしい。
5.　わからない

Q43．入学時のキャンパスについて質問します。

1.　従来通り、湖山キャンパスで１年間過ごした方がよい
2.　米子地区で一般教育も受講できるようにして，入学時から米子キャンパスで過ごした方がよい
3.　湖山キャンパスでの教育を前期で終えて，後期から米子キャンパスに移った方がよい
4.　わからない

Q44．高等学校で履修した理系科目について，該当するものに印を付けてください。

1.　生物系　　2.　物理系　　3.　化学系　　4.　地学系　　5.　履修していない

医学科の方のみ，次の質問項目Q45～Q49についてお答えください。

Q45．医学科の実験・実習設備について質問します。

1.　充実している　　2.　まあまあである　　3.　不備である　　4.　わからない

Q46．医学科の講義はどの程度理解できますか

1.　８０％以上の講義が理解できる
2.　５０％以上の講義が理解できる
3.　２０％以上の講義が理解できる
4.　理解できる講義は２０％未満である

Q47．医学に関わる分野に従事する者として倫理観を育成する方法について最も重要と思うのは，どれですか

1.　入学者の選抜のときに適正を判断する
2.　一般教育において幅広い人間的素養と人間理解能力を体得する
3.　入学後の早い時期に病院見学などを通じ医療に従事する人々の活動について体験し，理解を深める
4.　その他

Q48．将来専攻したい分野はどれですか。

1.　基礎医学　　2.　社会医学　　3.　外科系臨床医学　　4.　内科系臨床医学
5.　わからない

Q49．卒後臨床研修を行いたいところはどこですか

1.　鳥取大学附属病院　　2.　鳥取県内の研修指定病院　　3.　県外の大学付属病院
4.　県外の研修指定病院　　5. わからない

（医学科の方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。）

生命科学科の方のみ，次の質問盲目Q45～Q53についてお答えください。

Q45．生命科学科の実験・実習の設備について質問します。

1.　充実している　　2.　まあまあである　　3.　不備である　　4.　極めて貧弱である

Q46．カリキュラムについてどう思いますか，強く思うものを１つ選んでください。

1.　満足している　　2.　科目の選択の幅がせますぎる
3.　開設科目にかたよりがある　　4.　開設科目が広範すぎる
5.　開設科目の間の関連性が明確でない　　6.　他にも開設してほしい科目がある
7.　特に何も思わない　　8.　その他

Q47．今後どの様な分野のカリキュラムを取り入れてほしいですか。

1.　遺伝子治療学・再生医療学　　2.　ゲノム創薬・製薬学
3.　生物資源応用学　　4.　バイオ産業システム学
5.　教員免許用科目　　6.　その他

Q48. 医学系の講義に対する満足度はどの程度ですか。

1. 大いに満足　2. 満足　3. やや満足　4. 不満　5. 大いに不満

Q49. 医学系の講義レベルについてどう思いますか。

1. むつかしい講義が多い　2. やさしすぎる講義が多い
3. むつかしい・やさしいが半々

Q50. 生命科学系の講義に対する満足度はどの程度ですか。

1. 大いに満足　2. 満足　3. やや満足　4. 不満　5. 大いに不満

Q51. 生命科学系の講義のレベルについてどう思いますか。

1. むつかしい講義が多い　2. やさしすぎる講義が多い
3. むつかしい・やさしいが半々

Q52. あなたどの様な職業に就きたいと思っていますか。

1. 国公立および民間企業の研究職・技術開発職
2. 国公立および民間企業のサービス部門や営業職
3. 医療関連の専門職（医師、看護師、検査技師など）
4. 報道・出版関連の学術職
5. 教育職および公務員
6. その他
7. 未定

Q53. 生命科学科で学んだことが将来の役に立つと思いますか。

1. 大いに役に立つと思う
2. ある程度役に立つと思う
3. ほとんど役に立たないと思う

（生命科学科の方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。）

保健学科看護学専攻の方のみ，次の質問項目Q45～Q53についてお答えください。

Q45. 保健学科の実験、実習の設備について質問します。

1. 充実している　2. まあまあである　3. 不備である　4. わからない

Q46. カリキュラムについてどう思いますか，強く思うものを１つ選んで下さい。

1. 満足している　2. 科目の選択の幅がせますぎる
3. 開設科目にかたよりがある　4. 開設科目が広範すぎる
5. 開設科目の間の関連性が明確でない　6. その他
7. 特に何も思わない

Q47＆Q48. 次の湖山地区での講義について質問します。次の中から第１番目の考えをQ47に，第２番目をQ48の回答欄に記入してください。

1. 大体満足している　　2. 講義（取得単位）が少なすぎる
3. 講義（取得単位）が多すぎる　　4. 一般教育科目をもっと増やして欲しい
5. 専門科目をもっと増やして欲しい　6. わからない

Q49. １年次湖山地区の教育から２年次以降の米子への進級基準について質問します。
1. 妥当である　　2. きびしすぎる　　3. やさしすぎる　　4. わからない

Q50＆Q51. 今後カリキュラムに取り入れる必要が最も高まると思われる分野を選んでください。第１番目のものをQ50 に，第２番目をQ51 の回答欄に記入してください。
1. 遺伝看護学（分子生物学）　　2. 看護倫理学
3. 応用看護学　　4. 海外との連携を強化した看護学
5. 救急看護学　　6. 東洋医学を加味した看護学
7. その他

Q52. 医学系の講義に対する理解度について質問します。
1. よく理解できる　　2. 大体理解できる　　3. 理解できないことが多い
4. やさしすぎる　　5. わからない

Q53. あなたの希望する職業分野について質問します。
1. 官公庁（都道府県、市町村）行政　　2. 都市の医療施設
3. 地域の医療施設　　4. 保健学（看護学）の研究者、教育者
5. その他　　6. わからない

（保健学科看護学専攻の方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。）

保健学科検査技術科学専攻の方のみ，次の質問項目Q45～Q53 についてお答えください。

Q45. 保健学科の実験、実習の設備について質問します。
1. 充実している　　2. まあまあである　　3. 不備である　　4. わからない

Q46. カリキュラムについてどう思いますか，強く思うものを１つ選んで下さい。
1. 満足している　　2. 科目の選択の幅がせますぎる
3. 開設科目にかたよりがある　　4. 開設科目が広範すぎる
5. 開設科目の間の関連性が明確でない　　6. その他
7. 特に何も思わない

Q47＆Q48. １年次の湖山地区での講義について質問します。次の中から第１番目の考えをQ47 に，第２番目をQ48 の回答欄に記入してください。
1. 大体満足している　　2. 講義（取得単位）が少なすぎる
3. 講義（取得単位）が多すぎる　　4. 一般教育科目をもっと増やして欲しい
5. 専門科目をもっと増やして欲しい　6. わからない

Q49. １年次湖山地区の教育から２年次以降の米子への進級基準について質問します。
1. 妥当である　　2. きびしすぎる　　3. やさしすぎる　　4. わからない

Q50＆Q51．今後カリキュラムに取り入れる必要が最も高まると思われる分野を選んでください。第１番目のものをQ50 に，第２番目をQ51 の回答欄に記入してください。

1. 遺伝検査学（分子生物学）　　2. 応用検査学
3. 海外との連携を強化した検査学　　4. ウイルス検査学
5. その他

Q52．医学系の講義に対する理解度について質問します。

1. よく理解できる　　2. 大体理解できる　　3. 理解できないことが多い
4. やさしすぎる　　5. わからない

Q53．あなたの希望する職業分野について質問します。

1. 官公庁（都道府県、市町村）行政　　2. 都市の医療施設
3. 地域の医療施設　　4. 保健学（検査学）の研究者、教育者
5. その他
6. わからない

質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

工学部についてお尋ねいたします。

Q28. 卒業研究に着手していますか。

1. 着手している（希望研究室）　2. 着手している（希望研究室でない）　3. していない

Q29. あなたの所属学科は第一志望ですか。

1. 第１志望　2. 第２志望　3. 志望学科でなかった

Q30. あなたの現在の満足度はいかがですか。

1. 満足である　2. やや満足　3. やや不満足　4. 不満足　5. 判らない

Q31. あなたはどのようなタイプの技術者になりたいですか。

1. 広い視野と管理能力を持った技術者
2. 高度な専門的知識と技術を有する実践的技術者
3. 指示されたことを理解し、確実に行う実践的技術者
4. 研究・開発を行う専門知識を持った研究者
5. 技術者になろうと思っていない
6. 何も考えていない

Q32. 将来どのような職業につきたいですか。

1. 機械関連　2. 建設関連　3. 学関連　4. 電気関連　5. 情報関連
6. 農林水産関連　7. 医療関連　8. 商社・金融・サービス関連　9. 官公庁
0. 学生・その他

Q33.「鳥取大学工学部の教育目的・教育目標」などを知っていますか。

1. 知っている　2. 聞いたことがある　3. どこかで見たことがある　4. 知らない

Q34. どこで知りましたか。（前問で４以外の方のみお答えください。）

1. 工学部長から聞いた　2. パンフレットで見た　3. インターネットで知った
4. 大学説明会で聞いた　5. 他の人から聞いた　6. その他

Q35.「所属学科の教育目的・教育目標」などを知っていますか。

1. 知っている　2. 聞いたことがある　3. どこかで見たことがある　4. 知らない

Q36. どこで知りましたか。（前問で４以外の方のみお答えください。）

1. 所属学科の教授・助教授から聞いた　2. パンフレットで見た
3. インターネットで知った　4. 大学説明会で聞いた
5. 他の人から聞いた　6. その他

鳥取大学工学部への入学

Q37. 鳥取大学工学部への受験はいつ決めましたか。

1. 小・中学生　2. 高校 1・2 年生　3. 高校 3 年春　4. 高校 3 年夏　5. 高校 3 年秋
6. センター試験受験前　7. センター試験受験後　8. その他

Q38. 鳥取大学工学部への受験は誰の勧めで決めましたか。

1. 自分で決めた　2. 高校の先生の勧め　3. 親の勧め　4. 友達の勧め　5. その他

Q39. 鳥取大学工学部の情報はどこから入手しましたか。**(複数回答可)**

1. 大学のホームページ　2. 大学のパンフレット　3. 受験産業のホームページ
4. 受験産業のパンフレット　5. 受験雑誌　6. 学校の先生　7. その他

Q40. 鳥取大学工学部への入学方法についてお尋ねします。

1. 一般入試（前期）　2. 一般入試（後期）　3. 推薦入試　4. AO 入試
5. その他

Q41. 工学部に入学した理由は何ですか。

1. 自分の志望と一致し，勉強できるから　2. 自分の学力レベルで入学出来るから
3. 学費・生活費が安いから　4. 出身地だから
5. 有名な先生がいて，勉強・研究が出来るから
6. 出身地を出て一人暮らしがしたいから　6. その他

工学教育カリキュラム

Q42. あなたは所属学科の教育カリキュラムに何を期待しますか。

1. 将来，技術者として活躍するための知識を習得すること
2. 興味のあることについて学べること
3. 講義や実験など，また研究室で友達を作ること
4. 人間として教養を身につけること
5. あまり期待していない

Q43.「JABEE」を知っていますか。

1. 知っている　2. 知らない

Q44. 所属学科が「JABEE」を取得したことを知っていますか。

1. 知っている　2. 知らない

Q45. 学科の教育プログラムを理解していますか。

1. 理解している（自分の学習している段階を知っている）
2. 少し理解している（基礎科目、必修科目、選択科目の区別を知っている）
3. ほとんど理解していない（学習していることが判らない）
4. 理解していない（何を学習するか判らない）
5. その他

Q46. 専門科目（必修科目）はシラバスに基づいて講義が行われているか。
1. ほとんどの科目　2. 半分ほどの科目　3. ほとんどされていない　4. わからない

Q47. 専門科目（選択科目）はシラバスに基づいて講義が行われていますか。
1. ほとんどの科目　2. 半分ほどの科目　3. ほとんどされていない　4. わからない

Q48. シラバスに成績評価・採点基準が書いてあることを知っていますか
1. 知っている　2. 見たことがある　3. 知らない

Q49. 専門科目（必修科目）はシラバスに公開している評価基準で採点されていますか。
1. されている　2. ほとんどされている　3. ほとんどされていない
4. ぜんぜんされていない

Q50. 専門科目（選択科目）はシラバスに公開している評価基準で成績評価されていますか。
1. されている　2. ほとんどされている　3. ほとんどされていない
4. ぜんぜんされていない

工学教育カリキュラム（各学科のカリキュラム）

Q51. 所属学科の教育カリキュラムで十分な教育を受けることが出来ると思いますか。
1. 満足　2. やや満足　3. 普通　4. やや不満足　5. 不満足

Q52. 教育方針があり，系統立てた教育を受けることが出来ると思いますか。
1. 系統だっている　2. ばらばらで困っている　3. その他

Q53. 専門科目（講義科目）の内容について
1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. わらない

Q54. 専門科目（実験・演習）の内容について
1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. わらない

Q55. 専門科目（講義科目）の内容について
1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. わらない

Q56. 工学教育の講義でよいと思われることは何ですか。
1. 科目に興味がある　2. 講義が理解できる　3. 先生の教え方が良い
4. 単位が取り易い　5. 特にない　6. その他

Q57. 工学教育の講義内容についてどの様に思いますか。
1. 内容が優しすぎる　2. 内容が難しい　3. 内容が希薄である
4. 内容が多過ぎる　5. 講義の数が多過ぎる　6. 先生の教え方が良い
7. 先生の教え方が良くない　8. 宿題・レポートが多過ぎる
9. クラスの人数が多過ぎる　0. その他

教育組織・教育環境・学生への支援について

Q58. 所属学科の教員（法人前は教官）の研究分野はバランスがとれていると思いますか。
1. とれている　2. 普通　3. とれていない　4. わらない

Q59. 教育環境（講義室・図書館・学生会館・研究室など）は充実していますか。
1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. わらない

Q60. 図書館・リフレッシュルーム（自主学習室）などを利用して勉強しますか。
1. いつも利用している　2. たびたび利用している　3. 時々利用している
4. 利用していない

Q61. 鳥取の自然環境についていかがですか。
1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. わらない

Q62. 奨学金や授業料免除について充実していますか。
1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. わらない

Q63. 学級教官・チューター制について，役に立っていますか。
1. 役に立っている　2. あまり役に立っていない　3. なくても良い
4. 邪魔になる

Q64. 先生（教授・助教授・講師・助手）と話をしますか。
1. よく話をする　2. 時々話をする　3. ほとんど話をしない
4. 話をしたことがない

Q65. 職員（事務・技術職・他）と話をしますか。
1. よく話をする　2. 時々話をする　3. ほとんど話をしない
4. 話をしたことがない

Q66. 学生の要望を取り上げるシステムがあることを知っていますか。
1. システムを利用したことがある　2. 知っているがシステムを利用したことがない
3. システムを知らない　4. その他

Q67. 大学は学生の意見を取り上げ，改善する努力をしていますか。
1. 大学はすぐに対応している　2. 大学はだいたい対応している
3. 大学はほとんど対応していない　4. 大学は学生を無視している
4. そのような事例を知らない　5. その他

Q68. 所属学科に学生の要望を取り上げるシステムがあることを知っていますか。
1. システムを利用したことがある　2. 知っているがシステムを利用したことがない
3. システムを知らない　4. その他

Q69. 所属学科は学生の意見を取り上げ，改善する努力をしていますか。

1. 学科はすぐに対応している　　2. 学科はだいたい対応している
3. 学科はほとんど対応していない　　4. 学科は学生を無視している
5. そのような事例を知らない　　6. その他

鳥取大学の役割

Q70. あなたが鳥取大学入学した一番大きなメリットはなにと思いますか。**(複数回答可)**

1. 社会で活躍できる専門知識が修得できる
2. 卒業研究など自分の興味あることができること
3. いろいろな友達を得ることが出来ること
4. 良い先生と巡り合うことが出来ること
5. アルバイトができ，多く学ぶことが出来ること
6. 鳥取の自然環境で学生生活を過ごすことが出来ること
7. あまりメリットが考えられない
8. 全然メリットがない
9. その他

質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

農学部生物資源環境学科の方のみ，次の質問項目Q28～Q55 についてお答えください。

Q28．農学部生物資源環境学科への受験をどのように決めましたか。

1. 自分の判断で決めた
2. 農学部案内を見て決めた
3. ホームページを見て決めた
4. 高校の受験指導によって決めた
5. 両親，先輩などの勧めによって決めた

Q29＆Q30．受験を決めたときの判断要素は何でしたか。次の中から２つ選んで，第１の判断要素を**Q29** に，第２の要素を**Q30** の回答欄に記入してください。

1. 大学入試センター試験の結果
2. 将来の方向，就職を考慮
3. 希望専門分野である
4. 大学の伝統，評判
5. 大学が近い距離にある
6. 先輩，知人などがいる
7. 大学の環境がよい

Q31．農学部という名称に対して，あなたはどういう響きを感じますか。

1. 好感をもっている
2. どちらかといえば好感をもっている
3. どちらかといえば好感がもてない
4. 好感がもてない
5. どちらでもない

Q32．農学部の役割をあなたは入学前どのように理解していましたか。

1. 主として我国の農林業，食品関連産業に寄与する教育・研究機関
2. 主として国民の食糧確保と我国の国土・環境の保全に寄与する教育・研究機関
3. 世界の人々の食糧確保と地球環境の保全に寄与する教育・研究機関
4. 上記 1，2，3 の全てを含む
5. その他

Q33．入学してから上記Q32 の理解は変わりましたか。

1. 変わらない
2. 少し変わった
3. 全く変わった

Q34．入学後，専門学習の分属は希望通りですか（コース分属）。

1. 希望通り
2. 希望とは違った
3. 未だ分属していない

Q35．入学後，専門学習の分属は希望通りですか（サブコース分属）。

1. 希望通り
2. 希望とは違った
3. 未だ分属していない

Q36．入学後，専門学習の分属は希望通りですか（分野分属）。

1. 希望通り
2. 希望とは違った
3. 未だ分属していない

Q37. コース（サブコース）分属の時期についてたずねます。

1. 早い　　2. 遅い　　3. 入学時に分属したほうがよい
4. 現行の時期でよい　　5. よくわからない

Q38. 専門学習での必修と選択の割合は，どうあった方が良いと思いますか。

1. 必修をふやし，選択を減らす　　2. 選択をふやし，必修を減らす
3. 両者およそ同じウェイトとする　　4. その他

Q39. 専門の講義は時間（単位）の関係もあって，一般に次のような内容になりがちです。このうちどのような内容が望ましいと思いますか。

1. 重要な事項を専門的に詳しく解説し，重要でないと思われる事項は省く
2. 内容は浅くなっても全体系を網羅して標準的な解説を行う
3. 教官が研究している得意とする分野の解説を中心とし，個性に富んだものとする
4. その他

Q40. 専門の授業は一般教育の授業に比べてどのように感じますか。

1. 興味深く受講できる　　2. どちらかといえばおもしろい
3. おもしろくない　　4. どちらともいえない

Q41. 「一般教育の英語科目は，専門論文の読み，書きにもっと重点をおくべきである」との意見をあなたはどう思いますか。

1. その通りだと思う
2. 教養としての英語圏文化の観点に重点をおくべきである
3. 教養としての部分と専門としての部分を均等にすべきである
4. 両者を併設してどちらを重点を置くかは学生の判断に任せる
5. 現状のままでよい

Q42. コンピュータの実習を含む専門科目の情報処理教育についてたずねます。

1. 充実すべきである　　2. ある程度充実すべきである　　3. 必要ない

Q43. 講義の学習効果をあげるためにどの方法を希望しますか。

1. 中間試験を行う（３回程度）　　2. たびたびレポートを提出する
3. 単位の認定を厳しくする　　4. その他

Q44. 学外の研究機関等と提携して，時々外部から講師を呼んで話を聞くことはどうでしょうか。

1. とてもよい　　2. あった方がよい　　3. どちらでもよい

Q45. 実験・実習の授業についてたずねます。

1. 講義よりおもしろい　　2. 実験・実習がもっとあってもよい
3. 時間が長いので大変だ　　4. おもしろくない
5. 特に意識しない

Q46. 農学部の実験・実習授業における設備についてたずねます。

1. 充実している　2. まあまあである　3. 不備である　4. 極めて貧弱である

Q47. 学級教官とどのように接していますか。

1. よく相談したり話を聞いたりする　2. あまり接する機会がない
3. 殆ど話したことがない

Q48. あなたは大学院修士課程をどのように理解していますか。

1. 農学技術の一分野の専門家を養成するためのコース
2. 農学研究者を養成するためのコース
3. 大学４年では十分なカリキュラムが組めないので，それを補完するためのコース
4. 分からない

Q49. 大学を卒業した後，どうしたいと思っていますか。

1. 大学院等へ進みたい　2. 就職したいと思っている
3. まだ考えていない　4. その他

Q50. あなたが将来希望する職業は，以下の業種のどれに近いですか。

1. 建設・機械関連　2. 食品・化学関連　3. 電気・情報関連
4. 商社・金融関連　5. 販売・サービス関連　6. マスコミ・出版関連
7. 公務員　8. 教師　9. その他

Q51. 生物資源環境学科という各種の専門を含む大学科制は，学生の勉学にとって総体的にメリット，デメリットのどちらが多いと思いますか。

1. メリットが多い　2. デメリットが多い　3. どちらとも言えない

Q52. 生物資源環境学科のメリットと考えられるものは何ですか。

1. いろいろな専門の知識が得られる
2. 入学してから自分の専門を選ぶのに都合がよい
3. 幅広く友人を得ることができる
4. その他

Q53. 生物資源環境学科のデメリットと考えられるもの何ですか。

1. 入学後分属によって自分の希望する専門の勉学ができないこともある
2. 学科全体の関連が分かりにくいし，学科としてまとまりがない
3. この学科名では，勉学した専門をよく表せないので，社会の評価が心配である
4. 学科の性格が捉えにくいので外部に対して説明するとき困る
5. その他

Q54．将来農学部（生物資源環境学科，獣医学科を含む全体）は，どのような方向に向かったらよいと思いますか

1. 今のままでよい　　2. 広領域の生物系総合学部とする
3. その他

Q55．農学部が，広領域の生物系の総合学部となるならば，それにふさわしいと思う学部の名称を次の中から選んでください。

1. 農学部のまま　　2. 生物生産学部　　3. 生物資源科学部　　4. 生物産業学部
5. 生物環境科学部　　6. 農獣医学部　　7. その他

（農学部生物資源環境学科の方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。）

獣医学科の方のみ、次の質問項目Q28～Q53についてお答えください。

Q28．農学部という名称に対してあなたはどういう響きを感じますか。

1. 好感をもっている　　2. どちらかと言えば好感をもっている
3. どちらかと言えば好感がもてない　　4. 好感がもてない
5. どちらでもない

Q29．農学部の役割をあなたは入学前どのように理解していましたか。

1. 主として我国の農林業，食品関連産業に寄与する教育・研究機関
2. 主として国民の食糧確保と我国の国土・環境の保全に寄与する教育・研究機関
3. 世界の人々の食糧確保と地球環境の保全に寄与する教育・研究機関
4. 上記①，②，③の全てを含む
5. その他

Q30．入学してから上記（Q29）の理解は変わりましたか。

1. 変わらない　　2. 少し変わった　　3. 全く変わった

Q31．専門学習での必修と選択の割合は，どうあった方が良いと思いますか。

1. 必修をふやし，選択を減らす　　2. 選択をふやし，必修を減らす
3. 両者およそ同じウェイトとする　　4. その他

Q32．専門の講義は時間（単位）の関係もあって，一般に次のような内容になりがちです。このうちどのような内容が望ましいですか。

1. 重要な事項を専門的に詳しく解説し，重要でないと思われる事項は省く
2. 内容は浅くなっても全体系を網羅して標準的な解説を行う
3. 教官が研究している得意とする分野の解説を中心とし，個性に富んだものとする
4. その他

Q33. 専門の授業は一般教育の授業に比べてどのように感じますか。

1. 興味深く受講できる　　2. どちらかといえばおもしろい
3. おもしろくない　　4. どちらともいえない

Q34. 「一般教育の英語科目は，専門論文の読み，書きにもっと重点をおくべきである」との意見をあなたはどう思いますか。

1. その通りだと思う
2. 教養としての英語圏文化の観点に重点をおくべきである
3. 教養としての部分と専門としての部分を均等にすべきである
4. 両者を併設してどちらを重点を置くかは学生の判断に任せる
5. 現状のままでよい

Q35. コンピュータの実習を含む専門科目の情報処理教育についてたずねます。

1. 充実すべきである　　2. ある程度充実すべきである　　3. 必要ない

Q36. 講義の学習効果をあげるためにどの方法を希望しますか。

1. 中間試験を行う（３回程度）　　2. たびたびレポートを提出する
3. 単位の認定を厳しくする　　4. その他

Q37. 学外の研究機関等と提携して，時々外部から講師を呼んで話を聞くことはどうでしょうか。

1. とてもよい　　2. あった方がよい　　3. どちらでもよい

Q38. 実験・実習の授業についてたずねます。

1. 講義よりおもしろい　　2. 実験・実習がもっとあってもよい
3. 時間が長いので大変だ　　4. おもしろくない
5. 特に意識しない

Q39. 実験・実習授業における設備について質問します。

1. 充実している　　2. まあまあである　　3. 不備である　　4. 極めて貧弱である

Q40. 大学院連合獣医学研究科（博士課程）が鳥取大学に設置されていることを知っていますか。

1. 知っている　　2. できれば進学したいと思っている
3. 聞いているがよく知らない　　4. 知らない

Q41. 学級教官とどのように接していますか。

1. よく相談したり話を聞いたりする　　2. あまり接する機会がない
3. 殆ど話したことがない

Q42．将来農学部（生物資源環境学科，獣医学科を含む全体）は，どのような方向に向かったらよいと思いますか。

1. 今のままでよい　　2. 広領域の生物系総合学部とする
3. その他

Q43．農学部が，広領域の生物系の総合学部となるならば，それにふさわしいと思う学部の名称を次の中から選んでください。

1. 農学部のまま　　2. 生物生産学部　　3. 生物資源科学部　　4. 生物産業学部
5. 生物環境科学部　　6. 農獣医学部
7. その他

Q44．獣医学科の受験をどのように決めましたか。

1. 自分の判断で決めた　　2. 農学部案内を見て決めた
3. ホームページを見て決めた　　4. 高校の受験指導によって決めた
5. 両親，先輩などの勧めによって決めた

Q45＆Q46．受験を決めたときの判断要素は何でしたか。次の中から２つ選んで，第１の判断要素を**Q45** に，第２の要素を**Q46** の回答欄に記入してください。

1. 大学入試センター試験の結果　　2. 将来の方向，就職
3. 希望専門分野である　　4. 大学の伝統，評判
5. 大学が近い距離にある　　6. 先輩，知人などがいる
7. 大学の環境がよい

Q47．獣医学科に入学したとき将来どのような獣医師になりたいと思いましたか。

1. 牛，豚，鶏などの産業動物を対象とする臨床獣医師
2. 犬，猫，小鳥などのコンパニオン・アニマルを対象とする臨床獣医師
3. 野生の鳥や動物の保護に携わる獣医師
4. 公務員となり，畜産業の育成あるいは人の健康増進に携わる獣医師
5. 獣医学関係の研究者

Q48．獣医学科は６年制教育ですが，この教育年限は勉学や就職上のメリットが多いと考えられますか。勉学上のメリットはどうでしょうか。

1. メリットが多い　　2. デメリットが多い　　3. どちらとも言えない

SQ）勉学上メリットが多いと答えられた方のみ質問します（その他の方は回答しないでください）。それはどのような理由によるのでしょうか。

1. 講義，実験・実習が充実している
2. 研究室でのテーマ実験に充分時間がとれる
3. 講義時間が増えて学習範囲が広がる
4. 余裕を持って学習できる

Q49．就職上はどうでしょうか。

1. メリットが多い　　2. デメリットが多い　　3. どちらとも言えない

SQ）就職上メリットが多いと答えられた方のみ質問します（その他の方は回答しないでください）。それはどのような理由によるのでしょうか。

1. 社会的評価が上がる　　2. 希望する職種につける
3. 待遇が良くなる

Q50．獣医学科は現在１０学科目，教官数２６名（一部農学部附属動物病院教官１名が分担）で教育を行っていますが，どのような感想を持っていますか。

1. 充分な教育を受けることができる
2. 不十分な教育しか受けられない
3. どちらとも言えない

Q51．不十分な教育しか受けられないと答えられた方は，どのような理由によるのでしょうか。

1. 学科目数が少なく専門分野が限られている
2. 一学科目当たりの教官数が不足している
3. 教官の絶対数が不足しており，きめ細かい教育が受けられない
4. 実験・実習用の設備・器具，動物数が不足している

Q52．６年制に見合った教育を心掛けていますが，獣医学教育をさらに充実させるためにはどのような方法が考えられますか。

1. 学科目数を増やす
2. 一学科目当たりの教官数を増やす
3. 補助教官等（例えば教務員あるいは技官）のポストを新設する
4. その他

Q53．どのような獣医学科の将来像を描いていますか。

1. 医学部並みのスケールと内容を持った大きな獣医学部
2. 歯学部並みの中型のスケールの獣医学部
3. 現在のような農学部の一学科としてとどまる
4. その他

獣医学科の方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

全学部共通（卒業生用）

「大学教育」に関するアンケート調査票

【回答にあたっての留意事項】

１．質問には全学共通の質問（Q1～Q25）と各学部ごとの質問（Q26 以降）がありますので，指示に従って回答してください。

２．質問に「複数回答可」と明記している質問以外は，原則として該当するものを１つだけ選んで，その番号を回答用紙にご記入ください。

３．回答用紙は，同封の返信用封筒に入れて，切手を貼らずに郵便ポストに投函してください。

共通質問では，あなたが鳥取大学の学部に在学していたときのことをお尋ねします。
鳥取大学の卒業生としての立場でお答えください。

あなた自身についてお尋ねします。

Q 1．性別　　1．男　　2．女

Q 2．鳥取大学の学部への入学年度を教えてください。

1．平成 12 年度　2．平成 11 年度　3．平成 10 年度　4．平成 9 年度
5．平成 8 年度　6．平成 7 年度　7．平成 6 年度　8．平成 5 年度以前

Q 3．あなたの卒業した学部はどれですか。

1．教育学部　2．教育地域科学部　3．医学部　4．工学部　5．農学部

Q 4．あなたの卒業した学科・課程はどれですか。

【教育学部】

1．小学校教員養成課程　2．中学校教員養成課程　3．養護学校教員養成課程
4．総合科学課程

【教育地域科学部】

1．学校教育課程　2．人間文化課程　3．地域政策課程　4．地域科学課程

【医学部】

1．医学科　2．生命科学科　3．保健学科看護学専攻　4．保健学科検査技術科学専攻

【工学部】

1．機械工学科　2．知能情報学科　3．電気電子工学科　4．物質工学科
5．生物応用工学科　6．土木工学科　7．社会開発システム工学科
8．応用数理工学科

【農学部】

1．農林総合科学科　2．生物資源環境学科　3．獣医学科

Q 5. あなたの出身高校の所在地はどこですか。

1. 鳥取県　2. 島根県　3. 岡山県　4. 広島県　5. 山口県　6. 兵庫県
7. 大阪府　8. その他の近畿地方　9. 四国地方　0. その他

あなたの鳥取大学への入学に関連して質問します。

Q 6. 大学進学を希望した最も大きな理由は何でしたか。

1. 将来やりたい仕事を決めており，そのために必要だったから
2. 学問を身につけ，人間として教養を高めたかった
3. 自分に適した分野を見つけ，その能力を高めたるため
4. 大学を卒業したほうが将来の給料や社会的評価が高いから
5. まわりの多くの人たちが進学したから
6. その他

Q 7. 鳥取大学を選択した最も大きな理由は何でしたか。

1. 鳥取大学が好きだから
2. やりたい分野の学問があったり，教わってみたい先生がいた
3. 自分の偏差値や受験科目の都合で
4. 地元の大学だから
5. 高校（予備校）の進路指導で薦められた
6. 親に薦められた
7. 就職率が高いから
8. 山陰の自然や土地がらが好きだから
9. その他

Q 8. あなたが卒業した学部を選ぶにあたって一番重視したのはどんなことでしたか。

1. 自分の性格・適正　2. 志望する職業に有利
3. 自分のやりたいことができる　4. 入学試験の難易度や偏差値
5. 好きな学問分野や教員　6. 親の希望や進路指導
7. 学部の社会的貢献や社会的評価　8. その他

Q 9. 環境・施設面について，特に不満なことがありましたか。**（複数回答可）**

1. 図書館・大学会館・学生寮等の厚生福利施設が貧弱
2. 講義・実験室に冷房等の設備が少ない　3. トイレが汚い
4. 講義室の視聴覚機器類が乏しい　5. 移動机の講義室が少ない
6. コインロッカーが少ない　7. 講義室にゴミが散乱している
8. 建物内の喫煙箇所が多い　9. 教官研究室等の案内表示が分かりにくい
0. 特になし

Q10. 後輩に対して，鳥取大学への入学を勧めることができますか。

1. ぜひ入学するよう勧める　2. 積極的にではないが勧める　3. あまり勧めない
4. 入学しないよう勧める　5. その他

あなたの在学中の学生生活・勉学への取り組み方等に関して質問します。

Q11．授業科目を選択する際にシラバスを利用しましたか。

1．よく利用し，参考になる　　2．あまり利用していない
3．まったく利用したことがない
4．自分の学生時代には（当時）シラバスはなかった
5．その他

Q12．授業内容が理解できなかった場合，その理由は何であったと思いますか。

1．自分の勉強不足　　2．先生の教え方に工夫が足りない
3．内容自体が難しすぎる　　4．内容が多すぎる
5．その他

Q13．授業内容が理解できなかった場合，どのようにしましたか。

1．教室で質問した　　2．授業後に先生に尋ねた
3．友人に尋ねた　　4．自分で参考書等によって調べる
5．何もしなかった

Q14～Q16．あなたがよいと評価するのはどんな授業でしたか。次の選択肢の中から３つ選び，よい順にQ14～Q16に記入してください。

1．学問内容をなるべく分かり易く噛み砕いて教える
2．テキスト・プリント等を適切に使う
3．板書が丁寧である
4．出欠席のチェックを行う
5．教育機器を有効に使用し，理解を助ける工夫をしている
6．学問のレベルの高さが感じられる
7．今の時代につながる点をよく教える
8．教員がその学問に打ち込んでいる事が伝わる
9．予習・復習の負担が少ない
0．単位取得が容易である

Q17．学部在学時に授業に対して最も強く望んだことは何でしたか。

1．満足しており，特に望むことはなかった
2．教員は授業に対し熱意をもってほしかった
3．授業は，丁寧に分かり易く行ってほしかった
4．授業は，抽象的すぎず，事例をあげるなど具体的に説明してほしかった
5．官公庁，企業等の外部講師による授業を増やしてほしかった
6．満足しているわけではないが，特に望むことはなかった

Q18．あなたは授業の予習・復習を１日平均何時間していましたか。

1．しなかった　　2．０～１時間　　3．１～２時間　　4．３時間以上

Q19．あなたの在学時の勉学態度は次のうちどれに近かったですか。

1．授業にはきちんと出席し，予習・復習も行った
2．授業には出席し，ノートだけはきちんととった
3．とりあえず授業には出席した
4．試験勉強だけを集中して行った
5．あまり真剣に取り組んではいなかった

一般教育に関連してお尋ねします。

Q20．一般教育と専門教育はどのような関係にあるべきだと思いましたか。

1．一般教育は，専門教育の基礎になる教育であるべきだ
2．一般教育と専門教育は，補いあって大学教育を構成すべきだ
3．一般教育とは専門教育から独立した教育であってよい
4．分からない

これから主に一般教育の授業に関して質問します。一般教育科目は教養科目、共通基礎科目、専門基礎科目の３つの教育科目に区分されています。

Q21．教養科目について，以下の質問にお答え下さい。

SQ 1）あなたは教養科目をどのように位置付けていましたか。（複数回答可）

1．将来、良き社会人になるための一般教養として
2．専門を学ぶための基礎として
3．大学生としての一般常識として
4．世界的視野と見識を身につける機会として
5．専門以外の分野を知る機会として
6．多様な考え方を知る機会として
7．自己啓発のため
8．その他

SQ 2）教養科目を選択するためにシラバスを利用しましたか。

1．（選択した）全ての科目で利用した
2．いくつかの科目で利用した
3．あまり利用しなかった
4．全く利用しなかった
5．自分が受講した時，シラバスはなかった

SQ 3）実際の授業とシラバスの関係はどうでしたか。

1．（選択した）すべての科目がシラバス通り進んだ
2．シラバス通り進んだ科目が，そうでない科目より多かった
3．シラバス通り進んだ科目とそうでない科目が，ほぼ同数であった
3．シラバス通り進まなかった科目が，そうでない科目より多かった
4．すべての科目がシラバス通りには進まなかった
5．自分が受講した時，シラバスはなかった

SQ 4）教養科目の成績の評価方法は以下のどれが適切だと思いますか。（複数回答可）

1．定期の一回の筆記試験で評価する
2．複数の筆記試験で評価する
3．レポート１本で評価する
4．複数のレポートで評価する
5．一回の発表で評価する
6．複数回の発表で評価する
7．毎回の出席で評価する

SQ 5) 全般的に見て，教養科目の成績のつけ方は適切だと感じましたか。

1. （受講した）すべての科目で適切であった
2. 適切であった科目が，そうでない科目より多かった
3. 適切であった科目と，不適切であった科目がほぼ同数だった
4. 不適切であった科目が，そうでない科目より多かった
5. すべての科目で不適切であった

SQ 6) あなたが履修した教養科目の総単位数についてどう思いますか。

1. 教養科目の総単位数は変えなくてよい　　2. 総単位数を増やしたほうがよい
3. 総単位数を減らしたほうがよい

SQ 7) 教養科目で，あなたが満足した点はどういう点ですか。**（複数回答可）**

1. 授業が理解しやすかった
2. 授業の内容が興味深かった
3. 担当の教員の人柄（熱意）がよかった
4. 教員や他の受講学生との活発な意見交換があった
5. 授業の進度やレベルが適切に設定されていた
6. その他

SQ 8) 全般的に見て、教養科目に対するあなたの満足度は以下のどれですか。

1. すべての科目に満足した
2. 満足できる科目が，そうでない科目より多かった
3. 満足できる科目と，そうでない科目が同じくらいだった
4. 不満な科目の方が，そうでない科目より多かった
5. すべての科目に不満であった

Q22. 共通基礎科目の英語科目について，以下の質問にお答えください。

SQ 1) あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何でしたか。**（複数回答可）**

1. 英語の読解力の向上　　2. 英語の会話力の向上
3. 専門科目を学ぶ基礎　　4. 英米圏の文化・社会・歴史を学ぶ
5. 就職活動・大学院進学に生かす　　6. 英語を修得して国際社会に生きる
7. 授業を通して人間的に成長する　　8. 教員の人間性に触れる
9. この科目を学ぶ意義はない　　0. よくわからない

SQ 2) この科目の授業であなたが感じたことは何でしたか。**（複数回答可）**

1. 授業の適正なレベル　　2. 授業のわかりやすさ
3. 外国語を学ぶ楽しさ　　4. 高校までにない大学らしい教育内容
5. 教員との活発なやりとり　　6. 教員の教える熱意
7. 教員の無駄話の多さ　　8. 教室が騒がしく真面目さに欠ける
9. 何も感じることがなく不満　　0. よくわからない

SQ 3) この科目の授業について，あなたは満足しましたか。

1. 非常に満足した　2. 満足した　3. どちらともいえない
4. 不満であった　5. 非常に不満であった

SQ 4) この科目の必須単位数は，あなたはどう思いますか。

1. 在学時のままでよい　2. 在学時より増やす方がよい
3. 在学時より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. よくわからない

SQ 5) この科目の授業シラバスは，受講においてどのくらい利用しましたか。

1. 大いに利用した　2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった　4. 全く利用しなかった
5. 自分が受講した時、シラバスはなかった

SQ 6) 実際の授業とシラバスとの関係はどうでしたか。

1. シラバス通り進むのでよかった
2. シラバス通り進まないのでよくなかった
3. シラバス通りであるが授業はよくなかった
4. シラバス通りではないが授業はよかった
5. 自分が受講した時，シラバスはなかった

SQ 7) ネイティブ・スピーカー（外国人教師）の授業はどう思いましたか。

1. もっと増やす方がよい　2. 現行のままでよい
3. もっと減らす方がよい　4. 不要である
5. 自分が受講した時，ネイティブの授業はなかった

SQ 8) 成績の評価方法についてどう思いましたか。

1. 筆記と口頭の定期試験で評価すべきである
2. 筆記の定期試験だけで評価すべきである
3. 口頭の定期試験だけで評価すべきである
4. 演習の性格から毎回の授業だけで評価すべきである
5. レポート（発表・提出）によって評価すべきである

SQ 9) 教員の成績のつけ方についてどう思いましたか。

1. 適切であった　2. まあまあ適切であった　3. 不適切であった
4. あまり適切でなかった　5. よくわからない

SQ10) 授業以外の制度(TOFEL,TOEIC 等)の導入をどう思いますか。

1. 非常によいことである　2. よいことである
3. 希望者にのみに課すべきである　4. 学習負担が大きいので再考すべきである
5. 導入する必要は全くない

Q23. 共通基礎科目の第二外国語について，以下の質問にお答えください。

SQ 1) あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何でしたか。**（複数回答可）**

1. 当該外国語の読解力の向上
2. 当該外国語の会話力の向上
3. 専門科目を学ぶ基礎
4. 当該外国語の国の文化・社会・歴史を学ぶ
5. 就職活動・大学院進学に生かす
6. 当該外国語を修得して国際社会に生きる
7. 授業を通して人間的に成長する
8. 教員の人間性に触れる
9. この科目を学ぶ意義はない
0. よくわからない

SQ 2) この科目の授業であなたが感じたことは何でしたか。**（複数回答可）**

1. 授業の適正なレベル
2. 授業のわかりやすさ
3. 外国語を学ぶ楽しさ
4. 高校までにない大学らしい教育内容
5. 教官との活発なやりとり
6. 教官の教える熱意
7. 教員の無駄話の多さ
8. 教室が騒がしく真面目さに欠ける
9. 何も感じることがなく不満
0. よくわからない

SQ 3) この科目の授業について，あなたは満足しましたか。

1. 非常に満足した
2. 満足した
3. どちらともいえない
4. 不満であった
5. 非常に不満であった

SQ 4) この科目の必須単位数をあなたは，どう思いますか。

1. 在学時のままでよい
2. 在学時より増やす方がよい
3. 在学時より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. 第二外国語は履修する必要はない

SQ 5) この科目の授業シラバスは，受講においてどのくらい利用しましたか。

1. 大いに利用した
2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった
4. 全く利用しなかった
5. 自分が受講した時，シラバスはなかった

SQ 6) 実際の授業とシラバスとの関係はどうでしたか。

1. シラバス通り進むのでよかった
2. シラバス通り進まないのでよくなかった
3. シラバス通りであるが授業はよくなかった
4. シラバス通りではないが授業はよかった
5. 自分が受講した時，シラバスはなかった

SQ 7) ネイティブ・スピーカー（外国人教師）の授業はどう思いますか。

1. もっと増やす方がよい
2. 現行のままでよい
3. もっと減らす方がよい
4. 不要である
5. 自分が受講した時，ネイティブの授業はなかった

SQ 8）成績の評価方法についてどう思いましたか。

1. 筆記と口頭の定期試験で評価すべきである
2. 筆記の定期試験だけで評価すべきである
3. 口頭の定期試験だけで評価すべきである
4. 演習の性格から毎回の授業だけで評価すべきである
5. レポート（発表・提出）によって評価すべきである

SQ 9）教員の成績のつけ方についてどう思いましたか。

1. 適切であった　2. まあまあ適切であった　3. 不適切であった
4. あまり適切でなかった　5. よくわからない

SQ10）第二外国語の多様化と履修選択数について，どう思いましたか。

1. 第二外国語は１科目選択するのがよい
2. 第二外国語は２科目選択するのがよい
3. 履修する第二外国語とその数を所属学部・学科が指定するのがよい
4. 第二外国語の多様化は興味関心がない
5. よくわからない

Q24. 共通基礎科目の健康スポーツ科学実技について，以下の質問にお答え下さい。

SQ 1）あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何でしたか。**（複数回答可）**

1. 生涯スポーツの発見　2. スポーツ技術の向上
3. 基礎体力の維持・向上　4. 健康の維持・増進
5. ストレスの発散　6. 友達とのコミュニケーション
7. 教員との触合い　8. 協調性の育成
9. この科目を学ぶ意義はない

SQ 2）この科目の授業であなたが感じたことは何でしたか。**（複数回答可）**

1. 授業の実技的な適正なレベル　2. 授業のわかりやすさ
3. 授業を学ぶ楽しさ　4. 高校とは違う大学らしい教育内容
5. 教員との活発なやりとり　6. 教員の教える熱意
7. 教員の指導技術のレベルの高さ　8. 教員の指導技術のレベルの低さ
9. 何も感じるものがなく不満

SQ 3）この科目の授業について，あなたは満足しましたか。

1. 非常に満足した　2. 満足した　3. どちらともいえない
4. 不満だった　5. 非常に不満だった

SQ 4）この科目の必須単位数をあなたの場合はどう思いますか。

1. 在学時のままでよい　2. 在学時より増やす方がよい
3. 在学時より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. よくわからない

SQ 5) この授業の種目数についてどう思いますか。

1. 在学時の種目数でよいと思う
2. 種目数が少ないと思う
3. 種目数は多いと思う
4. １種目でなく複数の種目を受講したかった
5. よくわからない

SQ 6) シラバスは，受講においてどのくらい利用しましたか。

1. 大いに利用した
2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった
4. 全く利用しなかった
5. 自分が受講した時，シラバスはなかった

SQ 7) 実際の授業とシラバスとの関係はどうでしたか。

1. シラバス通り進むのでよかった
2. シラバス通り進まないのでよくなかった
3. シラバス通りであるが授業はよくなかった
4. シラバス通りではないが授業はよかった
5. 自分が受講した時，シラバスはなかった

SQ 8) 成績の評価方法についてどう思いましたか。

1. 実技テストを重視して評価すべきである
2. レベルアップ度を重視して評価すべきである
3. 取り組む姿勢を重視して評価すべきである
4. ルール等の理解度を重視して評価すべきである
5. 出欠席を重視して評価すべきである

SQ 9) 教員の成績のつけ方についてどう思いましたか。

1. 適切であった
2. まあまあ適切であった
3. 不適切であった
4. あまり適切でなかった
5. よくわからない

Q25. 専門基礎科目について，以下の質問にお答え下さい。

SQ 1) あなたにとって，この科目を学ぶ意義は何でしたか。**(複数回答可)**

1. 基礎学力の習得
2. 基礎的技能の向上
3. 専門科目のための知識の習得
4. 理数系科目の応用能力の向上
5. 問題解決能力の向上
6. 論理的思考能力の向上
7. 表現能力の向上
8. 教員の人間性に触れる
9. この科目を学ぶ意義はない

SQ 2) この科目の授業であなたが感じたことは何でしたか。**(複数回答可)**

1. 授業の適正なレベル
2. 授業のわかりやすさ
3. 授業を学ぶ楽しさ
4. 高校とは違う大学らしい教育内容
5. 教員との活発なやりとり
6. 教員の教える熱意
7. 教員の指導技術のレベルの高さ
8. 教員の指導技術のレベルの低さ
9. 何も感じるものがなく不満

SQ 3) この科目の授業について，あなたは満足してましたか。

1. 非常に満足した　　2. 満足した　　3. どちらともいえない
4. 不満だった　　5. 非常に不満だった

SQ 4) この科目の必須単位数をあなたは，どう思いますか。

1. 在学時のままでよい　　2. 在学時より増やす方がよい
3. 在学時より減らす方がよい
4. 必須単位数をなくして学生の自由選択にまかせる方がよい
5. よくわからない

SQ 5) シラバスは受講においてどのくらい利用しましたか。

1. 大いに利用した　　2. まあまあ利用した
3. あまり利用しなかった　　4. まったく利用しなかった
5. 自分が受講した時は，シラバスはなかった

SQ 6) 実際の授業とシラバスとの関係はどうでしたか。

1. シラバス通り進むのでよい
2. シラバス通り進まないのでよくない
3. シラバス通りであるが授業はよくない
4. シラバス通りではないが授業はよい
5. 自分が受講した時は，シラバスはなかった

SQ 7) 成績の評価方法についてどう思いましたか。

1. 筆記の定期試験で評価すべきである
2. 試験，レポート，出席などの総合点で評価すべきである
3. レポートによって評価すべきである
4. 毎回の授業の普段点を重視して評価すべきである
5. 出欠席を重視して評価すべきである

SQ 8) 教員の成績のつけ方についてどう思いましたか。

1. 適切であった　　2. まあまあ適切であった　　3. 不適切であった
4. あまり適切でなかった　　5. よくわからない

<u>教育学部を卒業された方</u>にお尋ねいたします。次の質問項目のQ26～Q32についてお答えください。

Q26．あなたは教育学部を卒業して満足していますか。

1．とても満足している　　2．満足している
3．どちらともいえない　　4．不満である
5．とても不満である

Q27．今，教育学部の教員の名前（姓）を何人ほど思い出せますか。

1．１０人未満　　2．１０人～１９人　　3．２０人～２９人　　4．３０人～３９人
5．４０人以上

Q28．大学時代に学んだ専門教育のうちで，一番役に立っているものはどれですか。

1．特定の講義　　2．特定の演習・実習・実験　　3．卒業研究
4．役に立っているものはない　　5．その他

Q29．教員の授業の方法について，どう思いましたか。

1．分かりやすい授業が多かった
2．どちらかといえば分かりやすい授業が多かった
3．分かりやすい授業と分かりにくい授業が半々であった
4．どちらかといえば分かりにくい授業が多かった
5．分かりにくい授業が多かった
6．その他

Q30．授業内容のレベルについて，どう思いましたか。

1．難しすぎる授業が多かった
2．どちらかといえば難しい授業が多かった
3．難しい授業とやさしい授業が半々であった
4．どちらかといえばやさしい授業が多かった
5．やさしすぎる授業が多かった　　6．その他

Q31．卒業後も，大学と関わりを持っていますか。**（複数回答可）**

1．大学施設の利用　　2．教員との交流　　3．サークル活動への参加
4．全く関わりはない　　5．その他

Q32．教育学部は，教育地域科学部さらに地域学部へと改組されました。ご卒業された学部の変化について，どのように感じていますか。

1．多いに結構である　　2．多少残念ではあるが，今後の発展を期待したい
3．特に関心がない　　4．淋しいが時代の流れであり，仕方がない
5．大変残念である

教育学部を卒業された方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

教育地域科学部を卒業された方にお尋ねいたします。次の質問項目のQ33～Q59についてお答えください。

Q33．教育地域科学部への受験はいつ決めましたか。

1．小・中学校　2．高校1・2年生　3．高校3年生春　4．高校3年生夏
5．高校3年生秋　6．センター試験受験前　7．センター試験受験後
8．その他

Q34．教育地域科学部への受験は誰の勧めで決めましたか。

1．自分　2．高校の先生　3．親　4．友達　5．先輩
6．塾・予備校の先生　7．その他

Q35．教育地域科学部への入学はあなたの希望どおりでしたか。

1．全く希望どおりであった　2．まずまず希望どおりであった
3．あまり希望どおりではなかった　4．全く希望どおりではなかった
5．その他

Q36．教育地域科学部に入学した理由は何でしたか。

1．将来，地域に関わる仕事に就きたいと思ったから
2．将来，教職に就きたいと思ったから
3．幅広く色々な学問を勉強できるのがよいと思ったから
4．地元の大学であり，自分の専攻したい学問がよく分からなかったから
5．どこでも良いから大学に入り，4年間の大学生活を楽しみたかったから
6．高校教師が勧めるので何となく
7．希望する研究分野やその分野の先生にあこがれたから
8．「教育地域科学」という新しい分野を勉強できると思ったから
9．その他

Q37＆Q38．今あなたは，大学に何を期待していますか。最も期待していることをQ37に，2番目に期待していることをQ38の回答欄に記入してください。

1．学問に対する取り組み方法を身につける
2．専門的な知識を身につける
3．社会人になったときに，すぐに役に立つ知識・技術・技能を身につける
4．広く教養を身につける
5．物事を総合的に判断する能力を養う
6．学習だけでなく，サークル活動・社会活動等を通じて人間性を養う
7．各種の免許や資格を取得する
8．その他

Q39．あなたは教育地域科学部を卒業して満足していますか。

1．とても満足している　2．満足している　3．どちらともいえない
4．不満である　5．とても不満である

Q40．あなたの教育地域科学部に対するイメージをお聞かせ下さい。

1．明るい希望にあふれている　　2．どちらかというと明るい
3．特別なイメージはない　　4．どちらかというと暗い
5．暗くて希望が持てない

Q41．教育地域科学部の教員の名前（姓）をどの程度覚えていますか。

1．１０人未満　　2．１０人～１９人　　3．２０人～２９人　　4．３０人～３９人
5．４０人以上

Q42．教員の授業の方法について，どう思いましたか。

1．分かりやすい授業が多かった
2．どちらかといえば分かりやすい授業が多かった
3．分かりやすい授業と分かりにくい授業が半々であった
4．どちらかといえば分かりにくい授業が多かった
5．分かりにくい授業が多かった
6．その他

Q43．授業内容のレベルについて，どう思いましたか。

1．難しすぎる授業が多かった
2．どちらかといえば難しい授業が多かった
3．難しい授業とやさしい授業が半々であった
4．どちらかといえばやさしい授業が多かった
5．やさしすぎる授業が多かった
6．その他

Q44．ゼミなどの少人数教育について，お聞きします。

1．勉学意欲が高まるので，少人数教育の機会を大幅に増やして欲しかった
2．少人数教育の機会をもう少し増やして欲しかった
3．実施されていたもので，充分であった
4．少人数教育の機会をもう少し減らして欲しかった
5．勉学意欲が低下するので，少人数教育の機会を大幅に減らして欲しかった
6．少人数教育は不要であった
7．わからない

Q45．あなたは平均して週に何コマの少人数教育を受けていましたか。

1．０コマ　　2．１コマ　　3．２コマ　　4．３コマ　　5．４コマ
6．５コマ　　7．６コマ　　8．７コマ　　9．８コマ以上

Q46．少人数での授業について，教員一人に対して何人の学生で受けているものが多かったですか。

1．1 人～2 人　　2．3 人～4 人　　3．5 人～6 人　　4．7 人～9 人　　5．10 人～14 人
6．15 人～19 人　　7．20 人～29 人　　8．　30 人以上　　9．わからない

Q47．少人数教育では，教員一人に対して，何人ほどの学生が最適だと思いますか。

1．1 人〜2 人　　2．3 人〜4 人　　3．5 人〜6 人　　4．7 人〜9 人　　5．10 人〜14 人
6．15 人〜19 人　　7．20 人〜29 人　　8．　30 人以上　　9．わからない

Q48．授業評価アンケートが実施されていますが，教員の参考になっていると思いましたか。

1．参考になっている教員が多かった
2．どちらかといえば参考になっている教員が多かった
3．参考になっている教員と参考になっていない教員が半々であった
4．どちらかといえば参考になっていない教員が多かった
5．参考になっていない教員が多かった
6．わからない

Q49．学級教員やチューター制度について，お聞きします。

1．非常に役に立っており，一層の充実を希望する　　2．役に立っていた
3．いざというとき，いないと困る　　4．役に立っていなかった
5．全く役に立っておらず，不要であった　　6．その他

Q50．カリキュラムに関する，ガイダンスやオリエンテーションの実施について，どう思いましたか。

1．必要なタイミングで適度に実施されており，充分であった
2．回数を増やして，きめ細かく対応して欲しかった
3．不要なものが多すぎるので，精選して欲しかった
4．ガイダンスなどは，必要なかった
5．その他

Q51．勉学を進める上でのカリキュラム構成について，お聞きします。

1．うまく構成されており，年次進行に伴い系統的に専門性を高めることができた
2．おおかたうまく構成されていた
3．コア・カリキュラム以外で入れ替えたほうがよいものが多くあった
4．カリキュラムの系統性が不明確で，大幅に改善すべきであった
5．わからない　　6．その他

Q52．あなたは 1 年次にどのような専門科目を最も望みますか。

1．大学教員と親しく語り，学び方を学ぶ少人数形式のゼミ
2．インターンシップのような実習科目
3．現場で生じている課題を認識できるような現地見学を主体とした科目
4．専門の学問体系について学べる概論
5．その他

Q53＆Q54．あなたが職業等を決めるにあたって重視した点は何でしたか。次の項目から２つ選んで、最も重視した点をQ53に、２番目に重視した点をQ54の回答欄に記入してください。

1．大学で学んだ専門性が生かせる　　2．働きがいがある
3．収入が多い　　4．仕事が楽である
5．身分が安定している　　6．一流（有名な）会社である
7．職場が郷里に近い　　8．その他

Q55．専門教育のカリキュラムは，あなたの就職に有利な条件を満たしていましたか。

1．十分に満たしていた　　2．どちらかといえば満たしていた
3．どちらかといえば満たしていなかった　　4．まったく満たしていなかった
5．わからない

Q56．学生の多様な進路希望に対して，学部はどのように対応して欲しいと思いましたか。次の中から最も強く希望するもの１つを選んで下さい。

1．大学院進学指導に努力すべきである
2．民間企業の職場開拓に努力すべきである
3．公務員試験の多数合格を目指して努力すべきである
4．教員採用試験への多数合格を目指して努力すべきである
5．多様な資格が取れるように努力すべきである
6．その他

Q57．あなたは教職をどの程度希望していましたか。

1．入学前から教職を希望しており，就職活動期間中も教職を希望していた
2．入学前は教職を希望していたが，就職活動期間中は教職以外を希望していた
3．入学前は教職以外を希望していたが，就職活動期間中は教職を希望していた
4．入学前から教職以外を希望しており，就職活動期間中も教職以外を希望していた

Q58．前問において希望の変更の理由，あるいは希望の継続の契機は，何でしたか。

1．大学での教員のアドバイスを通して　　2．大学での授業を通して
3．大学でのサークル・クラブ活動を通して　　4．教育実習を通して
5．大学以外での体験を通して　　6．その他

Q59．教育地域科学部は，地域学部へと改組されました。学部の変化について，どのように感じていますか。

1．多いに結構である　　2．多少残念ではあるが，今後の発展を期待したい
3．特に関心がない　　4．　淋しいが時代の流れであり，仕方がない
5．大変残念である

教育地域科学部を卒業された方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

医学部（卒業生用）

医学部医学科・生命科学科・保健学科を卒業された方にお尋ねします。

設問には、医学科・生命科学科・保健学科共通のものと、それぞれの学科独自のものがあります。指示に従って回答してください。

［医学科・生命科学科・保健学科共通］

Q26. 鳥取大学医学部に入学した結果，あなたは学生生活に満足していましたか。

1. 大変満足していた　　2. 満足していた　　3. やや不満であった
4. 大変不満足であった

Q27＆Q28. 医学部の講義で最も良いと思われたことは何ですか。第１番目の理由をQ27 に、第２番目の理由をQ28 の回答欄に記入してください。

1. 教官がよく準備している　　2. 説明が明快で理解しやすい
3. 重点を要約して説明している　　4. 講義の進度が適当である
4. 基礎的なことから説明している　　5. その他

Q29＆Q30. 医学部の講義で最も悪いと思われたことは何ですか。第１番目の理由をQ29 に，第２番目の理由をQ30 の回答欄に記入してください。

1. 説明の要点がわからない
2. 理解しているかどうかに配慮せず，独断的である
3. 講義が体系的でない
4. 講義の始まりと終わりの時間を守らない
5. 試験が難しすぎる
6. その他

Q31. 医学部のカリキュラムは過密で時間の余裕がないと思いましたか。

1. 過密と思った　　2. 比較的余裕があった　　3. 余裕がありすぎた

Q32. あなたは医学部規則に沿って履修方法，試験及び成績評価が行われていることを知っていましたか。

1. 知っていた　　2. 知らなかった

Q33. あなたのクラス担当の顧問教官・学級教官名についてお聞きします。

1. 知っている　　2. 知らない　　3. おそらく誰という程度

Q34. 顧問教官・学級教官との接触はどうでしたか。

1. よく世話になった　　2. あまり世話にならなかった　　3. なかった

Q35. クラス担当の顧問教官・学級教官は必要でしょうか。

1. 必要である　　2. 不必要である

Q36. 米子キャンパスで，サークル活動をしていましたか。

1. 文化系のサークルに所属していた
2. 体育系のサークルに所属していた
3. 文化系・体育系の両方のサークルに所属していた
4. サークル活動はしていない

Q37. サークル活動を行っていた人のみ答えてください。講義のある期間中において、１週あたりどれくらいの日数をサークル活動に使っていましたか。

1. １日　　2. ２日　　3. ３日　　4. ４日　　5. ５日

Q38. 米子キャンパスのクラブ・サークル活動のための施設について質問します。

1. とてもよい　　2. よい　　3. 普通　　4. あまりよくない　　5. よくない

Q39. 医学部の１年次は湖山キャンパスで過ごしますが，その意義についてどう思いましたか。

1. 一般教育をしっかり身につける場として必要である
2. 他学部の学生と交流を深めるうえで重要である
3. 湖山キャンパスでの学生生活は意味がない。
4. 湖山キャンパスでの専門教育を充実してほしい。
5. わからない

Q40. 入学時のキャンパスについて質問します。

1. 従来通り，湖山キャンパスで１年間過ごした方がよい
2. 米子地区で一般教育も受講できるようにして，入学時から米子キャンパスで過ごした方がよい
3. 湖山キャンパスでの教育を前期で終えて，後期から米子キャンパスに移った方がよい
4. わからない

Q41. 高等学校で履修した理系科目について，該当するものに印を付けてください。

1. 生物系　　2. 物理系　　3. 化学系　　4. 地学系　　5. 履修していなかった

医学部医学科を卒業された方のみお答えください。

Q42. 医学科の実験・実習設備について質問します。

1. 充実していた　　2. まあまあであった　　3. 不備であった　　4. わからない

Q43. 医学科の講義はどの程度理解できましたか。

1. ８０％以上の講義が理解できた　　2. ５０％以上の講義が理解できた
3. ２０％以上の講義が理解できた　　4. 理解できる講義は２０％未満であった

Q44. 医学に関わる分野に従事する者として倫理観を育成する方法について最も重要と思われたのは，どれですか。

1. 入学者の選抜のときに適正を判断する
2. 一般教育において幅広い人間的素養と人間理解能力を体得する

3. 入学後の早い時期に病院見学などを通じ医療に従事する人々の活動について体験し，理解を深める
4. その他

Q45. あなたはどの機関で卒後臨床研修を受けられましたか。
1. 鳥取大学附属病院　2. 鳥取県内の研修指定病院　3. 県外の大学付属病院
4. 県外の研修指定病院　5. わからない

（医学部医学科を卒業された方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。）

医学部生命科学科を卒業された方のみお答えください。

Q42. 生命科学科の実験・実習の設備について質問します。
1. 充実している　2. まあまあである　3. 不備である　4. 極めて貧弱である

Q43. カリキュラムについてどう思いましたか，強く思ったものを１つ選んでください。
1. 満足していた　2. 科目の選択の幅がせますぎた
3. 開設科目にかたよりがあった　4. 開設科目が広範すぎた
5. 開設科目の間の関連性が明確でなかった　6. 他にも開設してほしい科目があった
7. 特に何も思わなかった　8. その他

Q44. 今後どの様な分野のカリキュラムを取り入れたらよいと思いますか。
1. 遺伝子治療学・再生医療学　2. ゲノム創薬・製薬学
3. 生物資源応用学　4. バイオ産業システム学
5. 教員免許用科目　6. その他

Q45. 医学系の講義に対する満足度はどの程度でしたか。
1. 大いに満足　2. 満足　3. やや満足　4. 不満　5. 大いに不満

Q46. 医学系の講義レベルについてどう思いましたか。
1. むつかしい講義が多い　2. やさしすぎる講義が多い
3. むつかしい・やさしいが半々

Q47. 生命科学系の講義に対する満足度はどの程度でしたか。
1. 大いに満足　2. 満足　3. やや満足　4. 不満　5. 大いに不満

Q48. 生命科学系の講義のレベルについてどう思いましたか。
1. むつかしい講義が多い　2. やさしすぎる講義が多い
3. むつかしい・やさしいが半々

Q49. あなたどの様な職業に就きたいと思っていましたか。
1. 国公立および民間企業の研究職・技術開発職
2. 国公立および民間企業のサービス部門や営業職

3. 医療関連の専門職（医師、看護師、検査技師など）
4. 報道・出版関連の学術職
5. 教育職および公務員
6. その他　　7. 未定

Q50. 生命科学科で学んだことが役に立ちましたか。
1. 大いに役に立った　2. ある程度役に立った　3. ほとんど役に立たなかった

（医学部生命科学科を卒業された方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。）

保健学科看護学専攻を卒業された方のみお答えください。

Q42. 保健学科の実験、実習の設備について質問します。
1. 充実している　2. まあまあである　3. 不備である　4. わからない

Q43. カリキュラムについてどう思いましたか，強く思うものを１つ選んで下さい。
1. 満足していた　2. 科目の選択の幅がせますぎた
3. 開設科目にかたよりがあった　4. 開設科目が広範すぎた
5. 開設科目の間の関連性が明確でなかった　6. その他
7. 特に何も思わなかった

Q44＆Q45. 次の湖山地区での講義について質問します。次の中から第１番目の考えをQ44 に，第２番目をQ45 の回答欄に記入してください。
1. 大体満足していた　2. 講義（取得単位）が少なすぎた
3. 講義（取得単位）が多すぎた　4. 一般教育科目をもっと増やして欲しかった
5. 専門科目をもっと増やして欲しかった　6. わからない

Q46. １年次湖山地区の教育から２年次以降の米子への進級基準について質問します。
1. 妥当であった　2. きびしすぎた　3. やさしすぎた　4. わからない

Q47＆Q48. 今後カリキュラムに取り入れる必要が最も高まると思われる分野を選んでください。第１番目のものをQ47 に，第２番目をQ48 の回答欄に記入してくさい。
1. 遺伝看護学（分子生物学）　2. 看護倫理学
3. 応用看護学　4. 海外との連携を強化した看護学
5. 救急看護学　6. 東洋医学を加味した看護学
7. その他

Q49. 医学系の講義に対する理解度について質問します。
1. よく理解できた　2. 大体理解できた　3. 理解できないことが多かった
4. やさしすぎた　5. わからない

（医学部保健学科看護学専攻を卒業された方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。）

保健学科検査技術科学専攻を卒業された方のみお答えください。

Q42. 保健学科の実験、実習の設備について質問します。

1. 充実している　2. まあまあである　3. 不備である　4. わからない

Q43. カリキュラムについてどう思いますか，強く思うものを１つ選んで下さい。

1. 満足している
2. 科目の選択の幅がせますぎる
3. 開設科目にかたよりがある
4. 開設科目が広範すぎる
5. 開設科目の間の関連性が明確でない
6. その他
7. 特に何も思わない

Q44＆Q45. １年次の湖山地区での講義について質問します。次の中から第１番目の考えをQ44に，第２番目をQ45 の回答欄に記入してください。

1. 大体満足している
2. 講義（取得単位）が少なすぎる
3. 講義（取得単位）が多すぎる
4. 一般教育科目をもっと増やして欲しい
5. 専門科目をもっと増やして欲しい
6. わからない

Q46. １年次湖山地区の教育から２年次以降の米子への進級基準について質問します。

1. 妥当である　2. きびしすぎる　3. やさしすぎる　4. わからない

Q47＆Q48. 今後カリキュラムに取り入れる必要が最も高まると思われる分野を選んでください。第１番目のものをQ47 に，第２番目をQ48 の回答欄に記入してくさい。

1. 遺伝検査学（分子生物学）
2. 応用検査学
3. 海外との連携を強化した検査学
4. ウイルス検査学
5. その他

Q49. 医学系の講義に対する理解度について質問します。

1. よく理解できる　2. 大体理解できる　3. 理解できないことが多い
4. やさしすぎる　5. わからない

Q50. あなたの希望する職業分野について質問します。

1. 官公庁（都道府県、市町村）行政
2. 都市の医療施設
3. 地域の医療施設
4. 保健学（検査学）の研究者、教育者
5. その他
6. わからない

（医学部保健学科検査技術科学専攻を卒業された方の質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。）

卒業年度・学科・職業

Q26. 卒業年度はいつですか。

1. 平成 8 年度　2. 平成 9 年度　3. 平成 10 年度　4. 平成 11 年度
5. 平成 12 年度　6. 平成 13 年度　7. 平成 14 年度　8. 平成 15 年度

Q27. 工学研究科への進学はされましたか

1. 鳥取大学工学研究科進学　2. 他大学研究科進学　3. 進学せず
4. その他

Q28. 現在の職業を以下の分野からお選びください

1. 機械関連　2. 建設関連　3. 化学関連　4. 電気関連　5. 情報関連
6. 農林水産関連　7. 医療関連　8. 商社・金融・サービス関連　9. 官公庁
0. 学生・その他

工学部の理念・目的・目標

Q29.「鳥取大学工学部の理念・教育目的・教育目標」などを知っていますか。

1. 知っている　2. 聞いたことがある　3. どこかで見たことがある　4. 知らない

Q30. どこで知りましたか（前問で 4 以外の方のみお答えください。）

1. 工学部長から聞いた　2. パンフレットで見た　3. インターネットで知った
4. 大学説明会で聞いた　5. 他の人から聞いた　6. その他

Q31. 卒業学科の教育目的・教育目標などを知っていますか。

1. 知っている　2. 聞いたことがある　3. どこかで見たことがある　4. 知らない

Q32. どこで知りましたか。（前問で 4 以外の方のみお答えください。）

1. 学科の教授から聞いた　2. パンフレットで見た　3. インターネットで知った
4. 大学説明会で聞いた　5. 他の人から聞いた　6. その他

鳥取大学への入学

Q33. あなたが工学部に入学した理由は何ですか。

1. 自分の志望と一致し、勉強できたから　2. 自分の学力レベルで入学出来たから
3. 学費・生活費が安ったから　4. 出身地だから
5. 有名な先生がいて、勉強・研究が出来たから
6. 出身地を出て一人暮らしがしたかったから　7. その他

Q34. 最近、鳥取大学の入学試験情報を見たり、聞いたことがありますか。

1. 知っている　2. 知らない　3. その他

Q35. 鳥取大学の入試情報をどこで知りましたか。**(複数回答可)**

1. 大学のホームページ　2. 大学のパンフレット　3. 受験産業のホームページ
4. 受験産業のパンフレット　5. 受験雑誌　6. 学校の先生など　7. その他

Q36. 現在、鳥取大学で実施されている選抜方法を知っていますか。

1. 一般入試，推薦入試，AO 入試，編入学，私費留学生選抜が実施されている
2. 一般入試，推薦入試，AO 入試が実施されている
3. 一般入試，推薦入試が実施されている
4. 知らない

Q37. 大学入試が面接試験・小論文試験のみで判定することに賛成ですか。

1. 多様な人材が入学できるので賛成だ
2. 基礎学力があるかどうか疑わしいので反対だ
3. その他

工学教育カリキュラム（各学科のカリキュラム）

Q38. あなたは所属学科の教育カリキュラムに何を期待していましたか。

1. 将来，技術者として活躍するための知識を習得すること
2. 興味のあることについて学べること
3. 講義や実験など，また研究室で友達を作ること
4. 人間として教養を身につけること
5. あまり期待していない

Q39.「JABEE」を知っていますか。

1. 知っている　2. 知らない

Q40. 所属学科が「JABEE」を取得したことを知っていますか。

1. 知っている　2. 知らない

Q41. 卒業学科の教育プログラムを理解していましたか。

1. 理解していた　2. 少し理解していた　3. ほとんど理解していなかった
4. 理解していなかった　5. その他

Q42. 卒業された学科の教育カリキュラムで十分な教育を受けることが出来ましたか。

1. 満足　2. やや満足　3. 普通　4. やや不満足　5. 不満足

Q43. 卒業された学科の教育方針があり、系統立てた教育を受けることが出来ましたか。

1. 系統だっていた　2. ばらばらで困った　3. その他

Q44. 専門科目（講義科目）について

1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. 判らない

Q45. 専門科目（実験・演習）について

1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. 判らない

Q46. 専門科目（講義科目）について

1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. 判らない

Q47. 卒業研究について

1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. 判らない

教育組織・教育環境・学生への支援について

Q48. 所属学科の教員の研究分野はバランスがとれていましたか。

1. とれている　2. 普通　3. とれていない　4. 判らない

Q49. 教育環境（講義室・図書館・学生会館・研究室など）は充実していましたか。

1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. 判らない

Q50. 鳥取の自然環境についていかがですか。

1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. 判らない

Q51. 奨学金や授業料免除について、充実していましたか。

1. 満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 不満足　5. 判らない

Q52. 学級教官・チューター制について、役に立ちましたか。

1. 役に立っている　2. あまり役に立っていない　3. なくても良い
4. 邪魔になった

鳥取大学の役割

Q53. 鳥取大学工学部を卒業した一番大きなメリットはなんですか。**（複数回答可）**

1. 社会で活躍できる専門知識が得られた
2. 卒業研究など研究することができた
3. いろいろな友達を得ることが出来た
4. 良い先生と巡り合うことが出来た
5. アルバイトができ、多く学ぶことが出来た
6. 鳥取の自然環境で学生生活を過ごすことが出来た
7. あまりメリットが考えられない
8. ぜんぜんメリットがない
9. その他

質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

農学部についてお尋ねします。

Q26. 農学部・農学研究科という名称に対して，あなたはどういう響きを感じますか。

1. 好感をもっている　　2. どちらかといえば好感をもっている
3. どちらかといえば好感がもてない　　4. 好感がもてない
5. どちらでもない

Q27. 農学部・農学研究科の役割をあなたは入学前どのように理解していましたか。

1. 主として我国の農林業，食品関連産業に寄与する教育・研究機関
2. 主として国民の食糧確保と我国の国土・環境の保全に寄与する教育・研究機関
3. 世界の人々の食糧確保と地球環境の保全に寄与する教育・研究機関
4. 上記 1，2，3 の全てを含む

Q28. 入学してから上記の理解は変わりましたか。

1. 変わらない　　2. 少し変わった　　3. 全く変わった

入学後，農学部の専門学習の分属は希望通りでしたか。

Q29. コース分属　　1. 希望通り　　2. 希望とは違った　　3.他大学（他学部出身）

Q30. サブコース分属　1. 希望通り　　2. 希望とは違った　　3.他大学（他学部出身）

Q31. 分野分属　　1. 希望通り　　2. 希望とは違った　　3.他大学（他学部出身）

Q32. コース（サブコース）分属の時期についてたずねます。（鳥取大学農学部出身者のみ回答してください。）

1. 早い　　2. 遅い　　3. 入学時に分属したほうがよい
4. 現行の時期でよい　　5. よくわからない

Q33. 農学部で受講した専門科目についておたずねします。（鳥取大学農学部出身者のみ回答してください。）

1. 内容が難しすぎて理解ができないことが多かった
2. 内容がやさしすぎて退屈であった
3. 内容がちょうどよかった

Q34. 専門学習での必修と選択の割合は，どうあった方が良いと思いましたか。

1. 必修をふやし，選択を減らす　　2. 選択をふやし，必修をへらす
3. 両者およそ同じウェイトとする　　4. その他

Q35. 専門の授業は一般教育の授業に比べてどのように感じましたか。

1. 興味深く受講できる　　2. どちらかといえばおもしろかった
3. おもしろくない　　4. どちらともいえない

Q36. 「一般教育の英語科目は，専門論文の読み，書きにもっと重点をおくべきである」との意見をあなたはどう思いますか。

1. その通りだと思う
2. 教養としての英語圏文化の観点に重点をおくべきである
3. 教養としての部分と専門としての部分を均等にすべきである
4. 両者を併設してどちらを重点を置くかは学生の判断に任せる
5. 現状のままでよい

Q37. コンピュータの実習を含む専門科目の情報処理教育についてたずねます。

1. 充実すべきである　　2. ある程度充実すべきである　　3. 必要ない

Q38. 卒業論文のテーマは，どのようにして決めましたか。

1. 指導教官から個別に与えられた
2. 自分で決め，指導教官の許可を得た
3. 友人と共同で決め，許可を得た
4. 研究室の共通テーマであったので，それを分担した
5. その他

Q39. 卒業論文のあったことをどのように評価していますか。

1. 大変良かった　　2. よかった　　3. どちらでもよい　　4. なくてもよい

Q40. 専門の学習で最も身に付いたものは，どういう形だったでしょうか。

1. 講義　　2. 実験・実習　　3. ゼミナール　　4. 卒論
5. 参考書による自習　　6. その他

Q41. 実験・実習の授業についてたずねます。

1. 講義よりおもしろい　　2. 実験・実習がもっとあってもよい
3. 時間が長いので大変だ　　4. おもしろくない
5. 特に意識しない

Q42. 鳥取大学農学部・農学研究科の実験・実習授業における設備はどうですか。

1. 充実している　　2. まあまあである　　3. 不満である　　4. 極めて貧弱である

Q43. あなたは大学院修士課程をどのように理解していますか。

1. 農学技術の一分野の専門家を養成するためのコース
2. 農学研究者を養成するためのコース
3. 大学４年では十分なカリキュラムが組めないので，それを補完するためのコース
4. 分からない

Q44. 大学院博士課程に進学することを希望しますか。

1. 進学する予定である　　2. 進学はしない　　3. 未定である

Q45. あなたが将来希望する職業は，以下の業種のどれに近いですか。

1. 建設・機械関連　　2. 食品・化学関連　　3. 電気・情報関連
4. 商社・金融関連　　5. 販売・サービス関連　　6. マスコミ・出版関連
7. 公務員　　8. 教師　　9. その他

Q46. 将来鳥取大学農学部（生物資源環境学科，獣医学科を含む全体）は，どのような方向に向かったらよいと思いますか。

1. 今のままでよい　　2. 広領域の生物系総合学部とする　　3. よくわからない
4. その他

Q47. 鳥取大学農学部が，広領域の生物系の総合学部となるならば，それにふさわしいと思う学部の名称を次の中から選んでください。

1. 農学部のまま　　2. 生物生産学部　　3. 生物資源科学部　　4. 生物産業学部
5. 生物環境科学部　　6. 農獣医学部　　7. その他

質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

鳥取大学評価委員会委員名簿

平成１７年４月１日現在

所属	氏名	任期	備考
副学長	中村宗和		1号委員・委員長
地域学部（副学部長）	中野恵文		２号委員
医学部（副学部長）	井上貴央		〃
工学部（副学部長）	福井茂壽		〃
農学部（副学部長）	辻本壽		〃
地域学部	土井康作	平17.4.1～平18.3.31	３号委員
医学部	押村光雄	平16.4.1～平18.3.31	〃
工学部	西田良平	〃	〃
農学部	笠原浩三	〃	〃
連合農学研究科	森信寛	〃	４号委員
附属図書館	和泉好計	平17.4.1～平18.3.31	〃
医学部附属病院	重政千秋	平16.4.1～平18.3.31	〃
乾燥地研究センター	山本太平	〃	〃
地域共同研究センター	前田尚良	〃	〃
総合メディア基盤センター	石田雅	〃	〃
アドミッションセンター	福島真司	〃	〃
大学教育総合センター	筏津成一	平17.4.1～平18.3.31	〃
国際交流センター	若良二	平16.4.1～平18.3.31	〃
生命機能研究支援センター	難波栄二	〃	〃
ﾍﾞﾝﾁｬｰ・ﾋﾞｼﾞﾈｽ・ﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ	雑賀憲彦	平17.4.1～平18.3.31	〃
生涯教育総合センター	大谷直史	平16.4.1～平18.3.31	〃
知的財産センター	佐々木茂雄	平17.4.1～平18.3.31	〃
医学部	清水克哉	平17.4.1～平18.3.31	６号委員
総務部長	萩原均		５号委員
評価監査課長	吉田憲二		〃

平成１６・１７年度鳥取大学自己点検・評価報告書の作成に係る作業部会委員名簿

（平成１７年４月１日現在）

所属部局名	氏名	備考
地域学部	小玉芳敬	（地域学部助教授）
医学部	井上貴央	（評価委員会委員）
工学部	西田良平	〃
農学部	笠原浩三	〃
総合メディア基盤センター	石田雅	〃
アドミッションセンター	福島真司	〃
医学部	◎清水克哉	〃
大学教育総合センター	田畑博敏	（センター主任）
〃	渡邉政憲	（センター教授）

◎印は作業部会長

鳥取大学の現状と課題

－第11号－

平成１７年１１月発行

編　集　　鳥取大学評価委員会

発　行　　鳥取大学総務部評価監査課

〒680-8550 鳥取市湖山町南４丁目１０１番地

TEL　0857-31-6041（ﾀﾞｲﾔﾙｲﾝ）